鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　16

平成11年度発掘調査報告

（第２分冊）

平成12年３月

鎌倉市教育委員会

横小路周辺遺跡

名越ヶ谷遺跡

総　目　次

（第１分冊）

ごあいさつ …… Ⅰ

例言 …… Ⅱ

平成11年度調査の概観 …… Ⅷ

1　西方寺跡（No.219）極楽寺二丁目18番外地点

第１章　遺跡概観 …… 5

第１節　遺跡の立地 …… 5

第２節　調査の経緯と経過 …… 7

第３節　堆積土層 …… 7

第２章　検出された遺構と出土遺物 …… 9

第１節　遺構と遺物 …… 9

第２節　トレンチ …… 19

2　海蔵寺旧境内遺跡（No.299）扇ガ谷四丁目632番２外地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 32

第２章　調査の経過 …… 35

第３章　発見された遺構と遺物 …… 36

第１節　１面 …… 36

第２節　２面 …… 38

第３節　３面 …… 45

第４節　トレンチ …… 49

第４章　まとめ …… 51

3　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町一丁目81番18地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 64

第２章　調査経過とグリッド配置・基本土層 …… 67

第３章　検出された遺構及び出土遺物 …… 69

第４章　まとめ …… 72

4　若宮大路周辺遺跡群（No.242）雪ノ下一丁目198番６地点

第１章　調査の概要 …… 85

第１節　調査地点の位置と環境 …… 85

第２節　調査の経過と方法 …… 87

第３節　層序と生活面 …… 87

第2章　検出遺構 …… 90
第1面の遺構 …… 90
第2面の遺構 …… 95
第3面の遺構 …… 100
第4面の遺構 …… 106
第5面の遺構 …… 115
第6面の遺構 …… 116
第7面の遺構 …… 121
第3章　出土遺物 …… 123
第1節　出土遺物と整理の概要 …… 123
第2節　出土遺物 …… 123
第4章　まとめ …… 175
第1節　遺構の特徴と年代 …… 175
第2節　出土遺物について …… 176
5　田楽辻子周辺遺跡（No.33）浄明寺一丁目661番外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 214
第2章　調査の経過とグリッド配置 …… 217
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 220
第4章　まとめ …… 290
6　材木座町屋遺跡（No.261）材木座一丁目890番1地点
第1章　環境と立地 …… 338
第2章　調査の概要 …… 340
第3章　検出した遺構 …… 342
第4章　出土した遺物 …… 344
第5章　調査成果 …… 346

（第2分冊）

7　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目271番3地点
第1章　調査地点の概観 …… 5
1　地勢と位置 …… 5
2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 5
3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 8
第2章　調査の概要 …… 9
1　調査にいたる経緯 …… 9
2　調査方法と測量基準線の設定 …… 9

3　調査経過 …… 9
第3章　遺構と遺物 …… 11
1　1面 …… 11
2　2面 …… 13
3　3面 …… 13
4　3b面 …… 13
第4章　まとめ …… 20
8　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目271番4地点
第1章　調査地点の概観 …… 32
1　地勢と位置 …… 32
2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 32
3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 35
第2章　調査の概要 …… 36
1　調査にいたる経緯 …… 36
2　測量方眼設定方法 …… 36
3　調査経過 …… 36
第3章　調査成果 …… 38
第1節　概要 …… 38
第2節　各説 …… 39
第4章　調査のまとめ …… 93
9　大慶寺旧境内遺跡（No.361）寺分一丁目819番1地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 113
第2章　調査の概要 …… 117
第3章　調査の経過と方法 …… 120
第4章　まとめ …… 141
10　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字荏柄10番9外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 156
第1節　遺跡の位置 …… 156
第2節　歴史的環境 …… 156
第2章　調査の経過 …… 157
第3章　検出した遺構 …… 159
第1節　A区の遺構 …… 159
第2節　B区の遺構 …… 162
第4章　出土した遺物 …… 163
第1節　A区の遺物 …… 163

第2節　B区の遺物 ……163
第5章　まとめ ……186
11　由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）由比ガ浜二丁目1203番20地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……213
第2章　調査の概要 ……215
第3章　検出遺構と出土遺物 ……217
第1節　上層遺構 ……217
第2節　下層遺構 ……220
第4章　まとめ ……224
12　名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1888番地点
第1章　環境と立地 ……237
第1節　地理的・歴史的環境 ……237
第2節　調査地点の立地 ……239
第2章　調査の概要 ……240
第1節　調査の経緯と経過 ……240
第2節　国土座標上の位置とグリッド配置 ……241
第3節　堆積土層 ……241
第3章　遺構と遺物 ……242
第1節　Ⅰ期の遺構と遺物 ……242
第2節　Ⅱ期の遺構と遺物 ……245
第3節　Ⅲ期の遺構と遺物 ……253
第4節　出土遺物一覧 ……263
第4章　調査成果 ……274
第1節　自然科学分析 ……274
第2節　出土遺物から ……283
第3節　調査地点の性格 ……285
13 米町遺跡（No.245）大町二丁目2404番地点
第1章　調査地点の位置と歴史的環境 ……302
第2章　調査の経過 ……304
第3章　検出した遺構と遺物 ……304
第1節　層序 ……304
第2節　遺構 ……307
第3節　遺物 ……307
第4章　まとめ ……308

14 円覚寺門前遺跡（No.287）山ノ内字東瓜ヶ谷1299番１外地点

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……321
第２章　調査の概要 ……322
第３章　発見された遺構と遺物 ……324
第１節　堆積土層 ……324
第２節　発見した遺構 ……324
第３節　確認調査出土遺物 ……324
第４章　まとめ ……326

鎌倉市全図

平成11年度の緊急発掘調査地点（1～18）
本書掲載の平成10・11年度調査地点（①～⑭）

※遺跡名は一覧表参照

北条時房・顕時邸跡（No.278）

雪ノ下一丁目 271番 3 地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下一丁目271番３地点における自己用店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査期間は1998年６月18日～同年７月４日である。

3．調査体制は次のとおり

担　当　者　馬淵和雄

調　査　員　岡陽一郎

調査補助員　鍛冶屋勝二・松原康子（資料整理）・兼行佻枝（同前）

調査参加者　石渡辰男・箕田孝善・松崎靖弘・山崎一雄・池田義春

4．本報作成分担は次のとおり

遺構図作成　松原・鍛冶屋・馬淵

遺物実測　　松原・鍛冶屋

同　墨入れ　松原・鍛冶屋

同　観察表　馬淵

同写真撮影　兼行

原稿執筆　　馬淵

編　　集　　馬淵

次の方々・機関に感謝の意を表する。

赤堀祐子・坂倉美恵子・宗台秀明・宗台富貴子・松本浩二・（社）鎌倉市シルバー人材センター

目　　次

第1章　調査地点の概観 …… 5
1　地勢と位置 …… 5
2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 5
3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 8
第2章　調査の概要 …… 9
1　調査にいたる経緯 …… 9
2　調査方法と測量基準線の設定 …… 9
3　調査経過 …… 9
第3章　遺構と遺物 …… 11
1　1面 …… 11
2　2面 …… 13
3　3面 …… 13
4　3b面 …… 13
第4章　まとめ …… 20

挿　図　目　次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 …… 6
図2　調査地点とその周辺 …… 7
図3　調査区設定図 …… 10
図4　南壁・北壁土層図 …… 11
図5　1面の遺構と遺物 …… 12
図6　2面の遺構と遺物 …… 14
図7　3面の遺構と遺物（1）…… 15
図8　3面の遺構と遺物（2）…… 16
図9　3b面の遺構と遺物 …… 17

表　目　次

表1　1面出土遺物観察表 …… 17
表2　2面出土遺物観察表（1）…… 17
表3　2面出土遺物観察表（2）…… 18
表4　3面出土遺物観察表（1）…… 19
表5　3面出土遺物観察表（2）…… 19
表6　3b面出土遺物観察表 …… 19

図　版　目　次

図版１－１　調査地点と若宮大路 …… 23
（鶴岡八幡宮方面を望む）…… 23
１－２　１面全景（東から）…… 23
１－３　同　西半部（南から）…… 23
１－４　同　木樋（南から）…… 24
図版２－１　２面全景（東から）…… 24
２－２　同　西半部（南から）…… 24
２－３　同　東半部（南から）…… 24
２－４　同　柱穴 …… 24
図版３－１　３面全景（西から）…… 25
３－２　同　西半部（南から）…… 25
３－３　同　東半部（南から）…… 25
３－４　３ｂ面（南から）…… 25
３－５　調査区西壁土層断面 …… 25
図版４ …… 26

第１章　調査地点の概観

１　地勢と位置

滑川は鎌倉東辺の山中に源流を発し、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開析したあと、大倉付近から南に向きを変えて相模湾に流れ込む。向きの変わった辺りから河口にかけては扇状沖積地が形成され、海退期以降次第に乾陸化して人が住みつくようになった。鶴岡八幡宮とその参詣道（「若宮大路」）は、この沖積地を縦走するように配されている。近年の繁華街はこの一帯を中心に出来上がった。

若宮大路は海抜10.5m前後の鶴岡八幡宮社頭から海岸に向かって緩やかに低くなっていく。調査地点は約170m南下した大路西側に面している。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目271番３。本書所収の「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番４地点」（以下「第２地点」）の北隣にあり、同一地番の別筆にあたる。調査区自体ほんの1.6mぐらいしか離れていない。現地表面の海抜は8.20mほどである。

２　中世都市鎌倉と調査地点

この地点は鎌倉市教育委員会によって「北条時房・顕時邸跡」（№278）と名付けられた長方形の区画の一部に属している。遺跡名称は、顕時の屋敷が「相州鎌倉赤橋辺」にあったという『金沢文庫文書識語編』2064奥書の記述と、やはり「赤橋南方」で若宮大路東側の北条泰時小町亭との関係からそう付けられたものである。若宮大路の東西いずれの側も「赤橋南方」と呼んでいいが、東側に泰時小町亭があるとなれば、西側を充てるしかないわけである。時房邸については、現在の宝戒寺の付近にあったとされる義時邸を相伝したという意見もあり（秋山1996）、判然としない。したがって遺跡名称については再検討の必要がおおいにある。

「北条時房・顕時邸跡」ではこれまでも何箇所かで発掘調査がおこなわれている。若宮大路際では必ず大路側溝が発見され、対岸（東側）の「北条泰時・時頼邸跡」または「若宮大路幕府跡」と推定されている場所の調査成果と照らし合わせて、大路の復元が試みられた。

先ず筆者（馬淵）は、図２地点６（雪ノ下一丁目233番９他）の調査報告において、大路の幅を33.6mに復元し、街割りも11丈を基本単位に設定されている、とした（馬淵1987）。この推定は1994年度におこなった地点68（「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」雪ノ下一丁目377番７地点）の調査結果によっても、若干の誤差修正を経ながら確認されている（馬淵1996）。

また宗台秀明は、本地点から至近の位置にある地点79（雪ノ下一丁目272番）の調査において大路西側側溝の軸線を検討し、八幡宮前の現況「横大路」と完全には直交していない可能性を指摘している（宗台1997）。

若宮大路側溝からは、地点65を端緒として、過去何点かの人名木簡が出土している。これは公共事業である溝作事を、鎌倉幕府が「御家人役」として御家人に割り振った当該地点を示すもので、これまで発見されたものはいずれも13世紀第２四半期以降に属する。今のところ東側のほうが多いが（地点65・68）、西側の地点80でも「口二丈　あかき入道跡」と読める木簡が見つかっている（田代1990）。さらに、最近では若宮大路から一本東の南北大路（「町大路」か）の側溝からも出土しており（地点83－原1998）、若宮大路側溝に限定されない状況が認められるようになった。どの程度の「格」の溝まで御家人役によって作事をまかなったか、言い換えればどこまでが公共事業として行われていたのか、興味深いところである。

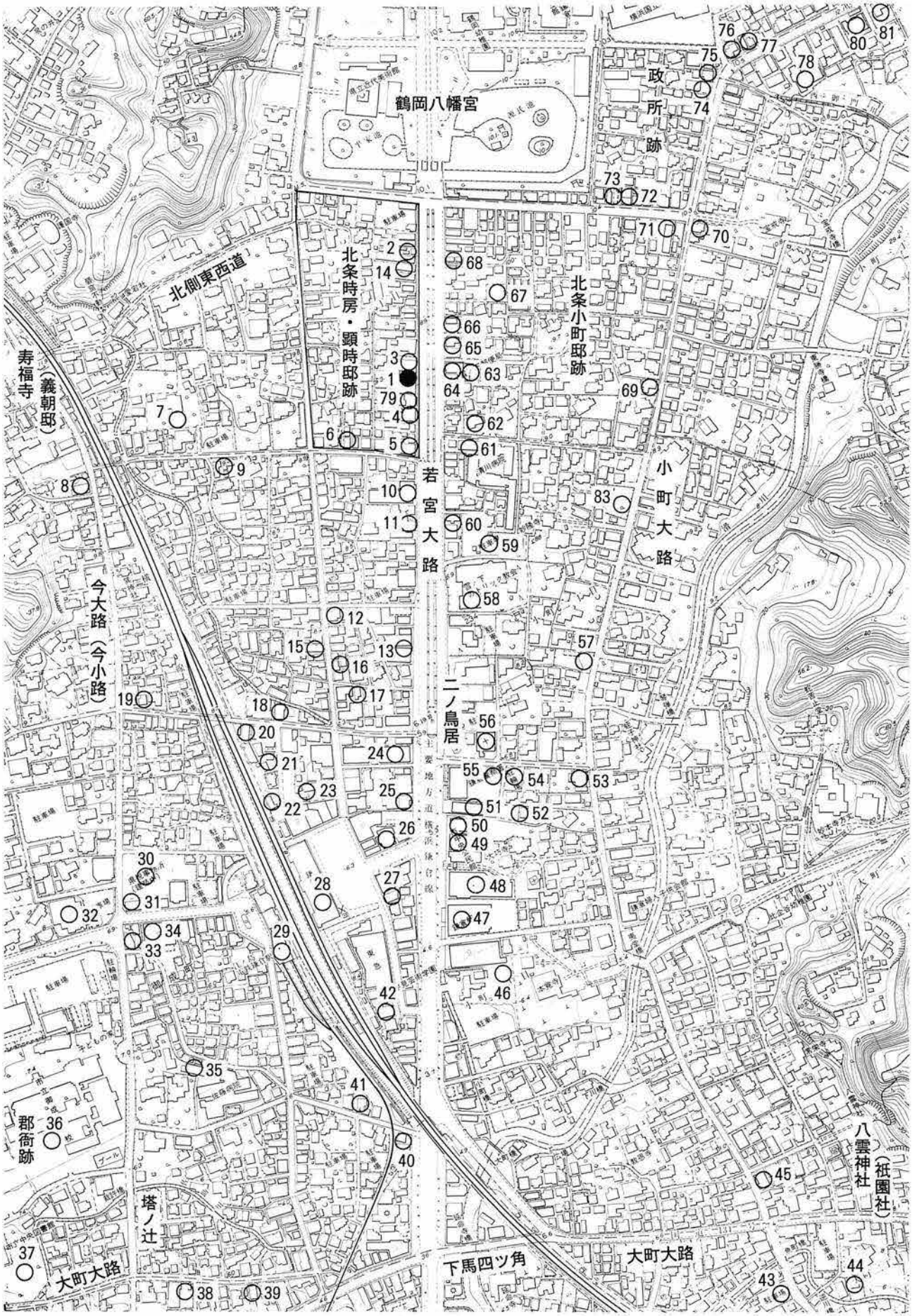


図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図２　調査地点とその周辺

図１調査地点名

１．調査地点　２．北時（雪一丁目 293番１）　３．北時（雪一丁目 271番１）　４．北時（雪一丁目 273番ロ）　５．北時（雪一丁目 274番２）　６．北時（雪一丁目 233番９）　７．若（雪一丁目 210番）　８．今（扇一丁目 131番１）９．若（小二丁目39番６他）　10．若（小二丁目 276番他）　11．若（小二丁目 279番２）　12．若（小二丁目５番８）　13．若（小二丁目 283番６他・豊島屋）　14．北時（雪一丁目 265番３）　15．若（小二丁目12番18）　16．若（小二丁目５番23）17．若（みのビル）　18．若（小二丁目63番３）　19．若（扇一丁目74番８外）　20．小一丁目 120番－１　21．若（小一丁目 116番）　22．若（駐輪場）　23．若（小一丁目 106番）　24．日本生命ビル　25．若（小一丁目67番２）　26．小一丁目75番地１号　27．若（小一丁目81番８　28．蔵屋敷　29．蔵屋敷東　30．千葉地東　31．千葉地東（御成町 228番２）　32．千葉地　33．若（奴田ビル）　34．諏訪東　35．若（佐藤病院）　36．今（御成小学校内）　37．今（社会福祉センター）38．若（由一丁目 123番５外）　39．若（由一丁目 118番）　40．若（御成町 872番14）　41．若（御成町 868番）　42．早見芸術学園　43．米町（大町二丁目 933番）　44．米町（大町二丁目2315番外）　45．大町清興ビル　46．本覚寺旧境内　47．（推定）藤内定員邸跡（鎌倉中央郵便局用地）　48．（推定）藤内定員邸跡（中央公民館）　49．（推定）藤内定員邸跡（島森書店用地）　50．小一丁目 309番５　51．若（スイミングクラブ）　52．若（小一丁目 322番）　53．若（小一丁目　325番イ外）　54．若（駐輪場）　55．若（小一丁目 321番１）　56．若（小二丁目 345番２）　57．若（小二丁目 389番１）58．若（雪ノ下カトリック教会）　59．若（小二丁目 354番12）　60．若（小二丁目 361番１）　61．若（二丁目 366番他）62．北（雪一丁目 419番３）　63．北（雪一丁目 369番他）　64．北（雪一丁目 369番１）　65．北（雪一丁目 372番７）　66．北（雪一丁目 371番１）　67．北（雪一丁目 374番２）　68．北（雪一丁目 377番７）　69．北（雪一丁目 432番２）　70．北条高時邸跡　71．北（雪一丁目 395番他）　72．政（雪三丁目 987番１・２）　73．政（雪三丁目 988番）　74．政　（雪三丁目 966番１）　75．政（雪三丁目 965番）　76．大倉幕府周辺（雪三丁目 606番１）　77．大倉幕府周辺（雪三丁目 607番外）　78．大倉南御門Ｂ　79．北時（雪一丁目 272番）　80．大倉南御門　81．大倉幕府周辺（雪四丁目 620番５）

※遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り

北＝北条小町邸跡、雪＝雪ノ下、政＝政所、若＝若宮大路周辺遺跡群、小＝小町、北時＝北条時房・顕時邸跡、今＝今小路西遺跡、扇＝扇ケ谷、由＝由比ヶ浜

3　頼朝以前の調査地点一帯

この付近の発掘調査で見逃してならないことは、中世遺構の下からときに若宮大路と主軸方位を異にする溝が出現することである。たいていの場合遺物に恵まれないので、いつごろのものか正確には把握できていない。しかし、東西溝の場合は大路側溝の下に潜り込むことが多く、大路敷設以前のものであることが確実で、しかも検出面からみて平安時代中期以前にはさかのぼらないとみられることから、おおむね平安後期に属すると考えられる。平安時代末期、調査地点から約300m西に位置する現在の寿福寺の地には頼朝の父義朝の居館（「鎌倉之楯」）があり、三浦一族も周辺に居宅を構えていた可能性がある（石丸1993）。また、当時すでに20近い数の寺社が存在していたようで、平安末期の鎌倉にはかなりの都市的な場が成立していたと考えられる（野口1993）。大路よりも古い溝の存在は、そのころの地割りと関連があるのかもしれない。

律令期の鎌倉郡衙は現在の鎌倉市役所南方の御成小学校校庭にあった。したがってその一帯にはかなりの集落があったと推定される。本地点は直線距離で約600mほど北北東に位置するが、小町通り商店街付近では当該期の掘立柱建物が発見されることも珍しくないので、すぐ近くにまで律令期集落が延びていたことは間違いない。古墳時代の遺構は海岸砂丘地帯や大倉、あるいは二階堂の山際に存在しているが、市内中心部の沖積地においては明確ではない。弥生集落も同様で、大倉一帯までは確認されているけれども（地点82－馬淵1998・1999）、沖積地ではまだ発見されていない。

注

秋山哲雄 1996 「御所と北条氏亭」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12（第2分冊）p.282～p.286 鎌倉市教育委員会
石丸熙 1993 『都市鎌倉の武士たち』 新人物往来社
宗台秀明 1997 「若宮大路側溝と地割り」『北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目272番地点』 北条時房・顕時邸跡発掘調査団
田代郁夫 1990 「北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目265番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会
野口実 1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45 （財）古代学協会
原廣志 1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
馬淵和雄 1987 「北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか 1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12（第2分冊） 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1998 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第2分冊） 鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1999 『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点発掘調査報告』 大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

第２章　調査の概要

１　調査にいたる経緯

平成10年１月、自己用店舗併用住宅建設の事前相談があった。埋蔵文化財に対する影響が予想されたため、隣接地の発掘調査の成果を参考に事業者と協議し、埋蔵文化財に対する影響を極力押さえるため基礎の掘削深度の調整を行った。しかし敷地が東に低くなる形状であるため建物の西側部分は相対的に掘削深度が深くならざるを得ず、埋蔵文化財に対する影響が発生することが明らかとなった。ため影響が発生する建築範囲の西側部分について発掘調査を実施することとなった。

２　調査方法と測量基準線の設定

建築工事にともなう掘削は地表下70㎝までであるため、それ以下の調査は許されていない。また工法の都合により、西端部から幅1.20ｍの部分は深さ95㎝まで掘削した。

調査範囲がもともと狭い上、境界線ぎりぎりまでせまっている隣地建物との間に約50㎝幅の安全距離を設けたため、発掘区は幅2.5ｍ×長さ8.5ｍときわめて限られたものとなった。調査区は敷地内の奥（西）に位置し、現況の若宮大路歩道までは約16ｍほど距離がある。

掘削は、表土を重機で梳き取り、以下面ごとに人力により順次下げていく方法を取った。残土は場内処理とした。

発掘区が非常に狭いことから、基準線は区内に十字に設けるだけで済ませた。まず任意の基準点Ｐ.１を発掘区内のほぼ中心部に置き、それと東側区外のもう一つの任意点Ｐ.２を通して、区内を縦走する東西方向の基準線ＮＳ－０を設定した。そしてＰ.１からＮＳ－０に直交する軸線ＥＷ－０を配した。

ＥＷ－０は調査の利便性を優先させて調査区の軸線と平行させたために、主軸方位は国土座標系と一致していない。偏差は次の通り。

Ｎ－28°－Ｅ

Ｐ.１は、調査区より約80ｍ南方にある鎌倉市４級基準点Ｓ114に図３のように連結している。Ｐ.１の国土座標成果は次の通り。

（AREA９）

Ｘ－75479.826　（北緯　35°19′　9″）

Ｙ－25124.252　（東経 139°33′25″）

また、諸般の事情により、南隣の雪ノ下一丁目271番４地点とは軸線を共有していない。

３　調査経過

調査は1998年６月18日に始まり、７月４日に終わった。その間の進行状況の概略は次の通り。

６月20日　１面終了

６月24日　１ｂ・１ｃ面終了

６月26日　２面終了

６月27日　３面終了

７月２日　４面終了

この間、６月30日に清泉小学校児童の見学会が当地点にておこなわれた。

4級基準点
45.253m
N−28°−E
X−75479.826
12.952m
b
20.231m
d
c
Y−25124.252
40.391m
a
35.598m
4級基準点
S114
∠a＝183° 25′ 60″
∠b＝184° 25′ 54″
∠c＝107° 02′ 25″
∠d＝104° 04′ 18″
0
25m

図3　調査区設定図

第３章　遺構と遺物

隣接の第２地点「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番４地点」の調査区と1.6ｍしか離れておらず、基本的には同一である。層位と面の概要については、第２地点の記述も参照されたい。本地点は若宮大路からかなり遠いため、大路側溝はどの遺構面においても検出されなかった。しかし、第２地点の記述を参考にすれば、面と側溝との関連は推測できるはずである。

なお、図中・文中で「攪乱（壙）」とするのは、原則として第２次大戦以後に属するものを指す。また、第２地点でいくつか検出した近代（第２次大戦以前）・近世の遺構は、本地点では見つからなかった。

１　１面（図５）

約60㎝の厚みをもつ表土を除くと、すぐ中世層が現れる。ほぼ全面に細かい貝殻混じりの砂を敷いた面があり、これを「１面」とした。標高はおよそ8.2ｍ前後である。この貝殻混じりの砂層は厚みが４～10㎝。

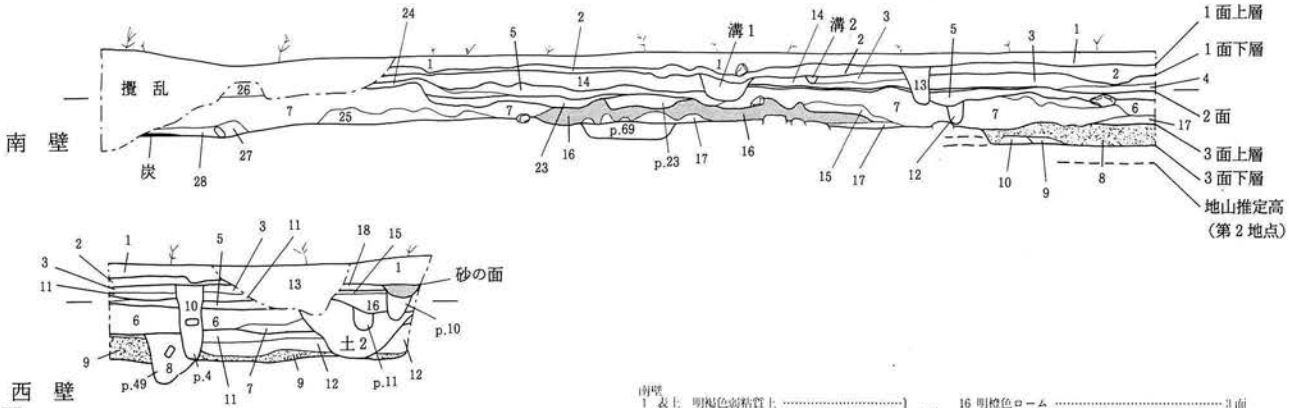
ここからは柱穴８口・断面Ｕ字形の溝２条・浅い円形土壙１基が見つかった。柱穴のうちには礎板を有するものが３穴ある。

柱穴相互の関連については、調査区が狭いので建物としては把握できなかった。しかし、規模の似た２穴が、方位や柱間距離からみて相応の位置にあると判断できた場合、とりあえず柱穴列として挙げておくことにした。

柱穴列１

西北角の１穴と北壁際の１穴に、形態と規模の似た二つの穴が若宮大路に直交方向で並んでいる。直径は25㎝と30㎝、深さはともに25㎝で、２穴の距離は 198㎝（芯心）である。第２地点の柱穴群との関連は見つけられなかった。

柱穴列２



西壁
1 表土　明褐色弱粘質土 …… 1面
2 貝殻砂粒層　炭・泥岩粒を含む …… 1面
3 明褐色弱粘質土　ややしまる土
4 明褐色弱粘質土
5 暗褐色粘質土　泥岩粒・貝殻粒を含む … 2面
6 上丹地業層 …… 3b面
7 暗褐色粘質土 泥岩粒・ローム粒を含む 3b面
8 暗赤褐色粘質土　ローム塊を含む
9 黒色粘質土　貝殻片を多く含む
10 明褐色砂質土　貝殻粒を多く含む …… 1面
11 明褐色砂質土　貝殻粒を大量に含む
12 暗褐色砂質土　固くしまる
13 明褐色弱粘質土　上丹塊を含む
14 貝殻砂粒層　泥岩粒を含む …… 1面
15 茶色粘質土　ローム塊混入
16 暗褐色粘質土
17 明褐色砂質土
18 明褐色粘質土 …… p.10
19 暗褐色粘質土
20 暗褐色粘質土　混入物は少ない …… p.10
21 暗褐色粘質土 小石大の上丹塊を多く含む 土壙2
22 暗褐色粘質土
23 暗灰色粘質土　上丹塊混入 …… 土壙2

南壁
1 表土　明褐色弱粘質土 …… 1面
2 貝殻砂粒層 …… 1面
3 明褐色弱粘質土　貝殻粒を多く含む …… 2面
4 明褐色弱粘質土
5 明褐色砂質土　貝殻粒・砂粒を多く含む …… 2面
6 上丹地業層　ローム塊を含む …… 3b面
7 上丹地業層 …… 3b面
8 黒色粘質土（炭層）貝殻片を多く含む
9 暗褐色粘質土　固くしまる
10 黄茶色粘質土　泥岩粒を含む
11 暗茶色粘質土　貝殻粒を多く含む
12 暗褐色粘質土　泥岩粒を多く含む
13 明褐色弱粘質土 ややしまる 貝殻粒を多く含む … 1面
14 明褐色弱粘質土　泥岩塊・炭化物を含む …… 2面
15 明褐色粘質土　泥岩塊を多く含む
16 明橙色ローム …… 3面
17 暗褐色粘質土 しまり良い 貝殻粒を多く含む …3b面
18 明褐色粘質土 しまり良い ローム粒を多く含む …3面
19 暗褐色粘質土　貝殻片・炭化物を含む
20 暗茶褐色粘質土　ローム塊・砂粒・貝殻の混入土
21 黒色粘質土　貝殻片を多く含む
22 暗橙色粘質土　ローム塊と炭化物・泥岩粒の混入土
23 暗褐色粘質土　ややしまる …… 2面
24 明褐色弱粘質土 …… 2面
25 暗褐色粘質土 しまり良い 貝殻粒を多く含む ……3b面
26 明褐色弱粘質土　拳大の泥岩を含む
27 暗褐色粘質土　しまり良い
28 暗褐色粘質土
29 暗褐色粘質土　炭化物・泥岩・貝殻粒を多く含む

図４　南壁・西壁土層図

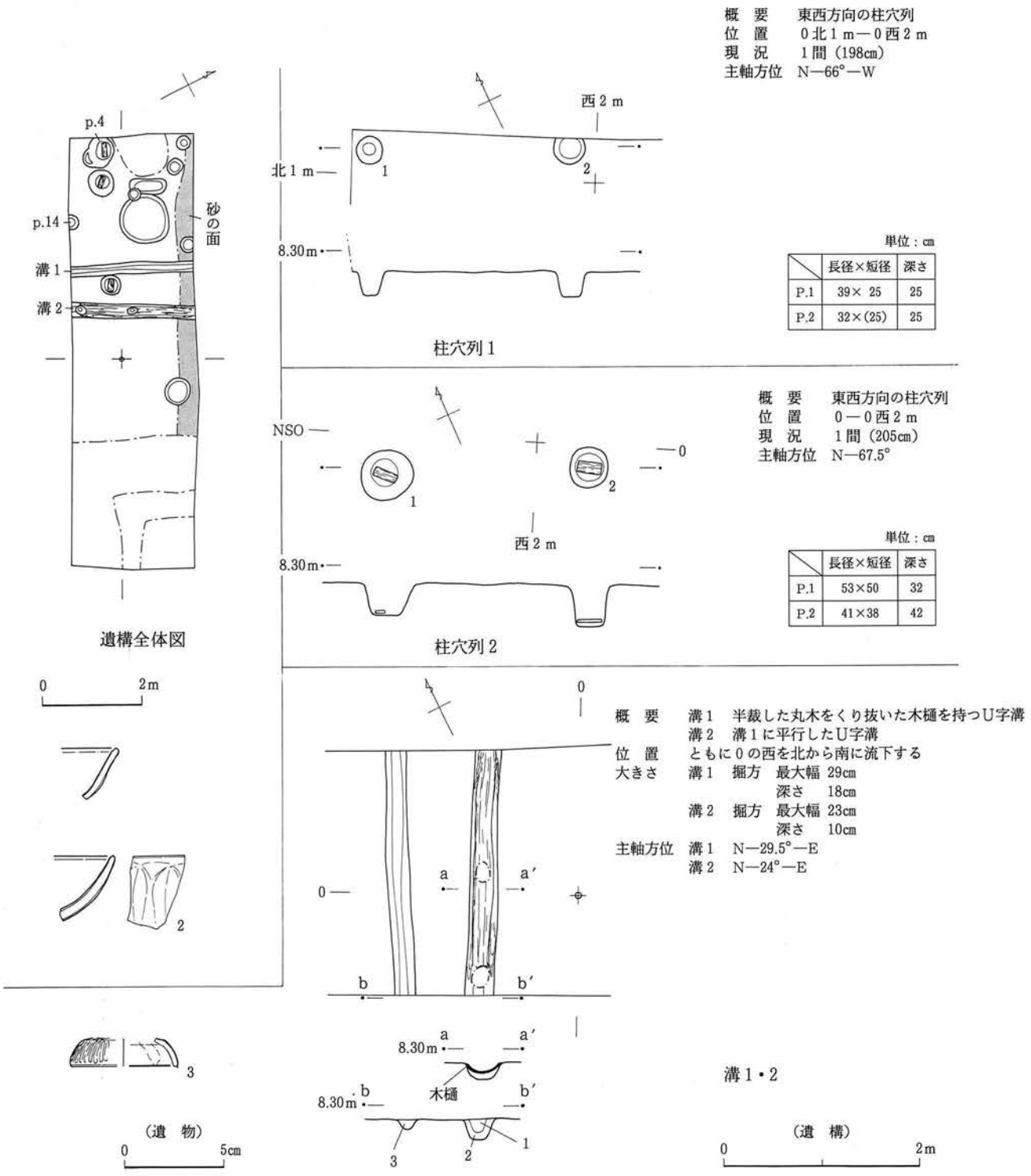


図5　1面の遺構と遺物

中央部からやや南寄りに、礎板を備えた柱穴が、芯心で 205cmの距離を置いて並んでいるように見える。直径は53cmと38cm、深さは32cmと42cm。これも第2地点との関連は見つけられなかった。

溝1

半裁した丸太をくり抜いて木樋としたのを、断面U字形の溝掘方に収めた南北溝。若宮大路側溝から約16m西に離れている。木樋最大幅28cm・深さ（内法） 7cm。掘方最大幅29cm・深さ18cm。

溝2

溝1の西50～70cmを通る南北溝。最大幅23cm・深さ10cm。断面U字形。溝1と同一層の遺構で、ひと

まわり小さいが形態は似ているので、両者に何らかの関係があった可能性は否めない。

面上出土遺物

包含層の大半が後世に削り取られているため、面上からの出土遺物は多くない。竜泉窯青磁蓮弁文碗・口はげ白磁皿各１点を図示する。

２　２面（図６）

１面下約20cmにある硬い泥岩版築層である。標高は約８ｍ前後にあり、１面との間は明褐色弱粘質土が主体となっている。鎌倉時代中～後期の最盛期中世都市鎌倉の面に入っている。

２面検出遺構は柱穴14口・土壙２基など。柱穴のうちには、列を形成するとみたものが２口含まれている。このほか土壙１南側の調査区南壁にわずかに落込みがのぞいているが、詳しいことは不明。

柱穴列３

直径60cm・深さ48cmのものと直径74cm・深さ43cmのものが190cmの距離をおいて南北に並んだ位置にあるので、いちおう列として抽出しておいた。

土壙２

西北角にある隅丸方形土壙。西側調査区外へ出ている。幅94cm・深さ49cm。竜泉窯青磁蓮弁文碗１点を示す。

土壙１

調査区中央部にある隅丸長方形土壙。205×113cm、深さ44cm。断面は逆台形で、砂質土が入っていた。出土遺物には土師器Ｔ種大小各１点、常滑こね鉢Ｉ類１点がある。

３　３面（図７・８）

２面の下20～30cmに黒褐色の粘質土層があり、炭化層が上面に載っていたところから、生活面と確認し、３面とした。標高7.8m程度、面上には遺物がかなり散見された。また、泥岩の代わりにローム土を厚く敷き詰めた地業層が南壁の一部に認められ、そこからは土師器等の遺物が出土した。

この面からは柱穴様の小穴25口が検出され、うち５穴に礎板が残っていたが、それぞれ形状・性格を異にしており、関連は認められなかった。柱根が立ったまま遺存しているものもある。また、この面においても、第２地点とのつながりはつかめなかった。

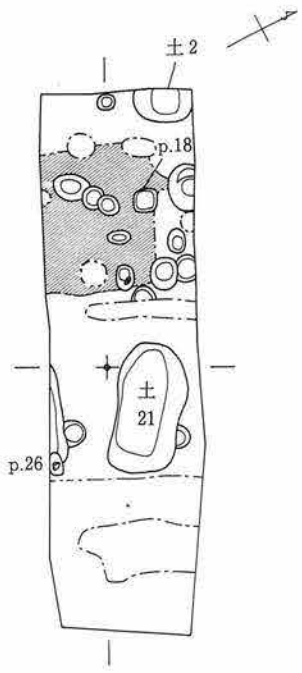
出土遺物には土師器・楠葉・常滑・渥美・鉄クギなどがある。土師器はＴ種・Ｒ種双方がみられる。また柱穴からもＲ種がいくつか出土している。ローム土を敷いた面の上から出土したＲ種土師器３点を図示しておくが、うち１点には内底面に何か尖ったもので引っ掻いたような傷がある（図８－26）。

４　３ｂ面（図９）

先述のとおり、発掘区西壁側幅1.2ｍの範囲は建築工法上深さ95cmまでの掘削が予定されており、この部分を掘り下げた。

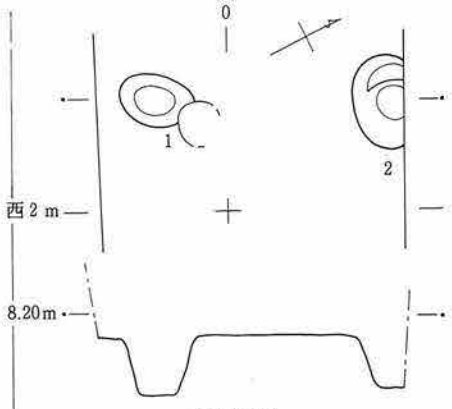
３面を構成する黒褐色粘質土層は大量の炭化物や遺物片を包含する。厚みは10～20cm前後で、これを排除するとあらたに生活層が現れる。標高7.6～7.7m前後にある茶褐色で粘性の非常に強い土で、面上には厚い炭の層が形成されている。現地調査の際には、この面が四番目の検出面であるところから「４面」と称したが、続いておこなわれた隣接の第２地点の調査結果からは３面との断絶や時期差がそれほど認められなかったので、「３ｂ面」と呼ぶことにした。

規制掘削深度である95cmに達するまでに、中世の基盤層に到達することはできなかった。ただ第２地



遺構全図

0　2m

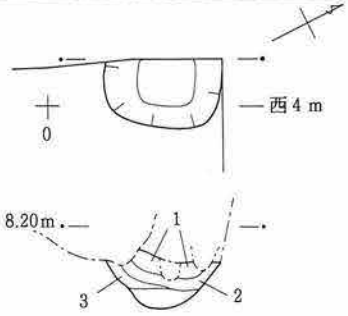


柱穴列3

概　要　南北方向の柱穴列
位　置　0西2m－0
現　況　1間（190cm）
主軸方位　N－25.5°

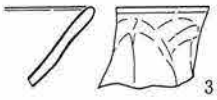
単位：cm

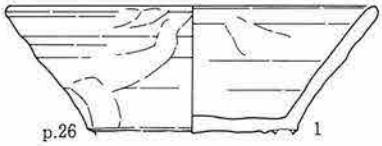
	長径×短径	深さ
P.1	60× 41	48
P.2	74×(40)	43

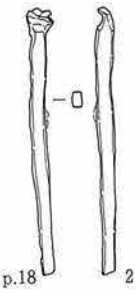


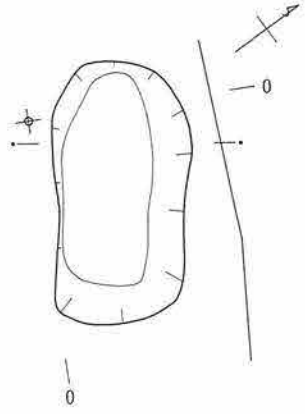
土壙2

位　置　0－0西4m
大きさ　長径　短径　深さ
94cm×(54cm)×48cm
形　状　隅丸方形または長方形
断面形　碗形
主軸方位　——



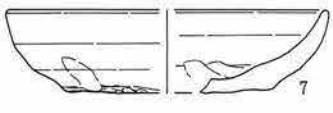


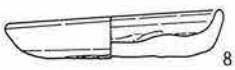




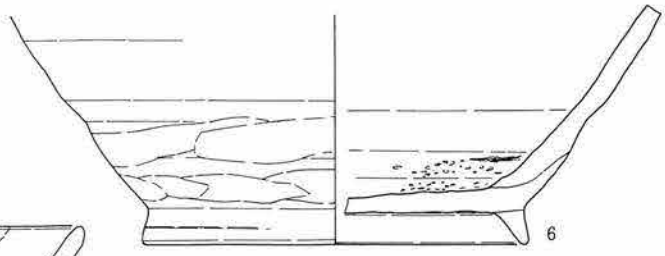
土壙21

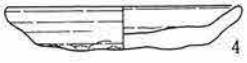
位　置　0－0東0.5m
大きさ　長径　短径　深さ
209cm×102cm×43cm
形　状　隅丸長方形
断面形　逆台形
主軸方位　N－54°－W

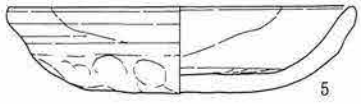




包含層







0　（遺　構）　2m
0　（遺　物）　10cm

図6　2面の遺構と遺物

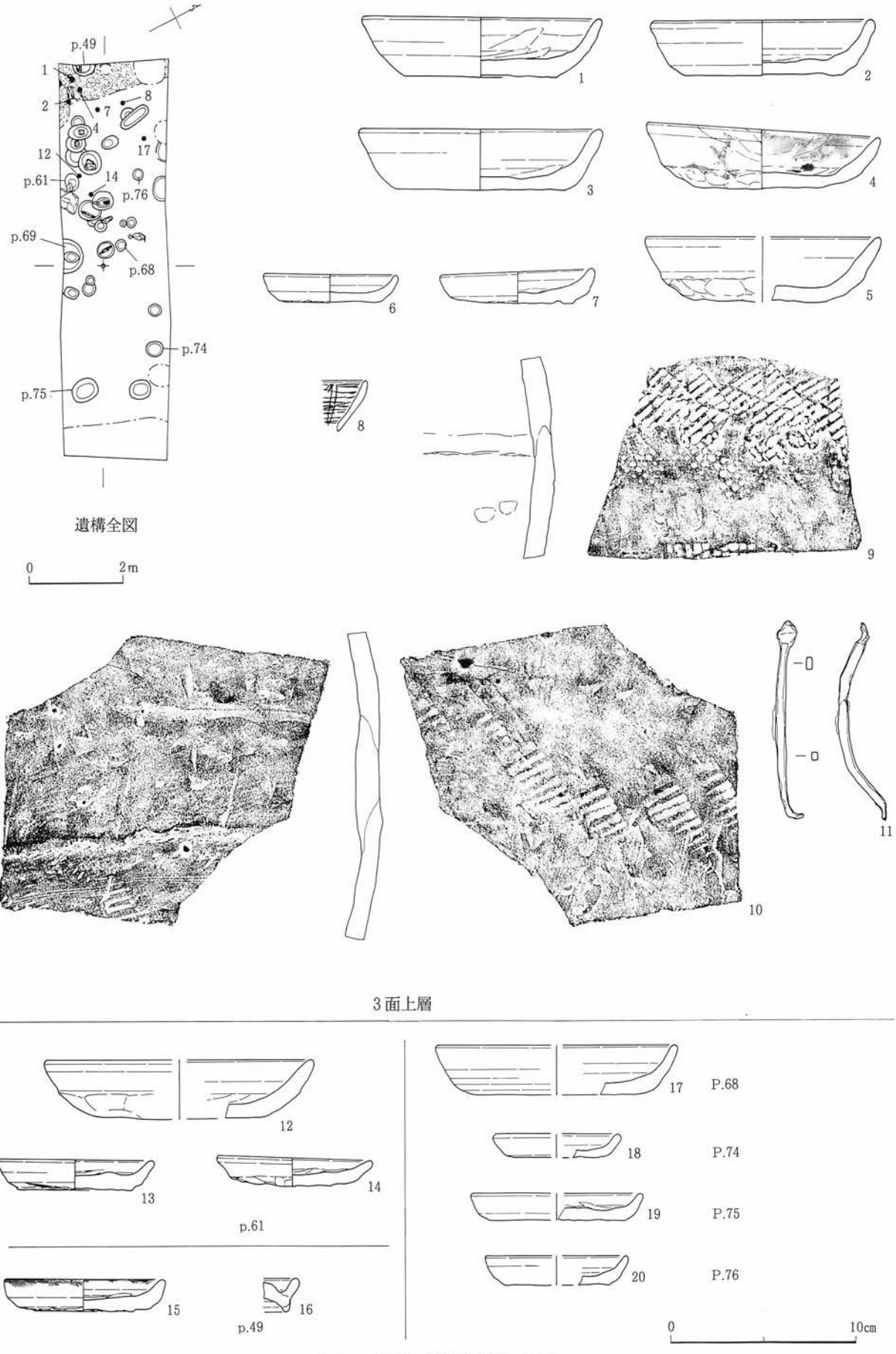
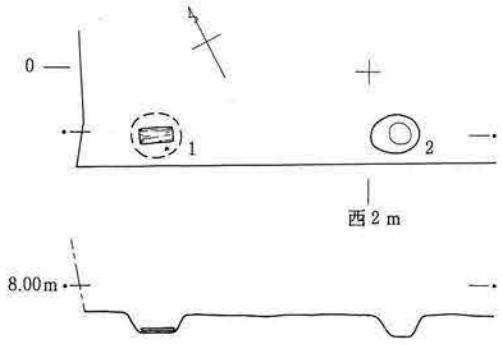


図7　3面の遺構と遺物（1）

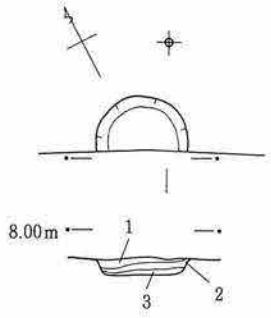


概　要　東西方向の柱穴列
位　置　0－0西2m
現　況　1間（195cm）
主軸方位　——

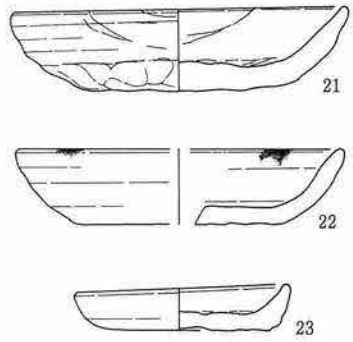
単位：cm

	長径×短径	深さ
P.1	(40)×(35)	16
P.2	39×30	18

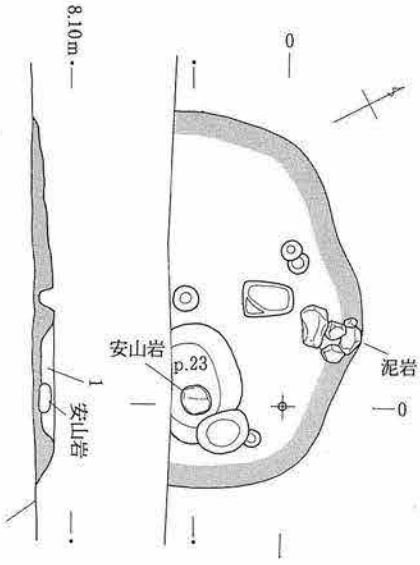
柱穴列4



位　置　0－0南1m
大きさ　長径　短径　深さ
73cm×(42cm)×14cm
形　状　円形と思われる
断面形　皿形
主軸方位　——

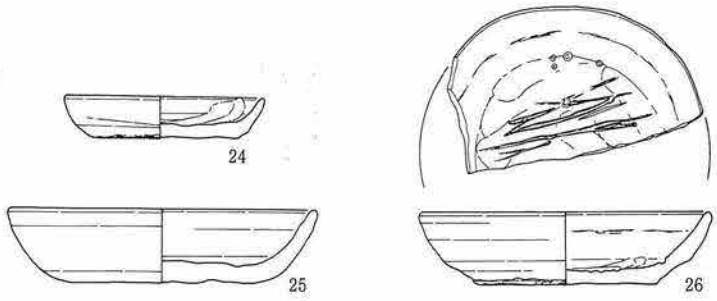


ピット69



ローム地業遺構（網目の内側）

位　置　0上
大きさ　長径　短径　高さ
14.9cm×(7.6cm)×0.7cm
形　状　不明
断面形　伏せた皿形
主軸方位　——



ピット23

図8　3面の遺構と遺物（2）

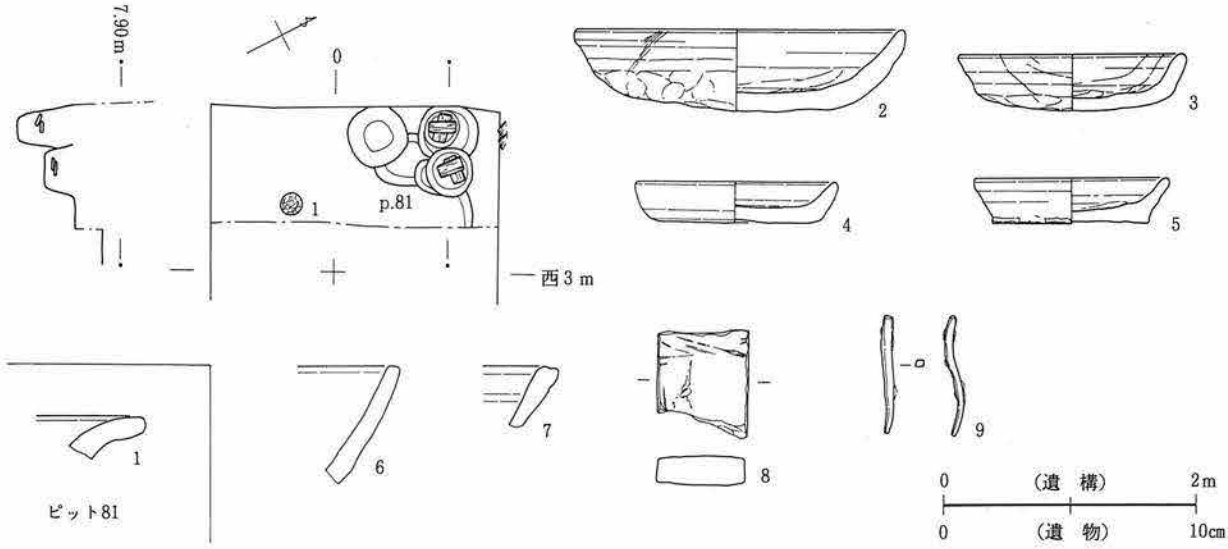


図9　3b面の遺構と遺物

番号	種 別	大きさ　せいけい　素地・胎土・材質　その他特徴など
図5 1	白 磁 口はげ皿	体部～口縁部片　外面底部近く露胎　素地は白色結晶質で黒色微粒子・微気泡含む，釉薬は無色透明　口縁部と外面底部脇の露胎部は褐色に酸化　焼成良好
2	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	体部～口縁部片　外面に単弁鎬蓮弁文，内面は無文　素地は灰白色で粘性強く，釉薬は淡青緑色で気泡多く失透，厚くかかる　焼成良好
3	白 磁 合子 蓋	口径（5.4）cm，天井径（4.1）cm，器高（1.5）cm　型入れ成形　外面に細蓮弁，天井部にも文様，内面露胎　素地は灰白色結晶質　釉薬はかすかに灰色味を帯びるが透明　焼成良好

表1　1面出土遺物観察表

番号	種 別	大きさ　せいけい　素地・胎土・材質　その他特徴など
図6 1	南部系 山 茶 碗	口径14.8cm，底径8.3 cm，器高（5.1）cm　胎土は灰色・軟質でやや粗く，長石粒子や気泡若干含む　外面口縁下はやや燻され気味で黒っぽく変化　高台は剝落　焼成普通
2	鉄 ク ギ	長さ（10.5）cm，幅4 mm，厚さ5 mm，重さ11.3 g　先端部を失う
3	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	体部～口縁部片　外面に複弁鎬蓮弁文，内面は無文　素地は灰白色～淡灰黄色でやや粗く，釉薬は淡灰緑色透明　薄くかかる　焼成やや不良
4	土 師 器 T種 小型	口径9.5 cm，底径6.7 cm，器高1.7 cm　外底面に粘土板を引き寄せて接着した形跡あり　手づくね後体部横ナデ　胎土は明黄褐色で白色針状物質・砂粒含む　焼成良好

表2　2面出土遺物観察表（1）

点の調査で、それが3b面から10～15cm下にあることは判明している。

ここでは限られた範囲しか調査できず、柱穴4口を確認したにとどまったが、第2地点の様相からしてこの面に多くの遺構があることは確実である。

検出した柱穴4口のうち2口に複数枚の板を重ねた礎板がある。出土遺物は土師器T種・R種のほか渥美・常滑こね鉢Ⅰ類・砥石・鉄クギなど。

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土・材質　　その他特徴など
図6 5	土　師　器 T種　大型	口径13.9cm，底径7.5 cm，器高3.4 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は灰黄色で白色針状物質・小礫・砂粒含む　焼成普通
6	常　滑 こね鉢Ⅰ類	底径15.2cm　輪積後回転ナデ，体部下半ヘラ削り後断面三角形の高台を貼りつけ　胎土は灰色で砂礫を多く含み，非常に粗い　内底面は砂礫が使用によりかなり掘り起こされている　内壁下半部に重ね焼きの熔着痕　焼成良好
7	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm，底径8.2 cm，器高3.3 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明黄褐色で白色針状物質・微砂粒含みやや軟質　焼成普通
8	土　師　器 R種　小型	口径8.8 cm，底径5.5 cm，器高1.9 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・微砂粒含み堅緻　焼成きわめて良好
9	土　師　器 R種　小型	口径8 cm，底径5 cm，器高1.5 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ　胎土は明黄褐色で白色針状物質・微砂粒含む　焼成良好
10	土　師　器 燭　台	軸部片　直径2.1 cm　棒状の軸に粘土を巻き付け握り成形，のち縦にヘラ削り　胎土は外面淡黄白色，内側灰黒色に燻され，緻密　焼成良好

表3　2面出土遺物観察表（2）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土・材質　　その他特徴など
図7 1	土　師　器 R種　大型	口径12cm，底径8.4 cm，器高3 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ　胎土は茶褐色で白色針状物質・微砂粒含む　焼成良好
2	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm，底径8.2 cm，器高3.3 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
3	土　師　器 R種　大型	口径13.1cm，底径9 cm，器高3.2 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・砂礫・微砂粒含む　焼成良好　外底面の一部黒く焦げる
4	土　師　器 T種　大型	口径12.5cm，底径6.5 cm，器高3.5 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は茶褐色で白色針状物質・雲母細片・小礫・砂粒含む　焼成良好
5	土　師　器 T種　大型	口径12.5cm，底径7 cm，器高3.5 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は明褐色で白色針状物質・小礫・砂粒含む　焼成良好　外面の一部黒く焦げる
6	土　師　器 R種　小型	口径7.2 cm，底径5.4 cm，器高1.5 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・微砂粒含む　焼成良好
7	土　師　器 R種　小型	口径8.2 cm，底径6.2 cm，器高1.9 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
8	楠　葉　型 瓦　器　椀	口縁部～体部片　内面にヘラによる横方向の磨きと縦の界線，外面上部に横方向の磨きが1条　胎土は灰白色で緻密，器表は黒色　焼成良好　口縁部に油煤
9	渥　美 甕	体部下半片　外面に傾斜した二種類のたたき（×点入り連子窓状と格子目）を連ねる，内面横ナデ　胎土は灰色（表面）～淡黄白色（胎芯），きめ細かく挟雑物少ない　焼成やや不良
10	渥　美 甕	体部下半片　外面に傾斜した連子窓状たたきを連ねる，内面横ナデ　胎土は灰色でやや粗く，岩石質　焼成良好　内外に灰釉の飛沫が数カ所にとぶ
11	鉄　ク　ギ	長さ11.2cm，幅5.5 mm，厚さ6 mm，重さ9.9 g
12	土　師　器 T種　大型	口径14.4cm，底径8.8 cm，器高3.2 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は灰～黄白色で白色針状物質・微砂粒含む　焼成普通　外面の一部黒く焦げる
13	土　師　器 R種　小型	口径8.4 cm，底径6.1 cm，器高1.6 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
14	土　師　器 T種　小型	口径8.4 cm，底径6 cm，器高1.5 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は明黄褐色で白色針状物質・砂粒含む　焼成良好
15	土　師　器 R種　小型	口径8.6 cm，底径6.9 cm，器高2.7 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は器表から胎芯部まで黒色に焼けている　白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好　口縁部に油煤
16	常　滑 甕	口縁縁帯部　端部上に粘土紐を貼付けて縁帯を形成　歪み顕著　胎土は灰色で砂粒・礫を含むが粘性があり流紋が認められる　焼成良好　全体に降灰が目立ち縁帯には厚い自然釉

表4　3面出土遺物観察表（1）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土・材質　　その他特徴など
図7 17	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm，底径8.9 cm，器高2.6 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好　外底部の一部黒く焦げる
18	土　師　器 R種　小型	口径6.8 cm，底径4.8 cm，器高1.3 cm　右回転ロクロ，底部糸切　胎土は茶褐色～赤褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
19	土　師　器 R種　小型	口径9.2 cm，底径7.3 cm，器高1.4 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明黄褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
20	土　師　器 R種　小型	口径7.2 cm，底径5.5 cm，器高1.6 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は淡黄灰色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成普通
図8 21	土　師　器 T種　大型	口径13.4cm，底径8 cm，器高3.2 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は灰黄色で白色針状物質・砂礫・微砂粒含む　焼成良好
22	土　師　器 R種　大型	口径13cm，底径8.2 cm，器高3 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は暗黄褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好　口縁部に油煤付着
23	土　師　器 R種　小型	口径8.6 cm，底径6.3 cm，器高1.8 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・砂粒含む　焼成良好
24	土　師　器 R種　小型	口径7.9 cm，底径5.8 cm，器高1.7 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・砂粒含む　焼成きわめて良好
25	土　師　器 R種　大型	口径12.3cm，底径7.5 cm，器高3 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は淡黄白色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成良好
26	土　師　器 R種　大型	口径11.7cm，底径7.3 cm，器高2.9 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・雲母細片・微砂粒含む　焼成きわめて良好

表5　3面出土遺物観察表（2）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土・材質　　その他特徴など
図9 1	滑　石 製　品	口縁部片　胎土は灰色できめ細かく岩石質に近い，堅緻　口縁内側の器表面は黒色に塗られている　焼成良好
2	土　師　器 T種　大型	口径13.2cm，底径8 cm，器高3.2 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は淡黄褐色～灰黄色で白色針状物質・砂礫・微砂粒含む　焼成良好　器表面に若干酸化現象
3	土　師　器 T種　小型	口径9.1 cm，底径7.2 cm，器高2.3 cm　手づくね後体部横ナデ　胎土は暗黄灰色で白色針状物質・砂粒含む　焼成普通
4	土　師　器 R種　小型	口径8.1 cm，底径6.3 cm，器高1.7 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は明褐色で白色針状物質・砂粒含む　焼成きわめて良好
5	土　師　器 R種　小型	口径7.7 cm，底径6.2 cm，器高1.8 cm　右回転ロクロ，底部糸切，内底部ナデ，外底面に板の圧痕　胎土は黄褐色で白色針状物質・雲母細片・砂粒含む　焼成良好
6	常滑？ こね鉢Ⅰ類	口縁部片　ロクロ成形，口縁端部を面取り　焼成良好　内面に若干降灰　瀬戸産か？
7	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　ロクロ成形，口縁端部に浅い沈線　焼成良好
8	滑石製品	幅3.6 cm，厚さ1.2 cm　薄い長方形の板状に成形　北西九州産か？
9	鉄　ク　ギ	両端欠失　幅5 mm，厚さ3 mm，重さ1.9 g

表6　3ｂ面出土遺物観察表

第4章　まとめ

本調査には掘削深度に規制があり、地山まで到達することができなかったが、計4枚の生活面を検出した。最後にそれぞれの面について簡単に言及しておきたい。しかし、なにぶんにも調査面積がきわめて狭いため、この範囲のみで遺跡の性格を云々することは難しい。この点の詳細に関しては、本地点のすぐ南に隣接する第2地点（雪ノ下一丁目271番4地点　本書所収）の報告において、あわせて考察することとしたい。

また出土遺物の計量についても、点数が少ないために百分率が不安定になる危険性を考慮し、第2地点の数値と面ごとに合算して提示することとした。

1面

丸太をくり抜いて木樋とした遺構がある。その西側にも並んで走行する南北溝があるが、両者の関係は不明である。性格もつかめない。ただ、本調査区に限っては、これより東側には遺構が乏しいので、何らかの境界的な場所に設置されたものである可能性が高い。また構造から判断しても、おそらく水が流れていたとみてよい。そこであえていくつかの可能性を提示しておけば、雨落ちか、台所の水回り設備、あるいは水洗便所の樋、といったあたりに落ちつくであろう。

年代は13世紀後半～14世紀初頭。

2面

西半部に柱穴・土壙などがかなり見られる。中央部東寄りには細長い土壙があり、以東には遺構が少ないので、やはり屋敷地の境界域に当たった可能性があろう。

年代は13世紀第2四半期～中葉か。

3面

やはり西半部に遺構が多く、東側に少ないという傾向は否めない。調査区がちょうど屋敷地と大路脇との境界に位置していることがわかる。

年代は、総体に土師器T種の比率の高いことや、R種も質量が大きく器高のさほど高くないものが多いことから、大きく13世紀前半とみたい。

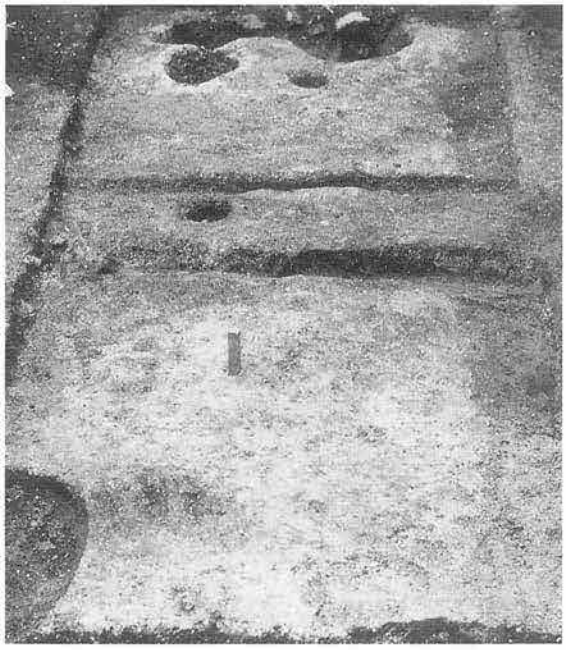
3b面

礎板を持つ、鎌倉時代前期に特有の柱穴が検出されている。おそらくやはり何らかの屋敷地の一角を調査したはずだが、性格については何とも言えない。

年代は13世紀第1四半期ごろか。

写　真　図　版

1．調査地点と若宮大路
（鶴岡八幡宮方面を望む）



2．1面全景（東から）

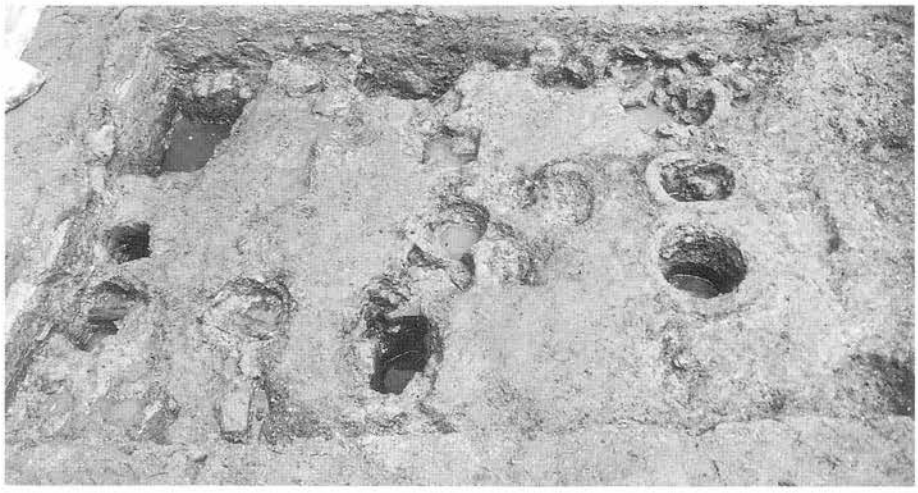
4．同木樋（南から）

3．同西半分（南から）

図版 2

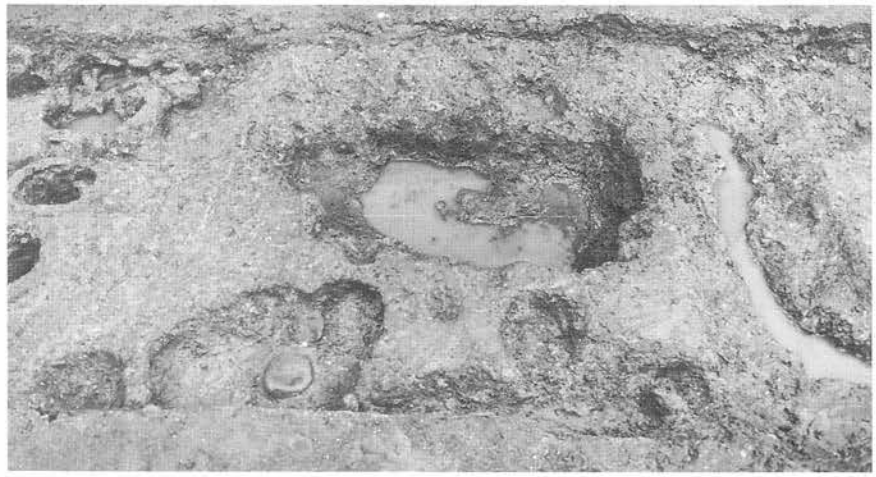
1．2面全景（東から）

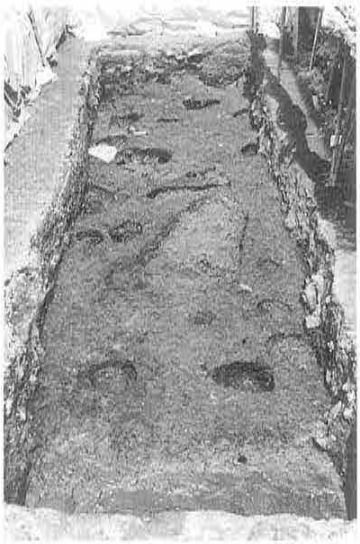
4．同柱穴



2．同西半分（南から）

3．同東半分（南から）



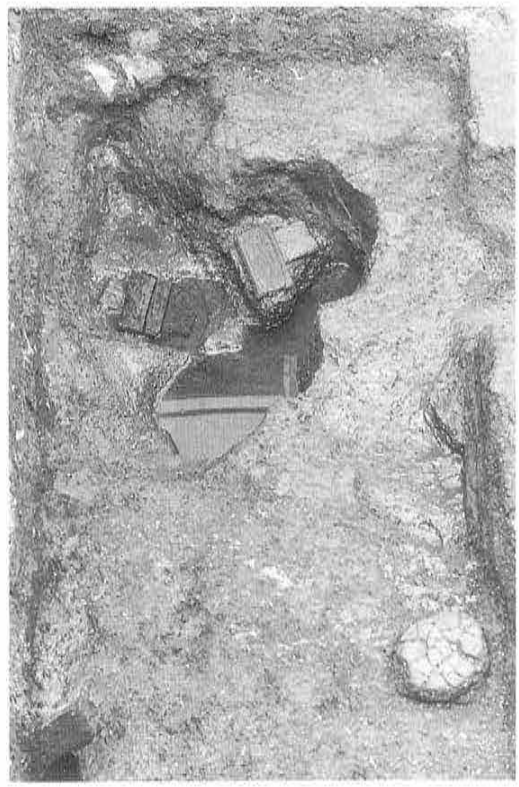


1．3面全景（西から）

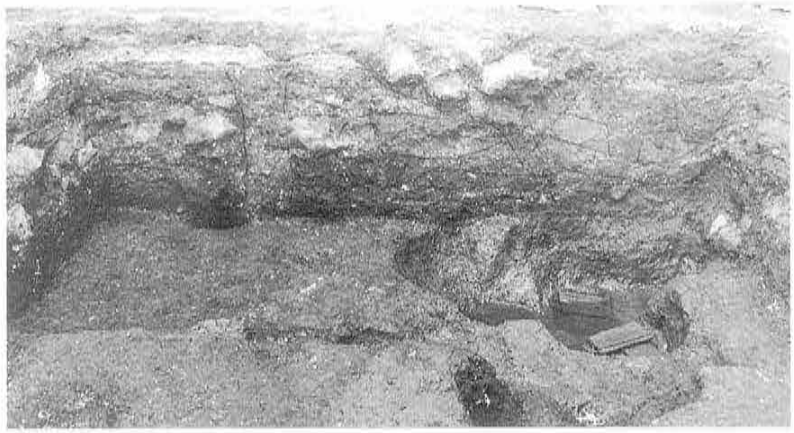
2．同西半分（南から）

3．同東半分（南から）

4．3b面（南から）

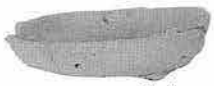


5．調査区西壁土層断面



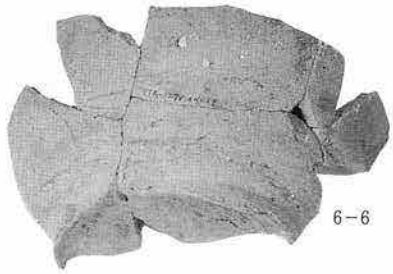
図版4

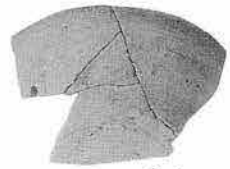
図6－4


6－8

6－5

2面の遺物


6－6


6－1

6－2

図7－4

7－7

7－11

図8－25

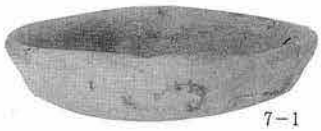

7－1

図9－3

8－21

3面の遺物

3ｂ面の遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	16
シリーズ名	
編著者名	馬淵和雄
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒247-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
北条時房・顕時邸跡（ほうじょうときふさ・あきときていあと）	神奈川県鎌倉市（かながわけんかまくらし）雪ノ下（ゆきのした）一丁目271番3	14204	No.278	35°19′9″	139°33′25″	19980618～19980704	25㎡	自己用店舗併用住宅

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
北条時房・顕時邸跡	都市	鎌倉時代	生活面　4面 小穴　52 溝　2 土壙　3	土師器・土製品・渥美・常滑・瀬戸・青磁・白磁・鉄釘・石製品など計整理箱6	調査区は若宮大路から20mほど入ったところにあり、屋敷地の一角を掘り当てたと考えられる

北条時房・顕時邸跡（No.278）

雪ノ下一丁目271番４地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下一丁目271番4地点における自己用店舗併用住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．調査期間：1998年8月3日～同年10月9日
　調査面積：76㎡

3．調査体制
　担　当　者　馬淵和雄
　調　査　員　野本賢二・岡陽一郎
　調査補助員　鍛治屋勝二・丹行正・松原康子（資料整理）・兼行佻枝（資料整理）・鈴木一功
　調査参加者　箕田孝善・石渡辰男・菅野五郎・松崎靖弘

4．本報作成分担
　遺構図作成　鍛治屋・松原・兼行・馬淵
　遺物実測　　鍛治屋・松原
　同　墨入れ　鍛治屋・松原・兼行
　同　観察表　兼行・馬淵
　同　点数表　松原
　同写真撮影　兼行
　原稿執筆　　馬淵・鍛治屋・松原（執筆個所末尾に名を付す）
　編　　集　馬淵

次の方々・機関に感謝の意を表する
赤堀祐子・社団法人鎌倉市高齢者事業団・清興建設

目　　次

第１章　調査地点の概観 …… 32
　1　地勢と位置 …… 32
　2　中世都市鎌倉と調査地点 …… 32
　3　頼朝以前の調査地点一帯 …… 35
第２章　調査の概要 …… 36
　1　調査にいたる経緯 …… 36
　2　測量方眼設定方法 …… 36
　3　調査経過 …… 36
第３章　調査成果 …… 38
　第１節　概　要 …… 38
　　1．層序と遺構面のありかた …… 38
　　2．出土遺物 …… 39
　第２節　各　説 …… 39
　　1．近世 …… 39
　　2．１面 …… 42
　　3．２面 …… 46
　　4．３面 …… 48
　　5．４面 …… 59
　　6．５面 …… 69
　　7．古代 …… 73
　　8．採集遺物 …… 73
　　9．出土の貝類について …… 92
第４章　調査のまとめ …… 93

挿　図　目　次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 …… 337
図２　周辺地形図 …… 34
図３　調査区設定図 …… 37
図４　近代・近世遺構図 …… 40
図５　井戸１・土壙２・柱穴列１
　　同出土遺物 …… 41
図６　１面遺構全図・１面小穴・
　　１面上包含層出土遺物 …… 43
図７　側溝４・同出土遺物 …… 44
図８　溝状土壙・土壙３ …… 45
図９　２面遺構全図・柱穴列２ …… 46
図10　若宮大路側溝５・同出土遺物 …… 47
図11　２面上包含層出土遺物 …… 49
図12　３面遺構全図・同面上出土遺物・
　　同小穴出土遺物 …… 49
図13　若宮大路側溝６・同出土遺物 …… 50
図14　若宮大路側溝７ …… 51
図15　若宮大路側溝７出土遺物（１）…… 52
図16　若宮大路側溝７出土遺物（２）…… 53
図17　土壙７・10・11・同出土遺物・土壙14 … 54
図18　土壙８・９・同出土遺物 …… 55
図19　土壙14出土遺物 …… 56

図20　建物１・柱穴列３・同出土遺物 …… 57
図21　集石遺構・同出土遺物 …… 58
図22　３面上包含層出土遺物 …… 59
図23　４面遺構全図・４面上出土遺物 …… 60
図24　井戸３・同出土遺物 …… 61
図25　土壙16・17・22・同出土遺物 …… 62
図26　土壙18・20・21・同出土遺物 …… 63
図27　建物２・３・同出土遺物 …… 64
図28　建物４・５・同出土遺物 …… 65
図29　建物６・同出土遺物 …… 66
図30　柱穴列４・５ …… 67
図31　溝２・P.110・４面 …… 68
　　その他小穴出土遺物 …… 69
図32　４面上包含層出土遺物 …… 70
図33　若宮大路側溝４・５・６・７
　　木枠部材実測図 …… 71
図34　調査区北壁土層図・北壁出土遺物
図35　５面遺構全図 …… 72
図36　溝５出土遺物 …… 73
図37　古代遺構全図 …… 74
図38　採集遺物 …… 75

表　目　次

表１　井戸２出土遺物観察表 …… 76
表２　土壙２出土遺物観察表 …… 76
表３　１面小穴・包含層出土遺物観察表 …… 76
表４　若宮大路側溝４出土遺物観察表 …… 76
表５　若宮大路側溝５出土遺物観察表（１）… 76
表６　若宮大路側溝５出土遺物観察表（２）… 77
表７　２面上包含層出土遺物観察表 …… 77
表８　３面上・３面小穴出土遺物観察表 …… 78
表９　若宮大路側溝６出土遺物観察表 …… 78
表10　若宮大路側溝７出土遺物観察表(1) …… 79
表11　若宮大路側溝７出土遺物観察表(2) …… 80
表12　若宮大路側溝７出土遺物観察表(3) …… 81
表13　若宮大路側溝７出土遺物観察表(4) …… 82
表14　若宮大路側溝７出土遺物観察表(5) …… 73
表15　土壙７・土壙10・11出土遺物観察表 … 73
表16　土壙８出土遺物観察表（１）…… 73
表17　土壙８出土遺物観察表（２）…… 84
表18　土壙９出土遺物観察表 …… 84
表19　土壙14出土遺物観察表（１）…… 84
表20　土壙14出土遺物観察表（２）…… 85
表21　建物１出土遺物観察表 …… 85
表22　集石遺構出土遺物観察表 …… 85
表23　３面上包含層出土遺物観察表 …… 86
表24　４面上出土遺物観察表（１）…… 86
表25　４面上出土遺物観察表（２）…… 87
表26　井戸３出土遺物観察表 …… 87
表27　土壙17出土遺物観察表 …… 87
表28　土壙22出土遺物観察表 …… 87
表29　土壙19出土遺物観察表 …… 88
表30　土壙21出土遺物観察表 …… 88
表31　建物２・４・５・６出土遺物観察表 … 88
表32　４面小穴出土遺物観察表 …… 89
表33　４面上包含層出土遺物観察表（１）…… 89
表34　４面上包含層出土遺物観察表（２）…… 90
表35　北壁出土遺物観察表 …… 90
表36　溝５出土遺物観察表（１）…… 90
表37　溝５出土遺物観察表（２）…… 91
表38　採集遺物観察表 …… 91
表39　貝類出土点数表 …… 92
表40　遺物計数表 …… 94

図　版　目　次

図版１－１　調査地点と若宮大路 …… 97
　　１－２　土壙２ …… 97
　　１－６　同　玉砂利部分 …… 97
　　１－４　Ｉ区１面 …… 97
　　１－５　同前 …… 97
　　１－３　井戸２ …… 97

図版２－１　Ⅰ区２面 …… 98
２－２　若宮大路側溝４ …… 98
２－３　同　東岸部 …… 98
２－４　若宮大路側溝４・５・６ …… 98
２－５　同前 …… 98
図版３－１　Ⅰ区４面 …… 99
３－２　同前 …… 99
３－３　Ⅱ区４面 …… 99
３－４　同前 …… 99
図版４－１　若宮大路側溝７東岸部 ……100
４－２　集石遺構 ……100
４－３　井戸３ ……100
４－４　土壙14 ……100
４－５　土壙17 ……100
４－６　漆器椀（図27-2）出土状況 ……100
図版５ ……101
５－１　４面　ｐ110柱根検出状況 ……101
５－２　同前礎板検出状況 ……101
５－３　土師器（図23-4）出土状況 ……101
５－４　４面ｐ５烏帽子出土状況 ……101
５－５　同前烏帽子埋納施設 ……101
図版６ ……102
６－１　Ⅰ区５面 ……102
６－２　同前 ……102
６－３　Ⅱ区５面 ……102
６－４　同前 ……102
図版７ ……103
７－１　溝５　Ⅰ区部分 ……103
７－２　溝５土層断面（調査区東壁）……103
７－３　溝３ ……103
７－４　溝６ ……103
７－５　古代土壙１ ……103
７－６　古代土壙２ ……103
図版８　出土遺物１ ……104
図版９　出土遺物２ ……105
図版10　出土遺物３ ……106

第１章　調査地点の概観

第１節　地勢と位置

滑川は鎌倉東辺の山中に源を発し、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開析したあと、大倉付近から南に向きを変えて相模湾に流れ込む。向きの変わった辺りから河口にかけては扇状沖積地が形成され、海退期以降次第に乾陸化して人が住みつくようになった。鶴岡八幡宮とその参詣道（「若宮大路」）は、この沖積地を縦走するように配されている。近年の繁華街はこの一帯を中心に出来上がった。

若宮大路は海抜10.5m前後の鶴岡八幡宮社頭から海岸に向かって緩やかに低くなっていく。調査地点は約170m南下した大路西側に面している。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目271番４。本書所収の「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番３地点」の南隣にあり、同一地番の別筆にあたる。現地表面の海抜は8.20ｍほどである。

第２節　中世都市鎌倉と調査地点

この地点は鎌倉市教育委員会によって「北条時房・顕時邸跡」と名付けられた長方形の区画の一部に属している。遺跡名称は、顕時の屋敷が「相州鎌倉赤橋辺」にあったという『金沢文庫文書　識語編』2064奥書の記述と、やはり「赤橋南方」で若宮大路東側の北条泰時小町亭との関係からそう付けられたものである。若宮大路の東西いずれの側も「赤橋南方」と呼んでいいが、東側に泰時小町亭があるとなれば、西側を充てるしかないわけである。時房邸については、現在の宝戒寺の付近にあったとされる義時邸を相伝したという意見もあり（秋山1996）、判然としない。したがって遺跡名称については再検討の必要がおおいにある。

「北条時房・顕時邸跡」ではこれまでも何箇所かで発掘調査がおこなわれている。若宮大路際では必ず大路側溝が発見され、対岸（東側）の「北条泰時・時頼邸跡」または「若宮大路幕府跡」と推定されている場所の調査成果と照らし合わせて、大路の復元が試みられた。

先ず筆者（馬淵）は、図２地点６（雪ノ下一丁目 233番９他）の調査報告において、大路の幅を33.6ｍに復元し、街割りも11丈を基本単位に設定されている、とした（馬淵1987）。この推定は1994年度におこなった地点68（「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」雪ノ下一丁目 377番７地点）の調査結果によっても、若干の誤差修正を経ながら確認されている（馬淵1996）。また宗台秀明は、本地点から至近の位置にある地点79（雪ノ下一丁目 272番）の調査において大路西側側溝の軸線を検討し、八幡宮前の現況「横大路」と完全には直交していない可能性を指摘している（宗台1997）。

若宮大路側溝からは、地点65を端緒として、過去何点かの人名木簡が出土している。これは公共事業である溝作事を、鎌倉幕府が「御家人役」として御家人に割り振った当該地点を示すもので、これまで発見されたものはいずれも13世紀第２四半期以降に属する。今のところ東側のほうが多いが（地点65・68）、西側の地点80でも「口二丈　あかき入道跡」と読める木簡が見つかっている（田代1990）。さらに、最近では若宮大路から一本東の南北大路（「町大路」か）の側溝からも出土しており（地点83－原1998）、若宮大路側溝に限定されない状況が認められるようになった。どの程度の「格」の溝まで御家人役によって作事をまかなったか、言い換えればどこまでが公共事業として行われていたのか、興味深いところである。

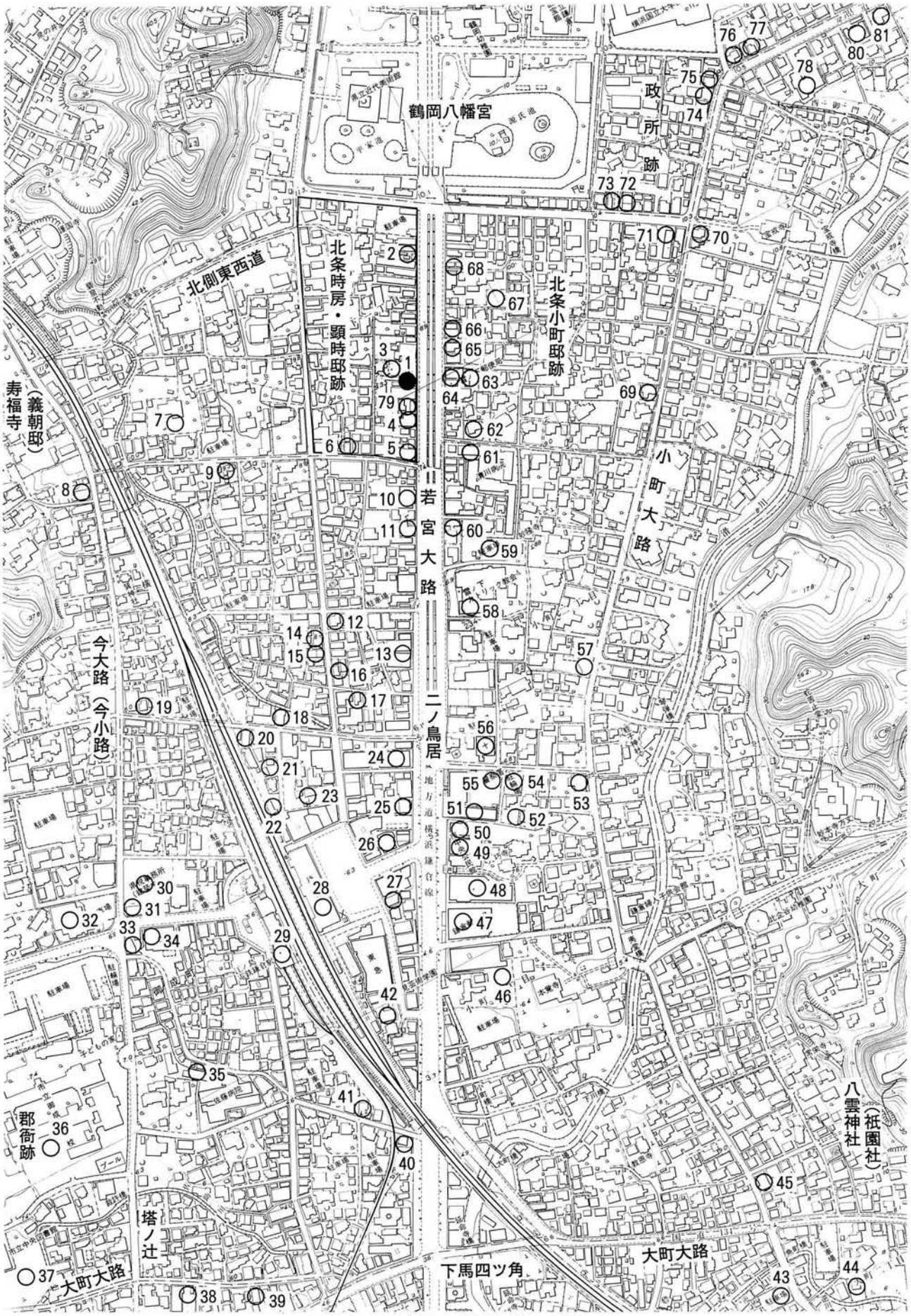


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図２　周辺地形図

図１調査地点名

１．調査地点　２．北時（雪一丁目 293番１）　３．北時（雪一丁目 271番１）　４．北時（雪一丁目 273番ロ）　５．北時（雪一丁目 274番２）　６．北時（雪一丁目 233番９）　７．若（雪一丁目 210番）　８．今（扇一丁目 131番１）９．若（小二丁目39番６他）10．若（小二丁目 276番他）　11．若（小二丁目 279番２）　12．若（小二丁目５番８）　13．若（小二丁目 283番６他・豊島屋）　14．北時（雪一丁目 265番３）　15．若（小二丁目12番18）　16．若（小二丁目５番23）17．若（みのビル）　18．若（小二丁目63番３）19．若（扇一丁目74番８外）　20．小一丁目 120番－１　21．若（小一丁目 116番）　22．若（駐輪場）　23．若（小一丁目 106番）24．日本生命ビル　25．若（小一丁目67番２）　26．小一丁目75番地１号　27．若（小一丁目81番８　28．蔵屋敷　29．蔵屋敷東　30．千葉地東　31．千葉地東（御成町 228番２）　32．千葉地　33．若（奴田ビル）　34．諏訪東　35．若（佐藤病院）　36．今（御成小学校内）　37．今（社会福祉センター）38．若（由一丁目 123番５外）　39．若（由一丁目 118番）　40．若（御成町 872番14）　41．若（御成町 868番）　42．早見芸術学園　43．米町（大町二丁目 933番）　44．米町（大町二丁目2315番外）　45．大町清興ビル　46．本覚寺旧境内　47．（推定）藤内定員邸跡（鎌倉中央郵便局用地）　48．（推定）藤内定員邸跡（中央公民館）　49．（推定）藤内定員邸跡（島森書店用地）　50．小一丁目 309番５　51．若（スイミングクラブ）　52．若（小一丁目 322番）　53．若（小一丁目　325番イ外）54．若（駐輪場）　55．若（小一丁目 321番１）　56．若（小二丁目 345番２）　57．若（小二丁目 389番１）58．若（雪ノ下カトリック教会）　59．若（小二丁目 354番12）　60．若（小二丁目 361番１）　61．若（二丁目 366番他）62．北（雪一丁目 419番３）　63．北（雪一丁目 369番他）　64．北（雪一丁目 369番１）　65．北（雪一丁目 372番７）　66．北（雪一丁目 371番１）　67．北（雪一丁目 374番２）　68．北（雪一丁目 377番７）　69．北（雪一丁目 432番２）　70．北条高時邸跡　71．北（雪一丁目 395番他）　72．政（雪三丁目 987番１・２）　73．政（雪三丁目 988番）　74．政　（雪三丁目 966番１）　75．政（雪三丁目 965番）　76．大倉幕府周辺（雪三丁目 606番１）　77．大倉幕府周辺（雪三丁目 607番外）　78．大倉南御門Ｂ　79．北時（雪一丁目 272番）　80．大倉南御門　81．大倉幕府周辺（雪四丁目 620番５）

※遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り
北＝北条小町邸跡、雪＝雪ノ下、政＝政所、若＝若宮大路周辺遺跡群、小＝小町、北時＝北条時房・顕時邸跡、今＝今小路西遺跡、扇＝扇ケ谷、由＝由比ヶ浜

第3節　頼朝以前の調査地点一帯

この付近の発掘調査で見逃してならないことは、中世遺構の下からときに若宮大路と主軸方位を異にする溝が出現することである。たいていの場合遺物にめぐまれないので、いつごろのものか正確には把握できていない。しかし、東西溝の場合は大路側溝の下に潜り込むことが多く、大路敷設以前のものであることが確実で、しかも検出面からみて平安時代中期以前にはさかのぼらないとみられるところから、おおむね平安後期に属すると考えられる。平安時代末期、調査地点から約300m西に位置する現在の寿福寺の地には頼朝の父義朝の居館（「鎌倉之楯」）があり、三浦一族も周辺に居宅を構えていた可能性がある（石丸1993）。また、当時すでに20近い数の寺社が存在していたようで、平安末期の鎌倉にはかなりの都市的な場が成立していたと考えたい（野口1993）。若宮大路よりも古い溝の存在は、そのころの地割りと関連があるのかもしれない。

律令期の鎌倉郡衙は現在の鎌倉市役所南方の御成小学校校庭にあった。したがってその一帯にはかなりの集落があったと推定される。本地点は直線距離で約600mほど北北東に位置するが、小町通り商店街付近では当該期の掘立柱建物が発見されることも珍しくないので、すぐ近くにまで律令期集落が延びていたことは間違いない。

古墳時代の遺構は海岸砂丘地帯や大倉、あるいは二階堂の山際に存在しているが、市内中心部の沖積地においては明確ではない。弥生集落も同様で、大倉一帯までは確認されているけれども（地点82－馬淵1998・1999）、沖積地ではまだ発見されていない。

注

秋山哲雄 1996 「御所と北条氏亭」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12（第2分冊）p.282～p.286 （「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）　雪ノ下一丁目 377番7地点」特論）鎌倉市教育委員会

石丸熙 1993 『都市鎌倉の武士たち』　新人物往来社

宗台秀明 1997 「若宮大路側溝と地割り」『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 272番地点』　北条時房・顕時邸跡発掘調査団

田代郁夫 1990 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目 265番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6　鎌倉市教育委員会

野口実 1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45　（財）古代学協会

原廣志 1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

馬淵和雄 1987 「北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 233番9他地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）　雪ノ下一丁目 377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12（第2分冊）　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1998 「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目 620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第2分冊）鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1999 『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目 620番5地点発掘調査報告』　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

第２章　調査の概要

１　調査にいたる経緯

平成９年12月、自己用店舗併用住宅建設の事前相談があった。基礎が杭構造であるため、近隣の発掘調査の成果から埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断し、発掘調査の実施について協議した。発掘調査は建物の建築部分について平成10年３月から実施することで協議が整ったが、事業者の都合で調査着手が８月に順延となった。

２　測量方眼設定方法

発掘区が幅約４ｍ、長さ約20ｍと非常に細長いことから、まず任意の基準点P.１を発掘区内のほぼ中心部に置き、そこから10ｍ西に置いたもう一つの任意点P.２を通して、区内を縦走する東西方向の基準線NS－０を設定した。そしてP.１からNS－０に直交する軸線EW－０を配した。南北軸はP.１から２ｍ間隔で東西に派生させ、東西軸はP.１から北と南に１ｍの点を通過する軸を基準とした。

方眼は２ｍ区画となり、南北軸に算用数字を、東西軸にアルファベット（大文字）の名称を冠した。ちなみに、P.１は南北軸では７軸、東西軸ではＢ南１ｍが通過する。

東西軸線は調査の利便性を優先させて調査０区の軸線と平行させたために、主軸方位は国土座標系と一致していない。偏差は次の通り。

Ｎ－30°－Ｅ

調査区は、ここより約80ｍ南方にある鎌倉市４級基準点Ｓ114 に図３のように連結している。P.１の国土座標成果は次の通り。

〔 AREA ９〕

Ｘ－75484.201 （北緯35° 19' 9"）

Ｙ－25115.827 （東経139° 33' 25" ）

また、諸般の事情により、北隣の雪ノ下一丁目271番３地点とは軸線を共有していない。

３　調査経過

残土処理の便宜上、調査区を８軸で西側（若宮大路から見て奥）のⅠ区と東側のⅡ区に大きく分け、当初Ⅰ区から始めた。Ⅰ区の残土はⅡ区に仮置きしたあと漸次場外搬出、Ⅱ区の残土はⅠ区に置いて場内処理とした。両区とも表土は重機で排除し、基本的に場外搬出とした。

調査は1998年８月４日に始められ、同年10月９日をもって終了した。その間の調査の節目を以下に記しておく。

８月４日　重機による表土除去の開始
９月14日　Ⅰ区終了
９月15日　台風来襲、現場水没
９月17日　Ⅱ区調査のためのベルトコンベア等諸設備の設営
９月23日　台風来襲、現場水没
10月８日　Ⅱ区終了
10月９日　機材撤収

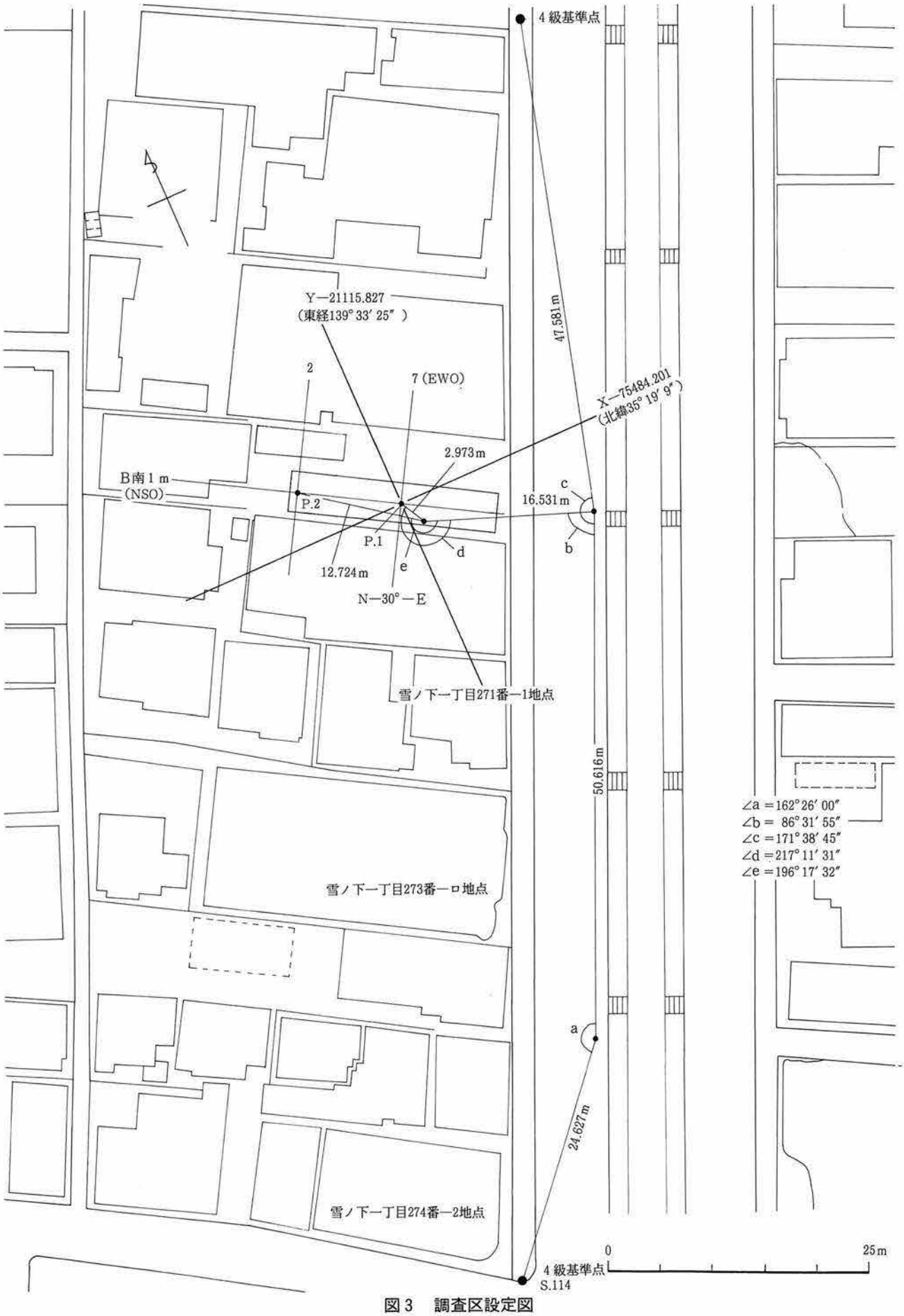

4級基準点
Y—21115.827
(東経139° 33′ 25″)
47.581m
2
7 (EWO)
X—75484.201
(北緯35° 19′ 9″)
2.973m
B南1m
(NSO)
P.2
c
16.531m
b
P.1
d
e
12.724m
N—30° —E
雪ノ下一丁目271番一1地点
50.616m
∠a =162° 26′ 00″
∠b = 86° 31′ 55″
∠c =171° 38′ 45″
∠d =217° 11′ 31″
∠e =196° 17′ 32″
雪ノ下一丁目273番一ロ地点
a
24.627m
雪ノ下一丁目274番—2地点
0
25m
4級基準点
S.114

図3　調査区設定図

第３章　調査成果

第１節　概　要

１．層序と遺構面のありかた

層序と遺構面について略述する。以下の文中で示した若宮大路側溝の数は、基本的に形態や位置の変化に着目して、新たな側溝の成立と認識したもので、基本的に浚渫などは数に含んでいない。

近代

近世・近代の面自体は後世に削られて遺構の切り込み肩は失われており、深い掘り込みを持つもののみ中世層中に残っていた。したがって図５に近代・近世の遺構として示したのは、当代の面からの発見ではなく、１面で検出された遺構の中から出土遺物によって当該期のものを抽出し、図上復元したものである。そのような事情のため、標高は不明である。また近代・近世の若宮大路側溝として図示したものも、土層断面を参照にした。少なくとも大路側溝に８ｍ前後のところまで建物が存在していることがわかる。

遺構（第２次大戦以前，遺構個別図省略）：若宮大路側溝１条・井戸１基・建物１棟・土壙１基

近世

近代の遺構と同様、近世も面があったわけではなく、１面での検出遺構から当該期のものを抽出した。生活面の標高はわからない。

遺構：若宮大路側溝２条（１条は土層図からの復元）・井戸１基・柱穴列（カギ形）１列・土壙１基

１面

西側（Ⅰ区）で約60㎝、東側（Ⅱ区）で約30㎝の厚みをもつ表土を除くと、すぐ中世層が現れる。調査区西壁から５軸付近にかけて、広い範囲に細かい貝殻混じりの砂を敷いた面があり、これを「１面」とした。第１地点の「１面」に相当する。この貝殻混じりの砂層は厚みが４～10㎝で、ここからは柱穴約20穴が見つかった。この面を取り払うと、今度は玉砂利を敷いた面が４軸付近から西に現れる。ここからは柱穴様の小穴が４つ発見された。標高はおよそ8.2m前後である。

東側（Ⅱ区）は深く攪乱されていて面は検出できない。１面に相当するとみられる大路側溝もやはり切り込み面を失ってはいたが、木枠と梁の部材を含む側溝下部とそれに伴う護岸のための裏込め掘方（詳しくは各説で後述）を検出することができた。

遺構：若宮大路側溝１条・溝状土壙１基・土壙２基・柱穴様の小穴29口

２面

１面下約20㎝にある硬い泥岩版築層である。標高は約８ｍ前後で、１面との間は明褐色弱粘質土が主体となっている。Ⅰ区には礎板を持つ柱穴がいくつか並んで存在する。Ⅱ区においては攪乱が２面を構成する泥岩層の上面まで及んでおり、柱穴等は検出できなかった。９軸と10軸の中間で面は落ち、若宮大路側溝になる。また側溝西側には付帯施設と見られる溝状の落ち込みが検出された。すでに鎌倉時代中～後期の最盛期中世鎌倉の面である。北隣第１地点の２面と共通する。

遺構：若宮大路側溝１条・溝状土壙１基・土壙２基・柱穴様の小穴29口

３面

２面を構成する泥岩版築層はⅠ区で厚く、Ⅱ区で次第に薄くなっていく。この層の下20～30㎝に黒褐色の粘質土層があり、炭化層が上面に載っていたところから、生活面と確認した。また、この面には炭化層とともにローム土が敷かれており、隣接の第１地点の相当面（「３面）にもその広がりが確認されていた。そこでローム土をもってこの面の特徴とし、３面とした。面の標高は7.8m程度である。

また、ローム土混じりの破砕泥岩を敷いた地業層が2箇所に認められた（アミ目部分)。いずれも下に土壙があるなどして基盤の軟弱な場所であるため、強度を確保する意図があった可能性がある。この層は第1地点の中世3面と同一であるが（以後、便宜上「3面後期」とよぶ)、第1地点の当該面が硬くしまっていたのに対し、本調査の土壌は軟らかく水気を多く含んでいたため、面としてとらえにくかった。特にI区（1～7軸）では、炭と貝殻粒を多量に含んだ黒褐色粘質土（第1地点「3 b」面に相当、以後「3面前期」とよぶ）がぬかるみ状態となって、赤褐色粘質土と区別しがたい状態であった。そのため遺構の層位的な弁別には困難が伴った。2軸と6軸の南壁際に泥岩地業層が部分的に認められるが(アミ目部分)、この地業層は赤褐色ローム土の直下から検出された。強固に版築されたものではなく、拳大の破砕泥岩が厚さ10cm弱に地ならしされたものである。さらにその下からは、焼け焦げた木片が多数散らばった炭化面がI区の一部で検出された。炭面をはがすと4面の固い基盤層に到達する。

大路側溝は地覆の角材が二時期分残る。また西側には、柵か塀とみられる柱穴列が多数検出された。

遺構：若宮大路側溝2条・土壙9基・掘立柱建物1棟・柱穴列1列・その他柱穴様の小穴40口・集石遺構1群

4面

3面を構成する黒褐色粘質土層はかなりの炭化物や遺物片を包含する。厚みは10～20cm前後で、これを排除すると中世基盤層が現れる。標高7.7～7.6m前後にある茶褐色で粘性が非常に強い土である。面上には多くの遺構があった。ここまでが鎌倉時代に属する。

遺構：溝1条・井戸1基・土壙5基・掘立柱建物5棟・柱穴列2列・その他柱穴様の小穴80口。

若宮大路側溝については明瞭には検出できなかった。現況の歩道下に潜り込んでいる可能性もある。

5面

中世基盤層は5～15cmで茶褐色の硬く締まった砂層となる。標高は7.5m前後である。ここから鎌倉時代以前、平安時代末期と考えられる遺構がいくつか検出された。おそらく12世紀中葉前後に帰属しよう。

遺構：溝4条・小穴2口

古代

5面から検出された遺構のうちには、土層からみて平安時代末期よりさらにさかのぼるとみられるものがある。同一面ではあるが時代がまったく異なるので、ひとまず古代遺構として別に抽出しておく。

遺構：土壙2基

2．出土遺物

土師器・陶磁器・鉄製品・石製品・木製品・近世遺物など、内法54×34×14cmの合成樹脂製整理箱28箱ほどが出土した。なお以下土師器については、ロクロ成形品を「R種」、手づくね品を「T種」と呼ぶ。

（馬淵・鍛治屋）

第2節　各　説

1．近世

若宮大路側溝2（図35土層番号24・25）

11軸に沿って検出。東肩は近代側溝に削り取られているが、現況で幅1m前後、深さ58cm、中段に稜を持つ二段階の落ち込み。図4の推定線は土層断面図より復元。

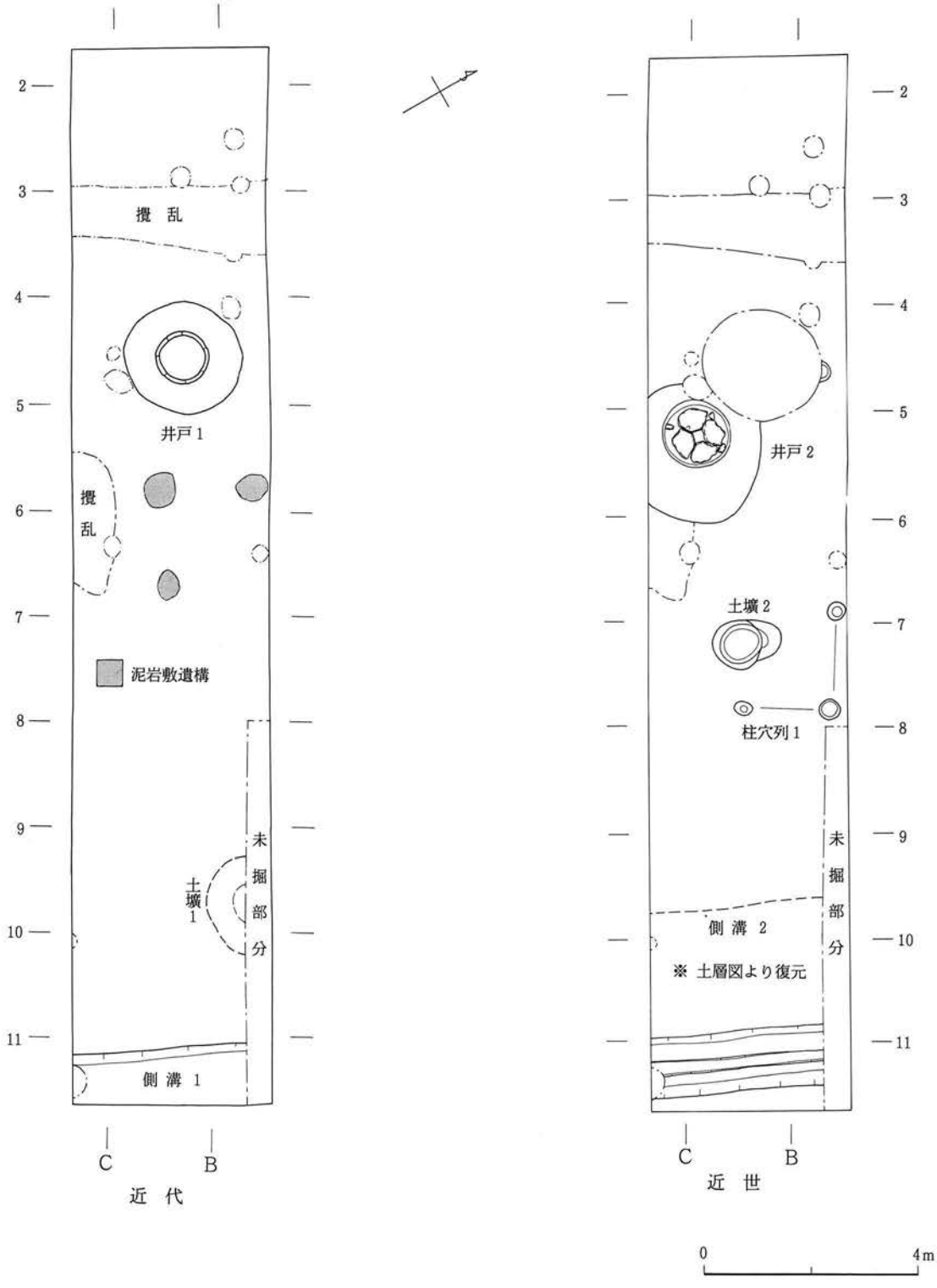


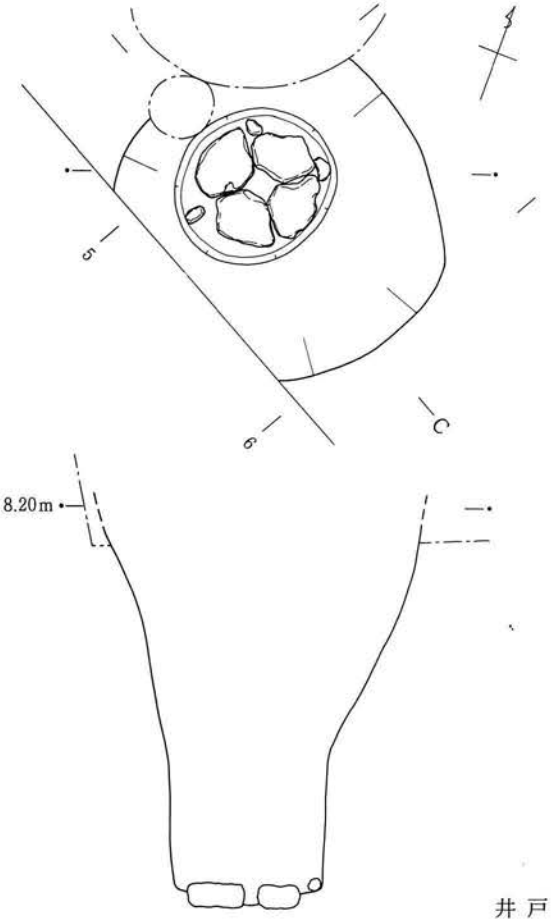
図4　近代・近世遺構図

井戸2（図4）

調査区南壁際4・5－B・Cで検出。掘方は平面円形で漏斗状。深さは現況で290㎝、掘方直径262㎝、底面直径120㎝。底面には偏平・略扇形の泥岩切石が敷かれ、その繋ぎ目の細い溝を湧き水が伝わって中心に残された方形の溜まり部に流れ込む仕組みになっている。このような形式の井戸は鎌倉では初見。

柱穴列1　（図5下）

7・Bに位置する。土壙2の北東側を囲むように、カギ形に柱穴列が並ぶ。柱間距離は平均170㎝。深さは14㎝程だが、実際はもっと深かった可能性がある。位置的に見て土壙2に関連するかもしれない。



概　要　円形の堀方の底面に泥岩を敷いた井戸。中心に方形の溜まり部を残して四方に偏平・略扇形の泥岩切石を敷く。堀方壁と泥岩の隙間には半人頭大の泥岩が詰められる。

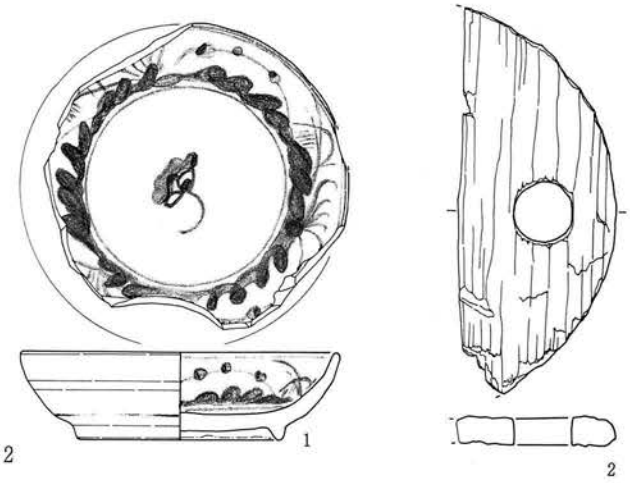
位　置　4・5－B・C

大きさ　最大径　深さ
掘方　262cm×(290)cm
底面　118cm

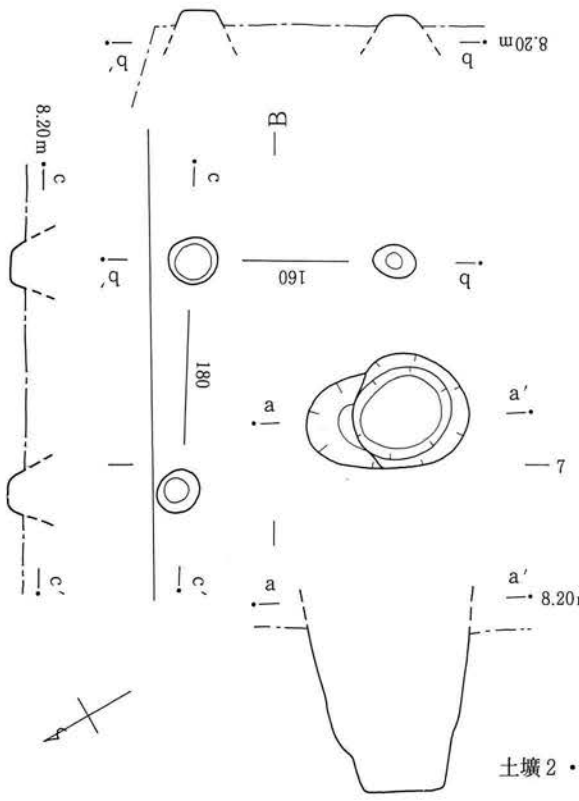
泥岩の大きさ　長さ　幅　厚さ
60cm×44cm×18cm(最大)

中心穴　縦　横
21cm×19cm

主軸方位　——



井戸 2



土　壙　2
位　置　7－B
大きさ　長径　短径　深さ
130cm×77cm×(129)cm
平面形　円形が二段重なる
断面形　上部筒形　下部箱形
主軸方位　N－16.5－E

柱穴列　1
概　要　土壙北東部を囲むL字状の柱穴列
柱　間　南北1間（1.6m）東西1間（1.8m）
位　置　6・7－A・B
南北主軸方位　N－31°－E　交差角91.5°

3

土壙 2・柱穴列 1

図5　井戸 2・土壙 2・柱穴列 1　同出土遺物

土壙２（図５上）

７・Ｂに位置する。南側の下部に段を持つ。大きさは130㎝×77㎝、深さは現況でも130㎝弱ある。円筒形に近いが、北側はやや広がっている。覆土は泥岩を含んだ灰褐色粘質土で、下層になると炭化物と木片の多く入った黒色土層へと変わる。形状から便所遺構の可能性も考えたが、瓜の種子や小魚の骨などそれらしい遺物はなかった。

２．１面

若宮大路側溝３（図34）

土層断面図から復元。形態からいちおう中世のものと判断した。覆土は硬くしまった暗灰色粘質土。

若宮大路側溝４（図７）

Ⅱ区（８軸より東）は全体に削平されていたので側溝上端も残されてはいなかったが、出土遺物と土層断面図から１面のものと判断した。幅約３ｍ20㎝、深さ98㎝～１ｍ20㎝（推定）、覆土は硬い灰黄色砂層。土層断面から西側に20㎝ほど掘りなおしているのがわかる。

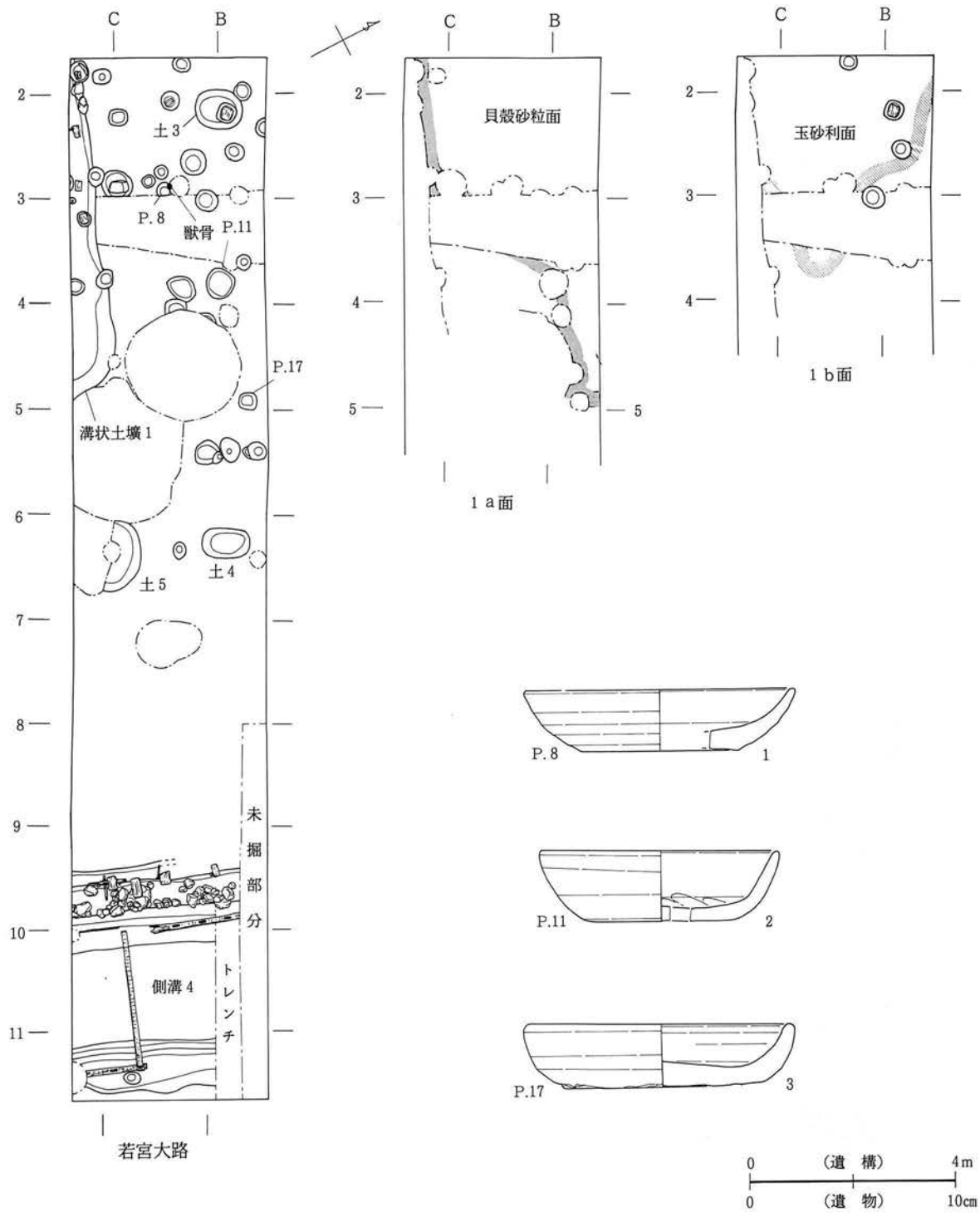
底部の両壁際には深さ20㎝程の小溝が掘られ、中に溝枠の根太材が据えられている。東西の根太の間には梁がわたされている。根太は幅約10㎝、厚さ2.5㎝～５㎝の角材で、ホゾ穴が芯心で約50㎝の間隔をおいてあけられている。板材残欠も出土したが、残存状態が悪く側板かどうかは不明。東側小溝内には縦12㎝、横８㎝、残存高44㎝の束材１本が、木枠根太のホゾ穴に組合わさった形で残っていた。梁（突っ張り）は束柱に密着してはいたが組み込まれてはおらず、構造的にもその痕跡は見当たらない。またそれに対応する西側の束柱と木枠が無かったので、梁と束柱の接続方法は分からない。あるいはたんに東西の束柱の間にはめ込まれていただけか。梁は長さ２ｍ20㎝、幅10㎝、厚さ約５㎝で溝底に敷かれていた。過去の調査例からみても、梁は溝の上下に渡されていたと考えられ、検出された梁は下段に相当しよう。梁の長さから復元される溝３本来の幅は２ｍ20㎝ほどである。

西側には幅約90㎝、深さ約90㎝（推定）の、階段状の落ち込みが側溝に沿って続いている。その中には側溝の裏込めとみられる泥岩の並びが検出された。さらに束柱が溝側に倒れるのを防ぐための部材（「控え貫」または「控え横木」）もみられた。９－Ｃで検出した例をみると、東西（溝直交方向）に敷かれた長さ48㎝、高さ10㎝、厚さ２～３㎝の部材中心部に不貫通のホゾが入れられ、そこに長さ72㎝、高さ４㎝、厚さ６㎝の部材を十字架状に直交させて組み込んでいる。組み込み部分に生じた隙間には木切れが両側に差し込まれて固定され、さらに南北方向の部材の東側には２本の杭が打たれて溝側にずれない工夫がされている。板の上には礎板がのっており、溝と平行に約１ｍ間隔で並んでいる。東に延びた板の先端はホゾ穴で束柱に組み込まれていたものとみられる。これはかねて指摘されているように（『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目274番２地点』＝原1988ほか）、『蒙古襲来絵詞』に描かれている安達泰盛邸門前の溝の、束柱上部から少しだけ飛び出ている角材に相当しよう。ただし本調査で出たものは同地点などに比べ、しっかりとしたものとはいえない。本調査区では側板が見つかっていないが、側溝を構成する他の部材は断片ではあっても確認することができた。角材については図33に示した。

出土遺物には大量のロクロ成形土師器（Ｒ種）のほか、竜泉窯青磁碗や容器の蓋とみられる木製円板などがある。

溝状土壙１（図８）

１～４軸の、南壁沿いにある落ち込み。南側は調査区外に伸び、東側先端は近世井戸の攪乱をうけて欠落している。手前から南へと湾曲しているように見えるが、全体像がつかめないので、この遺構が溝の一部なのか大型土壙の一辺であるかどうかは判断できない。そこでひとまず溝状土壙と呼ぶことにす



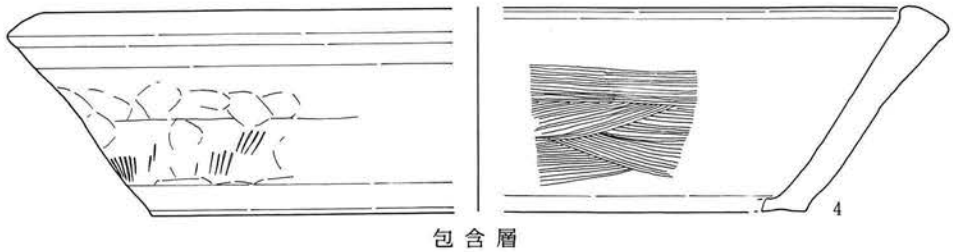
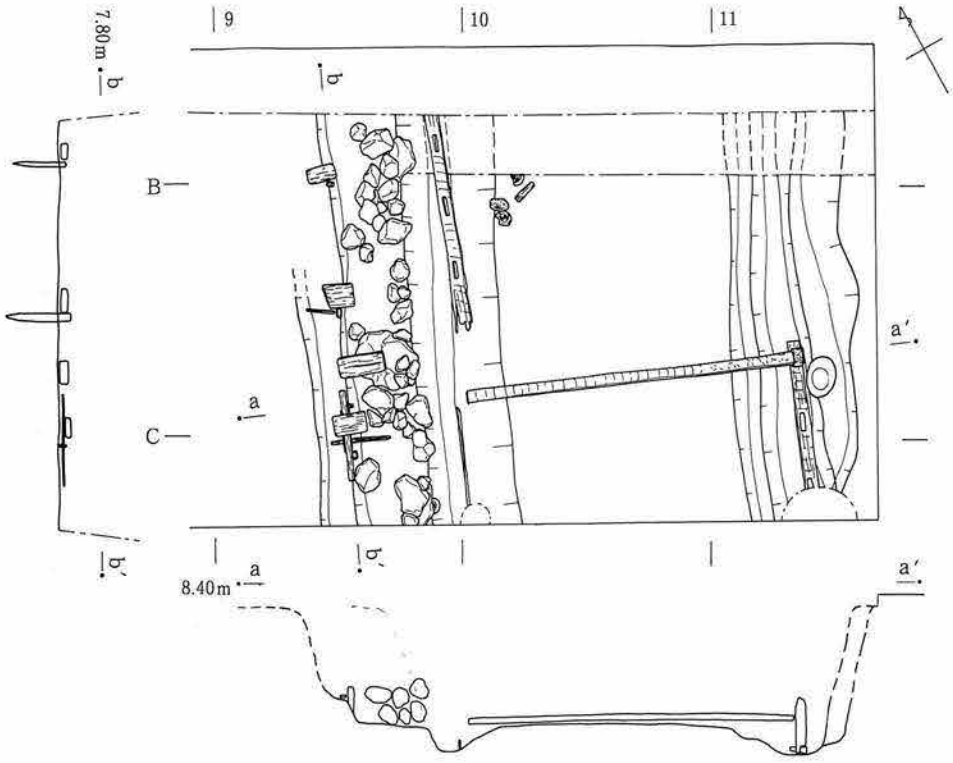


図6　1面遺構全図・1面小穴・1面上包含層出土遺物


9
10
11
7.80m
b
b'
B
C
a
a'
8.40m
位置　A～C－10・11
幅　316cm～(375cm)
深さ　木枠まで85cm
掘方まで92cm～115cm
断面形　箱形
流下方位　北→南
主軸方位　N－22.5°－E

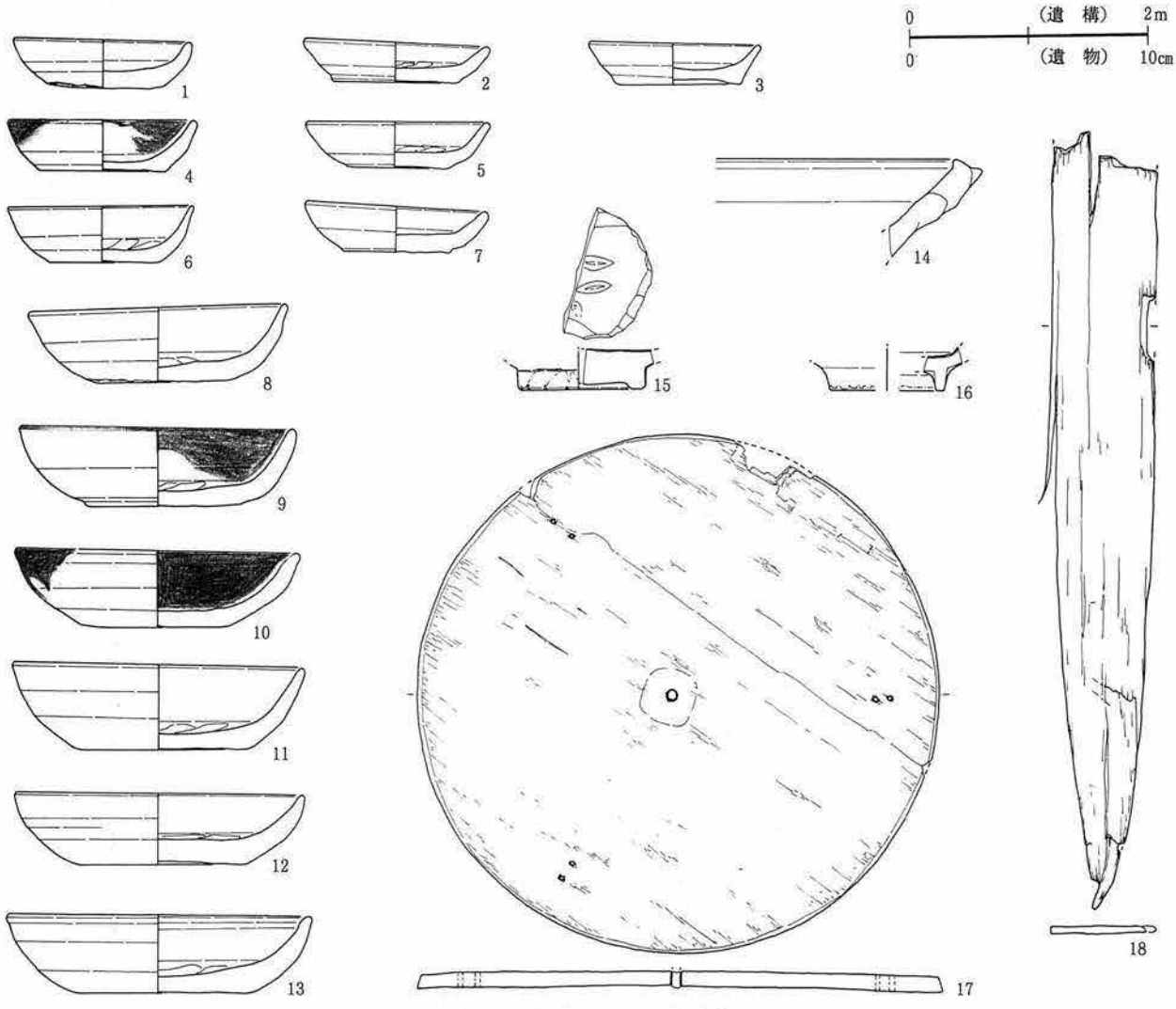

0
(遺構) 2m
0
(遺物) 10cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

図7　側溝4・同出土遺物

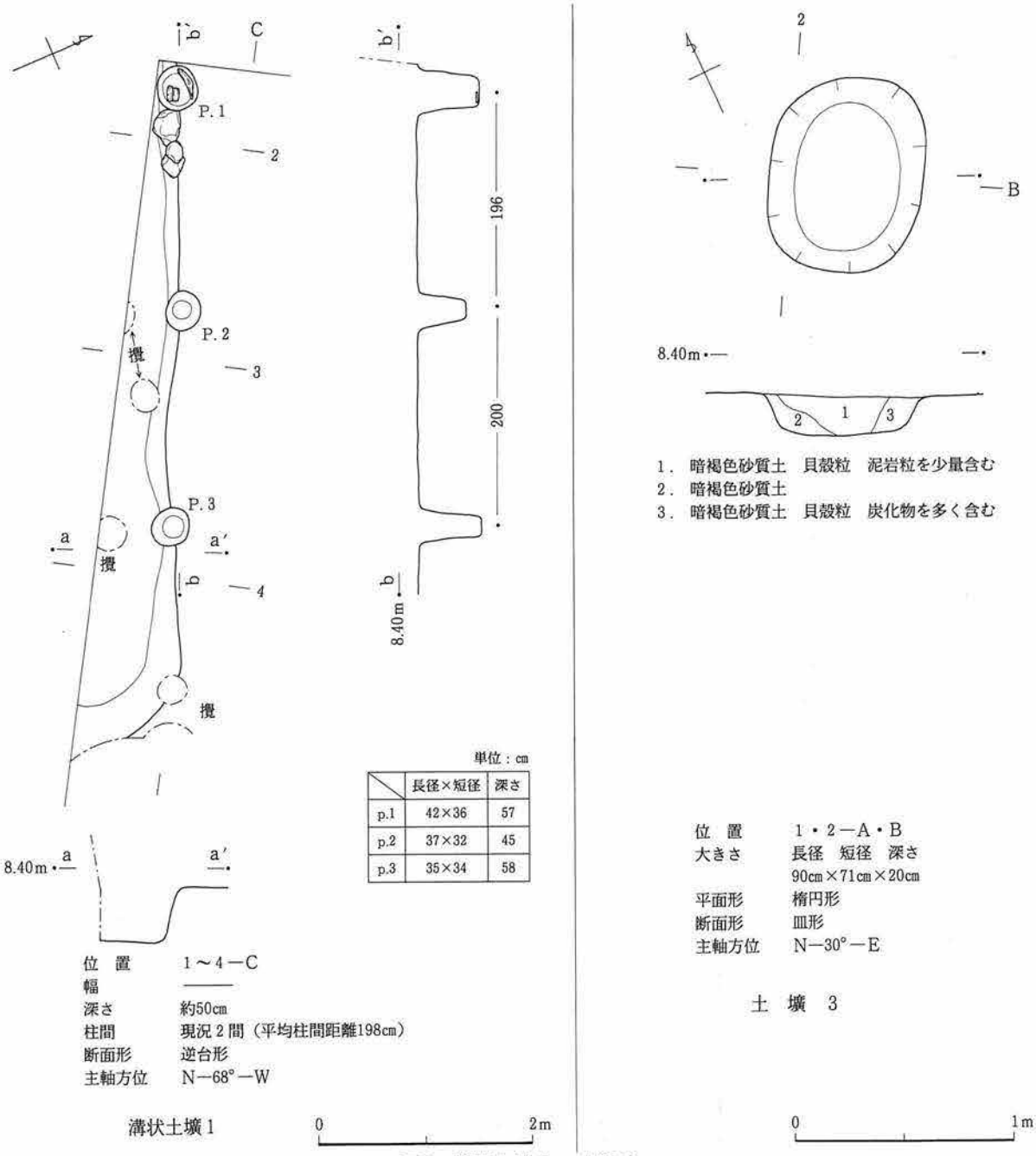


図8　溝状土壙1・土壙3

る。最大幅約45cm、深さ約50cm。北側の落ち込み肩にかけ、柱穴が三つ並んで検出された。平均柱間距離は198cm。

土壙3（図8）

調査区北西隅2－B付近にある、楕円もしくは隅丸長方形の土壙。長径90cm、短径70cm、深さ18cm、皿形の断面をもつ。Ⅰ－a面の貝殻砂粒面で検出した。埋土層内にも貝殻粒が多く含まれていた。

土壙4（個別図略）

6－A・Bに位置する。長径91cm、短径54cm、深さ19cmの隅丸長方形の土壙。形状、規模、 軸方位ともに土壙3と似通っているが、検出面が失われていたため同時期のものであるかどうかは不明。

土壙5（個別図略）

6－Bにある。南半分は攪乱に切られて消滅。残存径約138cm、深さ22cm。

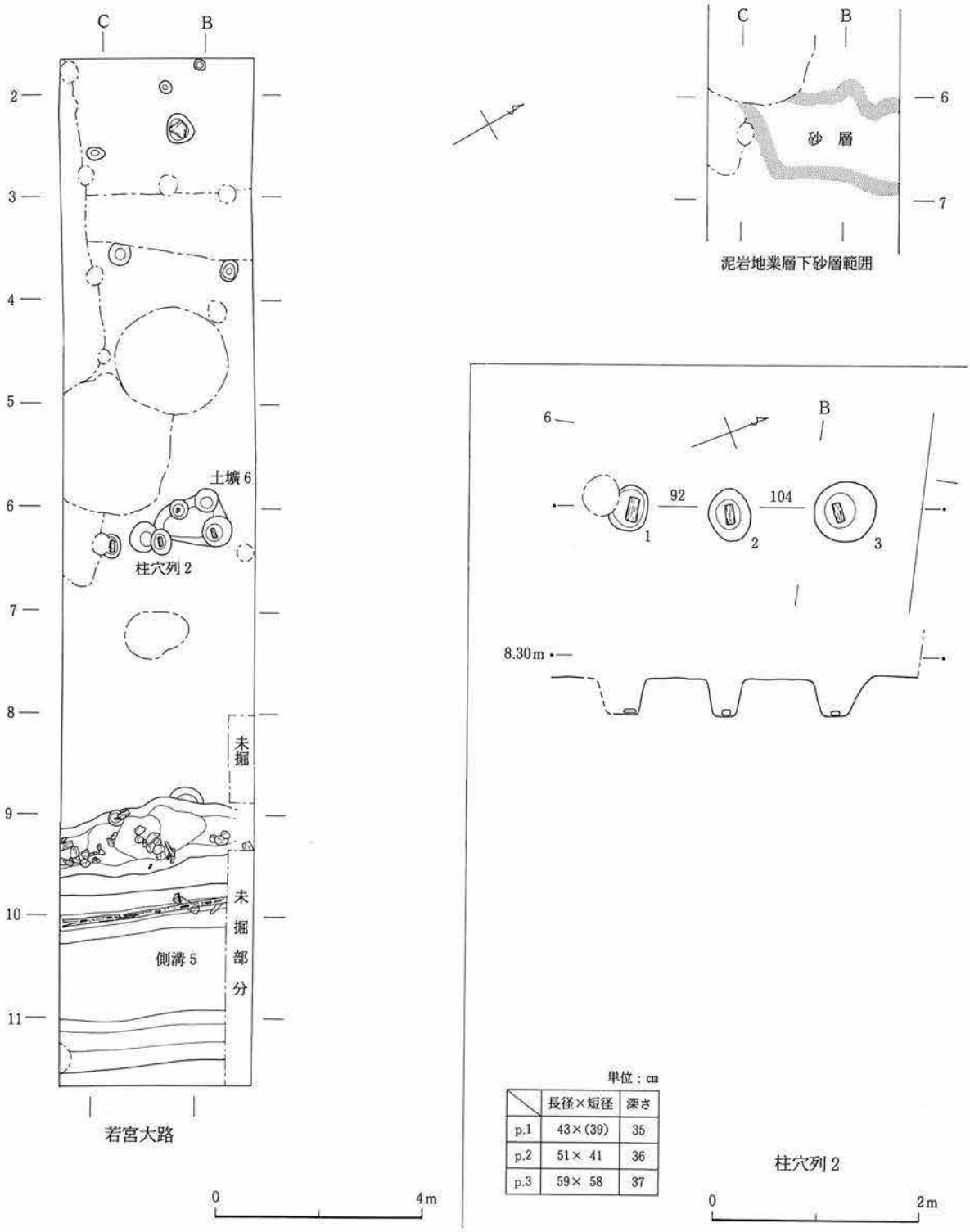


図9　2面遺構全図・柱穴列2

3．2面

若宮大路側溝5（図10）

上端は土層断面から復元した。規模・構造ともに側溝4と共通している。最大幅353cm、深さ70～101cm（推定）。側溝西側に掘り込まれた溝状の付帯施設については、部材が具体的な構造を保持した形のままでは検出できなかったが、1面側溝4の裏込めと同様の構造であった可能性は高い。ただ側溝4に比べると造りが粗略に見え、また凝灰岩（「鎌倉石」）を多用している点が異なる。側溝本体としては、西脇側の小溝内に木枠の根太材（図33）の他、用途不明の板材が数点見つかった。

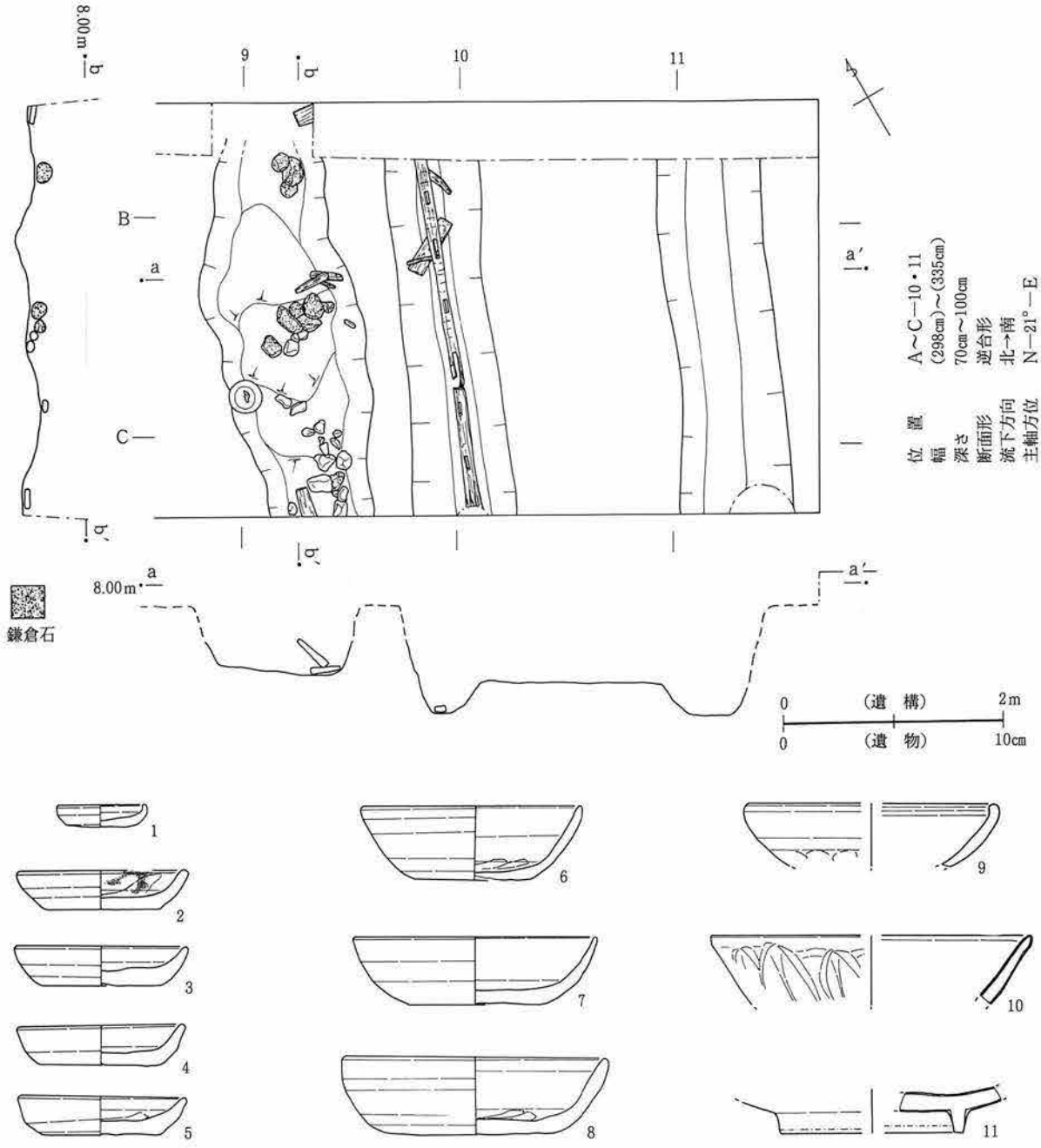


図10 若宮大路側溝５・同出土遺物

出土遺物にはＲ種土師器・白色系Ｔ種土師器・竜泉窯青磁蓮弁文碗などがある。

柱穴列２（図９）

６－Ａ・Ｂにある南北３口の柱穴列。深さは35～37cmで、いずれも礎板が敷かれている。平均柱間距離は98cmと短い。主軸方位は側溝とほぼ平行している。

土壙６（個別図略）

６－Ａ・Ｂにある。平面形は細長い隅丸３角形。長径約142cm、短径約86cm、深さ約30cm。逆台形の断面をしている。

泥岩地業層下砂層（図９）

泥岩版築層をはがすと帯状に広がった厚さ10cm程度の砂層が見つかった（６－Ａ～Ｃ、図８右上アミ目部分)。性格は不明だが、その直下の３面からは不整楕円形をした集石遺構が検出されている。２面と３面とで層は異なるが、砂層が集石遺構の範囲は一致している。また砂層直上には南北方向の柱

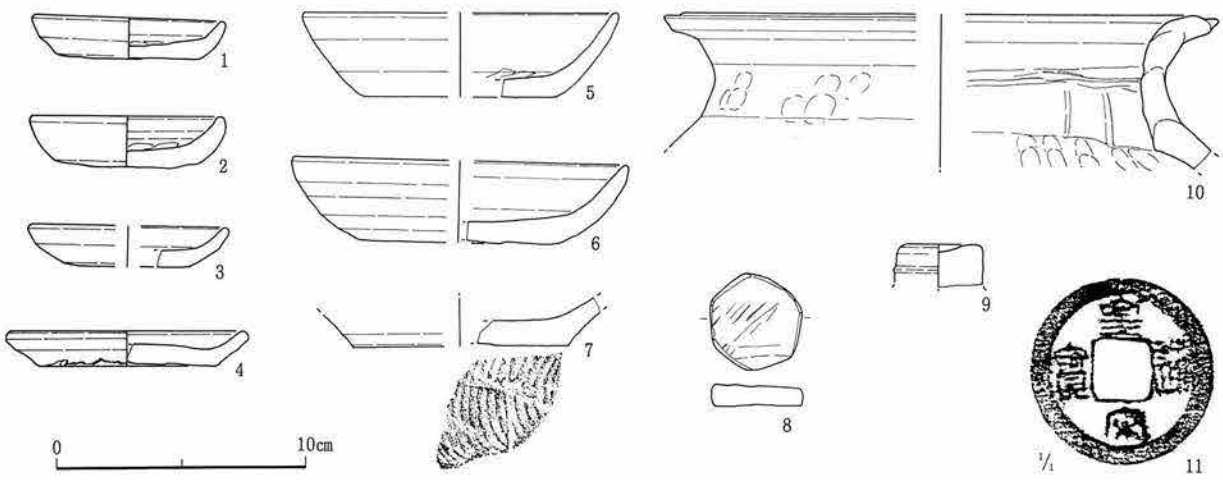


図11　2面上包含層出土遺物

穴列がある。砂層はちょうど柱穴列を境に以西が消滅しており、両者は関連施設である可能性があろう。

2面上包含層出土遺物（図11）

土師器R種のほか常滑甕口縁部・土製品・宋銭などがある。7の土師器底部は静止糸切、10の常滑は縁帯のつく以前のもので、ともに鎌倉時代初期に属す。混入だろう。

4．3面

若宮大路側溝6（図13）

北壁土層断面（図34）から、側溝は中世以後、把握できただけでも7度掘り直されているのがわかる。側溝6も下部を残すのみで、そのほとんどが後世の遺構により削られてしまっている。

幅293～313cm、深さ626～101cm（推定）、断面はほかの側溝と同様箱型をしていたと想像できる。東脇の小溝内からは、木枠の部材と側板らしき板材が3点見つかった。側溝西側にあたる9軸付近にそって、大型の礎板や柱穴が並んでいる。上部を失っているが柵列または塀のようなものとみられ、この点で構造的には側溝の付帯施設であった1・2面のものとは大きく異なる。本址の属する3面の以前と以後とで、若宮大路側溝は大きく様変わりしたことになる。

出土遺物には土師器R種・漆器椀・丸瓦などがある。溝木枠角材は図33に示した。

若宮大路側溝7（図14・15・16）

側溝7は本調査で検出された最も古い側溝で、鎌倉時代中期～後期のものと推測できる。これ以前の側溝としては、中世4面に伴うものがあったと想定できるが確認できなかった。上端は後世の遺構によって削り取られている。また土層断面を見ると、側溝7はそれ以後の側溝に比べて西側へ拡がっている。

幅330～349cm、深さ93～110cm（推定）、箱型の断面形をもつ。覆土中には、土師器片、貝殻粒、木片などが多量に含まれていた。特に最下層では、繊維質の腐食した馬糞のような明黄色土や灰黒色の砂層が堆積している。西脇側の小溝の中には木枠の部材が据えられ、東側の小溝からは、杭とそれに伴った柱穴らしきものが2箇所見つかった。杭の大きさは、長さ約8cm、幅約4cm、高さ34～64cm以上である。おそらく、これらの杭は木枠の東外側に打ち込まれていたもので、溝枠の簡単な補強材として用いたと推測される。側溝西側の柱穴列では、柱根が遺存していたり、礎板が幾枚にも重ねられた柱穴などが検出された。これらは、先述した側溝6に伴う柱穴列と同じ性質のものであろう。

ここからは大量の土師器R種のほか、竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗や常滑片口Ⅰ類・漆器類など、この時代を特徴付ける多彩な出土遺物があった（図14～16・33）。

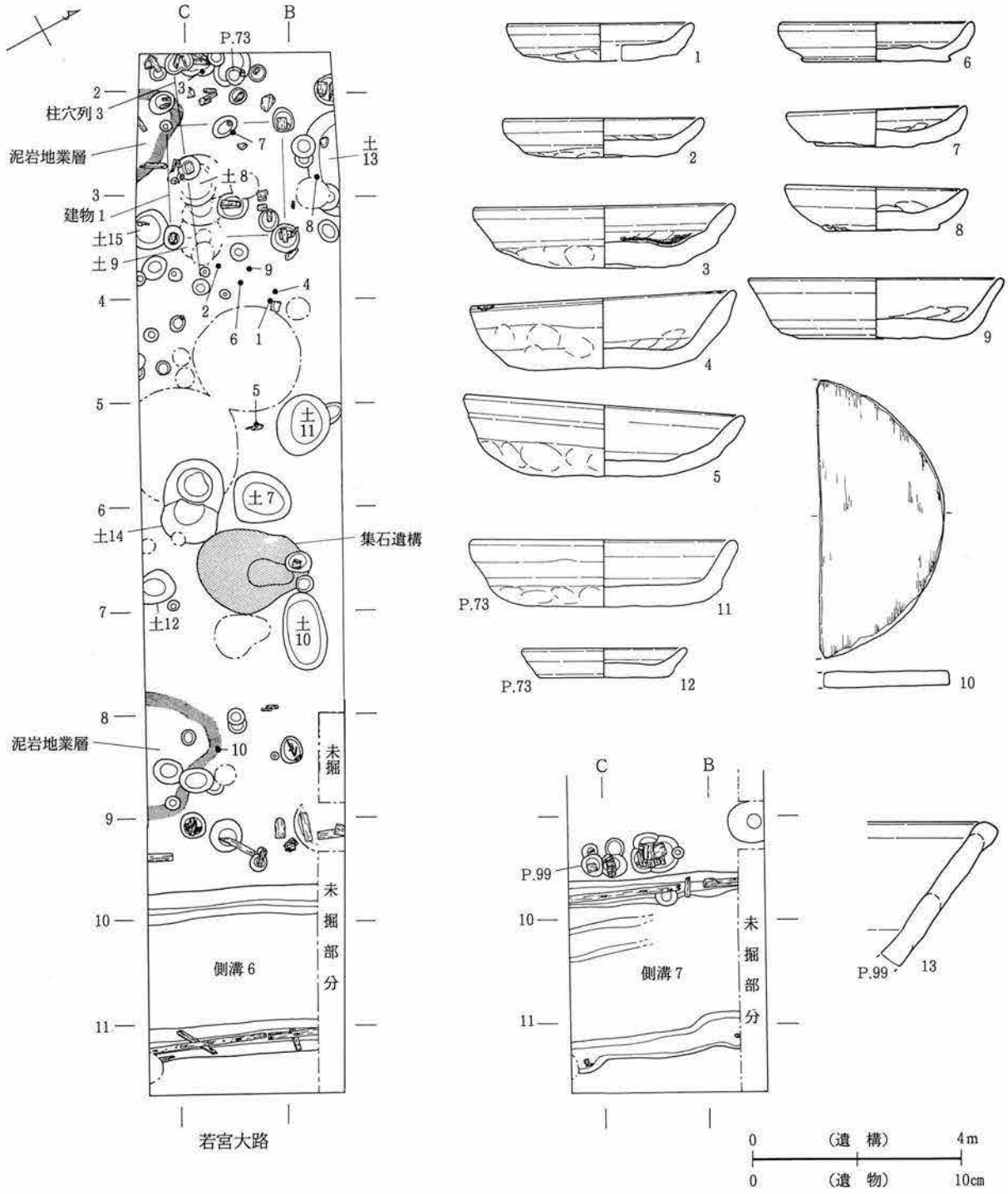


図12　3面遺構全図・同面上出土遺物・同小穴出土遺物

土壙7（図17）

集石遺構の西隣、5・6－Bに位置する不整楕円形の土壙。長径107cm、短径96cm、深さ26cmほどの浅い皿形の断面をもつ。埋土中には炭化物、貝殻粒、ローム粒などが含まれ、3面上包含層と共通する。層位的には3面の最上部に属する。

出土遺物には古手のR種やT種土師器・転用円盤などがある。

土壙8（図18）

後述の土壙9とともに、直下にある4面の井戸3（図18）掘削中に土層断面観察により検出したため、2・3－B・Cにあっても、遺構の全容は把握できなかった。直径（または幅）135cm、深さ113cm。下半部が円筒形で上部東側が鉢状に拡がっている。底面には漆喰が厚さ2～3cmに堆積しているが、均等

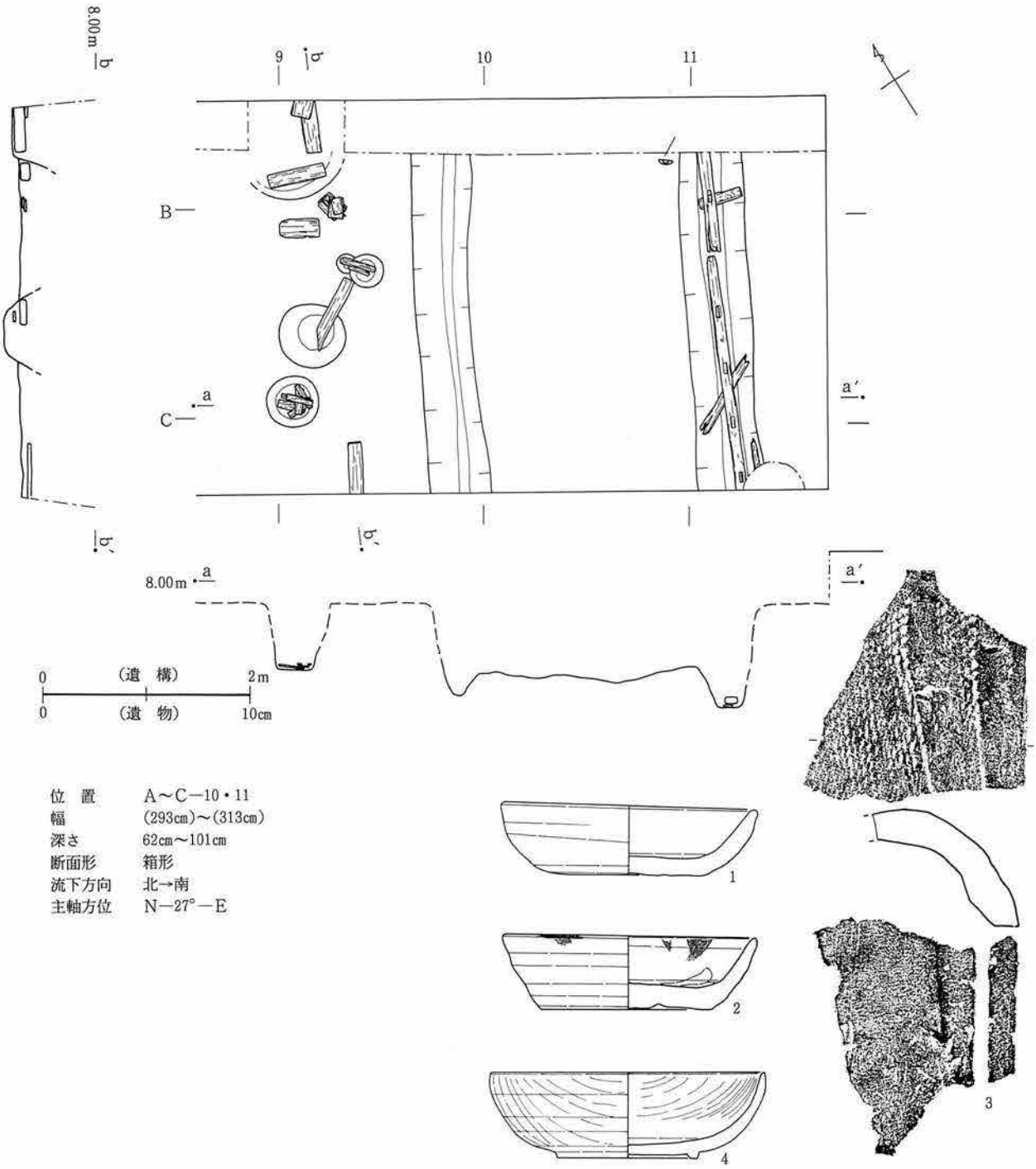


図13　若宮大路側溝６・同出土遺物

であるところから人為的に敷かれたものである可能性がある。覆土は下半部で泥岩、木片、炭化物の多い暗灰色粘質土で、全体として水分を大量に含んだとても軟らかい土である。赤褐色粘質土から切りこまれた様子が見られるので、３面でも後期に属する。ウリ科の種子など、便所らしい出土遺物もなく、性格不明。

土師器Ｒ種・Ｔ種が多く出ているほか、同安窯系青磁など全体に鎌倉前期に属する遺物がみられる。箸状木製品など木器も多い。

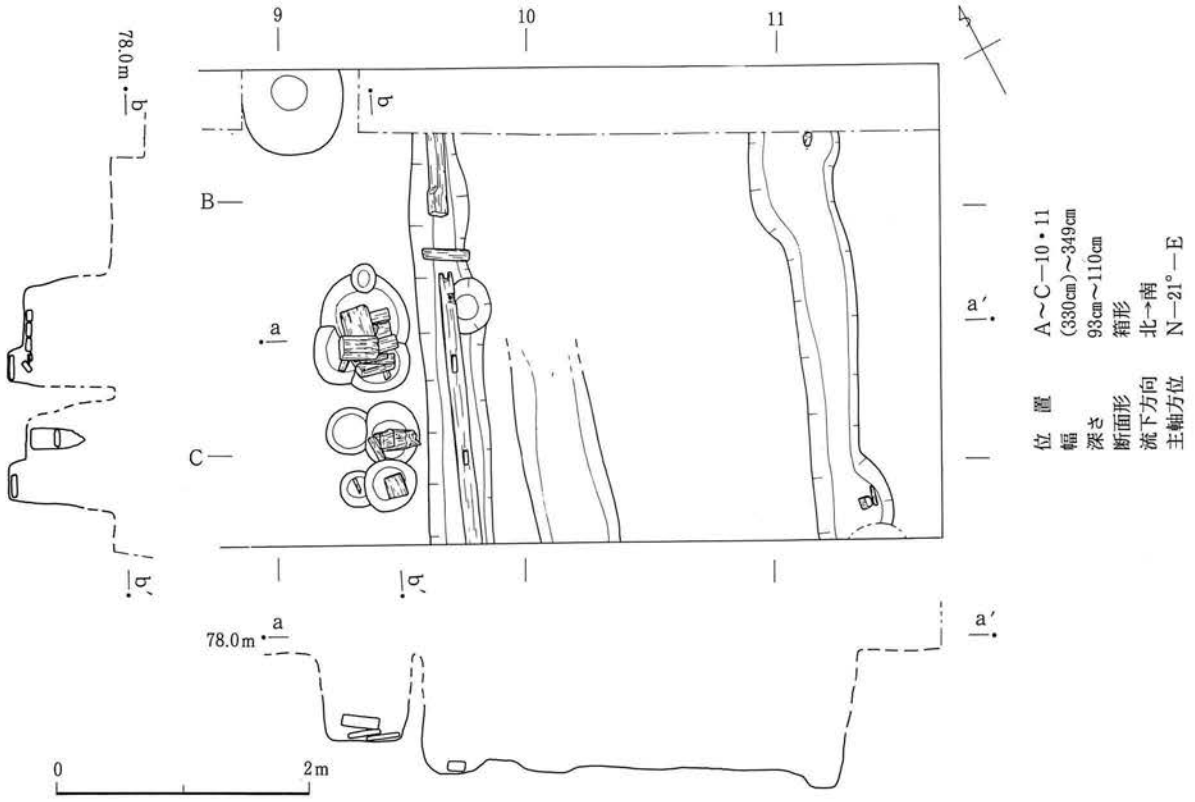


図14　若宮大路側溝７

土壙９（図18）

検出経過は土壙８と同じなので、断面形のみの確認となる。土壙８に切られているが、ほぼ同時期とみてよかろう。径（または幅）106cm、深さは118cmと深いが、平面形が円形であったかどうかは不明。覆土は貝殻粒や炭化物、ロームブロック、木片等が含まれた軟らかい黄茶褐色粘質土。これも性格不明。

出土遺物には古手の土師器Ｒ種や木製品・竜泉窯青磁画花文碗などがあり、やや古相を示す。

土壙10（図17，遺構個別図略）

調査区北壁際の、６・７－Ａ・Ｂに位置する。集石遺構の北東に隣接しているが、本址が新しい。146×79cm、深さ41cmの逆台形の断面をもつ。出土遺物の渥美壷のみ提示する。

土壙11（図17）

４・５－Ａ・Ｂに位置する不整楕円形土壙。長径118cm、短径100cm、深さ29cmと浅く、断面は皿形。覆土の暗褐色粘質土、赤褐色粘質土の中には、泥岩塊やローム粒が多量に含まれている。層位的には土壙７と同時期に属する。竜泉窯青磁画花文碗が出土している。

土壙12（個別図略）

６－Ｃの南壁際にかかって検出された楕円形の土壙。長径約80cm、短径60cm、深さ31cmの逆台形の断面をもつ。層位的には古く、集石遺構と同じ３面前期のものであろう。

土壙13（個別図略）

２・３－Ａの北壁際で部分的に検出された隅丸方形土壙。確認された径は204cm、深さ45cmの逆台形の断面をもつ。焼け焦げた木片が多数散らばった炭面の下から検出した遺構なので３面前期のものといえるが、全容が明らかでないため詳細は不明。

土壙14（図17）

５・６－Ｂ・Ｃに位置する、長径160cm、短径104cm、深さ209cmと井戸並みの深さをもつ土壙。東側

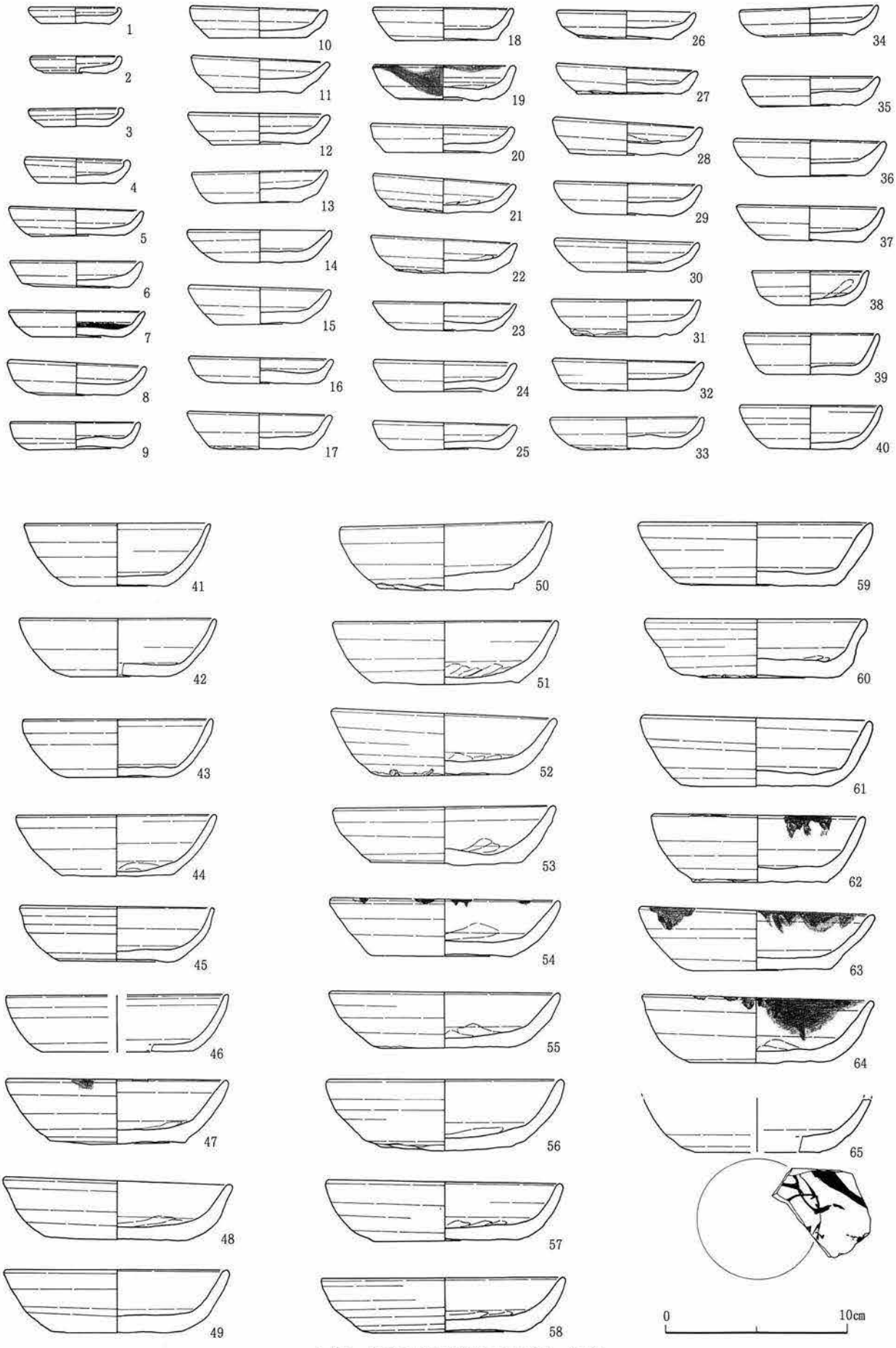


図15　若宮大路側溝７出土遺物（１）

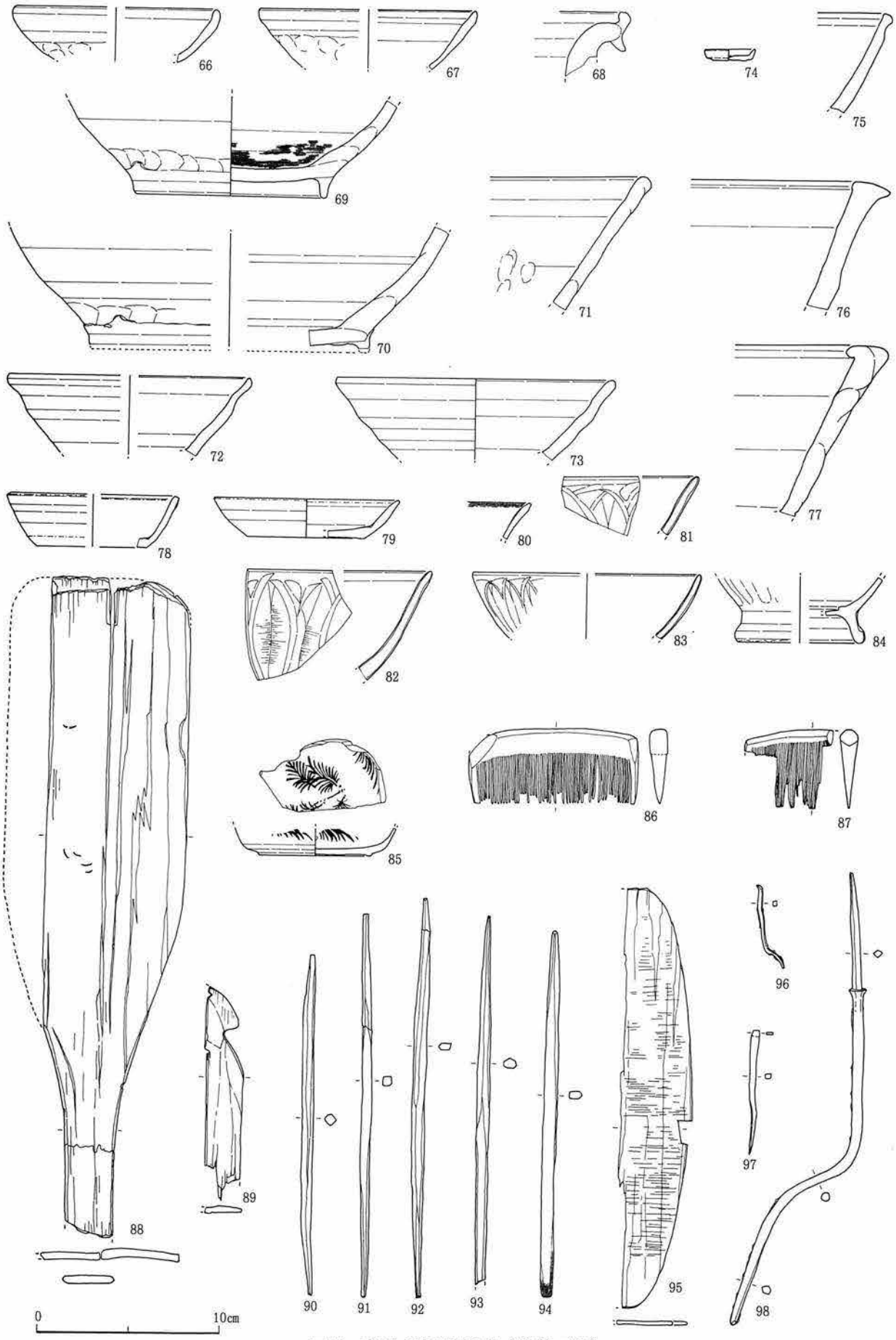
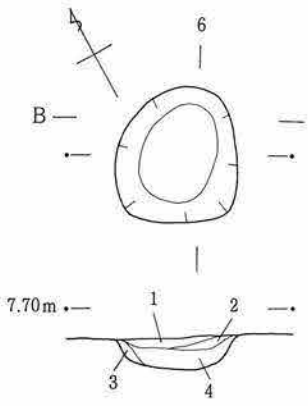
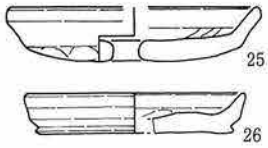
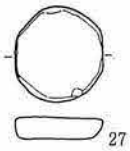


図16　若宮大路側溝７出土遺物（２）



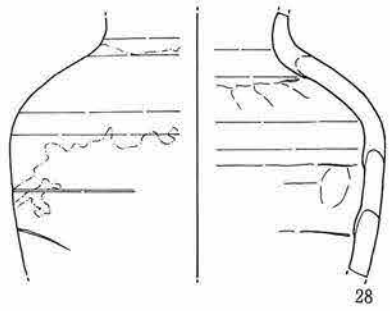




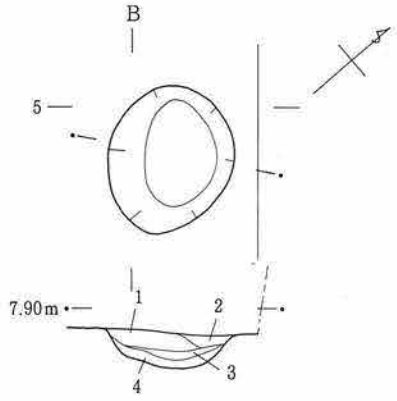
位　置　　5・6－B
大きさ　　長径　短径　深さ
　　107cm×96cm×26cm
平面形　　不整楕円形
断面形　　皿形
主軸方位　N－65°－E

1．暗茶褐色粘質土　炭化物含む
2．黄灰色砂質土　　貝殻粒含む
3．暗褐色粘質土　　土丹粒・遺物含む
4．暗褐色粘質土　　ローム粒含む

土　壙　7

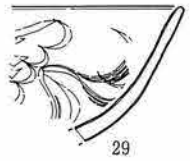


土　壙　10

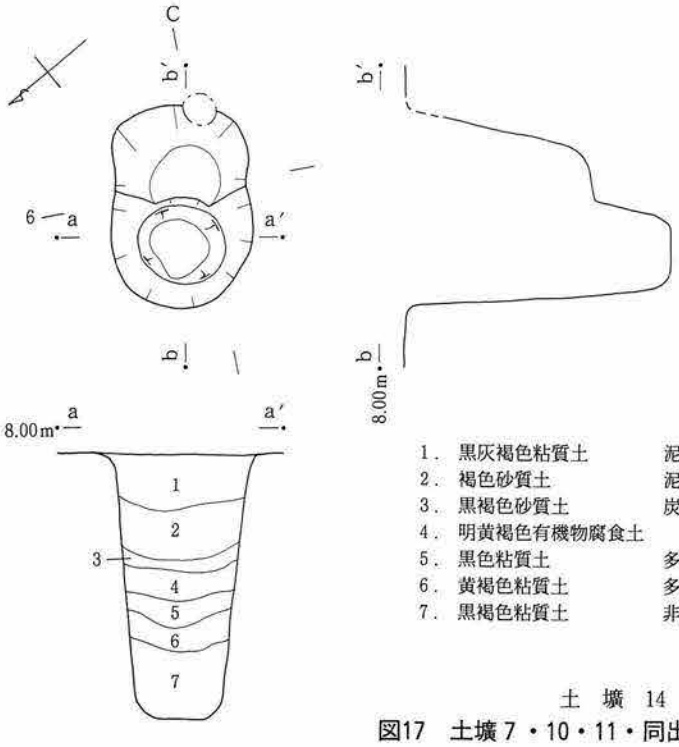


位　置　　4・5－A・B
大きさ　　長径　短径　　深さ
　　118cm×100cm×29cm
平面形　　不整楕円形
断面形　　皿形
主軸方位　N－56°－W

1．暗褐色粘質土　　泥岩ブロックを多量に含む
2．赤褐色粘質土
3．暗褐色粒質土　　ローム粒　炭化粒混入
4．暗褐色粘質土



土　壙　11



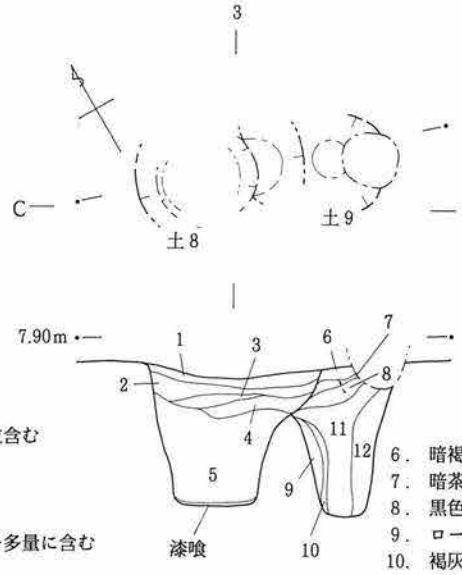
位　置　　5・6－B・C
大きさ　　長径　短径深さ
　　160cm×104cm×209cm
平面形　　楕円形が二つ重なる
断面形　　東側に段のついた筒形
主軸方位　N－46°－W

1．黒灰褐色粘質土　　泥岩ブロック　炭化物　木片含む
2．褐色砂質土　　泥岩粒含む
3．黒褐色砂質土　　炭化物含む
4．明黄褐色有機物腐食土
5．黒色粘質土　　多量の炭化物　木片含む
6．黄褐色粘質土　　多量の腐食木片含む
7．黒褐色粘質土　　非常に柔らかい　含有物なし

土　壙　14

図17　土壙7・10・11・同出土遺物・土壙14

位　置　　2・3－B・C
大きさ　　残存径　深さ
　　(135cm)×113cm
平面形　　――
断面形　　東側に鉢状の段がつく箱形
主軸方位　N－105.5°－E



位　置　　2・3－B・C
大きさ　　残存径　深さ
　　(106cm)×118cm
平面形　　――
断面形　　筒形
主軸方位　N－112°－E

1．暗褐色粘質土　多量の貝殻粒　泥岩粒含む
2．暗褐色粘質土　炭化粒含む
3．褐灰色粘質土柔らかい土
4．茶褐色粘質土　ロームブロック混入
5．暗灰色粘質土　泥岩　木片　炭化物を多量に含む
6．暗褐色粘質土
7．暗茶色弱粘質土　多量の貝殻粒を含む
8．黒色粘質土　若干の木片　貝殻粒混入
9．ロームブロック
10．褐灰色粘質土　若干の貝殻粒混入
11．黄茶褐色粘質土　ロームブロック　炭化物を多く含む
12．褐灰色粘質土　炭化物を多く含む

※ 土層断面観察により検出した
　土壙なので南北の大きさは不明

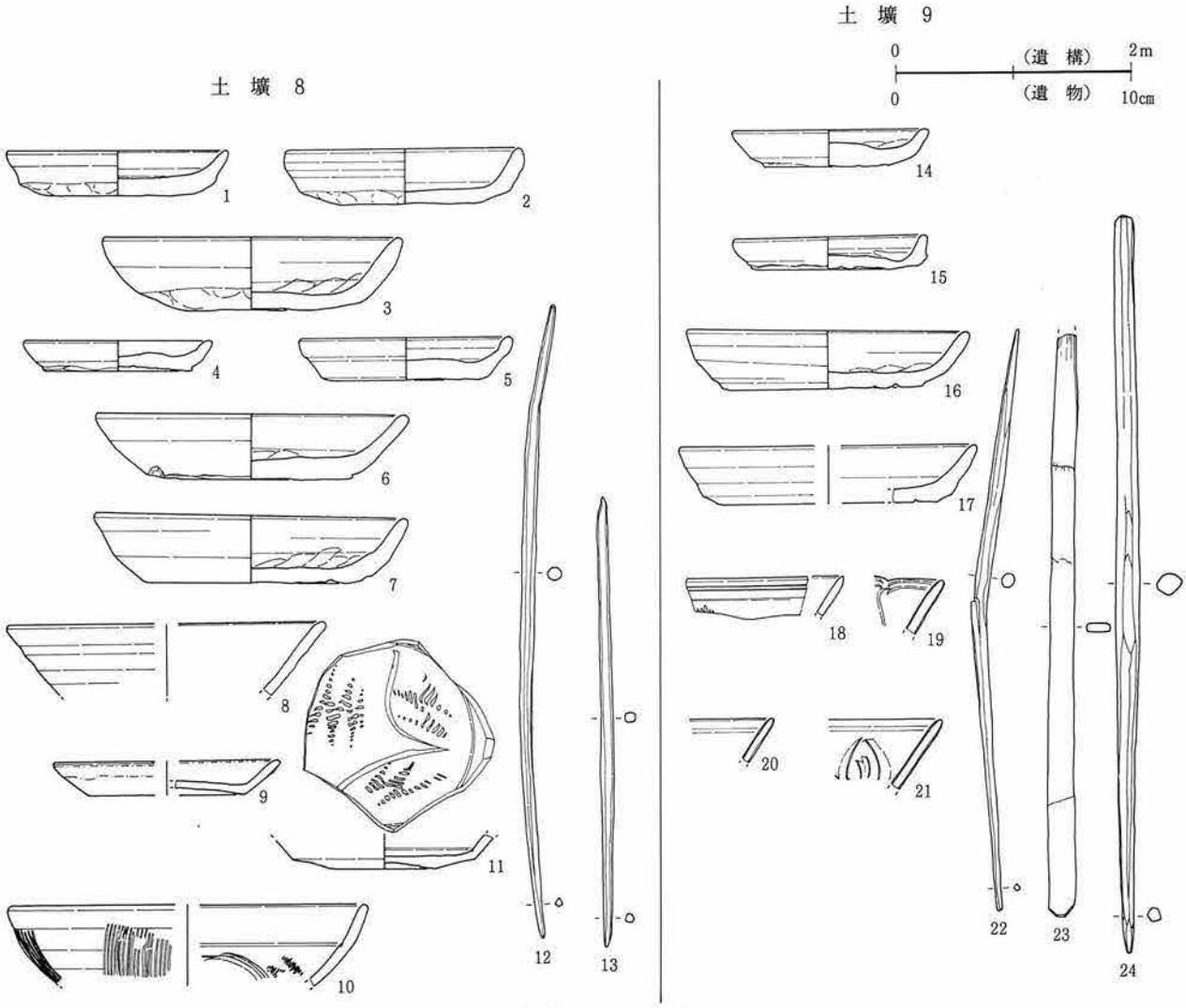


図18　土壙8・9・同出土遺物

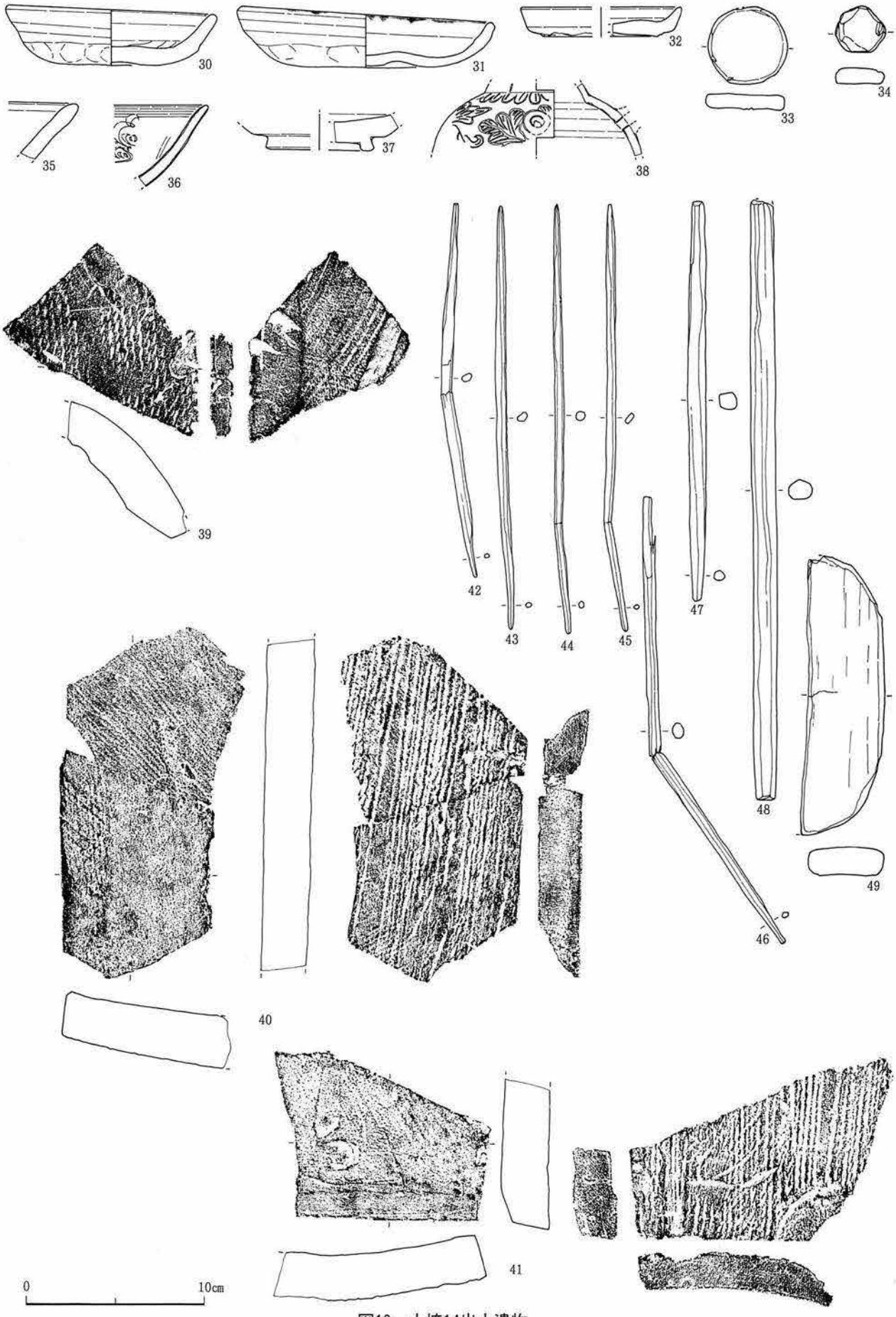
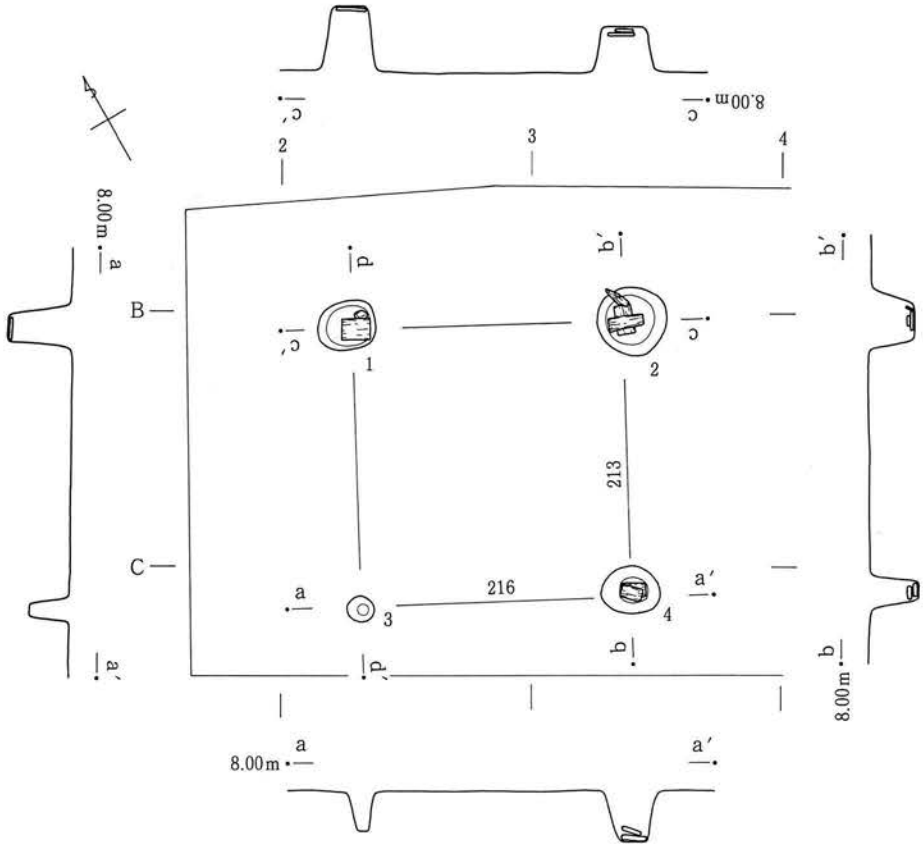


図19　土壙14出土遺物

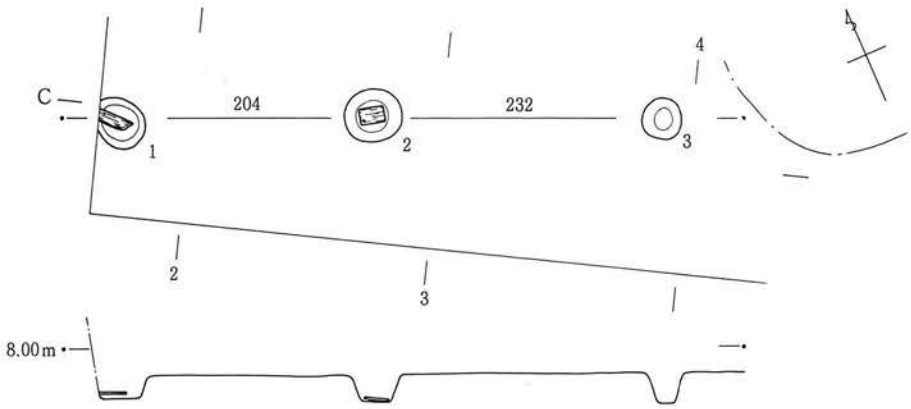


位　置	2・3－B・C
規　模	現況1間(2.1m)×1間(2.1m)
面　積	4.6㎡
南北軸方位	N－28°－E
柱穴形状	円形　楕円形

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	46×38	52
p.2	55×54	37
p.3	22×20	31
p.4	47×38	40

建物 1



概　要	東西方向の柱穴列
位　置	1～3－B・C
柱　間	現況2間（平均柱間距離218cm）
主軸方位	N－66°－W

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	(45)×38	19
p.2	46 ×42	21
p.3	32 ×32	37

柱穴列3

0　（遺　物）　10cm
0　（遺　構）　2m

図20　建物1・柱穴列3　同出土遺物

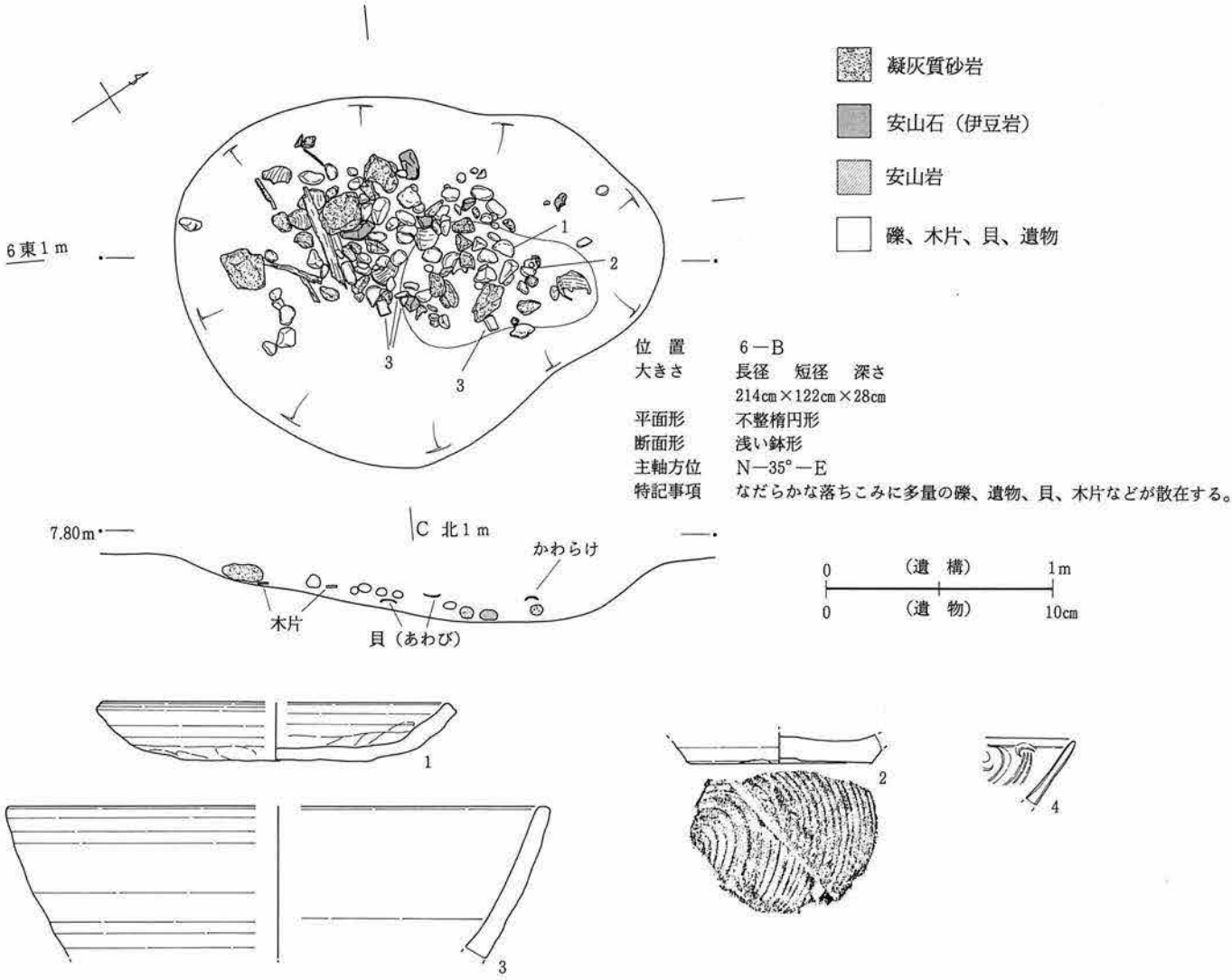


図21 集石遺構 同出土遺物

下部に段を有する。段までの深さは148cm。西側は上部が近世井戸に削り取られていたが、はっきりとした筒型の断面形を残す。覆土上層には泥岩ブロックや泥岩粒が混入した固い土が堆積していたが、中層まで下がると植物質の腐食土となり、底部近くになると含有物の少ない、水分を多く含んだ黒褐色粘質土が堆積している。形状は便所遺構を思わせるが、遺物の上からは確証が得られなかった。層位的には土壙7や11と同時期で3面の中でも後期に属する。

出土遺物には土師器R種・T種のほか、渥美・竜泉窯青磁画花文碗・青白磁水注・鎌倉時代初期（永福寺Ⅰ期）の平瓦など、鎌倉時代前期までのものが多い。

土壙15（個別図略）

3－Cの南壁にかかって検出された、楕円形の土壙。確認径70cm、深さ41cmの逆台形の断面をもつ。上層で焼けた木片がいくつか見つかっていることから、3面前期の遺構とみてよい。

建物1（図20）

Ⅰ区西側の2・3－Bにある掘立柱建物である。現況では1間×1間だが、調査区外に延びている可能性がある。南北軸方位はN－28°－Eで、若宮大路側溝とほぼ平行に建っている。層位的には古く、3面前期に属する。北西のP.1から13世紀前半代の常滑甕が出土している。

柱穴列3（図20）

Ⅰ区西側1～3－B・Cに位置する東西方向の柱穴列で、現況では2間確認された。平均柱間距離は

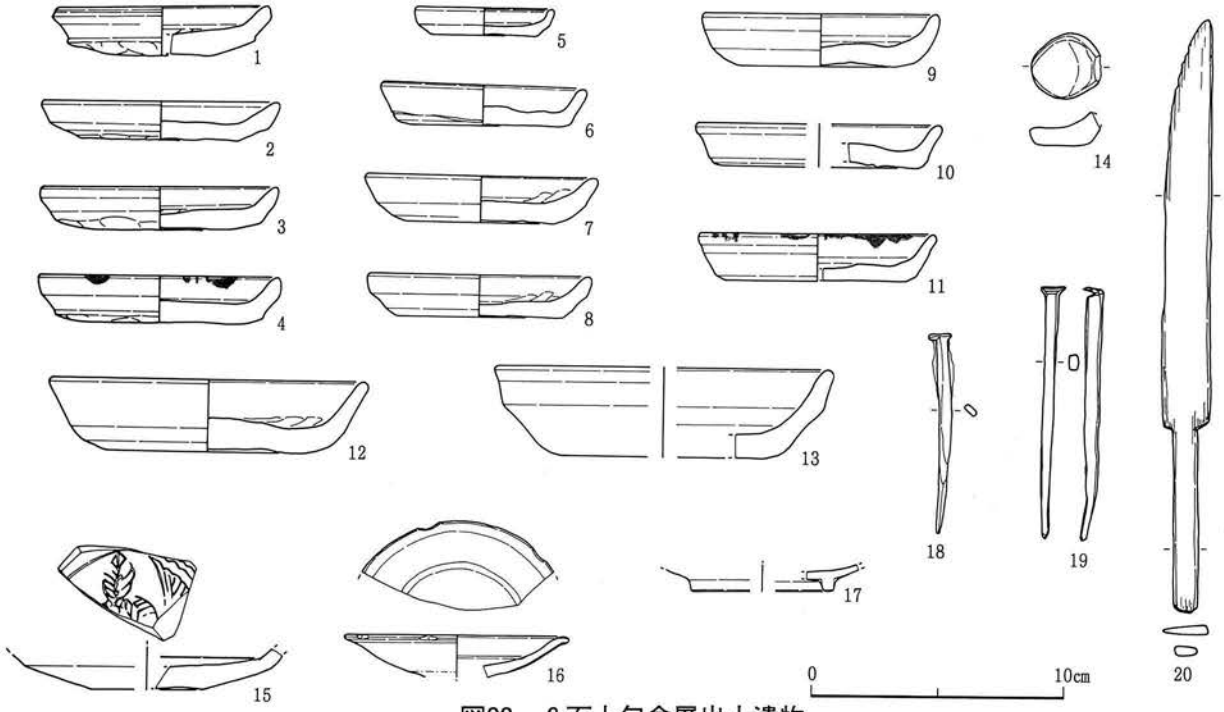


図22　3面上包含層出土遺物

218cm。 直径32～46cm、深さ25cm前後の柱穴が三つ並んでいる。主軸方位はN－66°－Wと、側溝に対してほぼ垂直に走っている。建物1と重なって検出されているのがわかるが、層位的には柱穴列の方が新しい。

集石遺構（図21）

ほぼ調査区の中央、若宮側溝から約5m西に、大量の石と遺物が入った不整楕円形の浅い落ち込みが検出された。規模は、長径214cm、短径122cm、深さ28cmで断面は皿状。石のうちでは数量的に礫（玉石）、凝灰質砂岩（鎌倉石）が多く、他に安山岩や泥岩などが含まれていた。また焼けた木片や貝殻（主にあわび）、陶磁器等が、石に混じって多数出土している。詳細は不明だが、煮炊きの施設だろうか。層位的には、3面前期に属する遺構となる。出土の土師器は薄手のT種と静止糸切りのR種で、口縁端部を面取りしたこね鉢Ⅰ類，竜泉窯青磁画花文碗などとともに、本址が鎌倉時代前期に属することを示す。

3面上包含層出土遺物（図22）

土師器はR種を中心にT種も出土しており、前者は焼成がよく質量感のあるものが多い。青白磁の薄手の小皿・白磁皿など古式の様相を呈している。刀子・釘など鉄製品も出ている。

5．4面

溝2（図31）

大路側溝西側9－A～Cを南北に走る小溝。幅18～26cm。、深さ17cm。で逆台形の断面をもち、北から南へと流れる。主軸方位はN－21°－Eで、側溝とは4°のずれがあるものの、ほぼ沿って走行しており、付帯施設である可能性は十分にある。覆土として、貝殻粒や砂粒を多く含んだ暗灰褐色粘質土が二層に分かれて堆積していた。

井戸3（図24）

Ⅰ区西寄り2・3－B・Cにある方形の井戸。掘方一辺が168cm、深さ290cm。底面上20cmのところで井戸枠らしい板の断片が検出されたが、腐食が激しく、原形はうかがえない。土層断面で確認された痕跡では一辺は約70cmである。また中層辺りに、皿型の断面に沿って漆喰が堆積しており、埋没、または埋め戻し途中に落ち込みが転用された可能性があるが、詳細は不明である。本址廃棄後、覆土中に3面

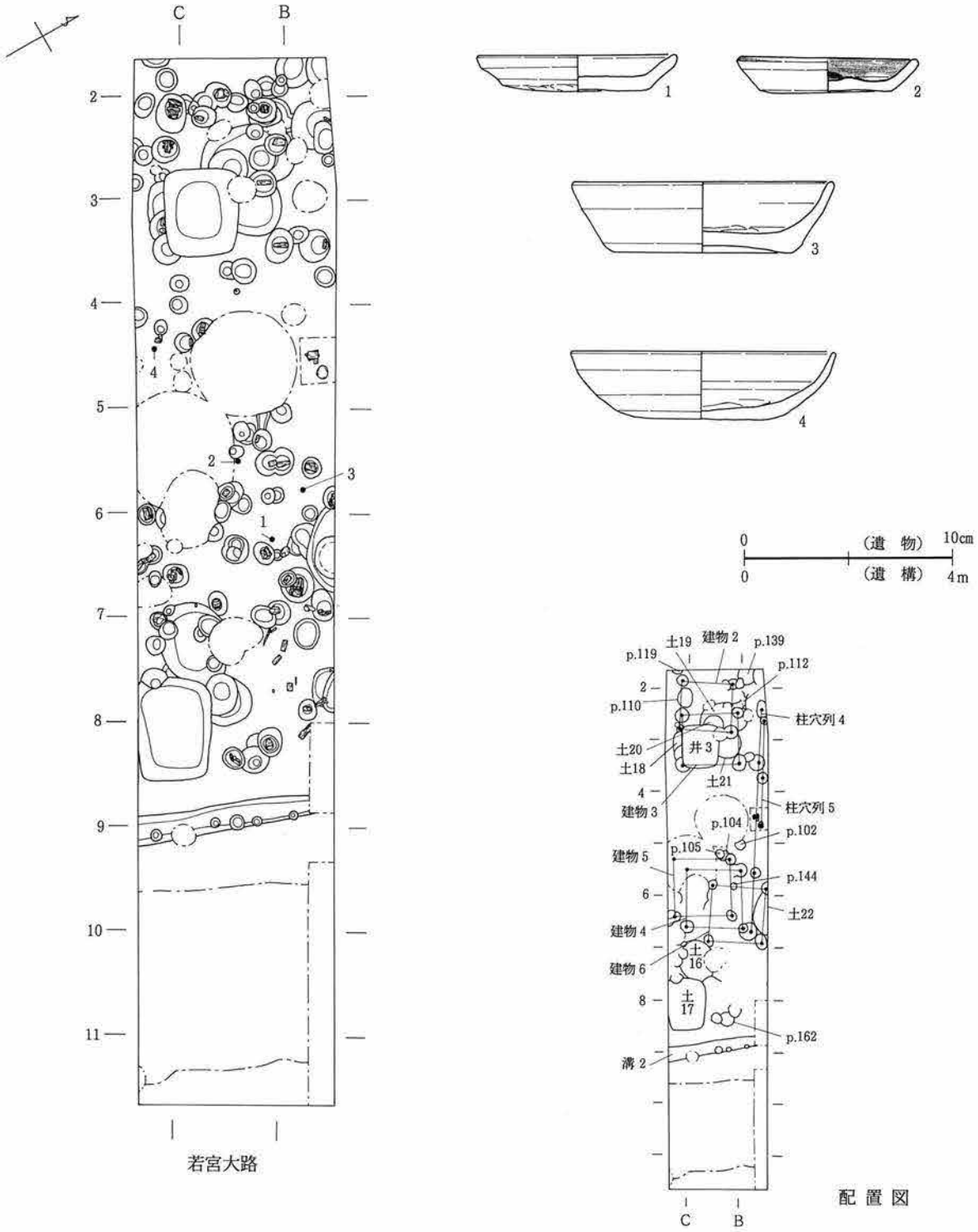


図23　4面遺構全図・4面上出土遺物

の土壙8・9が掘り込まれている。

出土遺物として大量の木製品のほか、渥美甕転用硯・竜泉窯青磁画花文碗がある。

土壙16（図25）

6・7－B・Cに位置する不整楕円形の土壙。長径161cm、短径124cm、深さ34cmの浅い皿形の断面をもつ。北側の落ち込み部に杭が一本打ち込まれているが、周辺面上からもいくつかの杭や杭穴が見つかっており、関連する可能性がある。また、多数の柱穴に切り込まれていることから、層位的には4面の中でも古い一群に属する。

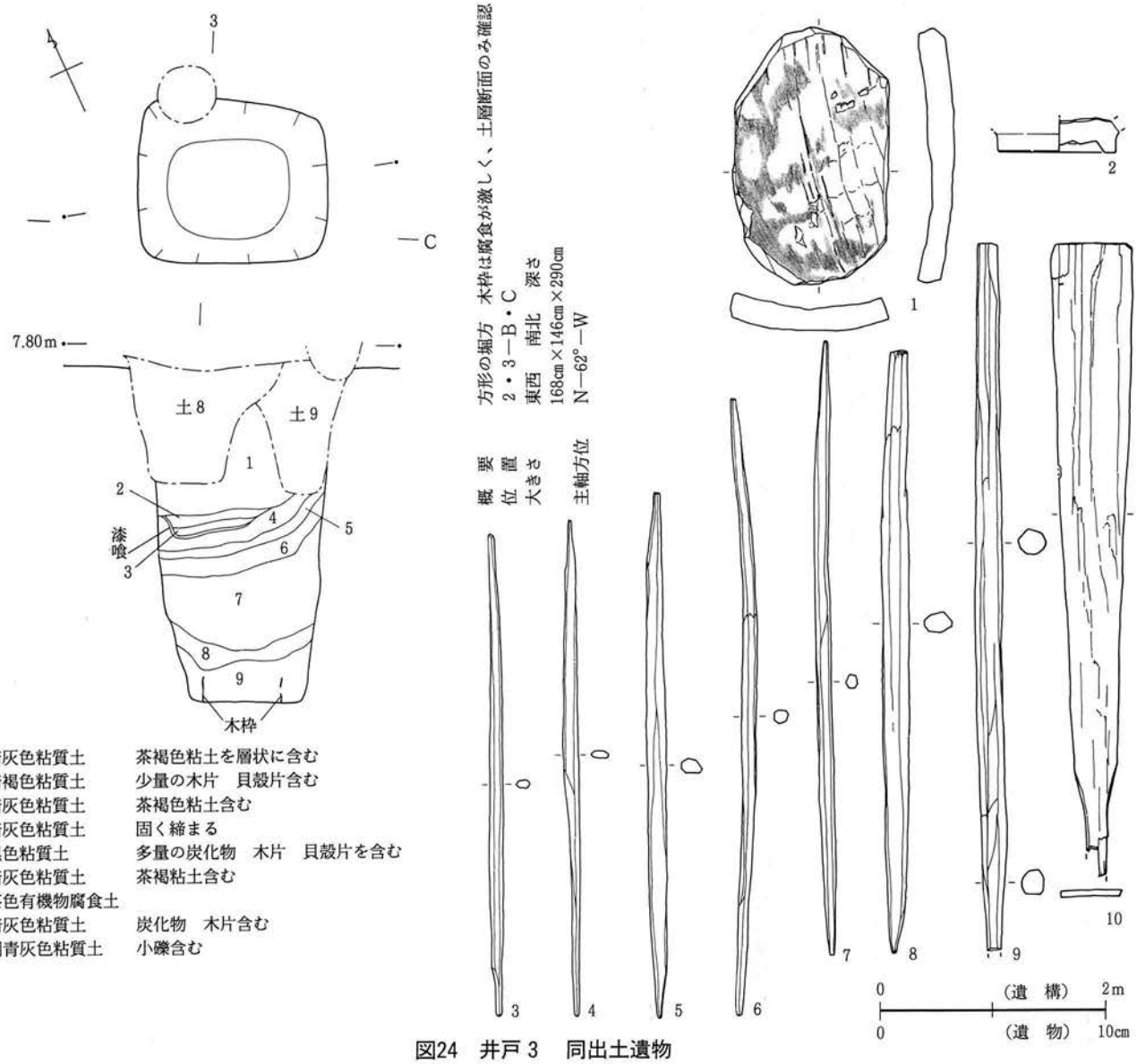


図24　井戸３　同出土遺物

土壙17（図17）

Ⅰ区とⅡ区にまたがって検出した、長方形で断面箱型の整った形状をした土壙。長径201cm、短径130cm、深さ77cmと規模が大きい。土壙中には、馬糞に似た非常に柔らかな有機物腐食土が厚く堆積していた。出土遺物には土師器Ｔ種と古式のＲ種・鎌倉時代前期様式の常滑甕・漆器椀などがある。

土壙18（図26）

Ⅰ区南壁沿い２・３－Ｂにある隅丸長方形もしくは楕円形の土壙。上層の柱穴に東側が削り取られているため、長径は不明。短径71cm、深さ30cm、皿形の断面をもつ。覆土中層に薄い炭層が堆積している。炭化物・木片・貝殻粒が多い。層位的には井戸３と同時期。

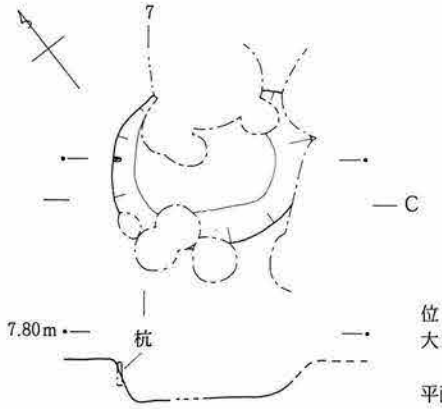
土壙19（図26）

２－Ａ・Ｂにある隅丸長方形もしくは楕円形の土壙。長径187cm、短径122cm、深さ39cmの逆台形の断面をもつ。土壙20を切るが、井戸３との新旧関係は明瞭には確認できなかった。

出土遺物としてはＴ種・Ｒ種の土師器がある。

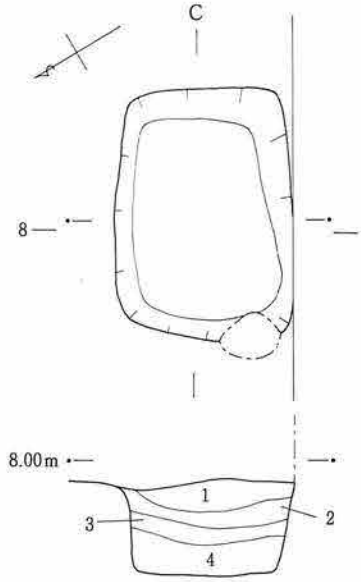
土壙20（図26）

同じく2－Ｂに位置した円形の土壙で、土壙19の底部から見つかった。長径75cm、短径68cm、深さ66cm

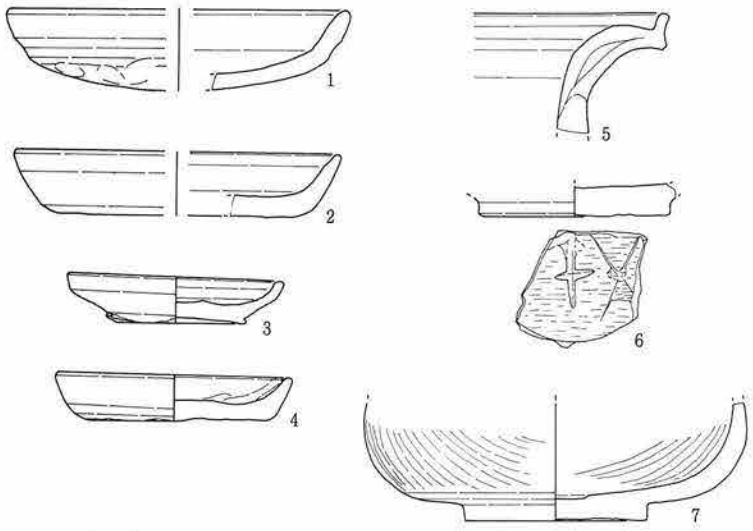


位　置　6・7－B・C
大きさ　長径　短径　深さ
161cm×124cm×34cm
平面形　不整楕円形
断面形　船底形
主軸方位　N－56.5°－W

土壙 16

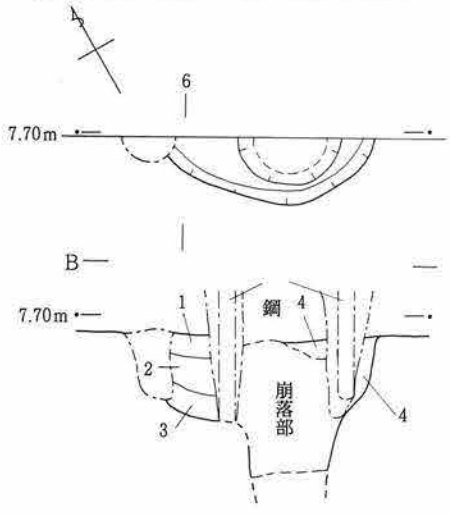


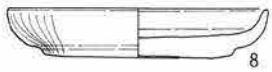
1．灰青色砂質土　貝殻粒多く含む
2．茶褐色有機物腐食土
3．灰褐色繊維質土　3に砂が混じる
4．茶褐色繊維質土　3と同質



位　置　7・8－B・C
大きさ　長径　短径　深さ
201cm×139cm×77cm
平面形　長方形
断面形　箱形
主軸方位　N－61.5°－W

土壙 17

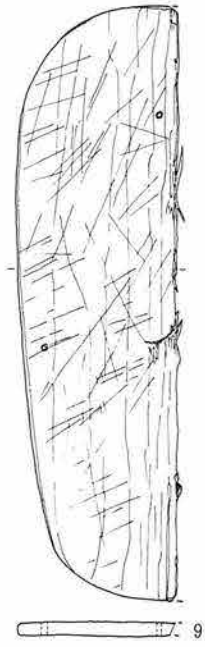




位　置　5・6－A
大きさ　長径　短径　深さ
(172)cm×—×114cm以上
平面形　(楕円形、内部に円形の落ち込みあり)
断面形　深皿形と筒形？の二段重ね
主軸方位　N－59.5°－W
特記事項　中央部円形の落ち込みは崩落が激しいため未完掘

1．暗茶灰色粘質土　貝殻片多く含む
2．暗灰褐色粘質土
3．暗灰褐色有機物腐食土
4．暗灰褐色粘質土　粘性強

土壙 22



0　(遺構) 2m
0　(遺物) 10cm

図25　土壙16・17・22　同出土遺物

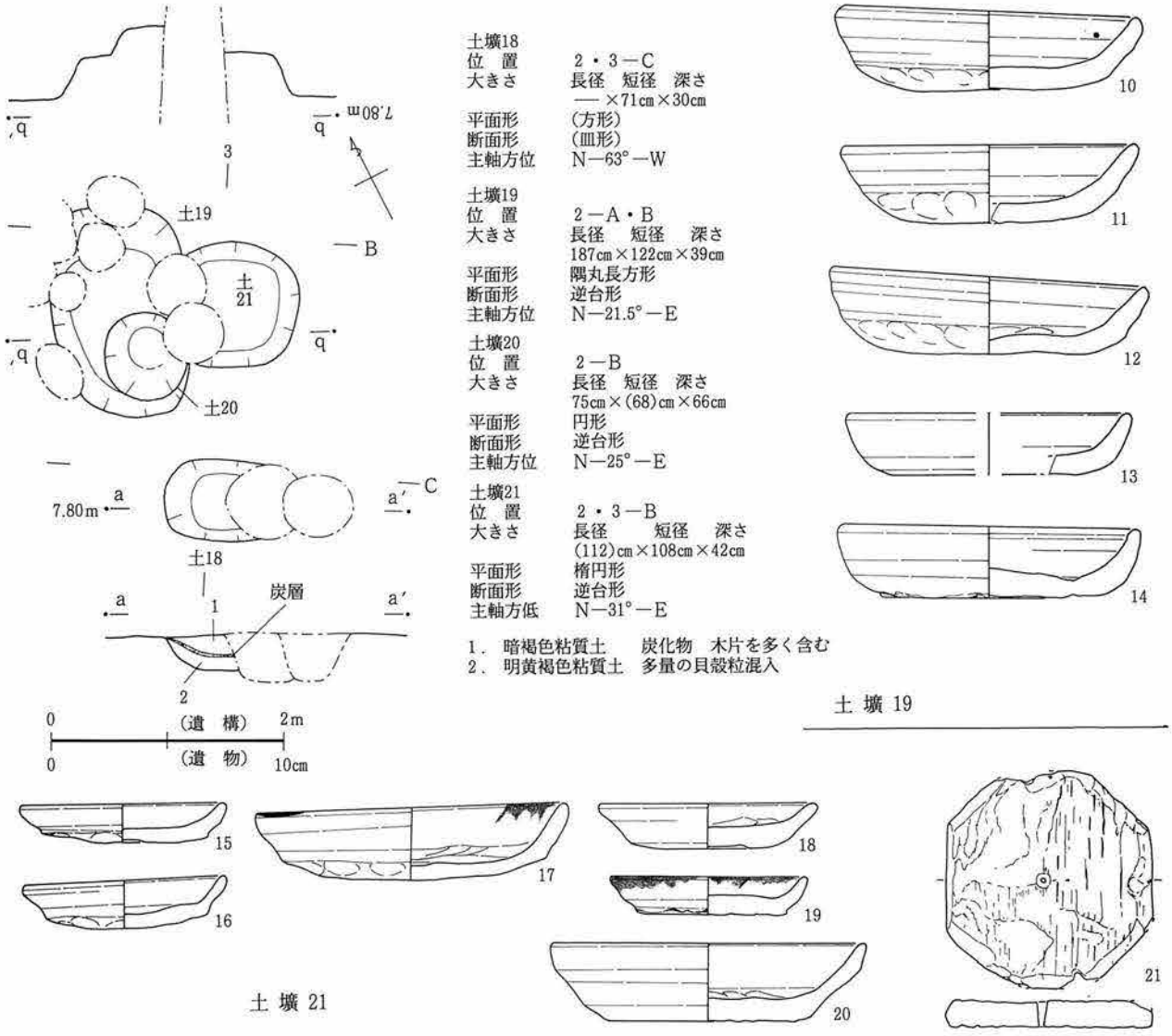


図26　土壙18・19・20・21　同出土遺物

(推定) の逆台形の断面をもつ。埋土は古い遺構に特徴的な黒褐色粘質土。

土壙21 (図26)

土壙19の東側に重複するが接点の部分を上層遺構に切られているため、新旧関係は不明である。確認径は108cm、深さ42cmで、逆台形の断面を持つ。覆土である黒褐色粘質土内には、大量の遺物、木片等が含まれていた。

出土遺物としてはT種・R種の土師器や木製の八角形の板がある。

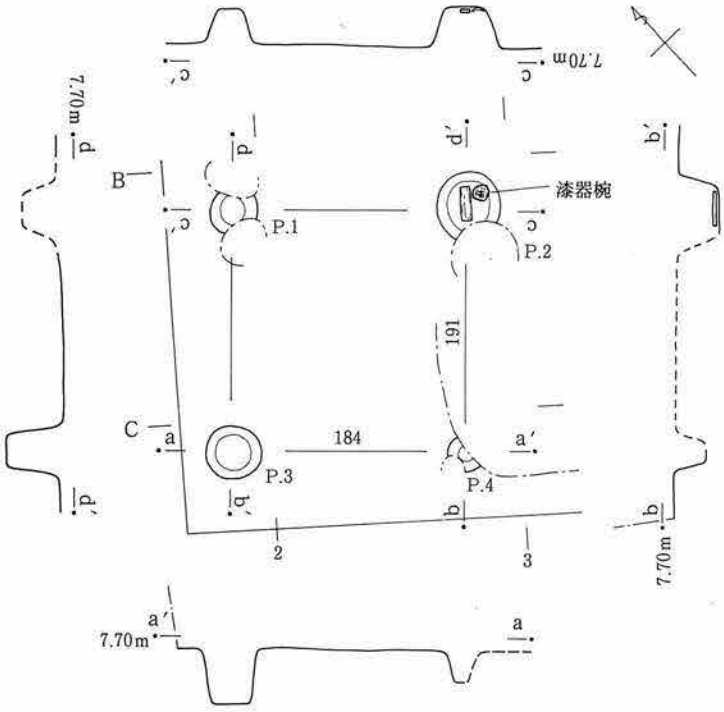
土壙22 (図25)

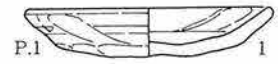
調査区中央 (5・6－A)、北壁際で見つかった土壙。全容は不明だが、深皿形の断面をした楕円形土壙で、底部に、筒形の深い落ち込みがある。上部の確認径は172cm、深さ約70cmで、底部落ち込み部分の確認径は82cm、深さは114cm以上である。埋土が多量の水分を含んでいて脆弱であったために崩落してしまい、実測が不可能となった。したがって、二つの落ち込みの関係も不明であり、円形土壙の下端も確認できなかった。覆土の暗灰褐色粘質土内には木製品や貝殻片が多く含まれていた。

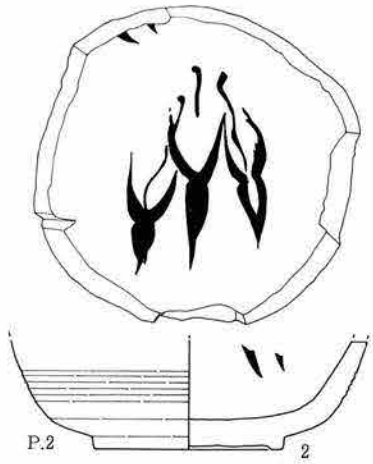
出土遺物のうち、漆器皿と折敷を提示する。

建物2 (図27)

1・2-B・Cにある掘立柱建物。現況で1×1間の規模しか確認されていないが、調査区外へ延び





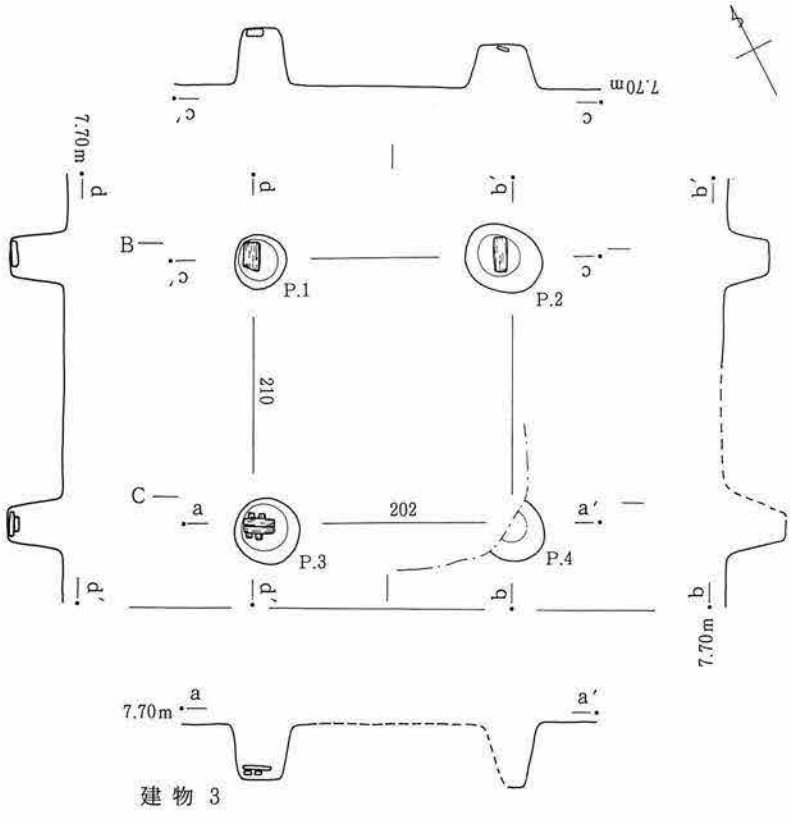


位　置　　1・2－B・C
規　模　　現況1間(1.8m)×1間(1.9m)
面　積　　3.5㎡
南北軸方位　N－32.5°－E
柱穴形状　　円形、楕円形

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	38 ×(36)	29
p.2	54 × 50	34
p.3	44 × 42	43
p.4	(32)×(30)	36

建物 2



位　置　　2・3－A・C
規　模　　現況1間(2.0m)×1間(2.1m)
面　積　　4.2㎡
南北軸方位　N－28°－E
柱穴形状　　円形、楕円形

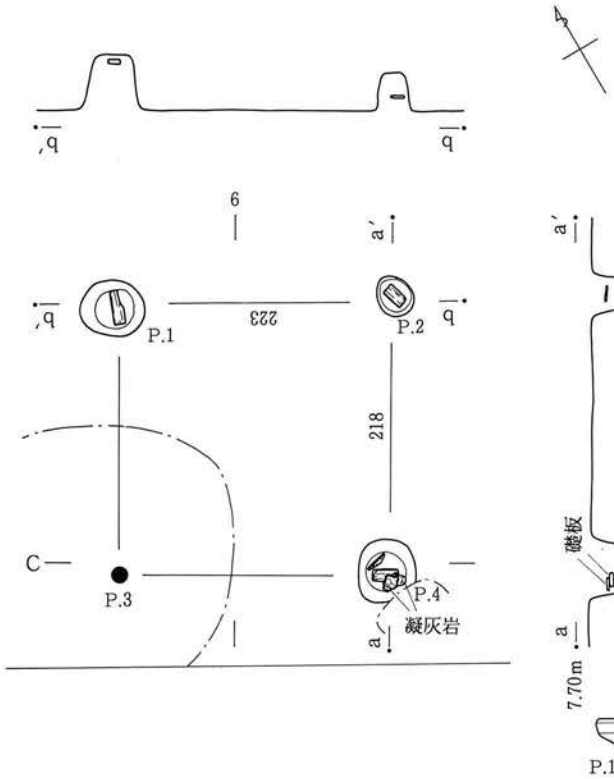
単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	43× 40	45
p.2	63× 50	35
p.3	52× 51	42
p.4	50×(49)	49

建 物 3

0　　2m

図27　建物2・3　同出土遺物

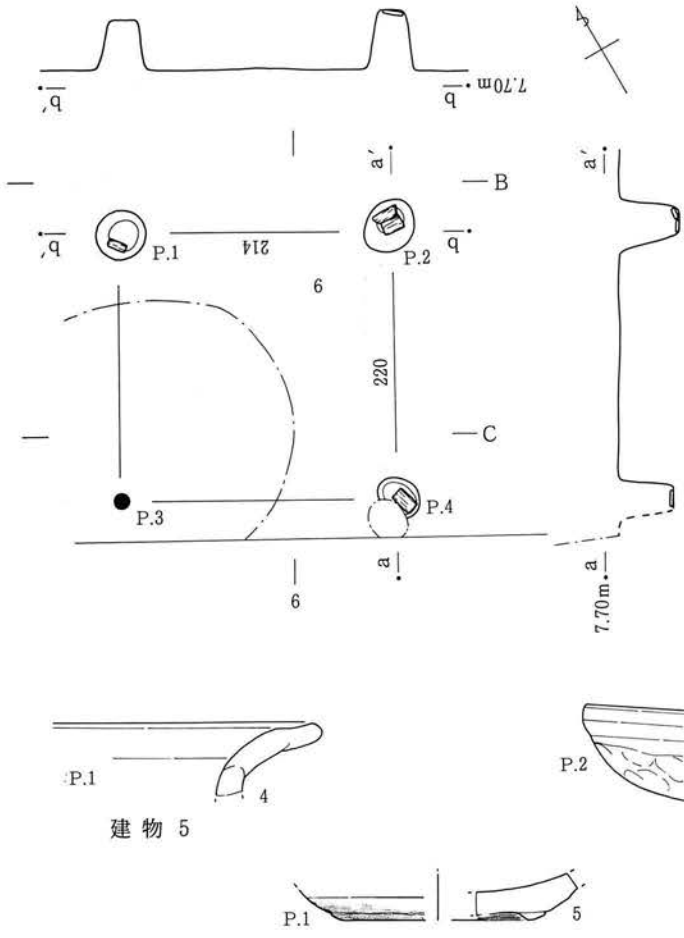


位　置　　5・6－B・C
規　模　　現況1間(2.2m)×現況1間(2.1m)
面　積　　4.8㎡
南北軸方位　N－30°－E
柱穴形状　　楕円形

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	51×44	43
p.2	34×24	34
p.3	井戸2により消滅	
p.4	50×46	43

建 物 4



位　置　　5・6－B・C
規　模　　現況1間(2.2m)×1間(2.1m)
面　積　　4.7㎡
南北軸方位　N－30°－E
柱穴形状　　円形　楕円形

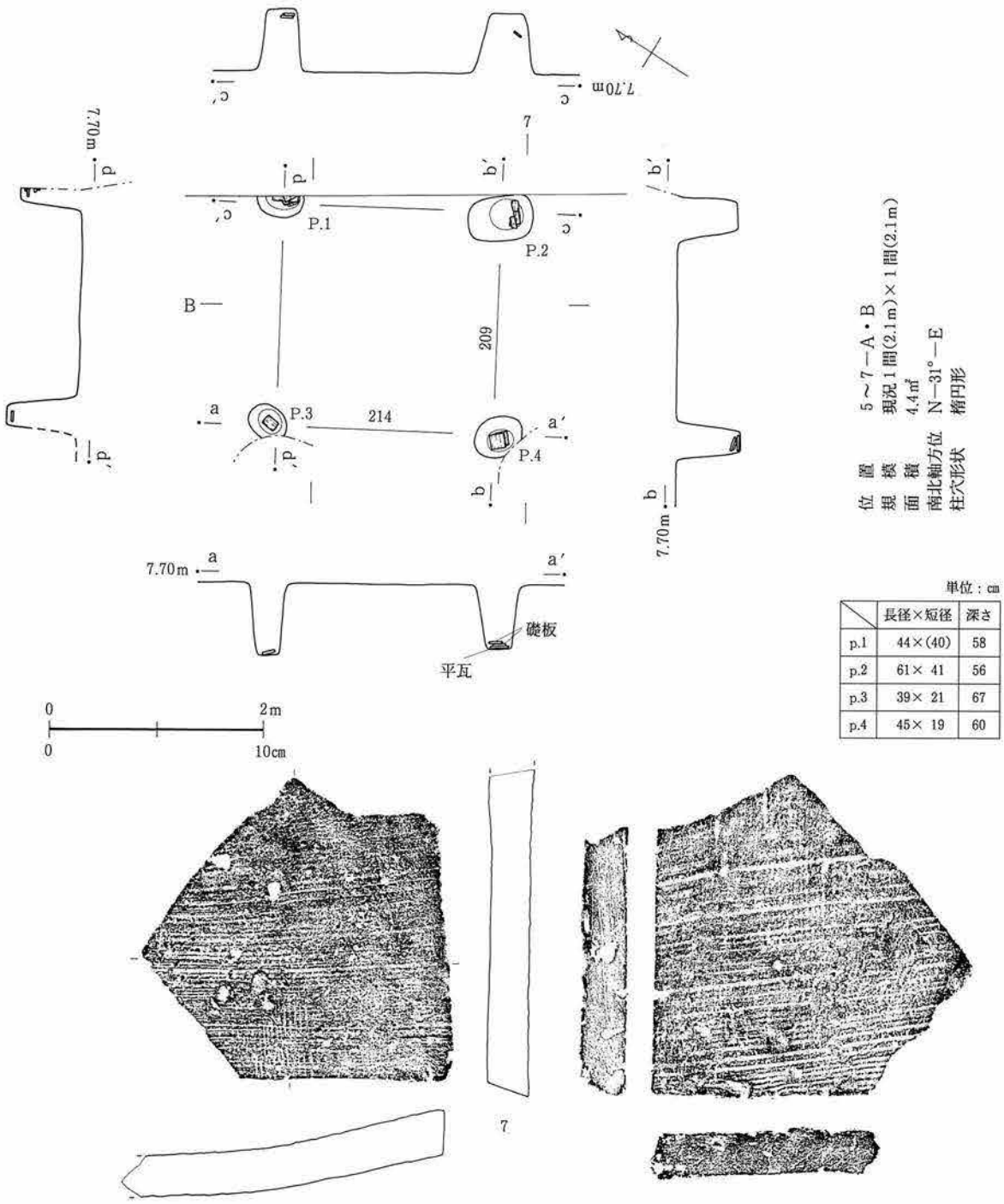
単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	40×40	40
p.2	46×38	48
p.3	井戸2により消滅	
p.4	37×29	44

建 物 5

0　（遺　構）　2m
0　（遺　物）　10cm

図28　建物4・5　同出土遺物



位置　5～7－A・B
規模　現況1間(2.1m)×1間(2.1m)
面積　4.4㎡
南北軸方位　N－31°－E
柱穴形状　楕円形

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	44×(40)	58
p.2	61× 41	56
p.3	39× 21	67
p.4	45× 19	60

図29　建物6　同出土遺物

る可能性がある。面積3.5㎡。南北軸方位はN－32.5°－Eで、北側の柱穴列4・5と平行している。

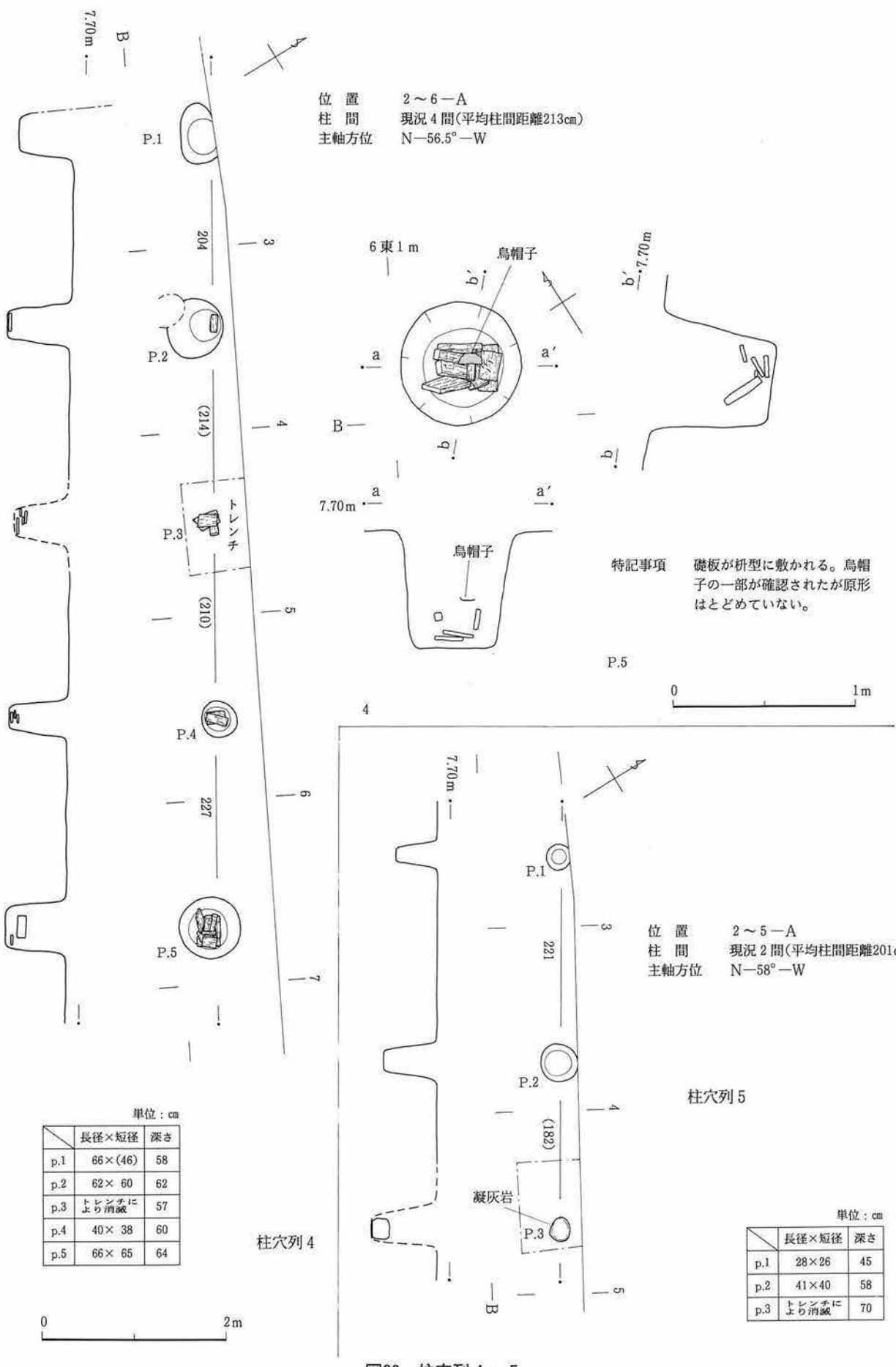
出土遺物には土師器T種と河骨文の漆器椀がある。

建物3（図27）

調査区西域2・3-A・Cにある現況1×1間の掘立柱建物。これも調査区外へ延びる可能性がある。南北軸方位はN－28°－E。建物2と重なっているが、新旧関係は不明。3穴に礎板が遺存する。

建物4（図28）

調査区中央5・6－B・Cにある現況1間×1間の掘立柱建物。南北軸方位はN－30°－Eで、方位と規模をほぼ同じくする建物5・6と重なって検出された。柱穴どおしに切り合いがなく新旧関係は明らかではないが、同じ建物を作り直した可能性があろう。3穴に礎板が残る。



単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	66×(46)	58
p.2	62× 60	62
p.3	トレンチにより消滅	57
p.4	40× 38	60
p.5	66× 65	64

単位：cm

	長径×短径	深さ
p.1	28×26	45
p.2	41×40	58
p.3	トレンチにより消滅	70

図30　柱穴列4・5

出土遺物には底部穿孔された土師器T種がある。

建物５（図28）

規模、方位ともに建物４と共通するが、位置は若干北東にずれている。現況では１×１間だが、南北方向に延びる可能性がある。３穴に礎板がある。P.４は、柱穴列４のP.５（図30）を切っている。

出土遺物として渥美甕・山茶碗・土師器T種などがある。

建物６（図29）

５～７－A・Bにあって、南北軸方位がN－31°－Eと、先の建物５・６より少し東に主軸がずれて建っている。この建物も１×１間だが、南北に延びる可能性がある。検出された柱穴は４穴ともに礎板を残し、直径39～61cm、深さ56～67cmと他の建物に比べて規模も大きい。P.１は土壙22を切っている。

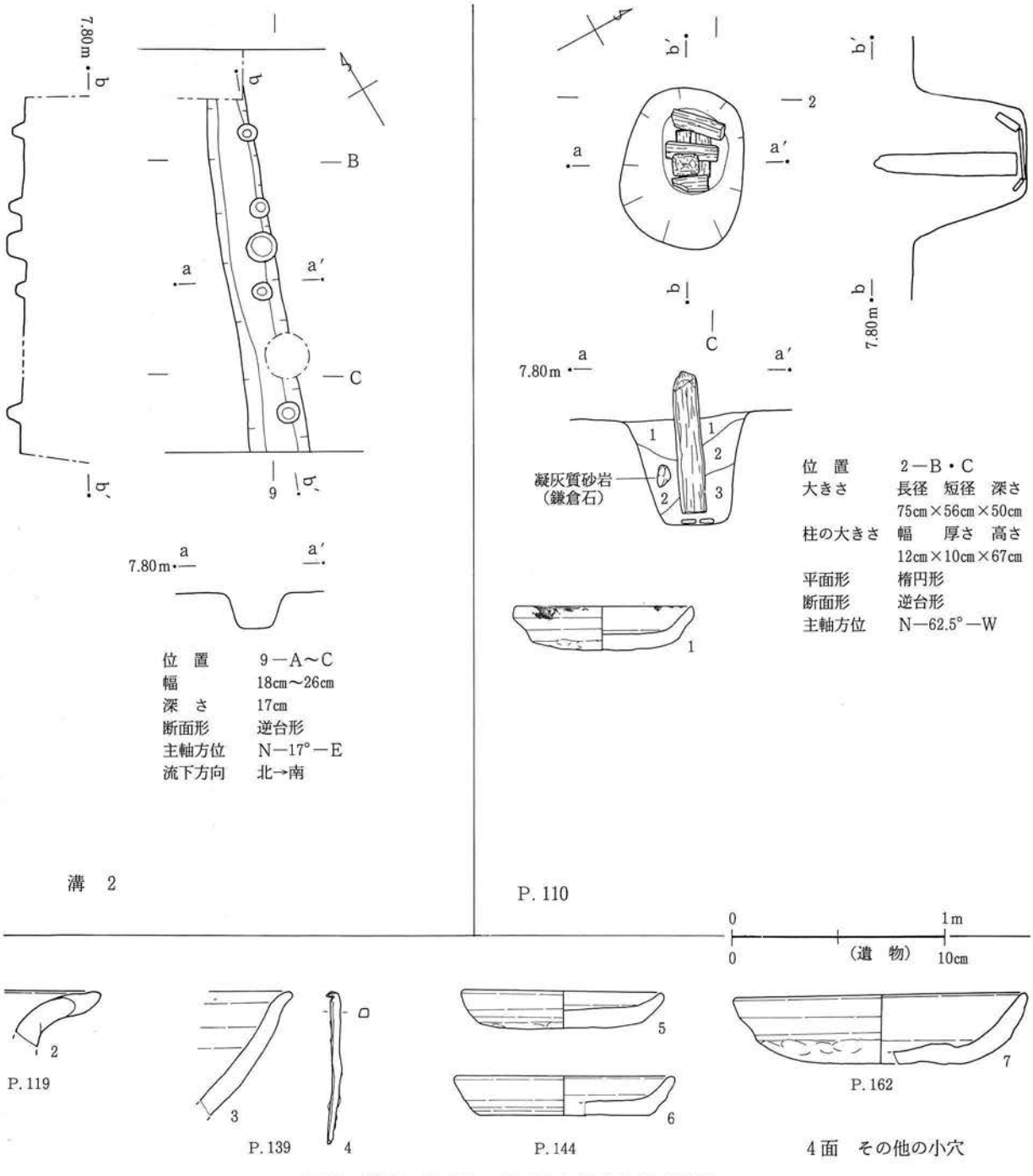


図31　溝２・P.110・４面その他小穴出土遺物

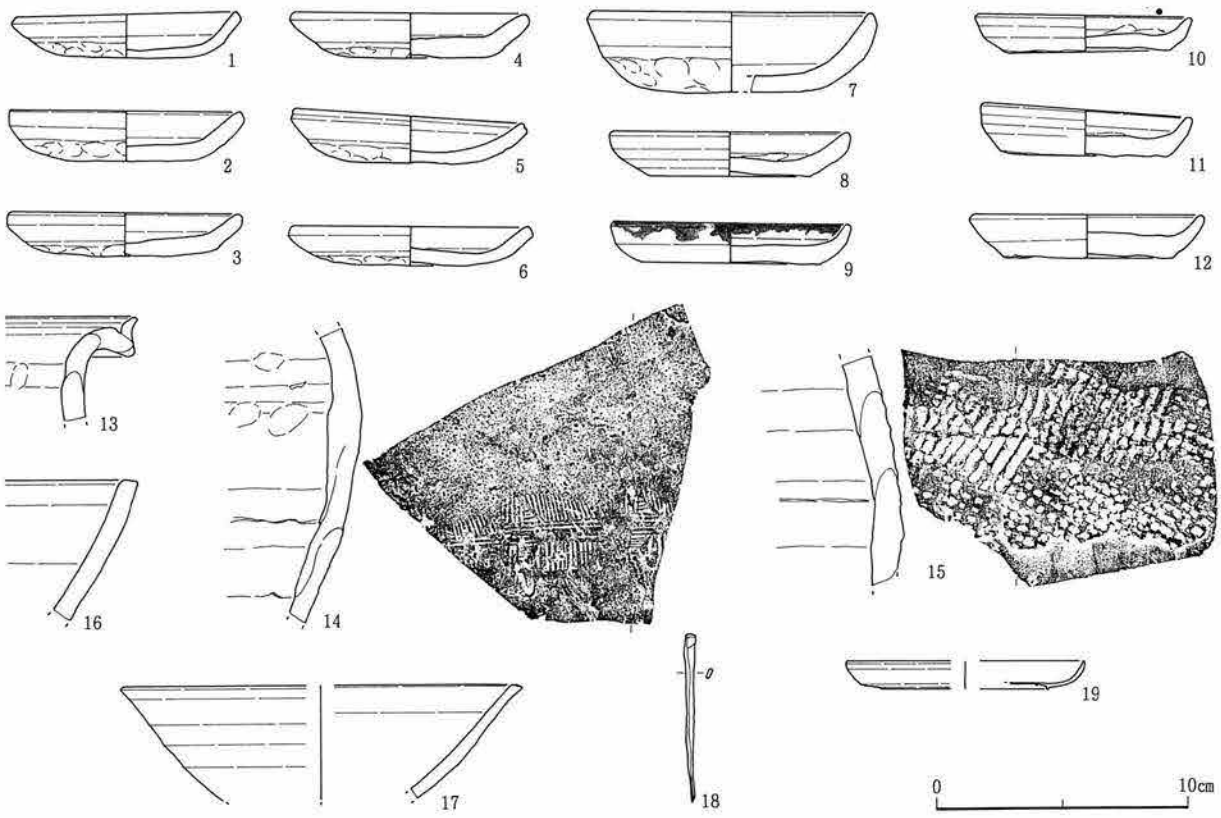


図32　4面上包含層出土遺物

また底面には4枚の礎板が重ねられていた。

出土遺物には鎌倉時代前期の布目の平瓦がある。

柱穴列4（図30）

調査区北壁沿いに走る東西の柱穴列。現況で4間確認されたが、北側調査区外に拡がる可能性が高い。掘立柱建物の南側柱通りと推定される。平均柱間距離は213cmと鎌倉時代前期に多い数値を示す。主軸方位はN－56.5°－W。柱穴は最大径66cm、深さ57～64cmと大きい。

注目すべきはP.5からは烏帽子が出土したことである。8枚の礎板を箱状に組んだ中に烏帽子を収め、埋土中に嵌め込んだものであり、その状況は建物廃絶時の埋納儀礼を思わせる。礎板は互いに繋がってはいなかった（図30）。

柱穴列5（図30）

柱穴列4と同位置、同軸上に並んだ2間の柱穴列。各々の柱穴が、柱穴列4の柱穴の北東隣に検出されている。切り合いがなく新旧関係は不明だが、作り直しだろうか。

P.110（図31）

柱根が良好に遺存していた柱穴。10×12cmの面取りされた柱が、ほぼ井桁に組まれた礎板の上に載っている。土師器T種1点が出土。

4面上包含層出土遺物-

T種・R種の土師器のほか、渥美甕や端反白磁碗などがある。

6．5面

溝3（図35）

2・3－A～Cにある南北の溝。溝5との新旧関係は明らかではないが、ほぼ直行したかたちで北か

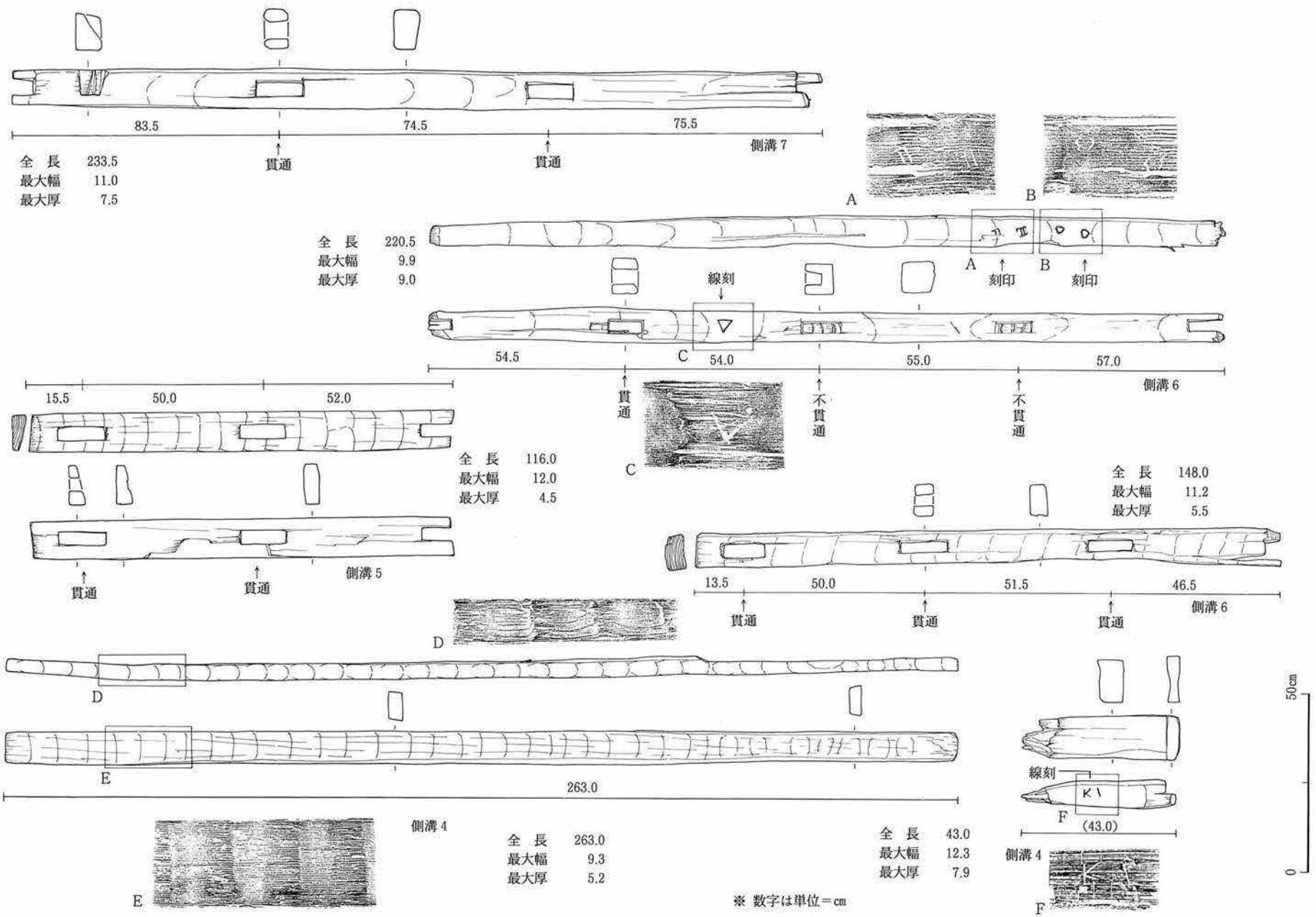


図33 若宮大路側溝4・5・6・7木枠部材実測図

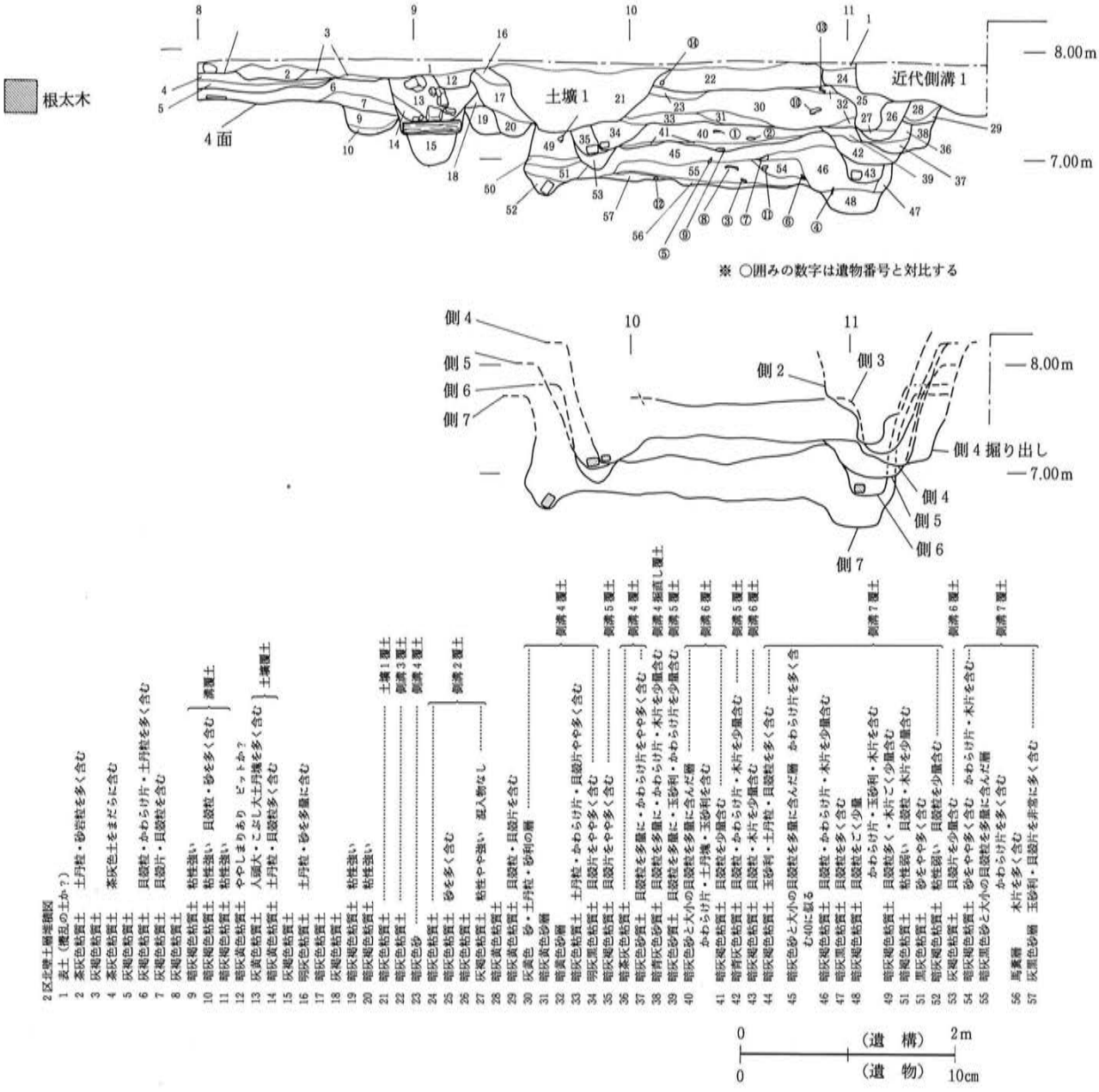
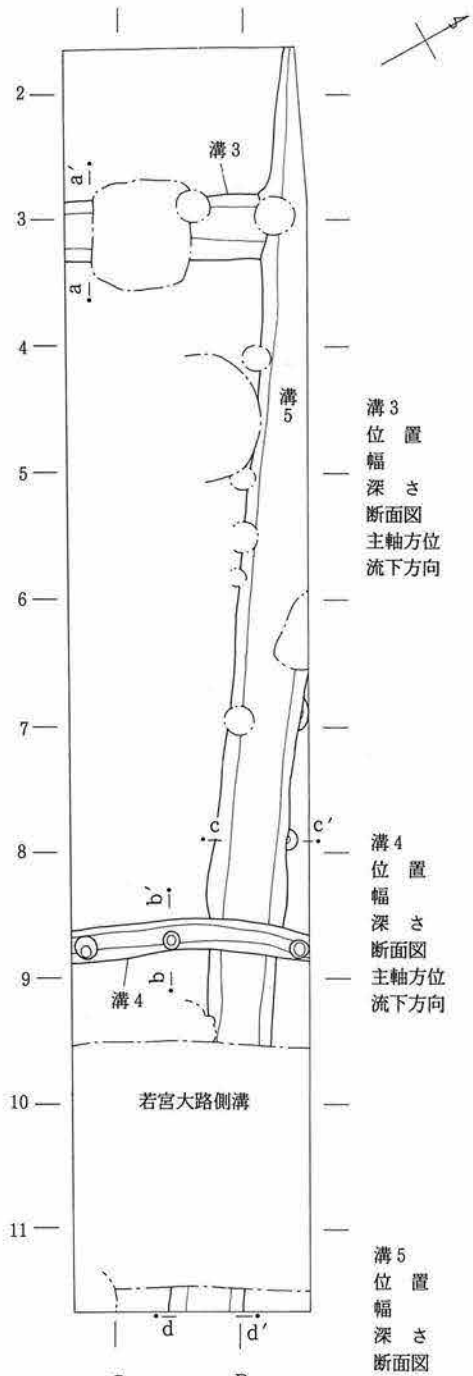


図34 調査区北壁土層図・北壁出土遺物



溝3
位　置　2・3－A～C
幅　94cm～112cm
深　さ　45cm～50cm
断面図　逆台形
主軸方位　N－29°－E
流下方向　北→南

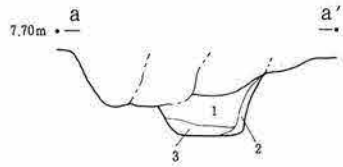
溝4
位　置　8－A～C
幅　44cm～52cm
深　さ　28cm～39cm
断面図　逆台形
主軸方位　N－42°－W
流下方向　南→北

溝5
位　置　1～11－A～C
幅　114cm～132cm
深　さ　56cm～86cm
断面図　逆台形
主軸方位　N－30.5°－E
流下方向　東→西

溝6
位　置　7・8－A～C
幅　69cm～86cm
深　さ　40cm～46cm
断面図　逆台形
主軸方位　N－47°－E
流下方向　南→北

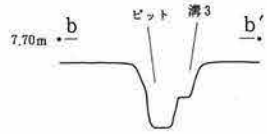
0　2m

溝3

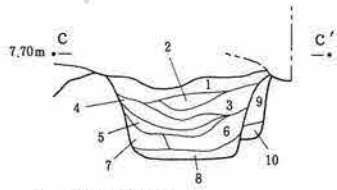


1．暗褐色粘質土
2．暗茶色粘質土
3．暗茶褐色粘質土

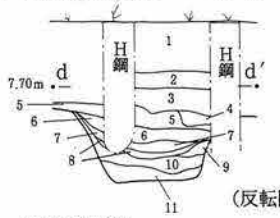
溝4



溝5



1．暗褐色粘質土
2．暗褐色粘質土
3．暗褐色粘質土
4．黒褐色粘質土
5．黒色粘質土
6．暗褐色粘質土
7．灰褐色粘質土
8．灰褐色粘質土
9．暗茶褐色粘質土　※ 1～8　溝
10．暗灰褐色粘質土　9．10　ピット



（反転図）

1．明褐色粘質土
2．明褐色粘質土
3．明褐色粘質土
4．褐灰色粘質土
5．暗褐色粘質土
6．暗褐色粘質土
7．黒色粘質土
8．暗褐色粘質土
9．暗褐色粘質土
10．暗灰色粘質土
11．暗青灰色粘質土　※ 6～11　溝

溝6

0　2m

図35　5面遺構全図

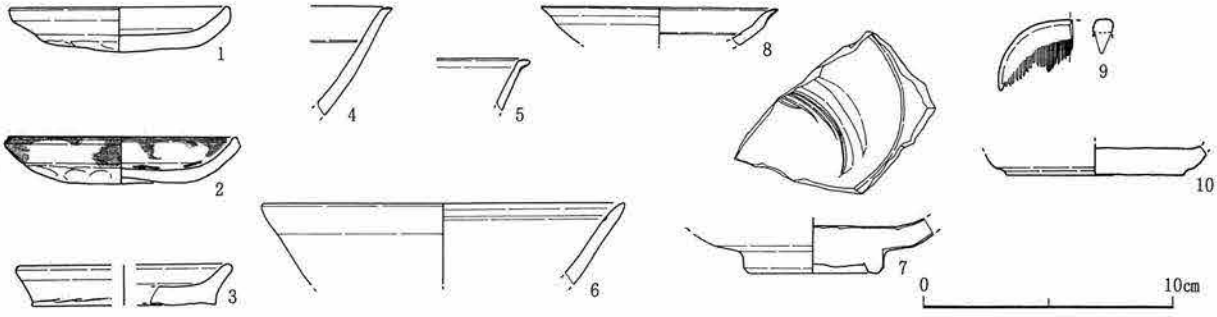


図36　溝5出土遺物

ら南へと走っている。最大幅112cm、深さ50cmの逆台形の断面をもつ。形状は後述の溝5と共通しているが、規模はやや本址が小さい。

溝4（図35）

8－A～Cにある南北の溝。最大幅52cm、深さ28～39cmの逆台形で、僅かに東へと湾曲している。東肩沿いには柱穴が並んで見つかっており、この溝に伴ったものだといえる。この面で検出された遺構の中では、新しい時期に属する。

溝5（図35）

調査区を東西に走る大きな溝。途中で若宮大路側溝に切られて断絶するものの、側溝の東側から再び出現し、現若宮大路歩道下へと延びているのを確認した。最大幅132cm、深さ56～86cmで箱型に近い逆台形の断面をもつ。主軸方位はN－47°－Eで、東から西へと流れている。このような鎌倉時代以前の溝は、過去の周辺調査でもいくつか報告されている（図39参照）。これについては第四章で考察する。

出土遺物には、古式の土師器R種とT種、端反白磁碗・竜泉窯青磁画花文碗などがある（図36）。

溝6（図35）

7・8－A～Cにある南北の溝。層位的には最も古い。最大幅86cm、深さ46cmの逆台形の断面をもち、主軸方位はN－47°－Eに向く。この軸線を南へ延ばしてゆくと、雪ノ下一丁目271番－1地点で見つかった古代溝にちょうど一致する（図39参照）ところから、二つの溝はつながっている可能性が高い。

7.古代

土壙23（図37）

4－Cの南壁際で部分的に見つかった方形の落ち込み。一辺は90cmを超す。深さは23cm以上で逆台形の断面を持つ。覆土はほとんど混入物のない黒褐色粘質土であった。何時代のものかは不明だが、近在で律令期の遺構が発見されており、本址もそのころのものとみたい。

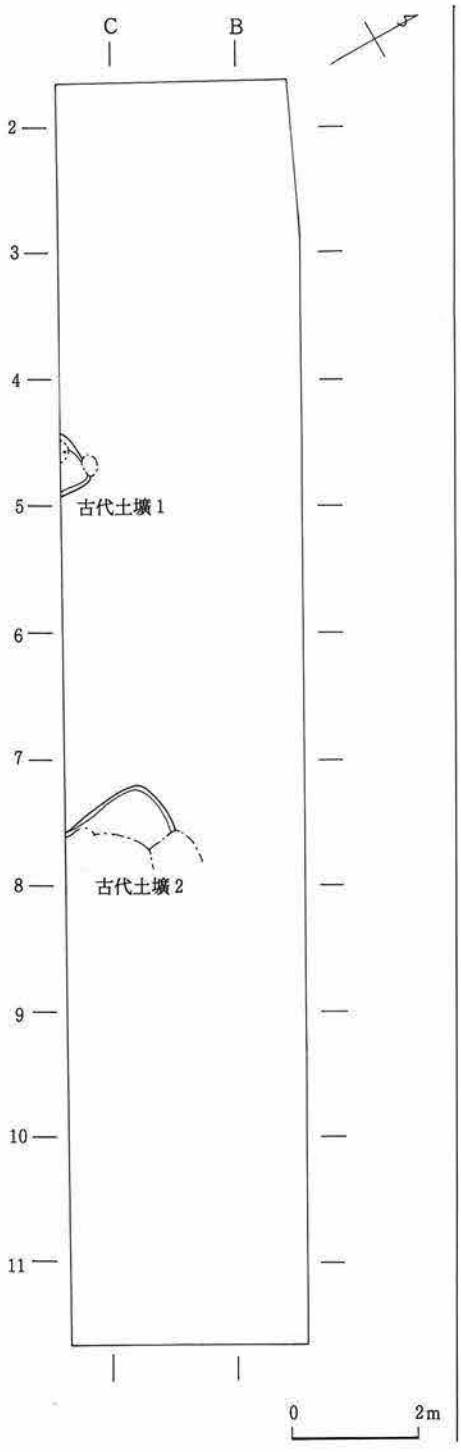
土壙24（図37）

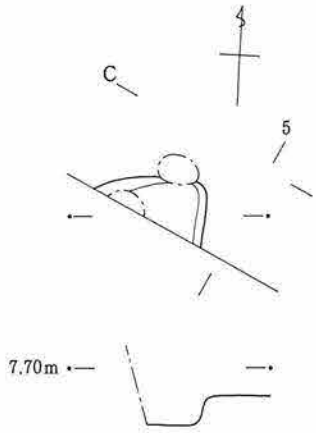
これも、南壁際（7－C）で検出された方形土壙。東から南東部にかけ、上層遺構に削り取られている。現況で確認された径は134cm、深さ21cmの逆台形の断面をもつ。南北軸方位は、N－9°－W。覆土は黒褐色粘質土である。部分的にしか確認されていないのではっきりとしたことは言えないが、土壙23と共通の点が多く、同時期の遺構である可能性は高い。

8．採集遺物（図38）

図38に表土掘削時や攪乱壙などから採集した、中世～近世期の遺物を提示しておく。11の瓦質すり鉢は北関東在地産の可能性がある。

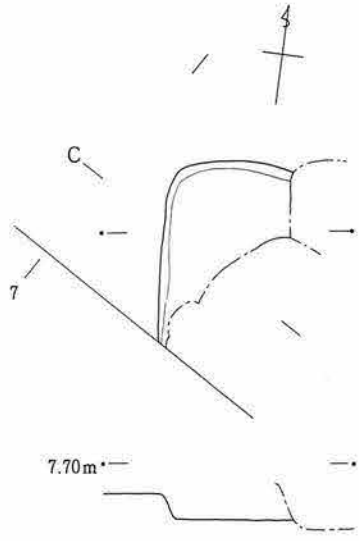
（鍛冶屋・馬淵）





位　置　4－C
大きさ　長径　短径　深さ
—×—×23cm
平面形　方形
断面形　逆台形
南北軸方位　N－1°－E

土 壙 23



土 壙 24

図37　古代遺構全図　土拡23・24

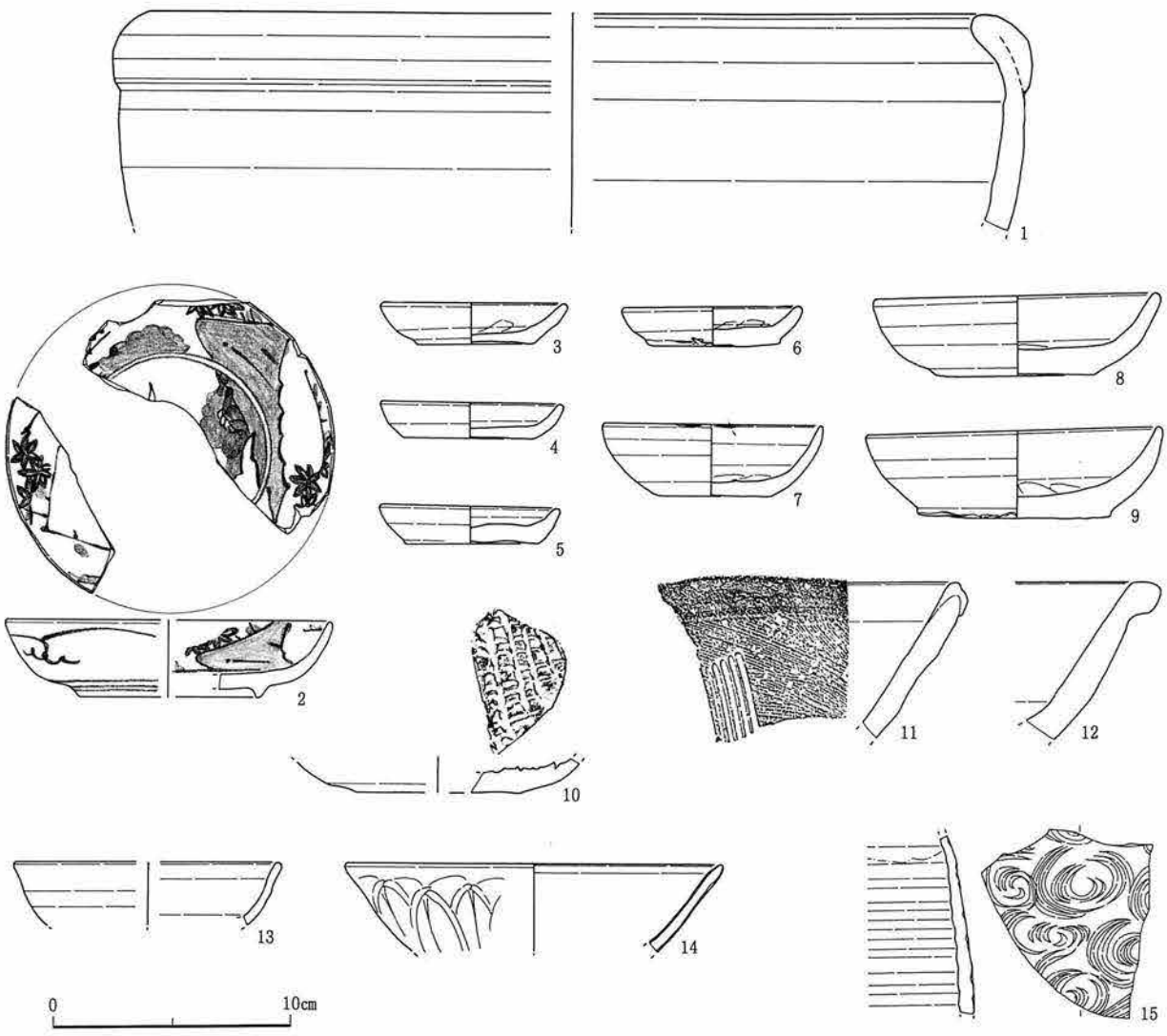


図38　採集遺物

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図5 1	肥　前 染付　皿	口径12.7cm　底径 8.1cm　器高 3.5cm　ロクロ成型　　内面と内底面に手描きの植物文　外面下部と高台内に 手描きの素地は灰白色で僅かに微砂粒を含む　呉須は淡藍色　薄い透明釉が全面にかかる　　18世紀
2	曲　物	口径(16.6cm)　厚さ 1.1cm　　径2.4cm の孔を穿つ　　樽状の器の蓋または中蓋であろうか

表1　井戸2出土遺物観察表

図5 3	瀬戸・美濃 灰釉皿	口径(12.0cm)　底径(7.9cm) 器高 1.6cm　　ロクロ成型　　内底面に重ね焼きの目跡が残る 胎土は黄白色で微砂粒を含む　　釉薬は長石釉　　色調は黄白色　無文　　18世紀

表2　土壙2出土遺物観察表

図6 1	p. 8	土　師　器 R種　大型	口径13.0cm　底径 7.4cm　器高 2.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
2	p.11	土　師　器 R種　大型	口径13.0cm　底径 7.4cm　器高 2.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好
3	p.17	土　師　器 R種　大型	口径12.9cm　底径 9.7cm　器高3.05cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・赤色粒子・雲母・白色針状物質を含む　　焼成良好
4	包含 層	土器質 手焙り	口縁部片　　輪積み後ロクロ成型　　内面はナデ　外面上部はナデ　体部は斜位のハケナデ　下部は回転ヘラ削り 胎土は灰色で微砂粒・白色粒子を含む　　内底部は火熱により黒く変色している

表3　1面小穴・包含層出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
図7 1	土師器 R種 小型	口径 7.5cm 底径 5.0cm 器高2.05cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好
2	土師器 R種 小型	口径 7.9cm 底径 5.5cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡茶色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好
3	土師器 R種 小型	口径 7.3cm 底径 5.3cm 器高 1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡茶色で砂粒・白色針状物質を含む 二次焼成を受ける 焼成良好
4	土師器 R種 小型	口径 8.0cm 底径 5.2cm 器高 2.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む 口縁部にスス付着 焼成良好
5	土師器 R種 小型	口径 7.8cm 底径 4.3cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で赤色粒子・白色針状物質・微砂粒を含む精良土 焼成良好
6	土師器 R種 小型	口径 7.8cm 底径 4.7cm 器高 2.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好 完形
7	土師器 R種 小型	口径 7.7cm 底径 4.5cm 器高 1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
8	土師器 R種 中型	口径11.2cm 底径 6.2cm 器高3.05cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質を含む 焼成良好 完形
9	土師器 R種 大型	口径11.7cm 底径 6.6cm 器高 3.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・雲母・泥岩粒を含む 口縁部にスス付着 焼成良好
10	土師器 R種 大型	口径12.0cm 底径 6.0cm 器高 3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む 口縁部にスス付着 焼成良好 略完形
11	土師器 R種 大型	口径12.3cm 底径 7.4cm 器高 3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・雲母・赤色粒子を含む 二次焼成を受ける 焼成良好 完形
12	土師器 R種 大型	口径12.3cm 底径 7.1cm 器高 3.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 淡赤褐色で微砂粒・赤色粒子・白色針状物質・礫を含む 焼成良好
13	土師器 R種 大型	口径12.9cm 底径 6.2cm 器高 3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む精良土 焼成良好
14	常滑 こね鉢Ⅱ類	口縁部片 口径(35.4cm) 輪積み後ロクロ成形 内面 外面口縁部はナデ 体部は指頭成形 胎土は暗橙色で砂粒・長石粒・白色粒子を含む 内面に降灰 焼成普通
15	竜泉窯青磁 画花文 碗	底部片 底径 5.3cm ロクロ成形 高台は削り出し 高台内は露胎 内底部に蓮花文 素地は灰色で緻密 気孔あり 暗灰緑色の透明釉がかかる
16	竜泉窯青磁 無文 鉢	底部片 底径(4.8cm) ロクロ成形 素地は灰白色で微砂粒を含む 釉薬は青緑色で半透明 高台畳付きは露胎
17	曲物蓋	径21.8cm 厚さ0.65cm 中央に径0.4cm の貫通穿孔が１ヵ所 周囲に約0.15mmの孔を2 個並べたものが3 カ所
18	不明木製品	長さ(31.9cm) 幅4.3cm 厚さ0.4cm 先端は尖っている

表４　若宮大路側溝４出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他
図10 1	土師器 R種極小型	口径 4.2cm 底径3.25cm 器高 1.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 外底面は磨滅 胎土は橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む 焼成良好 完形
2	土師器 R種 小型	口径 7.9cm 底径 5.4cm 器高 1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む 口縁部にスス付着 焼成良好
3	土師器 R種 小型	口径 8.0cm 底径 5.4cm 器高 1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色 赤色粒子・砂粒・白色針状物質を含む 焼成良好 完形

表５　若宮大路側溝５出土遺物観察表（１）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他
図10 4	土　師　器 R種　小型	口径 7.9cm　底径 5.4cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色　微砂粒・赤色粒子・白色針状物質を含む　　焼成良好　　完形
5	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 5.5cm　器高1.75cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　略完形
6	土　師　器 R種　中型	口径 9.9cm　底径 5.5cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　略完形
7	土　師　器 R種　中型	口径(10.9cm)　底径 6.0cm　器高 3.1cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色　赤色粒子・砂粒・雲母を含む精良土　　焼成良好
8	土　師　器 R種　大型	口径11.8cm　底径 8.1cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色　赤色粒子・砂粒・白色針状物質・礫を含む　粗く気孔多い　　焼成良好　　完形
9	土師器白色 系T種小型	口径(11.7cm)　手づくね 胎土は淡灰色　微砂粒を少量含む精良土　　焼成良好
10	竜泉窯青磁 鏑蓮弁文碗	口径14.6cm 素地は灰色　微砂粒を含みきめ細かい　　釉薬は灰緑色半透明　気泡多い　　焼成良好
11	竜泉窯 青磁鉢	底部の小片　底径 7.5cm 素地は灰白色　黒色微砂粒を含む　気孔あり　　釉薬は灰緑色不透明　　文様は不明

表6　若宮大路側溝5出土遺物観察表（2）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図11 1	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 5.7cm　器高1.65cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種　小型	口径 7.8cm　底径 5.8cm　器高 2.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・雲母・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好　　完形
3	土　師　器 R種　小型	口径 8.0cm　底径 5.0cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
4	土　師　器 R種　小型	口径 9.6cm　底径 7.0cm　器高 1.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　　焼成良好
5	土　師　器 R種　大型	口径12.6cm　底径 7.7cm　器高 3.3cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒・雲母を含む　　焼成良好
6	土　師　器 R種　大型	口径13.3cm　底径 7.8cm　器高 3.3cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む　　焼成良好
7	土　師　器 R種　大型	底部片　　底径(8.6cm)　底部静止糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色で砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む　　焼成良好
8	土師器 転用円盤	径 3.9cm　厚さ 0.9cm　　土師器底部の転用品　明確な用途は不明 胎土は灰橙色で砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
9	土製品	径 3.5cm　器高(1.7cm)　　ロクロ成型か？ 胎土は土師器質で橙色　胎芯部は灰色で微砂粒を含む　　蓋物のつまみか？
10	常　滑 甕	口縁部片　　口径(22.0cm)　　成形は輪積み 胎土は暗灰色で砂粒・黒色粒子・長石粒を含む　　気孔が多い　　口縁部と肩部に降灰釉　　焼成良好
11	銭	皇宋通宝　　初鋳1038年　　北宋　　篆書

表7　2面上包含層出土遺物観察表

	番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
3面上	図121	土　師　器 T種　小型	口径 9.0cm　器高 1.8cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
	2	土　師　器 T種　小型	口径 9.7cm　器高 1.9cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡茶色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　粗い　　焼成良好　　略完形
	3	土　師　器 T種　大型	口径12.5cm　器高 3.0cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・雲母を含む　　内底部にスス付着　　焼成良好　　完形
	4	土　師　器 T種　大型	口径12.8cm　器高 3.7cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で砂粒・白色粒子・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
	5	土　師　器 T種　大型	口径13.5cm　器高 3.4cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 灰茶色で微砂粒・白色針状物質を含む精良土　　焼成良好
	6	土　師　器 R種　小型	口径(9.4cm) 底径 6.6cm　器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
	7	土　師　器 R種　小型	口径 8.6cm　底径 6.1cm　器高 2.1cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　ザラついている　　焼成良好　　完形
	8	土　師　器 R種　小型	口径 8.8cm　底径 5.5cm　器高 2.1cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好　　完形
	9	土　師　器 R種　大型	口径12.2cm　底径 7.4cm　器高 2.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で微砂粒・赤色粒子・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
	10	曲　物	口径13.3cm　厚さ 0.8cm　　柾目取り　　底あるいは蓋であろう
p73	11	土　師　器 T種　大型	口径 9.0cm　器高 1.8cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰橙色で微砂粒・赤色粒子・白色針状物質を含む　　焼成良好　　完形
	12	土　師　器 R種　小型	口径(7.7cm) 底径 6.0cm　器高 1.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　　外底面に板状圧痕あ 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
p.99	13	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　　成形は輪積み後ロクロ 胎土は灰色で砂粒・長石粒を含む　　口唇部に降灰　　焼成良好

表8　3面上・3面小穴出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図131	土　師　器 R種　大型	口径12.3cm　底径 7.7cm　器高 3.3cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成普通　　完形
2	土　師　器 R種　大型	口径12.3cm　底径 8.4cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・雲母・礫を含む　　口縁部にタール付着　　焼成良好
3	丸　瓦	最大厚 1.8cm　　焼成良好 胎土は黒灰色　砂粒・白色粒子を多く含む　粘性が強い　　凹面は布目　凸面は縄叩き目　側面はヘラ削りを施す
4	漆器椀	口径13.2cm　底径 6.6cm　器高 4.1cm　　内外面黒漆塗り　無文

表9　若宮大路側溝6出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図15 1	土　師　器 R種極小型	口径 5.1cm　底径 3.8cm　器高 0.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　内折型 胎土は灰橙色　白色針状物質・赤色粒子・砂粒を含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種極小型	口径(5.0cm) 底径(3.4cm) 器高 0.9cm　　ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり　　内折型 胎土は灰橙色　砂粒・赤色粒子・白色針状物質を含む　　焼成良好
3	土　師　器 R種極小型	口径 5.2cm　底径 3.6cm　器高 1.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色　微砂粒・赤色粒子・雲母を含む精良土　　焼成良好
4	土　師　器 R種極小型	口径 5.8cm　底径 4.2cm　器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰褐色　微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・金雲母を含む　　焼成良好　完形
5	土　師　器 R種　小型	口径 7.4cm　底径 5.3cm　器高 1.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　　焼成良好
6	土　師　器 R種　小型	口径 7.3cm　底径 5.9cm　器高 1.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好　　略完形
7	土　師　器 R種　小型	口径 7.6cm　底径 5.0cm　器高 1.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色　微砂粒・白色針状物質を含む精良土　　内底部に油煤付着　　焼成良好
8	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 5.1cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　白色針状物質・砂粒・雲母・礫を含む　　焼成普通
9	土　師　器 R種　小型	口径 7.2cm　底径 5.1cm　器高 1.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色　微砂粒を多く・白色針状物質・金雲母を含む精良土　　焼成良好
10	土　師　器 R種　小型	口径 7.6cm　底径 5.4cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好　　完形
11	土　師　器 R種　小型	口径 7.6cm　底径 4.7cm　器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色　白色針状物質・砂粒・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
12	土　師　器 R種　小型	口径 7.8cm　底径 5.4cm　器高 1.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡赤褐色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形
13	土　師　器 R種　小型	口径 7.5cm　底径 4.7cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　白色針状物質・砂粒・泥岩粒を含む　　焼成良好　　完形
14	土　師　器 R種　小型	口径 7.9cm　底径 4.7cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　白色針状物質・微砂粒を含む精良土　　焼成良好
15	土　師　器 R種　小型	口径 7.9cm　底径 4.7cm　器高 2.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好　　完形
16	土　師　器 R種　小型	口径 7.9cm　底径 6.0cm　器高 1.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好
17	土　師　器 R種　小型	口径 8.0cm　底径 5.7cm　器高 2.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 暗灰褐色　砂粒　白色針状物質　白色粒子を含む　　焼成良好　　略完形
18	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 5.6cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色　白色針状物質・砂粒・白色粒子を含む　　焼成良好　　完形
19	土師器灯明 皿R種小型	口径 7.8cm　底径 5.5cm　器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色　　赤色小粒・砂粒・白色針状物質を含む　　口縁部にスス付着　　焼成良好
20	土　師　器 R種　小型	口径 7.9cm　底径 5.9cm　器高 1.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒　白色針状物質　白色粒子　泥岩粒を含む精良土　　焼成良好　　略完形
21	土　師　器 R種　小型	口径 8.5cm　底径 5.7cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は砂粒　白色針状物質　雲母を含む　　焼成良好　　完形
22	土　師　器 R種　小型	口径 8.0cm　底径 5.2cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色　砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形

表10　若宮大路側溝７出土遺物観察表(1)

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
図15 23	土師器 R種 小型	口径 7.9cm 底径 5.0cm 器高 1.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色 微砂粒・赤色粒子・白色針状物質を含む精良土 焼成良好
24	土師器 R種 小型	口径 7.9cm 底径 5.7cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡赤褐色 白色針状物質・砂粒・雲母を含む 焼成良好 完形
25	土師器 R種 小型	口径 7.9cm 底径 6.0cm 器高 1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む精良土 焼成良好 略完形
26	土師器 R種 小型	口径 7.7cm 底径 5.1cm 器高 1.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む 焼成良好 略完形
27	土師器 R種 小型	口径 7.8cm 底径 5.9cm 器高 1.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は暗灰橙色 白色針状物質・微砂粒・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
28	土師器 R種 小型	口径 8.2cm 底径 6.1cm 器高 1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む 焼成良好 略完形
29	土師器 R種 小型	口径 8.2cm 底径 5.6cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色 砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む 焼成良好 完形
30	土師器 R種 小型	口径 8.0cm 底径 4.9cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 微砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む 焼成良好 略完形
31	土師器 R種 小型	口径 8.2cm 底径 6.0cm 器高 2.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好
32	土師器 R種 小型	口径 8.3cm 底径 6.3cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡赤褐色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
33	土師器 R種 小型	口径 8.5cm 底径 5.7cm 器高 1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好
34	土師器 R種 小型	口径 7.6cm 底径 5.2cm 器高 1.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 微砂粒・白色針状物質・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好 略完形
35	土師器 R種 小型	口径 7.5cm 底径 5.7cm 器高 1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む 焼成良好 完形
36	土師器 R種 小型	口径 8.3cm 底径 5.9cm 器高 2.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
37	土師器 R種 小型	口径 8.1cm 底径 5.3cm 器高 1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は灰橙色 白色針状物質・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む 焼成良好
38	土師器 R種 小型	口径(6.4cm) 底径(3.8cm) 器高 1.9cm ロクロ回転方向不明 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 砂粒・雲母を含む精良土 焼成良好
39	土師器 R種 小型	口径 7.4cm 底径 5.0cm 器高2.25cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色 砂粒・赤色粒子・雲母・白色粒子を含む精良土 焼成良好
40	土師器 R種 小型	口径 7.8cm 底径 4.6cm 器高 2.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色 微砂粒・白色針状物質・雲母・赤色粒子を含む精良土 焼成良好
41	土師器 R種 中型	口径10.0cm 底径 5.4cm 器高 3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 微砂粒・赤色小粒・雲母を含む精良土 焼成良好
42	土師器 R種 中型	口径(10.8cm) 底径(5.2cm) 器高 3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色 砂粒・赤色粒子・白色針状物質・白色粒子を含む精良土 焼成良好
43	土師器 R種 中型	口径10.5cm 底径 5.8cm 器高 3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色 微砂粒・赤色粒子を含む精良土 焼成良好
44	土師器 R種 中型	口径11.0cm 底径 6.0cm 器高 3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色 砂粒・赤色粒子・雲母を含む精良土 焼成良好

表11　若宮大路側溝7出土遺物観察表(2)

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
図15 45	土師器 R種 大型	口径10.8cm 底径 6.3cm 器高 3.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 微砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む精良土 焼成良好
46	土師器 R種 大型	口径(12.2cm) 底径(8.1cm) 器高 3.1cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 微砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む精良土 焼成良好
47	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径 7.4cm 器高 3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・土丹粒を含む 焼成良好 完形
48	土師器 R種 大型	口径12.7cm 底径 7.6cm 器高 3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡赤褐色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒・赤色粒子を含む 焼成良好
49	土師器 R種 大型	口径12.4cm 底径 7.3cm 器高 3.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色赤色粒子・白色針状物質・砂粒・雲母を含む 焼成良好 完形
50	土師器 R種 大型	口径11.7cm 底径 7.3cm 器高 3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 赤色粒子を多く・白色針状物質・砂粒・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
51	土師器 R種 大型	口径12.4cm 底径 8.1cm 器高 3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色 胎土は微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含みきめ細かい 焼成良好 完形
52	土師器 R種 大型	口径12.3cm 底径 7.7cm 器高 3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
53	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径 7.7cm 器高 3.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は暗灰褐色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好 略完形
54	土師器灯明 皿R種大型	口径12.6cm 底径 8.0cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む 口縁部にスス付着 焼成良好
55	土師器 R種 大型	口径12.6cm 底径 7.6cm 器高3.05cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
56	土師器 R種 大型	口径13.0cm 底径 7.7cm 器高 3.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 赤色粒子・白色針状物質・砂粒・雲母・礫を含む 焼成良好
57	土師器 R種 大型	口径13.0cm 底径 8.0cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色 雲母・赤色粒子・砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
58	土師器 R種 大型	口径13.4cm 底径 8.8cm 器高 3.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色針状物質・白色粒子・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
59	土師器 R種 大型	口径12.9cm 底径 8.7cm 器高 3.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は赤褐色 砂粒・白色針状物質・白色粒子・泥岩粒を含む 焼成良好
60	土師器 R種 大型	口径12.2cm 底径 8.6cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好
61	土師器 R種 大型	口径12.8cm 底径 8.3cm 器高 3.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む 焼成良好 完形
62	土師器 R種 大型	口径11.7cm 底径 7.3cm 器高 3.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色 砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む 口縁部にスス付着 焼成良好 略完形
63	土師器 R種 大型	口径12.9cm 底径 8.2cm 器高 3.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色 砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好 口縁部にタール付着 完形
64	土師器 R種 大型	口径12.7cm 底径 8.2cm 器高 3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色 砂粒 白色針状物質・雲母・白色粒子を含む 焼成良好 口縁部にタール付着 完形
65	土師器 R種 大型	底径(6.8cm) 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外面体部から外底面にかけて墨書あり 判読は出来ない 胎土は灰橙色 微砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む精良土 焼成良好 小片
図16 66	白色系土師器 T種	口径(11.4cm) 手づくね 口縁部ナデ 胎土は灰白色できめ細かい 微砂粒含む 焼成良好

表12　若宮大路側溝7出土遺物観察表(3)

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図16 67	白色系土師 器　　T種	口径(12.0cm)　手づくね　　口縁部ナデ 胎土は灰白色できめ細かい　混入物はほとんどない　　焼成良好
68	常　滑 甕	口縁部片　　輪積み後口縁部の内外ナデ　　口縁端部に細めの縁帯がつく 胎土は灰色で堅緻　微砂粒・白色粒子を含む　　肩部に降灰　　焼成良好
69	常　滑 こね鉢Ⅰ類	底部片　底径10.3cm　　高台貼り付け　　輪積み後外面下部に横方向のヘラ削りを施す 胎土は灰色で砂粒・長石・白色粒子・礫を含む　気孔あり　　内面に降灰　　焼成良好
70	常　滑 こね鉢Ⅰ類	底部片　底径(15.4cm)　高台貼り付け　輪積み後外面下部に横方向のヘラ削りを施す　　外底部に指頭痕多数あり 胎土は暗灰色で砂粒・大小の長石粒を含む　粘性が強い　　二次焼成を受ける　　焼成良好
71	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　　輪積み成形　　内面に指頭痕あり 胎土は灰色で長石粒・礫含む　　色調は外面が赤褐色　内面が灰褐色　　焼成良好
72	山茶碗 南部系	口縁部片　口径(13.4cm)　ロクロ成形 胎土は灰白色で砂粒・長石粒含み粘性が強い　気孔が多い　　口縁部に降灰釉　　焼成良好
73	山茶碗 南部系	口径14.5cm　　ロクロ成形 胎土は灰褐色で黒色粒子・長石・礫含む　　口縁部に薄く降灰　　焼成良好
74	瀬　戸 入れ子	口径 2.6cm　底径 1.9cm　器高0.65cm　ロクロ成形　外底部回転糸切り後ナデ 胎土は灰褐色　　釉薬は茶色　内面に施釉　　焼成良好　　完形
75	瀬　戸 洗	口縁部片　　ロクロ成形 胎土は灰色で緻密　気孔あり　　釉薬は灰緑色透明　内外面にハケ塗り　　焼成良好
76	瓦　質 手焙り	口縁部片　輪積み後内面はナデ　外面口縁部はナデ　体部はヘラナデ 胎土は表面黒灰色　胎芯部は灰橙色で砂粒・白色粒子・雲母含む　　焼成良好
77	瓦　質 手焙り	口縁部片　輪積み後口縁部はナデ　外面体部は指頭成形 胎土は灰色で砂粒・黒色粒子を多く含む　粘性強い　　口縁内部は火熱で黒く変色　　焼成良好
78	白　磁 口はげ皿	口径(9.4cm) 底径(6.0cm) 器高 2.9cm　口唇部の釉薬を拭う　外面下部と底部は露胎 素地は灰白色で黒色微砂粒を含み堅緻　　釉薬は淡緑灰色透明　　焼成良好
79	白　磁 口はげ皿	口径(10.2cm)　底径 (6.3cm)　器高 2.1cm　　口唇部の釉薬を拭う 素地は淡灰色で微砂粒を含む　　釉薬は淡青灰色半透明　　焼成良好
80	白　磁 口はげ皿	口縁部の小片　寸法不明　口唇部の釉薬を拭う 素地は灰白色で微砂粒を含み粘性が強い　　釉薬は淡青灰色半透明　　口唇部にタール付着　灯明皿か　焼成良好
81	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部～体部の小片　寸法不明　　外面に片切り彫りの縞蓮弁文　複弁 素地は灰白色　微砂粒を含み粘性が強い　釉薬は淡灰緑色半透明　　焼成良好
82	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部～体部の小片　寸法不明　　外面に片切り彫りの縞蓮弁文　複弁 素地は淡灰色　微砂粒を含むが堅緻　　釉薬は灰緑色透明　気泡が多い　　焼成良好
83	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部～体部の小片　寸法不明　　外面に片切り彫りの縞蓮弁文　単弁 素地は灰白色　微砂粒を含み粘性が強い　　釉薬は灰青緑色半透明　気泡多い　　焼成良好
84	青白磁 瓶　子	口径(6.8cm) 底部小片　　高台貼り付け　　外面体部に陰刻蓮弁文　　素地は微砂粒を少量含む　粘性強い 釉薬は淡青色透明　気泡多い　内面と高台内および畳付きは露胎　　焼成良好
85	漆器皿	底径 6.0cm　　内外面ともに黒漆塗りに朱漆で竹文
86	漆塗り櫛	長さ 4.2cm　　幅 9.2 cm　　最大厚 1.0cm　　ほぼ完形品
87	漆塗り櫛	長さ 4.3cm　　幅(4.7 cm)　最大厚 1.0cm
88	木製羽子板	長さ(35.8cm)　幅(7.6cm)　　最大厚0.55cm　　板目
89	人　形	長さ(11.5cm)　幅 2.0cm　　最大厚0.35cm　　目鼻の表現はない

表13　若宮大路側溝７出土遺物観察表(4)

番号	種 別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土
図16 90	箸	長さ18.6cm　幅 0.65cm　最大厚 0.6cm　両口
91	箸	長さ20.9cm　幅 0.4cm　最大厚0.55cm　両口
92	箸	長さ21.7cm　幅 0.7cm　最大厚 0.4cm　両口
93	箸	長さ(20.0cm)　幅 0.7cm　最大厚 0.4cm　両口
94	箸	長さ20.0cm　幅 0.6cm　最大厚 0.4cm　両口か　先端が焼け焦げている
95	板草履	長さ22.9cm　幅(3.8cm)　最大厚0.25cm　藁の圧痕が残る
96	釘	長さ 4.8cm　幅 0.4cm　最大厚0.25cm
97	釘	長さ 7.2cm　幅 0.4cm　最大厚0.45cm
98	火 箸	長さ27.5cm　最大径 0.9cm

表14　若宮大路側溝７出土遺物観察表(5)

遺構	番号	種 別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
土壙 7	図17 25	土 師 器 T種 小型	口径10.1cm　器高 2.1cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質を含む　底部途中央に径1cm の穿孔が貫通する　焼成良好
	26	土 師 器 R種 小型	口径(8.8cm) 底径(7.8cm) 器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色で砂粒を多く含みザラついている　焼成良好
	27	土 師 器 転用 円盤	長径 3.7cm　短径 3.5cm　厚さ 0.9cm　土師器底部の転用品 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む
土壙 10	28	渥 美 壺	最大径14.8cm　輪積み成形 胎土は暗灰色で微砂粒を含みきめ細かい　釉薬はハケ塗り後降灰釉
土壙 11	29	竜泉窯青磁 画花文 碗	口縁部片　ロクロ成形　内面に画花文 素地は灰色で微砂粒をごく少量含む　釉薬は暗緑色で透明

表15　土壙７・土壙10・11出土遺物観察表

番号	種 別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図18 1	土 師 器 T種 小型	口径 9.4cm　器高 1.9cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡茶色で砂粒・白色針状物質・白色粒子を含みきめ細かい　焼成良好
2	土 師 器 T種 小型	口径10.2cm　器高 2.3cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で微砂粒・白色針状物質を含みきめ細かい　焼成良好
3	土 師 器 T種 大型	口径12.7cm　器高 3.2cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 淡灰橙色で微砂粒・白色針状物質・白色粒子・雲母を含む　焼成良好　完形
4	土 師 器 R種 小型	口径 8.0cm　底径 6.0cm　器高 1.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含みザラついている　焼成良好
5	土 師 器 R種 小型	口径 9.0cm　底径 6.2cm　器高 1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡茶色で砂粒を多量に・白色針状物質・雲母を含む　焼成良好
6	土 師 器 R種 大型	口径13.3cm　底径 8.8cm　器高 2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡茶色で砂粒を多量に・白色針状物質・雲母を含みザラついている　焼成良好　完形
7	土 師 器 R種 大型	口径13.3cm　底径 8.4cm　器高 2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・雲母・赤色粒子を含む　焼成良好　略完形

表16　土壙８出土遺物観察表（１）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図18 8	山　茶　碗 南部系	口縁部片　　口径(13.3cm)　　ロクロ成形 胎土は灰色で微砂粒を含む　気孔あり　　焼成良好
9	白　磁 口はげ皿	口径(9.6cm)　底径(6.4cm)　器高1.45cm　　ロクロ成形 素地は乳白色で微砂粒を含む　　釉薬は無色透明　内面と外面上半部に施釉
10	同安窯系青 磁櫛描文碗	口径(15.2cm)　　ロクロ成形　　内面口縁部直下に沈線を施す　　内外面ともに櫛描き文 素地は黄灰色で微砂粒を含む　気孔あり　　釉薬は暗灰緑色で透明
11	同安窯系青 磁櫛描文皿	底径4.4 cm　　ロクロ成形　　内底部に櫛描き文 素地は黄灰色で微砂粒を含みきめ細かい　　釉薬は暗灰緑色で透明　　外底部は露胎
12	箸	長さ26.8cm　幅 0.8cm　厚さ 0.6cm　　両口
13	箸	長さ19.0cm　幅 0.6cm　厚さ 0.4cm　　両口

表17　土壙8出土遺物観察表（2）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図18 14	土　師　器 R種　小型	口径 8.3cm　底径 5.3cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形
15	土　師　器 R種　小型	口径 8.3cm　底径 6.8cm　器高 1.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で微砂粒を多量に・赤色粒子・白色針状物質を含む　　焼成良好　　完形
16	土　師　器 R種　大型	口径12.0cm　底径 7.7cm　器高 2.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒を多量に・赤色粒子・白色針状物質・雲母を含みザラついている　　焼成良好
17	土　師　器 R種　大型	口径(12.6cm)　底径(9.2cm)　器高2.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒を多量に・赤色粒子・雲母を含みザラついている　　焼成良好
18	同安窯系青 磁櫛描文碗	口縁部片　　ロクロ成形　　外面に櫛描き文 素地は灰色で微砂粒を含む　　釉薬は淡灰緑色で半透明
19	竜泉窯青磁 画花文　碗	口縁部片　　ロクロ成形　　口縁部は輪花状　　内面に雲形の画花文 素地は灰白色で微砂粒を含む　　釉薬は淡灰緑色で半透明
20	竜泉窯青磁 画花文　碗	口縁部片　　ロクロ成形　　内面口縁部直下に沈線を巡らす 素地は灰色で微砂粒を含む　　釉薬は淡灰緑色で半透明
21	竜泉窯青磁 画花文　碗	口縁部片　　ロクロ成形　　内面に蓮花文を配し口縁部直下に沈線を巡らす 素地は灰白色で微砂粒を含む緻密土　　釉薬は淡灰緑色で半透明
22	箸	長さ24.5cm　幅 0.6cm　厚さ 0.6cm　　両口　　完形
23	不明木製品	長さ24.6cm　幅 1.0cm　厚さ 0.3cm
24	棒状木製品	長さ31.2cm　幅 1.0cm　厚さ 1.0cm

表18　土壙9出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図19 27	土　師　器 T種　大型	口径11.8cm　器高 3.3cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰褐色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む　　二次焼成を受ける　　焼成良好
28	土　師　器 T種　大型	口径14.4cm　器高 3.4cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で微砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　灯明皿　口縁部にスス付着　　焼成良好　　完形
29	土　師　器 R種　小型	口径(9.0cm) 底径(7.8cm) 器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒を多く含み粗い　　焼成良好

表19　土壙14出土遺物観察表（1）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
30	土師器転用 円　盤	長径 4.4cm　短径 4.2cm　厚さ 0.9cm 胎土は暗灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む
31	土師器転用 円　盤	長径 2.8cm　短径 2.5cm　厚さ 0.9cm 胎土は暗灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む
32	渥美こね鉢	口縁部の小片　　胎土は黒褐色で白色粒子を少量含む
33	竜泉窯青磁 画花文　碗	口縁部片　　内面に画花文　口縁部直下に２本の沈線を巡らす 素地は灰白色で微砂粒を含む　　釉薬は灰緑色で透明　微気泡が多い
34	竜泉窯青磁 画花文　碗	底部の小片　　内底面にかすかに画花文が認められる 素地は灰色で微砂粒を多く含む　　釉薬は淡緑褐色で透明
35	青白磁 水　注	胴部片　　型押しで頸部に蓮弁文　胴部に葉文を配す 素地は灰白色で微砂粒を含む緻密土　　釉薬は青白色で透明　　注口は脱落して無い
36	丸　瓦	寸法不明　　胎土は灰色　胎芯部は黒灰色　微砂粒含む　きめ細かい 凸面は縄叩き目　凹面は布目　抜き紐痕あり　側面はヘラ削り　　焼成良好
37	平　瓦	寸法不明　　胎土は暗灰色　砂粒・雲母含む 凸面は縄叩き目　凹面は布目後ナデ　側面はヘラ削り　　離れ砂　　焼成良好
38	平　瓦	寸法不明　　胎土は暗灰色　砂粒・雲母含む 凸面は縄叩き目　凹面は布目後ナデ　側面はヘラ削り　　37の平瓦とは同一遺物の可能性が大きい
39	箸	長さ20.7cm　幅 0.7cm　厚さ 0.3cm　　両口
40	箸	長さ23.4cm　幅 0.6cm　厚さ 0.3cm　　両口
41	箸	長さ23.8cm　幅 0.5cm　厚さ 0.5cm　　両口
42	箸	長さ23.6cm　幅 0.6cm　厚さ 0.3cm　　両口
43	箸	長さ25.9cm　幅 0.7cm　厚さ 0.8cm　　両口
44	木製串	長さ22.1cm　幅 1.0cm　厚さ 0.9cm
45	木製串	長さ32.2cm　幅 1.3cm　厚さ 1.1cm
46	不明木製品	長さ15.5cm　幅(4.3cm) 厚さ 1.6cm

表20　土壙14出土遺物観察表（２）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図20 1	常　滑 甕	口縁部片　　輪積み成形　　内面に指頭痕あり　　胎土は灰色で微砂粒・雲母・長石・泥岩粒を含み堅緻 外面肩部に降灰　　内面頸部に油の残滓と思われる黒色の物質が帯状に付着　　焼成良好

表21　建物１出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図21 1	土　師　器 T種　大型	口径(15.8cm)　器高 2.6cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰褐色で砂粒・雲母・白色針状物質を含む精良土　　焼成良好
2	土　師　器 R種　大型	底径 8.1cm　　底部静止糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒を多量に・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
3	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　　口径(23.8cm)　　成形は輪積み後ロクロ 胎土は灰白色で微砂粒・長石粒・黒色粒を含み精良　　焼成良好
4	竜泉窯青磁 画花文　碗	口縁部片　　ロクロ成形　　内面に画花文 素地は灰色で微砂粒を含む　　釉薬は淡緑灰色で透明

表22　集石遺構出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
図22 1	土師器 T種 小型	口径 8.6cm 器高 2.0cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・白色粒子を含む 焼成良好
2	土師器 T種 小型	口径 9.4cm 器高 1.5cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で砂粒を多量に・白色粒子・雲母を含む 焼成良好
3	土師器 T種 小型	口径 9.5cm 器高 1.7cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰茶色で微砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好
4	土師器 T種 小型	口径 9.6cm 器高 1.9cm 手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で微砂粒を含む精良土 焼成良好
5	土師器内折型R種小型	口径 5.6cm 底径 4.1cm 器高 1.1cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色で砂粒・雲母・白色粒子を含む 焼成良好
6	土師器 R型 小型	口径 8.2cm 底径 6.9cm 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む 焼成良好
7	土師器 R種 小型	口径(9.3cm) 底径 5.8cm 器高 1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰茶色で砂粒・白色粒子・雲母を含む 焼成良好
8	土師器 R種 小型	口径 9.0cm 底径 6.6cm 器高 1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好
9	土師器 R種 小型	口径(9.4cm) 底径(6.4cm) 器高 2.1cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・赤色粒子・雲母を含む 焼成良好
10	土師器 R種 小型	口径(9.8cm) 底径(7.8cm) 器高 1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰茶色で砂粒を多く・白色針状物質・白色粒子を含み粗い
11	土師器 R種 小型	口径 9.4cm 底径 7.2cm 器高 1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で微砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む 灯明皿 口縁部にスス付着 外面の剥離が著しい
12	土師器 R種 大型	口径12.7cm 底径 7.8cm 器高 2.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子を含む 焼成良好
13	土師器 R種 大型	口径(13.5cm) 底径(6.0cm) 器高 3.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む 二次焼成を受ける 焼成良好
14	土師器 転用円盤	長径 2.8cm 短径 2.5cm 厚さ 1.3cm 底部の転用品 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む
15	同安窯系 青磁 皿	底部片 底径(5.6cm) 内底部に型押しで葉文 沈線を巡らす 外底部は回転ヘラ削り 露胎 素地は灰白色で微砂粒を含み緻密 釉薬は淡灰緑色透明
16	青白磁 皿	口縁部片 口径 9.0cm ロクロ成形 口唇部に抉り目を入れた六弁の輪花型 素地は灰白色で微砂粒を含む 釉薬は淡青色で透明 外面下部は露胎
17	青白磁 碗	底部片 底径 5.6cm 高台は貼り付け 素地は灰白色で微砂粒を含む 気孔あり 釉薬は淡青色で透明
18	釘	長さ 7.8cm 幅 0.8cm 厚さ0.25cm
19	釘	長さ10.0cm 幅 0.9cm 厚さ 0.6cm
20	刀形	長さ23.4cm 幅 1.9cm 厚さ 0.4cm 柾目取り

表23　3面上包含層出土遺物観察表

番号	種別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
図23 1	土師器 T種 小型	口径 9.6cm 底径 6.1cm 器高 1.7cm 手づくね後内底部 口縁部ナデ 胎土は灰茶色で砂粒を多量に・白色針状物質・雲母を含む 焼成良好 完形

表24　4面上出土遺物観察表（1）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
2	土　師　器 R種　小型	口径 8.7cm　底径 6.3cm　器高 1.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切りの目が粗い　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は灰橙色で微砂粒・白色針状物質を含む精良土　胎芯部は暗灰色　　灯明皿　口縁部にスス付着　　焼成良好
3	土　師　器 R種　大型	口径12.6cm　底径 8.4cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・雲母　赤色粒子・泥岩粒を含み粗い　　焼成良好
4	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm　底径 6.9cm　器高3.25cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は橙色で微砂粒・雲母を少量含む精良土　　器形は薄い　　焼成良好

表25　4面上出土遺物観察表（2）

図24 1	渥美甕 転用硯	長さ11.4cm　幅 6.9cm　最大厚 1.2cm　　甕の胴部片の内面を硯に転用 胎土は暗灰色で微砂粒を含みキメ細かい　　一部に墨が付着　　中央部は磨滅
2	同安窯系青 磁画花文碗	底部片　　底径 5.1cm　　ロクロ成形　　高台削り出し　　内底部に画花文 素地は灰色で微砂粒を僅かに含む緻密土　　釉薬は暗緑色透明　　残存外面は露胎
3	箸	長さ21.3cm　最大幅 0.6cm　最大厚 0.4cm　　両口
4	箸	長さ22.1cm　最大幅 0.7cm　最大厚 0.3cm　　両口
5	箸	長さ23.3cm　最大幅 0.9cm　最大厚 0.6cm　　両口
6	箸	長さ27.5cm　最大幅 0.6cm　最大厚 0.5cm　　両口
7	箸	長さ27.2cm　最大幅 0.5cm　最大厚0.65cm　　両口
8	木製串	長さ26.6cm　最大幅 1.2cm　最大厚 0.9cm
9	木製串	長さ(31.3cm)　最大幅 1.2cm　最大厚1.1 cm
10	不明木製品	長さ27.3cm　最大幅 3.6cm　最大厚 0.3cm

表26　井戸3出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図25 1	土　師　器 T種　大型	口径(13.6cm)　器高(3.2cm)　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好
2	土　師　器 R種　大型	口径(13.0cm)　底径(9.7cm)　器高2.55cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰茶色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好
3	土　師　器 R種　小型	口径 8.6cm　底径 5.0cm　器高1.85cm　　右回転ロクロ　底部糸切り 胎土は灰茶色で砂粒・白色針状物質・雲母・白色粒子を含む　　焼成良好
4	土　師　器 R種　小型	口径 9.4cm　底径 7.4cm　器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・雲母・泥岩粒を含む　　焼成良好　　略完形
5	常　滑 甕	口縁部片　　輪積み成形 胎土は灰色で砂粒・長石粒・黒色粒を含み粘性がある　　口縁部内外面に降灰
6	漆器　椀	底部片　底径 7.6cm　　平高台の下部に十字形と斜め十字形の彫り込みがある　内底部は黒漆塗り　高台下は素地
7	漆器　椀	口縁部が欠損　　最大径15.2cm　底径7.2cm　内外面ともに黒漆塗り　無文

表27　土壙17出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図26　8	漆器皿	口径10.3cm　底径 7.4cm　器高 1.9cm　　平高台　　全面黒漆塗り　無文
9	不明木製品	長さ23.5cm　最大幅(6.3cm)　厚さ0.5cm　　隅丸の方形または長方形　　釘孔が2個　　刀痕が多数 曲物の底と思われる　　後転用まな板

表28　土壙22出土遺物観察表

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
図26 10	土　師　器 T種　大型	口径13.2cm　器高 3.3cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で微砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む精良土　　二次焼成を受ける　　焼成良好　　完形
11	土　師　器 T種　大型	口径12.7cm　器高 3.4cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰茶色で微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・雲母を含む　　焼成良好
12	土　師　器 T種　大型	口径13.7cm　器高 3.3cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で微砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好
13	土　師　器 R種　大型	口径(12.2cm)　底径(7.5cm) 器高 2.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒と赤色粒子を多量に・白色針状物質を含む　　焼成良好
14	土　師　器 R種　大型	口径12.9cm　底径 9.7cm　器高3.05cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒と赤色粒子を多量に・雲母・白色針状物質を含む　　焼成良好

表29　土壙19出土遺物観察表

図26 15	土　師　器 T種　小型	口径 8.9cm　器高 1.7cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で砂粒・白色粒子を含む　　焼成良好　　略完形
16	土　師　器 T種　小型	口径 8.7cm　器高 2.2cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 灰茶色で微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　略完形
17	土　師　器 T種　大型	口径13.4cm　器高 3.5cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で微砂粒・白色針状物質雲母を含む　　口縁部にスス付着　　焼成良好
18	土　師　器 R種　小型	口径 9.4cm　底径 6.3cm　器高 2.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰茶色で微砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
19	土　師　器 R種　小型	口径 8.5cm　底径 5.8cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は砂粒を多く・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　口縁部にスス付着　　焼成良好　　完形
20	土　師　器 R種　大型	口径13.5cm　底径 8.7cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰茶色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含み粗い　　焼成良好
21	不明木製品	長さ9.3cm　幅8.8cm　厚さ1.2cm　八角形を呈し中央に0.6cm の孔を穿つ　　独楽か？

表30　土壙21出土遺物観察表

建物 2	図27 1	土　師　器 T種　小型	口径 9.8cm　器高 1.9cm　　手づくね後口縁部内底部ナデ 胎土は灰褐色で砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好
	2	漆　器 椀	底径 7.5cm　　ロクロ挽き成形　　高台は削り出し 全面黒漆塗り　内外面に朱漆で河骨（こうほね）文
建物 4	図28 3	土　師　器 T種　小型	口径10.8cm　器高 1.6cm　　手づくね後口縁部　内底部ナデ 胎土は淡灰褐色で微砂粒・雲母を多く・白色針状物質を含む　　底部に貫通穿孔あり　　焼成良好
建物 5	4	渥　美 こね鉢	口縁部の小片　　成形は輪積み 胎土は灰褐色で微砂粒・白色粒子を含む　粘性が強い　　磨滅しているがかすかにハケ塗りの釉薬が残る
	5	山茶碗 南部系	底径(8.4cm)　ロクロ成形　　高台は貼り付け 胎土は暗灰色で砂粒・白色粒子を含む　　高台内から外面体部下半にかけて二次焼成を受ける
	6	土　師　器 T種　大型	口径12.4cm　底径 6.5cm　器高3.65cm　　手づくね後口縁部　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で微砂粒・白色針状物質・雲母を含む精良土　　二次焼成を受ける　　焼成良好
建物 6	図29 7	平　瓦	寸法不明　　胎土は砂粒・白色粒を含み粘性が強い 凸面は縄叩き目の後横方向のハケナデ　凹面は布目　離れ砂　後縦横のハケナデ　側面はヘラ削り

表31　建物２・４・５・６出土遺物観察表

遺構	番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
p. 110	図31 1	土師器灯明 皿T種小型	口径 8.4cm　器高 2.1cm　　手づくね後内底部　口縁部ナデ　　略完形 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・雲母含む　　口縁部にスス付着　内面は剥離が著しい　　焼成良好
p. 119	2	渥　美 甕	口縁部の小片　　成形は輪積み 胎土は暗灰色で粘性が強い　　内外面に灰釉をハケ塗り
p. 139	3	渥　美 こね鉢	口縁部の小片　　成形は輪積み後ロクロ 胎土は暗灰色で白色粒子を多量に含む　　無釉
	4	釘	長さ 7.2cm　幅 0.4cm　厚さ0.45cm
p. 144	5	土　師　器 T種　小型	口径 9.5cm　器高 1.8cm　　手づくね後口縁部　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で微砂粒を多量に・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
	6	土　師　器 R種　小型	口径(10.4cm)　底径(8.0cm) 器高 1.9cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好
p. 162	7	土　師　器 T種　大型	口径13.8cm　器高3.2cm　　手づくね後内底部　口縁部ナデ 胎土は橙色　微砂粒・白色針状物質を含む　焼成良好

表32　4面小穴出土遺物観察表

図32 1	土　師　器 T種　小型	口径 9.2cm　器高1.75cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で微砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好　　完形
2	土　師　器 T種　小型	口径 9.3cm　器高 2.0cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で微砂粒・白色針状物質・雲母を含む　焼成良好　　略完形
3	土　師　器 T種　小型	口径 9.3cm　器高 1.7cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ底部糸切り　内底部ナデは不明　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
4	土　師　器 T種　小型	口径 9.5cm　器高 1.8cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は赤橙色で微砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好
5	土　師　器 T種　小型	口径 9.4cm　器高 1.9cm　　手づくね後口縁部ナデ 胎土は淡橙色灰橙色で砂粒を多量に・白色針状物質含む　　焼成良好
6	土　師　器 T種　小型	口径 9.7cm　器高1.55cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰褐色で微砂粒・白色針状物質をふくむ　　焼成良好
7	土　師　器 T種　大型	口径11.5cm　器高 3.7cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒をふくむ　　焼成良好
8	土　師　器 R種　小型	口径 9.6cm　底径 6.3cm　器高 1.8cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒を多く・赤色粒子・白色粒子を含みザラつく　　焼成良好
9	土　師　器 R種　小型	口径 9.6cm　底径 7.1cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む　　口縁部に口縁部にスス付着　内外面とも剥離　　焼成良好
10	土　師　器 R種　小型	口径 9.3cm　底径 6.8cm　器高 1.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好
11	土　師　器 R種　小型	口径 8.4cm　底径 6.7cm　器高1.85cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・白色粒子・泥岩粒を含む　　焼成良好
12	土　師　器 R種　小型	口径 9.3cm　底径 6.8cm　器高 1.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で微砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む　　焼成良好
13	常　滑 甕	口縁部片　　成形は輪積み 胎土は褐色で砂粒・白色粒・長石粒を含む　　外面縁帯から肩部にかけて降灰
14	常　滑 甕	体部片　　輪積み成形　　体部に部分的に叩き文あり 胎土は灰色で砂粒・長石・黒色粒子を含み粘性が強い　　色調は茶色　　焼成良好

表33　4面上包含層出土遺物観察表（1）

番号	種　別	大きさ　　せいけい　　素地・胎土　　その他特徴など
15	渥　美 甕	体部片　　輪積み成形　　体部に叩き文あり 胎土は淡灰橙色できめ細かく粘性が強い　　色調は暗灰色　　焼成良好
16	常　滑 こね鉢Ⅰ類	口縁部片　　成形はロクロ仕上げ 胎土は灰色で砂粒・黒色粒子を含む　きめ細かい　　焼成良好
17	白　磁 端反碗	口縁部片　　口径(16.2cm)　無文 素地は灰色で微砂粒を少量含む　気孔あるが堅緻　無色透明釉が薄くかかる　　焼成良好
18	釘	長さ 6.6cm　最大幅 3.5cm　最大厚 4.5cm
19	漆　器 皿	口径(9.5cm) 底径(6.6cm) 器高 1.1cm　全面黒漆塗りの無文皿 高台は削りだしの輪高台

表34　4面上包含層出土遺物観察表（2）

図34 1	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 4.7cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形
2	土　師　器 R種　小型	口径 7.7cm　底径 5.3cm　器高 1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で微砂粒・白色針状物質・白色粒子を含む　　焼成良好　　完形
3	土　師　器 R種　小型	口径 8.2cm　底径 6.8cm　器高 1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で微砂粒・泥岩粒を含む　　焼成良好
4	土　師　器 R種　小型	口径 8.5cm　底径 4.8cm　器高 1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡橙色で微砂粒・白色針状物質・金雲母を含む精良土　　焼成良好
5	土　師　器 R種　大型	口径11.8cm　底径 8.0cm　器高 3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰赤褐色で砂粒・白色針状物質・泥岩粒・泥岩粒・赤色粒子を含む　やや粗い　灯明皿　口縁部にスス付着
6	土　師　器 R種　大型	口径12.0cm　底径 7.0cm　器高3.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好
7	土　師　器 R種　大型	口径12.4cm　底径 8.2cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・赤色粒子・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好　　完形
8	土　師　器 R種　大型	口径12.3cm　底径 7.7cm　器高 1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む　　焼成良好
9	土　師　器 R種　大型	口径12.6cm　底径 8.0cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・泥岩粒を含む　　焼成良好
10	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm　底径 7.3cm　器高3.25cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・雲母・白色粒子を含む　　焼成良好
11	土　師　器 R種　大型	口径12.8cm　底径 8.9cm　器高 3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・泥岩粒を含む　　焼成良好
12	土　師　器 R種　大型	底径(8.0)cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質を含む　　焼成良好
13	渥　美 甕	頸部の小片　　輪積み成形 胎土は灰色で少量の微砂粒・礫を含む　堅緻　　釉薬は灰釉ハケ塗り　　肩部に降灰　　焼成良好
14	軒丸瓦	瓦頭部の小片　　三つ巴文の周縁に連珠文を配する 胎土は灰白色で砂粒・小石粒を多量に含む　粘性が強い　　焼成普通

表35　北壁出土遺物観察表

図36 1	土　師　器 T種　小型	口径 8.8cm　器高 1.7cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含む　　焼成良好
2	土　師　器 T種　小型	口径 9.4cm　器高1.85cm　　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色針状物質・白色粒子・雲母を含む　　二次焼成を受ける　　焼成良好

表36　溝5出土遺物観察表（1）

3	土　師　器 R種　小型	口径 8.6cm　底径 7.3cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒を多く・赤色粒子・白色針状物質を含む　ザラついている　　焼成良好
4	白　磁 端反碗	口縁部片　　ロクロ成形　　内面口縁部直下に沈線を巡らす 素地は灰色で微砂粒を含み緻密　　釉薬は淡黄灰色透明
5	白　磁 端反碗	口縁部の小片　　ロクロ成形 素地は灰白色で微砂粒を含み緻密　　釉薬は無色透明
6	竜泉窯青磁 無文碗	口縁部片　　口径(14.4cm)　　口縁部直下に沈線を巡らす 素地は黄灰色で微砂粒を含む　　釉薬は淡灰緑色で透明　気泡が多い
7	竜泉窯青磁 画花文　碗	底部片　　底径 5.6cm　　内底部に蓮花文　　沈線を巡らす　　高台は削りだし　　高台内は露胎 素地は暗灰色で微砂粒を含む　　気孔あり　　釉薬は暗緑色透明　気泡が多い
8	青白磁 皿	口縁部片　　口径(9.4cm)　　内底部に沈線を巡らす　無文 素地は灰白色で微砂粒を含む　　釉薬は淡青色で透明　気泡あり
9	木製櫛	長さ(1.9cm)　幅(2.6cm)　厚さ0.8cm　　白木地のまま
10	漆器皿	底部片　　底径 7.0cm　　平高台　　全面黒漆塗り　　無文

表37　溝5出土遺物観察表（2）

図38 1	瀬　戸 盤	口径(38.2cm)　　ロクロ成型　口縁部を玉縁状に折り返す 胎土は黄土色で微砂粒を僅かに含む　　緑褐色の透明釉を全面に漬掛け
2	肥　前 染付　皿	口径 7.6cm　底径 5.5cm　器高 1.6cm　　内外面に植物文 素地は灰白色で微砂粒を含む　堅緻　呉須は淡藍色と藍色　釉薬は透明　　18世紀
3	土　師　器 R種　小型	口径 7.8cm　底径 4.9cm　器高1.75cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰茶色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子を含む　　焼成良好　　完形
4	土　師　器 R種　小型	口径 7.6cm　底径 5.3cm　器高 1.5cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形
5	土　師　器 R種　小型	口径 7.6cm　底径 5.5cm　器高 1.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰褐色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好　　完形
6	土　師　器 R種　小型	口径 7.5cm　底径 5.3cm　器高 1.7cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰褐色で砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
7	土師器灯明 皿R種中型	口径 9.2cm　底径 4.9cm　器高 3.0cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は淡灰橙色で微砂粒・雲母・赤色粒子を含む精良土　　口縁部にスス付着　　焼成良好　　完形
8	土　師　器 R種　大型	口径12.0cm　底径 6.7cm　器高 3.4cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は灰橙色で砂粒・白色針状物質・雲母を含み泥岩粒が多く混入　内底に黄茶色の物質が付着　焼成良好　完形
9	土　師　器 R種　大型	口径12.3cm　底径 8.0cm　器高 3.6cm　　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底面に板状圧痕あり 胎土は橙色で砂粒・白色針状物質・赤色粒子・雲母を含む　　焼成良好
10	瀬　戸 卸し皿	底部片　　底径(6.8cm)　外底部回転糸切り 胎土は黄白色できめがやや粗い　　釉薬は淡灰緑色で半透明
11	瓦　質 すり鉢	口縁部片　　成形は輪積み　　内面はハケナデ後筋目　　外面は指頭成形 胎土は灰白色で微砂粒・礫を含みやや粗い　　北関東系か
12	土器手焙り	口縁部の小片　　成形は輪積み　胎土は土師器質で淡赤褐色　砂粒と白色針状物質を多く含む　　内面は火熱のため黒く変色
13	瓦　器　碗	口縁部片　　口径(10.9cm)　　胎土は黒灰色のきめ細かい瓦質　　口唇部は灰白色
14	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片　　口径(15.7cm)　　複弁 素地は灰色で微砂粒・白色粒子を含む　　釉薬は緑灰色で透明
15	青白磁 梅　瓶	胴部片　　ロクロ成形　　文様は渦文 素地は灰白色で微砂粒を含み緻密　　釉薬は水色透明　　内面は一部露胎

表38　採集遺物観察表

9．出土の貝類について

北に隣接する雪ノ下一丁目271番３地点と一括して報告する。本地点とあわせて整理箱２箱の貝類が出土している。

面別に点数を集計した。３面からの出土量が78.7%を占めるが、そのうち側溝内のものが72%である。同様に１面、２面も側溝からの出土量が占める割合はそれぞれ54%、80%と大きい。全体に側溝にゴミとして棄てられたものという性格が強いと言えよう。３面からは貝砂を敷きつめた遺構も検出されているが、貝の種類を特定することができないため、本表に反映することはできなかった。

最も多く出土しているハマグリ類は、固くしっかりした個体と表面が白く粉質化したものとの二種類がみられる。後者は茹でるなどの加熱を受けたためと考えられるが、脆く割れやすくなっている。ハマグリには、ハマグリ（内湾砂底に生息）とチョウセンハマグリ（湾外砂底に生息）の種別があるが、前述したように破片化したものが多いためすべてを判別することができなかった。個体の残りのよいもの見るとハマグリ43%、チョウセンハマグリ57%である。アワビもしっかりした個体の他に、表面が薄く層状に剥離し割れやすくなっている個体があり、火を受けた可能性が考えられる。

構成比で見ると、ハマグリ43.7%・アワビ24.1%・アカニシ10.9%・サザエ6.0%・キサゴ5.6%・ダンベイキサゴ２.6%・クボガイ２.6%・イガイ２.0%・バイガイ０.6%・　カキ０.6%となる。これは中世鎌倉遺跡から出土する貝類は、地域によって消費される種類が異なっていた可能性があり、都市内の中枢域に位置する北条時房・顕時邸跡ではチョウセンハマグリやダンベイキサゴ、ハマグリ、アワビが高比率で出土し、アカニシやバイガイといった泥底群集は低い出土率を示すという指摘（宗臺 1999）に大体一致する傾向を示している。注目されるのは、食用に搬入された貝類にたまたま混入したにしてはやや大きめの比率を示すクボガイとイガイである。どちらもアワビやサザエと同じ外海岩礁を生息域とするためついでに採取されている可能性はあるが、これまで中世鎌倉の遺跡である程度まとまった量の出土は報告されていない。縄文貝塚に含まれているクボガイ・イガイが中世においても一般的食用に供されていたかどうかは、今後出土貝類の資料が集積することで明らかになるものと思われる。

（松原）

注

宗臺秀明 1999　「中世鎌倉の貝類採取と消費」『東国歴史考古学研究所紀要』第１集

	ﾊﾏｸﾞﾘ	ｱﾜﾋﾞ	ｱｶﾆｼ	ｻｻﾞｴ	ｷｻｺﾞ	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ	ｸﾎﾞｶﾞｲ	ｲｶﾞｲ	ﾊﾞｲｶﾞｲ	ｶｷ	ﾂﾒﾀｶﾞｲ	ｲﾀﾔｶﾞｲ	ｲｼﾀﾞﾀﾐ	ﾐﾙｸｲｶﾞ	ﾍﾋﾞｶﾞｲ	ｻﾙﾎﾞｳ	ﾊﾞﾃｲﾗ	ｼﾛｽｿｶｹｶﾞ	合計
1面	17	15	11	3	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	51
2面	15	4	6	4	0	1	0	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	35
3面	307	171	62	36	31	12	5	14	2	2	1	1	0	2	0	1	0	1	648
4面	16	4	8	4	14	7	14	0	1	2	0	0	2	0	0	0	1	0	73
その他	5	4	3	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	16
合計	360	198	90	49	46	21	21	16	5	5	2	2	2	2	1	1	1	1	823

表39　貝類出土点数表

第４章　調査のまとめ

１．遺構の変遷について

古代

約５ｍの間隔を置いて隅丸形の土壙が２基検出された。遺物が出土しておらず年代や性格など詳細は不明である。しかし、本地点南南東約200ｍの地点（図１地点58）で鉈尾が出土していること、南南西約200ｍの地点（同地点16）から奈良～平安時代前期の掘立柱建物が発見されていることや、層位などからも判断しておそらく律令期に属すると考えたい。

平安時代末期

東西溝（溝５）は若宮大路と直交せずその下に潜り込み、東から西に向かって流れる。また、両者のどちらの軸線をも意識していない溝（溝４）も検出されている。詳細な年代はともかく、層位と状況からみていずれも平安時代末期にさかのぼる可能性が高い。近在で過去検出された同様の溝とあわせ、ここで簡単に要点に触れておきたい（図39）。

溝５は雪ノ下一丁目273番１-ロ地点（図１地点４）の「東西溝Ⅱ」とほぼ平行している。規模は異なるが２本とも整った逆台形の断面を持つ点でも共通しており、両者はおおむね同時期とみてよいだろう。芯心距離は500分の１の地図上の計測でおよそ33ｍを測る。これは後世の鎌倉時代の町割と同様の単位を示すがこの点についての検討はもう少し資料の蓄積を待たねばならない。注意したいのは逆台形というその断面形状で、これはたとえば大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下四丁目620番５地点（図１地点81）などで検出されている当該期の溝にも見られる。あるいは平安末～鎌倉時代前期に特徴的な要素なのかもしれない。溝４を延長すると雪ノ下一丁目271番１地点の「溝５」に行き当たる。両者はおそらく同一の溝であろう。主軸方位は近在のどの溝とも平行も直交もしない。出土遺物に恵まれないため年代は不詳だが、今後注意していく必要がある。

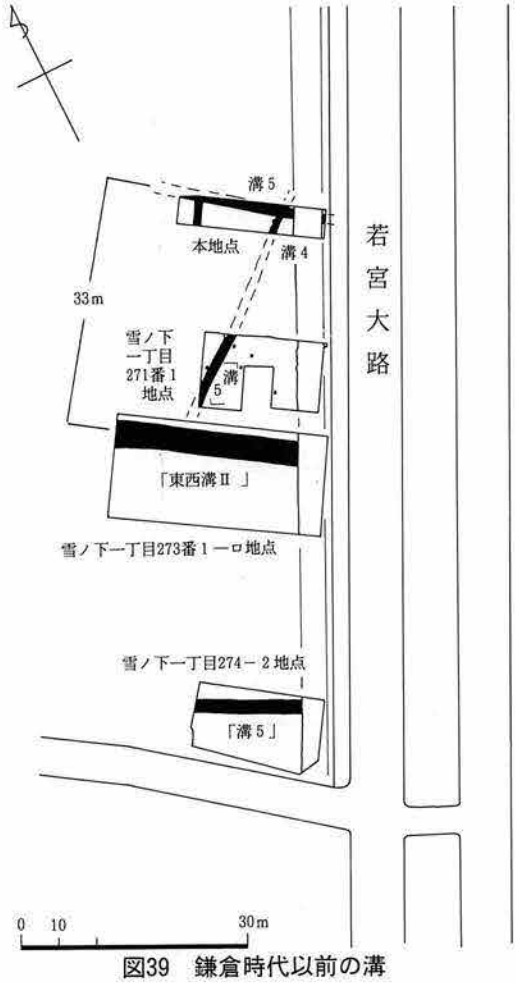


図39　鎌倉時代以前の溝

鎌倉時代

４枚の生活面を確認した。部分的にはさらに細かく修復された面などもある。その変遷についてはいずれ詳論するつもりでいるので、今回は第三章の各節に事実を記述するにとどめたい。

若宮大路側溝については、梁や付帯施設の構造など、なお不明な点が山積みしている。対岸の東側の情況とあわせ、もう少し資料の蓄積が欲しいところである。大きな問題のひとつに、東側で発見されているような最初期の大路側溝が、こちら側でいまだ見えないことがある。現況道路の下にそれがあるのかどうか、辛抱強く調査機会をまつしかあるまい。これについては、雪ノ下一丁目274番-２地点の「溝５」（図39）が大路に直交しながらも側溝下に潜り込んでいる点に何らかの手がかりが見出せるかもし

れない。ただし、この溝は西に向かって流れているので、鎌倉時代以前である可能性も十分にある。

近世

近世の若宮大路一帯の様相はいまだ詳らかではない。しかし大路東側などでもいくつか遺構の検出が報告されつつあり、これも近い将来の整理に委ねたい。

2．遺物について

表40に出土点数と構成比を示した。全体では84%を土師器が占める。この数値は市内の他地点では、都市中核部に相当する（大倉幕府周辺遺跡群二階堂字荏柄38番１地点・北条小町邸跡雪ノ下一丁目377番７地点など－馬淵1997)。これのみで調査地点の性格を推定することはできないが、有力な手がかりではあろう。

注

馬淵和雄1997　「中世食文化の諸相　食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』　71集

全体構成

		土師器	土製品	国産陶磁	貿易陶磁	瓦	鉄製品	銭	石製品	木製品	骨製品	近世	古代	計
遺跡全体	点数	12,530	34	254	104	41	18	2	3	1,795	1	44	8	14,834
	構成比(%)	84.47	0.23	1.71	0.70	0.28	0.12	0.01	0.02	12.10	0.01	0.30	0.05	100.00

面別構成

		土師器	土製品	国産陶磁	貿易陶磁	瓦	鉄製品	銭	石製品	木製品	骨製品	計
1面	点数	2,212	18	43	9	16	2	0	1	44	0	2,345
	構成比(%)	94.33	0.77	1.83	0.38	0.68	0.09	0.00	0.04	1.88	0.00	100.00
2面	点数	1,271	3	26	13	4	2	0	2	92	0	1,413
	構成比(%)	89.95	0.21	1.84	0.92	0.28	0.14	0.00	0.14	6.51	0.00	100.00
3面	点数	7,522	9	95	44	16	8	1	6	1,058	1	8,760
	構成比(%)	85.87	0.10	1.08	0.50	0.18	0.09	0.01	0.07	12.08	0.01	100.00
4面	点数	1,184	4	55	25	4	5	0	1	531	0	1,809
	構成比(%)	65.45	0.22	3.04	1.38	0.22	0.28	0.00	0.06	29.35	0.00	100.00

土師器技法別構成

		R種			T種		その他		計
		大	中	小	大	小	極小	白色系	
遺跡全体	点数	8,509	573	2,112	991	317	10	18	12,530
	構成比(%)	67.91	4.57	16.86	7.91	2.53	0.08	0.14	100.00
1面	点数	1,842	56	291	10	3	4	6	2,212
	構成比(%)	83.27	2.53	13.16	0.45	0.14	0.18	0.27	100.00
2面	点数	973	57	173	53	12	1	1	1,270
	構成比(%)	76.61	4.49	13.62	4.17	0.94	0.08	0.08	100.00
3面	点数	5,133	456	1,390	397	133	5	8	7,522
	構成比(%)	68.24	6.06	18.48	5.28	1.77	0.07	0.11	100.00
4面	点数	404	2	206	422	148	0	2	1,184
	構成比(%)	34.12	0.17	17.40	35.64	12.50	0.00	0.17	100.00

国産陶磁器種類別構成

	常滑	渥美	こね鉢	山茶碗	瀬戸	信楽	備前	神出	魚住	計
1面	31		1	1	7			3		43
2面	19	1	3	1	1			1		26
3面	50	8	28	4	2	1	1	1		95
4面	36	11	3	2	1				2	55
その他	29		2		4					35

舶載陶磁器種類別構成

	青磁(竜泉窯系)					青磁(同安窯系)		白磁						青白磁						褐釉	計
	連弁文碗	画花文碗	その他碗	鉢	不明	碗	皿	碗	口はげ皿	四耳壺	皿	鉢	合子	梅瓶	皿	水注	碗	壺	壺	
1面	2	1	2	2					1				1							9
2面	4			1	2	3			1						1		1			13
3面	6	12	1		1	5		2	6	1	3	1			3	1		1	1	44
4面	1	14				3	1	1			1	1			1		2			25
その他	2	4					1	3						1	1				1	13

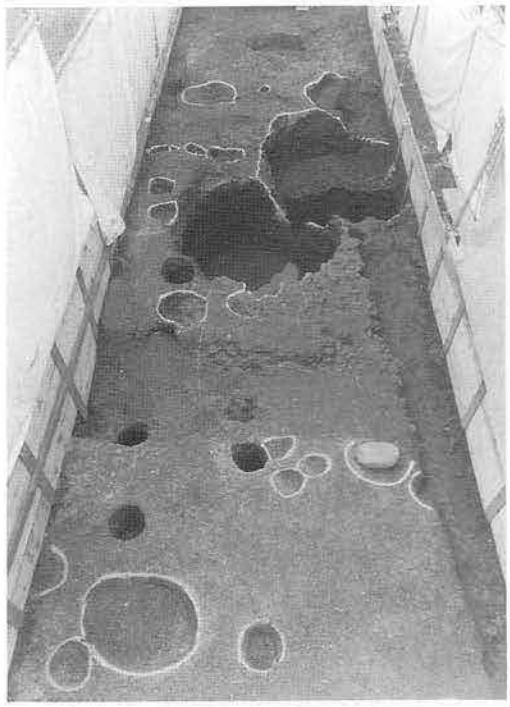
表40　遺物計数表

写　真　図　版

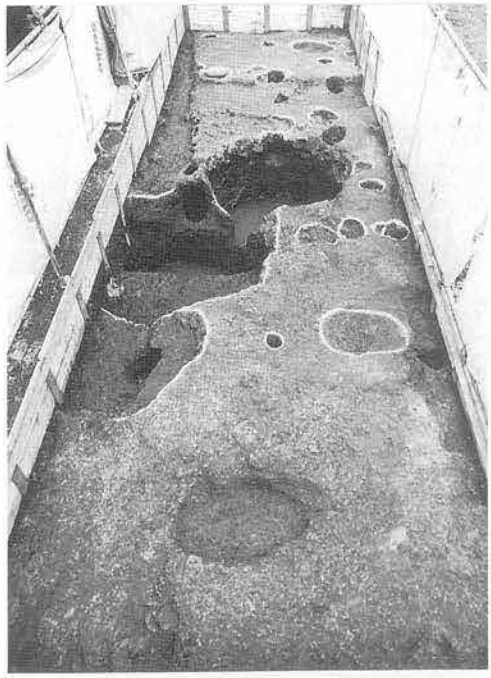
1．調査地点と若宮大路（鶴岡八幡宮方面を望む）

2．土坑2（近世、北から）

3　井戸2（近世・奥が近代の井戸1　東から）



4．1区1面（西から）



5．同前（東から）

6．同玉砂利部分（西から）

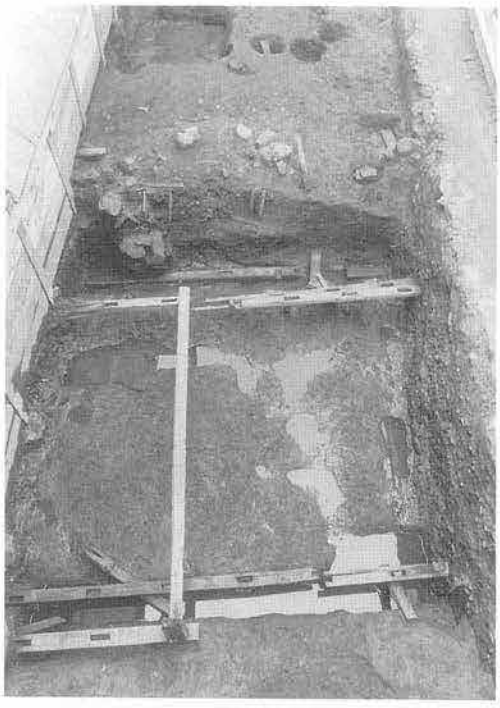
図版2

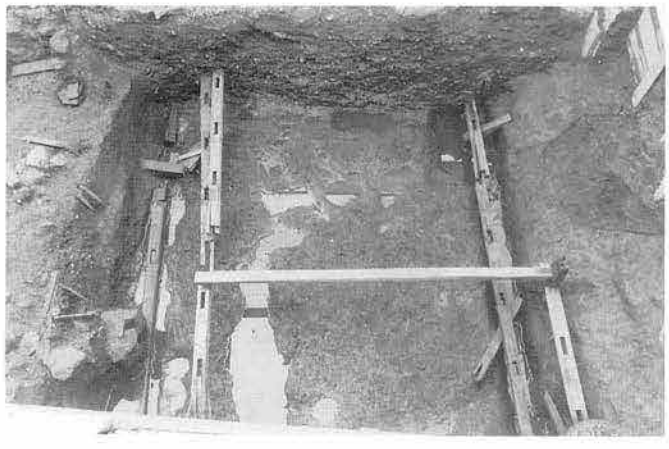
1. I区2面（東から）

2. 若宮大路側溝4（東から）

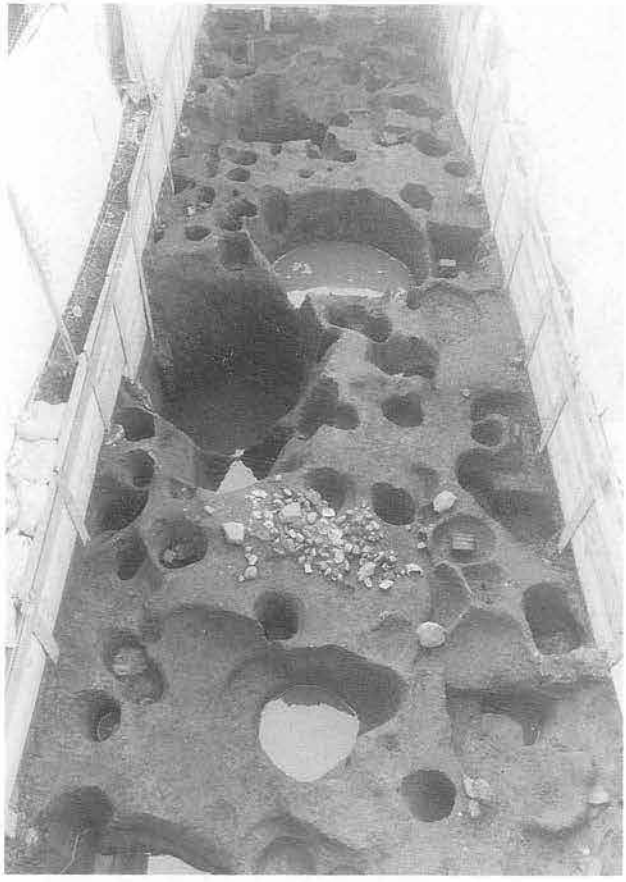
3. 同東岸部（北から）

4．若宮大路側溝4・5・6（東から）

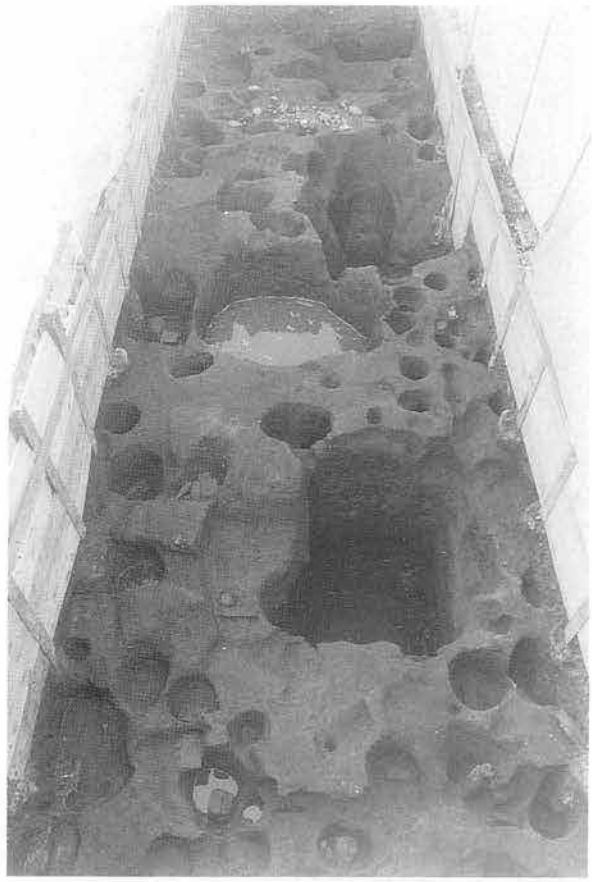




5．同前（南から）



1．Ⅰ区４面（東から）

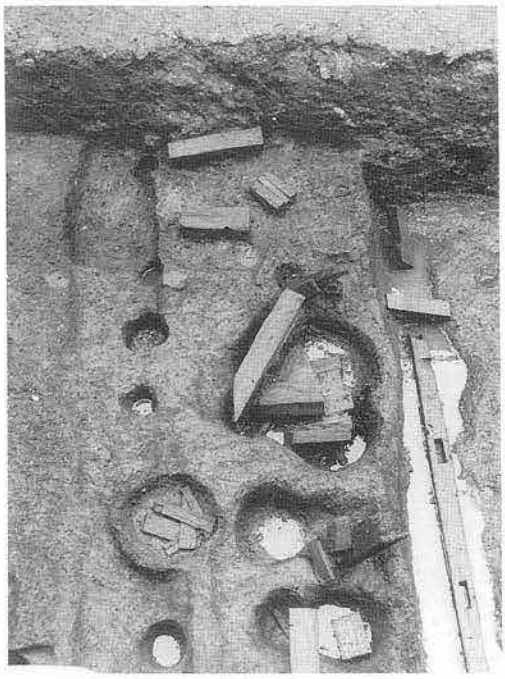


2．同前（西から）

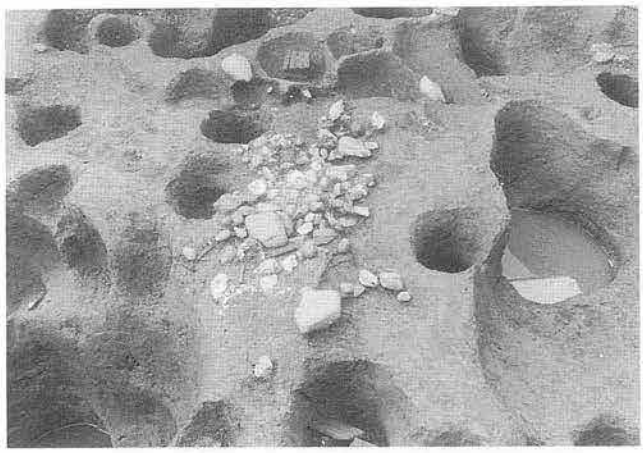
3．Ⅱ区４面（東から）

4．同前（東から）

図版４



１．若宮大路側溝７東岸部（南から）



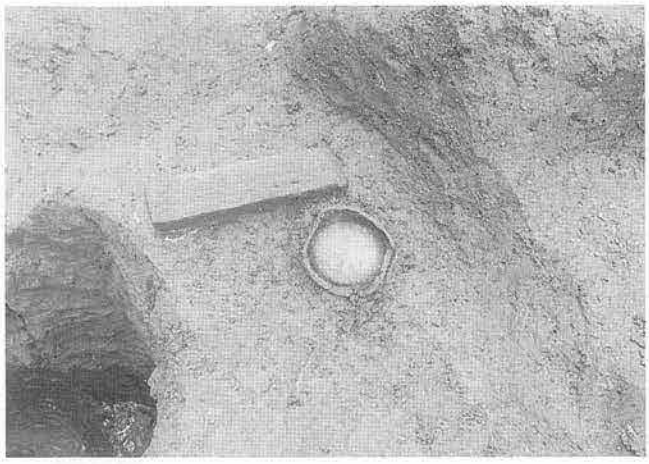
２．集石遺構（南から）

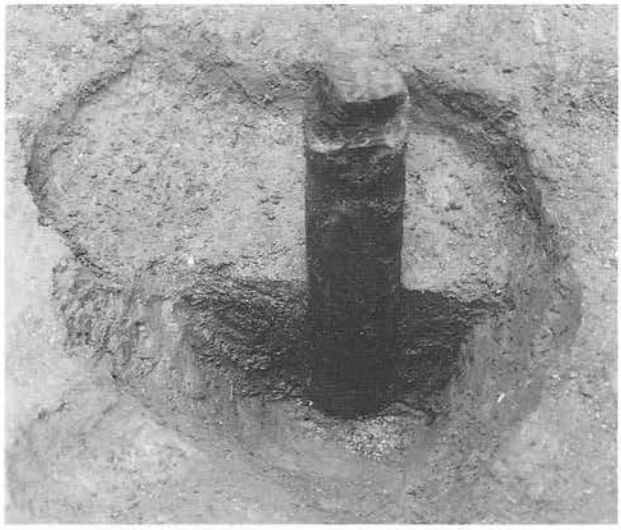
３．井戸３（北から）

４．土坑14（西から）

５．土坑17（西から）

６．漆器椀（図27－２）出土状況（東から）





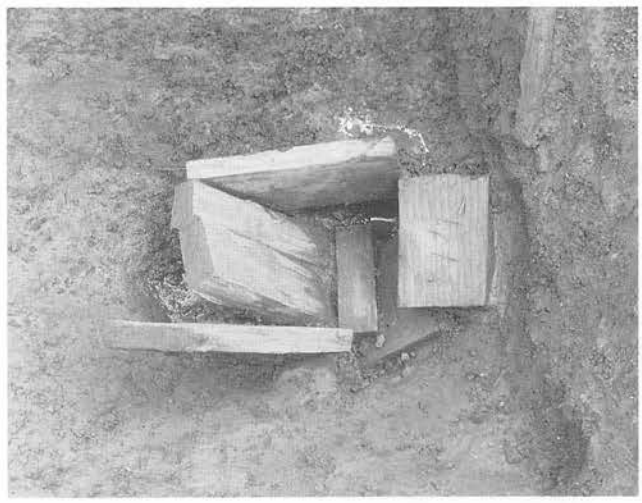
1．4面P110柱根検出状況（東から）

2．同前礎板検出状況（南から）

3．土師器（図23－4）出土状況

4．4面P5烏帽子出土状況（南から）

5．同前烏帽子埋納施設（南から）



図版 6

1．Ⅰ区5面（東から）

2．同前（西から）

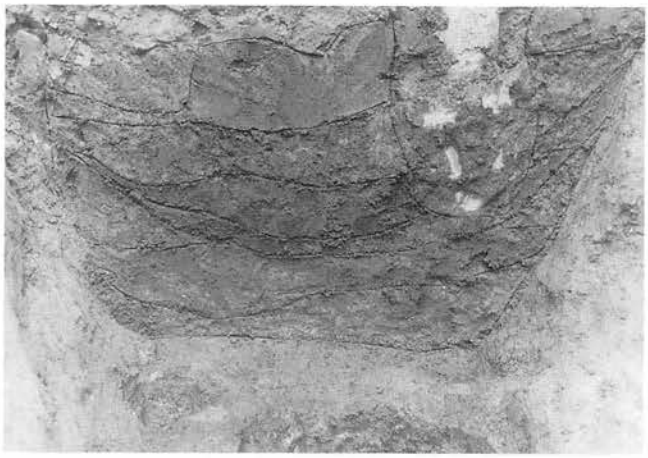
3．Ⅱ区5面（西から）

4．同前（東から）

1. 溝 5（Ⅰ区部分、東から）

3. 溝 3（南から）

2．溝 5 土層断面（調査区東壁）

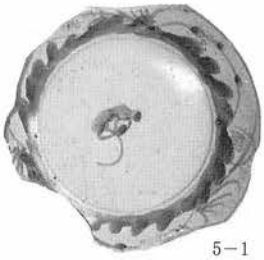


4. 溝 6（北から）

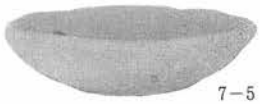
5．古代土坑 1（北から）

6．古代土坑 2（南から）

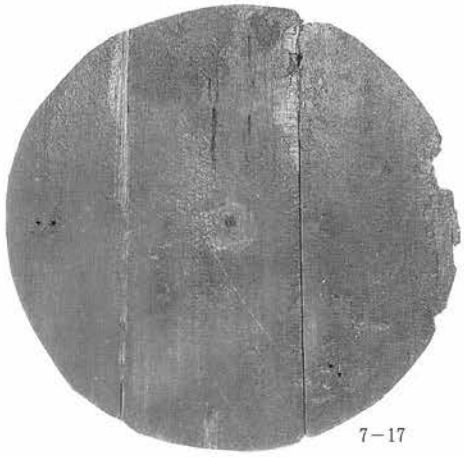
図版 8


5－1

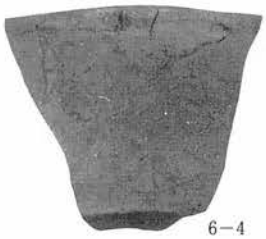
5－3


7－5

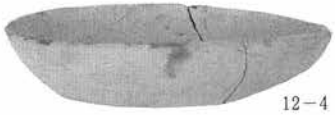
7－6


7－17

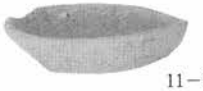
7－10


6－4

10－1


12－4

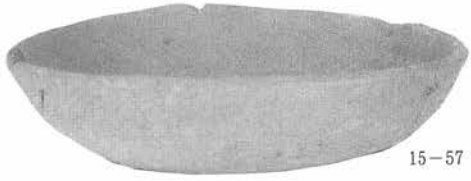
11－1


11－2

11－8

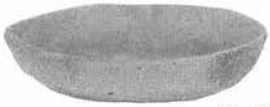
13－3

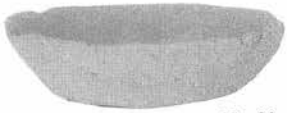
15－53

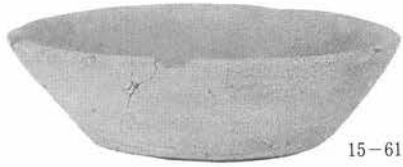

15－57

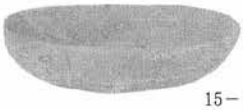
15－4

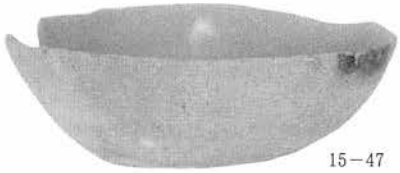
15－27

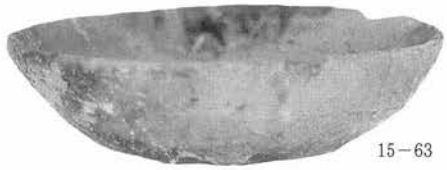

15－13


15－36


15－61


15－18


15－47


15－63

15－21

16－69

16－78

16－79

16－82

16－85

16－88

16－98

16－74

16－75

16－81

16－86

16－87

16－84

17－29

17－27

18－9

18－10

19－30

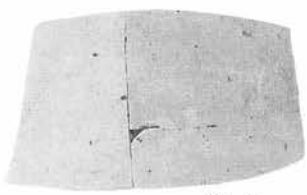
19－35

18－16

18－21

19－37

19－38


21－2

22－16

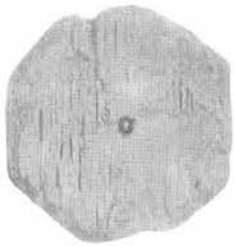
22－18

22－19

図版10

23－1

23－4


26－21

27－2

24－3～9

36－2

31－1

32－1

32－2

32－3

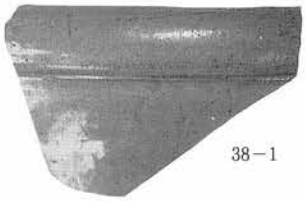
32－4

34－14

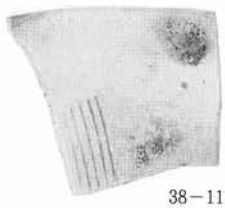
34－2

36－7

36－9


38－1

38－5


38－11

38－13

38－7

38－8

38－9

38－10

38－14

38－15

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
編著者名	馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒247－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
北条時房顕時邸跡（ほうじょうときふさあきときていあと）	神奈川県鎌倉市（かながわけんかまくらし）雪ノ下（ゆきのした）一丁目271番4	14204	No.278	35° 19′ 9″	139° 33′ 25″	19980803 ～ 19981009	76㎡	自己用店舗併用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条時房顕時邸跡	都市	奈良・平安時代 鎌倉時代 近世	生活面　4面 小穴163 若宮大路側溝6 溝5　井戸2　柱穴列4 掘立油柱建物6　土壙16 集石遺構1　ほか	土師器・土製品・渥美・常滑・瀬戸・青磁・白磁・鉄釘・石製品・木製品など計整理箱28箱	西側若宮大路側溝とそれに連なる生活面を確認した。また鎌倉時代の以前の溝を検出した

大慶寺旧境内遺跡（No.361）

寺分一丁目819番1地点

例　　言

1．本編は鎌倉市寺分819番1地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査は個人住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会によって平成10年10月8日から11月26日にかけて実施された。

3．調査体制は以下の通りである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会
調 査 担 当　瀬田哲夫
調　査　員　押木弘巳
調査補助員　土谷晴美、山口朋子（現地調査）
　　石元道子（資料整理）
調査参加者　荻野勲、河原龍雄、菅野五郎、藤枝正義、松崎靖弘（(社）鎌倉市シルバー人材センター）

4．本編の執筆、編集は瀬田の指示のもと押木が行った。本編で使用した写真は遺構を瀬田と押木が、遺物を押木が撮影した。

5．本編の凡例は、以下の通りである。

1)．挿図縮尺　全体図... 1/120、遺構個別図... 1/30・1/60、出土遺物... 1/3

2)．挿図のうち、赤彩土器、灰釉陶器、及び第3面検出硬化面の範囲についてはスクリーントーンを用いた。

3)．出土遺物に関する記載において、法量・計測値の（　）は復元値を、[　] は残存値を表す。

6．出土遺物のうち石製品については、汐見一夫氏（鎌倉考古学研究所）に、石材・産地などのご教示を得た。

7．出土品などの発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……113
第２章　調査の概要 ……117
　１．調査の経過と方法 ……117
　２．基本堆積土層 ……118
第３章　検出された遺構と出土遺物 ……119
　１．第１面検出の遺構と遺物 ……119
　２．第２面検出の遺構と遺物 ……127
　３．第３面検出の遺構と遺物 ……131
　４．第４面検出の遺構と遺物 ……137
第４章　まとめ ……141

挿 図 目 次

図１　遺跡の位置 ……113
図２　調査地周辺図 ……114
図３　調査区位置図 ……115
図４　グリッド割付図 ……117
図５　測量成果図 ……118
図６　土層模式図 ……118
図７　第１面全体図、堆積土層図 ……121
図８　溝１・２ ……122
図９　溝１出土遺物 ……123
図10　溝２、溝１・２一括出土遺物 ……125
図11　第１面検出遺構、出土遺物 ……126
図12　第１面遺構外出土遺物 ……127
図13　第２面全体図 ……128
図14　ピット列２～５ ……129
図15　第２面検出遺構、出土遺物 ……130
図16　第２面遺構外出土遺物 ……130
図17　第３面遺構全体図 ……131
図18　溝１Ｂ、出土遺物 ……132
図19　溝３・４・５、出土遺物 ……133
図20　第３面検出遺構 ……136
図21　第３面遺構外出土遺物 ……136
図22　第４面全体図 ……138

図23　第4面検出遺構 ……139
図24　第4面遺構外出土遺物 ……140

写真図版目次

図版1 ……145
図版2 ……146
図版3 ……147
図版4 ……148
図版5 ……149
図版6 ……150
図版7 ……151
図版8 ……152

第１章 遺跡の立地と歴史的環境

調査地は湘南モノレール江ノ島線湘南深沢駅から北東へ約320m、鎌倉市寺分１丁目819番１に所在する。北西へ開けた小谷戸の開口部にあたり、鎌倉市中心部から山崎・町屋へ続く丘陵部と、西の境川、及びその支流である柏尾川流域に広がる沖積地との境に立地する。現在の標高はおよそ13mを測る。

遺跡の周辺は鎌倉市中心域に比べると、殊中世期に限っていえば遺跡の密度は低く、これまでに発掘調査が行われた事例は数少ない。

遺跡の標記名となっている大慶寺は臨済宗円覚寺派の寺院で、調査地点の南西約150mにある。創建は鎌倉時代後期のことと伝えられるが、詳しい年期は明らかでなく、およそ文永４年（1267）から弘安２年（1279）までの間頃であろうという。山号を霊照（松）山といい、古くは関東十刹にも数えられた由緒ある寺院である。元亨３年（1323）には北条貞時13年忌供養に際し、長老道顕はじめ83人の僧衆が大慶寺から参加しており、この頃には寺容がかなり整っていたことが窺えるが、戦国期には兵難、大風、大火などに遭難し、また寺領の移管が相次ぐなどして衰退する。近世初頭以降、廃絶期間が長く続くが、

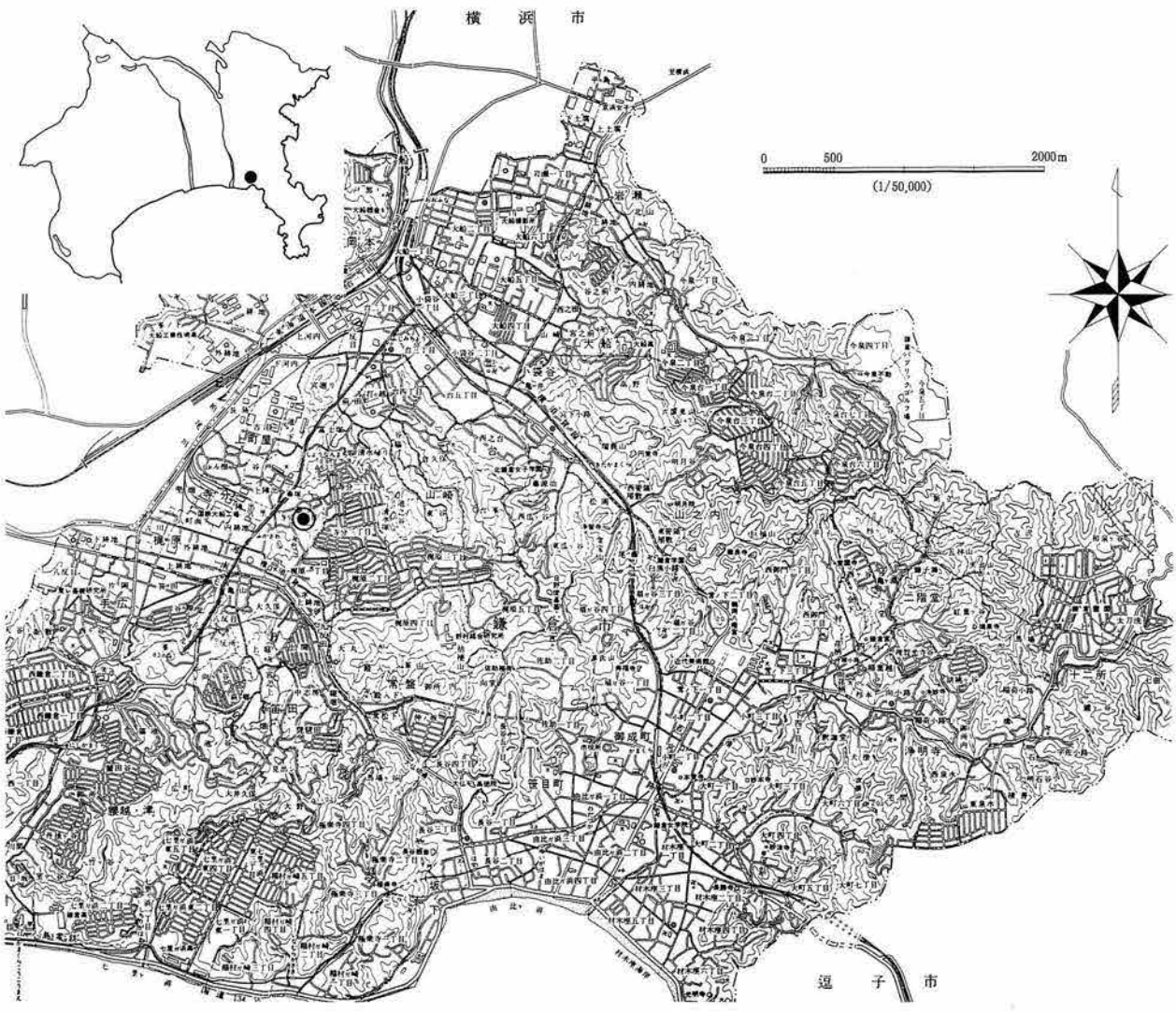


図１　遺跡の位置

1．本調査地（寺分一丁目819番１）
2．寺分藤塚遺跡（寺分一丁目502通外１）
3．垣根谷横穴墓群
4．山崎横穴墓群
5．倉久保遺跡（山崎字清水塚1550番１外）
6．倉久保遺跡（山崎字富士塚868番82）

図２　調査地周辺図

12.4
14.6
11.9
12.8
11.7
12.1
20
22.2
11.7
16.2
13.0
12.6
14.2
14.4
16.0
15.5
15
寺分一丁目
16.2
25.6
11.8
20
25
0
25m
(1/500)

図3　調査区位置図

かつて塔頭のひとつであった方外庵が大慶寺の名跡を復興する。昭和19年のことである。なお、調査地周辺の字名である寺分は、旧は大慶寺領を意味するところの「大慶寺分」が由来であるという。

中世以前では、本遺跡の周辺は山崎横穴墓群をはじめとする多くの横穴墓が存在することで知られている。また、縄文から平安期までを通じての遺跡が丘陵上、谷戸内で確認されている。最近の調査事例では、本遺跡の北約270mの丘陵上に立地する寺分藤塚遺跡で平成8年に調査が行われ、7世紀代を中心とした2群8基の横穴墓が検出されている。ここでは前庭部をはじめとする墓前施設が良好に残っており、貴重な成果が得られている。平成6年に調査が行われた倉久保遺跡では、丘陵斜面上に古墳から平安時代にかけての竪穴住居址が検出し、また、丘陵上方からの流れ込みとされる古墳前期、及び奈良～平安時代の土師器などが報告されている。本調査地からは800mほど離れているが、注目される資料である。同遺跡では平成10年にも調査が行われ、山崎横穴群に属する横穴墓1基が検出している。調査の頻度は少ないものの、こと丘陵上においては各時代を通じての遺跡が良好な形で残されているといえよう。

【引用・参考文献】

三山　進　1986　「大慶寺の寺史と彫刻」　『鎌倉』52　鎌倉文化研究会
継　　実　1996　「倉久保遺跡（No.226）」　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　12』第2分冊　鎌倉市教育委員会
土屋浩美　1996　「寺分藤塚遺跡の調査」　『第7回鎌倉市遺跡調査・研究発表会資料』　鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
田村良照　1999　「倉久保遺跡（No.226）」　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　15』第2分冊　鎌倉市教育委員会
『鎌倉の埋蔵文化財』2・3　1998年・1999年　鎌倉市教育委員会
『鎌倉市史』考古編　1959年　鎌倉市史編纂委員会

第2章　調査の概要

1．調査の経過と方法

調査は先行して行われた試掘調査の結果を基に、平成10年10月8日から開始された。現地表より約30cmを重機で掘り下げた時点で近世陶磁器等の遺物が出土したことから、これより以下は人力により掘削、遺構の確認作業を行った。更に10cmほど掘り下げたところ、ピットや調査区の北側で溝状の落ち込みが確認されたため、第1面として調査を進めた。以下、20～40cmほどの掘り下げを繰り返し、計4枚の遺構検出面について順次調査を行った。第4面基盤層は無遺物層と判断され、また、ほぼ開発深度（現地表マイナス2m）の限界に達していたことから、同年11月26日に現地調査を終了した。なお、調査時には明瞭な形で生活面を捉えることができなかったが、便宜上、本編では「面」という表記を用いている。

調査に際して、調査区の形に沿って測量用の基準軸を設定し、これを基に2mごとに方眼を割り付け

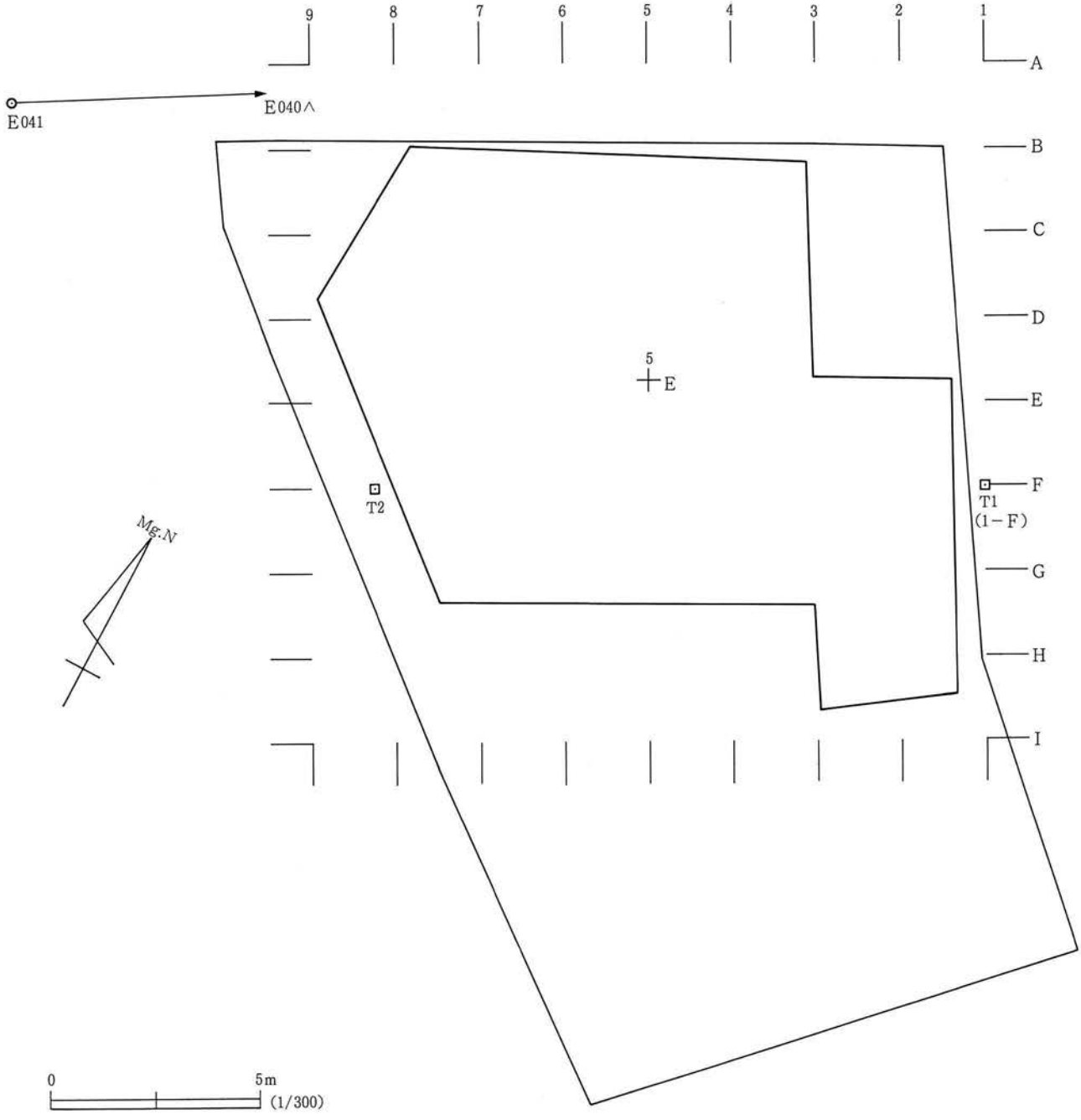


図4　グリッド割付図

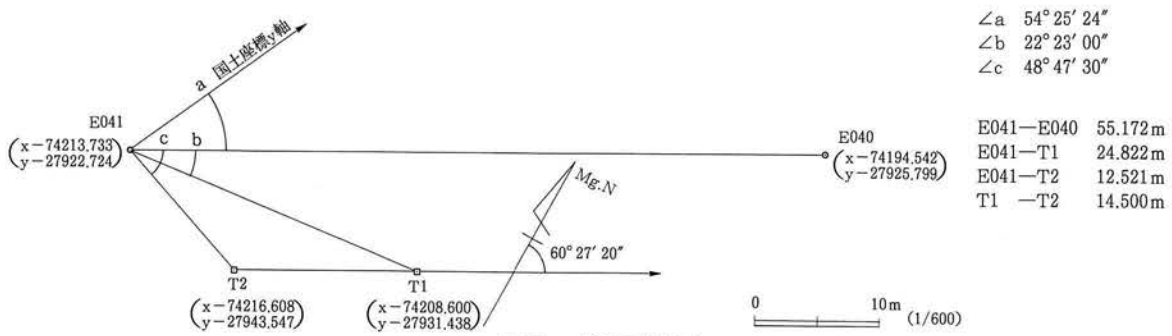


図5　測量成果図

た。東西軸にはアルファベットを、南北軸には算用数字をそれぞれ付し、北東側の交点にグリッド名を充てた（図4）。任意で設けた基準点には鎌倉市4級基準点（E040、E041の2点）を基に国土座標値を算出してあたえた（図5）。なお、調査軸（アルファベット軸）は磁北から60° 27′ 20″ 東へ振れる。

2．基本堆積土層（図6）

調査区南壁の一箇所を部分的に深掘りし、堆積土層の確認を行った。その結果表土層を含め計13層からなる基本層序を確認することができた。以下、各層について説明を加える。記述上の海抜値は土層上面の値を示す。

Ⅰ層　暗褐色土（10YR3/3）

表土。耕作土。海抜12.8m、層厚40～45cm

Ⅱ層　暗褐色土（10YR3/3）

締まりに欠け、砂が多く入る。ここでは確認されなかった。近世陶磁器類を包含する。

Ⅲ層　黒褐色土（10YR2/3）

締まりが強く、粘性は弱い。白色シルト、土丹の粒が入る。戦国タイプのかわらけを包含する。海抜12.5m、層厚約20～30cm。第1面基盤層。

Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/2）

Ⅲ層と比べ粘性が増す。土丹の大粒、塊が多く、一見橙色味が強い。海抜12.2m、層厚約15cm。第2面基盤層。

Ⅴ層　黒色土（7.5YR1.7/1）

締まり、粘性ともに強い。土丹粒の混入が目立つ。弥生～古墳時代の土器片が入る。海抜12.05m、層厚約20cm。第3面基盤層。

Ⅵ層　赤褐色土（2.5YR3/3）

堆積土でなく、Ⅴ層とⅦ層との境近くの土が地下水の影響により酸化、硬化したものとみられる。戦国～近世頃の遺構覆土をも横断する。海抜11.85m、層厚約5cm。

Ⅶ層　緑黒色土（10G1.7/1）

締まり、粘性ともに強く帯びる。夾雑物は

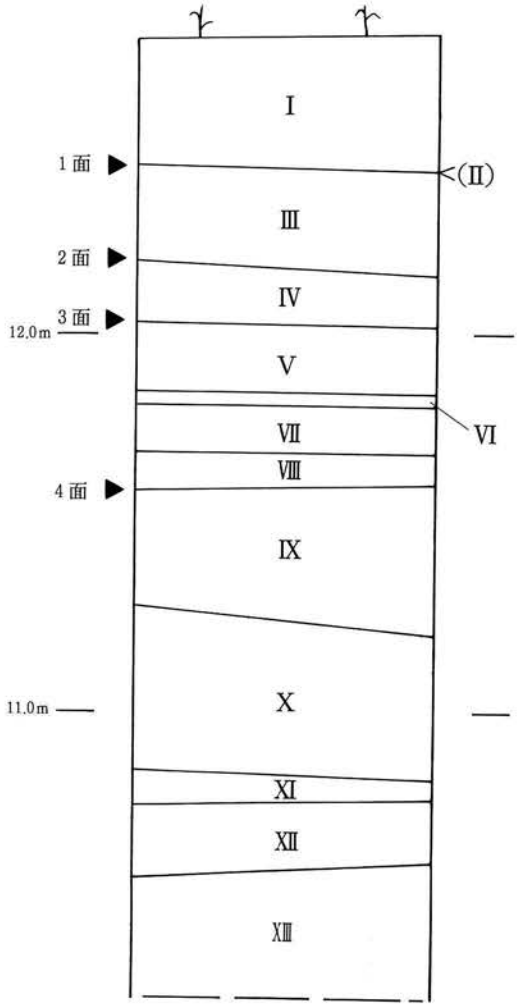


図6　土層模式図

殆ど入らない。海抜11.8m、厚約10㎝。 弥生～古墳後期の土器片を包含する。

Ⅷ層　緑黒色土（5G2/1）　シルト質の細粒土、細砂粒を多く含む。白色粗粒（軟化スコリアか）の混入が目立つ。海抜11.7m、層厚約10㎝。

Ⅸ層　暗緑灰色土（7.5GY3/1）　微細なシルト、砂の層。緑黒色粘質土が斑状に入る。締まり、粘性ともに弱い。海抜11.6m、層厚30～40㎝。第4面基盤層。

Ⅹ層　暗緑灰色土（7.5GY3/1）　Ⅸ層と比べて混入する砂粒がやや粗く、緑黒色粘質土が減少する。白色粗粒が少量入る。海抜11.3～11.2m、層厚約40㎝。

Ⅺ層　暗緑灰色土（5G3/1）　極めの細かい砂質土。締まりは弱い。夾雑物は殆どみられない。海抜10.85m、層厚約10㎝。

Ⅻ層　緑黒色土（5G1.7/1）　強い粘性を帯びる。締まり強い。植物遺存体が混入する。海抜11.75m、層厚約20㎝。

ⅩⅢ層　暗緑灰色土（5G4/1）　シルト質の細粒土。粘性が強く、締まりはやや強め。細砂、白色微粒が混入する。植物遺存体が入る。海抜11.55～11.5m、層厚は不詳。

以上の13ヶ層の他にも、第3面上で検出された暗褐色硬化層などの部分的な堆積層を確認している。土丹を用いた構築層と思しき箇所もみられたが、これらについては大きくⅢ層に包括できるものと考えられる。

第３章　検出された遺構と出土遺物

１．第１面検出の遺構と遺物

第1面は表土下約40㎝、基本土層Ⅲ層上面で検出された。ここで確認された遺構は、溝、井戸、土壙、ピットなどで、全体的に稀薄である。調査区の南西に集中して検出した平面規模、深さともに小さいピット群は覆土にⅠ層耕作土が入っており、近年までの畑地の耕作痕、或いは植物痕かと見られる。他のピットは規模、方向軸などに規則性が見られず、建物を構成するものとしては考えにくい。本編では、不明瞭だが東西方向のピット列１を図示した。

１）．溝１（図８）

調査区北端で検出された、東西軸の溝である。掘り込み層はⅡ層。ほぼ同軸方向に延びる溝１と重複関係にあり、本址の方が新しい。また、平面的な確認には及ばなかったものの、調査区壁の土層断面から更に数時期の造り替え、浚渫が行われたものとみられる。確認面からの深さは約20㎝で、底面海抜は11.4m前後を測り、西へ緩やかに下がる。中心軸線はN－63°－E。

出土遺物（図９）

本址からの出土遺物のうち、13点を図示した。４は覆土上層からの出土で、それ以外はすべて覆土下層より出土している。

１は肥前系磁器染付け碗で体部から底部にかけての破片である。外面に網目文を配す。高台畳み付きは露胎。やや青味掛かった白色を呈す。底径4.6㎝。

２は青磁碗で口縁部の破片である。丸みをもった体部から外反し、玉縁状の口縁へ移行する。胎土は淡い青灰色を呈し、釉調は淡い青緑色である。口径（16.0)㎝。覆土下層より出土。

３は瀬戸の花瓶Ⅰ類の脚部片である。外面には褐釉が施釉される。底部に回転糸切り痕が残る。胎土は淡灰色の精良土で、黒色粒子を含む。底径6.3㎝。

４は瀬戸の直縁大皿の口縁部片である。やや内湾気味の体部から直線的な口縁へ移行する。胎土は灰白色を呈し、長石粒、黒色粒子を含む。釉調は淡緑色で気泡・貫入が目立つ。口径（24.4)㎝。

５は備前窯の擂鉢体部片である。胎土は淡褐色を呈し、白色の砂粒を含む。表面は暗紫灰色を呈す。

６は瀬戸・美濃系の擂鉢の底部破片である。体部内面に７条１単位の櫛歯による擂り目がほどこされるが、使用の頻度が高く、磨耗が著しい。胎土は淡褐色を呈する精良土である。器面には暗紫灰色の釉薬が施される。底部には回転糸切り痕が残る。底径（10.2)㎝。

７は常滑の鉢Ⅱ類で、口縁部の破片である。口縁両端が内外に引き出され、凸状の段差をもつ。外面には成形時の指頭圧痕が残る。胎土は赤褐色を呈し、長石粒、白色粒子を含む。口径（29.6)㎝。

８は平瓦片である。凹面には離れ砂の痕が残り、凸面には摩滅しているが網目状の叩き目痕が残る。側面はヘラケズリ調整が施されたのち、凹面側縁端部がナデによって丸く仕上げられる。胎土は灰褐色を呈し、砂礫、黒色粒子を含む。表面は黒灰色を呈す。

９はかわらけである。体部中位の外面に稜状の屈曲をもち、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は外面に回転糸切り痕、板状圧痕が残り、内面には横ナデが施されて仕上げられる。胎土はくすんだ淡褐色を呈し、やや粉質で細砂粒、雲母粒を含む。口径8.0、底径5.2、器高2.7㎝。

10は銅銭で「永楽通寶」である。明代、1408年初鋳。

11・12は砥石である。11は粗砥で、和歌山県茶神子産の流紋岩質凝灰岩である。表面はくすんだ褐色を呈し、4面に使用痕が残る。長さ［13.8］、幅6.8、厚さ4.8㎝。12は中砥で、上野産の流紋岩質凝灰岩で

図7　第1面全体図、堆積土層図

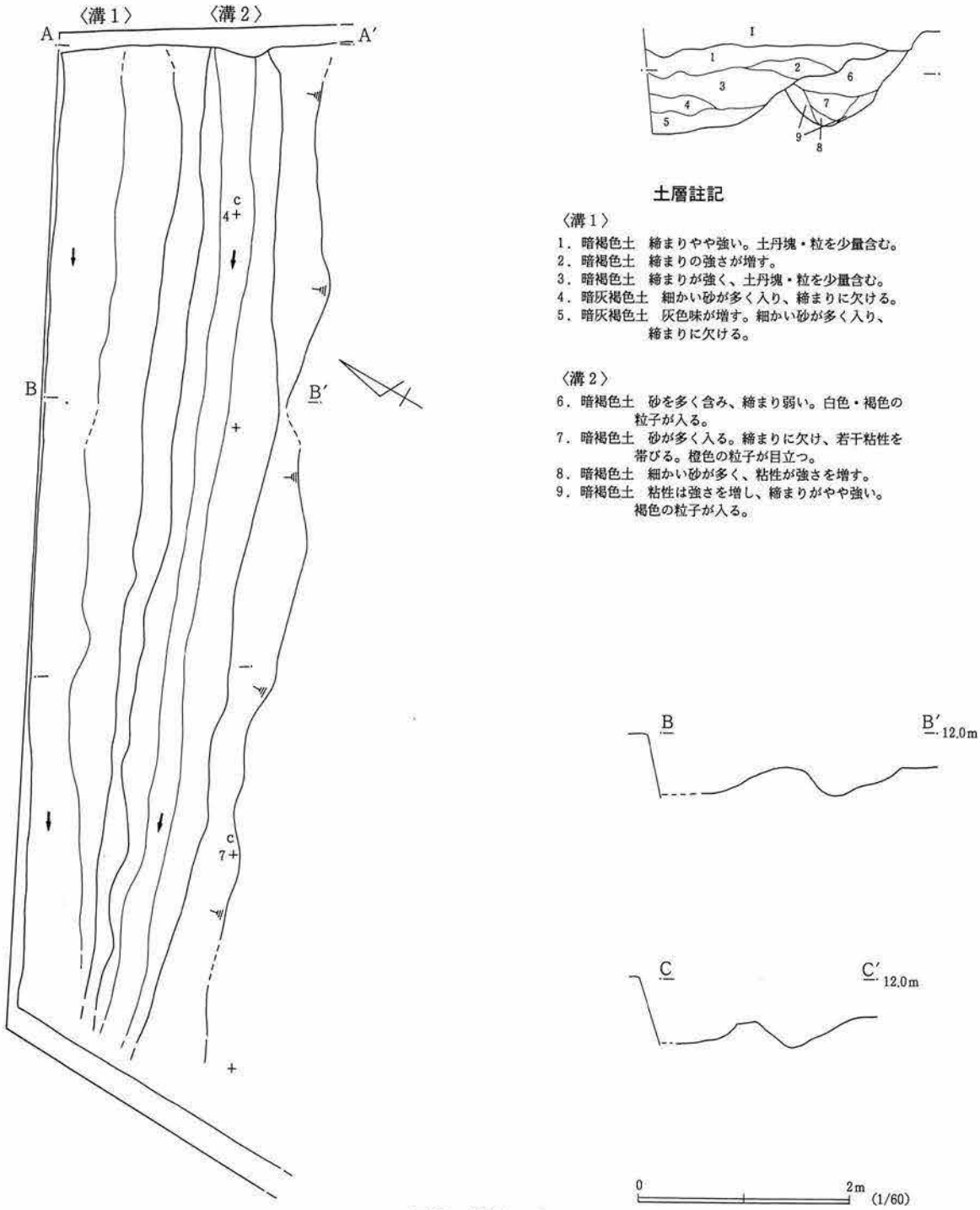


図8　溝1・2

である。表面は暗灰色を呈し、5面が砥面としてよく使用される。長さ6.3、幅5.4、厚さ3.6cm。

13は石製品で鉢とみられる底部の破片である。直径4.7、高さ0.7cm程の凸状の脚が削り出される。外面は不明瞭だが鑿などの刺突具で成形されたとみられる。内面はよく使用され、平滑に摩滅している。石材は粗めの流紋岩質凝灰岩で、ガラス質の黒色粗粒を多く含む。色調は灰褐色。

2）. 溝2（図8）

溝1の南に、これとほぼ同軸で検出された。溝1よりも古い。掘り込み層はⅡ層で、暗褐色土を覆土とする。確認面からの深さは20～30cm、底面の海抜は11.35～11.5m前後を測り、西へ向けて緩やかに下がる。中心軸線はN－68°－E。

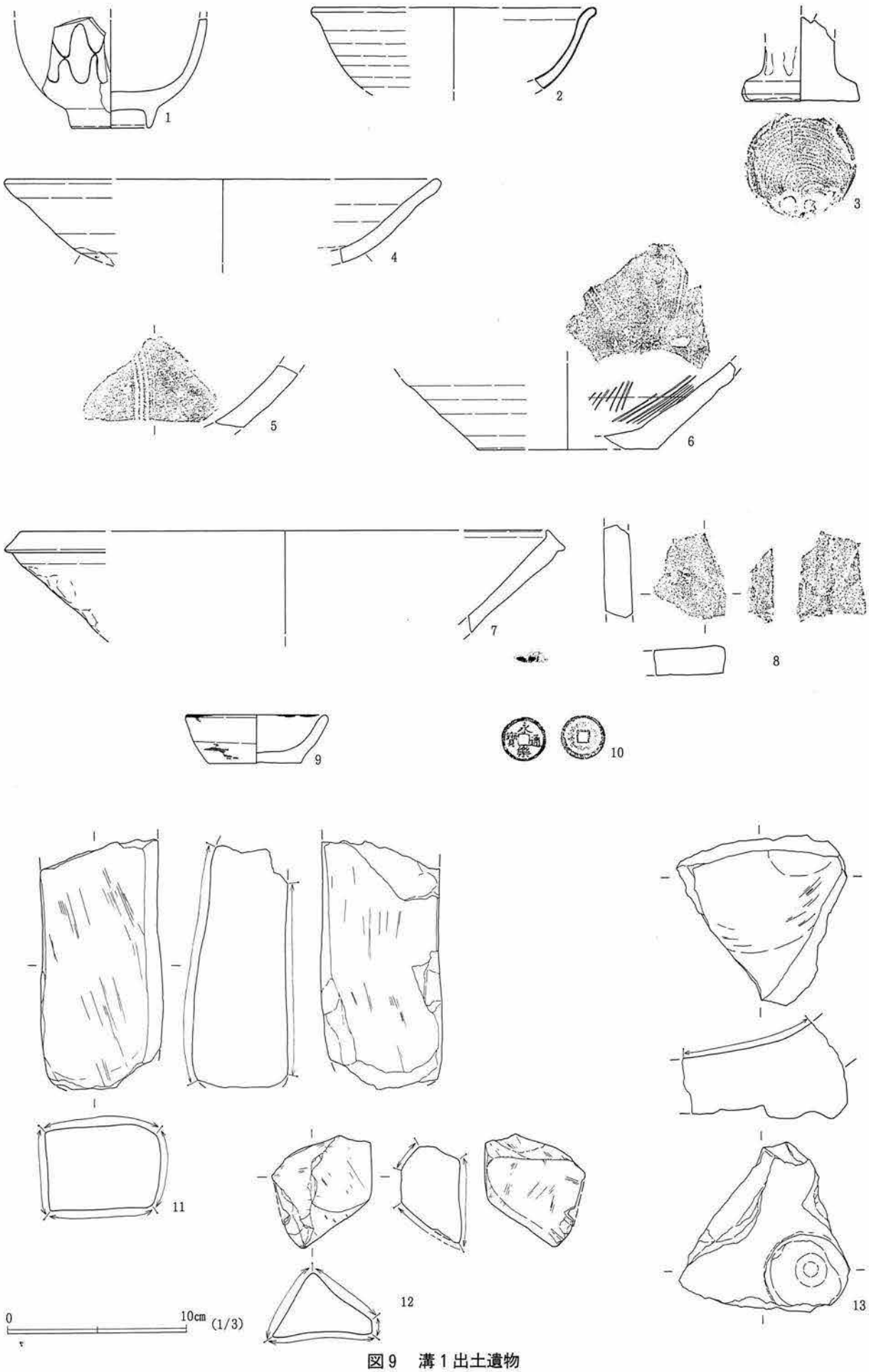


図9　溝1出土遺物

出土遺物（図10）

図10に示した遺物のうち本址から出土したことが明確に判る遺物は図10－１のみで、他は溝１との重複関係を平面的に捉える以前に調査区北側の落ち込みからの出土として一括採取した遺物である。いずれの溝に帰属するかは定かにできなかったが、ここでは溝２出土遺物に続けて説明を加える。

１は溝２より出土した。肥前系磁器の仏飯器である。丸碗に高さ2.6㎝の脚台が付く。脚台畳み付きは露胎、脚台底面は上底状に湾曲する。体部外面には雲形文・草花文が、碗部と脚台部との境外面には二重圏線が配される。釉調は乳白色、絵付けは群青色を呈す。口径（8.8)、底径（4.4)、器高5.8㎝。

２は肥前系磁器染付け碗で、底部から体部の破片である。外面に雲形文、圏線を配する。釉調は淡い青白色、絵付けはくすんだ青緑色を呈す。高台端部と畳み付きは露胎。底径4.0㎝。

３は肥前系磁器染め付け碗で、底部から体部の破片である。高台と体部境の外面に二重圏線が、高台内に「大明年製」の文字が配される。高台畳み付きは露胎。底径（4.0)㎝。

４は肥前系磁器染付け碗の底部片である。網目文の一部が見て取れる。釉調はやや灰色味を帯びた白色、絵付けは紺色を呈す。高台畳み付きは露胎。底径（5.6)㎝。

５・６は肥前系磁器染付け碗で、同一個体とみられる。体部の内・外面ともに網目文・圏線が配され、高台外面に三重圏線が配される。高台畳み付きは露胎。

７は瀬戸・美濃系の小皿である。体部外面に雲形文が配される。内面には圏線が配され、内底見込み、高台内にも絵付けが施される。釉調は白色、絵付けは濃淡の紫色を呈する。口径（8.4)、底径（2.3)㎝前後。

８は器種不明磁器の底部片である。体部は底部付近から折れて外傾気味に立ち上がる。高台内は内・外周で段差をもち、外周部分は釉はぎされる。釉調は淡い青灰色を呈す。底径（6.8)㎝。

９は瀬戸・美濃系の碗で、底部から体部にかけての破片である。体部は内湾して立ち上がり、中位で大きく曲がり直立する。内・外面、高台内に灰釉・褐釉がほぼ半分ずつ掛け分けられる。高台畳み付きは露胎。底径（5.0)㎝。

10は瀬戸・美濃系の小皿である。体部は外傾して立ち上がり、口縁はやや外反する。淡い緑灰色の釉薬が全面に施釉される。口径（11.3)、底径（7.0)、器高2.1㎝。

11は瀬戸・美濃系の褐釉筒形香炉の口縁部片である。口縁部内面から体部外面にかけて褐釉が施釉される。内・外面とも回転ナデ調整による稜が目立つ。口径（11.0)㎝。

12は瀬戸・美濃系の褐釉筒形香炉の口縁部破片である。内・外面とも褐釉が掛かる。体部外面は細い沈線・稜線が交互に配される。口径（12.8)㎝。

13は瀬戸・美濃系の鉢で口縁部片である。内湾気味に開く体部から口縁部は外へ折れる。内・外面ともに緑灰色の釉が掛かり、内面には草花文とみられる鉄絵が施される。

14は産地不明（信楽？）擂鉢の口縁部である。口縁は外面下位と体部との間に段を持ち、断面略三角形を呈す。胎土は淡い橙褐色を呈し、長石・砂粒を含む。口径（31.6)㎝。

15は瀬戸・美濃系擂鉢の体部である。13条以上1単位の擂り目が見える。胎土は淡褐色を呈し白色砂粒を含む。器面は暗紫灰色の釉薬が掛かる。

16は白磁口冗碗の口縁部から体部である。体部中位内面に稜が巡る。口径（14.0)㎝。

17は常滑の鉢Ⅱ類底部である。外面には成形時の指頭圧痕が残り、一部に煤が付着する。内面はよく使用され平滑である。胎土はくすんだ褐色を呈し、長石粒、砂粒を含む。底径（13.2)㎝。

18は常滑鉢Ⅱ類の口縁部である。口縁端部がナデ整形によって内外へ引き出される。胎土は赤褐色を呈し、長石粒・砂粒を含む。

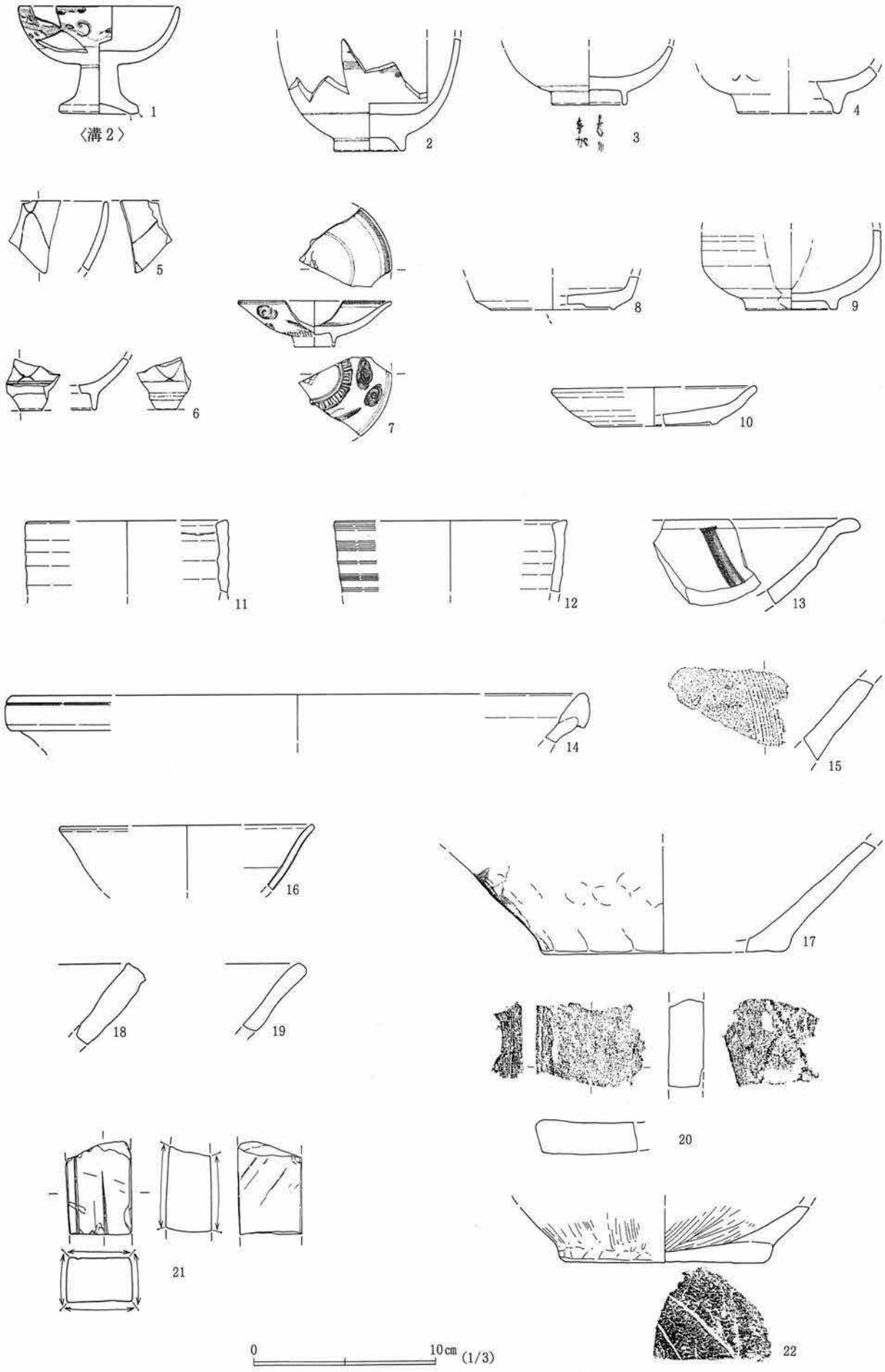


図10　溝2、溝1・2一括出土遺物

19は常滑鉢Ⅰ類の口縁部である。内・外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げられる。口縁端部に自然釉が掛かる。胎土は灰色の精良土で、金雲母、白色粒子を含む。

20は平瓦である。凹面には離れ砂、凸面には網目の叩き目痕が残る。側面はヘラケズリののち凹部側端部がナデ仕上げされる。胎土は灰褐色を呈し、小礫・粗砂・白色粒子を含む。長さ［6.1］、幅［4.8］、厚さ1.8cm。

21は砥石で、上野産の中砥である。石材は流紋岩質凝灰岩で、淡褐色を呈する。4面が砥面である。

22は土器で甕の底部である。体部外面は弱いヘラナデ調整が、内面は目の粗いハケ調整が施される。底部には木葉痕が残る。古墳時代か。胎土はくすんだ褐色を呈し、砂粒・白色針状物質、黒雲母を含む。底径（10.7）cm。

3）．ピット列1（図11）

1～5－E・Fグリッドにおいて検出された、小規模のピット列である。覆土は概ね溝1・2と同質の暗褐色土である。深さは確認面から15～30cm、底面海抜は11.9～12.1m前後を測る。平面規模・深さともに各ピットで区々であり、配列の間隔も一定でない。中心軸方位はおよそN－62°－E。出土遺物はない。

4）．遺構89（図11）

直径約1.0mを測る円形の土坑で、井戸址とみられる。確認面からの深さは2.0m、底面の海抜は10.5mを測る。覆土は下層まで崩れた凝灰岩塊が目立つ暗褐色土で、廃絶時に一気に埋め戻されたものとみられる。なお、海抜11.8m付近で覆土がⅥ層同様に硬化しており、Ⅵ層の形成が本址廃絶以後に、地下水位の変化等による影響でなされた可能性が高い。本址からの出土遺物はない。

5）．その他の遺構（図11）

他に、第1面の遺構のうち図示しうる遺物が出土した遺構は遺構2のみである。

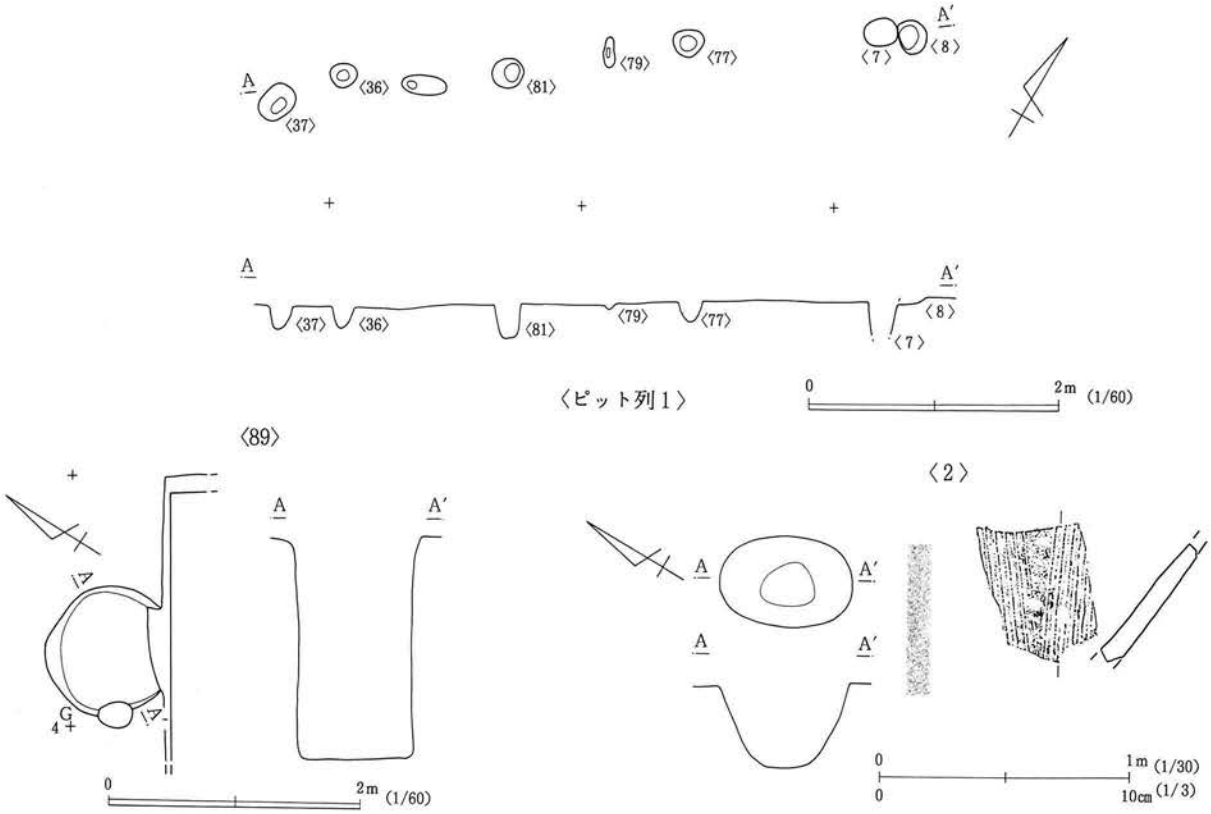


図11　第1面検出遺構、出土遺物

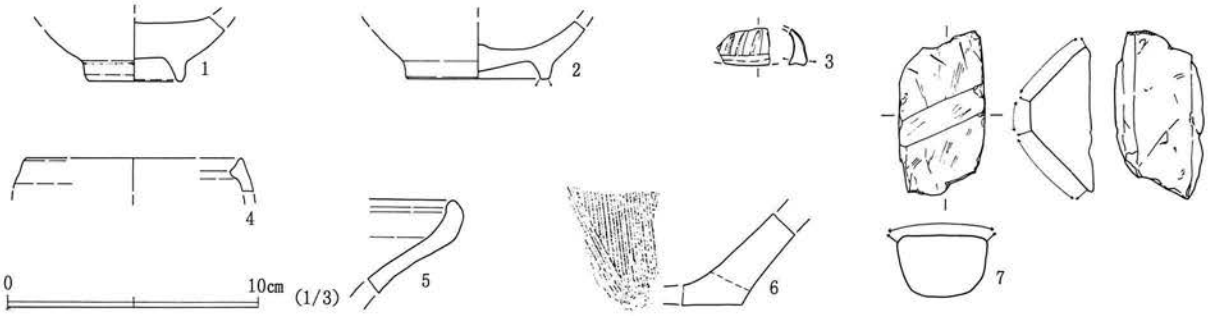


図12　第１面遺構外出土遺物

遺構２は１－Ｅグリッド内で検出した小規模のピットで、他の遺構と同質の暗褐色土を覆土とする。１は瀬戸・美濃系の擂鉢体部である。７条以上１単位の擂り目が見て取れる。内・外面ともに鉄釉が施釉され、濃い褐色を呈する。胎土は淡褐色を呈し、小礫、雲母粒を含む。

６）．第１面遺構外出土遺物（図12）

表土掘削時から第１面上にかけて出土した遺物をここに集めた。概ねⅡ層からの出土である。

１は肥前系磁器染付け碗の底部である。高台と体部境の外面に圏線が巡る。高台端部、畳み付きは露胎。底径（4.0）cm。

２は磁器の壺で底部片である。高台畳み付きは露胎。底径（5.8）cm。

３は青白磁の合子蓋である。口縁端部は露胎。

４は瀬戸・美濃系の褐釉香炉であろうか。口縁端部が内側へ引き出される。口径（8.8）cm。

５は瀬戸・美濃系の鉢口縁部である。胎土は端褐色を呈し、内・外面ともに暗紫灰色の釉薬が掛かる。

６は瀬戸・美濃系擂鉢の底部である。目の詰まった擂り目が体部・底部の内面に施される。胎土は淡褐色の精良土で、内・外面ともに暗紫灰色の釉薬が掛かる。

７は砥石である。上野・砥沢産の流紋岩質凝灰岩で、中砥として使用された。３面が砥面。長さ5.9、幅3.3、厚さ2.5cm。

２．第２面検出の遺構と遺物

第１面の下約30cm、海抜12.2m前後で検出された遺構面である。当面ではピットが112口、他に土坑状の浅い掘り込みが１基検出された。ピットは規模や間隔などにある程度の規則性が認められ、ピット列２～５までを呈示したが、いずれも建物を復元できるものではない。柵列といった簡易な施設が考えられる。

１）．ピット列２（図14）

４～７－Ｄ・Ｅグリッドにおいて検出された。ピットは確認面からの深さが５～20cm、底面海抜は11.65～11.75mを測る。覆土は締まりの強い暗褐色土。ピット毎の間隔は2.1～2.7mを測り一定でない。中心軸の方位はＮ－34°－Ｅ。出土遺物はない。

２）．ピット列３（図14）

３～５－Ｅ・Ｆグリッド内で検出された。確認面からの深さ10～20cm、底面海抜は11.9～12.05mを測る。ピットの覆土は締まりの強い暗褐色土。ピット毎の間隔は1.6～1.8mの間でばらつきがみられる。中心軸方位はＮ－50°－Ｅ。遺構165の覆土中よりかわらけの小片が1点出土している。

３）．ピット列４（図14）

６－Ｆ～７－Ｅグリッドにかけて検出された。確認面からの深さ10～15cm、底面の海抜は11.95～11.7mを測り、自然地形に合わせて低くなる。ピット覆土は締まりが強い暗褐色土。中心軸方位はＮ－80°－Ｗ。出土遺物はない。

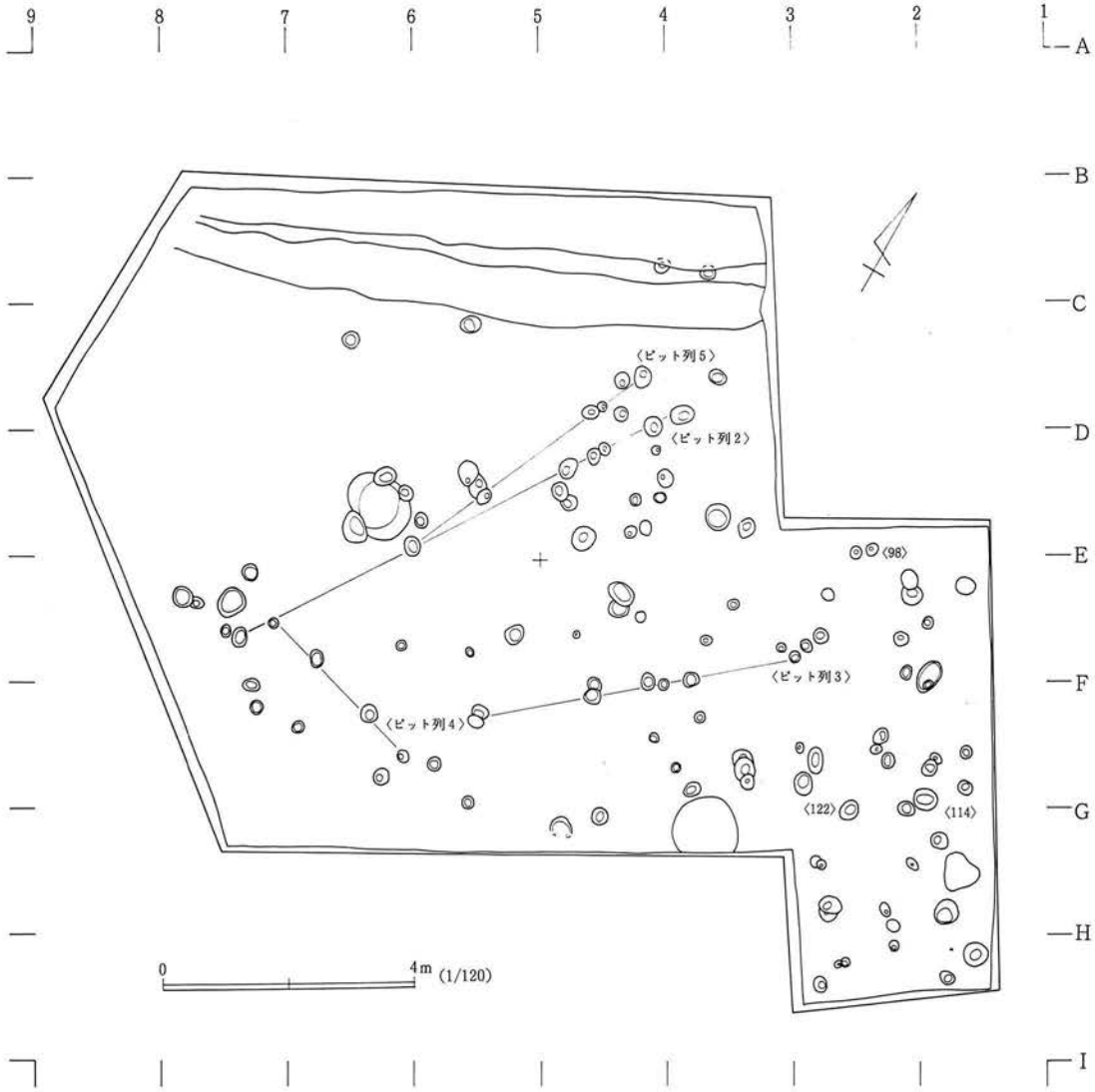


図13　第2面全体図

4）. ピット列5（図14）

4～6－C～Eグリッドにかけて検出された。確認面からの深さは20～40cm、底面の海抜は11.8～11.6mを測る。ピット間の間隔は1.0～2.2mまでと、不均一である。中心軸の方位はN－26°－E。出土遺物はない。

5）. その他の遺構（図15）

出土遺物が図示しえた3口のピットを取り上げる。

遺構98は2－Dグリッド内で検出された径20cm程度の小規模のピットである。図15－1・2が出土遺物で、いずれも鉄釘の断欠である。

遺構114は径約40cmのピットで、覆土中より鉄釘1点が出土した。 図15－3は銹化が著しく、膨張している。長さ6.9、幅1.4、厚さ1.1cm。

遺構112は径約35cmを測り、確認面からの深さ40cm、底面海抜は11.9mを測る。覆土中より瀬戸・美濃系擂鉢の体部片が出土している。図15－4は胎土が淡褐色の精良土で、砂粒を含む。内・外面ともに暗紫灰色の釉薬が掛かる。

6）. 第2面遺構外出土遺物（図16）

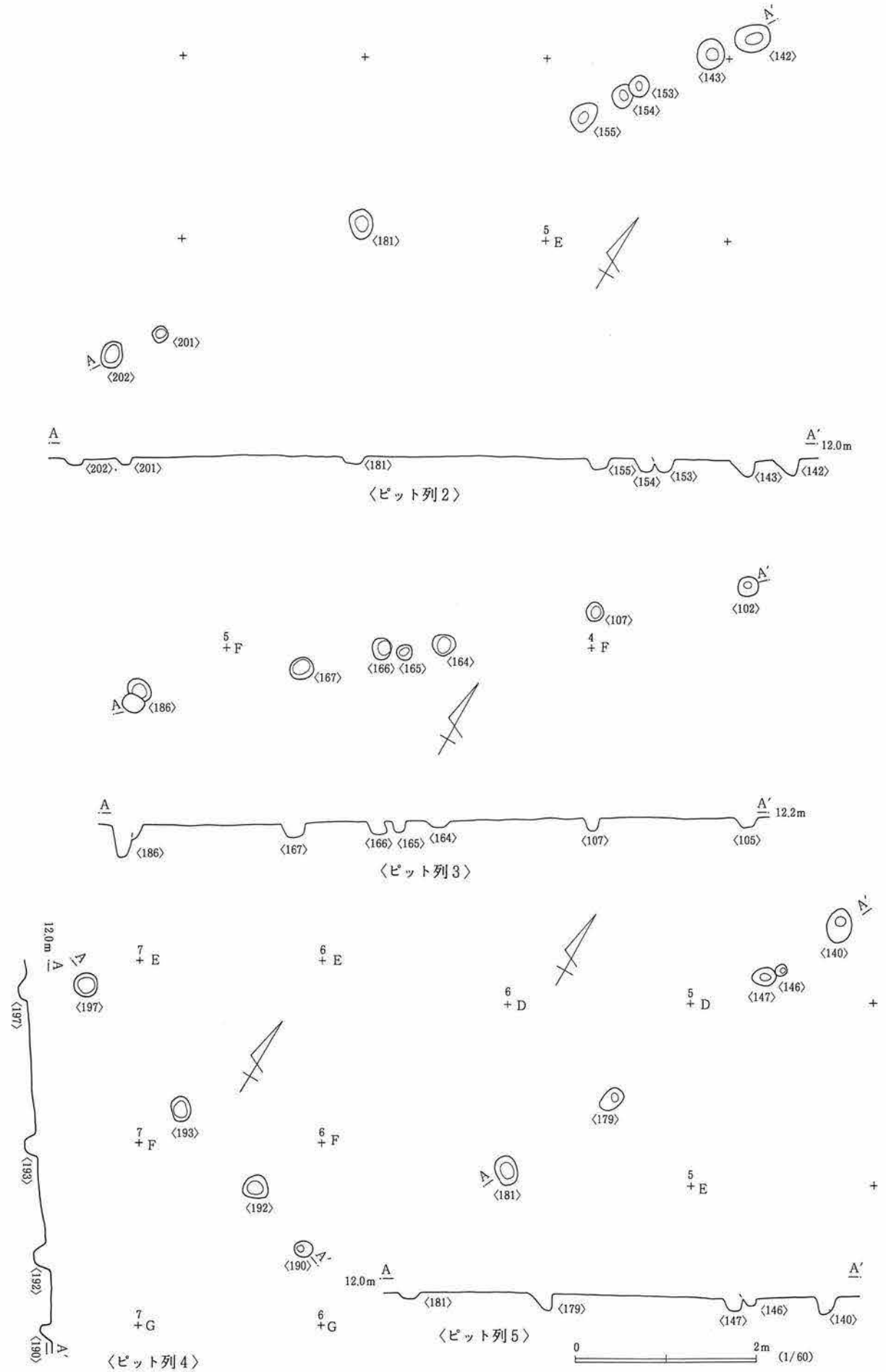

〈142〉
〈143〉
〈153〉
〈154〉
〈155〉
〈181〉
5 + E
〈201〉
〈202〉
A
A′
12.0m
〈ピット列2〉
〈102〉
〈107〉
5 + F
4 + F
〈164〉
〈166〉〈165〉
〈167〉
〈186〉
12.2m
〈105〉
〈ピット列3〉
12.0m
7 + E
6 + E
〈197〉
〈140〉
〈146〉
〈147〉
6 + D
5 + D
〈179〉
7 + F
6 + F
〈193〉
〈192〉
5 + E
〈190〉
〈191〉
7 + G
6 + G
〈ピット列4〉
〈ピット列5〉
0
2m
(1/60)

図14　ピット列2～5

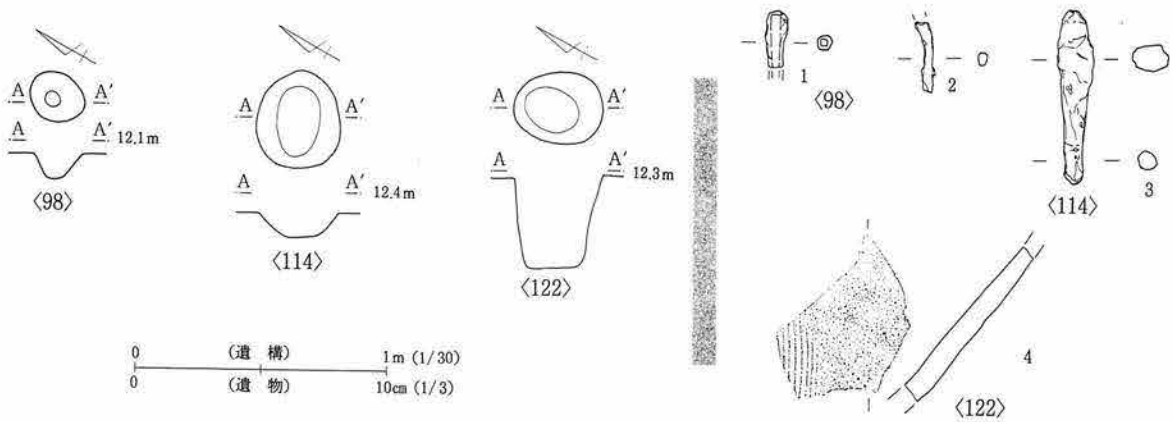


図15　第２面検出遺構、出土遺物

第１面基盤層以下、第２面上までに検出した遺物のうち、10点を図示した。図示には至らなかったものの、１～６とは胎土が明らかに異なる（白色針状物質、雲母粒などを含まない）かわらけも１点出土している。

１～６はかわらけで、いずれもロクロ整形である。１は底部に板状圧痕が残り、内底面は横ナデ調整が施される。胎土は淡い橙褐色を呈し、細砂粒、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む精良土である。口径（6.4）、底径（3.8）、器高2.1cm。

２は小型タイプで体部から口縁が直線的に立ち上がる。内底面にナデが施される。胎土は淡褐色を呈し、砂粒、雲母粒を含む。口径（6.6）、底径4.6、器高1.9cm。

３は器壁がやや厚く、直線的な体部・口縁部をもつ。胎土は淡褐色を呈し、細砂粒、雲母粒、白色針状物質を含む。口径（9.4）、底径（6.6）、器高2.3cm。

４は厚手の底部をもち、内底面はマウンド状に盛り上がるとみられる。胎土は細砂粒、雲母を含む精良土で、鈍い淡褐色を呈する。口径（9.2）、底径（6.0）、器高2.9cm。

５は体部外面の中位に稜状の膨らみをもつ。内底面は成形後無調整で、中央部が凸状に盛り上がる。胎土は細砂粒、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む精良土で、淡い橙褐色を呈する。口径（9.2）、底径（6.0）、器高2.8cm。

６は厚手の器壁、底部をもつ。体部から口縁にかけて外反気味に立ち上がる。全体に粗雑な作りで、内底面に粗いナデ調整が施される。胎土は淡褐色を呈し、砂礫、雲母粒、白色針状物質を含む粉質土で

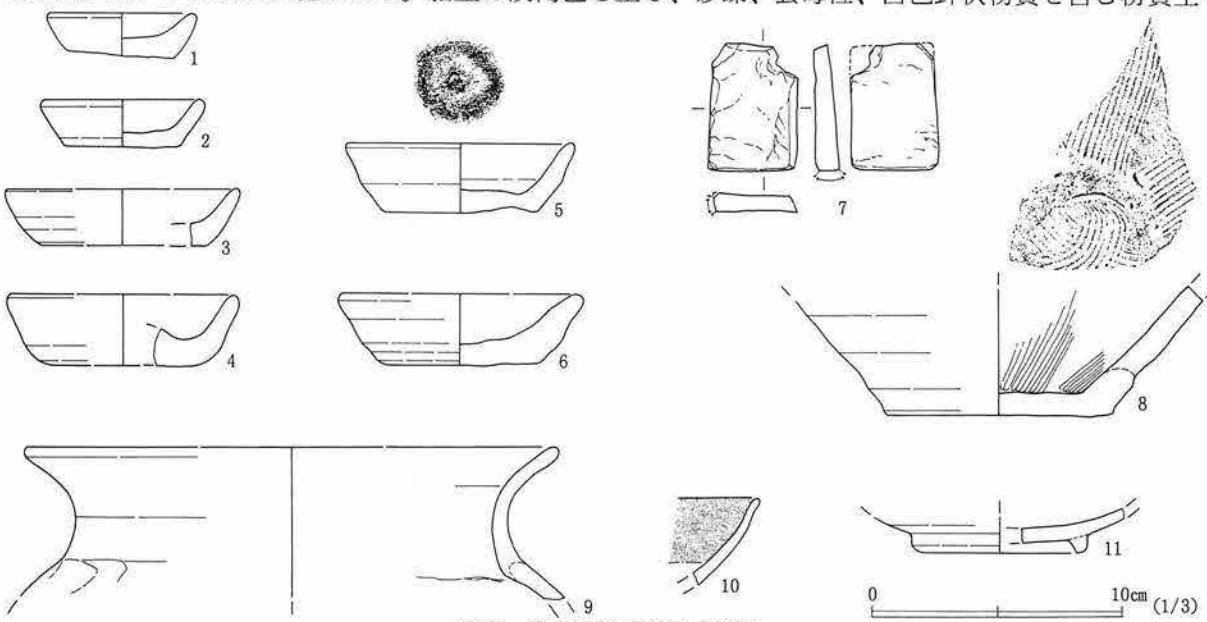


図16　第２面遺構外出土遺物

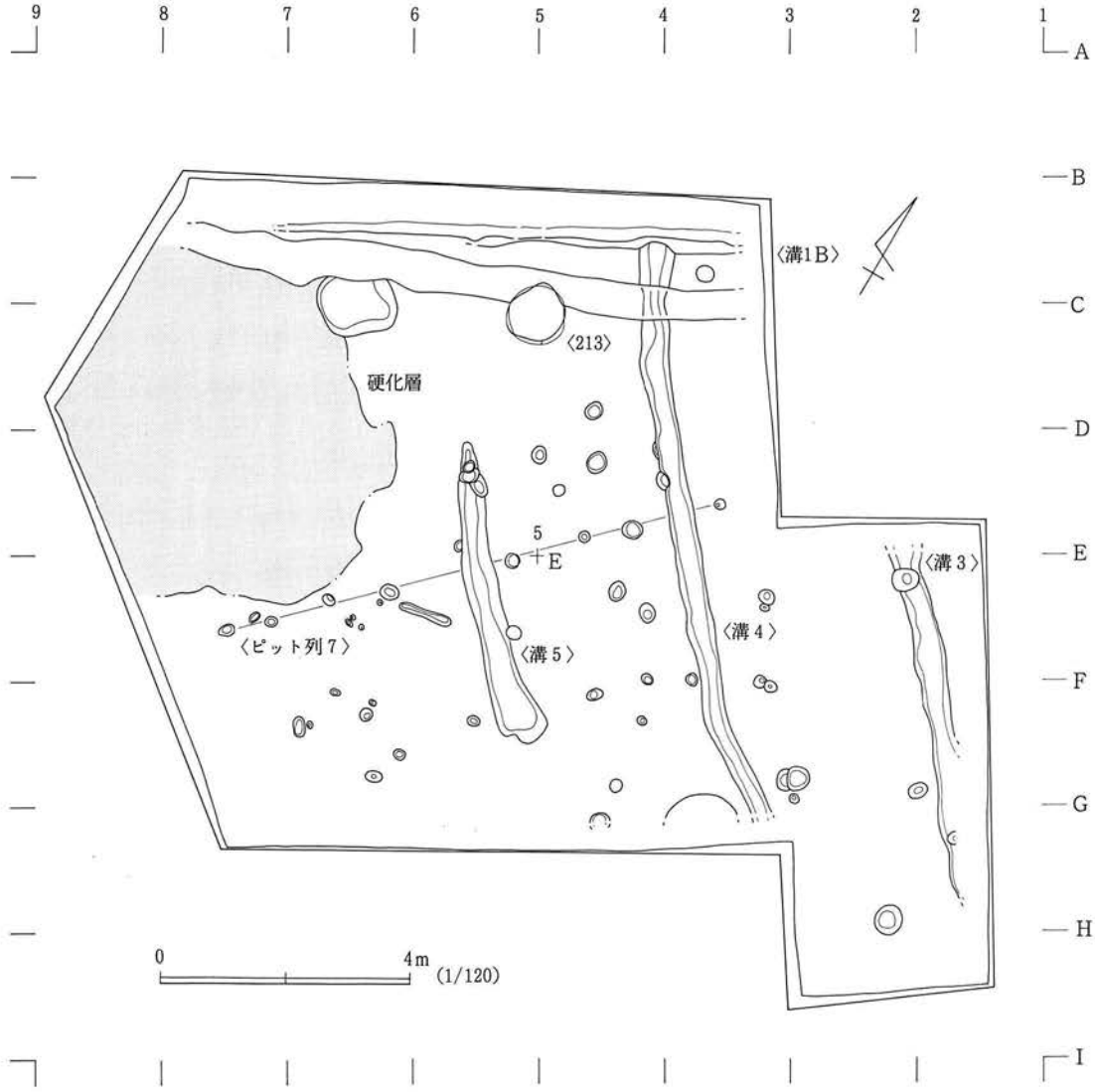


図17　第3面全体図

ある。口径（9.8)、底径（6.0)、器高2.9cm。

7は仕上砥で、京都市一帯で産出される「鳴滝砥」である。側面の2面が砥面である。長さ5.0、幅2.9、厚さ0.9cm。

8は瀬戸・美濃系の擂鉢で体部から底部にかけての破片である。体部内面には11条以上1単位の、底部には7条1単位の擂り目が施される。底部には回転糸切り痕が残り、外周はナデ仕上げされている。胎土は淡褐色の精良土で、黒色、白色の粒子を少量含む。器面には青黒色の釉薬が施される。底径（9.0)cm。

9は土師器甕の口縁部である。体部（肩部）外面にはヘラケズリののちナデ調整が、口頸部の内・外面にはナデ調整が施される。胎土は淡褐色を呈し、細砂粒、黒・金雲母、白色粒子、白色針状物質を含む。口径（21.2)cm。古墳時代後期か。

10・11は灰釉陶器の碗である。10は口縁部の破片で、内・外面ともに刷毛塗りにより施釉される。胎土は灰白色を呈し、精良である。

11は底部で、貼り付けの輪高台が付く。体部の最下部外面と高台内は回転ヘラケズリ整形される。内面に灰釉が部分的に残る。胎土は灰色を呈し、精良。底径（7.0)cm。

3．第3面検出の遺構と遺物

第2面より約15cm下、Ⅴ層上面で検出された遺構面である。検出面の海抜値はおよそ12.0mである。当面では、溝4条、ピット48口、井戸1基、土坑1基が検出された。また、調査区の北西角付近では南北5.6、東西5.4m以上の平面範囲で暗褐色土の硬化面を確認した。硬化はさほど著しくなく、土丹粒やかわらけ片などが入っていた。検出面から確認できた層厚は5～10cmで、極浅いものであった。包含する遺物から、戦国時代前後の埋め立て等の整地層であるとみられる。遺構覆土は概ね締まりが強い暗褐色土で、凝灰岩、及び土丹の粒・塊が目立っていた。

1）．溝1B（図18）

調査区の北端で検出された、東西方向に走る溝である。第1面検出溝1の下、間層をおいて検出された。実際に本址が確認されたのは第3面下を掘り下げる際のことであり、出土遺物や遺構覆土の様相の違いから第3面相当期より若干年代的に上るものとみられるが、本編では第3面に包括して呈示した。

確認面からの深さは25～50cm、底面の海抜は東側で11.1cm、西側で11.0mを測り、西へ向けて緩やか

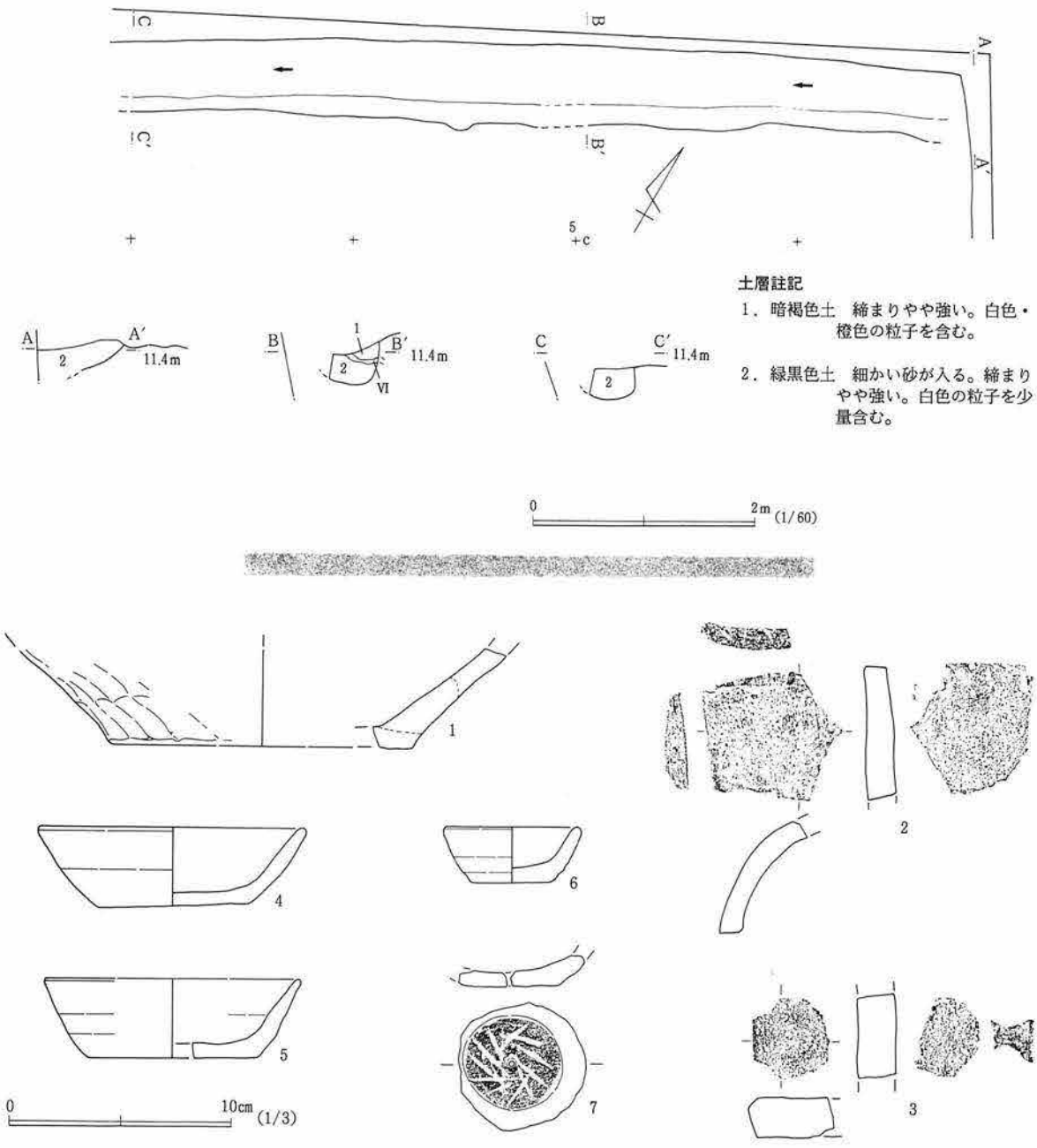


図18　溝1B、出土遺物

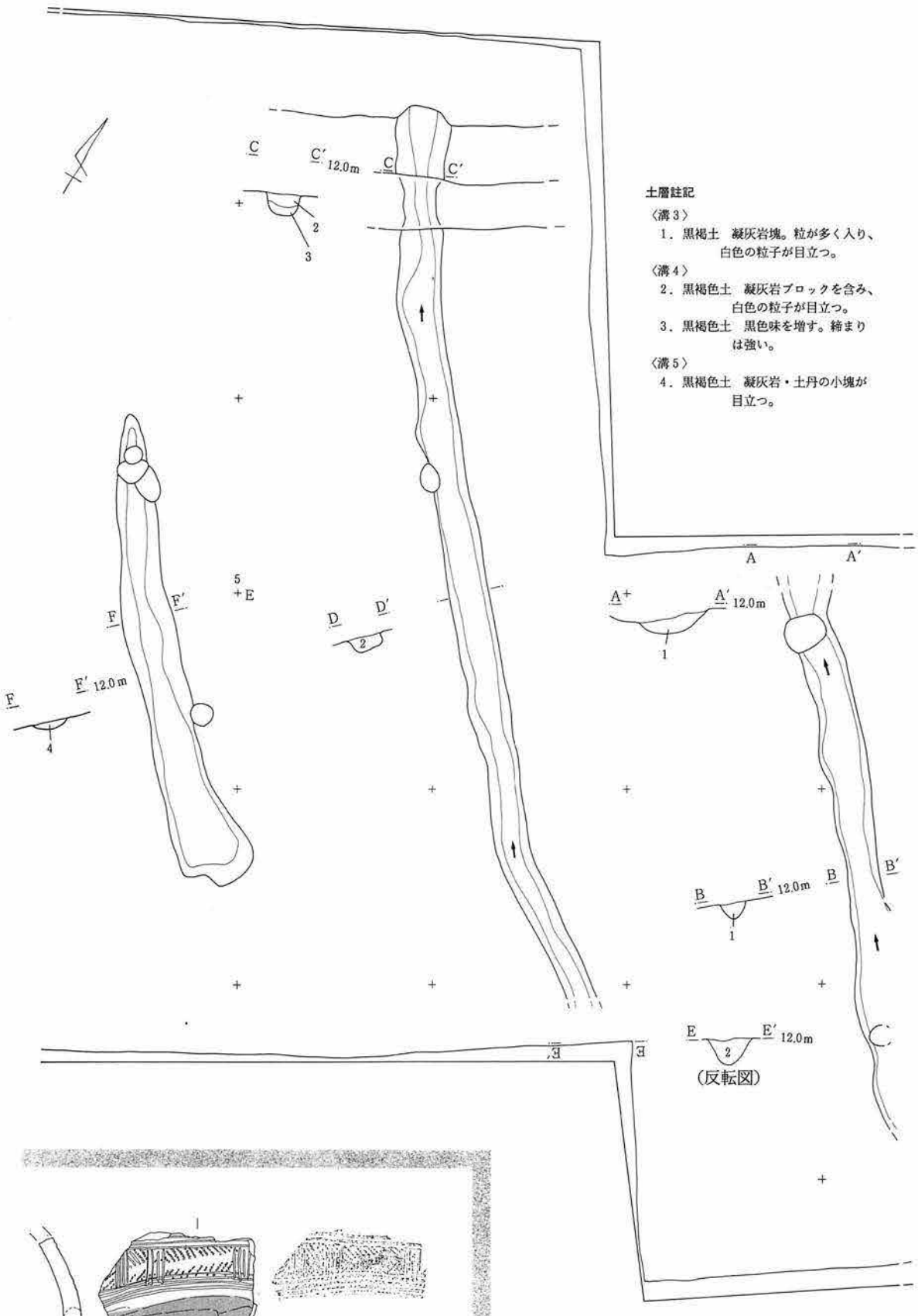


図19　溝3・4・5、出土遺物

に下がる。長さ、幅はともに調査区外へ続くために不明。中心軸方位はN－61°－E。出土遺物のうち7点を図示した。

1は常滑鉢Ⅱ類の底部である。体部外面に指頭圧痕が残る。胎土は褐色を呈し、長石粒、砂粒を含む。底径（13.4）cm。

2・3は瓦で、2は丸瓦の玉縁部である。凹・凸面ともにナデ調整が施されているが、凹面には糸切り痕が残る。側面、端面はともにヘラケズリ調整で、側面の凹面側にはケズリによる面取りが行われる。胎土は淡桃褐色を呈し、砂粒、赤褐色の粒子を含む。表面は焼成ムラがあり、黒灰色、灰白色を呈する。

3は平瓦で、凹・凸面ともに粗いナデが施され、凹面には離れ砂の痕が見える。側面はヘラケズリされ、凹面側端部がケズリにより面取りされる。胎土は淡褐色を呈し、雲母粒、白色粒子を含む。表面は淡灰褐色。

4～7はかわらけで、いずれもロクロ成形である。4は器壁が薄手で、体部中位には上下のナデつけにより弱い膨らみをもつ。口縁部は直線的に立ち上がる。内底面は横ナデ仕上げされる。胎土はやや粉質で、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む。色調は淡い橙褐色。口径12.1、底径6.7、器高3.7cm。

5は体部から口縁部へかけて直線的な立ち上がりを見せる。口縁部はナデによって薄く作られ、このため体部中位が膨らんだように見える。内底面には強い横ナデが施される。胎土はやや粉質で、雲母粒、白色針状物質を含む。色調は淡橙褐色。口径（11.6）、底径（7.6）、器高3.6cm。

6は小型タイプで、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内底面に横ナデを施す。胎土はくすんだ淡褐色を呈し、砂粒、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む。口径（6.2）、底径（3.6）、器高2.6cm。

7は底部の破片で、中心部を直径4mmほどの穿孔が通される。また、外底面には略放射状の刻み痕が残る。内面はナデ調整が施される。胎土は淡褐色を呈し、砂粒、雲母、白色針状物質を含む。底径4.5cm。

2）. 溝3・4・5（図19）

南北に走る溝、溝状遺構である。各溝の中心間距離は、溝3－溝4間が約3.5m、溝4－溝5間が約3.2mを測る。これらの遺構における関連性の有無は不明。

溝3は1・2－E～Gグリッドにおいて検出された。南北両端ともに調査区外へ続く。確認面での幅は35～50cm、深さは約15cmを測る。底面海抜は11.8～11.7mを測り、緩やかに北へ下がる。中心軸方位はN－41°－W。土師器の小片が2点出土している。

溝4は3・4－B～Gグリッドにおいて検出された。南端は調査区外へ延び、北端は第1面溝1が重複し不明。確認面での幅は30～60cm、深さは15～20cmを測る。底面の海抜は11.7～11.4mを測り、北へ向けて下がる。中心軸方位はN－40°－W。出土遺物はない。

溝5は確認面での最大幅が約75cm、深さが10cm弱の浅い掘り込みで、両端ともに途中で確認できなくなり立ち消えとなる。底面の海抜は約11.7mを測る。中心軸方位はN－43°－W。図示した出土遺物は図19－1の1点のみである。弥生土器の壺体部片で、羽状縄文（撚糸文）が施され、縦横4条の沈線によって区画している。区画の下位は赤色塗彩される。胎土は淡褐色を呈し、小礫、金雲母粒を含む。

3）. ピット列6・7（図20）

ピット列6は 6・7－E～Gグリッドにかけて検出された。ピットは確認面からの深さが10～15cmを測り、底面の海抜は11.8～11.6m、自然地形に併せて南へ緩やかに下がる。ピット間の間隔は60～150cmと不均一である。中心軸線はN－74°－W。

ピット列7は3～7－D・Eグリッドにかけて検出された。ピットはいずれも確認面からの深さが20cm

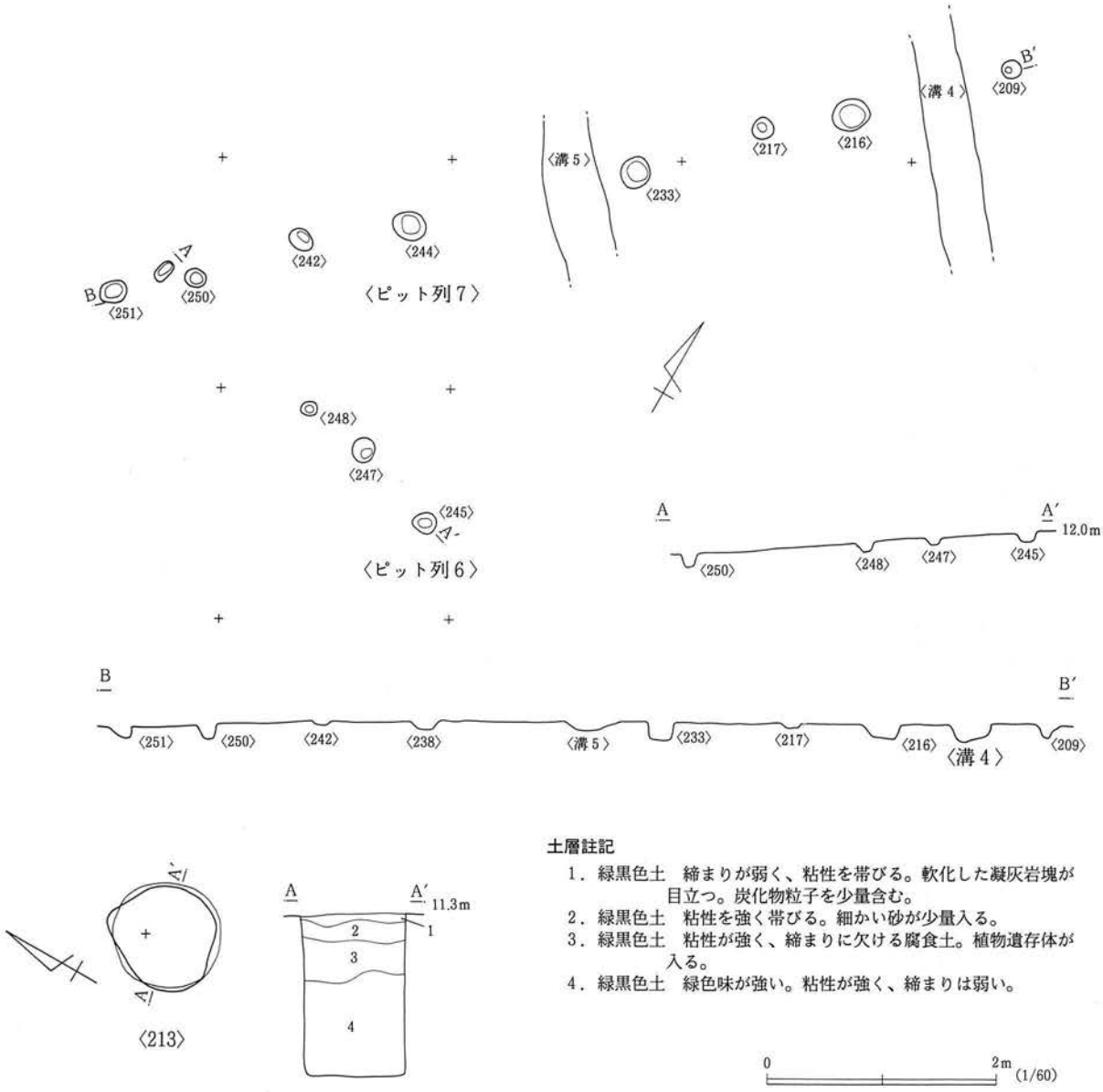


図20　第3面検出遺構

以下の浅いもので、底面海抜は11.7～11.6cm前後を測る。ピット間の間隔は2.0m～1m以下のものまで幅があり、一定でない。中心軸方位はN－43°－E。ピット列6の遺構233より土師器片が出土している。

5）. 遺構213（図20）

5－Cグリッド付近で検出された円形の土坑で、井戸址かとみられる。直径約90cm、確認面からの深さ約1.4mで、ほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は概ね緑黒色粘土で、分層しえたものの各層に大きな差はなく、短期間に埋められた可能性が高い。かわらけの他、中世の遺物が主に出土したが、図示には至らなかった。

6）. 第3面遺構外出土遺物（図21）

第2面基盤層以下、第3面上までに出土した遺物のうち21点を図示した。10と16は面上出土で、3、6、9は調査区北西側の硬化層中より出土した。

1～7はかわらけで、いずれもロクロ成形である。1は小型タイプのもので、厚手の底部から短い体部、口縁が立ち上がる。内底面にナデが施され、底部外面には板状圧痕が残る。胎土は橙褐色を呈し、砂粒、雲母粒、白色針状物質を含む精良土である。口径6.0、底径2.3、器高1.8cm。

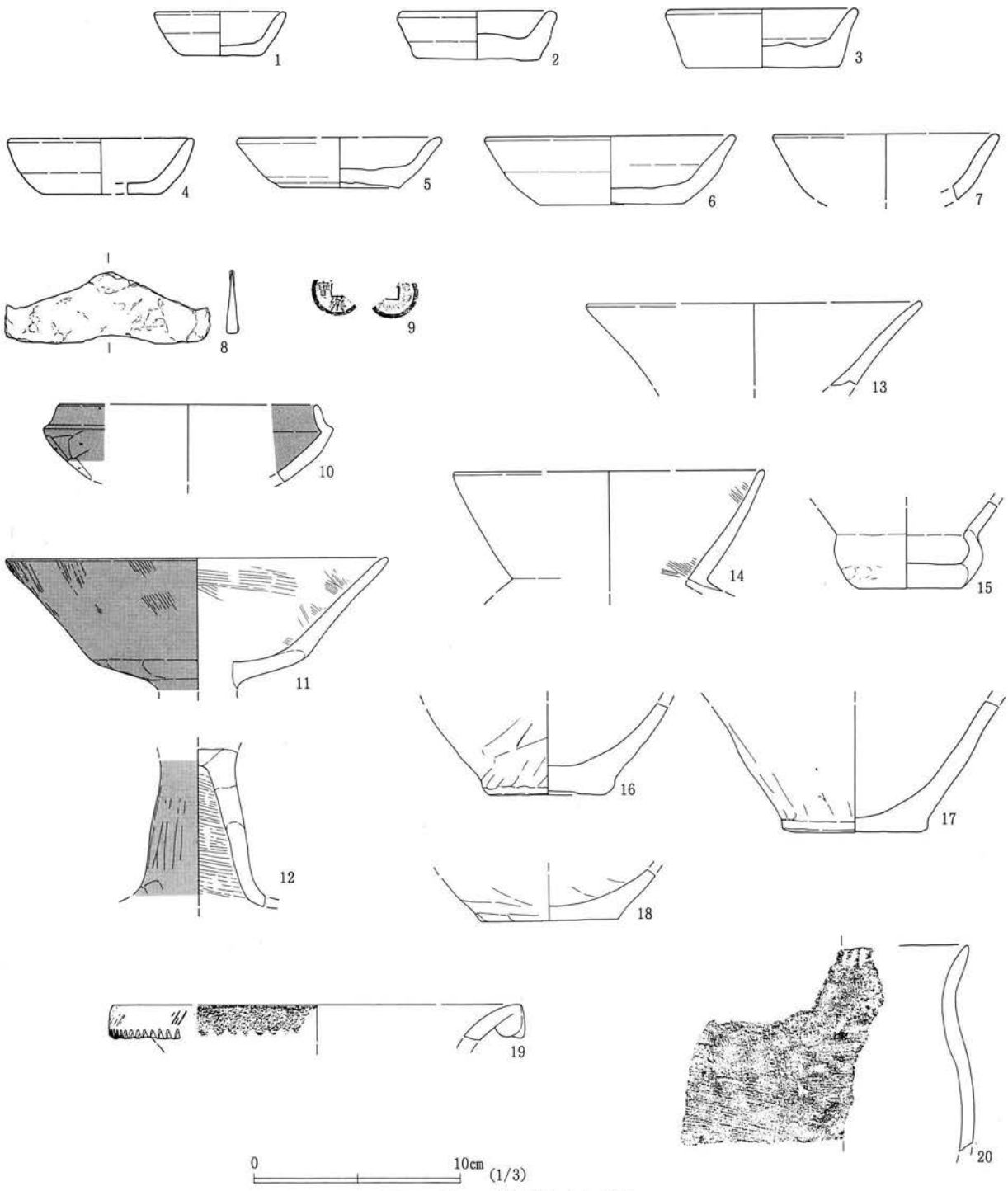


図21　第３面遺構外出土遺物

２は厚手の底部、器壁をもつ。体部から口縁にかけては外傾気味に直線的に立ち上がる。内底面は無調整で、ややマウンド状に盛り上がる。胎土は砂粒を多く含み、他に小礫、雲母粒、白色針状物質などを含む。色調は淡褐色。口径7.8、底径5.9、器高2.4cm。

３は厚手の底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内底面は中心部付近に弱い横ナデが施され、外周に強いナデが巡る。胎土は淡褐色を呈し、砂粒、金雲母、白色針状物質を含む。口径（9.2)、底径7.4、器高2.8cm。

４は体部がやや丸みをもち、口縁は直線的に立ち上がる。内底面はナデ調整が施される。胎土はやや粉質で、砂粒、雲母粒、白色針状物質を含む。色調は淡橙褐色。口径（9.0）底径、(5.6)、器高2.7cm。

5は直線的に立ち上がる体部から口縁部が外反する。内底面はナデ調整されるが、成形時の回転ナデの痕が渦状に残る。底部には板状圧痕が残る。胎土は全体に砂質で、黒雲母、白色針状物質を含む。口径（10.0)、底径（5.8)、器高2.5cm。

6は体部中位が膨らみを帯び、外傾気味の口縁へ移行する。内底面はナデ調整される。また、底部には板状圧痕が残る。胎土は雲母粒、白色針状物質を含む。ややくすんだ褐色を呈する。口径（12.2)、底径（7.0)、器高3.3cm。

7は口縁から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。胎土はやや粉質で、砂粒、雲母粒、白色針状物質を含む。口径（11.3)cm。

8は鉄製品で火打ち鎌である。長さ9.9、幅3.0、厚さ0.6cm。

9は銅銭で「永楽通寶」である。約½が欠損。明代、1408年初鋳。

10〜17は土師器である。10は須恵器坏身の模倣坏で、口縁部から体部が残る。体部外面はヘラケズリ、口縁部内・外面と体部内面はナデ整形される。また、内面及び口縁から体部中位の外面にかけては赤彩の痕が残る。胎土は淡褐色を呈し、雲母粒、白色針状物質を含む。口径（14.6)cm。古墳時代後期。

11・12は高坏で、同一個体である可能性が高い。11は坏部で、器壁は薄く、丁寧に作られる。体部の上半には内・外面ともにハケ調整痕が薄く残る。体部下位には横方向のヘラケズリを施す。口径（18.4)cm。12は脚部で、外面に弱いヘラナデ調整が、内面にはハケメ調整が施される。11・12ともに外面に赤彩の痕跡が見て取れる。古墳時代中期。

13は高坏の坏部である。体部から口縁にかけて緩やかに外反する。内・外面ともに丁寧にナデ仕上げされている。胎土は淡褐色を呈し、雲母粒、白色針状物質を含む。口径（16.2）cm。古墳時代中期。

14は坩の口縁部である。頸部は肩部から丸みをもって立ち上がり、口縁部へ移行する。内・外面ともに丁寧にナデ整形され、内面の一部にハケ調整痕が一部残る。胎土は淡赤褐色を呈し、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む。口径（15.0)cm。

15は小型坩で、頸部から底部が残る。内・外面ともにナデ調整が施され、外面の一部に成形時の指頭圧痕が残る。胎土は全体に砂質感が強く、黒雲母粒を多く含む。色調は淡褐色。底径5.0cm。

16・17は甕の底部片である。16は体部外面にヘラケズリ後ナデ調整を、内面にナデ調整を施す。胎土は淡褐色を呈し、雲母粒の混入が目立つ他、白色粒子も含む。底径5.5cm。

17は体部内・外面ともにナデによって丁寧に仕上げられている。外面には縦位ヘラケズリ痕が薄く残る。胎土は淡褐色を呈しやや粗く、小礫、砂粒、黒雲母粒が目立つ。底径7.0cm。

18は壺の底部片である。体部内・外面、外底面にヘラ状工具による粗いナデが施されている。胎土は赤褐色を呈し、小礫、砂粒、黒雲母を含む。底径（7.7)cm。

19・20は弥生時代後期の土器である。19は壺で、折り返し口縁の外面下端に刻み目が配される。また、摩滅が著しいが、外面に斜位の縄文が薄く残る。胎土は淡橙褐色を呈し、粗い砂粒、黒雲母粒を多く含む。口径（19.8)cm。

20は台付甕の口縁部から体部にかけての破片である。口縁外面に刻みを施す。体部外面はハケののちナデ調整が、内面はナデ調整が施される。胎土は赤褐色を呈し、砂粒、黒雲母粒、白色針状物質を含む。

4．第4面検出の遺構と遺物

第3面より約50cm下層、Ⅸ層上面で検出された。Ⅸ層は自然堆積層で、谷の開口部、北西へ向けて緩やかに下がり、上面の海抜値は調査区南側で11.6m、北側で11.1m以下を測る。当面では溝が2条とピット2口が検出された。遺構覆土は緑黒色土が基調となる。

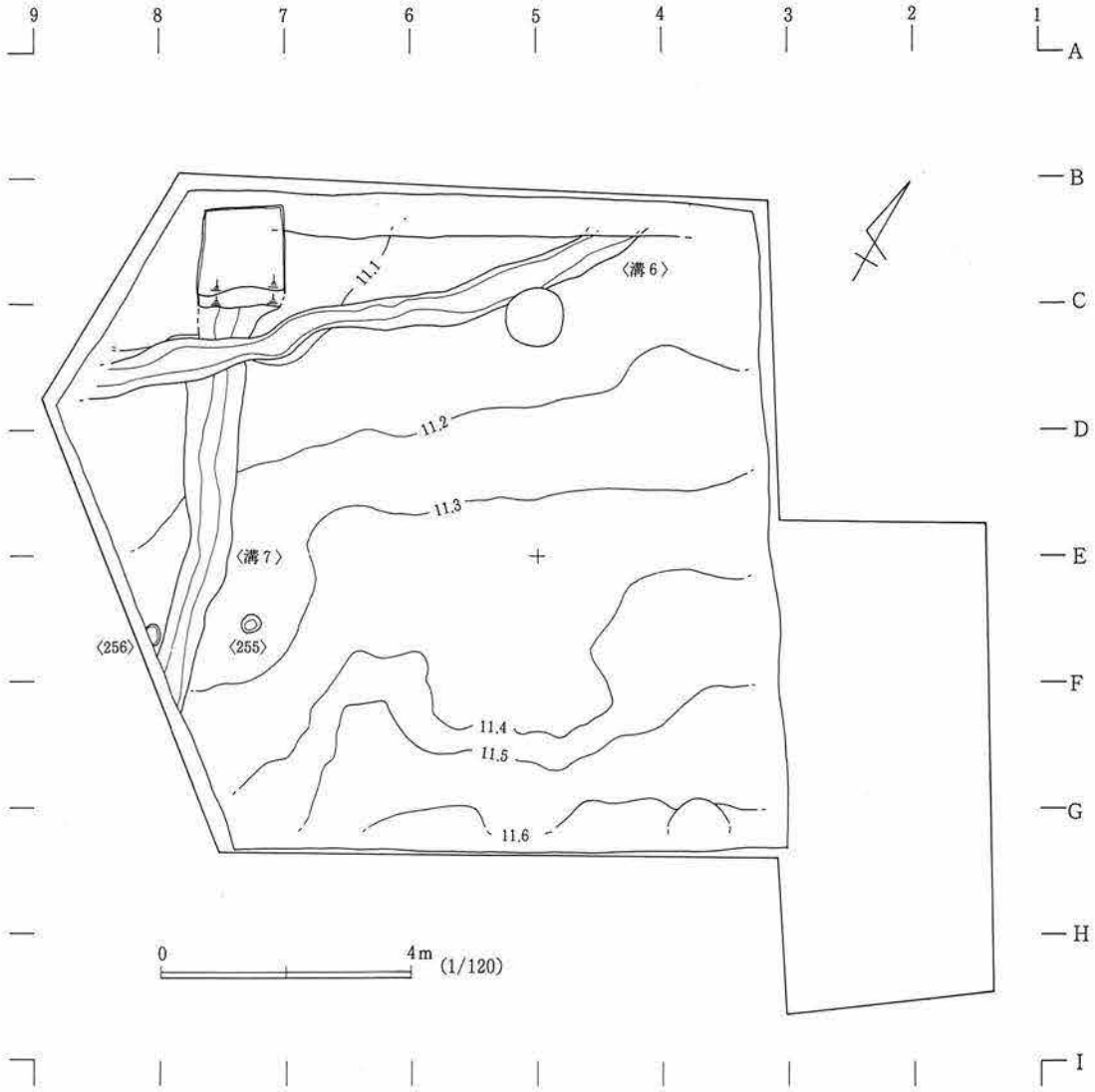


図22　第4面全体図

1）. 溝6（図23）

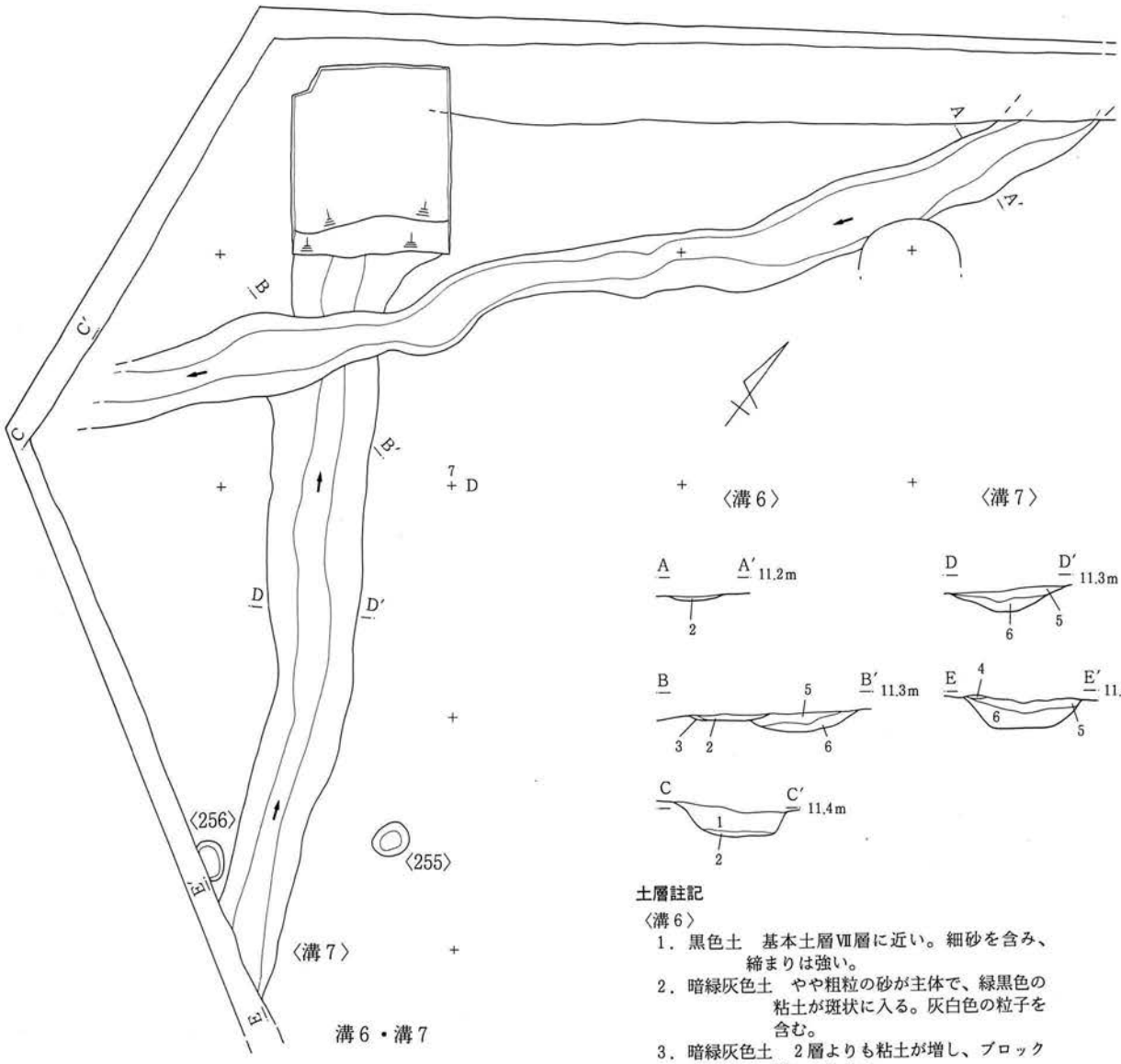
4－B～8－Cグリッドにかけて検出された、南北軸の溝である。掘り込み面はⅦ層で、第3面検出硬化層かそれに近似する土が被る。西端は調査区外へ続き、東端は第3面検出の溝1Bが重複して途切れる。溝7と重複し、本址が新しい。確認面での幅は最大で70cm、深さは10cmに満たず、最下層の一部のみを検出したことになる。底面の海抜は11.0～10.95mを測り、わずかではあるが西側が低い。覆土は川砂のような粗砂を多く含む。中心軸方位はN－39°－E。土師器の小片が2点出土している。

2）. 溝7（図23）

7－C～8－Fグリッドにかけて検出された、南北軸の溝である。掘り込み面はⅨ層。遺構の南端は調査区外へ延び、北側は確認面から徐々に浅くなり立ち消えとなる。この北端延長部は自然地形がやや落ち込んでおり、おそらく当初からの限界はこの付近であったとみられる。確認面における幅は最大で約1.0m、深さが20～25cmを測る。底面の海抜は11.0～10.95mを測り、わずかに北へ下がる。覆土は緑黒色の粘質土で、白色粒子（軟化したスコリアか？）の混入が目立つ。中心軸方位はN－35°－W。出土遺物はない。

3）. 遺構255・256（図23）

いずれも径35cmほどのピットである。掘り込み面はⅨ層。底面の海抜は255が11.1m、256が10.9mを



土層註記

〈溝6〉

1．黒色土　基本土層Ⅶ層に近い。細砂を含み、締まりは強い。

2．暗緑灰色土　やや粗粒の砂が主体で、緑黒色の粘土が斑状に入る。灰白色の粒子を含む。

3．暗緑灰色土　2層よりも粘土が増し、ブロック状にまとまる。

〈溝7〉

4．緑黒色土　下の5層が自然硬化したものか。

5．緑黒色土　白色の細粒が目立つ。締まりは弱く、粘性を強く帯びる。

6．緑黒色土　4層・5層より黒色味が強くなる。粘性・締まりともに強い。白色の粒は減少する。

土層註記

〈256〉

1．緑黒色土　粘性が強く、締まりはやや強め。白色の粒子を少量含む。

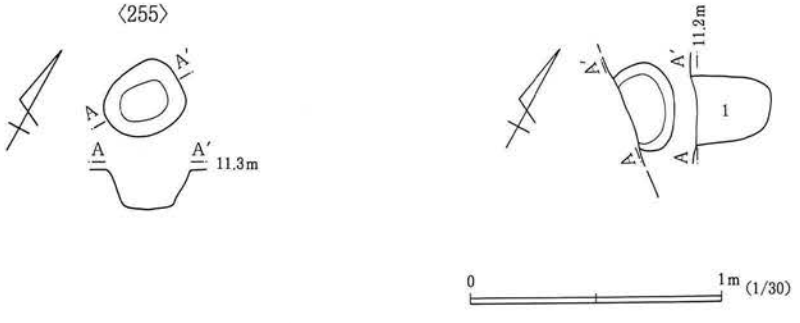


図23　第4面検出遺構

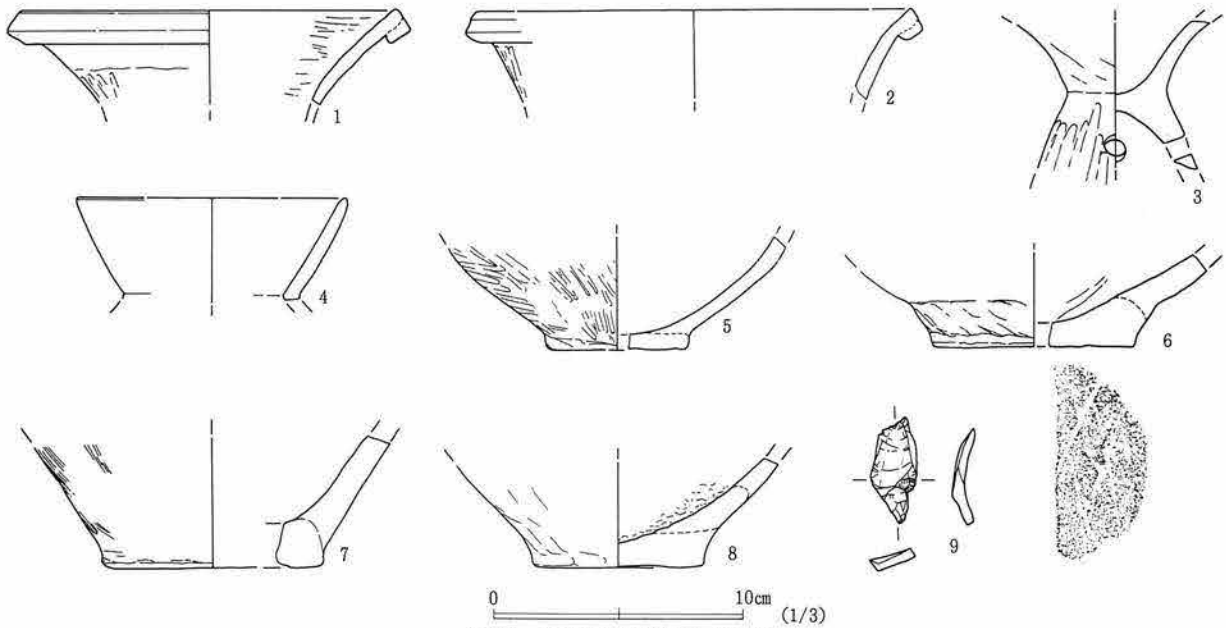


図24　第4面遺構外出土遺物

測る。覆土はいずれも緑黒色の粘質土で、白色の粒子を多く含む。遺構255－256間は約1.6mの間隔をもつが、相互に関連する遺構であるかは不明。出土遺物はない。

4）. 第4面遺構外出土遺物。

第3面基盤層以下、第4面上面までの出土遺物のうち9点を図示した。2・3・5・9がV層中出土、1・4と6～8がⅦ・Ⅷ層中より出土している。

1・2は弥生時代後期の土器で、壺の口縁部である。いずれも折返し口縁。器面は摩滅が著しいが、頸部の外面にヘラナデ調整、内面にハケメ調整の痕が薄く残る。胎土は淡橙褐色を呈し粗砂粒、黒雲母粒、白色粒子を含む。口径14.8cm。

2は頸部外面にヘラナデ調整痕が薄く残る。胎土は淡褐色を呈し、粗砂粒、黒雲母粒、白色粒子を含む。口径（17.4)cm。

3は坩の口縁部である。内・外面ともにナデによって丁寧に仕上げられる。胎土は赤褐色を呈し、雲母粒、白色粒子、白色針状物質を含む。口径（10.8)cm。

4は壺であろうか。薄手に作られる体部は丸みをもって底部から立ち上がる。体部及び底部外面にはヘラナデ調整が、内面にはナデ調整が施される。胎土は橙褐色を呈し、砂粒、金雲母粒、白色粒子を含む。底径（5.6)cm。

5は器台か。脚上位には直径8㎜の孔が通る。脚部外面には弱いヘラナデが、体部の内・外面と脚台内にはナデ調整が施される。胎土は淡橙褐色を呈し、砂粒、黒雲母粒、白色粒子を含む。

6は甕の底部である。体部の底部付近は内・外面ともにヘラナデ調整が施される。外底面には木葉痕が残る。胎土は淡褐色を呈し、砂質感が強い。雲母粒を含む。底径（8.0)cm。Ⅶ・Ⅷ層中出土。

7は甕の底部である。体部外面はハケ調整ののちナデ調整が、内面はナデ調整が施される。胎土は灰褐色を呈し、砂粒、黒雲母粒を多く含み、金雲母粒を少量含む。底径（8.8)cm。

8は甕の底部である。体部外面にはヘラナデ後にナデが、内面と外底面にはナデ調整が施される。また、内面は器面が細かく剥落している。胎土は砂粒、黒雲母粒を含み、やや暗めの褐色を呈する。底径(6.8)cm。

9は黒曜石で石核か。一部が打ち欠かれたように剥離している。長さ4.2、幅2.1、厚さ0.5cm。

第4章　まとめ

今回の調査では4面の遺構面が検出された。全体に遺構は稀薄であったが、これは、本調査地が谷戸から沖積地へ連なる立地条件にあるためであろう。第1面から第4面までを通じて、最も低地に近い北側に溝が連綿として築かれていたことからも、利・治水等の使用のされ方が長く続いた土地であったことが窺えよう。以下、各遺構面の年代観と変遷について簡単に触れて、まとめとしたい。

第1面で検出された遺構のうち、図示しうる遺物を出土したのは溝1・2と遺構2（ピット）のみであった。溝1と溝2はほぼ同方向に流れる溝で、重複関係にあり溝1が新しい。いずれの出土遺物にも中世に上る古期の様相が見て取れたが、主体となるのは肥前系、瀬戸・美濃系を中心とする近世後期の陶磁器類である。また、図9－11、12に示した砥石は近世以降に産地での採掘が開始されたということである。こうした点から、両溝址は近世の中で造り替え、利用が行われたものといえるであろう。溝の掘り込み面は検出面より1枚上層のⅡ層であることから、他の遺構にはこれより古段階のものも含まれると思われる。

第2面ではより遺構からの出土遺物が少なく、年代を絞り込むことは難しい。遺構122出土の瀬戸・美濃系擂鉢片や遺構外出土遺物に内底面無調整のかわらけが含まれることからも、近世段階の中で捉えられようか。なお、平安期の灰釉陶器や古墳後期の土師器甕なども遺構外から出土している。

第3面においては溝4条をはじめとする遺構が検出された。溝1Bは厳密にいえば第3面を掘り下げる際に確認された遺構で、覆土の様相も特異であることから、当面検出の他の遺構よりも古い可能性が高い。出土遺物は少ないもののかわらけ、常滑鉢、瓦などの中世期のものでまとめられる。かわらけは全体に胎土が粉質で、体部から口縁が直線的、もしくは外反して立ち上がる傾向にある。年代としては15世紀代が与えられようか。溝1Bについては、上層で確認された同軸溝の初現であるとみられる。溝3・4・5は同軸方向に走る溝であるが相互に関連するものかは不明。溝5からは弥生後期の土器（図19－1）が出土しているが、遺構の年代を示すものとは考えにくい。遺構外出土遺物はかわらけなどの中世遺物の他、弥生・古墳期の土器片も混在する。中世の遺物については、Ⅴ層上面近くでは出土しなかったものと記憶しているが、出土層位は明確に区分できなかった。全体的に見て、第3面には中世後期から戦国期頃の年代が考えられる。

第4面検出遺構のうち、溝6のみがⅦ層を掘り込んで造られており、他はⅨ層を掘り込み面とする。遺構からの出土遺物がなく、年代については判然としない。Ⅶ・Ⅷ層からの出土遺物を見る限りでは古墳中期より下るものがなく、遺構の覆土も上層遺構のそれとは様相が異なるため、第3面と第4面との間には年代的に開きがあるのかもしれない。従って当面の年代については出土資料数が少ないものの、古墳中期までの可能性を示唆しておきたい。

調査地の周辺、殊今回のような低地近くでは発掘調査の事例が殆どなく、その意味では4面に及ぶ遺構面を確認し、弥生後期にまで遡る出土遺物を見たことは意義深い。出土した遺物の多くが谷戸奥、或いは丘陵上からの流入土に伴うものと思われ、本遺跡の上方に集落、生活域があったことを窺わせる。いずれにせよ今後の調査の積み重ねの中で、標記の大慶寺旧境内域も含めた、各期の様相が明らかにされていくことを期待したい。

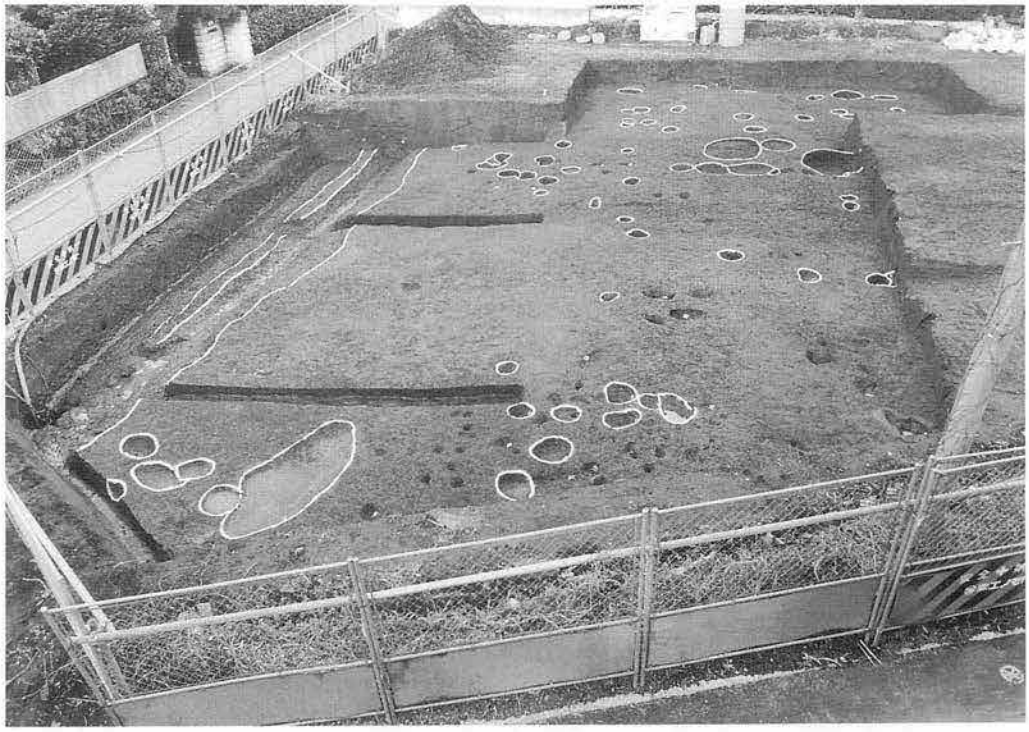
報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	16
編著者名	瀬田哲夫・押木弘己
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－0000　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月

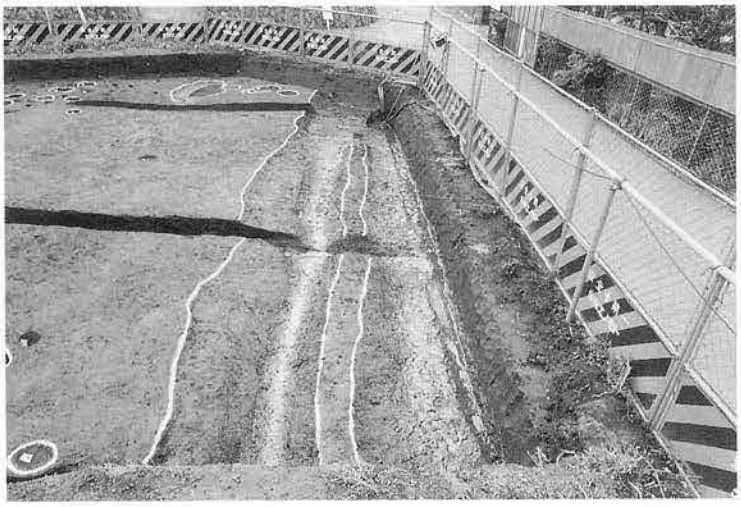
所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
大慶寺旧境内遺跡（たいけいじ きゅうけいだいいせき）	神奈川県鎌倉市寺分1丁目819番1（かながわけん かまくらしてらぶん）	204	361			19981008～19981126	172㎡	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大慶寺旧境内遺跡	社寺	弥生後期～古墳時代、平安時代中・近世	弥生後期～古墳時代？：溝、ピット 中・近世：溝、ピット列、井戸	・弥生後期から古墳後期までの土器、土師器 ・平安時代の灰釉陶器片 ・中・近世のかわらけ、陶磁器他	標記遺跡範囲内で行われた初めての調査

写　真　図　版



▲ 第 1 面全景　西から



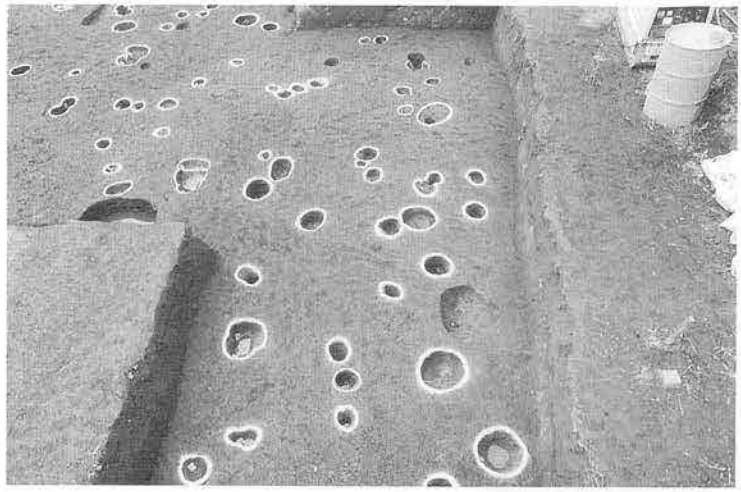
◀ 第 1 面溝 1 ・ 2
東から

◀ 第 1 面遺構89
北から

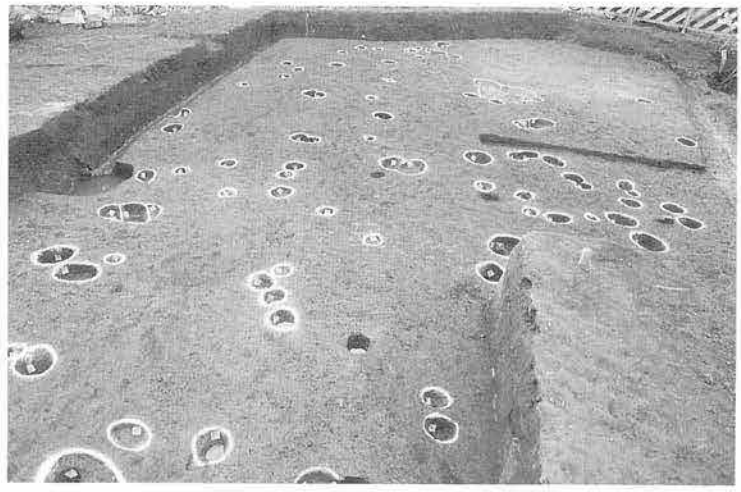
図版 2

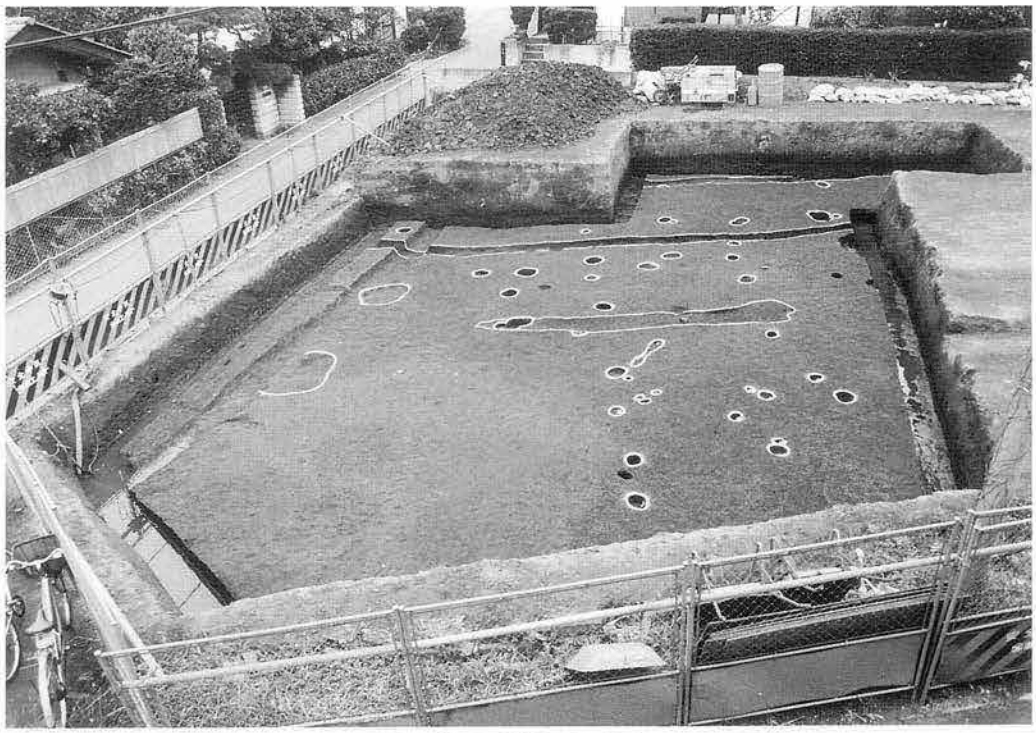
▲ 第 2 面全景　西から

第 2 面ピット群 ▶
南から

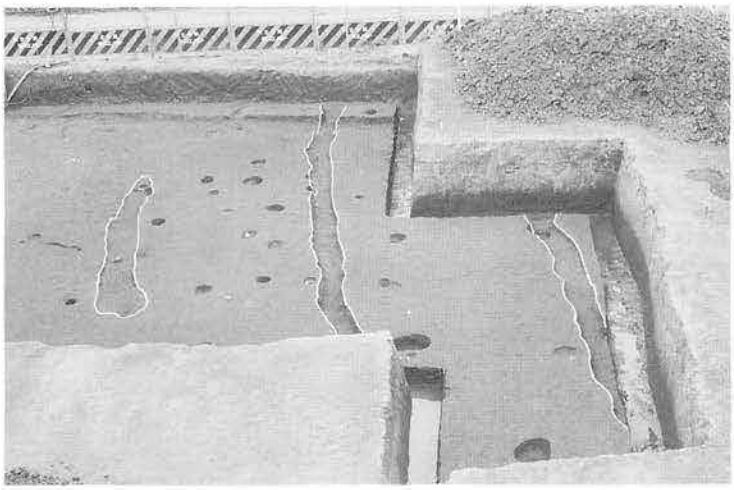


第 2 面ピット群 ▶
東から

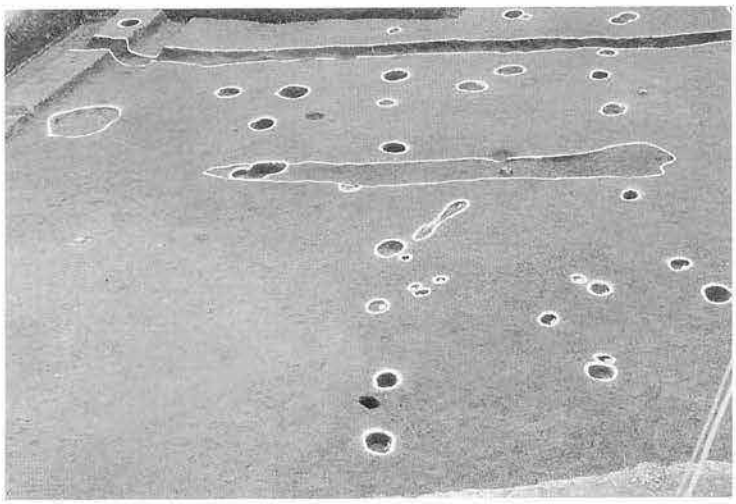




▲ 第 3 面全景　西から



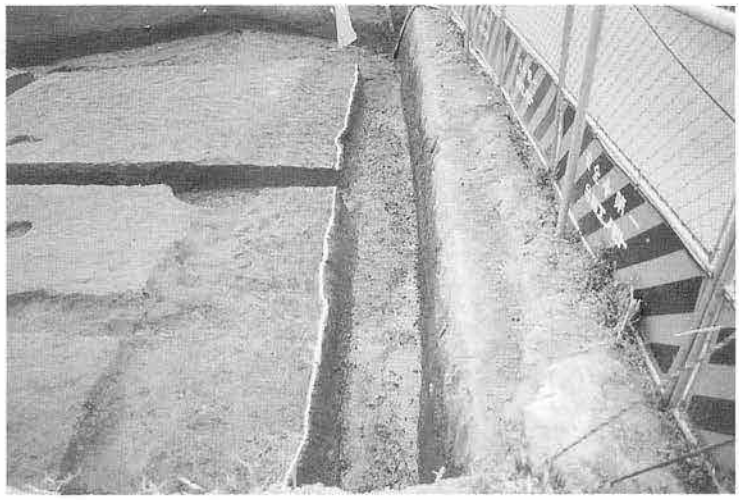
◀ 第 3 面溝 3 ・ 4 ・ 5
南から



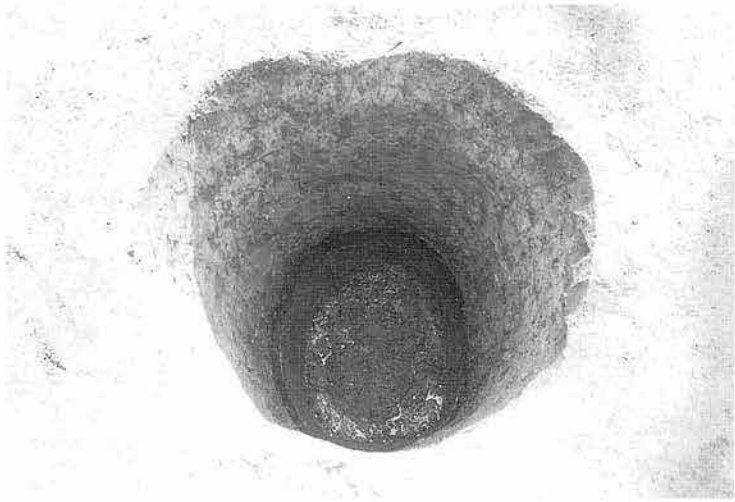
◀ 第 3 面ピット列 7
西から

図版 4

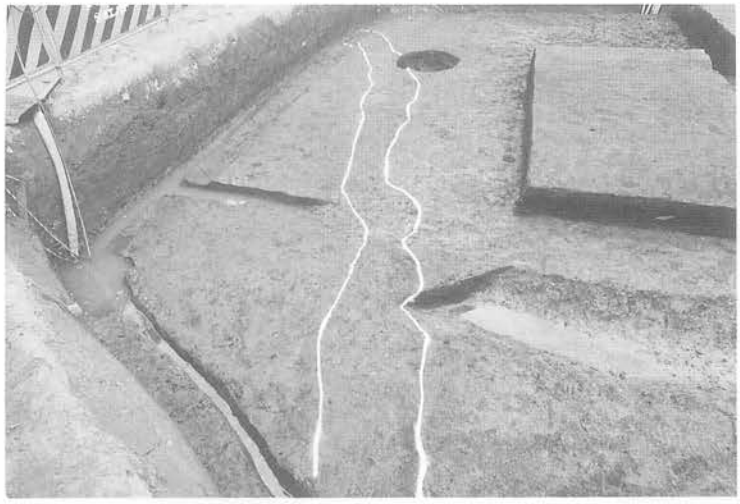
第 3 面溝 1 B ▶
東から



第 3 面遺構213 ▶
東から



▲ 第 4 面全景　南から



▲ 第 4 面溝 6　西から

▲ 第 4 面溝 7　南から

▲ 基本堆積土層

◀ 第 4 面溝 7 土層断面
東から

図版 6

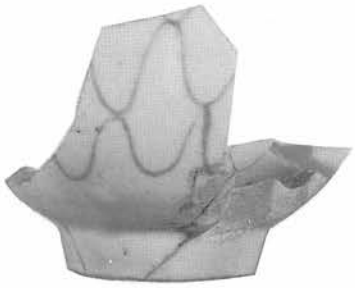


図9－1

－2

－3

－9

－11

－12

－13

図10－1

－2

－3

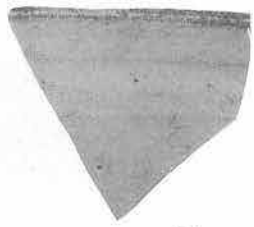
－10

－9

－11

図10－12

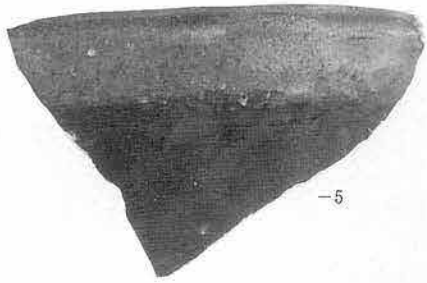
－13



－16

－21

図12－3



－5

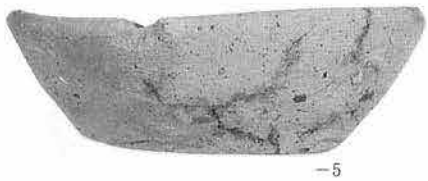
－7

図16－1

－2

－7

－3



－5

－8

－4

図版 8

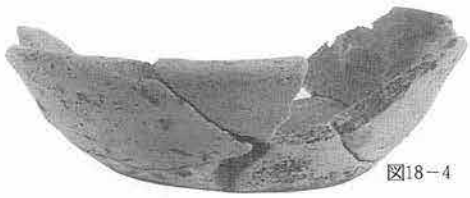


図18－4

－6

－7

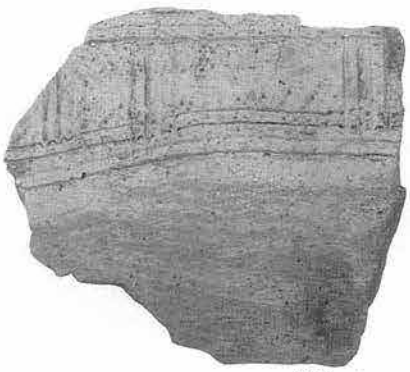
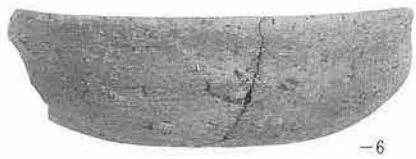


図19－1

図21－2

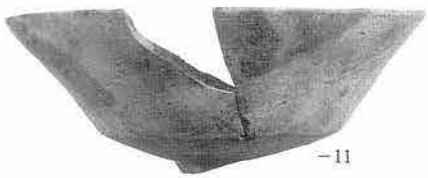
－3

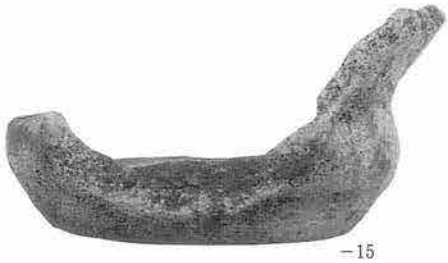
－5


－6

－8

－10


－11


－15

－19

－12

－20

図24－3

横小路周辺遺跡（No.259）

鎌倉市二階堂字荏柄10番６外地点

例　言

1．本報は鎌倉市二階堂字荏柄10番６外地点に所在する、個人専用住宅の新築に先だち行われた、横小路周辺遺跡（県遺跡台帳№259）の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は平成10年11月２日から11年１月22日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

3．本報使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は、第１章、第２章、第３章を福田誠が、第４章を菊川 泉が、第５章を福田が担当し、編集は福田が行った。

4．本報に使用した遺構写真・遺物写真は、福田・菊川・神山晶子が撮影を行った。

5．発掘調査の体制は以下の通りである。

主任調査員　福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)　原 廣志

調　査　員　菊川 泉　神山晶子

調査補助員　本城 裕　須佐仁和　早坂伸市

作　業　員　(社)鎌倉市シルバー人材センター

6．発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……156
　第１節　遺跡の位置 ……156
　第２節　歴史的環境 ……156
第２章　調査の経過 ……157
第３章　検出した構遺 ……159
　第１節　Ａ区の遺構 ……159
　第２節　Ｂ区の遺構 ……162
第４章　出土した遺物 ……163
　第１節　Ａ区の遺物 ……163
　第２節　Ｂ区の遺物 ……163
第５章　まとめ ……186

挿　図　目　次

図１　横小路周辺遺跡位置図 ……156
図２　調査地位置図 ……157
図３　調査グリッド設定図 ……158
図４　Ａ区１面・２面遺構図 ……159
図５　Ｂ区１面・２面・３面遺構図 ……160
図６　Ｂ区４面・５面遺構図 ……161
図７　Ｂ区４面検出建物 ……162
図８　Ａ区出土遺物 ……164
図９　Ｂ区１面まで出土遺物 ……166
図10　Ｂ区１面遺構出土遺物 ……167
図11　Ｂ区１面土壙２出土遺物 ……170
図12　Ｂ区２面まで出土遺物 ……171
図13　Ｂ区２面井戸出土遺物 ……172
図14　Ｂ区２面井戸出土遺物 ……175
図15　Ｂ区４面まで出土遺物 ……177
図16　Ｂ区３面・４面遺構出土遺物 ……178
図17　Ｂ区５面（地山面）まで出土遺物 ……181
図18　Ｂ区５面（地山面）遺構出土遺物 ……182
図19　Ｂ区５面（地山面）遺構出土遺物 ……184

図　版　目　次

図版１　遠景・Ａ区１面全景 ……189
図版２　Ａ区２面全景・Ａ区東壁 ……190
図版３　Ａ区北壁・Ｂ区１面全景 ……191
図版４　Ｂ区２面全景・井戸 ……192
図版５　Ｂ区３面・４面全景 ……193
図版６　Ｂ区５面（地山面）全景・西壁 …194
図版７　Ａ区出土遺物 ……195
図版８　Ｂ区１面の遺物 ……196
図版９　Ｂ区１面の遺物 ……197
図版10　Ｂ区１面土壙２の遺物 ……198
図版11　Ｂ区２面の遺物 ……199
図版12　Ｂ区２面井戸の遺物 ……200
図版13　Ｂ区２面井戸・４面の遺物 ……201
図版14　Ｂ区３面・４面の遺物 ……202
図版15　Ｂ区３面・４面の遺物 ……203
図版16　Ｂ区５面（地山面）の遺物 ……204
図版17　Ｂ区５面（地山面）の遺物 ……205
図版18　Ｂ区５面（地山面）の遺物 ……206

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

横小路周辺遺跡の範囲は、荏柄天神参道を境に東は鎌倉宮、南は滑川に挟まれた地域である。

遺跡名の「横小路」とは、鎌倉宮正面、西側一帯の字名から名付けられ、鉄の井から八幡宮前を横切り、宝戒寺に至る横小(大)路とは別なものである。

調査地は、源頼朝の大倉御所の東、御所東の境界と考えられる東御門川と滑川との合流地点（関取橋付近）より東に約120ｍの位置である。調査地点南側の県道「金沢鎌倉線」は、鶴岡八幡宮脇から十二所、朝比奈を経て六浦に通じる「六浦路」にあたる。調査地点は県道より約２ｍ程高く、周囲の地形は段丘状に県道の南側を東から西に流れる滑川に向かい低くなる。

第２節　歴史的環境

調査地の北側には、頼朝が鎌倉入府以前からある荏柄天神があり、社伝では長治元年（1104）勧請と伝えられる。源頼朝により大蔵屋敷の鬼門鎮守となる。東側には開山は行基と伝えられている杉本寺がある。鎌倉草創期の頃、大倉御所の東側には、和田氏、北条氏等の有力御家人達の屋敷が軒を並べていたようである。

北条義時の大倉亭

『吾妻鏡』「杉本観音の西方二階堂大路の辺。」

大倉辻と呼ばれた御所の南東角、二階堂大路との交差点の東側と考えられる。和田胤長の屋地と隣接していた可能性も考えられる。

和田胤長の屋地

『吾妻鏡』「荏柄の前にあり、御所の東隣たるによって」

大倉御所の東、荏柄天神の南に在ったようである。

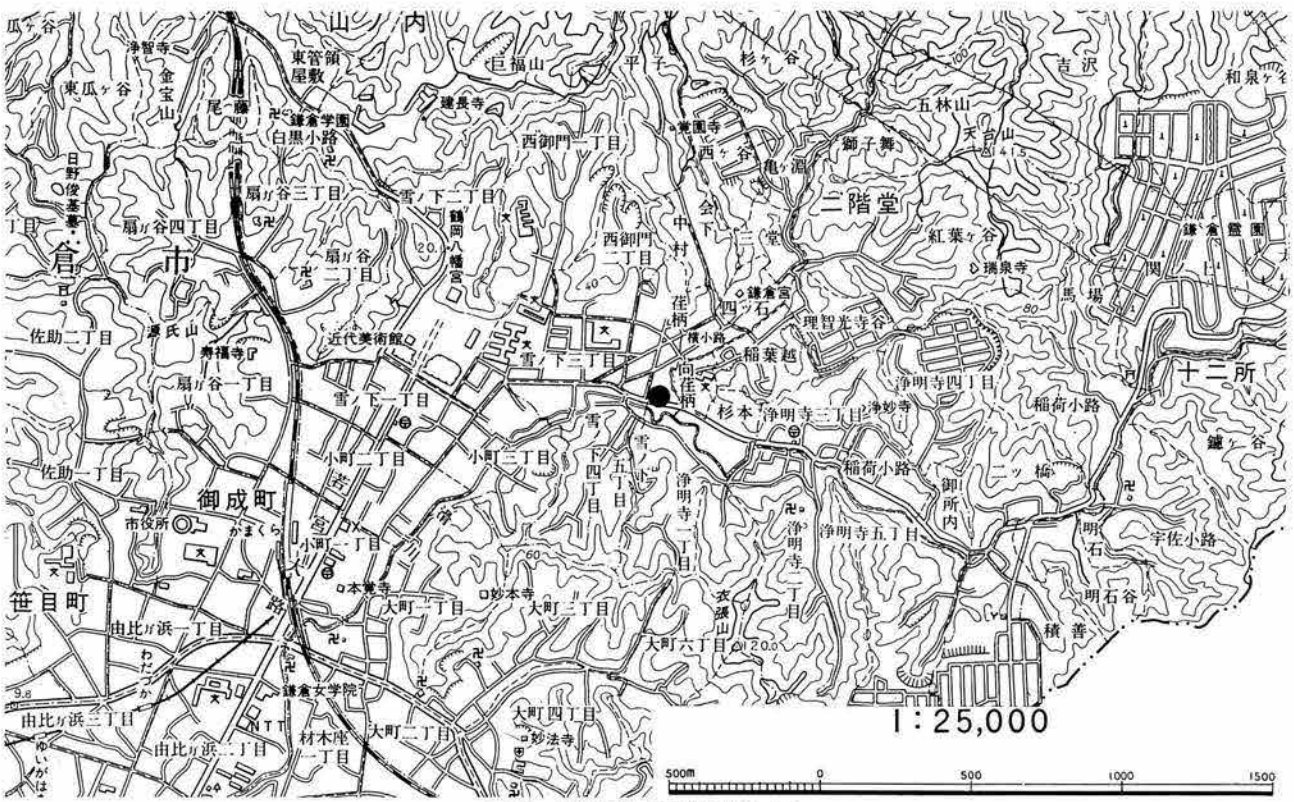


図１　横小路周辺遺跡位置図

健保元年（1213）２月16日、泉親衡の乱で謀反の疑いをかけられた和田義盛の子義直、甥の胤長のうち、義盛の謝罪により義直は許されるが、胤長は陸奥へ琉配となり屋地は没収となる。この没収された胤長の屋地はいったん義盛が拝領（３月25日）する。しかし再度この屋地を義時が拝領（４月２日）し、家人の金窪行親、安東忠家に分け与え、義盛の代官久野谷彌次郎を追い出してしまう。このことが和田合戦（５月２日）の発端となり、兵を挙げた和田一族のほとんどが滅ぼされる。この後北条氏はますます権勢を振るうようになって行くのである。

調査地は、和田合戦の舞台となった北条義時の大倉亭、和田胤長の屋地が在ったと考えられる地域にあたる。

第２章　調査の経過

横小路周辺遺跡内の、神奈川県鎌倉市二階堂字荏柄10番６外の個人専用住宅新築工事に伴う建築申請を受け、鎌倉市教育委員会文化財課は先行して行った確認調査により、新築工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査の必要性を認めた。建築主の了解を戴き、南側の県道金沢鎌倉線に面し、土地を県道の高さま

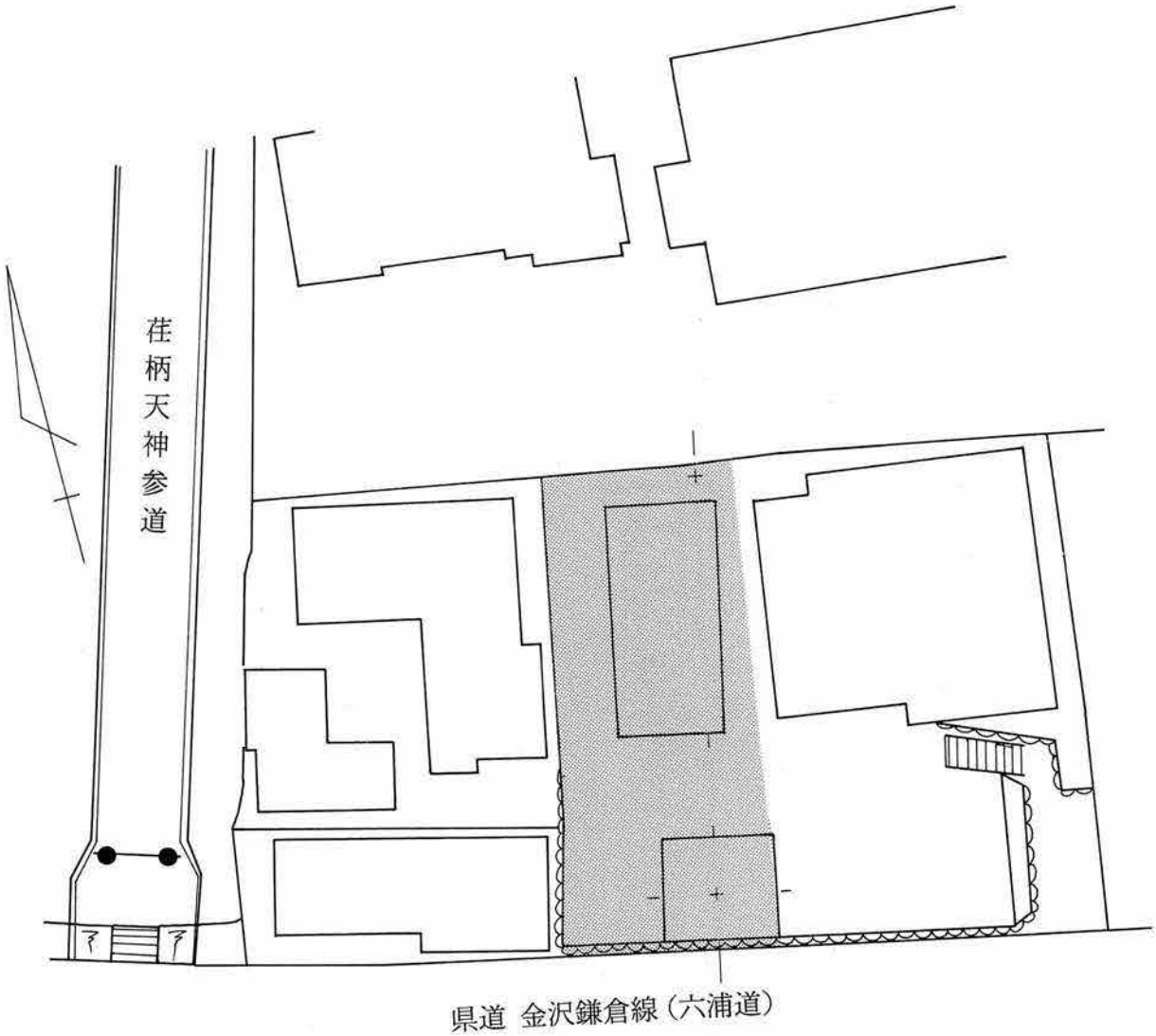


図２　調査地位置図

で切り下げる駐車場部分（一次調査）と、住宅の基礎が入る北側部分（二次調査）にわけ、平成10年11月～平成11年１月にかけて、鎌倉市教育委員会が国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査を行う運びとなった。調査面積は96.0㎡である。

発掘調査は、駐車場部分の一次調査を平成10年11月２日より11月16日まで行った。重機による表土掘削の終わった11月２日に、機材の搬入を行い直ちに一次調査を開始した。

調査にあたって、調査地の西方にある荏柄天神参道と南側を走る県道を意識して測量用の方眼を設定した。県道脇に設置してある市４級基準点のうちＥ182（X=-75,435.874・Y=-24,252.697）とＥ192（X=-75,438.291・Y=-24,205.415）を用いて調査原点（X=-75,427.715・Y=-24,223.202）を設置した。また、調査には、岐れ道交差点脇に設置してある市３級基準点（№53,209）の海抜高（12.109m）を移動し、調査地の脇に設けた仮水準点（13.787m）を用いた。設定した方眼の南北軸線はＮ-10°40′52″-Ｅである。調査地点の経緯は東経139°34′01″、北緯35°19′11″である。

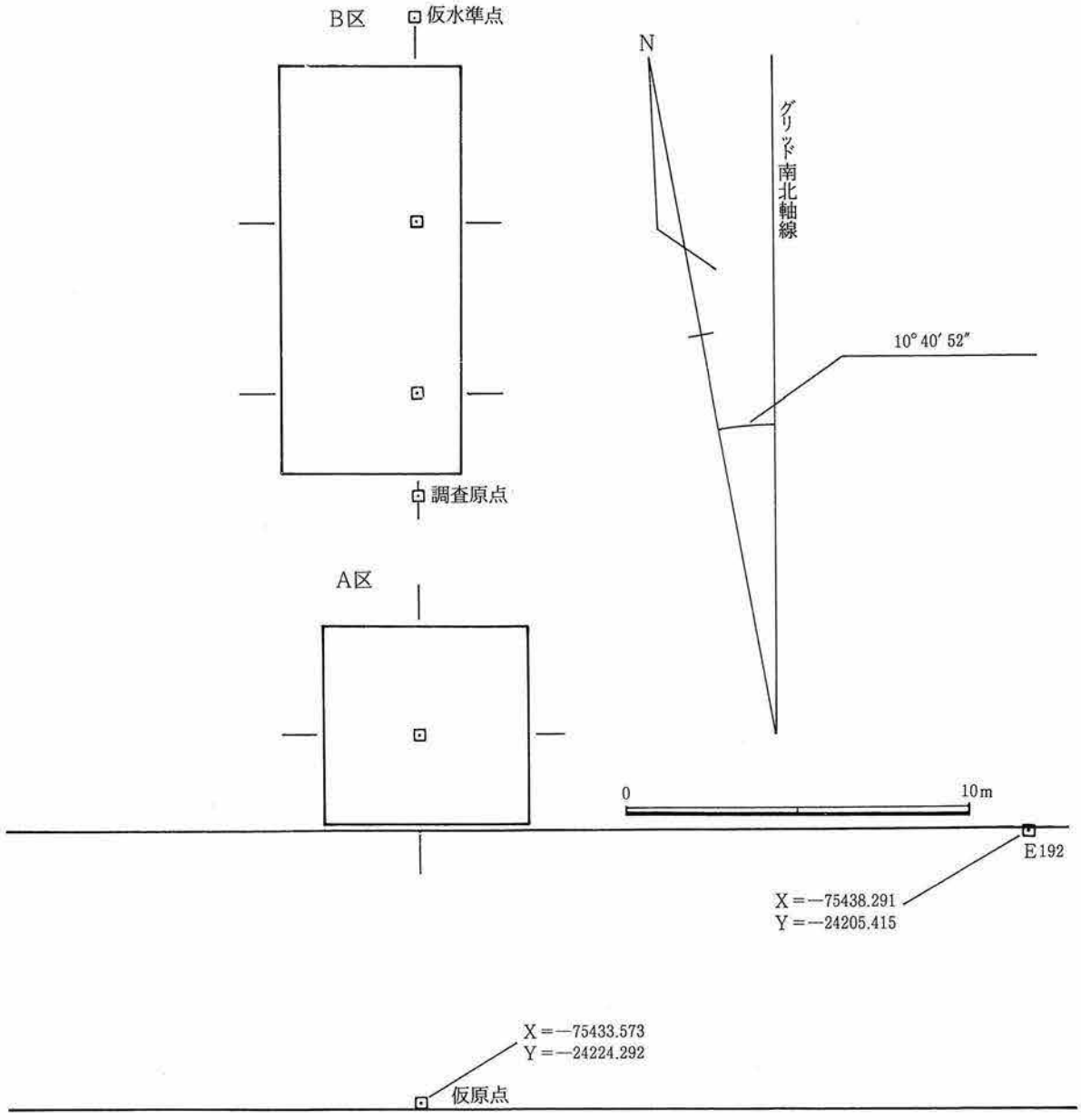


図３　調査グリッド設定図

11月16日までに一次調査を終了し、埋め戻し作業のためいったん機材を撤収した。

住宅部分の二次調査は、平成10年12月５日より平成11年１月22日まで行った。重機による表土掘削の終わった12月５日に改めて機材の搬入を行い、直ちに二次調査を開始した。測量用の方眼（測量原点・仮水準点）は一次調査と同じものを使用した。

第３章　検出した遺構

調査の結果、鎌倉時代前期から室町時代までの、５時期（第１面、第２面、第３面、第４面、地山面）の生活面を確認した。一次調査地をＡ区、二次調査地をＢ区として調査を進め、Ａ区では表土掘削時に第１面、第２面、第３面と第４面の一部が、調査員の立ち会いのないまま重機により勝手に掘り下げられてしまい遺存していない。

第１節　Ａ区の遺構

第１面

地表から約60㎝下で確認した。一部面上に貝混じりの砂が敷きつめられていたが、多くは重機の掘削により遺存していない。Ｂ区の３面相当面と考えられ、柱穴が約60穴検出されたが、方向性・規格等は把握できなかった。

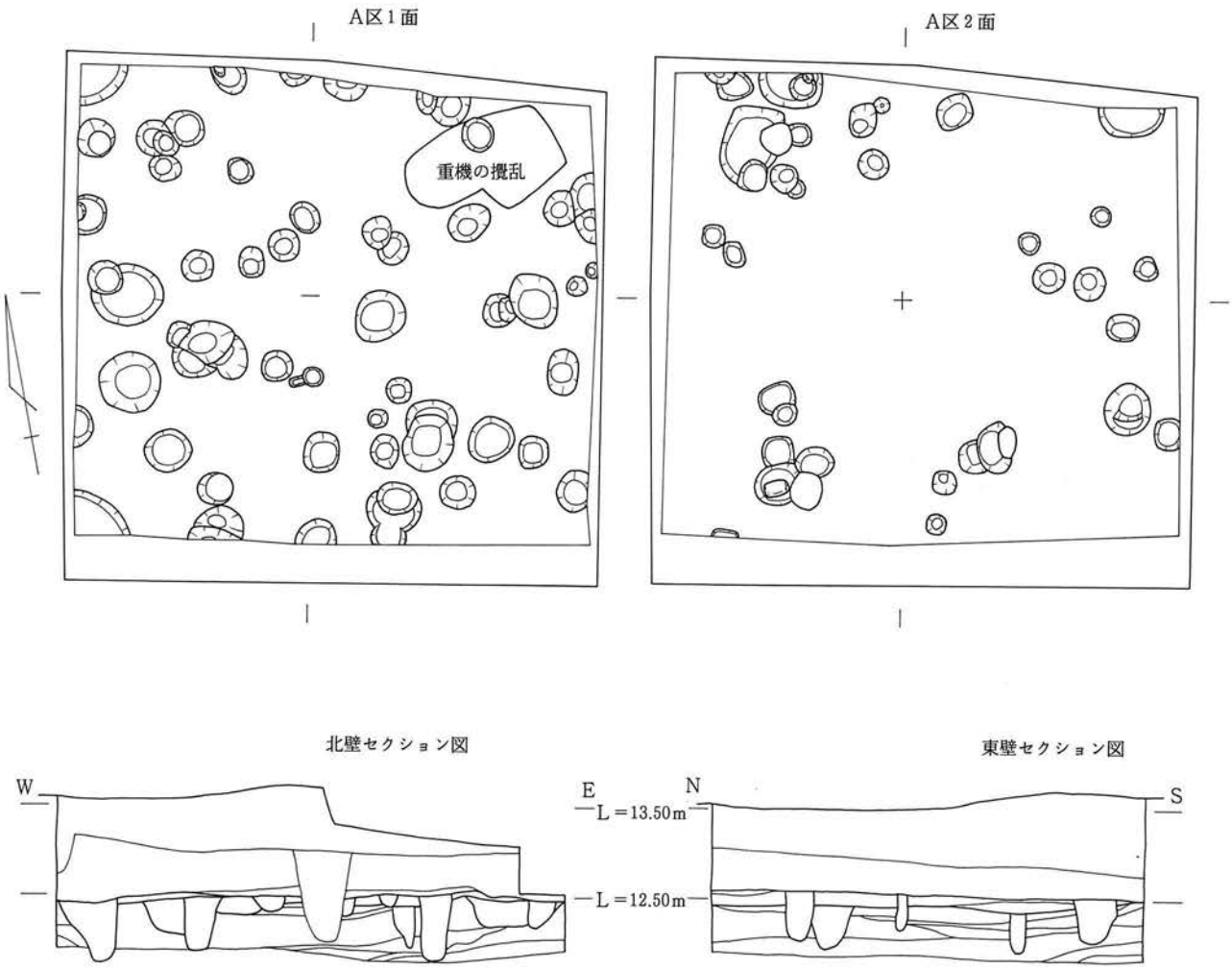


図４　Ａ区１面・２面遺構図

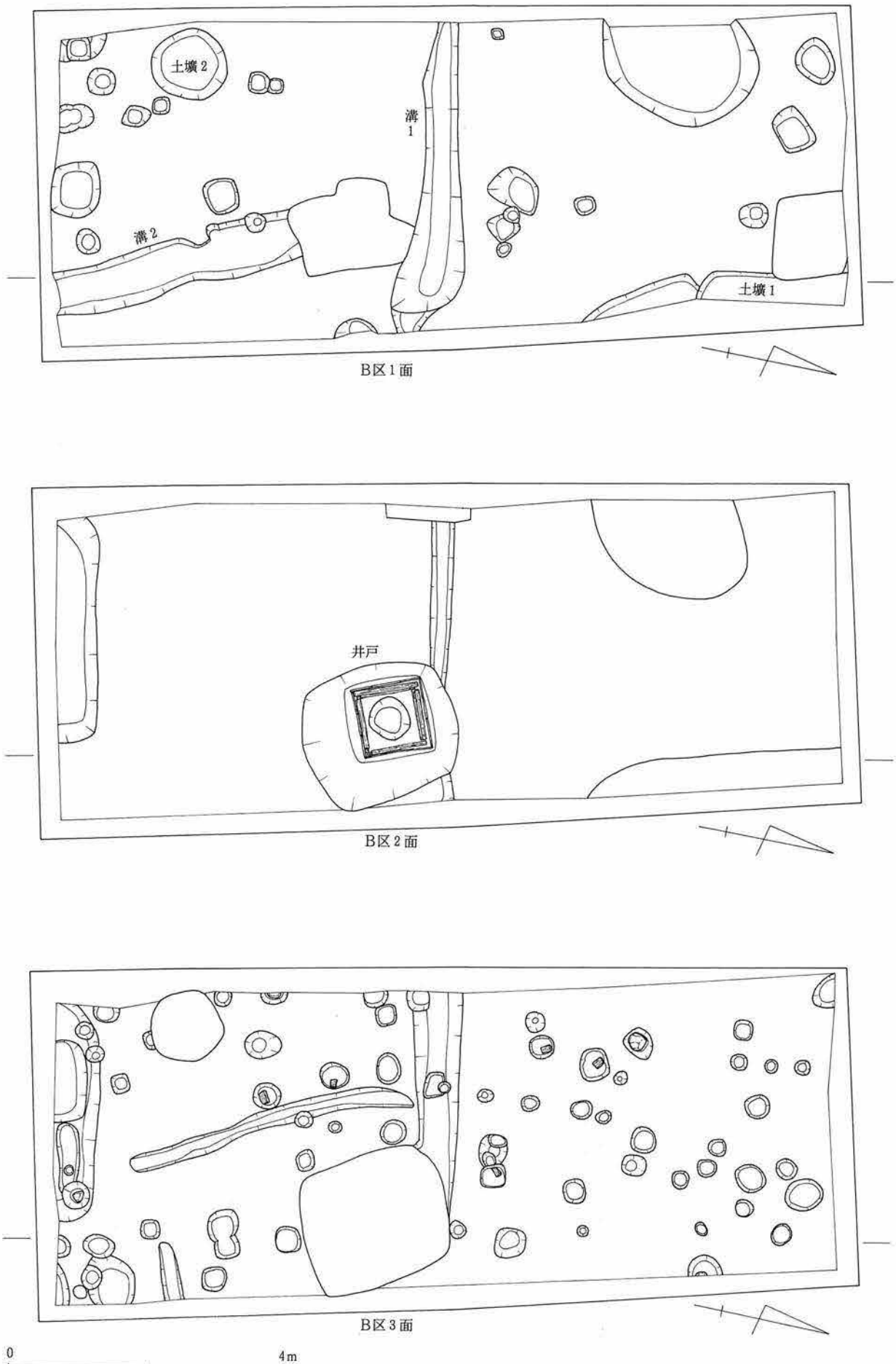


図5　B区1面・2面・3面遺構図

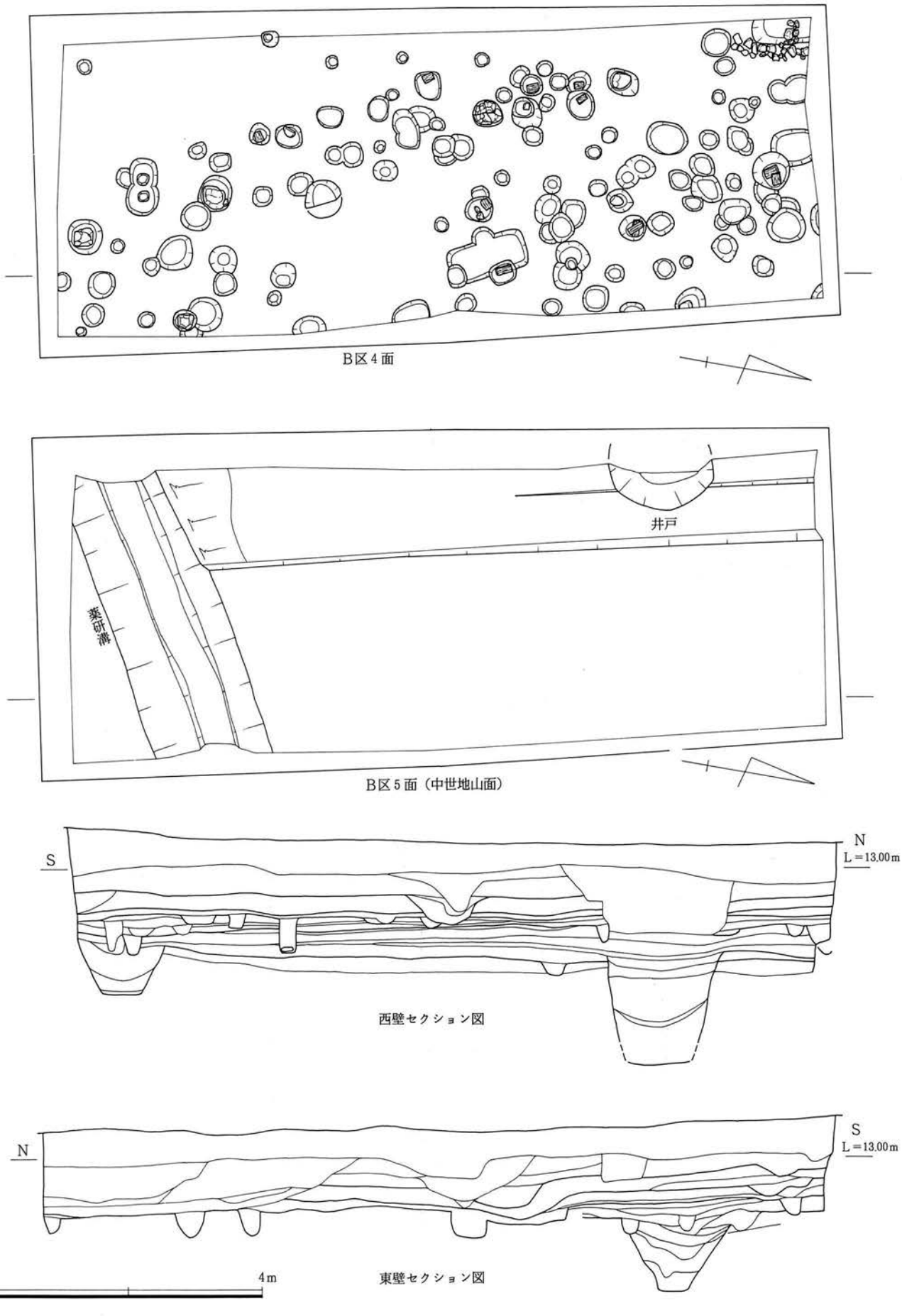


図6　B区4面・5面遺構図

第２面

地表から約66㎝前後下で確認した。第１面の貝砂面の下で検出したもので、一部貝砂が面上に残り、Ｂ区の４面相当と考えられる。１面の掘り残したものも含まれ、柱穴は約30穴検出された。Ｂ区の第１面と第２面の時期差はあまりないと考えられる。同じことがＢ区３・４面にも言える。

第２面下の調査は、北壁と東壁の脇をトレンチで確認したが、60㎝下までマーブル状に黄灰色と黒色の地山土で盛土され本来の地山は確認されなかった。

第２節　Ｂ区の遺構

第１面

地表から約60㎝～70㎝下で確認した厚さ約30㎝の土丹地業層から構成されている。14世紀後半代と考えられ、柱穴群と溝、土壙を検出した。溝（溝１・２）の軸線は六浦道に沿っているようである。

第２面

第１面を構成する土丹地業面の下で確認した。厚さ約10㎝程の地業層から構成されている。13世紀後半代と考えられ、溝とともに一辺100㎝四方、深さ230㎝の井戸を検出した。井戸は横桟支柱型で、検出した井戸の軸線は六浦路に沿っているようである。他は東西方向に延びる溝のみで遺構の密度は少ない。

第３面

第４面の貝砂面上を被っていた厚さ10㎝程の地業層から構成されている。貝砂面を掘り込んで貝砂混じりの土で使い埋め込まれているため、遺構の検出が困難であった。貝砂が混じることから第４面との時期差はあまりなく、概ね13世紀前半代と考えられる。

第４面

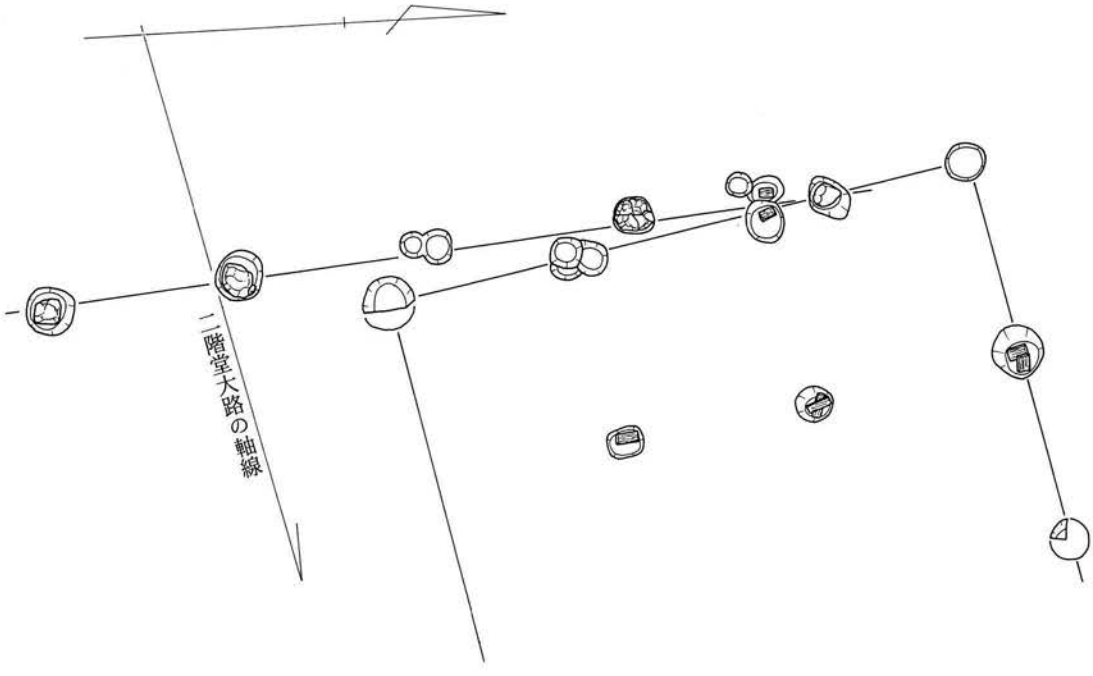


図７　Ｂ区４面検出建物

面上に敷きつめられた貝殻混じりの海砂から構成されている。この海砂の敷きつめられた地面から検出した掘立柱建物（南北３間以上、東西２間以上）と柵列（南北４間以上）の軸線は、約80m北に離れている二階堂大路の軸線に併せた区画と考えられる。13世紀初頭と考えられる。

第５面

中世地山面である。地表から地山面まで約180㎝程の深さになる。直径約160㎝の素掘りの井戸と東西方向に延びる断面Ｖ字形の薬研溝（幅約150㎝、深さ約100㎝）が検出された。この薬研溝は二階堂大路と並行している。年代は永福寺が建立され、二階堂大路が整備された1192年以降、12世紀末から13世紀初頭と考えられる。

第４章　出土した遺物

第１節　Ａ区の遺物　（図８、図版７）

本遺跡では調査区をＡ区・Ｂ区に分けて調査を行ったが、遺構の残存状態の極端な違いから、Ａ区については２面の遺構面を検出したにとどまった。Ａ区の第１面はＢ区の第３面に、Ａ区の第２面はＢ区の第４面にそれぞれ相当する。

Ａ区の遺物は図８-１～20が第１面覆土から出土した遺物。22～29が第２面覆土、30・31が第２面下の遺物である。14は水殿瓦窯産の女瓦で、永福寺Ⅱ期に用いられたものと考えられる。この形式の瓦が廃棄されるのは遺構面の年代を考える上で注目できる遺物といえる。

なお、図中で用いた「永福寺Ⅰ期」「永福寺Ⅱ期」「永福寺Ⅲ期」の語については、二階堂に位置する国指定史跡永福寺跡の発掘調査で得られた瓦の編年に基いたもので、それぞれ創建期（1192～1194年頃）・寛元・宝治年間改修期前後（1235～1248年頃）・弘安年間再建期（1287年頃）を指す。瓦については、当遺跡のほど近くに位置するこの永福寺で使用されたもと同じ製品が見られる。ただし、創建時永福寺に供給された瓦は、鶴岡八幡宮に供給された製品と共通するものが多い。また、転用もしばしば行われたらしく、鎌倉旧市街の遺跡では、これらの瓦の破片が出土することは珍しくない。

第２節　Ｂ区の遺物　（図９～19、図版８～18）

Ｂ区は、第１面から第５面（中世地山面）まで５期にわたる生活面を確認したが、このうち第３面と第４面については、第４面の地業の上に貝砂を敷き詰めて生活面を構成しているのが第３面と解釈する。したがって、遺物については、この第３面・第４面と、この面で検出した遺構の覆土で検出したものを図15・16でまとめて扱った。

第１面　（図９～11、図版８～10）

検出した遺物は比較的少ない。遺物の種類は多種にわたるが、かわらけの形状から判断して、14世紀中～後半の面と考えられる。ただし、遺構中の遺物に注目すると、土壙１の遺物（図10-12～20）特にかわらけが年代が下るものである。18・19に特徴的なように、体部が直線的に外反し、口縁が大きく開く形状のかわらけは15世紀の製品とみられる。土壙１に関しては、後世の掘り込みと考えるのが妥当であろう。また、土壙２も同様に、図11-13の常滑壺の口縁の形状がやはり15世紀の製品と考えられる。土壙２の出土遺物は年代にかなりの幅があるが、下限になるのがこの13で、遺構が埋められた年代をこの頃と考えることができよう。

第２面　（図12～14、図版11～13）

遺構の密度の低い面で、ここで検出された主な遺構は、井戸と、この井戸の掘方に切られる溝である。

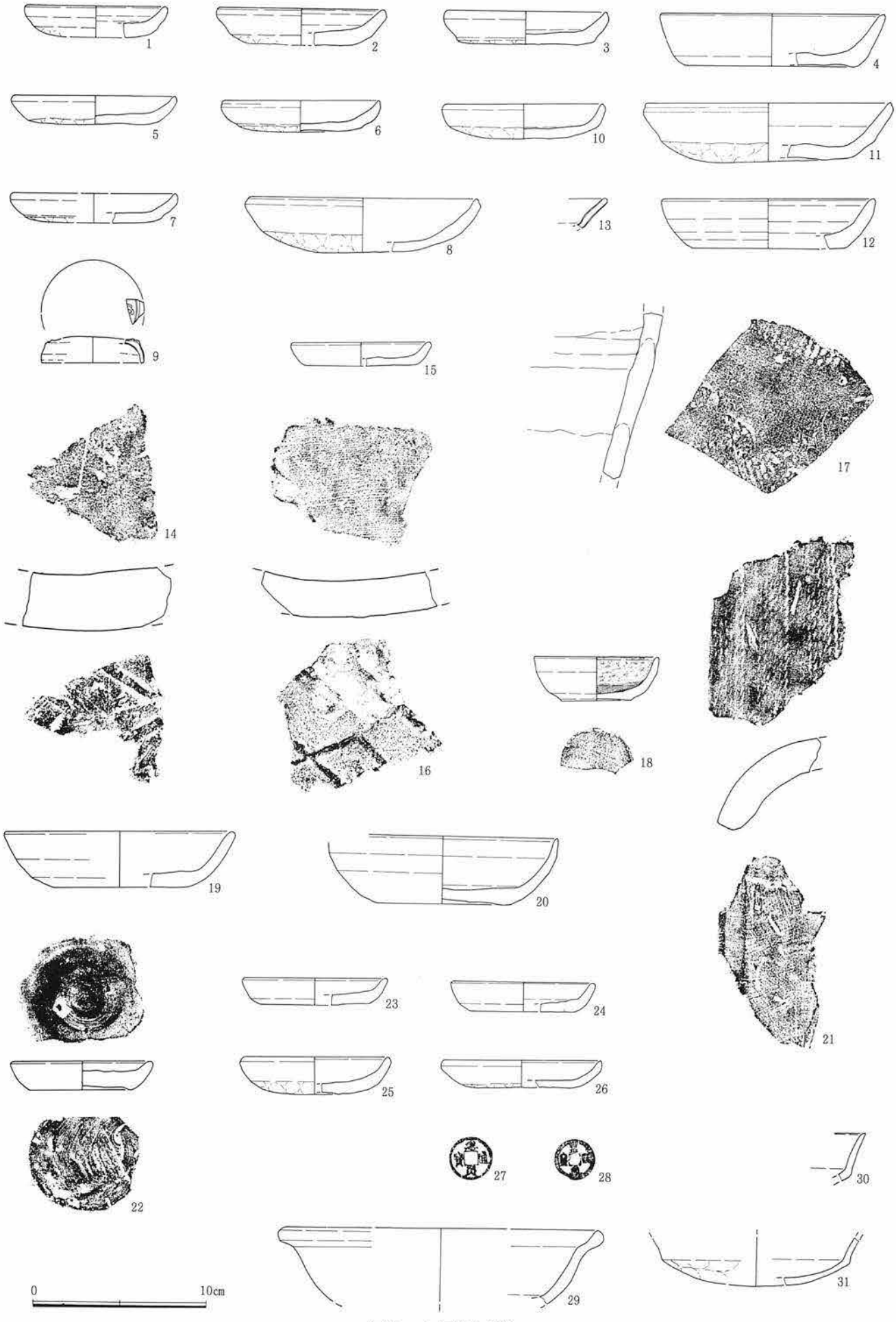

1
2
3
4
5
6
10
11
7
8
13
12
9
15
17
14
16
18
19
20
21
23
24
25
26
22
27
28
30
29
31
0
10cm

図8　A区出土遺物

図8　A区出土遺物　　単位はcm

番号	遺構	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	P21	かわらけ	7.9		1.8	手捏ね
2	〃	〃	9.4		2.1	〃
3	P 5	〃	9.1		1.9	〃
4	P14	〃	12.8	9.8	3.0	轆轤
5	P25	〃	9.1	9.8	1.6	手捏ね
6	〃	〃	8.9		1.8	〃
7	〃	〃	9.3		1.7	〃
8	〃	〃	12.9		3.1	〃
9	〃	青白磁　合子蓋	復元径6.0 。釉は淡水青色、透明。胎土は精良、やや締まり悪し。型作りか。			
10	P17	かわらけ	9.0		2.0	手捏ね
11	〃	〃	14.0		3.3	〃
12	P19	〃	12.1	8.7	2.8	轆轤
13	〃	青磁折腰皿	釉は灰色、透明。胎土は精良、緻密。			
14	P15	女瓦	精良な胎土。凸面は斜格子の叩き。水殿産。永福寺のⅡ期に相当。			
15	P 9	かわらけ	7.9	6.4	1.3	
16	〃	女瓦	精良な胎土。凸面は斜格子の叩き。はなれ砂付着。永福寺Ⅱ期頃に比定できるか。			
17	P20	渥美　甕	体部片。精良な胎土。			
18	土壙2	瀬戸　入子	内底面に紅痕。復元口径4.1 、器高2.5 。			
19	〃	かわらけ	13.0	7.5	3.2	轆轤
20	〃	〃	13.0	7.5	3.9	〃
21	〃	男瓦	精良な胎土。細かい長石粒を少量含む。永福寺のⅠ期に相当か。			
22	地山面まで	かわらけ	7.8	5.8	1.6	轆轤
23	〃	〃	8.1	6.3	1.5	〃
24	〃	〃	8.1	6.0	1.7	〃
25	〃	〃	8.2		2.2	手捏ね
26	〃	〃	9.0		1.5	〃
27	〃	銭	建炎通宝。背文無し。初鋳1127年。			
28	〃	〃	皇宗通宝。背文なし。初鋳1039年。			
29	〃	瀬戸縁折鉢	復元口径18.2。胎土はにぶい黄橙色、精良、緻密。内面・外面ともに灰釉が刷毛塗りされている。			
30	トレンチ	土師器坏	にぶい橙色を呈し、構成やや弱。			
31	〃	土師器坏	橙色を呈し、胎土は精良、緻密。			

面の覆土の遺物はやはり比較的少ない。かわらけに注目する限り概ね13世紀末～14世紀前葉の製品と見られる。

第３面・第４面　（図15・16、図版14・15）

前述のごとく本来的には同時期に構築された生活面ととらえることができる。しかし、貝砂が２層確認できる箇所が部分的に認められるなど、複雑な堆積であり、若干の時期差や年代幅も考えねばならない。

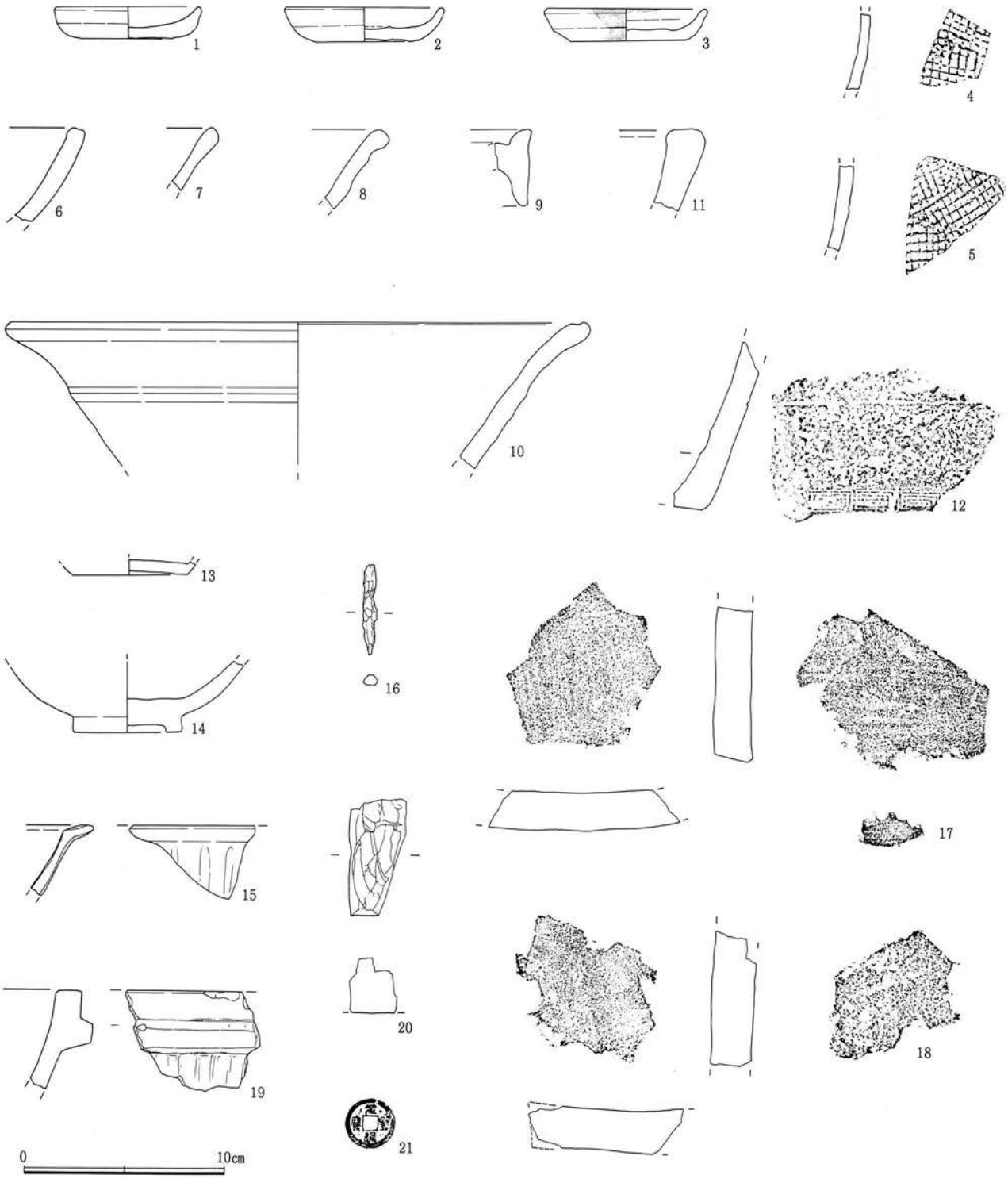


図９　Ｂ区１面まで出土遺物

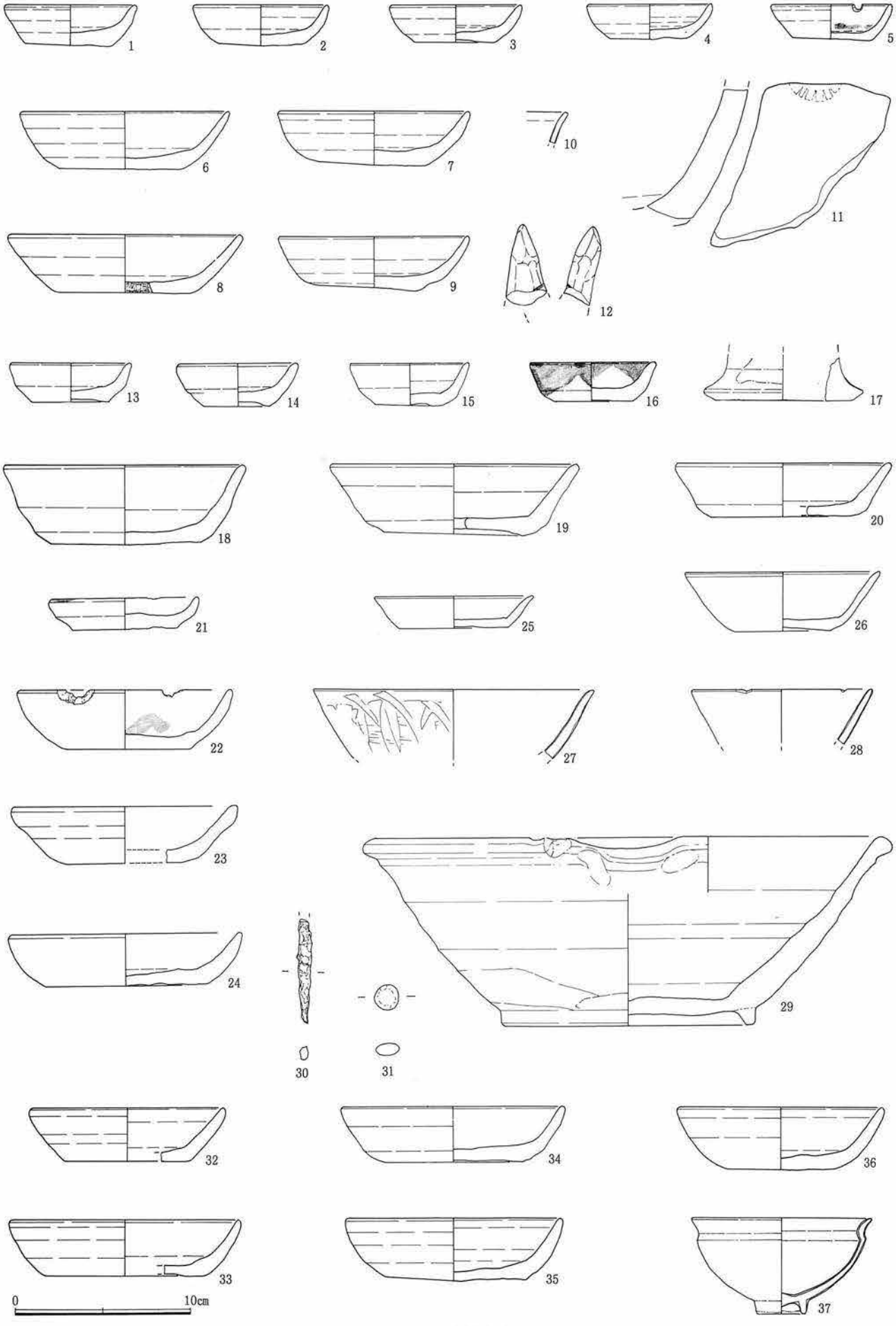


図10　B区１面遺構出土遺物

図９　B区１面まで出土遺物　　単位はcm

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	7.1	4.5	1.6	轆轤
2	〃	7.7	4.7	1.6	〃
3	〃	7.8	5.8	1.6	〃
4	亀山甕	胴部片。			
5	亀山甕	胴部片。			
6	常滑　捏鉢	ごく粗い長石粒を含み、緻密。			
7	山茶碗窯系捏鉢	砂質の胎土からなり、緻密。			
8	山茶碗窯系捏鉢	図３－29と同一個体と見られる。			
9	常滑甕	胎土は精良、緻密。			
10	山茶碗窯系捏鉢	復元口径28.6。砂質の胎土で、緻密。			
11	手焙り	胎土は精良、緻密。			
12	手焙り	六角形を呈すると推定できる。上体部に条線、下体部に雷文が施される。			
13	白磁口兀皿	底部片。復元底径5.7 。			
14	青磁蓮弁文碗	復元底径5.7 。釉は緑灰色、不透明。細かい貫入あり。胎土は精良、緻密。			
15	青磁折縁	外体部に蓮弁文。釉は緑灰色、不透明。釉層が厚い。			
16	釘	鉄製。残存長4.4 。0.3 ×0.3 程度の角釘であるが、錆が著しい。			
17	女瓦	厚さ約1.9 。胎土はやや粗、粗い砂粒を含む。凹面・凸面とも粒の細かい離れ砂付着。永福寺のⅡ期に相当するか。			
18	女瓦	厚さ約2.0 。胎土は精良、緻密。凸面の叩きは不明瞭だが、縄目か。永福寺のⅠ期に相当。			
19	滑石製鍋	外体部はスス付着。			
20	石製品	硯片か。			
21	銭	元豊通宝。背文無し。初鋳1078年。			

図10　B区１面遺構出土遺物　　単位はcm

番号	遺構	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	溝１	かわらけ	7.2	4.8	2.3	轆轤
2	〃	〃	7.4	4.7	2.3	〃
3	〃	〃	7.3	4.5	2.1	〃
4	〃	〃	6.9	4.3	2.0	〃
5	〃	〃	6.7	4.5	1.9	〃
6	〃	〃	11.2	6.9	3.2	〃
7	〃	〃	10.7	6.2	3.0	〃
8	〃	〃	13.0	7.5	3.3	〃
9	〃	〃	10.8	5.7	2.9	〃
10	〃	白磁口禿皿	胎土は白色を呈し、ごく精良で緻密。釉は灰白色、不透明。			
11	〃	手焙り	下体部に菊花の押印あり。			
12	土壙１	鬼瓦	角もしくは牙の部分か。細かい砂粒を多く含む胎土、緻密。			

13	〃	かわらけ	6.7	4.4	2.2	轆轤
14	〃	〃	6.7	3.7	2.4	〃
15	〃	〃	6.7	3.9	2.4	〃
16	〃	〃	7.0	4.5	2.2	〃
17	〃	瀬戸花瓶	復元底径7.8 。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。外面は明緑灰色の灰釉が施される。			
18	〃	かわらけ	13.5	8.5	4.5	轆轤
19	〃	〃	13.9	8.0	3.9	〃
20	〃	〃	12.1	8.5	3.1	〃
21	溝2	〃	8.3	6.0	1.8	轆轤
22	〃	〃	12.0	7.1	3.4	〃
23	〃	〃	12.6	6.5	3.2	〃
24	〃	〃	13.0	9.3	3.2	〃
25	〃	白磁　口兀皿	復元口径9.0 、復元底径6.2 、器高1.8 。胎土は白色を呈し、黒色の微粒子を含む。緻密。釉は灰白色、不透明。			
26	〃	白磁　口兀皿	復元口径11.1、底径5.7 、器高3.4 。胎土は白色を呈し、黒色の微粒子含む。緻密。釉は灰白色、不透明。			
27	〃	青磁蓮弁文碗	胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒子を含む。緻密。釉は明緑灰色、透明。			
28	〃	青磁輪花鉢	輪花は5弁になるものと見られるが、正確な割付ではない。胎土は灰色を呈し、精良、緻密。釉は青灰色、不透明。			
29	〃	山茶碗窯系捏鉢	復元口径29.0、復元底径14.0、器高10.8。下体部は回転ヘラ削り、高台は籾殻痕が見られる。胎土は灰色を呈し、比較的精良で緻密。			
30	〃	釘	鉄製　残存長5.9 。0.7 ×0.7 程度の角釘であるが、錆が著しい。頭部　欠損。			
31		碁石	径1.9 、厚さ0.7 。			
32	P 6	かわらけ	10.8	7.2	3.0	轆轤
33	〃	〃	12.9	9.0	3.2	〃
34	P 8	〃	12.6	7.8	3.2	〃
35	P 3	〃	12.1	8.1	3.6	〃
36	P11	〃	11.5	6.1	3.6	〃
37	P 4	青磁天目碗	復元口径10.1、底径2.7 、器高5.5 。胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒子を含む。ややしまりが悪い。釉は明緑灰色、透明。			

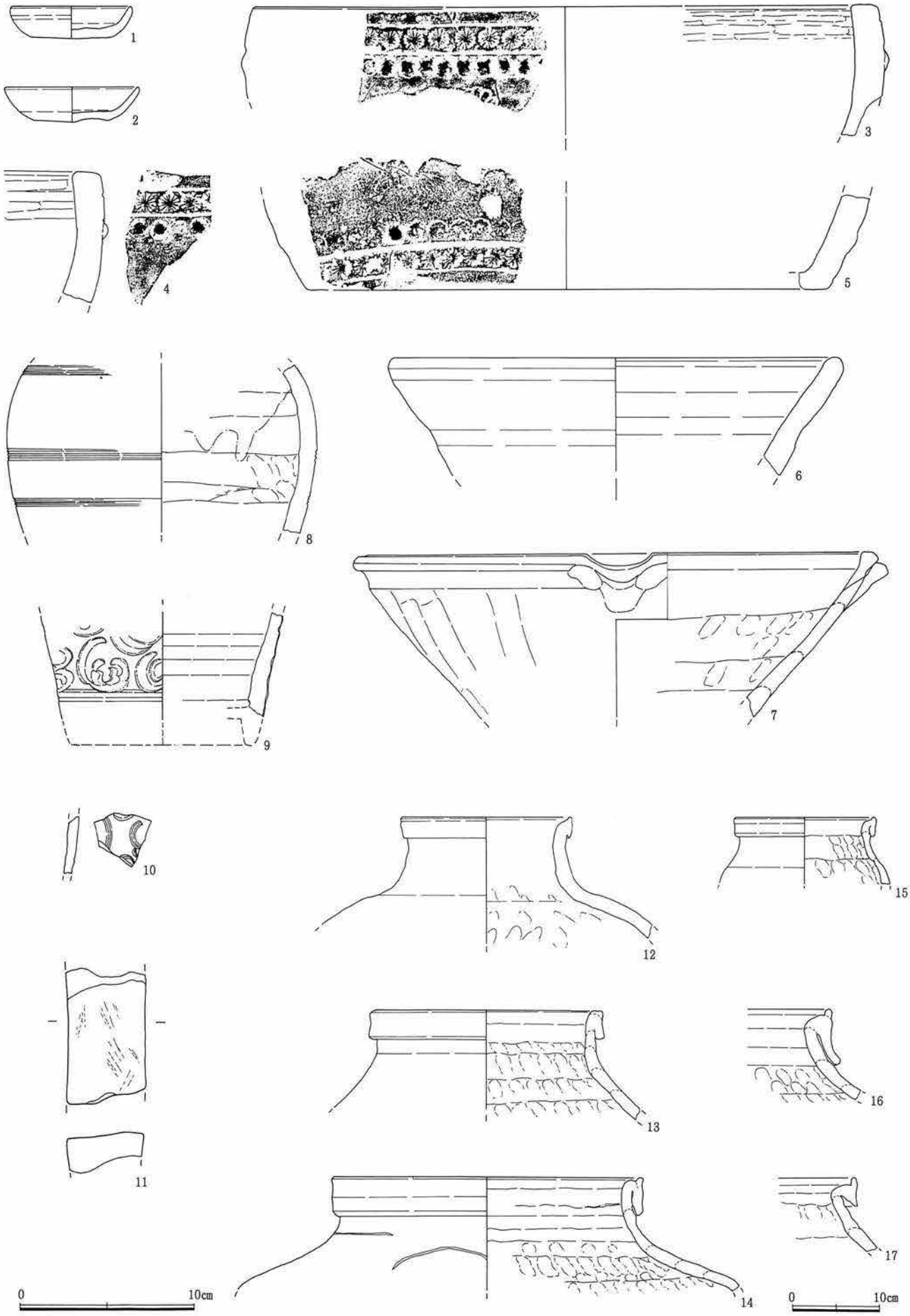


図11　B区1面土壙2出土遺物

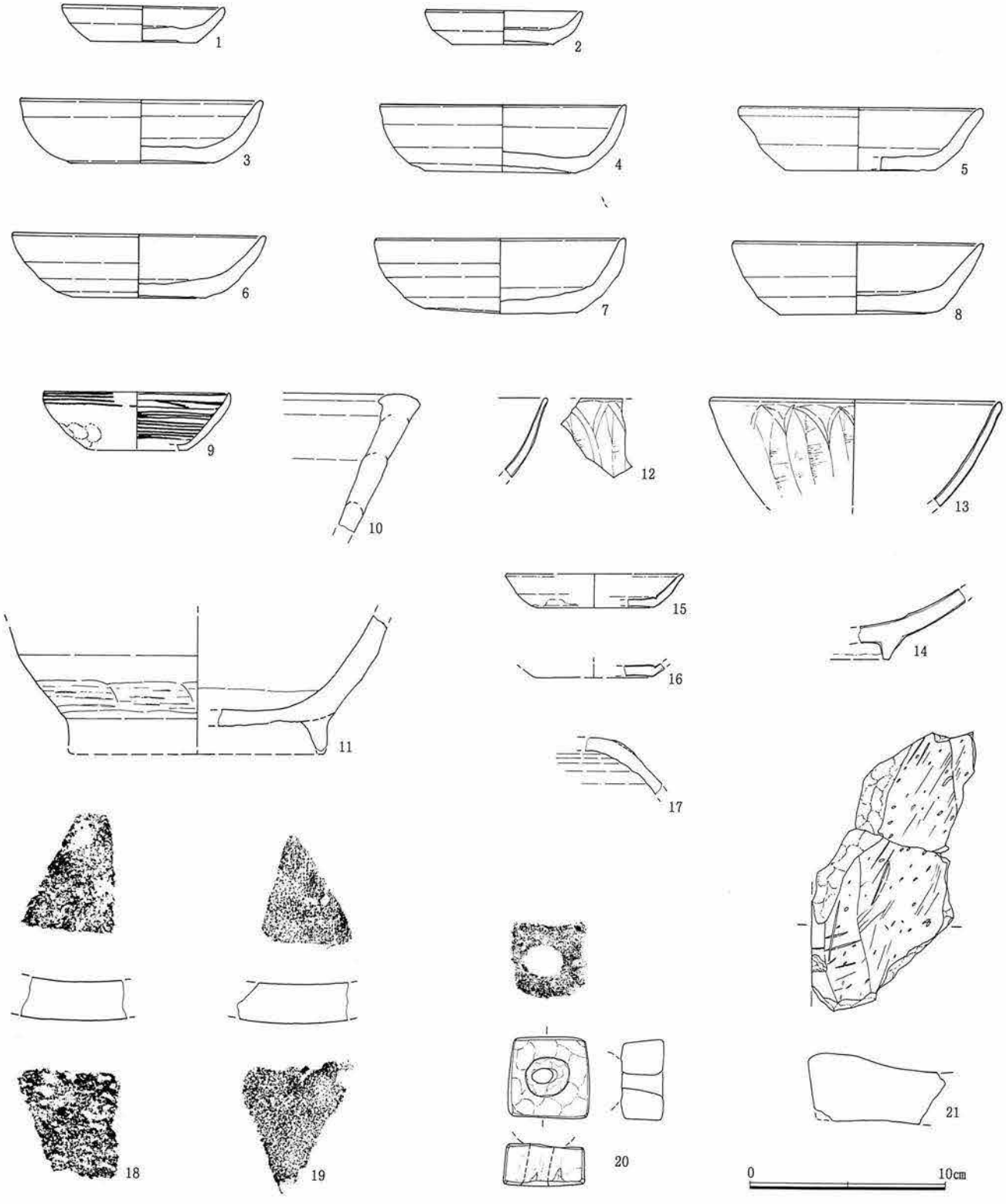


図12　B区２面まで出土遺物

図13　B区２面井戸出土遺物

図11　B区１面土壙２出土遺物　　単位はcm

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	6.8	4.5	1.8	轆轤
2	〃	7.6	4.3	2.0	〃
3	手焙り	4・5とも同一個体と見られる。復元口径30.0。胎土は精良、比較的緻密。二次焼成を受けている破片も見られる。体部菊花文が施される。			
4	〃				
5	〃				
6	山茶碗窯系捏鉢	復元口径25.4。胎土は粗い長石粒を含む。焼成が悪く、やや軟質。			
7	常滑　捏鉢	復元口径29.6。胎土は精良、緻密。			
8	瀬戸　四耳壺	胴部か。復元最大径18.0。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。灰釉が施され、明緑灰色を呈す。条線が施される。			
9	青白磁　梅瓶	下体部片。胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒子を含む。精良だが、やや締まりが悪い。釉は水青色、不透明。			
10	青白磁　梅瓶	胴部か。胎土は灰白色を呈し、黒色の微粒子を含む。精良だが、やや締まりが悪い。釉は水青色、透明。渦巻文			
11	砥石	残存長7.8 、幅4.6 。流紋岩質粗粒凝灰岩製。裏面は割れており、確認できる限りでは３面使用。天草産か。			
12	常滑　甕	復元口径19.2。胎土は精良、焼成がやや弱い。			
13	常滑　甕	復元口径25.0。口縁部付近及び肩部は降灰釉がかかる。胎土は精良、長石粒を含み、緻密。			
14	常滑　甕	復元口径35.2。外体面に灰釉が施されているものか。肩部にヘラ描き状の曲線が見られるが、文様が調成痕かは不明。胎土は精良、粗い長石粒を含み、緻密。			
15	常滑　甕	復元口径15.8。胎土は精良。長石粒を比較的多く含み、緻密。			
16	常滑　甕	胎土は精良、長石粒を多く含み、緻密。			
17	常滑　甕	胎土はごく精良、緻密。			

図12　B区２面まで出土遺物　　単位はcm

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	8.2	5.5	1.8	轆轤
2	〃	7.9	5.2	1.7	〃
3	〃	12.3	7.4	3.2	〃
4	〃	12.5	7.7	3.4	〃
5	〃	12.3	7.7	3.2	〃
6	〃	12.8	6.8	3.2	〃
7	〃	12.7	7.8	3.8	〃
8	〃	12.7	7.8	3.7	〃
9	瓦器	復元口径9.4 。手捏ね成形。輪花。外面は口縁部のみ磨かれている。			
10	手焙り	瓦質。胎土は精良で、緻密。外面は口縁部付近のみ磨かれている。			
11	山茶碗窯系	高台は欠損しているが、底径13.2程度と見られる。下体部回転ヘラ削り。胎土			

	捏鉢	はごく粗い長石粒を含み、緻密。
12	青磁 蓮弁文碗	胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。釉は緑灰色透明。釉層はごく薄い。
13	青磁 蓮弁文碗	復元口径14.7。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。釉は明緑色、不透明。黒い斑点状に発色する箇所や、ピンホールが見られる。
14	青磁皿	胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。釉は暗緑灰色、透明。粗い貫入あり。
15	白磁口兀皿	復元口径9.0 、復元底径6.0 、器高1.7 。胎土は白色を呈し、黒色の粒子を含む。精良、緻密。釉は灰白色、不透明。
16	白磁口兀皿	復元底径6.0 。胎土は白色を呈し、ごく精良、緻密。釉は白色、透明。
17	白磁四耳壺	肩部か。胎土は灰白色を呈し、ごく精良、緻密。釉は明緑灰色、透明。釉層はごく薄い。
18	女瓦	東海地方窯産。長石粒を多く含み、炻器質。凹面・凸面とも粗い長石粒の多い離れ砂が付着する。厚さ約2.0 。永福寺のⅠ期に相当する。
19	女瓦	東海地方窯産。長石粒を多く含む。焼成はやや弱い。凸面が布目が明瞭。離れ砂は両面に見られる。厚さ約2.5 。永福寺のⅠ期に相当する。
20	土製品	立て4.0 、横4.0 、高さ2.0 程の四角柱で中央に穿孔している。粗雑なつくり。泥塔（五輪塔）の地輪などが用途として考えられる。
21	砥石	残存長14.8、残存幅7.1 、最大厚3.5 。流紋岩質粗粒凝灰岩製。２面使用。伊予産か。

図13　B区２面井戸出土遺物

番号	層位	種別	成　　形
1	上層	女瓦	凸面に縄目の叩きが明瞭。胎土は精良、緻密。厚さ約2.8 。永福寺のⅠ期に相当。
2	〃	女瓦	凸面は斜格子の叩き。胎土は砂を多く含み、粗く、焼成も弱い。厚さ約1.9 。永福寺のⅢ期に相当。
3	〃	女瓦	凸面は縄目の叩き。胎土は精良、緻密。軟質。厚さ約2.6 。永福寺のⅠ期に相当。
4	下層	女瓦	凸面は叩きが撫で消されている。離れ砂付着。胎土はごく精良、緻密。厚さ約1.6。
5	〃	女瓦	永福寺のⅠ期に相当。 凸面は斜格子の叩き。胎土はきめ細かいが、クサリ礫・長石粒を多く含む。
6	〃	石製品	二次焼成を受けているか。厚さ約2.3 。 縦26.3、横17.4、最大厚10.0。表面はノミ痕が顕著。鎌倉石（砂質凝灰岩）製。

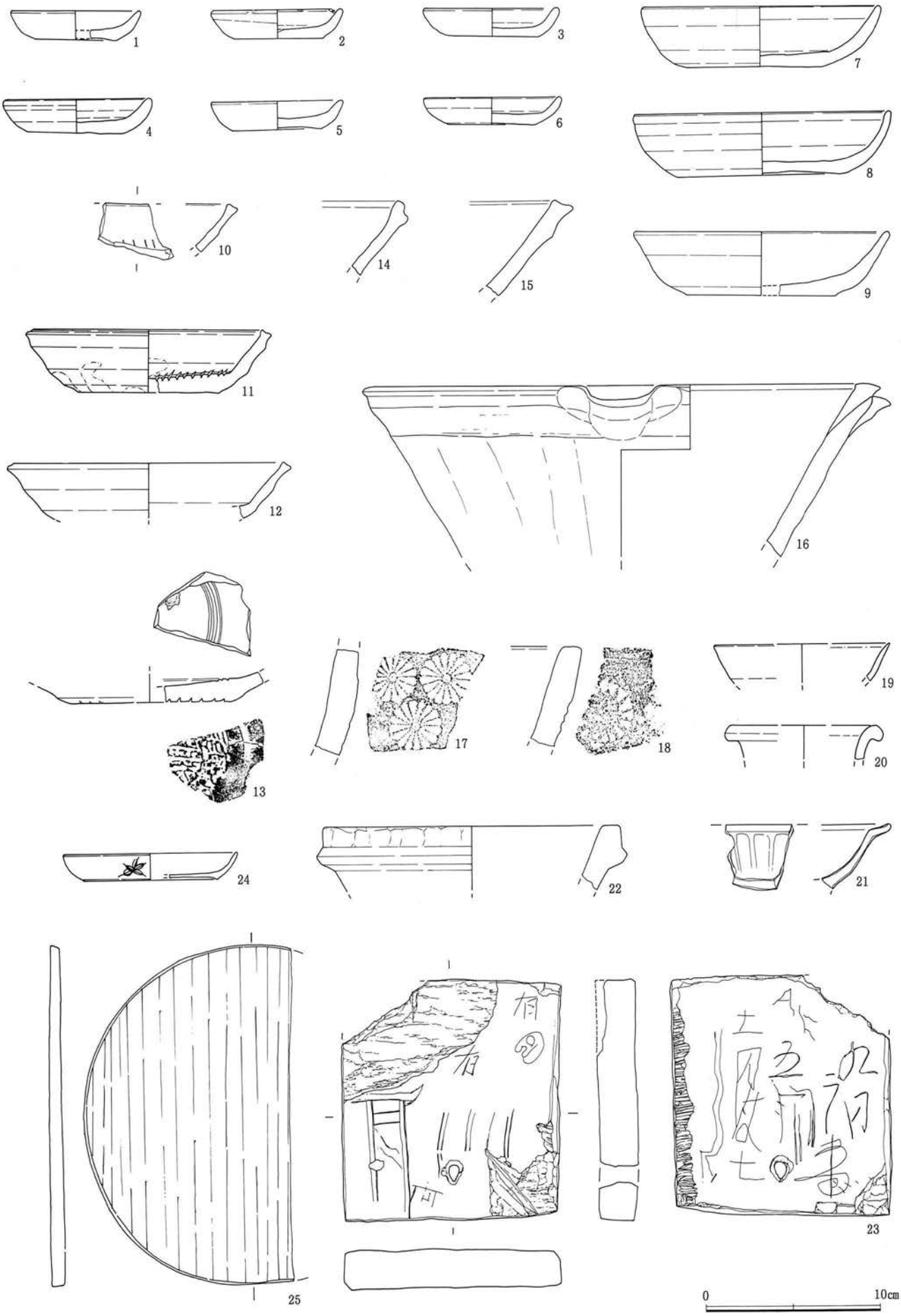


図14　B区２面井戸出土遺物

図14　B区２面井戸出土遺物

番号	層位	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	上層	かわらけ	7.3	4.3	1.6	轆轤
2	〃	〃	7.3	5.1	1.6	〃
3	〃	〃	7.5	5.0	1.6	〃
4	〃	〃	8.1	5.5	1.9	〃
5	〃	〃	7.5	5.1	1.6	〃
6	〃	〃	7.7	5.0	1.6	〃
7	〃	〃	13.5	7.7	3.4	〃
8	〃	〃	14.6	9.4	3.6	〃
9	〃	〃	14.5	8.5	3.6	〃
10	下層	瀬戸卸皿	口縁部片。胎土は比較的精良。胎土は灰黄色を呈し、精良。乳白色の灰釉が薄くかかる。			
11	上層	瀬戸卸皿	復元口径13.1、復元底径8.1 、器高3.6 。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密薄く灰釉がかかる。二次焼成を受けているか。卸目が比較的深く、粗い。			
12	〃	瀬戸卸皿	復元口径15.5。胎土は精良で、やや軟質。透明の灰釉がかかる。			
13	〃	瀬戸鉢	底部片　復元底径9.2。			
14	〃	山茶碗窯系 捏鉢	口縁部片。胎土は灰色を呈し、粗く、１～２㎜の長石粒を多く含む。 硬質。			
15	〃	山茶碗窯系 捏鉢	口縁部片。胎土精良、緻密。口縁部外周は強い横なでで調成される。			
16	〃	常滑鉢	復元口径27.8。胎土は精良、緻密。１～３㎜大の石粒・長石粒を含む。 口縁部に降灰釉が付着する。			
17	〃	手焙り	体部片。外側面に菊花文スタンプ。胎土は比較的精良で、石灰質の白色粒子を含む。			
18	〃	手焙り	口縁部片。外体面口縁部下に菊花文スタンプ。胎土は灰色を呈し、粗い。 内面は横方向に磨きが施される。			
19	〃	白磁口兀皿	復元径9.8。胎土は灰白色を呈し精良、緻密。釉は乳白色を呈する。			
20	〃	緑釉壺	復元径8.3。胎土は黄灰色を呈し、部分的に灰色を呈する。長石粒を含み、緻密で、硬質。釉は緑色。玉縁状の口縁部が外反する。			
21	〃	青磁折縁鉢	内面は蓮弁文。胎土は灰白色、釉は暗緑灰色、透明。			
22	〃	滑石製品鍋	復元口径16.8。鍔は比較的小さい。ノミ痕が明瞭。			
23	下層	滑石製品 温石	長さ13.5、幅12.5、厚さ2.2程度の不整形な四角形。図の下部中央に長辺１程度の穴が貫通する。端部には生産地での加工と見られるノミ痕が明瞭。 両面に落書のような線描きの絵・文字が見られる。			
24	上層	漆器皿	復元口径9.9、復元底径7.6、器高1.5。総黒漆塗で、外面に紅葉が朱で描かれる 内底面にも文様が描かれるが、欠損のため意匠は不明。			
25	〃	木製品	直径19.5、厚さ0.8程度の円盤。曲げ物の底などの用途が考えられる。			

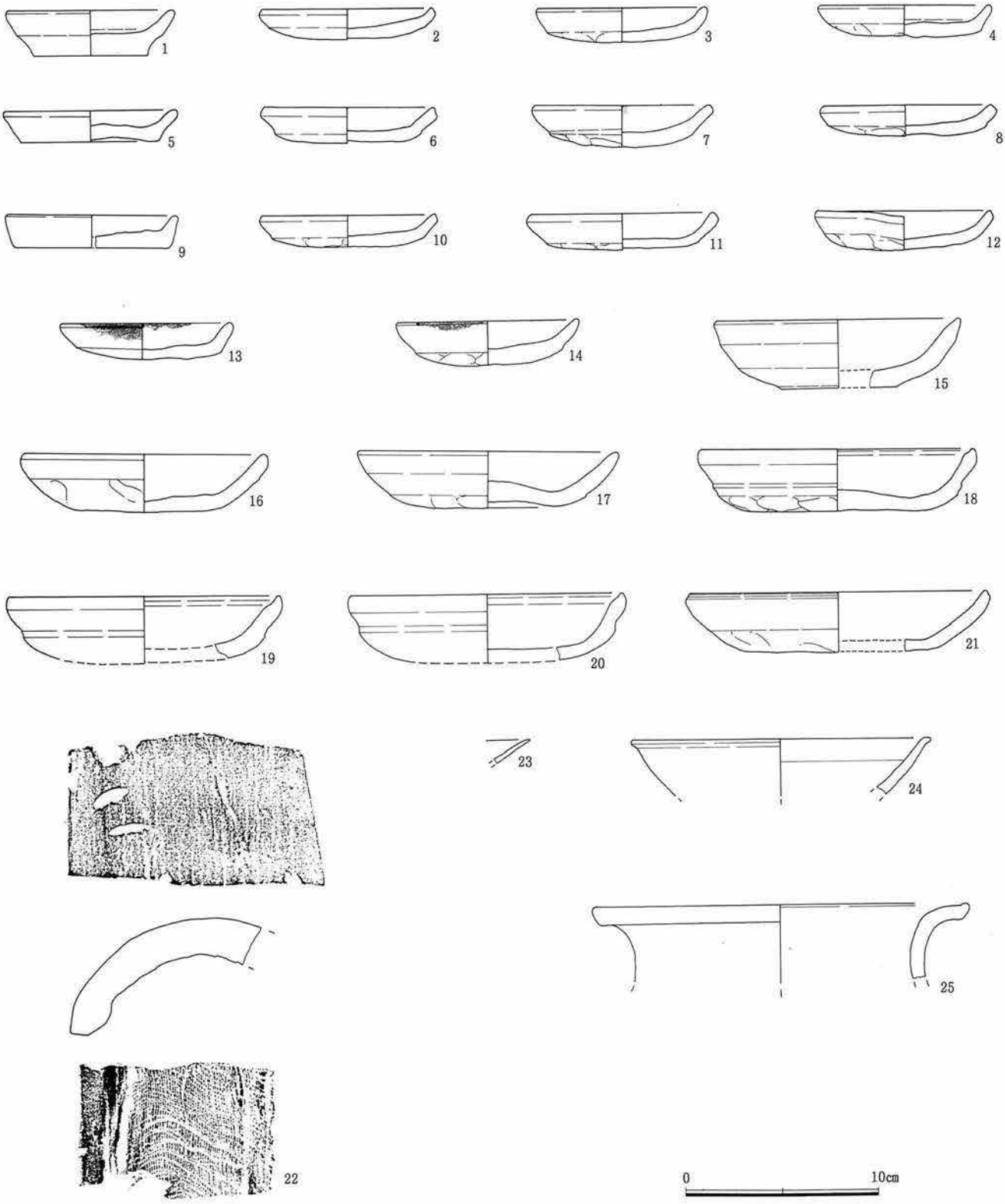


図15　B区４面まで出土遺物

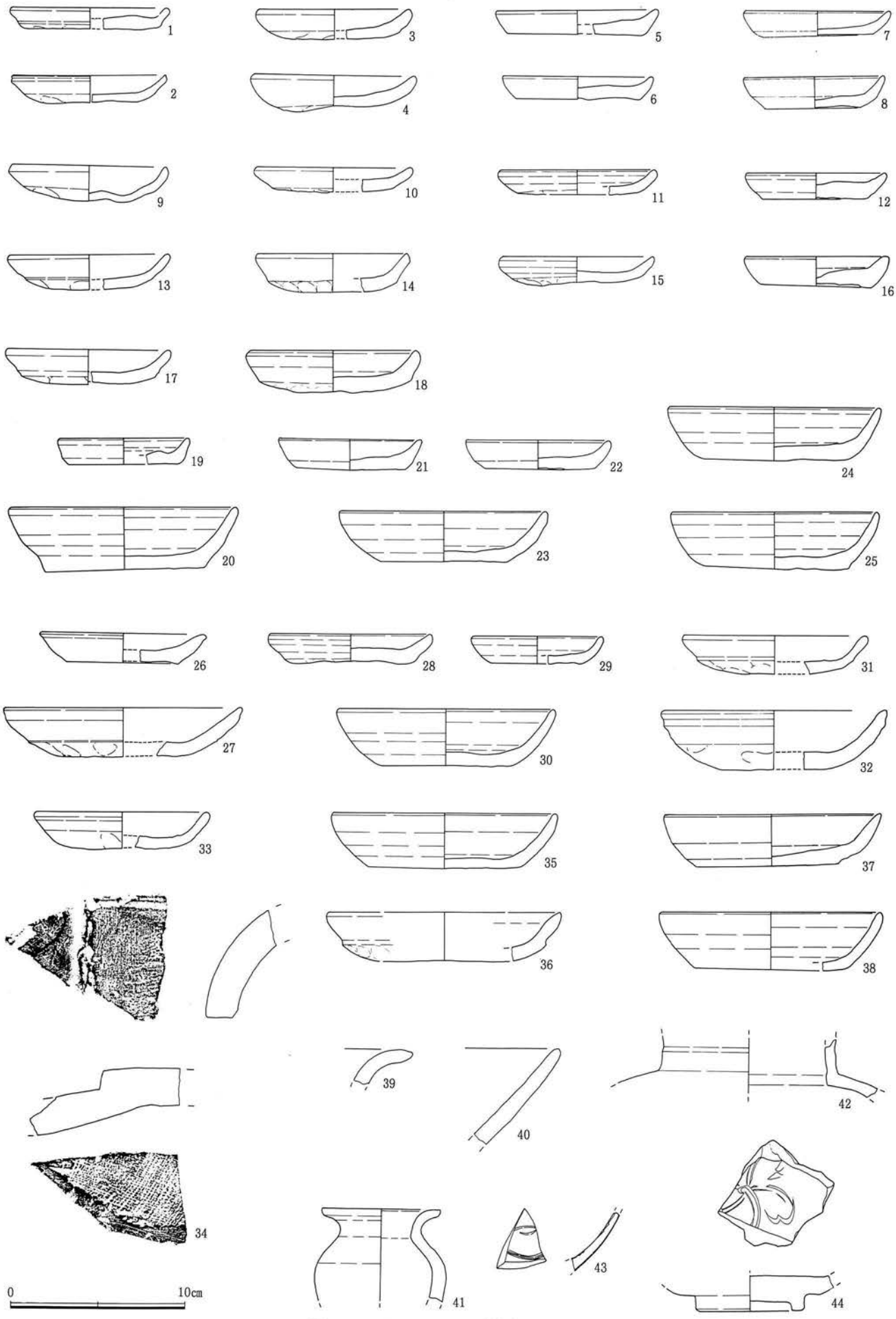


図16　B区3面・4面遺構出土遺物

図15　B区４面まで出土遺物

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	8.4	5.8	2.3	轆轤
2	〃	8.7		1.6	手捏ね
3	〃	8.6		1.7	〃
4	〃	8.7		1.6	〃
5	〃	8.7	7.1	1.6	轆轤
6	〃	8.7		1.8	手捏ね
7	〃	9.0		2.1	〃
8	〃	8.6		1.6	〃
9	〃	8.6	7.8	1.7	轆轤
10	〃	8.9		1.6	手捏ね
11	〃	9.4		1.9	〃
12	〃	9.0		2.0	〃
13	〃	8.7		1.8	〃
14	〃	9.2		2.2	〃
15	〃	12.5	6.0	3.5	轆轤
16	〃	12.3		3.0	手捏ね
17	〃	13.2		2.9	〃
18	〃	14.0		3.2	〃
19	〃	13.9		3.4	〃
20	〃	14.0		3.5	〃
21	〃	15.2		3.1	〃
22	男瓦	胎土は精良、緻密。永福寺のⅠ期に相当する。			
23	青白磁小皿	胎土は灰白色を呈し、やや粗。釉は水青色、透明。釉層はごく薄い。			
24	白磁端反碗	復元口径15.1。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。釉は灰白色、不透明。釉はごく薄く、表面にピンホールが多く見られる。			
25	常滑　甕	復元口径18.2。細かい粒の砂粒を多く含む胎土で、やや締まりが悪い。内面縁部付近は降灰釉が付着する。			

図16　B区３・４面遺構出土遺物

番号	遺構	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	４面Ｐ39	かわらけ	8.9		1.2	手捏ね
2	〃	〃	8.7		1.6	〃
3	４面Ｐ18	〃	8.6		1.7	〃
4	〃	〃	9.2		1.8	〃
5	４面Ｐ34	〃	9.1	7.7	1.3	轆轤
6	〃	〃	8.5	7.1	1.3	〃
7	３面Ｐ１	〃	8.3	6.4	1.4	〃
8	〃	〃	8.0	5.5	1.8	〃

9	4面P37	〃	8.8		2.0	手捏ね
10	4面P41	〃	8.8		1.5	〃
11	3面溝1	〃	8.8		1.4	〃
12	3面P12	〃	7.9	6.0	1.8	〃
13	4面P26	〃	9.1		2.0	〃
14	3面P 8	〃	8.6		2.2	〃
15	4面P33	〃	8.6		1.5	
16	3面P34	〃	8.0	6.3	1.7	轆轤
17	4面P11	〃	9.2		2.5	手捏ね
18	3面P 7	〃	9.4		2.5	〃
19	3面P14	〃	7.3	6.3	1.5	轆轤
20	〃	〃	12.9	9.2	3.6	〃
21	3面P28	〃	8.1	6.3	1.8	〃
22	〃	〃	8.2	6.4	1.7	〃
23	〃	〃	11.8	7.3	2.9	〃
24	3面P 9	〃	12.0	8.3	3.1	〃
25	〃	〃	11.8	8.3	3.3	〃
26	4面P16	〃	9.3	6.4	1.7	〃
27	〃	〃	13.5		2.8	手捏ね
28	3面P29	〃	9.2		1.6	〃
29	〃	〃	7.4	5.2	1.6	轆轤
30	〃	〃	12.3	7.5	3.3	〃
31	4面P 5	〃	10.4		2.2	手捏ね
32	〃	〃	12.8		3.4	〃
33	4面土壙1	〃	9.8		2.1	〃
34	〃	男瓦	胎土は精良緻密。永福寺のⅠ期に相当する。筒部の厚さ約2.0。			
35	3面P18	かわらけ	12.8	8.8	3.2	轆轤
36	〃	〃	13.3		2.8	手捏ね
37	3面P 2	〃	12.5	8.2	3.0	轆轤
38	3面P21	〃	12.7	8.7	3.3	〃
39	4面P15	常滑甕	細かい砂粒を多く含む胎土で、やや締まりが悪い。内面は灰釉が施され、緑灰色を呈する。			
40	4面P 7	渥美捏鉢	胎土は精良、緻密。			
41	4面P 1	渥美小壺	復元口径6.8 。胎土は精良、緻密。			
42	4面P27	白磁四耳壺	肩部か。胎土は灰白色を呈し、精良、やや締まりが悪い。釉は明緑灰色、透明。表面に、ピンホールが見られる。			
43	3面P 6	青磁 劃花文碗	下体部か。胎土は灰白色を呈し、ごく精良、緻密。釉は明緑色、不透明。釉層はごく薄い。			
44	4面P 9	青磁 劃花文碗	復元底径5.8 。底部。胎土は灰白色を呈し、精良、緻密。釉は明灰色、透明。			

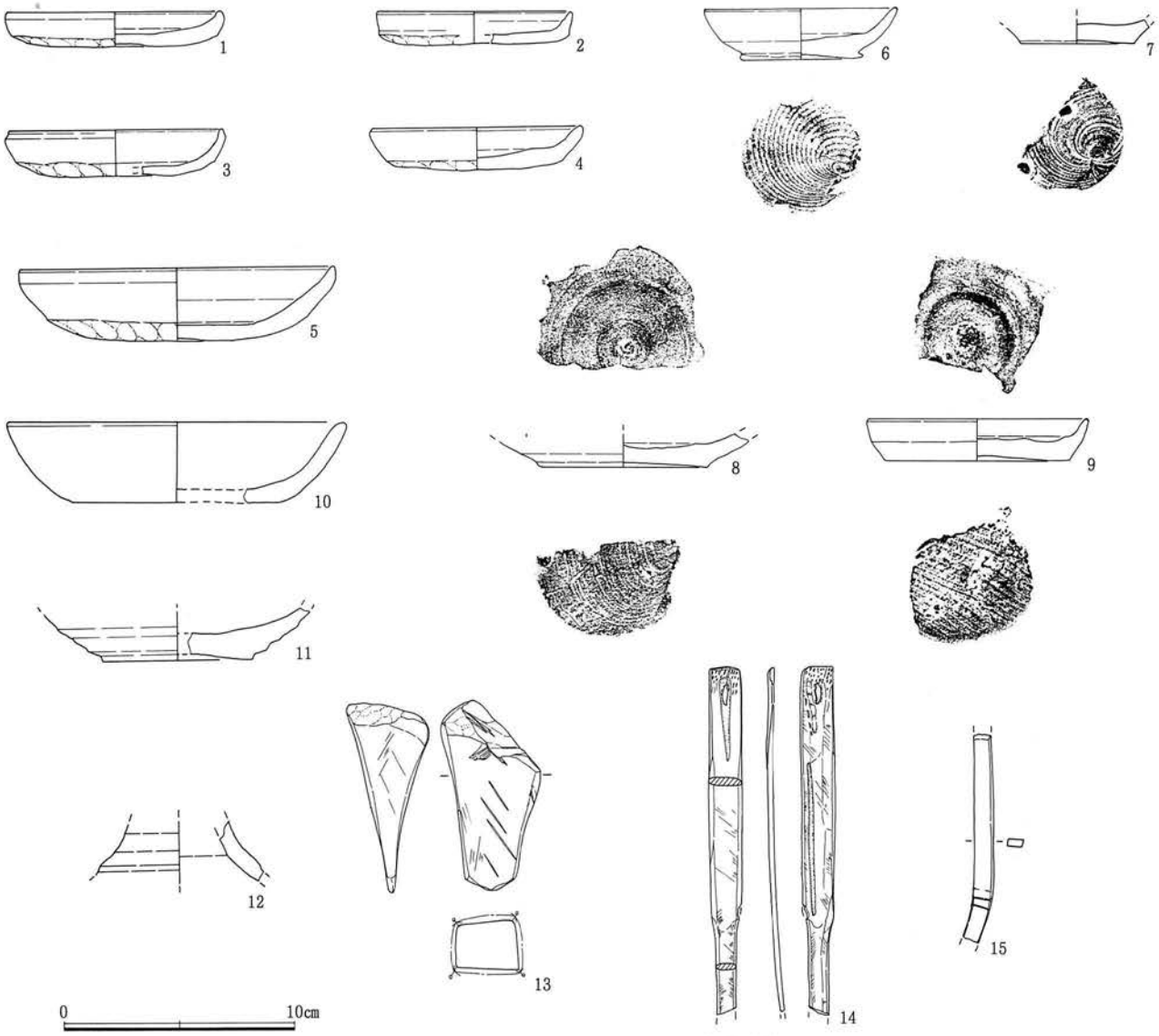


図17　B区５面（地山面）まで出土遺物

図17　B区５面（地山面まで）出土遺物

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	9.2		1.5	手捏ね
2	〃	8.4		1.4	〃
3	〃	9.2		2.0	〃
4	〃	9.1		1.9	〃
5	〃	13.5		3.2	〃
6	〃	8.2	5.2	2.2	轆轤
7	〃	不明	5.0	不明	〃
8	〃	不明	7.2	不明	〃
9	〃	9.5	7.9	1.8	〃
10	〃	14.5	9.0	3.5	〃
11	〃	不明	6.5	不明	〃
12	瀬戸水注	頸部か。砂を多く含む胎土で、灰色を呈す。			
13	砥石	残存長8.2 、幅3.8 、最大厚3.5 。 4 面使用。粒紋岩質粗粒凝灰岩製。天草産か。			
14	骨製品笄	残存長15.0、幅1.4 。中央にくぼみがなく、加工もやや粗雑。			
15	鉄製品	残存長9.0 程度。幅0.7 、厚さ0.4 の角柱で、両端は欠損している。用途不明。			

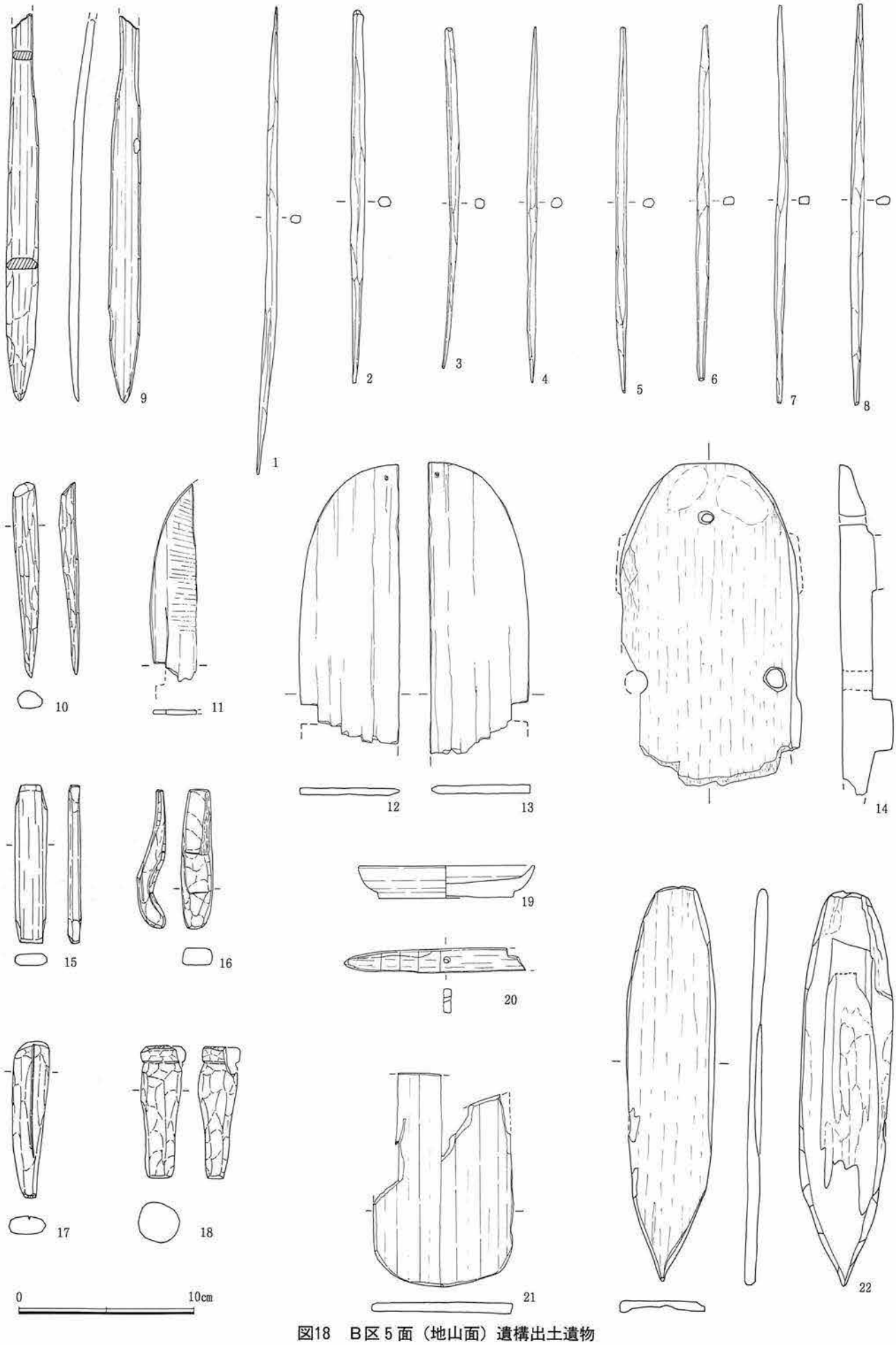


図18　B区5面（地山面）遺構出土遺物

図18　B区５面（地山面まで）遺構出土遺物

番号	種別・器種	成　　形
1	木製品箸	長さ26.9。
2	木製品箸	長さ21.4。
3	木製品箸	長さ19.5。
4	木製品箸	長さ20.4。
5	木製品箸	長さ20.9。
6	木製品箸	長さ20.3。
7	木製品箸	長さ22.7。
8	木製品箸	長さ22.9。
9	木製品	残存長22.2、幅1.9 、厚さ0.5 。面取りをして先端を尖らせたヘラ状の製品。
10	木製品	残存長11.1、幅1.4、厚さ1.4。先端をとがらせ、杭状にした製品。
11	木製品草履芯	残存長11.3。厚さ0.3。繊維の圧痕が認められる。
12	木製品草履芯	残存長16.0、厚さ0.4 。
13	木製品草履芯	残存長16.2、厚さ0.7。12・13は重なった状態で出土しており、形状も全く同じで、同じ板材から剥がされた片足分と考えられる。ただし12・13とも合わせ部が面取りされているが、繊維圧痕がなく、半製品と見られる。
14	木製品下駄	残存長18.7、幅10。台部と歯が一本で作られている連歯下駄。
15	木製品	幅1.8、厚さ0.8、長さ9.1。両端の幅をやや細く作っている。建具の部材などの用途が考えられるが、かなり粗雑な加工である。
16	木製品	幅1.8、長さ8.0。側面観は匙状にくぼみを持たせた形状だが、用途不明。
17	木製品	幅1.8、厚さ1.0、長さ9.1。杭状に先端を尖らせている。粗雑な加工。
18	木製品	最大径2.4 、長さ7.7 。栓状に片側の先端を細くしたもの。一方の先端はくびれを設ける。織具か。
19	木製品皿	復元口径9.9 、復元底径7.7 、器1.8 。漆は塗られていない。総高台で、底部が厚く作られている。
20	木製品	残存長10.4、幅1.4、厚さ0.4。先端を細く削り、残存部一箇所に小孔が穿たれる。小孔と先端との会田に直線の刻みが４本見られる。
21	木製品	長さ12.3、幅0.8 、厚さ0.6 。形代か。
22	木製品	長さ22.7、幅5.1 、厚さ0.7 。中央部分がそがれ、この部分の厚さは0.3 と薄い。 片方の先端は尖り、もう一端は流線型に削られている。形代か。

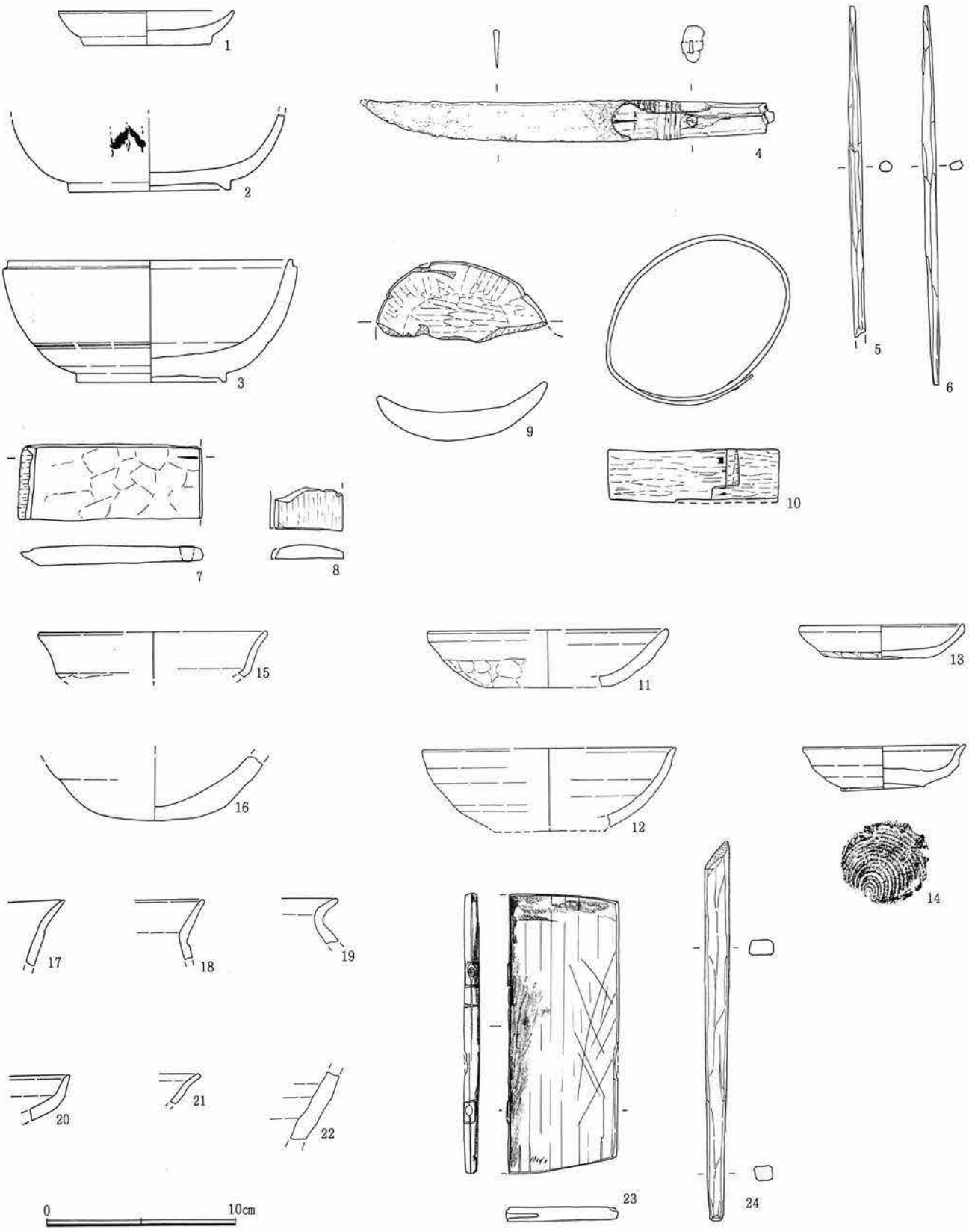


図19　B区５面（地山面）遺構出土遺物

図19　B区5面（地山面）遺構出土遺物

番号	種別・器種	成　　形			
1	木製品皿	復元口径9.2、底径6.7、器高1.8。漆は塗られていない。			
2	漆器椀	底径8.5。黒地に朱で文様が施される。文様はかなりかすれており、意匠は不明。 外体部3箇所に、ほぼ均等に割り付けられている。			
3	漆器椀	復元口径14.8、底径8.0、器高6.5。下体部に2条の溝（かづら）が設けられる。 口縁部は合わせ口状につくられており、蓋があったものと考えられる。黒の無文。			
4	刀子	残存長21.7、刃の幅2.1。把手の部分の木質が残る。木質は合わせ目がなく、呑入口の側をさいて、中茎を差し入れ、さらに一箇所に目釘を穿って、口の下を木皮のようなもので巻いている。			
5	木製品箸	残存長17.6。			
6	木製品箸	長さ20.1。			
7	木製品	幅4.1、厚さ1.0、長さ9.9。図左側の先端は先が細くなるように削られている。 右上端には薄くそがれた木側が貫通する。容器の側面を構成していた材か。			
8	木製品	最大厚0.8。蒲鉾型を呈する。幅は3.8程度と推定さらる。用途は不明。			
9	木製品	壺杓子　残存長9.2、残存幅4.2、最大厚1.5。柄の付け根から欠損している。			
10	木製品曲物	土圧によってつぶれているが、直径9程の物であったと考えられる。厚さ0.3弱、幅2.7の薄い板をまるめて、合わせ目を木皮で縫っている。底板は失われている。			
11	かわらけ	12.6		3.0	手捏ね
12	〃	13.3	5.8	4.4	轆轤
13	〃	8.6		1.8	手捏ね
14	〃	8.5	4.3	2.3	轆轤
15	土師器坏	復元口径11.9。			
16	土師器壺				
17	土師器甑				
18	土師器甕				
19	土師器甕				
20	土師器坏				
21	灰釉陶器皿				
22	須恵器	甕か壺の体部片。			
23	木製品	幅5.9、厚さ0.8、長辺14.8、短辺13.5のほぼ台形の板で、長辺側の側面には釘穴が二箇所あく。図左下には木皮が貫通しており、箱の側板などの用途が考えられる。 汚れのように漆の付着が認められる。			
24	木製品	最大幅1.3、厚さ0.8、長さ20.2。細長い板に面取りを施した形状。一方の先端を切って尖らせている。			

かわらけは手捏ね成形のものが多数を占める。そのほとんどが器高が低く、口が大きく開く浅型のもの。また、遺物の組成を見ても、第２面までに見られた瀬戸が姿を消し、国産の陶器は常滑・渥美を産地とする製品のみになる。年代は13世紀前半と考えられる。

第５面　（図17～19、図版16～18）

中世地山の面である。ここで検出された遺構は、木枠の残っていない井戸と、東西方向に延びる薬研に掘り込まれた溝である。遺物はこの遺構の覆土中から検出したものがほとんどであるが、地山の上層には木片等の有機物を含む腐植土が存在し、この層から検出した木製品（図18）が若干含まれる。溝の覆土から検出したかわらけは、手捏ね成形のものとともに、轆轤成形で外体部は強いなでで調整され口縁部がやや外反するタイプの製品（図19-12･14）が見られる。焼成はごく良好で硬質であり、13世紀初頭の製品と考えられる。また、溝の最下層からは中世の遺物は検出されず、古代の遺物が出土している。器種は甕・壷・甑など多様で年代には幅がり、中世初頭に流れ込んだものと思われる。

第５章　まとめ

調査地は、鎌倉草創期を支えた大倉幕府を中心とした有力御家人たちの屋地が建ち並び、町屋として大いに賑わった大倉の辻に近く、頼朝の鎌倉入府以前からあると伝えられる荏柄天神社参道の東脇に位置する。地山面の利用は検出した薬研溝から、同じ方向性を持つ二階堂大路が整備された時期（1192年前後）に始まったと考えられる。また、４面・３面は貝砂を敷き込んでいた。面上に貝砂を敷きつめることは、確認調査を含め、鎌倉前期の遺構で見ることが出来る。屋敷の中で砂を敷きつめる場所はどのような場所だったのだろうか。

他に大きな特徴として、13世紀中～後半の遺物・遺構も少ないことがあげられよう。貝砂面に蓋をするように13世紀後半から14世紀初頭にかけて土丹を使用した大規模な地業が行われる。このことも大倉周辺の地域でしばしば確認されている。

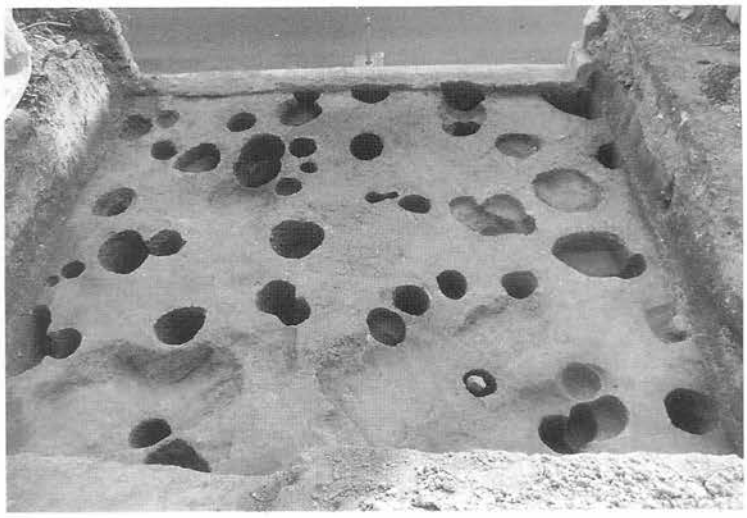
大倉幕府の中枢地域だった頃と、宇津宮辻子へ幕府が移転した後、有力御家人たちの屋敷も併せて若宮大路沿いに移転していったことを表しているのかもしれない。

写　真　図　版

図版 1

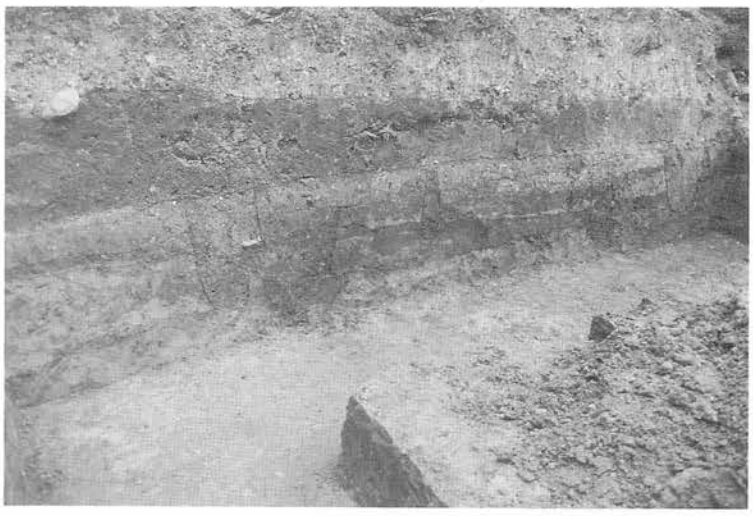
遠景

A区 1 面



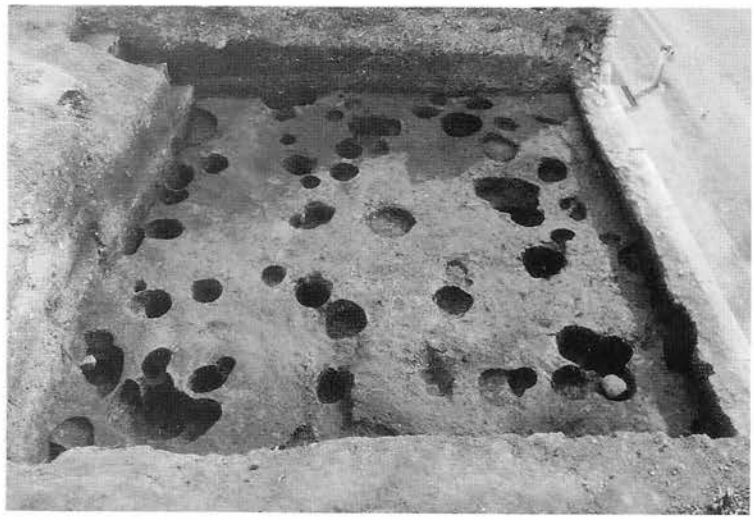
A区 1 面

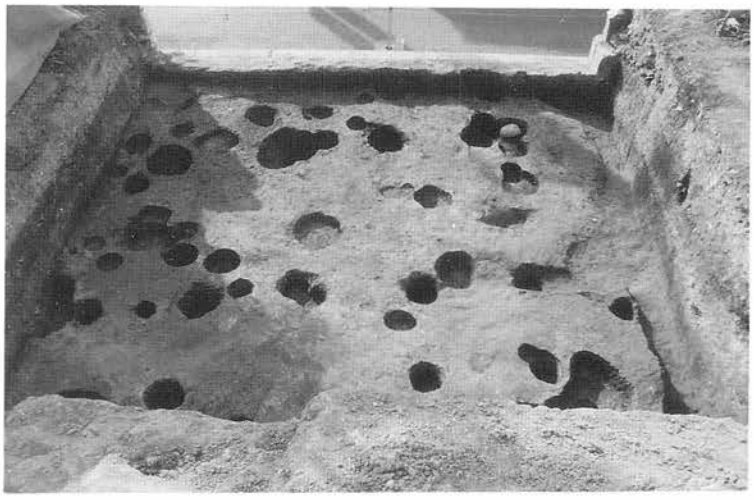
遠景・A区 1 面全景



A区東壁

A区 2 面





A区 2 面

A区 2 面全景・A区東壁

図版 3

A区北壁

B区１面

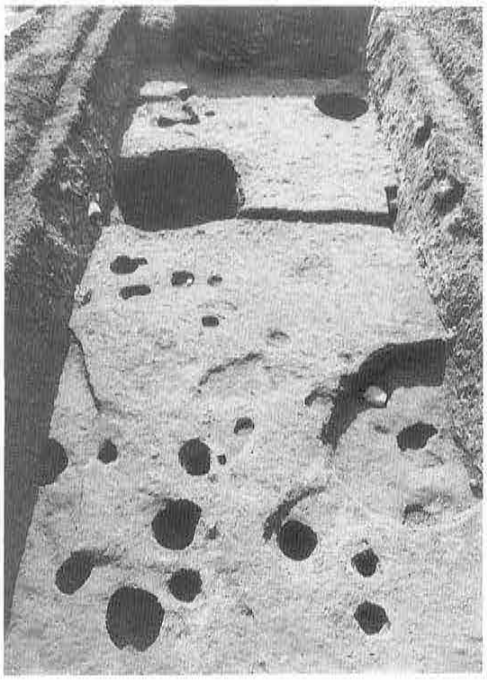
B区１面

A区北壁・B区１面全景

B区 2 面

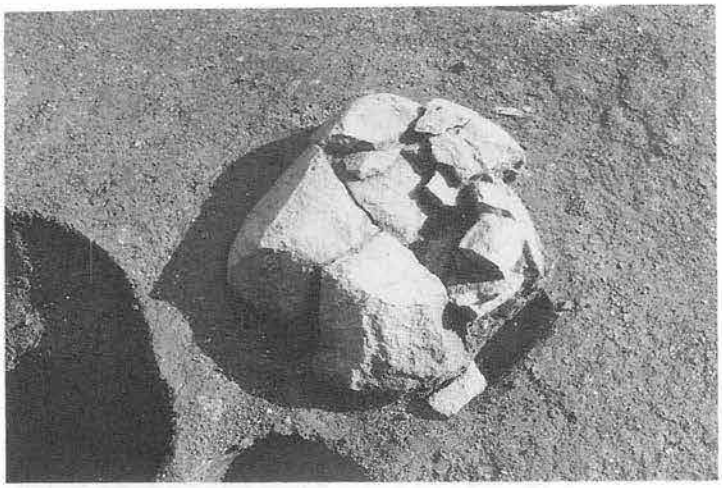
2 面井井戸

B区 2 面



B区 2 面全景・井戸

図版 5



4 面

B区 3 面

B区 4 面

B区 3 面・ 4 面全景

B区地山

B区西壁

B区地山

B区5面（地山面）全景・西壁

図版 7

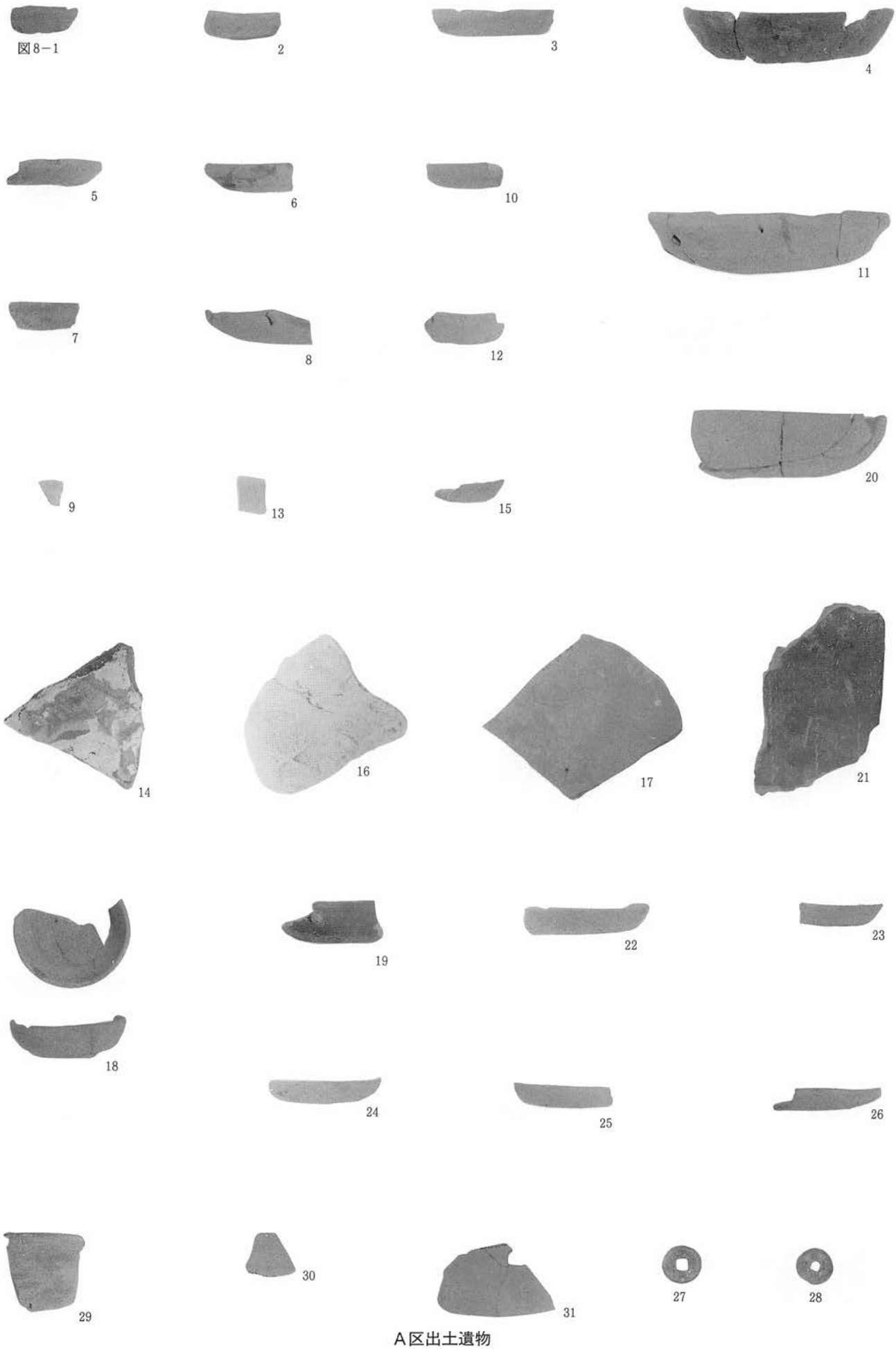


図8－1
2
3
4
5
6
10
11
7
8
12
20
9
13
15
14
16
17
21
19
22
23
18
24
25
26
29
30
31
27
28

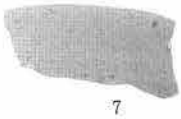
A区出土遺物

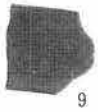
図9－1

2

3

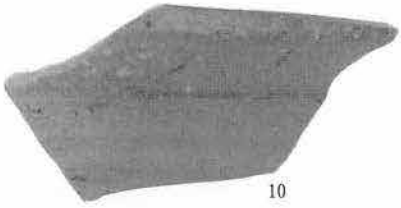
6

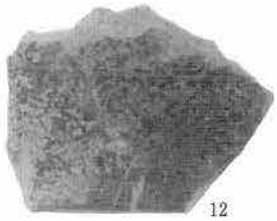

7


9

11

4


10


12

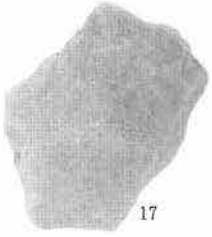
5

13

14

15

19


17

18

20

16

21

図10－1

図10－2

図10－3

図10－4

図10－5

図10－6

図10－7

図10－8

図10－9

図10－10

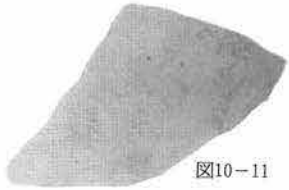


図10－11

図10－12

B区１面の遺物

図版 9

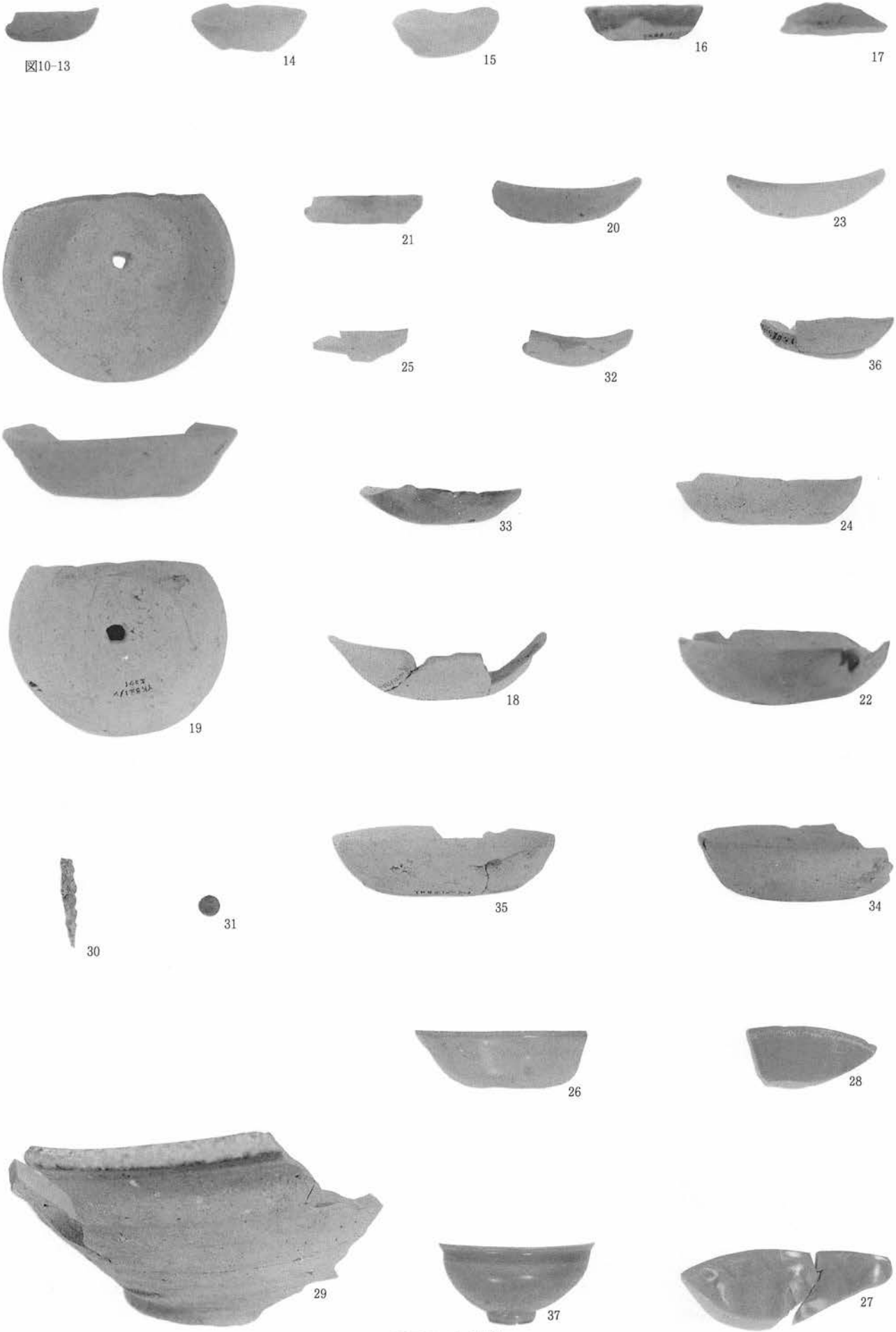
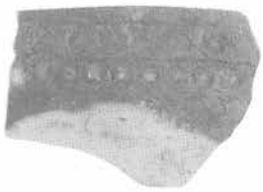


図10-13
14
15
16
17
21
20
23
25
32
36
33
24
19
18
22
35
34
30
31
26
28
29
37
27

B区１面の遺物

図11－1



4

5

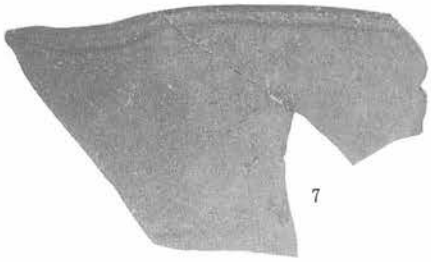
2

10

9

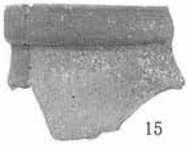
8

11

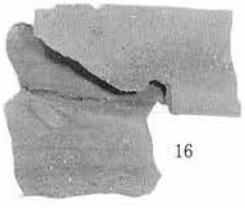

7

6

17


15

12

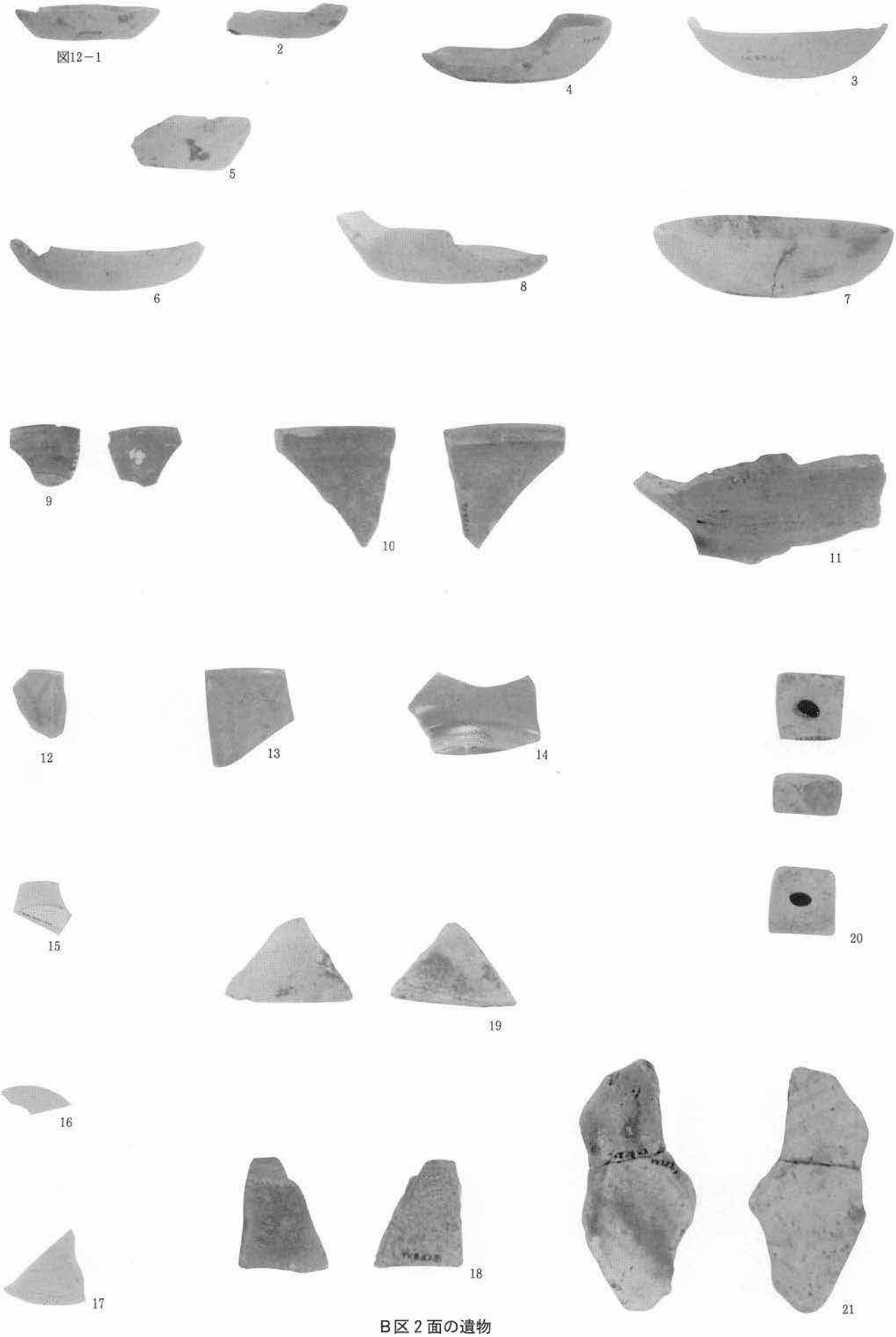

16

13

14

B区１面土拡２の遺物

図版11



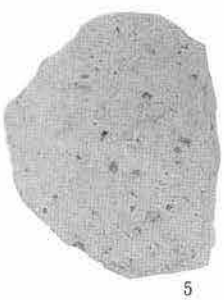
B区２面の遺物

図13－1

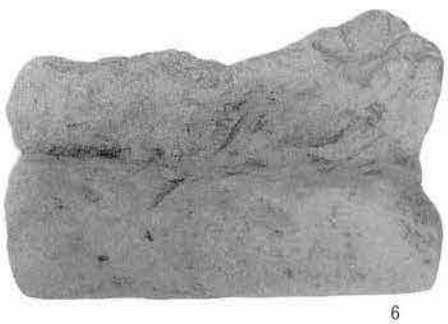
2

3

4



5



6

図14－23

図14－25

B区２面井戸の遺物

図版13

図14－1

2

3

4

5

6

8

9

7

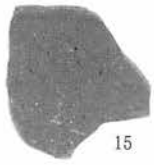
10

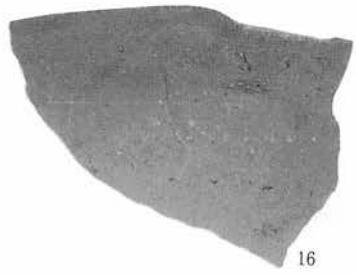
11

12

13

14


15


16

19

20

17

18

21

22

24

図15－22

図15－23

図15－24

図15－25

B区２面井戸・４面の遺物

図15－1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

図16－1

図16－2

図16－3

図16－4

図16－5

図16－6

図16－7

図16－8

図16－9

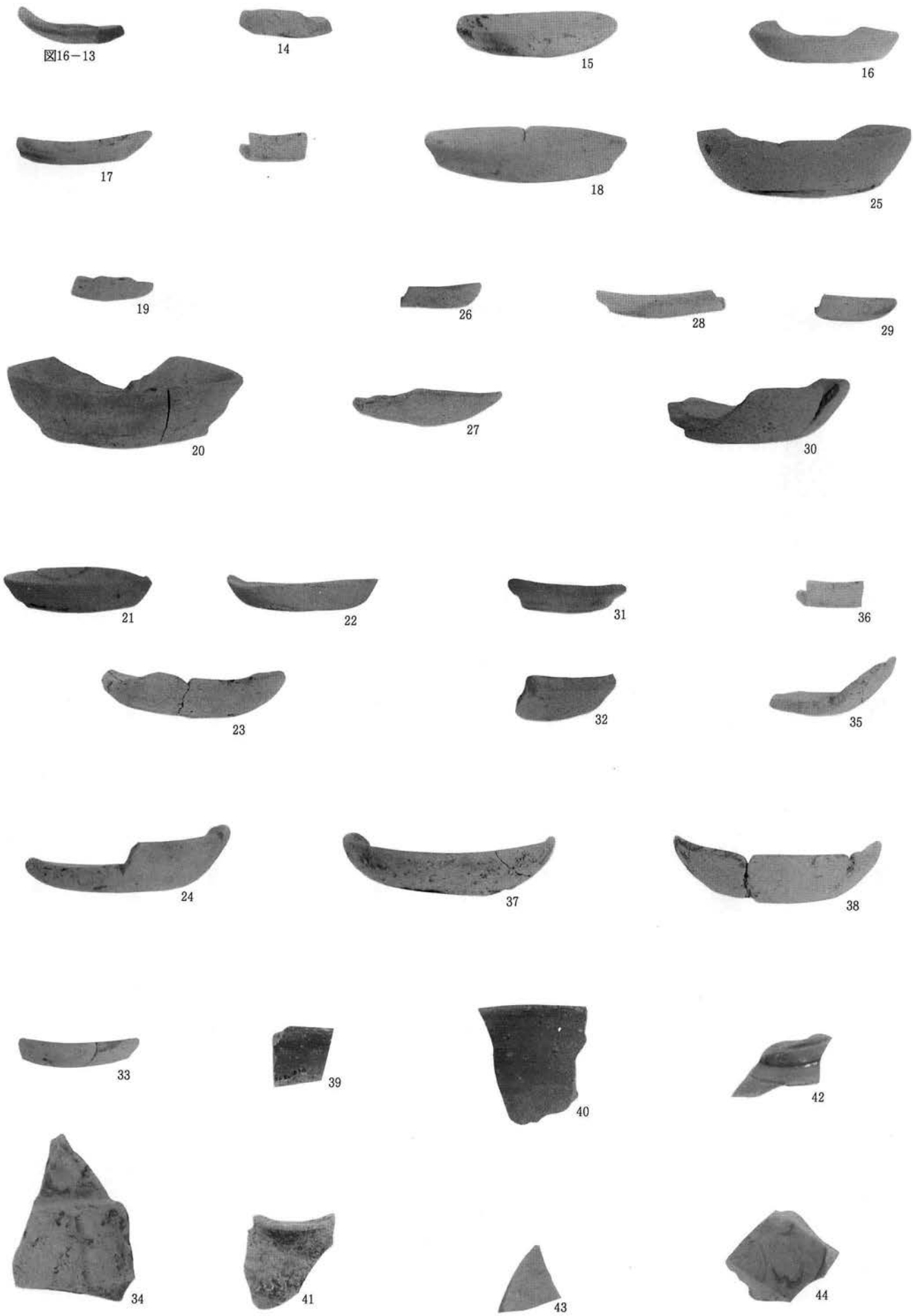
図16－10

図16－11

図16－12

B区３面・４面の遺物

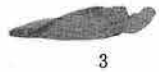
図版15



B区3面・4面の遺物

図17－1

2


3

4

5

6

8

7

9

11

10

13

12

14

図18－9

18－1

18－2

18－3

18－4

18－5

18－6

18－7

18－8

11－10

18－15

18－16

18－17

18－18

B区５面（地山面）の遺物

図版17

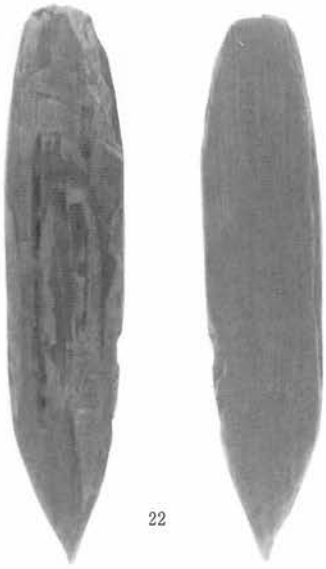
図18－20

11

12

13

14



22

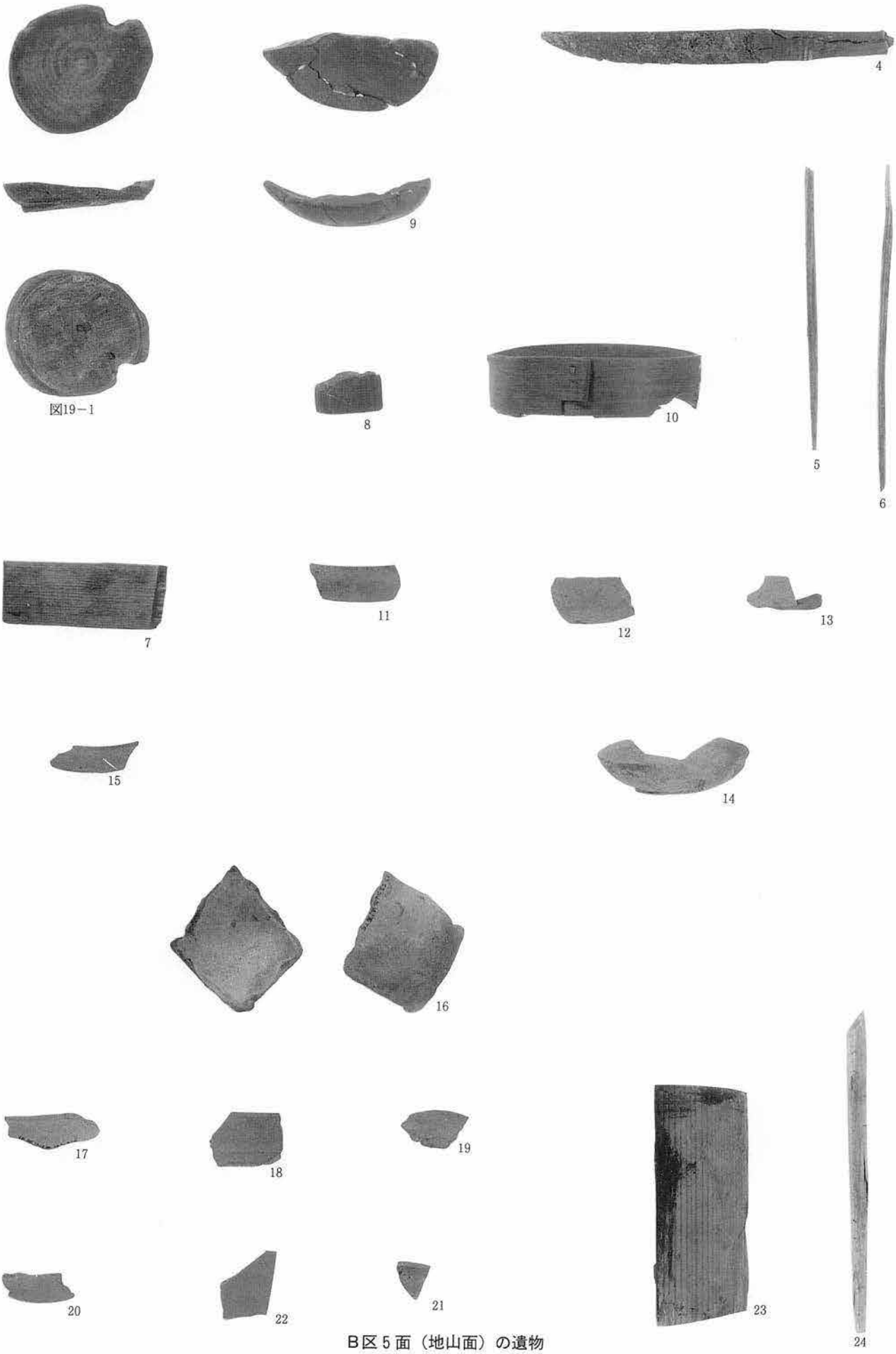
21

19

図19－2

図19－3

B区５面（地山面）の遺物



B区５面（地山面）の遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	福田 誠　菊川 泉　神山晶子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
横小路周辺遺跡（よここうじしゅうへんいせき）	神奈川県鎌倉市（かながわけんかまくらし）二階堂字荏柄（にかいどうあざえがら）10番6外地点	204	259	35° 19′ 11″	139° 34′ 01″	19981102 ～ 19990222	96.0㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
横小路周辺遺跡	都市遺跡	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝・掘立柱建物 井戸・土壙	二階堂大路と並行の薬研 溝と建物

由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）

由比ガ浜二丁目1203番20地点

例　　言

1．本報は鎌倉市由比ガ浜二丁目1203番20地点における、自己用診療所・併用住宅の造成に伴う由比ガ浜中世集団墓地遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成10年11月26日から同年12月11日にかけて実施した。

3．調査体制は以下の通りである。

担　当　者　原　廣志
調　査　員　福田　誠・神山晶子・菊川　泉
調査補助員　須佐仁和・早坂伸市
調査参加者　石渡辰男・蓑田孝善
協力機関（社）鎌倉市高齢者事業団シルバー人材センター
　　鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第一章を神山、第二章・第四章を原、第三章を須佐・原が分担し、編集は原が行った。

5．本報の資料整理には、須佐・早坂の協力を受けた。

6．本報に掲載した写真は、遺構を須佐が遺物を菊川が撮影した。

7．出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

8．本報作成に際して、下記の方々から多大なご教示を賜った。

大三輪龍彦・小林康幸・継　実・手塚直樹・永井正憲・藤沢良祐・松尾宣方・馬淵和雄・宮田　真

本文目次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……213
第2章　調査の概要 ……215
第3章　検出遺構と出土遺物 ……217
　第1節　上層遺構 ……217
　第2節　下層遺構 ……220
第4章　まとめ ……224
　※報告書抄録 ……231

挿図目次

図1　遺跡周辺図 ……212
図2　調査地点周辺図 ……214
図3　グリッド設定図 ……216
図4　グリッド配置図 ……216
図5　上層遺構全図 ……217
図6　上層遺構出土遺物 ……218
図7　下層遺構全図 ……220
図8　下層遺構出土遺物 ……221

表目次

表1　上層遺構出土遺物 ……219
表2　下層遺構出土遺物（1） ……223

図版目次

図版1　a．若宮大路より一ノ鳥居を望む
　　b．調査地点近景 ……227
図版2　a．上層遺構西側
　　b．上層遺構東側 ……228
図版3　a．下層遺構
　　b．下層遺構遺物出土状況
　　c．調査区西壁土層堆積
　　d．調査区北壁土層堆積 ……229
図版4　a．上層遺構出土遺物
　　b．下層遺構出土遺物 ……230

大船一丁目
大船五丁目
大船三丁目
大船四丁目
小袋谷
内耕地
今泉一丁目
谷之前
西之根
大船
山崎
宮之前
大船高
今泉三丁目
今泉四丁目
鎌倉パブリックゴルフ場
今泉二丁目
小袋谷二丁目
台三丁目
小袋谷
高野
今泉不動
亀井
今泉台一丁目
今泉台二丁目
台四丁目
台五丁目
宮下小路
高野
六国見山
今泉五丁目
今泉台七丁目
今泉台三丁目
横須賀線
西之台
台
瑞鹿山
今泉台四丁目
円覚寺
倉久保
明月谷
今泉台六丁目
北鎌倉女子学園
きたかまくら
藤源治
今泉台五丁目
大平山
山崎
西管領屋敷
明月院
新
池之谷
東谷
松岡
山ノ内
清水塚
西瓜ヶ谷
浄智寺
巨福山
平子
杉ヶ谷
東管領屋敷
東瓜ヶ谷
金宝山
建長寺
尾藤
鎌倉学園
覚園寺
梶原三丁目
白黒小路
西御門一丁目
西ヶ谷
獅子舞
亀ヶ淵
日野俊基墓
扇ヶ谷三丁目
雪ノ下二丁目
二階堂
梶原五丁目
扇ヶ谷四丁目
鶴岡八幡宮
西御門二丁目
中
会下
三堂
梶原四丁目
鎌
倉
市
扇ヶ谷二丁目
鎌倉宮
四ッ石
荏柄
野村総合研究所
理智光寺谷
近代美術館
横小路
稲葉越
佐助二丁目
源氏山
佐助稲荷
寿福寺
雪ノ下三丁目
向荏柄
常盤
御所ノ内
一向堂
扇ヶ谷一丁目
浄明寺三丁目
杉本
浄妙寺
殿入下
雪ノ下一丁目
浄明寺四丁目
常松下
仲ノ坂
小町二丁目
小町三丁目
雪ノ下四丁目
雪ノ下五丁目
稲荷小路
佐助一丁目
長谷五丁目
御成町
浄明寺一丁目
浄明寺二丁目
浄明寺五丁目
市役所
かまくら
長谷四丁目
小町一丁目
大仏切通
本覚寺
妙本寺
大仏
高徳院
笹目町
大町一丁目
大町三丁目
衣張山
由比ヶ浜一丁目
大町六丁目
わだづか
長谷一丁目
鎌倉女学院
長谷三丁目
由比ヶ浜三丁目
大町四丁目
大町二丁目
妙法寺
長谷観音
ゆいがはま
由比ヶ浜二丁目
材木座一丁目
極楽寺二丁目
はせ
長谷二丁目
由比ヶ浜四丁目
大町五丁目
大町七丁目
極楽寺
坂ノ下
由比ヶ浜二丁目1203番20地点
由比ヶ浜
材木座五丁目
材木座四丁目
材木座海岸
材木座六丁目
光明寺
逗子市
和賀江島

図1　調査地点位置図

第１章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市街の南端である由比ガ浜地区、相模湾に望む滑川河口に近い右岸の砂丘上に位置し、ＪＲ鎌倉駅から南東方へ約600ｍの距離にある。調査地点は現在の海岸線から北に約400ｍ、若宮大路（主要地方道・鎌倉片瀬藤沢線）から西に30ｍほど離れた場所である。砂丘は長谷方面から東に延びる岩盤海蝕台の上に形成されており、東端は滑川付近、北は江ノ電路線の北側付近まで及んでおり、現在の一ノ鳥居から和田塚を結んだあたりが砂丘頂部で海抜高12ｍ程と最も標高が高く、調査地の標高は約８ｍである。本調査地点が所在するこの一帯は、従来の発掘調査から「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」という遺跡名が示すとおり中世の埋葬人骨が出土する葬地的な地域としての印象が深くもたれていた。

ところで相模湾に面する由比ガ浜の地域一帯は、中世前期には「前浜」とも呼ばれていた。現在、由比ガ浜と呼ばれるのは鎌倉市街の海岸線のうち、滑川から以西の稲瀬川付近までの地域に限られているが、中世当時は前浜と同様に稲村ガ崎から和賀江島までの海岸線全域をさしていたと思われる。由比ガ浜東端しには、貞永元年（1232）築港という和賀江島（飯島港）があり、この港湾は武蔵国六浦津とともに鎌倉と国の内外との貿易の拠点として大きな役割を果たしていた。和賀江島は人工築港を物語る玉石積みが現在でも見られ、材木座あたりを中心とした海岸線の一帯からはこの時代に輸入された中国や瀬戸・常滑などの陶磁器破片が、つい最近まで多量に散見していた。

『吾妻鏡』には由比ガ浜や前浜に関する記事が散見しており、鎌倉時代には武士たちの必須武芸の一種である笠懸や流鏑馬、牛・犬追物などの「馬上三物」や祭事・船の着岸・舟遊び、さらに合戦や処刑などが行われており、御家人の屋地や民家があったことが知られる。また『海道記』には、「此所をみれば数百艘の舟どもつなをくさりて大津のうらに似たり。千万宇の宅軒をならべて大淀のわたりに異ならずし」と記され、さらに「おろおろ歴覧すれば、東南の角の一道は舟楫の津、商売の商人百族のにぎはひ」と貞応２年（1223）ごろの前浜の様子を伝え、この地が活気に満ちて繁栄していたことが窺える。

本調査地点の周辺で実施された発掘調査成果に触れると、２地点の材木座遺跡では1953・56年の二度にわたる調査で多数の人骨群や馬・犬等の獣骨が発見され、後に中世集団墓地の遺跡名が示すとおり葬地的な印象が強かった。しかし遺跡の北東に位置した４地点（若宮ハイツ用地）では、密集した土壙墓のほか、それと重複した方形竪穴建築址や井戸、また西端の若宮大路沿いは荷車の轍を無数に残した南北方向の道路（黒塗部分）が検出された。この地域は近年の発掘成果から墓跡ばかりではなく、短い期間で幾度も造り替えられたおびただしい数の方形竪穴が、ゴミ穴の土壙や井戸・通路などの遺構と一定の配置を持って確認された。それに伴って日常的な生活を伺わせる遺物が多量に出土しており、方形竪穴は庶民の住居や倉庫に使用されていたと考えられる。都市鎌倉の繁栄の陰にあって、この地は庶民生活の生き様を最も照射した場所であった。

【引用・参考文献】

原　廣志他　1993「由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）由比ガ浜二丁目1034番１外地点調査概報」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告９（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

長崎　健　1994「海道記」『中世日記紀行集（新編日本古典文学全集48）』小学館

大河内勉他　1997「由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書―由比ガ浜四丁目1136番地点（KKR鎌倉若宮荘）－第一次調査第２分冊・中世編」同調査団

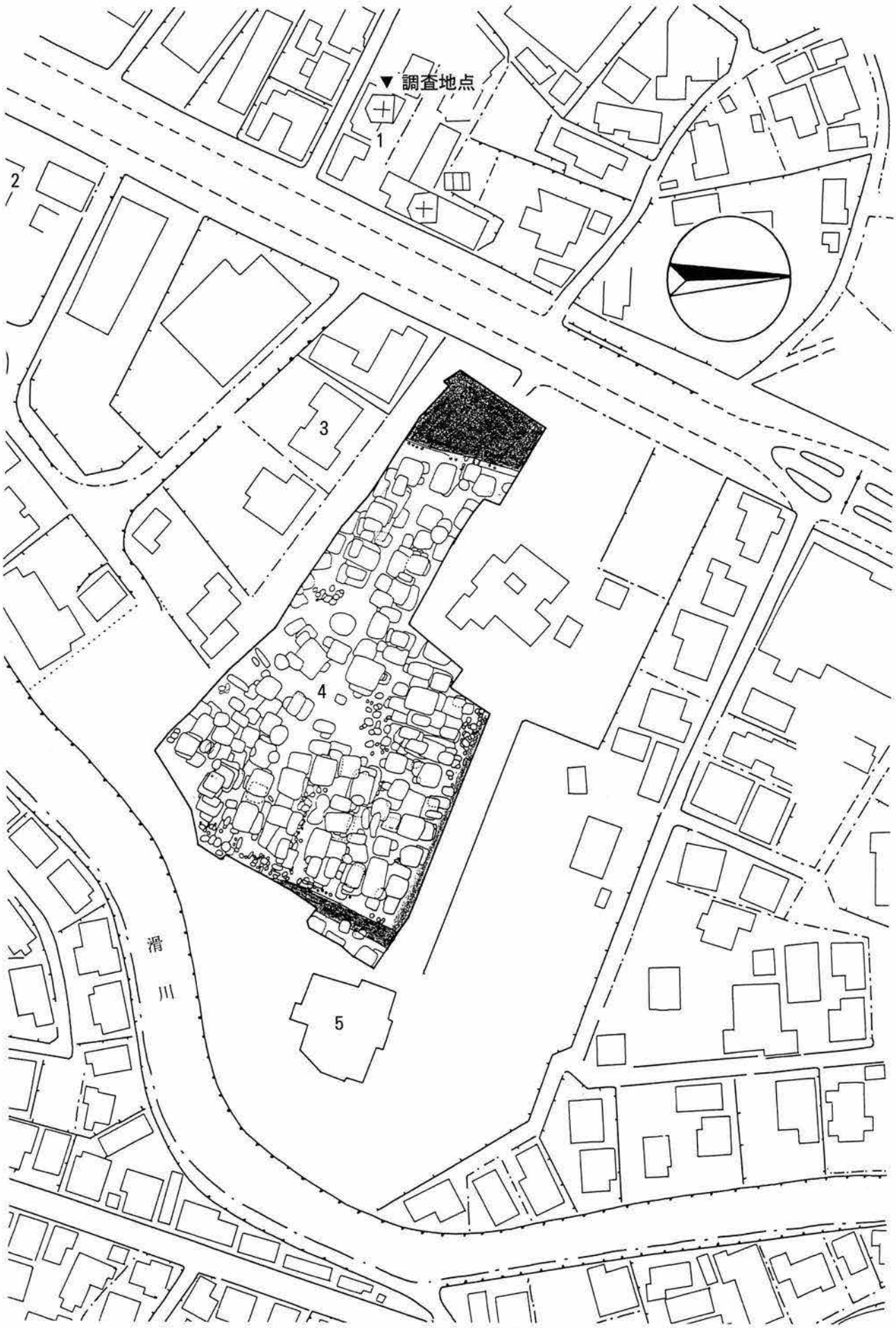


図２　調査地点周辺図

第2章　調査の概要

a．調査の経過

本調査地点は、由比ガ浜中世集団墓地遺跡（県遺跡台帳№372）の一角、鎌倉市由比ガ浜二丁目1203番20地点に計画された自己用診療所・併用住宅の建設にかかる調査面積111.58㎡を対象に、平成10年11月26日から平成10年12月11日にかけて鎌倉市教育委員会によって発掘調査を実施した。

現地調査は西側をA区、東側をB区としたが敷地の範囲が狭小で残土置場が確保できない都合上、まず平成10年11月26日から調査区西側のA区の調査を先行して行った。現地表下50～70㎝内外まで堆積していた近現代の撹乱および客土の一部を重機により除去し、以下を人力によって調査を行い、ついで東側のB区に移行した。B区もまず重機により近現代の土を除いてから始め、設計計画の深度まで人力により掘り下げて遺構・遺物の検出を実施した。その後、測量・写真撮影等の記録保存を行い同年12月11日をもって現地調査を終了した。

b．調査方法

グリッド設定方法は、鎌倉市街道路管理課が設置した4級基準点を基点にして設定を行った。調査地点付近の4級基準点は、図3において示したように南隣して走る道路の西方の位置にあたるE195［X－76672.935　Y－25781.271］と、E194［X－76653.354　Y－25758.564］の2点が確認された。そこで、E194 4級基準点から北へ距離39.081mにA点［X－76620.482　Y－25737.512］を設け、そこから東方へ距離33.263mのところでB点［X－76632.571 Y－25706.546］を調査地点の北側道路肩に設定した。またA点から若宮大路歩道に位置した4級基準点のE062［X－76644.915　Y－25682.539］までの距離は60.177である。従って、グリッド配置は図3・4に示したとおり4級基準点に連結しており、グリッド杭の国土座標値は以下のように、C－1［X－76630.800　Y－25705.606］、C－3［X－76627.267　Y－25707.723］である。

グリッドはC－1杭を軸交点の基準として、調査区内を2mグリッドに区画し、南北方向に東からアルファベッドを、東西方向に北から算用数字を付した。各区画の名称には北西隅の交点を与えている。方位はすべて真北を使用しており、南北軸方位はN－12° 30′ 37″－Eである。レベル原点は鎌倉女子学院正門に近い鎌倉市1級水準点［BM23＝5.3303］を調査区内に移動した。従って、文章中及び挿図のレベル数値はすべてその海抜高で示している。

c．堆積土層

本調査地点における地表の海抜高は8m前後であり、工事掘削深度の規定にあたる海抜高約6.8mまでの1.2m程を発掘調査した。表土は厚さ30～60㎝で現代のビン・ガラスを多く含んだ盛り土である。表土下の海抜7.50m前後で宝永年間（18世紀初頭）の火山灰が確認され、さらにかわらけ・炭化物粒を多量に含んだ茶褐色砂層の遺物包含層を挟んで暗茶灰色砂質土（8層）が検出された。この上面で検出した遺構が上層遺構としたものである。下層遺構の確認面は厚い堆積層の8層を除去すると、海抜6.90m前後で表土する。この層は東側に向かって下がった堆積を示しており、従って掘削深度の制約があり調査区のA区にだけの遺構確認に留まった。

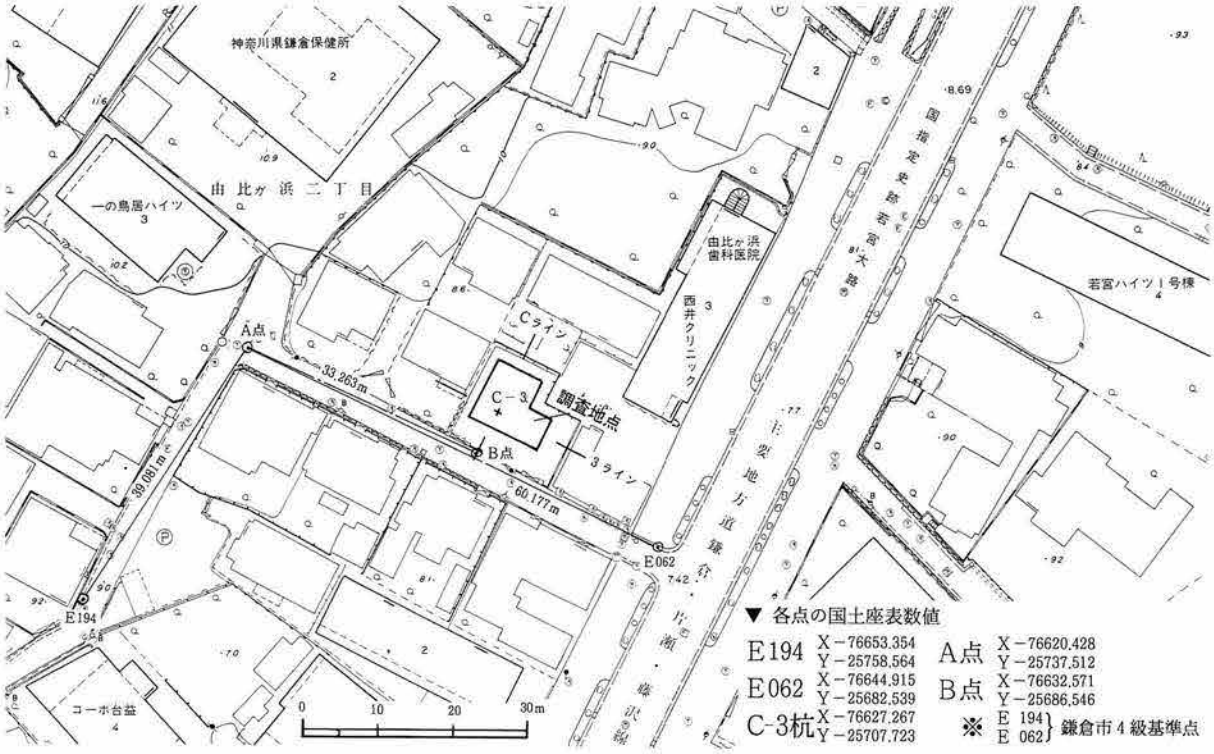


図3　グリッド設定図

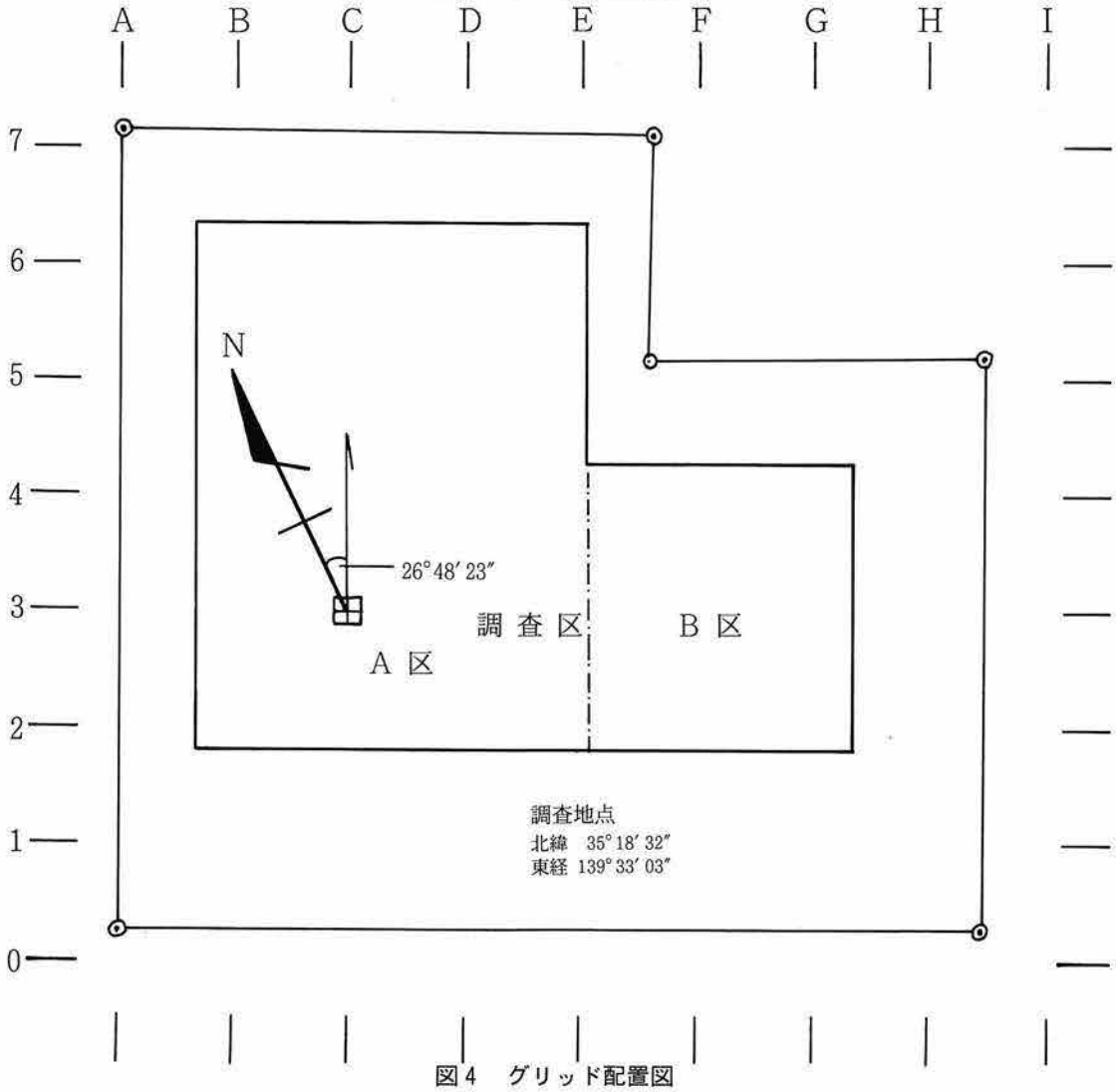


図4　グリッド配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　上層遺構（図５・６）

土壙１

Ｅ－３グリットに位置し、規模は南北1.42m、東西約１ｍを計る。楕円形を呈した土壙で緩やかな立ち上がりの壁面と概ね平坦な底面をもち、確認面からの深さ30～40㎝である。覆土は暗灰白色を基調とした砂質土層を主体とし、粗い砂がブロックで入り込んだ締まりのないものである。

出土遺物は図６－13が瀬戸窯瓶子、14が常滑窯甕の胴部片であり、この他に図化していないがかわらけの小片がみられた。

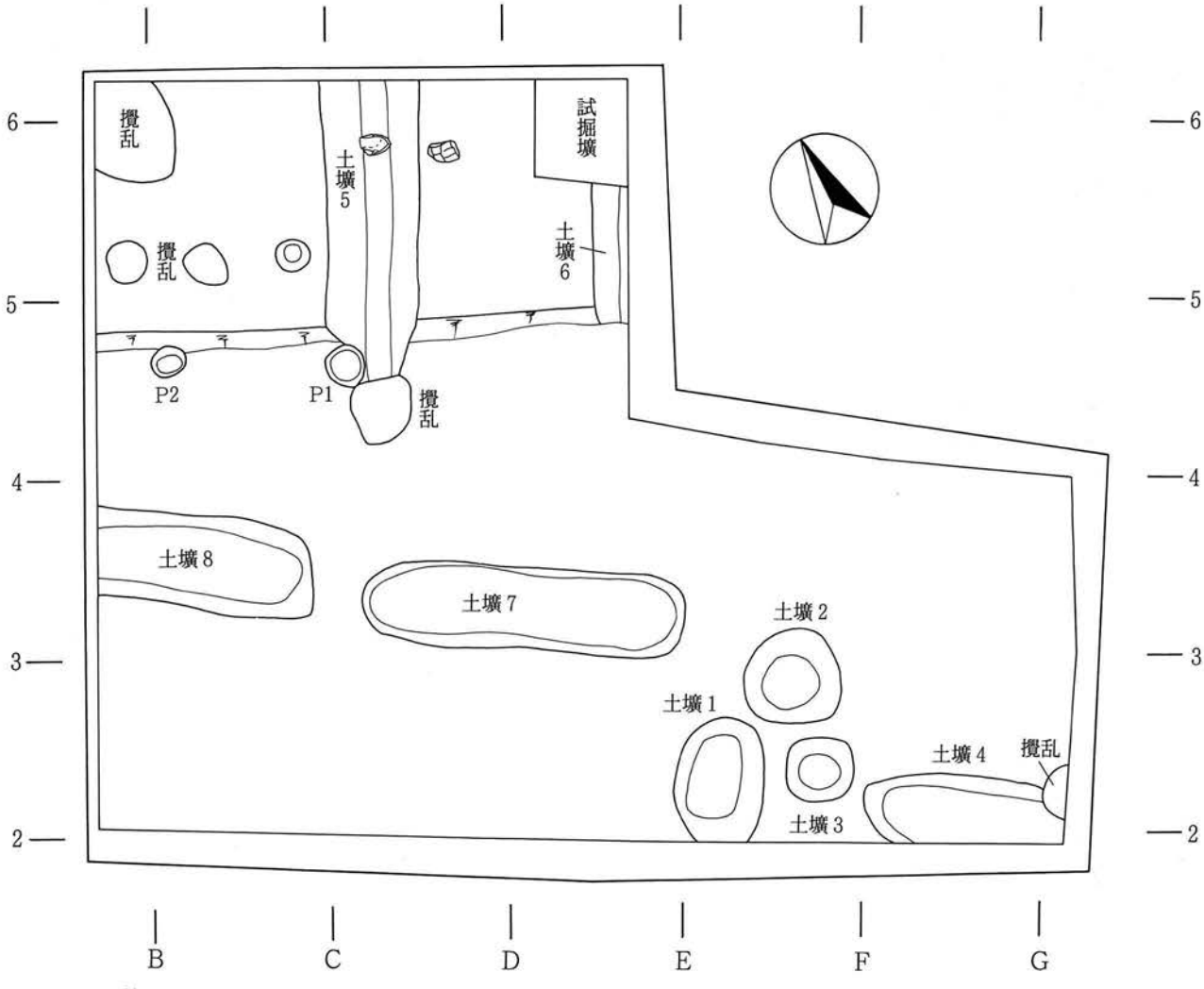
土壙２

土壙１の北側に隣接する。規模は径約1.2 ｍ、深さ30㎝程で円形を呈し、形状は緩やかに立ち上がる。壁面で摺鉢状の底面をもつ。覆土は茶褐色砂質土のブロック含む暗灰白色砂質土である。

出土遺物はロクロかわらけ・常滑窯甕の細片が少量出土したが図示できたものは15の骨角製品だけである。

土壙３

土壙１の東側に位置し、規模は径70㎝前後、 確認面からの深さ20㎝程の浅い隅丸方形を呈する。覆



S＝⅛

図５　上層遺構全図

土は土壙２と類似した砂質土で、図示できる遺物は出土していない。

土壙４

調査区南東隅に位置し、東側は一部攪乱を受け南側が調査区外に延びており、全体の規模は不明である。規模は東西2.37m以上、 南北90cm以上、確認面からの深さ30cm程で長円形を呈する。覆土は茶褐色砂質土ブロックを少量含む暗灰白色砂質土である。出土遺物はかわらけ細片だけで図示していない。

土壙５

Ｃ－５・６グリットに位置し、南北方向に長い溝状の土壙である。北側は調査区外に延びているが、南端は近世以降の攪乱で削平される。規模は南北3.40m以上、東西１m、深さ70cm程である。覆土中からは、16白磁口兀皿、18青磁碗、17かわらけ、19瓦質手焙り、20碁石などの遺物が出土している。

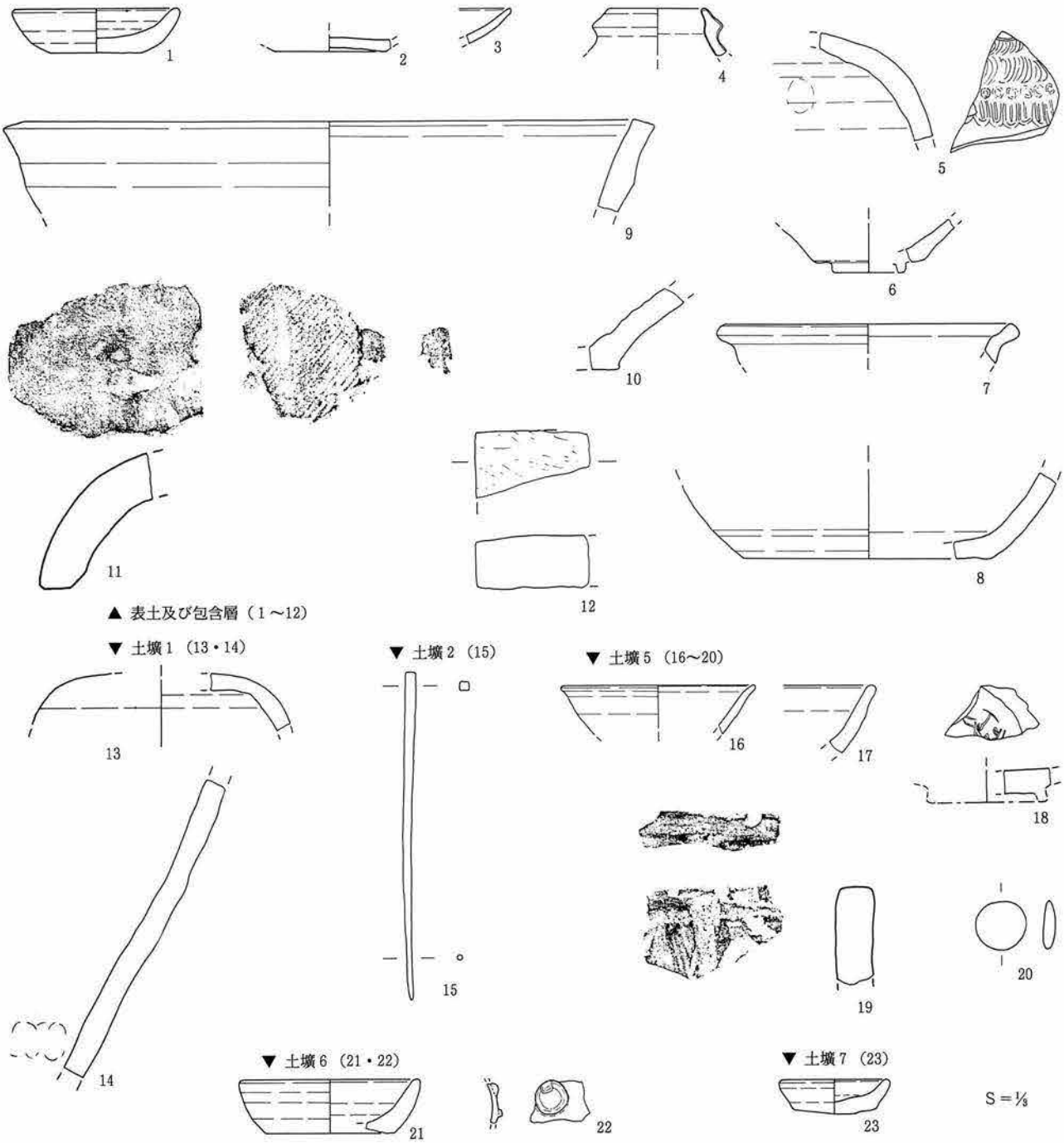


図６　上層遺構出土遺物

土壙6

D－5・6グリットに位置し、南北方向に長い溝状の土壙である。この遺構は試掘調査時においても確認されている。規模は南北1.56m以上、東西60cm以上、深さ50cm程である。覆土は暗灰白色砂質土、出土遺物が21かわらけ、22青白磁小壷がみられた。

土壙7

C・D－3グリットに位置し、東西方向に長い溝状の土壙である。規模は南北3.65m、東西1m、深さ40cm程である。覆土中から23かわらけの小皿が出土した。

土壙8

B・C－3グリットに位置し、東西方向に長い溝状の土壙である。東側は調査区外に拡がっており、全貌は把握できていない。現状での規模は南北 2.4m以上、東西 1.1m、深40cm程である。覆土中からの出土遺物はかわらけ細片だけで図示していない。

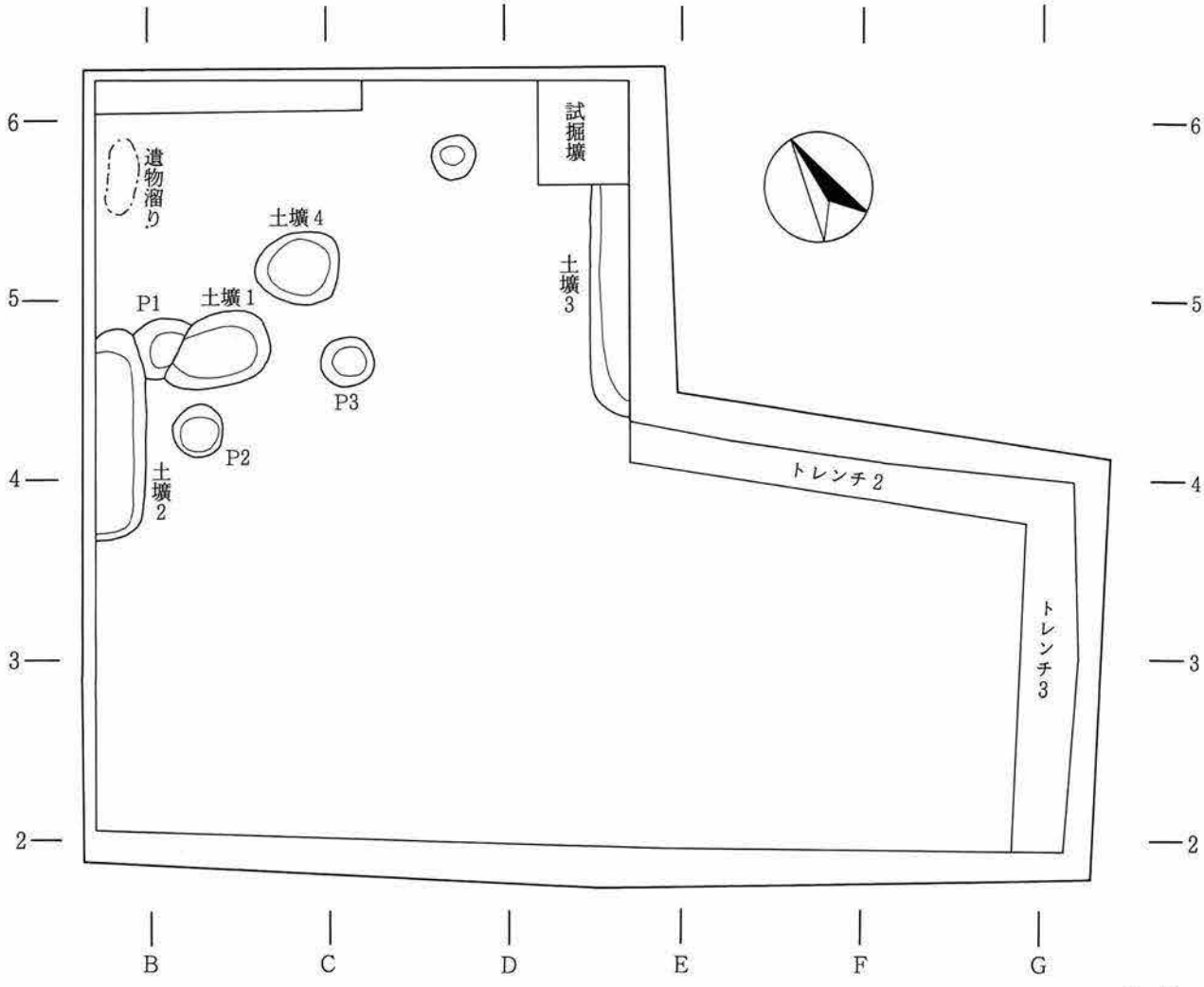
図5　上層遺構		a．法量・部位　b．成形　c．胎土・素地　d．色調・施釉　e．備考
1	かわらけ	a．口径7.8cm　底径4.3cm　器高2.1cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡赤灰色
2	白磁　口兀皿	a．底径5.2cm　c．灰白色、堅緻　d．緑味淡灰白色透明
3	瀬戸小皿	a．口縁～体部　b．ロクロ　c．灰白色、堅緻　d．黄味灰白色透明、細かい貫入多し
4	青白磁　梅瓶	a．口径4.7cm　b．ロクロ　c．白色、堅緻　d．水青色不透明
5	瀬戸　瓶子	a．肩部　b．輪積み　c．黄灰白色　d．灰緑色　e．肩部に半載竹管・竹管・剣頭の印文
6	瀬戸天目茶碗	a．高台径（4.7cm）　b．ロクロ　c．灰白色、堅緻　d．黒褐色鉄釉
7	瀬戸　折縁皿	a．底径（13.6cm）　b．ロクロ　c．黄味灰白色、堅緻　d．内外面灰釉刷毛塗り
8	瀬戸　折縁皿	a．底径（12.1cm）　b．ロクロ　c．灰白色　d．内面灰緑色施釉
9	常滑　捏鉢	a．口径（14.5cm）　c．灰黒色、砂・長石・石英粒　d．赤茶灰色
10	常滑　捏鉢	a．体部下半～底部　c．灰黒色、砂・長石・石英粒　d．茶灰色　e．内面摩耗が著しい
11	男　瓦	a．厚さ2.2cm　b．凸面縄目叩き後すり消し、凹面糸切り・布目痕　c．赤味灰白色
12	砥　石	a．長さ（3.1cm）、幅5.5cm、厚さ2.5cm　c．赤味灰白色
13	瀬戸　瓶子	a．肩部　b．輪積み　c．黄白色、堅緻　d．外面淡緑灰色の灰釉
14	常滑　甕	a．胴部下半　b．輪積み　c．灰褐色、砂・長石・石英粒　d．赤茶灰色
15	骨角製品　笄	a．長さ15.6cm、上端幅5mm、下端幅2mm　b．小刀削りで面取り
16	白磁　口兀皿	a．底径（9cm）　b．ロクロ　c．灰白色、堅緻　d．淡灰緑色不透明
17	かわらけ	a．体部～口縁　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．茶灰色
18	青磁　碗	a．高台径5.8cm　b．ロクロ　c．灰色、堅緻　d．灰緑色半透明　e．内底面印花文
19	瓦質手焙り	a．口縁　b．輪花状　c．灰色、砂・小石粒　d．表面灰黒色
20	碁　石	a．径2.3cm、厚さ6mm　b．円形扁平　d．黒色
21	かわらけ	a．口径8.4cm、底径（6.2cm）、器高2.6cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．茶灰色
22	かわらけ	a．口径5.0cm、底径3.9cm、器高1.6cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡赤灰色
23	青白磁　小壷	a．肩部　c．白色、緻密　d．淡青白色　e．管状の貼付け文

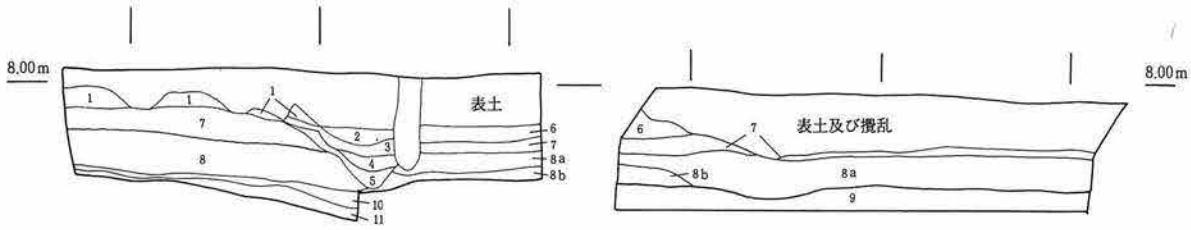
表1　上層遺構出土遺物

第２節　下層遺構（図７・８）

土壙１

Ｂ－５グリットに位置し、西側はＰ－４で削平を受けている。長楕円形を呈し、規模は長径1.36m以上、短径約80cm、深さ25cm程である。覆土は暗茶褐色砂質土、遺物は小片のため実測不可能である。





北壁セクション

1．風成砂　黄白物
2．茶灰色砂層　炭化物　かわらけ粒少量含む
3．茶灰色砂層　炭化物　かわらけ粒やや多し
4．茶褐色砂層　炭化物　かわらけ粒多量
5．茶灰色砂層　黄白色　茶褐色砂層ブロック
6．茶灰色砂層　炭化物　かわらけ粒やや多め　上位に宝永火山灰あり
7．茶褐色砂層　炭化物　かわらけ粒多量に含む　しまりある
8．暗茶灰色砂層　炭化物　かわらけ粒多量　しまりある
9．暗茶灰色砂層　炭化物とかわらけ粒が少ない
10．淡茶灰色砂層　黄白色砂ブロック多く入る
11．炭化物層

図７　下層遺構全図

土壙２

Ａ－４・５グリットに位置し、西側は調査区外に拡がる溝状を呈した南北位の土壙である。規模は南北約2.30㎝、東西約60㎝以上、深さ30㎝である。覆土は暗茶灰色砂質土、出土遺物は図８－14かわらけ小皿、16魚住捏鉢、15山茶碗窯捏鉢である。

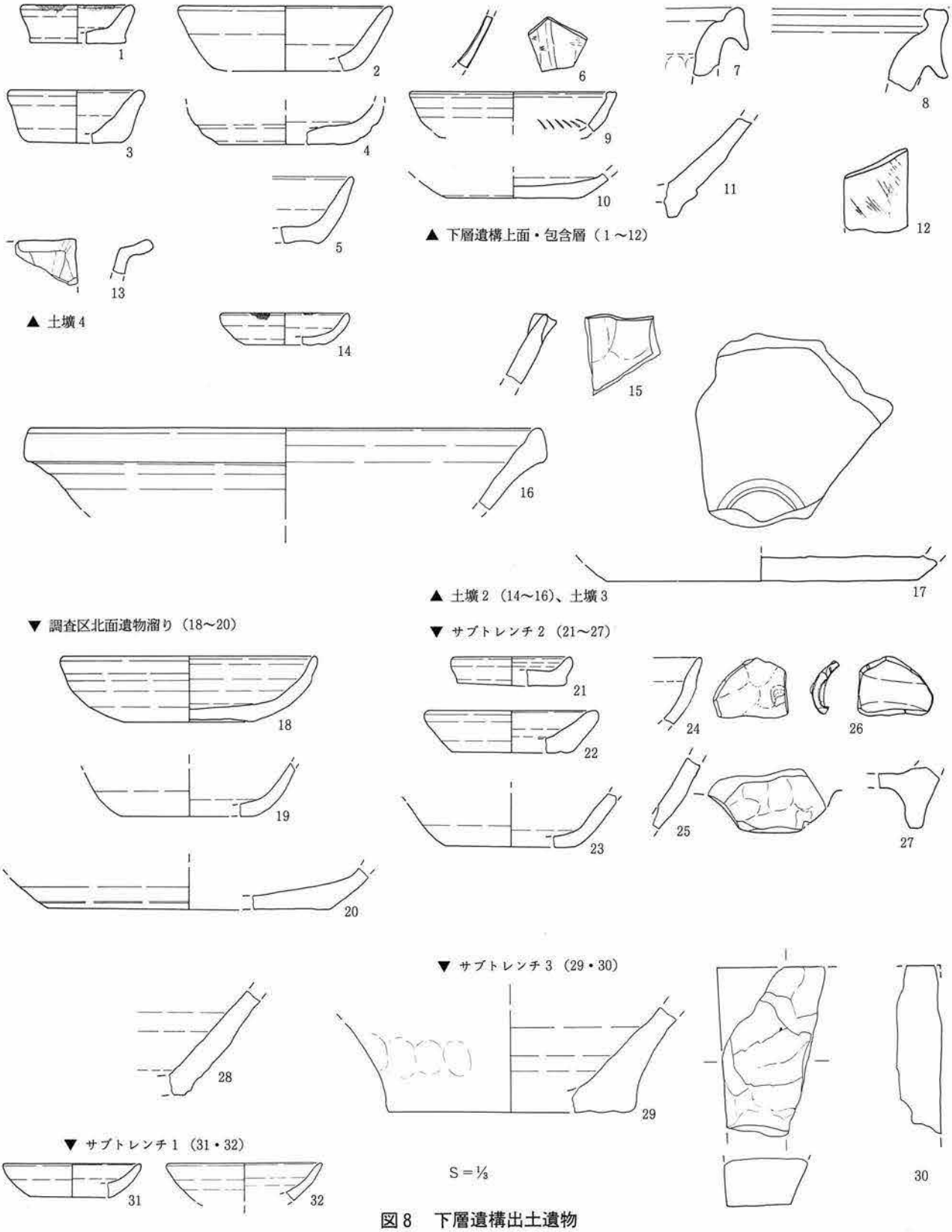


図８　下層遺構出土遺物

土壙３

Ｄ－５・６グリットに位置し、東側は調査区外に拡がる溝状を呈した南北位の土壙である。規模は東西2.50ｍ以上・南北40㎝以上、深さは約25㎝と浅い掘り方である。覆土は暗茶灰色砂質土、出土遺物は図示できたのは17の瀬戸折縁鉢だけである。

土壙４

土壙１の北側に位置した不正円形の土壙である。規模は東西径 1ｍ、南北径80㎝以上、深さ20㎝の浅い皿形を呈する。覆土は土壙１と類似した砂質土である。出土遺物は、ほとんどが小片で13の瀬戸行平鍋が唯一図示できたものである。

その他の遺構としては、ピットと遺物溜りが検出された。また下層遺構の確認面上の海抜ですでに工事の掘削深度に達していたが、下層の様子を把握するために調査区北・東壁の直下にトレンチを設定して確認調査を行った。

ピット

土壙１の周囲にピット４口が検出された。規模は径50～70㎝、深さは確認面から20～30㎝で円形を呈するが、それぞれ建物や柱穴列といった関連性は調査区の範囲では認められなかった。遺物はＰ１から28常滑捏鉢が出土しただけである。

遺物溜り

調査区北西隅付近の面上に常滑片の一部が顔を出していたので、これを確認するためにその周辺を少し掘り下げたところ、狭い範囲ではあったが遺物溜りを検出した。この遺構に伴う遺物には、かわらけ（大小皿６点）・常滑甕胴部片（12点）、瀬戸折縁鉢（１点）、貝類（アカニシ・アワビ・ハマグリ・アサリなど）などがみられた。

トレンチ調査

調査区北・東壁の直下にＡ区がトレンチ１、Ｂ区がトレンチ２・３をそれぞれに設定して、下層遺構面以下の確認を実施した。

トレンチ１は、Ａ区Ａ～Ｃグリットにかけて長さ約３ｍ、幅40㎝の範囲である。８層を除去すると、茶灰色砂層の薄い堆積がみられ、その下は炭化物を多量に含んだ土層となる。この炭化物層は東側に向かって緩やかに落ち込んで行く堆積である。

トレンチ２・３では、トレンチの掘削深度までには炭化物層が認められず、暗茶灰色砂層（９層）の厚い堆積がみられたに過ぎない。また遺構などの落ち込みも確認できなかった。

図8　下層遺構		a．法量・部位　b．成形　c．胎土・素地　d．色調・施釉　e．備考
1	かわらけ	a．口径5.8cm、底径5.0cm、器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡茶灰色 灯明皿
2	かわらけ	a．口径11.1cm、底径7.6cm、器高2.0cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡赤灰色
3	かわらけ	a．口径7.0cm、底径4.3cm、器高2.1cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡茶灰色
4	かわらけ	a．底径7.0cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡赤灰色
5	かわらけ	a．器高3.5cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡赤灰色
6	青磁蓮弁文碗	a．体部　b．ロクロ　c．灰白色、堅緻　d．淡灰緑色半透明　e．外面鎬蓮弁文
7	常滑　甕	a．口縁　b．輪積み　c．明茶灰色、長石・石英・砂粒　d．内面自然釉の降灰
8	常滑　甕	a．口縁　b．輪積み　c．茶灰色、長石・石英・砂粒　d．茶褐色、内外面自然釉の降灰
9	瀬戸　卸皿	a．口径10.8cm　c．黄白色、やや粗　d．外面灰釉の刷毛塗り　e．内低卸目
10	瀬戸　皿	a．底径7.2cm　b．ロクロ　c．灰色、砂粒　d．外内面一部に鉄釉
11	山茶碗窯捏鉢	a．胴部下半　b．輪積み、貼り付け高台　c．灰色、砂・小石粒　e．内面摩耗
12	砥石	a．長さ(4.6cm)、幅3.5cm、厚さ(0.5cm)　d．明赤灰色　e．仕上げ砥
13	瀬戸　行平鍋	a．口縁　c．灰色、堅緻　d．淡緑灰色　e．注口部
14	かわらけ	a．口径6.6cm、底径4.3cm、器高1.7cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡茶灰色 灯明皿
15	山茶碗窯捏鉢	a．口径19.8cm　b．輪積み　c．灰色、砂・小石粒　e．口縁部自然降灰
16	魚住　捏鉢	a．口径27.1cm　b．輪積み　c．灰褐色、砂粒多い
17	瀬戸　折縁皿	a．底径15.1cm　b．ロクロ　c．黄灰色、堅緻　d．内外面灰釉の刷毛塗り　e．内低渦巻文
18	かわらけ	a．口径13.4cm、底径6.8cm、器高3.5cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡茶灰色
19	かわらけ	a．底径7.2cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針・赤色粒　d．茶灰色
20	瀬戸　折縁皿	a．底径15.0cm　b．ロクロ　c．黄灰色、堅緻　d．内外面灰釉の刷毛塗り、外低無釉
21	かわらけ	a．口径6.2cm、底径5.8cm、器高1.5cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．暗茶灰色
22	かわらけ	a．口径8.8cm、底径6.4cm、器高2.2cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針・赤色粒　d．淡茶灰色
23	かわらけ	a．底径7.0cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．淡茶灰色
24	瀬戸天目茶碗	a．口縁　b．ロクロ　c．灰白色　d．黒色鉄釉を厚く施釉
25	瀬戸　折縁皿	a．口縁　b．ロクロ　c．黄灰色　d．内外面灰釉の刷毛塗り
26	瀬戸　行平鍋	a．把手　b．ロクロ　c．灰色　d．灰緑色、灰釉を厚く施釉、貫入多し
27	瓦質手焙り	a．脚部　b．輪積み　c．灰色、砂・小石粒多い粗胎　d．表面灰黒色
28	常滑　捏鉢	a．体部下半　b．輪積み　c．灰黒色、砂・長石・石英粒　d．赤灰色
29	常滑　壺	a．体部下半～底部　b．輪積み、砂目底　c．灰色、砂・長石・石英粒　d．赤味茶灰色
30	硯	a．長さ（9.1cm）、幅（5.7cm）、厚さ（2.5cm）　e．再火で表面はぜる
31	かわらけ	a．口径7.2cm、底径5.0cm、器高2.1cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針　d．暗茶灰色
32	かわらけ	a．口径8.2cm　b．ロクロ　c．微砂・雲母・白針・赤色粒　d．淡赤灰色

表2　下層遺構出土遺物

第4章　まとめ

本地点の若宮大路を挟んだ向側に位置する由比ガ浜二丁目1034番1外地点（若宮ハイツ用地）の調査では、中世前期にあたる鎌倉時代の前半期と後半期～南北朝時代にかけての上・下層に大別される二時期の遺構群が検出されている。上下層遺構群は1mを越す厚い風成砂層で分けられており、この上面で確認された遺構が方形竪穴 190軒以上、土壙 230基、墓址40基、井戸21基などである。

中世層最下部にあたる下層遺構では、掘立柱建物、柵状遺構、墓址などが検出されている。この中で小規模な掘立柱建物を挟んで湾曲した広場を取り囲む何時期の柵状遺構を発見したが、これは文献史料に良く出てくる「犬追物」などを行った「馬場」的なものと、建物は簡易で見物用の「桟敷」といったこの時期の浜の風景を想起することも可能であろう。

ところで本地点の発掘調査では、土壙・溝状土壙・柱穴・遺物溜りなどの遺構を検出した。中世以降に堆積した風成砂層中に宝永火山灰の薄い堆積が確認され、上層遺構はこの層の下から確認できたものである。下層遺構は調査区西側だけで確認され、東側はこの層が若宮大路に向かって落ち込んで行くために工事の掘削深度に達していたので一部壁際にサブトレンチを設定し、それ以下の確認を行ったがそれに類する堆積層や遺構などは検出されていない。上・下遺構からは、あまり良好な遺物は出土していないが、概ね15世紀～16世紀頃であろう。

＜参考文献＞

鈴木　尚・三上次男他　1956　「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店

大河内　勉　1988　「神奈川県鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『日本考古学協会　39（1986年度版）』日本考古学協会

1990　「由比ガ浜中世集団墓地遺跡－由比ガ浜二丁目1015番29外地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7－平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

馬渕和雄　1991　「都市の周縁、または周縁の都市－いわゆる方形竪穴建築址による中世都市論の試み－」『青山考古　第9号』青山考古学会

田代郁夫　1992　「鎌倉のやぐら－中世葬送・墓制史上に於ける位置付け－」『第3回　考古学と中世史研究シンポジウム　村の墓・都市の墓－中世考古学及び隣接諸学から－資料集帝京大学山梨文化財研究所

佐藤仁彦・原　廣志他　1993　「由比ガ浜中世集団墓地遺跡－由比ガ浜二丁目1034番1外地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9－平成4年度発掘調査報告（第1分冊）－』鎌倉市教育委員会

原　廣志　1993　「神奈川県鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『日本考古学協会　44（1991年度版）』日本考古学協会

写　真　図　版

▲a．若宮大路から一ノ鳥居を望む

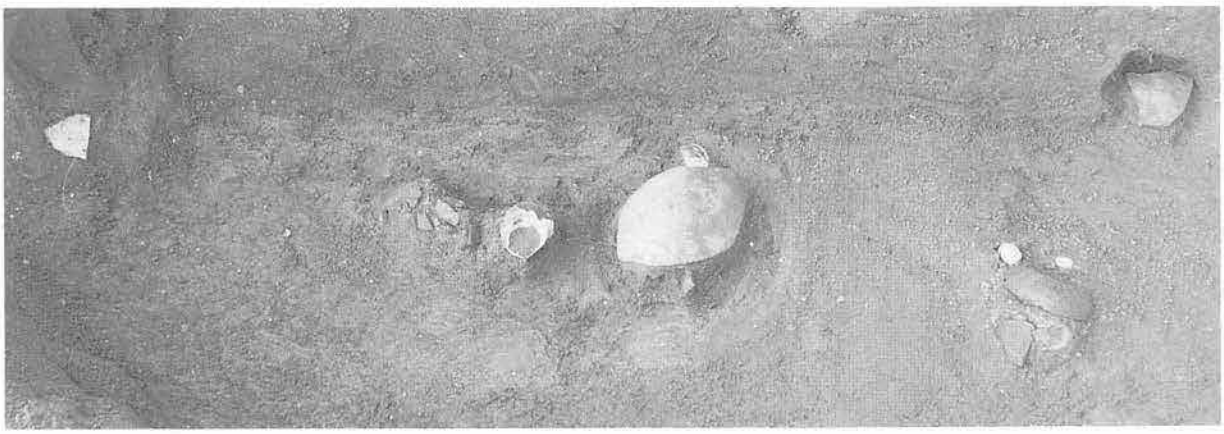
▲b．調査地点近景（若宮大路側から）

図版 2

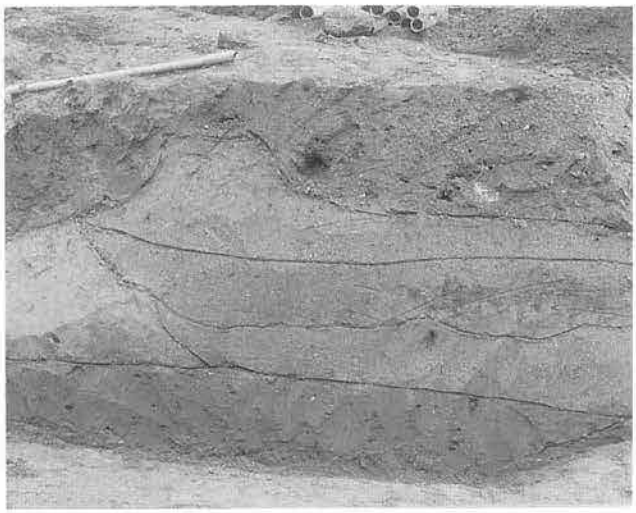
▲a．上層遺構西側（北から）

▲b．上層遺構東側（北から）

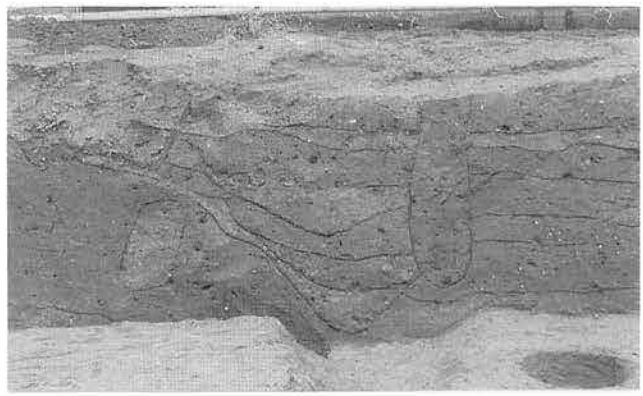
◀a. 下層遺構（西から）



◀b. 遺物溜り



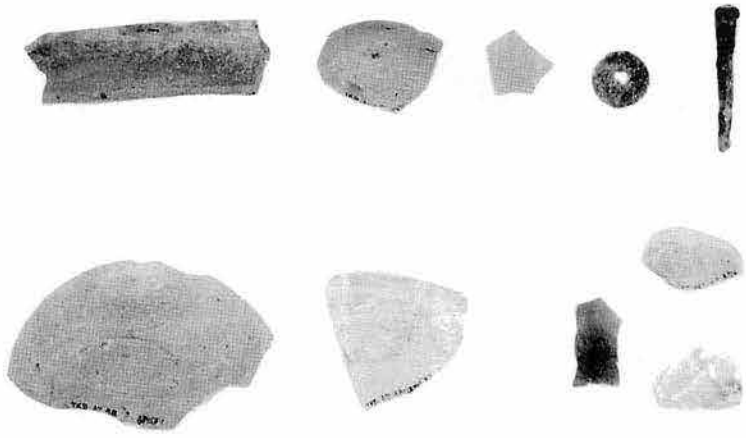
▲d. 調査区西側壁土層堆積



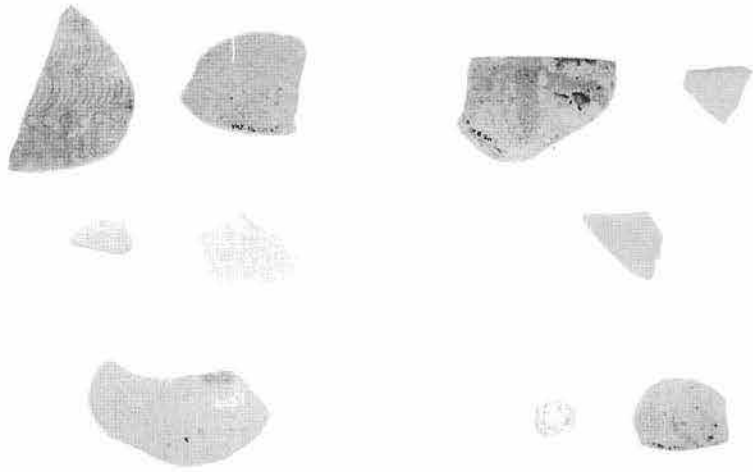
▲c. 北壁土層堆積

図版 4

▶ a. 上層遺構出土遺物



▶ b. 下層遺構出土遺物



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
由比ガ浜中世集団墓地遺跡（ゆいがはまちゅうせいしゅうだんぼちいせき）	神奈川県鎌倉市由比ガ浜二丁目1203番20地点	204	372	35°18′33″	139°33′02″	19981126～19981211	111.58㎡	自己用診療所併用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
由比ガ浜中世集団墓地遺跡	都市	中世	土壙	かわらけ・常滑窯製品・瀬戸窯製品・舶載磁器・土製品・骨角製品	

名越ヶ谷（なごえがやつ）遺跡（No.231）

大町四丁目1888番地点

例　　言

1．本報文は神奈川県遺跡台帳（№231）名越ヶ谷遺跡内・鎌倉市大町四丁目1888番地点に於ける個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．調査は平成10年12月10日から平成11年３月10日まで行われた。発掘調査対象面積は77.01㎡である。
3．出土遺物等発掘調査に関する諸資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
4．本報文に関わる整理作業は、調査員・調査補助員が分担して行なった。執筆は第４章第１節の自然科学分析を㈱パレオ・ラボ 鈴木茂氏に委託、他を以下の通り分担し稿末に執筆者名を明記した。但し、舶載陶磁器類は手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）に、瀬戸窯製品は佐野元氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）にご教示・ご指導を賜り、石製品については全て汐見一夫が執筆した。第４章第２節・第３節は執筆者討議の上、汐見が文責を負った。
　第１章 ～ 第３章 第２節･第４節　汐見
　第３章 第３節　野本賢二・田畑衣理・山上玉恵・渡辺美佐子
　編集は、整理作業参加者協力の下汐見が行った。
5．本報文に使用した遺構写真は汐見・野本が、遺物は山上が撮影した。
6．本報文での、挿図中の縮尺及び使用した記号は基本的に以下の通り。
　遺構面全測図・・・1/80　遺構個別図・・・ 1/60
　遺物実測図・・・1/6、1/3、1/2（＝常滑窯甕押印文拓影）、1/1（＝銅銭拓影）
　挿図中の水糸レヴェルは海抜高を示し、スクリーントーン等は必要に応じてその都度注釈を加えた。
　遺物実測図中の、♀←→♀は使用痕の範囲、♀←　→♀は加工工具痕、♀←・→♀は二次加工痕を、－・－・－は施釉の限界を示す。
7．現地調査から本報作成過程に於いて、次の各氏・機関から御指導・御教示・御協力を賜った。
　㈱パレオ・ラボ　㈳鎌倉市シルバー人材センター　市内遺跡各発掘調査団　東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所　住友林業　露木建設　関野明嗣　妙法寺
8．調査及び整理作業の体制は以下の通り。
　担　　当　小林 康幸
　調 査 員　汐見 一夫　野本 賢二　山上 玉恵
　調査補助員　小柳津 シゲ子　田畑 衣理　渡邊 美佐子
　調査参加者　河原龍雄　荻野勲　藤枝正義　町田義一　菊入芳夫

目　　次

第１章　環境と立地 ……237
　第１節　地理的・歴史的環境 ……237
　第２節　調査地点の立地 ……239
第２章　調査の概要 ……240
　第１節　調査の経緯と経過 ……240
　第２節　国土座標上の位置とグリッド配置 ……241
　第３節　堆積土層 ……241
第３章　遺構と遺物 ……242
　第１節　Ⅰ期の遺構と遺物 ……242
　第２節　Ⅱ期の遺構と遺物 ……245
　第３節　Ⅲ期の遺構と遺物 ……253
　第４節　出土遺物一覧 ……263
第４章　調査成果 ……274
　第１節　自然科学分析 ……274
　第２節　遺構と遺物の変遷 ……283
　第３節　調査地点の性格 ……285

挿　図　目　次

図１　名越ヶ谷遺跡範囲と調査地点 ……237
図２　調査地点周辺図 ……238
図３　国土座標上の位置とグリッド配置 ……240
図４　堆積土層 ……241
図５　Ⅰ期下層全測図 ……242
図６　Ⅰ期上層全測図 ……243
図７　Ⅰ期上層溝５・６・７ ……244
図８　Ⅰ期出土遺物 ……244
図９　Ⅱ期下層全測図（１）……245
図10　Ⅱ期下層出土遺物 ……246
図11　Ⅱ期下層全測図（２）……247
図12　Ⅱ期中層出土遺物（１）……248
図13　Ⅱ期中層出土遺物（２）……248
図14　Ⅱ期上層全測図 ……249
図15　Ⅱ期上層遺構内出土遺物 ……251
図16　Ⅱ期上層遺構外出土遺物 ……252
図17　Ⅲ期下層全測図 ……253
図18　Ⅲ期下層出土遺物 ……254
図19　Ⅲ期下層遺構内出土遺物 ……255
図20　Ⅲ期中層出土遺物 ……257
図21　Ⅲ期上層全測図 ……258
図22　Ⅲ期上層遺構内出土遺物 ……259
図23　Ⅲ期上層遺構外出土遺物 ……260
図24　Ⅲ期最上層全測図 ……260
図25　Ⅲ期最上層他遺構外出土遺物 ……261
図26　出土銅銭拓影（１）……263
図27　出土銅銭拓影（２）……264
図28　出土銅銭拓影（３）……265
図29　出土常滑窯甕押印文拓影（１）……266
図30　出土常滑窯甕押印文拓影（２）……267
図31　試料採取地点位置図 ……274
図32　調査区南壁断面図 ……274
図33　試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準 ……275
図34　地点１の主要花粉化石分布図 ……278
図35　地点２の花粉化石分布図 ……279
図36　地点３の花粉化石分布図 ……279
図37　堆積物中の珪藻化石分布図 ……281
図38　出土遺物の様相 ……283

表　目　次

表1　出土銅銭一覧（1）……263
表2　出土銅銭一覧（2）……264
表3　出土銅銭一覧（3）……265
表4　出土常滑窯甕押印文拓影一覧（1）……266
表5　出土常滑窯甕押印文拓影一覧（2）……267
表6　遺物計測表（1）……268
表7　遺物計測表（2）……269
表8　遺物計測表（3）……270
表9　遺物計測表（4）……271
表10　遺物計測表（5）……272
表11　出土遺物破片数表 ……273
表12　産出花粉化石一覧表 ……277

写真図版目次

図版1　1．Ⅰ期上層及び下層落込み（Ⅱ区・南から）
2．同・下層落込み土層断面（Ⅱ区・南から）
3．同・上層（Ⅰ区・東から）
4．同・上層溝6・7（Ⅰ区・西から）
図版2　1．Ⅱ期下層（1）（Ⅱ区・東から）
2．同・下層（1）土壙31（Ⅰ区・南から）
3．同・下層（2）（Ⅱ区・西から）
4．同・下層（2）（Ⅰ区・西から）
5．同・下層（2）土丹地業（Ⅰ区・南から）
6．同・下層（2）遺構（Ⅰ区・南から）
7．同・下層（2）土壙28（Ⅰ区・南から）
図版3　1．Ⅱ期上層（Ⅰ区・西から）
2．同・上層東端土丹地業（Ⅰ区・南から）
3．同・上層土壙24内遺物（Ⅰ区・西から）
4．同・上層（Ⅱ区・西から）
5．同・上層北側土丹地業（Ⅱ区・西から）
6．同・上層 Pit.361内遺物（Ⅱ区・北から）
図版4　1．Ⅲ期下層（Ⅱ区・西から）
2．同・下層（Ⅰ区・西から）
3．同・上層（Ⅱ区・東から）
4．同・上層（Ⅰ区・東から）
5．同・上層西端土丹地業（Ⅱ区・北から）
6．同・上層東端土丹地業（Ⅰ区・北から）
7．同・最上層（Ⅰ区・東から）
図版5　1．調査区南壁土層断面（Ⅰ区・北から）
2．調査区南壁土層断面（Ⅱ区・北から）
3．調査区中央壁土層断面（東から）
図版6　出土遺物（1）
図版7　出土遺物（2）
図版8　出土遺物（3）
図版9　名越ヶ谷遺跡の花粉化石
図版10　名越ヶ谷遺跡の花粉化石

第１章　環境と立地

第１節　地理的・歴史的環境

名越ヶ谷遺跡は鎌倉市域の南東部、名越切通しへと向う大町大路の北側一帯で、衣張山の西山裾平地部分ほぼ全域の広い範囲に付されている。大小の支谷と平地が複雑に入り組んだ地形で、遺跡地北側の釈迦堂口切通しを経て六浦道に至り、東側の名越切通しを抜ければ三浦郡へと通じる。小谷戸内の流水集めて遺跡内に源を発する逆川は、ほぼ中央を南下し大町大路の南辺りで西へと流れを変え、『吾妻鏡』建長３年（1251）12月３日条や文永２年（1265）３月５日条にみられる「米町（殻町）」「魚町」辺りの商業地を経て滑川へと合流する。名越の地名は鎌倉時代頃からあり『吾妻鏡』にも散見される。当時は現遺跡範囲地よりも南方、光明寺辺りまでをも含めた広い範囲を総称していた様だが、何れにせよこの地は鎌倉幕府の交通と防御の要所に在る。平地には早くから幕府要職が居を構え、名越文庫が在ったと伝える三善善信邸、釈迦堂口付近に北条時政の名越亭、新羅三郎の館の地にその子孫が住んだと伝える佐竹屋敷はこの域内であるとされる。山際の谷戸内には山王ヶ谷に名越山王堂、花ヶ谷に慈恩寺（臨済宗）・木束寺（臨済宗）等の廃寺が、現存する所では佐竹屋敷跡に大宝寺（日蓮宗）、松葉ヶ谷に妙法寺

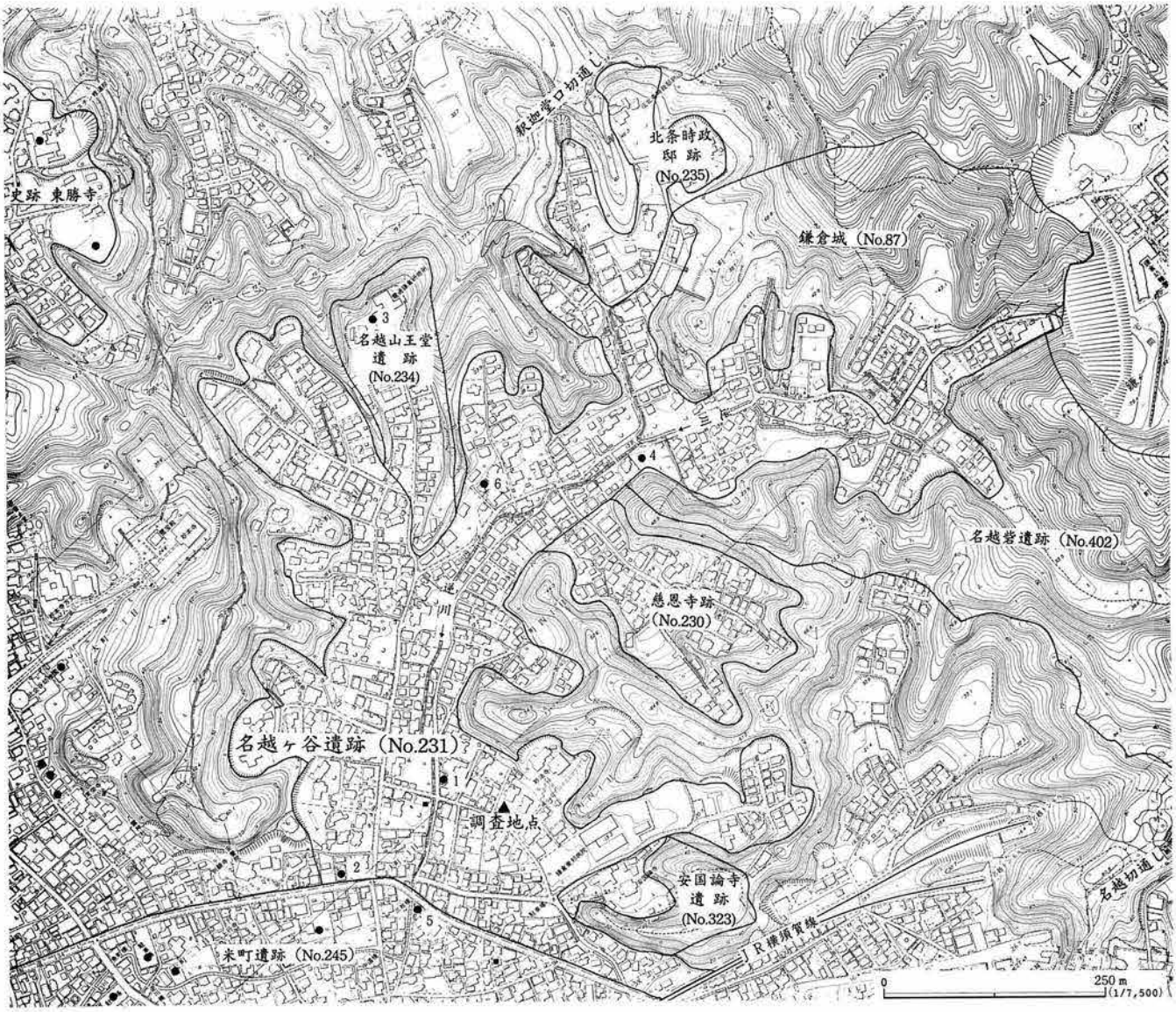


図１　名越ヶ谷遺跡範囲と調査地点

（日蓮宗）がある。上記の如く遺跡地には、防御の意味も含め要所には屋敷が構えられ、前後して名越切通しに向う道路が通り商業地が成立し、中世鎌倉の中では比較的早くに開発された地域であると考えられる。鎌倉期には幾度か火災に見舞われたり、和田の乱等の戦渦に巻込まれもしているが、その後の屋敷の主や建立された寺院を観ると罹災以降も立直り、多少の衰微は有ろうが室町期に至るまで人馬・物資が頻繁に往来したであろう事は想像に難くはない。

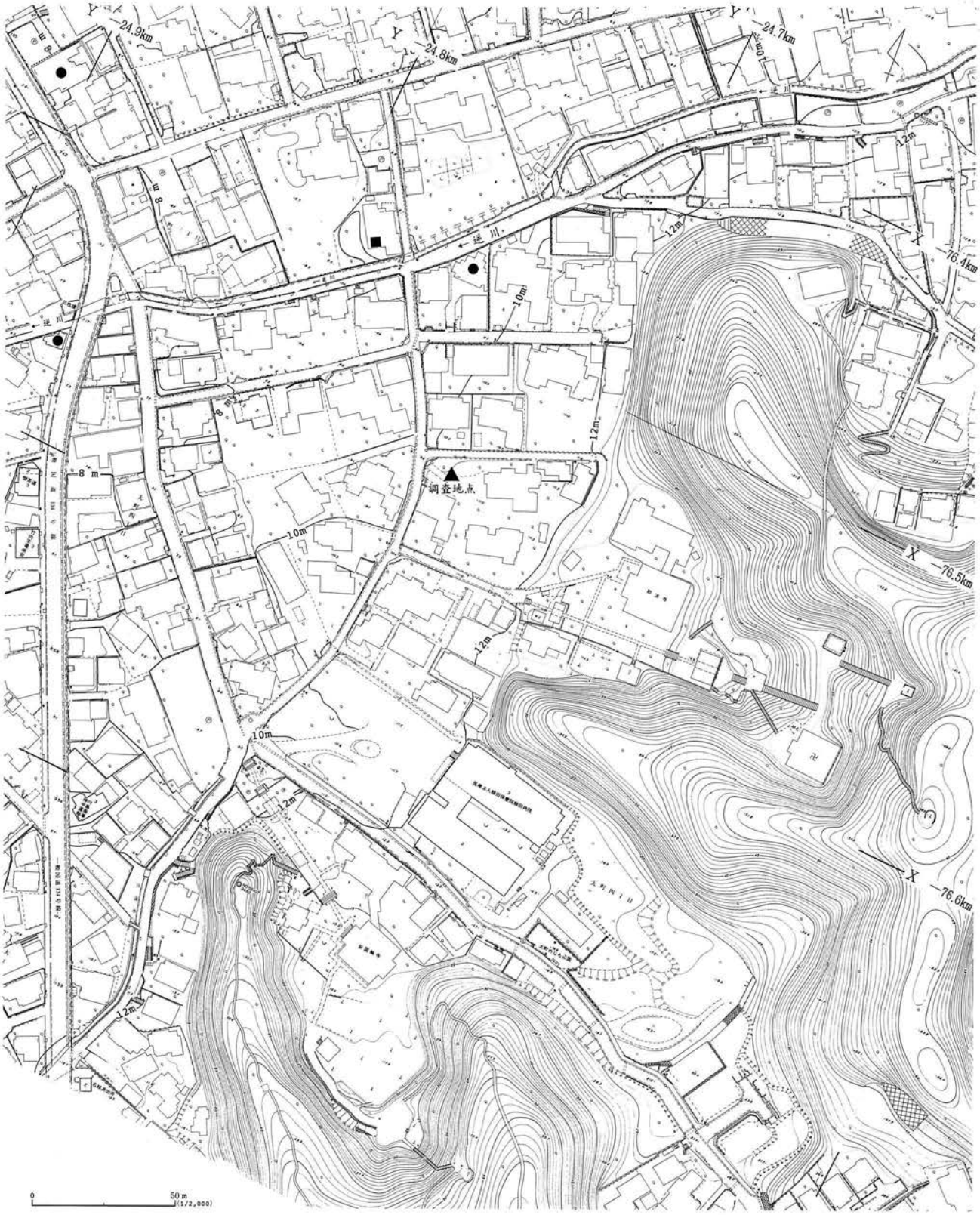


図2　調査地点周辺図

第2節　調査地点の立地

名越ヶ谷遺跡の南東寄りには、標高約60m程の東・北・西に小谷戸が開口する丘陵がある。東向きの谷戸には花ヶ谷慈恩寺(廃寺)、北向きの谷戸は、『としよりのはなし』に「名越の花ヶ谷の手前東側で、山の裾が川っぷちまでのびているところに(中略)ちっちゃい寺があった」とあるのが木束寺(廃寺)であろう、西向きの谷戸には楞厳山妙法寺が在る。

妙法寺は、『新編相模国風土記稿』に依れば開山日蓮とする本国寺が京都に転じたため、護良親王の遺子日叡が正平12〈延文2〉年(1357)同地に伽藍を再興したと伝えるが、本国寺については異説もある。山号・寺名は、日叡の幼名「楞厳丸」と房号「妙法房」から現在のように称すると伝え、開山を日蓮、中興開山を日叡と仰ぎ、寺地は文応元年(1260)7月に焼打に見舞われた日蓮の松葉ヶ谷御小庵の跡とされている。盛時には、山門の他四足門・仁王門・鐘楼、塔頭には永徳2年(1382)日叡開基の重善院、応永16年(1409)日厳開基の円蔵院をはじめ10院程在ったという。現在の本堂・祖師堂は肥後細川氏の建立で、作者・造像期の明らかな江戸後期の木像が多いことや、「鎌倉の苔寺」としても高名である。

調査地点はこの妙法寺の本堂から東へ100mとは離れず、現況の海抜は約11mである。逆川まで最短70m程で川縁までの高低差は約1.5m、川底は海抜7.2m程。周囲の地形に目を向けると、調査地北東一帯の住宅裏には岩盤が剥き出しになっており、近世以降にある程度開削されている様に観える。木束寺との境を為す尾根がどの程度「川っぷちまでのびて」いたかは分らないが、調査地は妙法寺寺容が占地する小谷戸の開口部北縁或は門前に位置すると考えられる。

名越ヶ谷遺跡内での調査成果を、一定の調査面積と出土遺物を得た地点2・4から観ると、生活面の確保や通路等地業を山裾を開削した土砂(土丹)に依って行い、遺構群の主体は概ね13世紀中頃～14世紀中頃である。遺構配置から観た居住者は地点4では武家屋敷或は寺院、地点2では屋敷地の裏手と想定され、敷地利用は両地点共に細かな生活面の更新はあるもののほぼ前時代のものを踏襲している。但し、地点4では武家屋敷或は寺院以前に庶民居住区であった時期が、地点2では15世紀代に大幅な区画変更がありそれが現代にまで踏襲されている。出土遺物は、それぞれ各面の時期に拠り特徴的な出土状況もあるが、全体的にはかわらけが多く舶載陶磁器類や国内産陶土器類が各地点や遺構面の性格に対応して出土し、鎌倉市街地遺跡の状況と大差はない。かわらけの年代観で観ると、調査深度にも拠るが13世紀初頭まで遡る遺物は出土していない。

【地点名・引用参考文献】

地点1　田代郁夫　「1.名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1880番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11　平成6年度発掘調査報告（第1分冊）』　平成7年3月　鎌倉市教育委員会

地点2　菊川英政　「4.名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11　平成6年度発掘調査報告（第1分冊）』　平成7年3月　鎌倉市教育委員会

地点3　斎木秀雄　『名越・山王堂跡発掘調査報告書』　1990　山王堂跡発掘調査団

地点4　宗臺秀明他　「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1736番2外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14　平成9年度発掘調査報告（第1分冊）』　平成10年3月　鎌倉市教育委員会

地点5　福田　誠　「1.米町遺跡（No.245）大町二丁目2411番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5　昭和63年度発掘調査報告』　平成元年3月　鎌倉市教育委員会

地点6　玉林美男 他　「3.名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目1367番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2　昭和58年度発掘調査報告』　昭和59年3月　鎌倉市教育委員会

貫達人・川副武胤　『鎌倉廃寺事典』　1980　有隣堂刊

『鎌倉市史 一社寺編一 』

鎌倉市教育委員会編　『としよりのはなし』　鎌倉市文化財資料第7集　1971

白井永二編　『鎌倉事典』　1992　東京堂出版

第２章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

経緯：調査は個人専用住宅の事前相談を受け確認調査を実施したところ、現地表下70㎝以下に複数次の中世期遺構面と多くの遺物が確認された為、関係者協議の上建設に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査に伴う残土は敷地内にて処理する事とし、土量を鑑み設定された対象域を東西に二分して調査し、残土の移動及び表土掘削は施工業者の協力を得た。調査区は東側をⅠ区、西側をⅡ区とした。施主・施工業者との事前打ち合せを経て、平成10年12月10日から諸器材搬入と並行して表土掘削を行い調査開始とした。

経過：試掘調査の結果を基にⅠ区の表土を重機に依り除去し、海抜10ｍ前後を調査１面として以下を手掘りにて掘下げと遺構検出を行い、各遺構面毎に記録保存を行った。途中３面終了時点で現地表からの深さが1.5ｍを超えた為、安全を考慮し調査区壁際から50㎝強幅の犬走り状の段差を設けて掘下げた。以下海抜8.7ｍ前後の砂層上面を最終遺構面とし、自然科学分析のサンプル採取後の２月５日にⅠ区を終了した。日を置かず残土の移動と併せてⅡ区の表土を重機に依り除去し調査に入った。Ⅱ区掘下げの際には安全を考慮しⅠ・Ⅱ区間の１ｍ程をベルト状に掘残す事とした。Ⅰ区と同様３面終了時点で段差を設け、掘下げと遺構検出、記録保存を行った。途中自然科学分析を経て、３月４日に最終遺構面を完掘し、必要な記録保存を行い現地作業を終了、翌５日には関係各方面に連絡の上器材と出土遺物を撤収し調査終了とした。

結果の概要：Ⅰ区・Ⅱ区を整合した結果で、計９時期に亘る遺構面・層位を調査し、出土遺物は破片数で13,232点、テンバコ目一杯に詰めて23箱を数える。発見した遺構は土丹地業とPit.455口が中心で、出土遺物から観た遺構の年代は13世紀初頭～14世紀末に亘りほぼ連続して営まれている。自然科学分析では、花粉化石から観た古植生だけではなく、採取した木材片からの年輪年代の同定、堆積土の分析から寄生虫他の観察も試みられた。

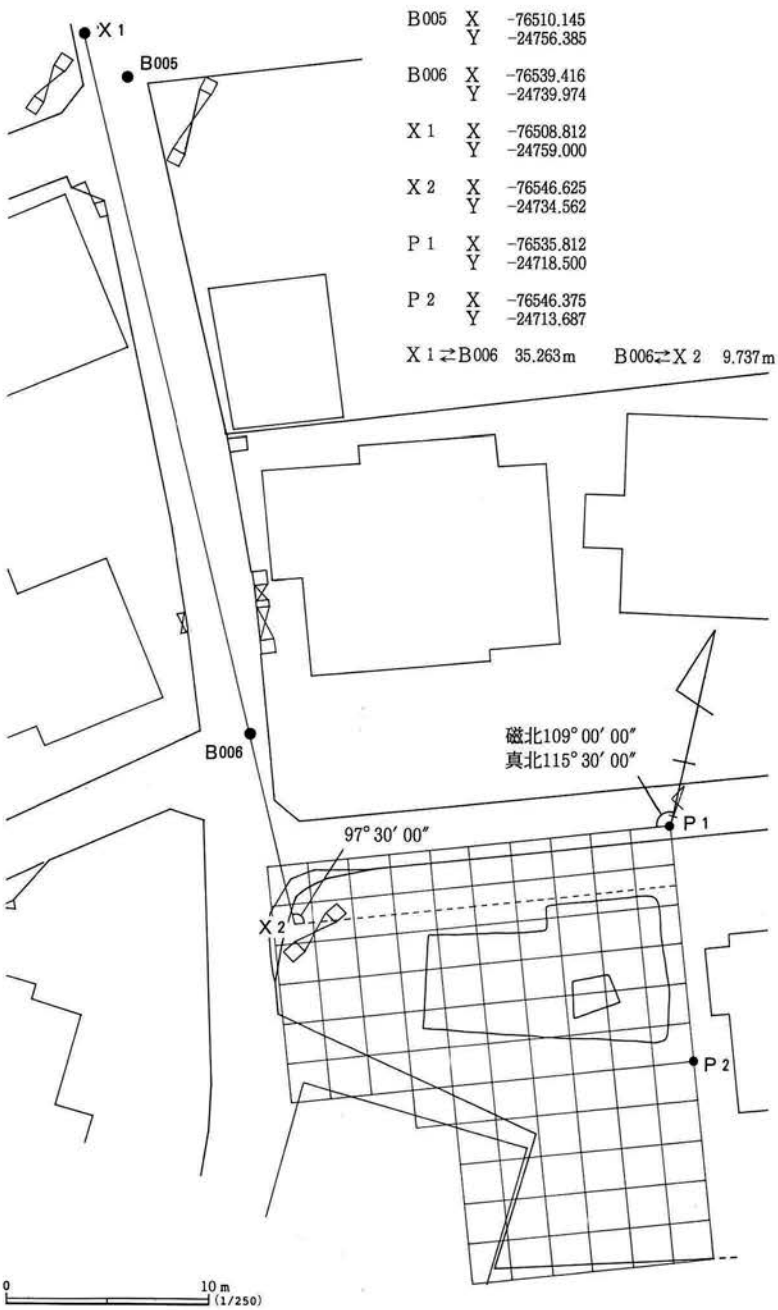


図３　国土座標上の位置とグリッド線

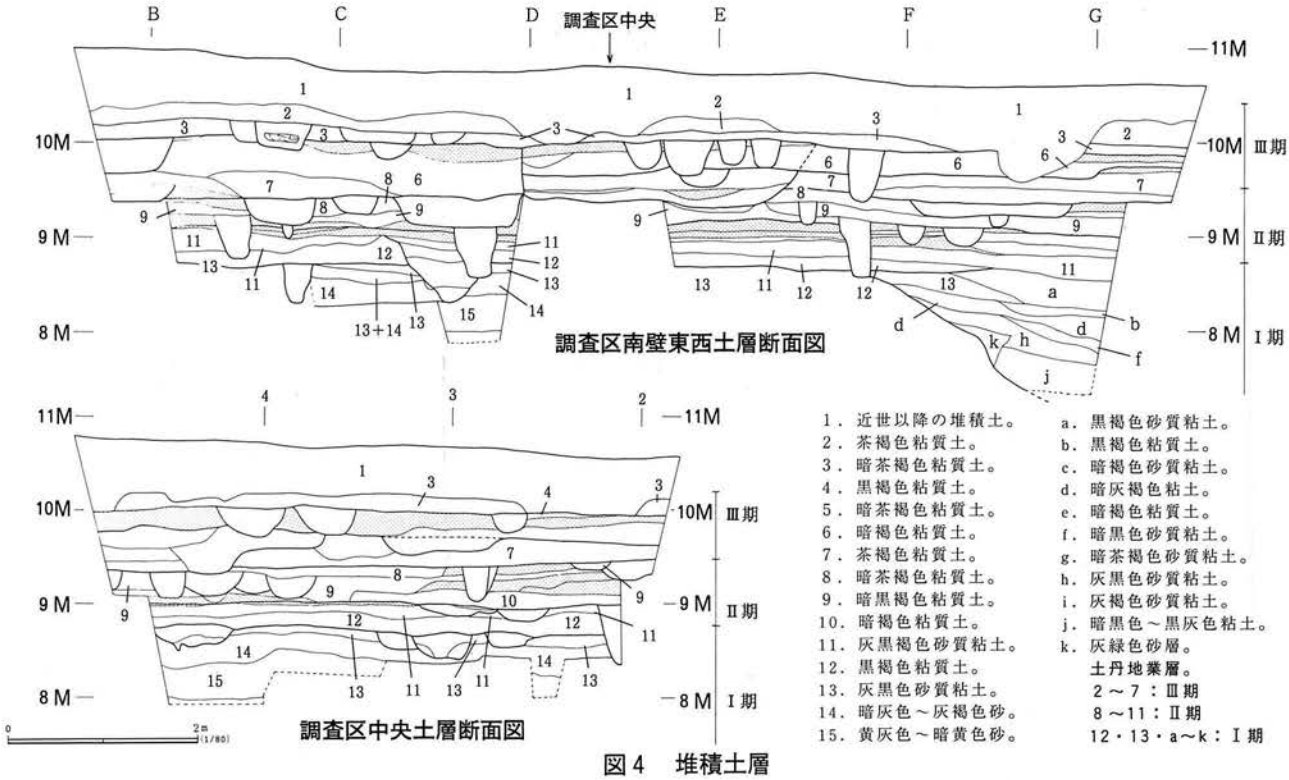
第2節　国土座標上の位置とグリッド配置

調査に際して、調査区を含む現況の敷地境界を網羅する方眼を設定した。光波測定器を用いて障害物無く敷地内と4級基準点B005・B006を見通せる点X1を設定し、X1とB006の延長線上45mのX2から調査区形状に合わせて方眼を組み図3に示した。国土座標値X・Yは、整理作業の際に国土地理院発行1/2,500の地図上から机上計算に拠り算出した数値である。方眼交点には北東端P1を起点に東西方向をアルファベット、南北方向は算用数字を付した。各グリッド名称は北東角を用い、P1がA－0、P2がA－6となる。遺構実測の際には、基本的に光波測定器を設定したグリッド交点に据えて行った。

第3節　堆積土層

図4はⅠ・Ⅱ区を通した調査区南壁と、Ⅰ・Ⅱ区間でベルト上に残した中央壁の土層断面図である。調査時には上層から順に3層上面を1面、6層上の土丹地業面を2面、8層～10層を土丹地業面を含み3面、11層上の土丹地業面を4面、13層上面を5面とし、3・4面に関しては土丹地業の部分的な更新に依る細かい時期差をも捉えたが、本報文では土層注記末に記した様に下層からⅠ～Ⅲ期とした。

堆積土の内、遺構面構成土は概ね平坦・水平に堆積する。下層から概観すると、14・15層は無遺物で浜地に観られる海成或は風成の砂層と同質で自然堆積層であろう。13層は粘性を帯び若干土壌化するが、調査区内では無遺物である。この13層からの落込みに堆積しているのがa～ｊ層である。11・12層中には中世遺物を少量乍含み、13層上及び落込みに蓋をする様に堆積しⅡ期を構成する土丹地業が貼られる。Ⅱ期は土砂の搬入と土丹地業面の構成を繰返し、部分的な貼り増しを含めて薄く嵩上げしながら遺構面を更新する。各層何れも土丹粒子・土器粒・炭化物を多量に混交し出土遺物は多い。このⅡ期廃棄後に6層・7層の大量の土砂で更新した以降をⅢ期としている。Ⅲ期各層の中の出土遺物は、特に6・7層中はどちらかというと小破片が多い。Ⅲ期の最上層とした調査時の1面は、Ⅱ区では近世以降の攪乱層や後世の削平が広範囲に及んでいる事もあり、平面的には捉えられなかった。表土掘削の際や1面までの検出過程で15世紀代の遺物が一定量出土しているのは、殆どが2層中に帰属するものと考えている。



1．近世以降の堆積土。
2．茶褐色粘質土。
3．暗茶褐色粘質土。
4．黒褐色粘質土。
5．暗茶褐色粘質土。
6．暗褐色粘質土。
7．茶褐色粘質土。
8．暗茶褐色粘質土。
9．暗黒褐色粘質土。
10．暗褐色粘質土。
11．灰黒褐色砂質粘土。
12．黒褐色粘質土。
13．灰黒色砂質粘土。
14．暗灰色～灰褐色砂。
15．黄灰色～暗黄色砂。

a．黒褐色砂質粘土。
b．黒褐色粘質土。
c．暗褐色砂質粘土。
d．暗灰褐色粘土。
e．暗褐色粘質土。
f．暗黒色砂質粘土。
g．暗茶褐色砂質粘土。
h．灰黒色砂質粘土。
i．灰褐色砂質粘土。
j．暗黒色～黒灰色粘土。
k．灰緑色砂層。

土丹地業層。
2～7：Ⅲ期
8～11：Ⅱ期
12・13・a～k：Ⅰ期

図4　堆積土層

第３章　遺構と遺物

本章では発見した遺構と出土した遺物について、調査時とは逆順に下層から述べる。これは本調査の地業の様相が、前時代・時期の影響を受けていたり遺構配置が踏襲されている為、層位的に採り上げた出土遺物と共にその変遷を理解し易いからである。前第４節で触れた様に、発見した遺構と出土遺物の様相から大きくⅠ～Ⅲ期に分け、調査時に付した各面をその中で下層～上層として整合させている。

遺構番号は調査時に付したものをそのまま使用し、Pit.の配置等を検討し整理作業時に見出した建物は新たに番号を付した。遺構平面図は各期の全測図と必要に応じて各遺構個別図や横断面図を添え、基準高は海抜数値で表した。文中の層位名は、断りが無い限り前章図４の土層番号を使用する。出土遺物は各期・層位毎に纏め、同層位から出土したものは遺物種別に版組みした。但し、銅銭については本章第４節図26～28に原寸にて纏めて図示し、表１～３を付し出土層位・遺構等を記してある。又、各遺物の法量・寸法等、及び出土全破片数は本章第４節の表６～10に纏めて記載した。

以下、最下層Ⅰ期の遺構と遺物から順に述べていく。

第１節　Ⅰ期の遺構と遺物

Ⅰ期下層（図５）

本地点に於ける初現的な状況であろう。自然堆積と思われる13層は、Ⅰ区では上面平坦とは言い難いもののほぼ8.6mで水平に堆積し、Ⅱ区では西に向って緩傾斜しやがて急に落込む。図５の平面図にはⅡ区の等高線を、又、落込み部分の堆積土層を図示した。

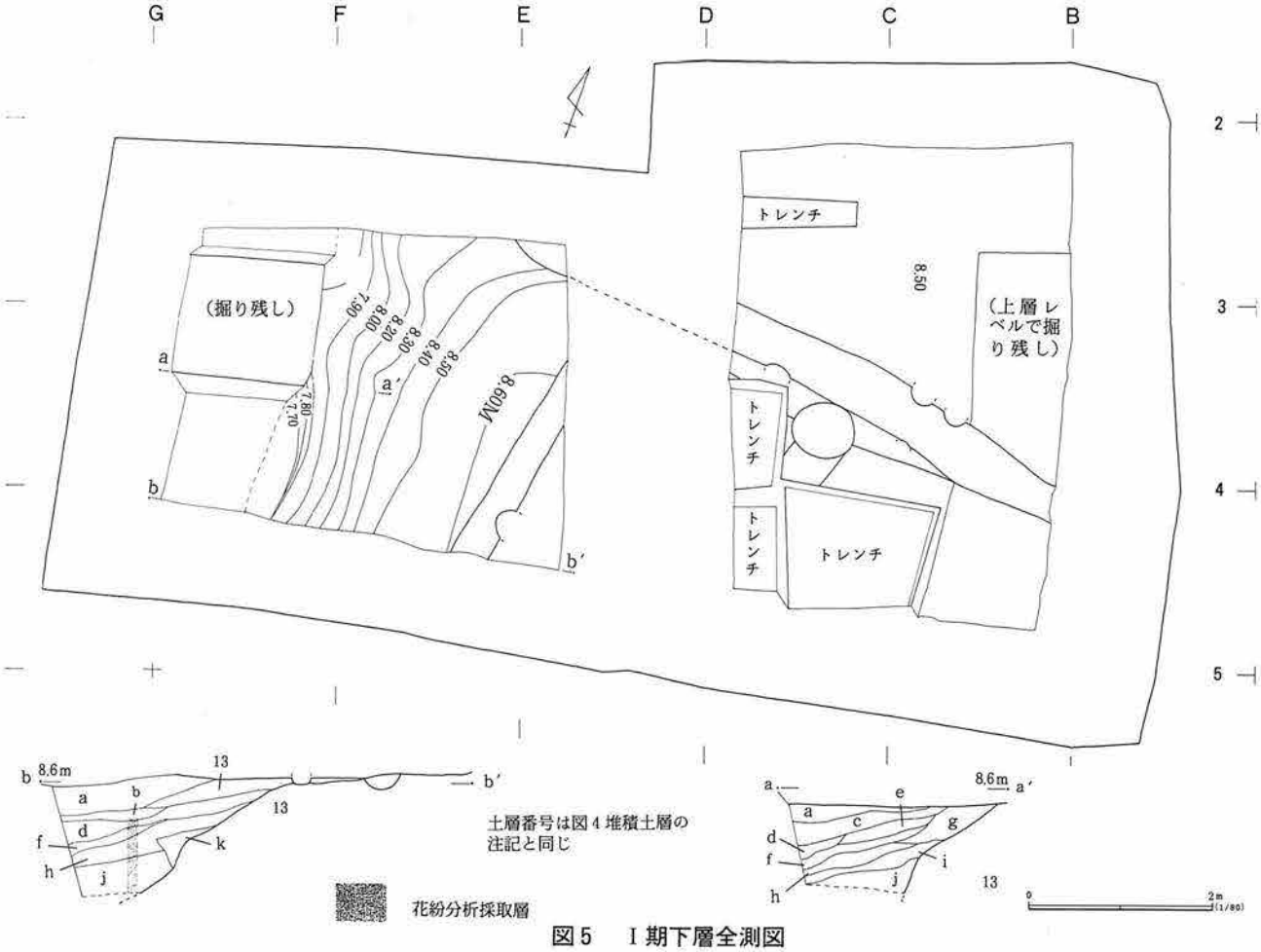


図５　Ⅰ期下層全測図

この落込み部分は調査し得た限りでは深さ1.3m以上、上幅2.5m以上を測り、磁北にほぼ並行して帯状に南北に走行すると観られる。遺物は最上層からほんの数点出土したに過ぎず、土層の観察からも人為的な埋没とは思われない。j・k層は13層の崩れと観られ、落込み底部の湧水（流水）に因り壁下部が抉られて上部が崩落しながら徐々に埋没していったと考えられよう。調査区南壁で柱状に採取された自然科学分析の結果からは、植物遺体が多く認められ湿地性の堆積ではあるが「穏やかではない環境」と指摘されている。又、j層中から採取された樹皮の残る木片の年輪年代は、11世紀前葉～12世紀中葉の年代とされており、最上層から出土した遺物の年代観と矛盾するものではなく、この落込みが埋没していく年代を考える上で興味深い。

遺物は、落込み部分では概ねf層以下は自然遺物と見なせる木片が採取されたのみで、I区では13層以下を部分的なトレンチを設定して掘下げたが何も出土しなかった。

I期上層（図6）

現地表面下約2.2m、海抜8.7m前後に堆積する砂層上の遺構群である。発見した遺構は、重複を含め溝4条、上層の掘残しの可能性がある土壙数基の他、不規則な配置のPit.群、砂層に打込まれた杭が痕跡を含めて8ヶ所である。

溝

4条発見したが、溝7は溝6の近接した時期の掘り直しと考えられる。磁北より若干東・南に振れて南北・東西に走行、則ち下層の落込みとほぼ直行・並行関係と観られる。各溝相互の新旧関係は不明であるが、溝4・5と溝6若しくは7は同時期に在った可能性が高い。部分的な個別図を図7に示した。

各溝は上幅40～60cm、深さ20～30cmを測り、底面はやや凸凹で溝7は僅かに西に向って緩傾斜する。中間壁土層断面から観ると、当初は打込んだ杭で側板を支える構造だった可能性がある。覆土は上層の12層と同質でやや砂質分を含む黒褐色粘質土。遺物は殆ど出土していない。

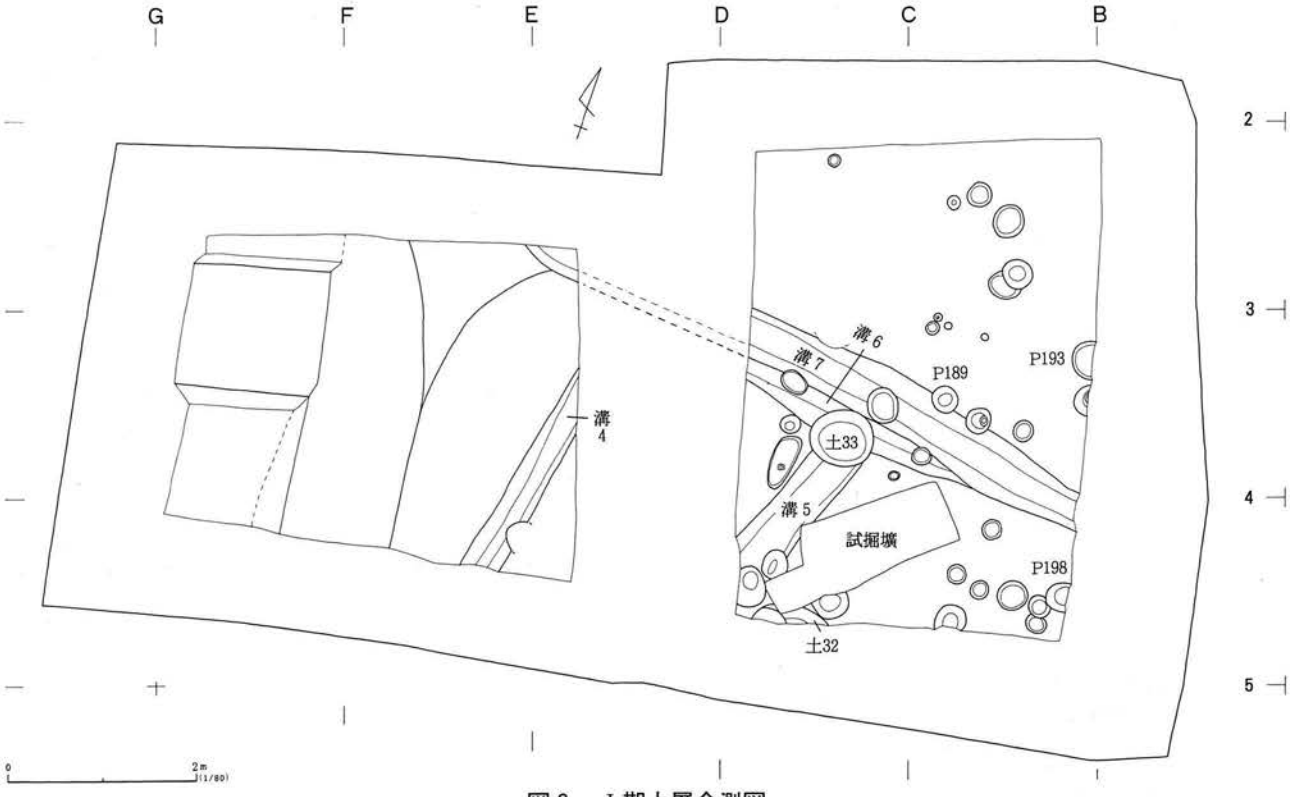


図6　I期上層全測図

土壙

土壙32・33他を図示しているが、共に平面的に精査していない上層11・12層から掘込まれた遺構を、本層位で検出したものである。

上幅径約60～80㎝の不正円形を呈し、覆土は焼土・土丹粒を含む粘質土。

Pit.群

本層位に帰属するのは、Pit.198と数口のみで、他はPit.189・193を含めて本来上層11・12層からの掘込みである可能性のもの、木材腐食痕をPit.状に掘ってしまったものが含まれる。各Pit.間には規則的な配置は認められず、遺物も図8に図示した以外には殆ど出土していない。

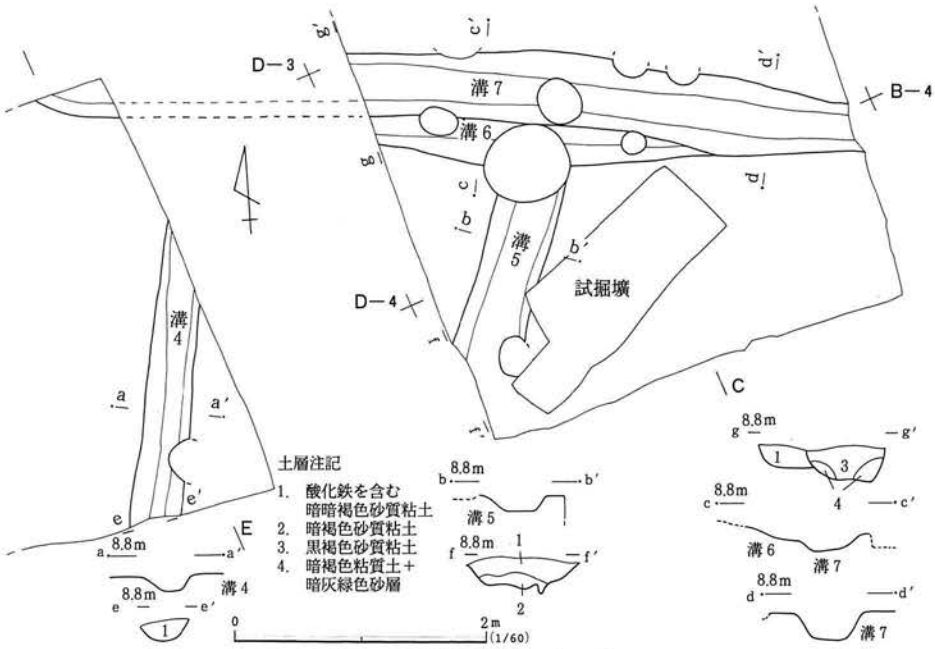


図7　Ⅰ期上層溝5・6・7

杭跡

B～D－2～3グリッド辺りで、溝7と平行する様に径10㎝内外の小孔が8口発見された。規則的な配置や間隔は認められない。Pit.211の北隣の杭穴には腐食した丸杭が遺存しており、自然科学分析に拠りサカキと同定されている。

出土遺物（図8）

Ⅰ期の出土遺物は極めて少なく、図化し得たのは図8の8点に留まる。

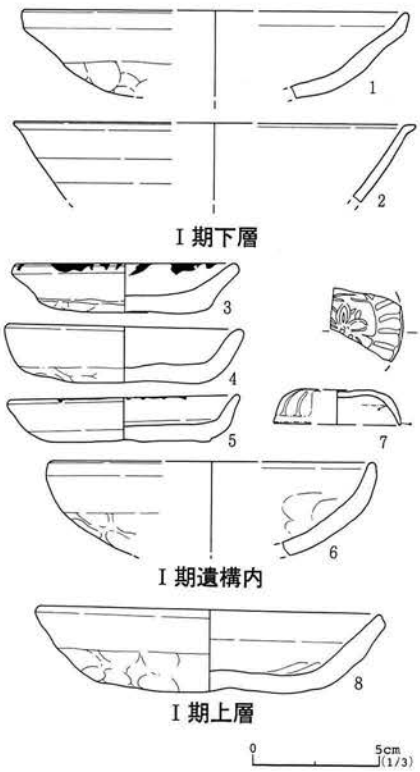


図8　Ⅰ期出土遺物

図8の1・2は、下層とした落込み部分最上層付近の出土。1は手捏ね成形のかわらけ。胎土はやや砂っぽく、胎芯が遺るが焼きは堅め。器壁は薄く、口唇部が若干縁帯状になる。2は白磁端反碗。胎土は淡灰色でやや粗く、釉は淡灰黄色半透明で極薄く掛ける。

3～7は上層遺構内出土。3・4・6は手捏ね成形のかわらけ。3はPit.198出土で、口唇には煤が付着。4は土壙32、6はPit.193出土。5の糸切り底のかわらけはPit.189出土で、7はPit.198出土の青白磁合子の蓋。胎土は淡灰白色でやや粗く、外面の釉は淡水青色半透明で内面は露胎。側面に細い蓮弁文と頂部には花文を型作り。8は手捏ね成形のかわらけで13層上面出土。口縁は面取り状、外底部は平底状。これら出土遺物の内、4～6は上層の遺構の可能性が高く、Ⅰ期の年代を考える上では除外する必要があろうか。

Ⅰ期の遺構は上層・下層に分けたが、両層の遺構は重複関係にはなく同時期に存在している可能性もある。これは図8の1～3・7・8及びⅠ期に帰属し図示し得なかったかわらけ片を観ても矛盾はないと考えている。尚、本文中で触れた自然科学分析の詳細は、第4章第1節に述べられている。

第2節　Ⅱ期の遺構と遺物

Ⅱ期下層の遺構（図9・11）

Ⅰ期の遺構面廃棄後に堆積した図4の11・12層から、現地表下約1.8m、海抜9.1m前後に近接した時期に複数回に及んで土丹地業面が構築された層位・遺構群をⅡ期下層とした。検出した遺構は、土丹地業、多数のPit.、土壙等である。全測図を図9・11に示した。これはレベル差約10cmで範囲の大きく異なる土丹事業の範囲を元に分け、発見されたPit.は調査時の検出状況に従い掘込みレベルや覆土の相違から振り分けたものである。出土遺物を図示又は横断面図に関係するPit.・土壙番号は明示したが、他は煩雑になる為割愛した。海抜約9.0mでⅡ区にのみ南北方向帯状に土丹が貼られた時期を図9の下層（1）、海抜約9.1mで調査区北側のⅠ・Ⅱ区全域に土丹地業された時期を図11の下層（2）とした。横断面図に関係し帰属が曖昧なPit.数口は重複して図示している。

下層（1）（図9）

土丹地業は幅約1.7mの範囲でⅠ期の遺構群に概ね平行し、厚さは10cmにも満たず12層の上面に直接貼られている。土丹地業西側はⅠ期最下層の落込みの影響であろう、幾度となく土砂を入れ土丹地業と同等のレベルで平坦面を確保しようとしている。Pit.の配置から建物や柵列等は、確実には認識し得ないが、北西からPit.409・Pit.447・Pit.421・Pit.426で、又、ほぼ重なる位置のPit.376・Pit.399・Pit.378・Pit.413で建物になろうか。何れもPit.間の距離ほぼ6尺6寸（2m）を測り、建物とすれば範囲は調査区外へと伸びる。但し、帰属は下層（1）か（2）なのかは不明と言わざるを得ない。尚、土壙31は本来12層上面からの遺構であるが、同層上面では平面的な精査を行っていない為、便宜上ここに含めた。

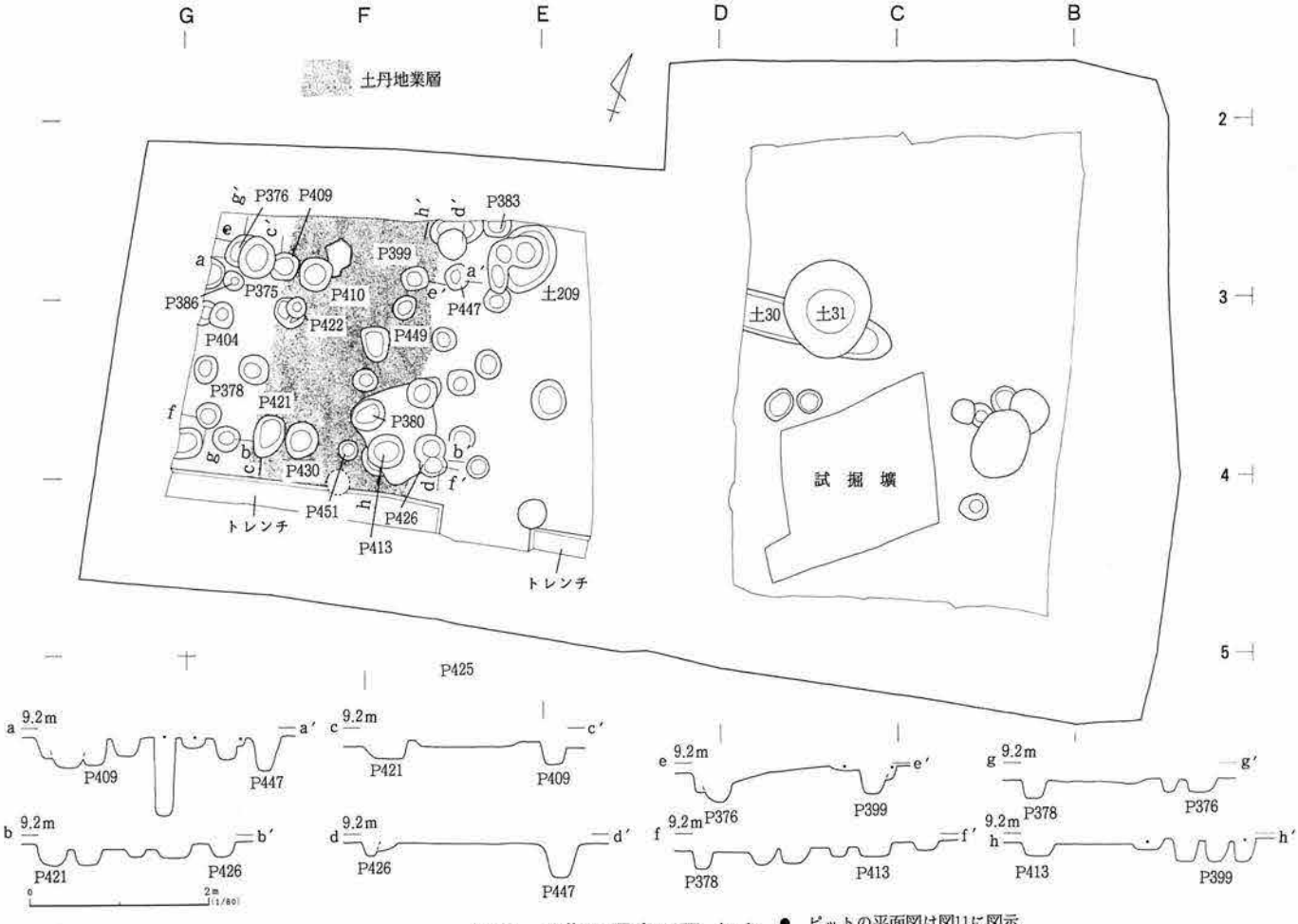


図9　Ⅱ期下層全測図（1）　● ピットの平面図は図11に図示

下層（2）（図10）

土丹地業は調査区の北側で東西方向、下層（1）の地業と直行する様にほぼ直上に貼られている。下層（1）の地業に比べてやや雑で、上面レベルは東に向って僅かに緩傾斜する。図示した様に掘立柱建物を1棟認識し、列a～fの横断面図を付した。Pit.458・459・461は本遺構面で見逃したものを下層精査の際に確認したものである。各Pit.間隔は南北方向が6尺6寸強（2.1m）で2間、東西方向が6寸（2m）で2間、列e～f間が6尺7寸（2.2m）で1間である。Pit.416の底面に礎石様の安山岩が、Pit.458・459・159には礎板が伴う。各Pit.は上場径20～40cmの不正円形で、深さ70～100cmを測る。建物規模は調査区外へと伸びる為不明であるが、I区東寄りには地境を示唆する溝状土壙27他の土壙群が占地し、列fが東の限界になるかもしれない。尚、各列Pit.横断面図は下層（1）と（2）のPit.を併せて作図した。

II期下層の出土遺物（図10）

図10はII期下層の出土遺物を、遺構内及び遺構面（1）・（2）を境として層位毎に分けて版組した。

1～10はII期の最下層、概ね図4の12層中の出土遺物。1～7はかわらけ。4は糸切り底で他は全て手捏ね成形。8は同安窯系青磁櫛掻文碗。釉調は淡灰黄緑色で、内面の文様は片切りの箆を併用。9は

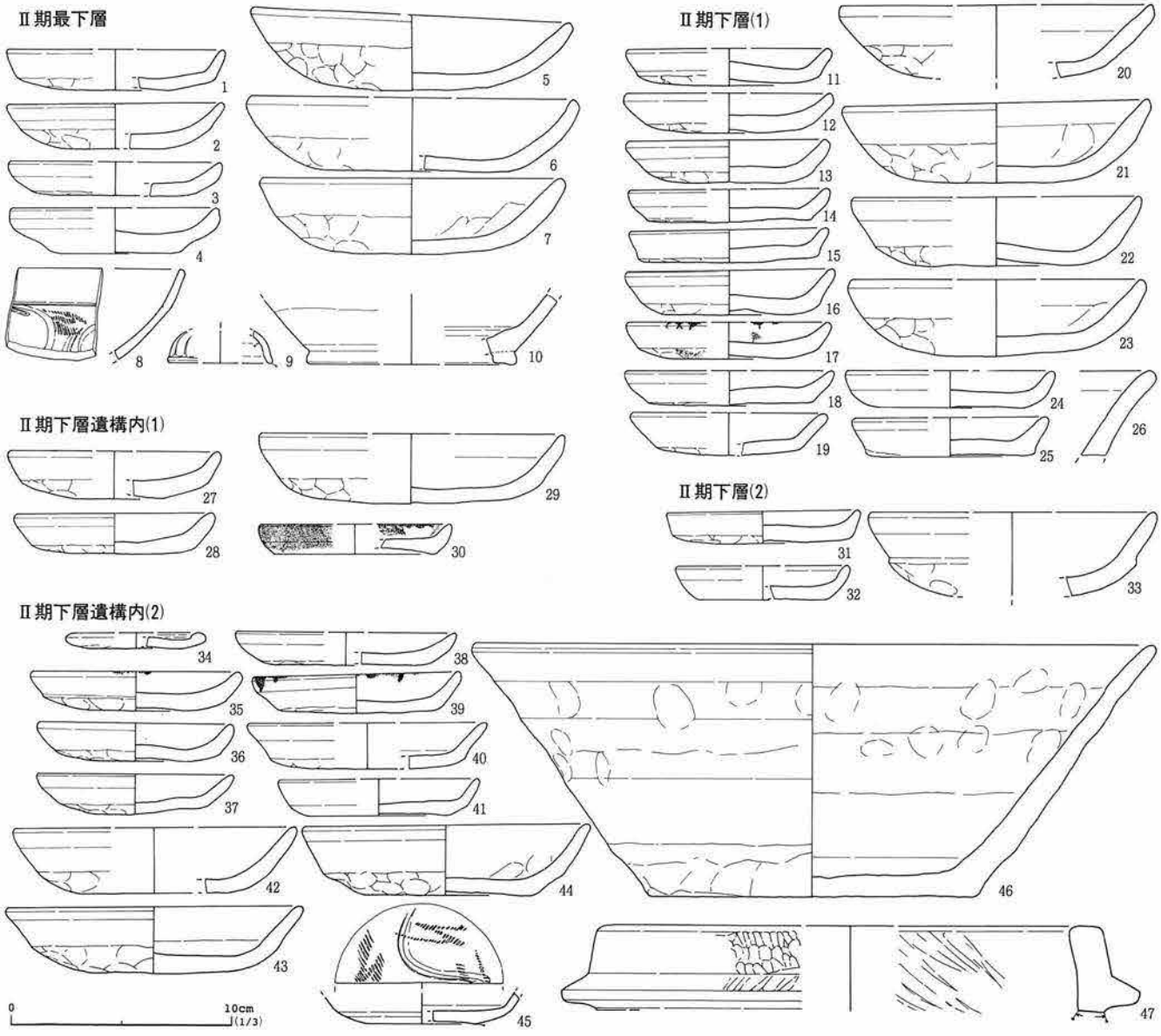


図10　II期下層出土遺物

青白磁合子蓋。釉調は淡水青色で、内面と合せ口は露胎。外側面には蓮弁を型作り。10は渥美窯片口鉢。

11～26はⅡ期の下層、概ね図4の11層中の出土遺物。11～25はかわらけ。24・25は糸切り底で他は全て手捏ね成形。17は口唇他に煤が付着。最下層12層中のかわらけと殆ど年代差はなく、傾向も同様。26は常滑窯片口鉢Ⅱ類。本層位から出土した常滑窯甕胴部押印文拓影は、図29に縮尺1/2で図示した。

27～30は図9のⅡ期下層（1）遺構内の出土遺物。かわらけ4点を図示し得たに過ぎない。27～29は手捏ね成形、30は糸切り底。27は土壙209、28はPit.383、29はPit.380、30はPit.422出土。他の遺構から出土したかわらけも手捏ね成形が多く、器形・寸法は図示したものと大差はない。

31～33はⅡ期の下層（2）を構築する土丹地業層中からⅡ期下層（1）までの出土遺物。かわらけ3点を図示し得たに過ぎない。31・33は手捏ね成形、32は糸切り底。

34～47は図11のⅡ期下層（2）遺構内出土遺物。34～44はかわらけ。41は糸切り底の他は全て手捏ね成形。34はPit.431出土で、白かわらけ。35はPit.162、36はPit.167、37はPit.171、38・39は土壙25、40・41は土壙26、42は土壙27、43は土壙28、44はPit.456出土。41は上層遺構の混在遺物であろう。45は土壙26出土の同安窯系青磁櫛掻文皿。釉は淡灰緑色で外底部は露胎、文様は片切りの篦を併用。46は土壙28出土の常滑窯片口鉢Ⅱ類。47はPit.154出土の長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋。表面に成形痕遺るも、鍔部下の体部破損断面は再成形痕か。又、錆が酷く図化していないが鉄釘が45点出土している。

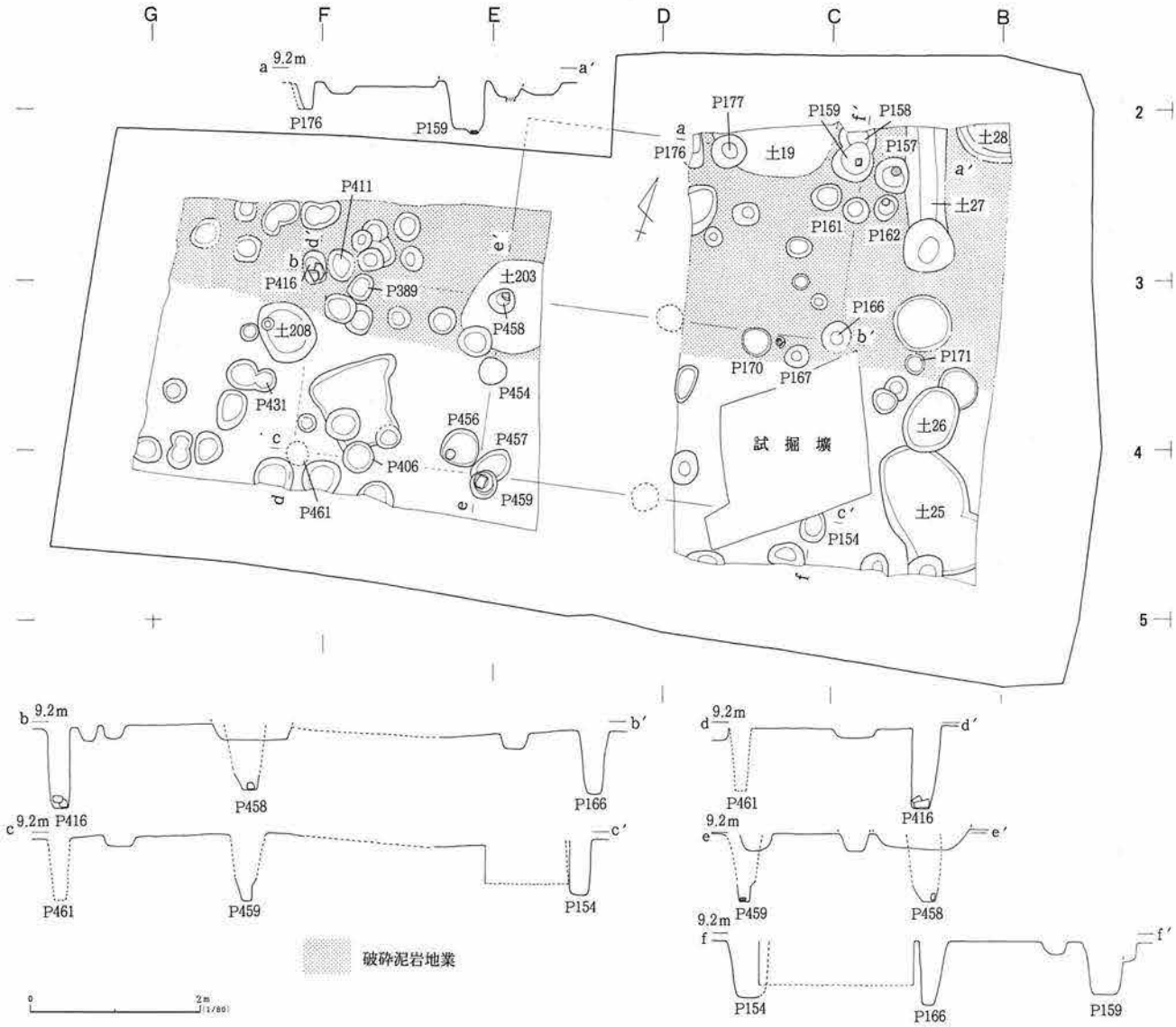


図11　Ⅱ期下層全測図（2）

Ⅱ期下層の遺物は、図示し得なかったものも併せ観ると瓦器・火鉢・石製品道具類も出土しており、遺物種・量共にⅠ期に比べて充実する。糸切り底のかわらけが少ないが、手捏ね成形のかわらけは安定して出土し、他の供伴遺物から観てもほぼ年代的にまとまった出土状況と言えよう。図10の26までと27以降で僅かな年代差が看取できそうなのは、遺構面構築前と廃棄後の時期差と考えられようか。

図12はⅡ期の中層（1）、概ね図4の9層・10層中の出土遺物。Ⅱ期下層遺構面更新時に嵩上げされた層位と考えられよう。1～18はかわらけ。1～5・8～13は手捏ね成形、6・7・14～18は糸切り底。概ね本層位の器形から観た出土傾向と相対的数量比を反映している。19～21は舶載陶磁器。19は龍泉窯系青磁無文碗、釉調は灰黄緑色。20は龍泉窯系青磁盤、釉調は灰青緑色。21は景徳鎮窯青白磁合子蓋。釉調は淡水青色で内面は露胎、外側面に蓮弁文を型作り。22は土器質の火鉢Ⅰ類。口縁下部に内面から穿孔。他には多量の常滑窯片や渥美窯の製品も出土している。又、本層位中から出土した銅銭2枚（太平通寶・嘉祐元寶）は図26に原寸で、常滑窯甕胴部押印文拓影2点は図29に縮尺1/2で図示した。

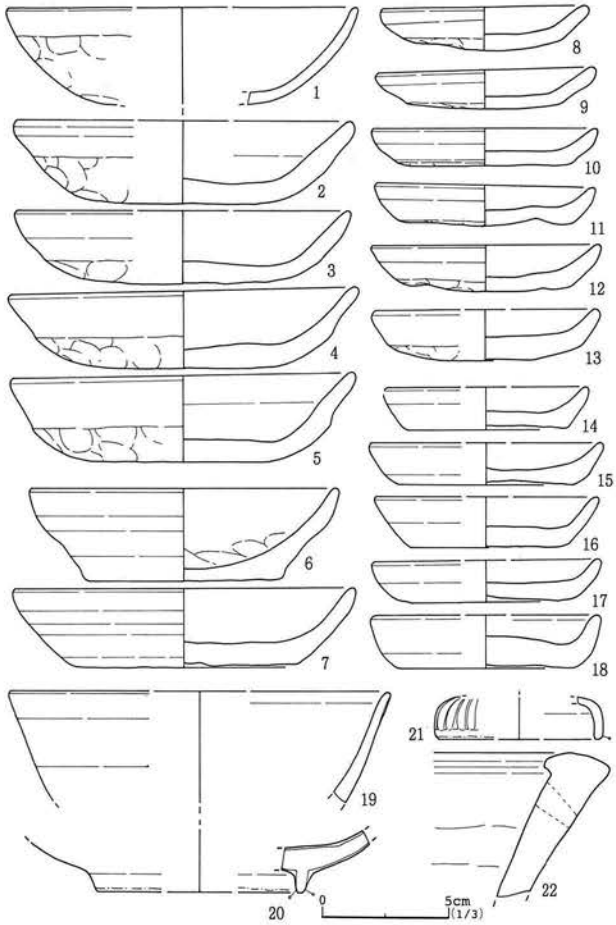


図12　Ⅱ期中層出土遺物（1）

図13はⅡ期の中層（2）、概ね図4の8層中の出土遺物。Ⅱ期上層遺構面構築時に近い時期を示す層位と考えられよう。1～10はかわらけ。5・6が糸切り底で他は手捏ね成形。図化したものは手捏ね成形のものに偏ったが、ほぼ同等数の糸切り底のかわらけも本層位から出土している。11・12は舶載陶磁器。11は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、釉調は淡灰黄緑色。12は龍泉窯系青磁無文碗、釉調は灰黄緑色。13～15は常滑窯の製品。13は甕。14・15は片口鉢Ⅱ類。本層位中から出土した常滑窯甕胴部押印文拓影は、図30に縮尺1/2で図示した。

Ⅱ期中層の遺物は図示し得ないものも併せ観ると、遺構面の間層の為か小破片が多い。遺物の組成はⅡ期下層と大差はないが、かわらけは手捏ね成形と糸切り成形の割合がこれまで1：3だったのが、本層位ではほぼ1：1に近い割合になる。常滑窯片口鉢はⅠ類がやや減り、Ⅱ類が徐々に増え始めている。

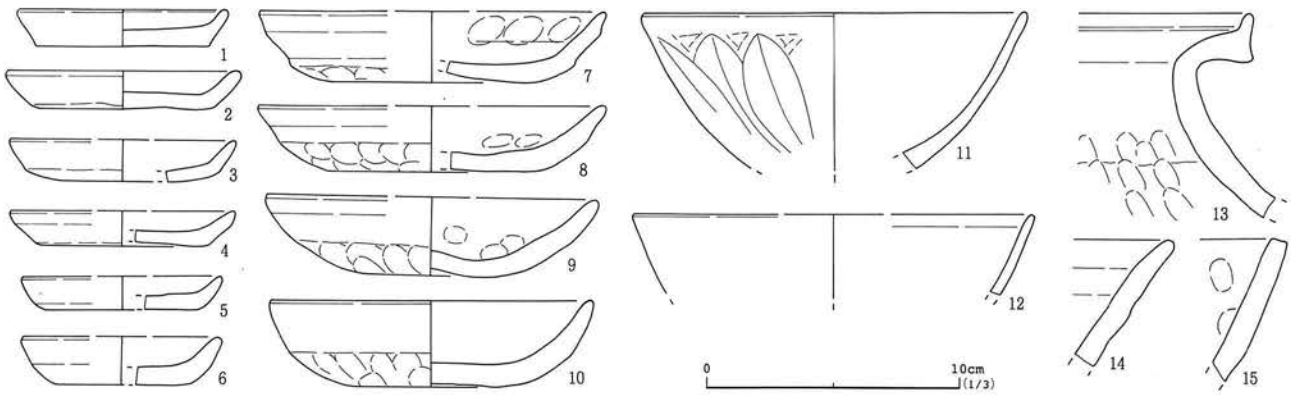


図13　Ⅱ期中層出土遺物（2）

Ⅱ期上層の遺構（図14）

Ⅱ期下層遺構面廃棄後に堆積した図４の９層上面の現地表下約1.4m、海抜9.5mに、部分的に強い土丹地業が構築された層位・遺構群をⅡ期上層とした。発見した遺構は、土丹地業、多数のPit.、土壙である。Pit.の配置からは、柵状のPit.列以外規則的な配置はなく建物は見出せなかった。土壙は軸方向はPit.列とほぼ同じくし多数の遺物は出土するものの、性格は不明である。全測図を図14に示した。

土丹地業

本遺構面はほぼ全体が粘質土と土丹粒子を混交した地業面であり、土丹の入り方の異なる範囲を地業としている。Ｆラインより西は、粘質土を混交せずほぼ土丹塊のみで叩き締めている。この辺りはＩ期最下層落込みの上部であり、軟弱な地盤を強化する為の地業の相違とも観られようが、Ⅱ期下層の様相や周囲の遺構配置と考え併せ、地業上のPit.321とPit.331或はPit.255とPit.334から調査区外の西に建物を想定する可能性を残した。

Pit.列

Ⅱ区の調査区北端添いに列ａ、土丹地業東端に沿って列ｂが、共に間隔不一定ながら区画を示唆する柵状のPit.列と考えられる。列ａはＩ区の土壙群が占地する手前土壙21としたPit.群辺りで北へと曲り、列ｂはこれとほぼ直行する。Ｉ区の東寄りグリッドＢライン付近のPit.115からPit.139を通りPit.144も同様にPit.列として捉えられようか。Pit.列３列の内側では遺構面を構成する地業がやや弱く、Ｉ区では性格不明の土壙群が占地しⅡ区は遺構が希薄である。この辺りは小区画内の中間地或は外れに中るのではないだろうか。

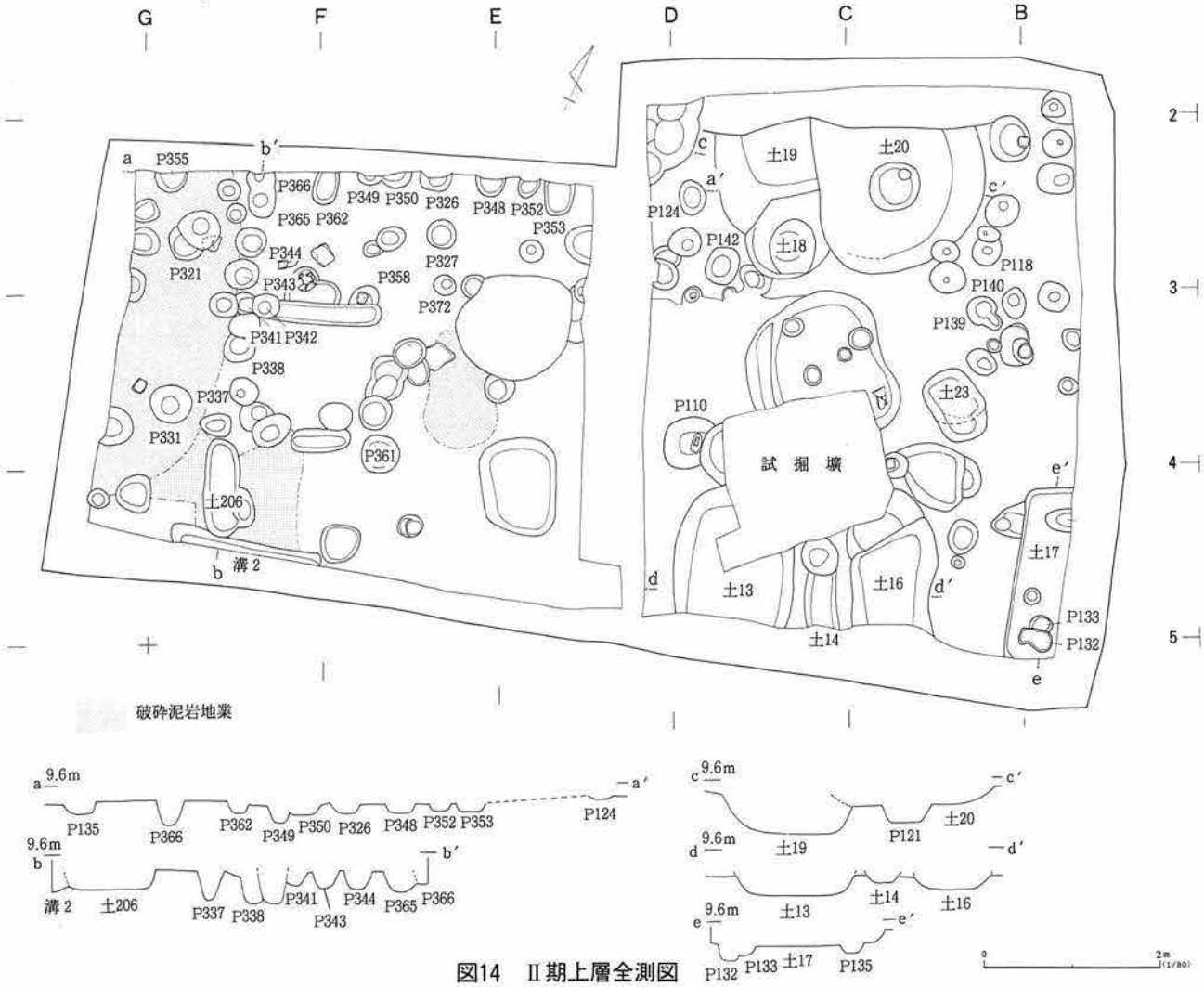


図14　Ⅱ期上層全測図

Ⅱ期上層の出土遺物（図15・16）

図15は図14のⅡ期の上層遺構内出土遺物。

1～31はかわらけで、1～18は小型品、19～31は大型品。1は土壙16出土で手捏ね成形。2～9・21～27は土壙18～20出土で全て糸切り底、内、6～9・21～27は土壙19の下層出土。6は口唇と体部に煤が付着。10は土壙23、11は土壙24出土で共に糸切り底。12はPit.344出土で手捏ね成形。13～16はPit.110、17はPit.338、18はPit.355出土で何れも糸切り底。19は土壙13、20は土壙16出土で手捏ね成形。28は糸切り底、29は手捏ね成形で共にPit.121出土。29は口縁付近に煤が付着。30はPit.327出土で手捏ね成形、体部内面に煤が付着。31はPit.327出土で糸切り底。体部上位を打ち欠かれており、内面には引掻いた様な線刻が不規則に観られる。全体に二次焼成を受けており、打ち欠かれた割れ口に煤が付着。他の遺構から出土した図示し得ないかわらけも、18・26の様なタイプが殆どないことを除けば、手捏ね成形の数量比や器形は図示したものと大差はない。

32～36は舶載陶磁器類。32・35は土壙18～20出土。32は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、釉は淡灰緑色。35は白磁口冗皿。淡灰色の釉は外底面まで掛けられる。33はPit.338出土の龍泉窯系青磁無文碗、釉は灰黄緑色。34はPit.139・140出土の龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。灰緑色の釉は高台畳付を除いて外底面まで掛けられる。36はPit.342出土の褐釉陶器壷。胎土に白色粒を含み、器表淡褐色。

37～45は常滑窯製品で45が甕。37～44は片口鉢で37は還元焔焼成のⅠ類、他は酸化焔焼成のⅡ類。37の胎土は小礫を多く含み粗い。Ⅱ類の口縁部は、39・41の様なタイプは少ない。37はPit.361、38は土壙13、39は土壙17、40～42は土壙19下層、43は土壙18～20、44はPit.142、45はPit.118出土。

46～48は土器・土製品類。46はPit.121出土の瓦器碗。器表黒色処理後に磨き外形から押出して輪花状に造る。内底面には花文の暗文。47はPit.139・140出土のかわらけ質製品で、仏具であろう。外底面糸切り。48はPit.338出土のかわらけ転用の円盤。49・50は瓦で平瓦。共に凹面に布目痕が、凸面には縄目の叩きが残る。49は土壙24、50はPit.361出土。

51のPit.321出土の銅銭（皇宋通寶）と、52のPit.331出土の銅銭（元豊通寶）は図26に原寸にて図示した。53は土壙18～20出土の鉄釘。頭頂部叩き折り曲げ。54は土壙18～20出土の砥石で、伊予産の中砥。1面だけ生産地成形痕が遺存する。55はPit.372出土の砥石で鳴滝産の仕上砥。小口は生産地成形痕、両側面は消費地二次加工で左側面は半ばで折り採る。56はPit.361出土の用途不明骨角製品。

図16はⅡ期の上層、遺構面を構築する土丹地業上の出土遺物。土丹事業の範囲を把み得ずに、堀過ぎてしまった範囲の出土遺物も混在し、本来土壙18～20の上層に帰属するべきものもここに含まれる。

図16の1～13はかわらけ。10・11は手捏ね成形で他は全て糸切り底。1～10は小型品で、11～13は大型品。本層位から出土したかわらけには手捏ね成形は少なく、小型品で10を除けば器形から観た出土傾向は反映している。大型品で図化した12・13のタイプは出土はするものの少なく、全体の傾向を示すものではない。

14～19は舶載陶磁器類。14は龍泉窯系青磁無文盤。釉調は淡灰緑色で、口縁は折り縁状。15は同安窯系と思われる青磁櫛掻文皿。灰黄緑色の釉は体部外面下端まで。16は景徳鎮窯青白磁印花文皿。釉調は淡水青色で外面体部下半は露胎。17は褐釉陶器の壷。胎土は堅緻で器表褐色、底部に近い方であろうか。18は白磁口冗皿。釉は灰白色で、内面体部中位に沈線が巡る。19は青白磁合子の身。淡水青色の釉は、内面と外面上位に掛けられる。20・21は瀬戸窯製品。20は入子。前Ⅲ期～中Ⅱ期の製品。21は灰釉の洗。淡緑灰色の釉を刷毛塗りした前Ⅱ期の製品。

22は亀山窯の甕。試掘の際に出土した破片や、上下の遺構面構成土から出土した十数破片が接合し、口縁部を含めて比較的出土点数が多かった本層位に帰属させた。体部外面と口唇部は細かい格子の叩き、

図15　Ⅱ期上層遺構内出土遺物

内面は同心円状の当て具痕が残る。23～26は常滑窯製品。23は甕。24～26は片口鉢Ⅱ類。甕・片口鉢共に本層位の出土傾向を概ね反映している。図化はし得なかったがⅠ類の片口鉢は、数は下層に比べてさらに減るものの一定量出土はしている。27・28は渥美窯の捏鉢。

29は滑石製の石鍋。石質はやや軟質で銀灰色、石目に鉄分が筋状に観入する。鎌倉市内域で多く出土する長崎県西彼杵産と思われるが、福岡県北部産かもしれない。本層位中から出土した銅銭5枚（皇宋通寶2、至和通寶1、元豊通寶2）は図26に原寸で、常滑窯甕胴部押印文拓影1点は図29に縮尺1/2で図示した。

Ⅱ期上層の遺物は図示し得ないものも併せ観ると、かわらけの手捏ね成形と糸切り底の出土破片相対比が一気に逆転し、手捏ね1に対し糸切り3の割合になる。糸切り底のかわらけは、口径及び成形から観る中型品が本層位から殆ど出土していない。年代的な問題とも絡めるなら本文でも問題にした数点をもって次世代への先鞭と観るか、遺構の掘り上げに因る混在と観るか問題があろうか。かわらけ以外の出土遺物も質・量共に充実し、常滑窯片口鉢はⅠ類からⅡ類へと移る過程にあり、搬入系の土器も増加する。この傾向は、舶載陶磁器の減少と瀬戸窯製品の増加が上層のⅢ期を待たねばならぬ事を除けば、出土点数がかわらけに偏るものの鎌倉市外域の出土傾向と合致する。舶載陶磁器がⅢ期中層とこの時期に多いのは遺構との関連を考慮に入れる必要があろう。図4の堆積土層から本遺構面（調査時3面）を境にⅡ期とⅢ期に分けているが、出土遺物の様相は本遺構面は本来Ⅲ期に入れるべきかもしれない。

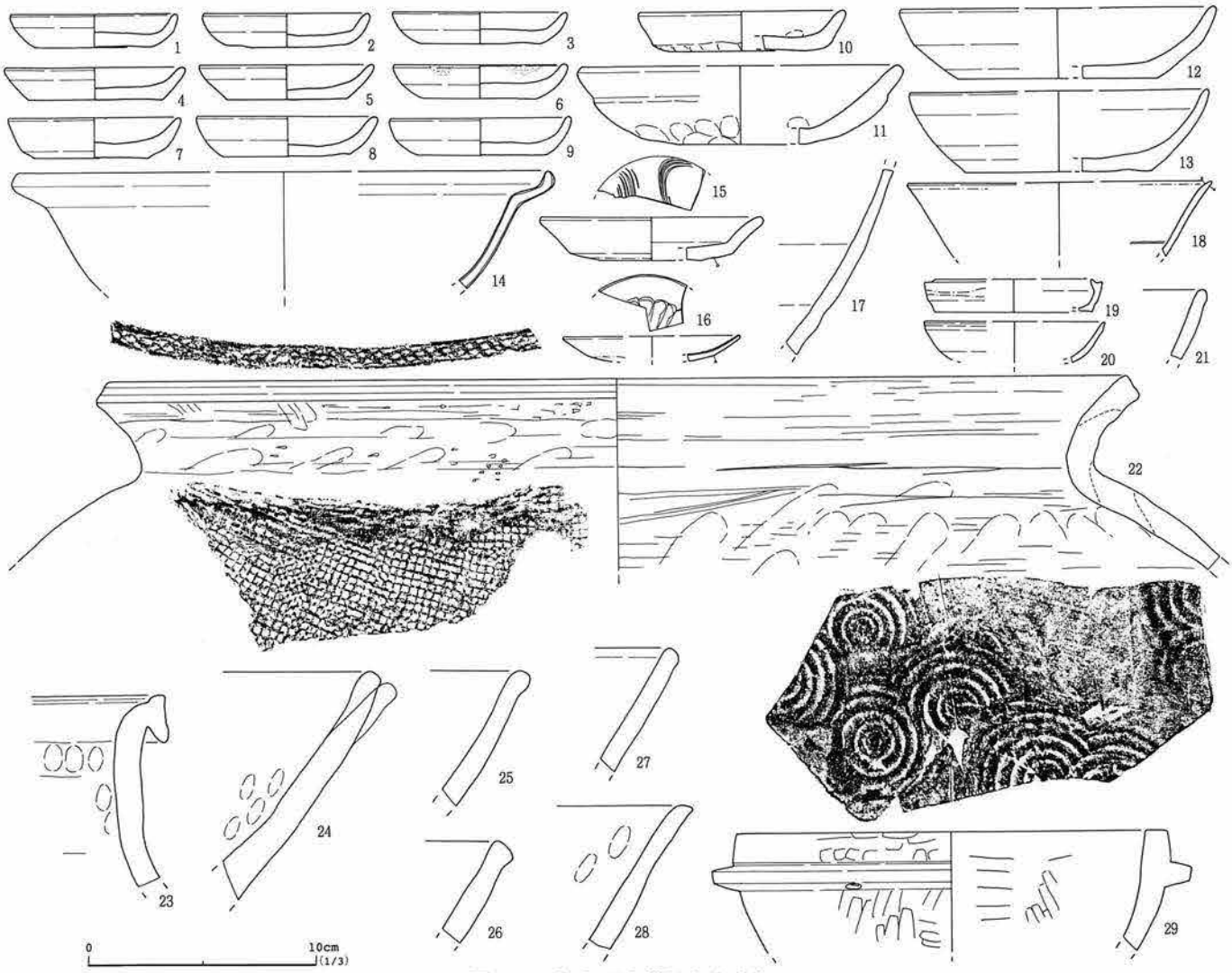


図16　Ⅱ期上層遺構外出土遺物

第３節　Ⅲ期の遺構と遺物

Ⅲ期下層の遺構（図17）

Ⅲ期下層の遺構面は現地表下約1.2m、海抜約9.70mを測る。発見した遺構は、土丹地業１カ所、方形竪穴状遺構１基、柱穴列１列、柱穴37口、土壙５基である。そのほかに、調査区中央北寄りで、性格不明の溝状の落ち込みを発見した。上幅約140㎝、下幅約70㎝を測り、確認面からの深さは最大20㎝とかなり浅い。東側上場から下場にかけては、破砕した鎌倉石を突き固めている。

土丹地業

調査区西壁際で土丹地業面を発見した。地業は破砕した土丹を丁寧に敷き、その上に鎌倉石塊が疎らに散らばっている。

方形竪穴状遺構

調査区中央南寄りで発見した。平面は隅丸長方形を呈する。遺構南限は調査区外に伸びるため全容は不明である。規模は東西280㎝、南北290㎝以上で、確認面からの深さは約40㎝を測る。遺構主軸方位はＮ－8°－Ｗである。床面は東から西に緩傾斜するが（最大高低差20㎝）ほぼ平らで、鎌倉石の切石や木材の痕跡等は認められなかった。

柱穴列

調査区南西に位置し、東西に伸びる。Pit.311を除けば、芯心距離は100㎝前後である。遺構主軸方位はＮ－106°－Ｗ。

以上のほかに、性格を確定できない柱穴と土壙を発見している。柱穴はその多くが建物もしくは塀に

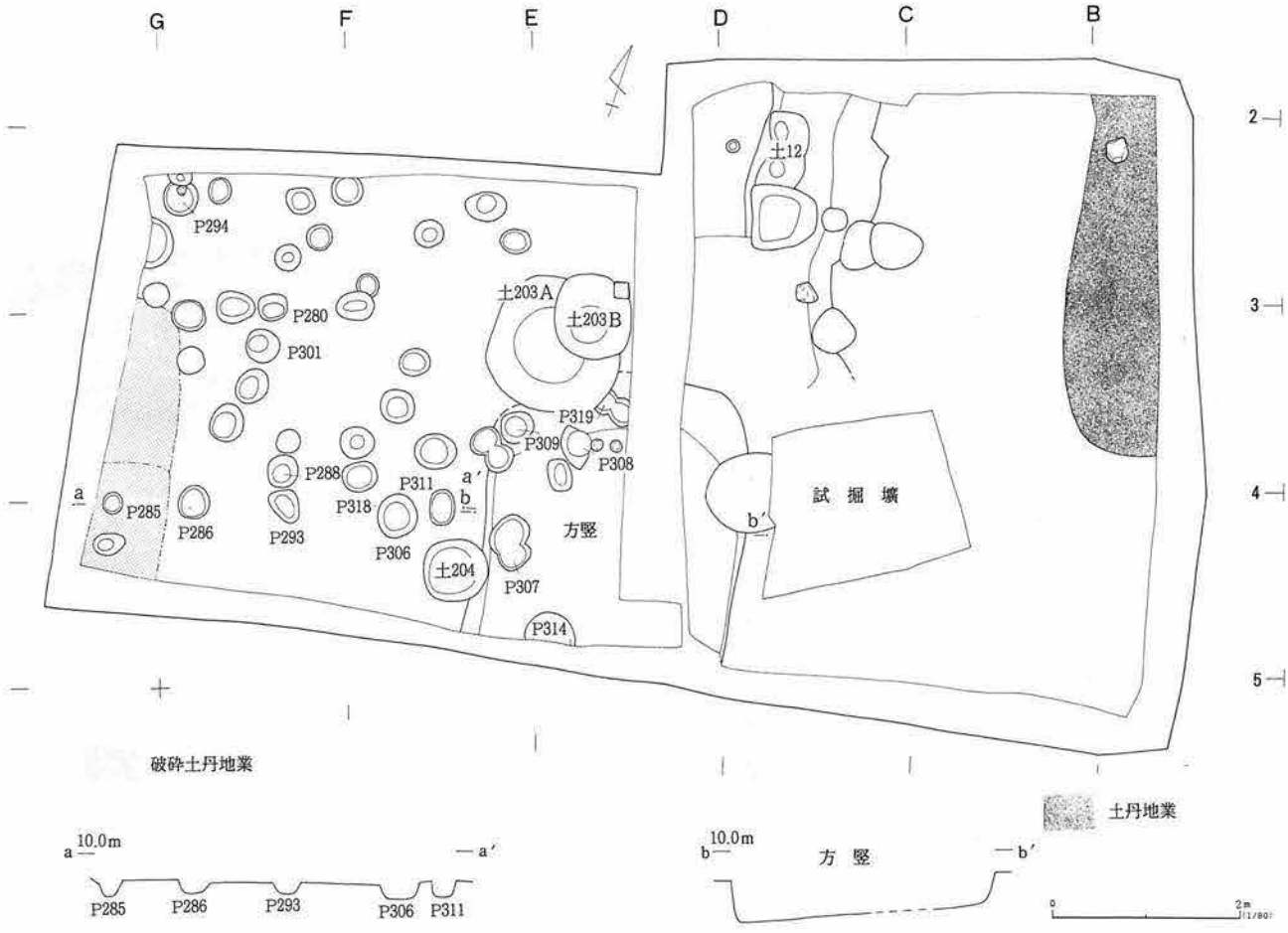


図17　Ⅲ期下層全測図

伴うものと考えられるが、全容は不明と言わざるをえない。土壙203(A)は長軸152cm、短軸140cm、確認面からの深さ60cmを測る。土壙203(B)は長軸90cm、短軸82cm、確認面からの深さ60cmを測る。

Ⅲ期下層の出土遺物（図18・19）

図18はⅢ期下層遺構面下、図4の概ね7層からの出土遺物である。

1は瓦質火鉢ⅣC類で、鍔部上面に菊花と思われる文様を押印。2～16はロクロ成形のかわらけ。

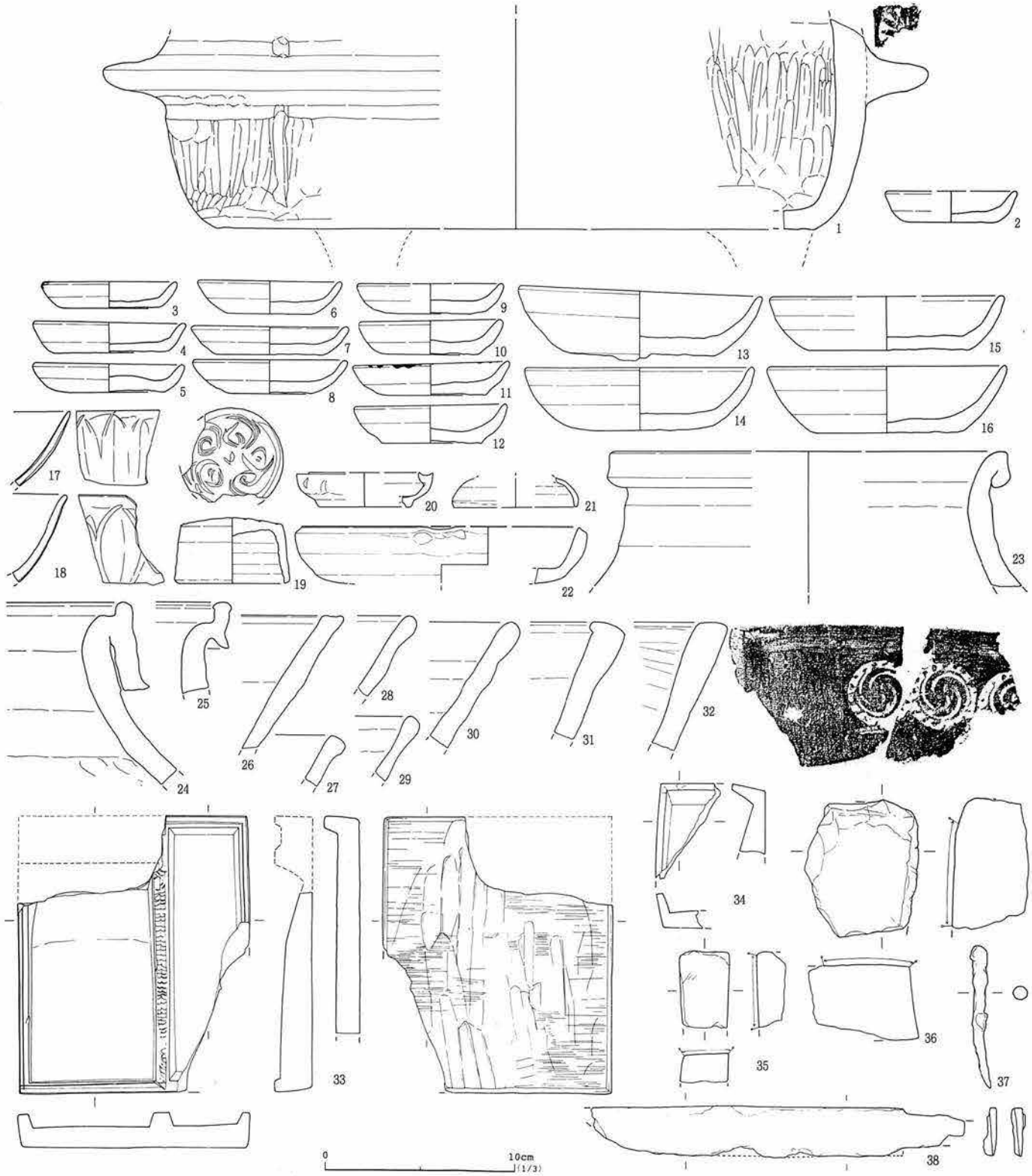


図18　Ⅲ期下層出土遺物

17・18は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。17の胎土は灰白色で、釉は草緑色を呈する。18の胎土は灰色で、釉は暗緑色を呈する。19は景徳鎮窯青白磁梅瓶の蓋で、釉は不透明な水色を呈する。頂部にグリ文を配する。20は青白磁合子の身。外側面に蓮弁を配する。胎土は白色で、釉は草緑色を呈する。21は白磁合子の蓋。胎土は白色で、釉は不透明な白色を呈する。22は瀬戸窯灰釉卸皿で、前Ⅲ期の製品。土壙203出土の図19の27と同一個体。釉は刷毛塗りで灰緑色を呈する。

23～26は常滑窯製品で、23～25は甕、26は片口鉢Ⅱ類で、図20の42と同一個体。27～30は片口鉢Ⅰ類。31は土器質火鉢ⅠC類。32は瓦器質火鉢Ⅲ類で、胴部上位外面に珠文を伴う三巴文を押印。

33～36は石製品。33は丹波・鳴滝山系の硯。裏面は、手前から平鑿で荒成形後に角を面取り。最後に左右方向に擦り調整しているが、深く入り過ぎた平鑿痕がそのまま遺されている。表面周縁は、擦り調整仕上げ後に一部毛彫りの装飾を施すも、成形時縁回しの線刻が遺る。硯面の陸部・海部及び筆船の内部は名倉掛けされる。海部はムコウノクリが一角遺存しており、鎌倉市内で出土する同類の硯で一般的な寸法・形状等から想定復元図として提示した。34は赤間ヶ石（紫石）の硯。海部ムコウノクリが遺存。35・36は共に伊予産の中砥。35は、二次加工痕は不明瞭だが破損後に両側面を再成形して使用、裏は破損剥離している。36は表1面以外は破損剥離。37・38は釘。

本層位から出土した銅銭9枚（皇宋通寶3、嘉祐元寶3、開元通寶・治平通寶・元豊通寶　各1）は、第4節図26・27に原寸で、また押印文の遺る常滑窯甕片拓影は第4節図30に縮尺1/2で示した。

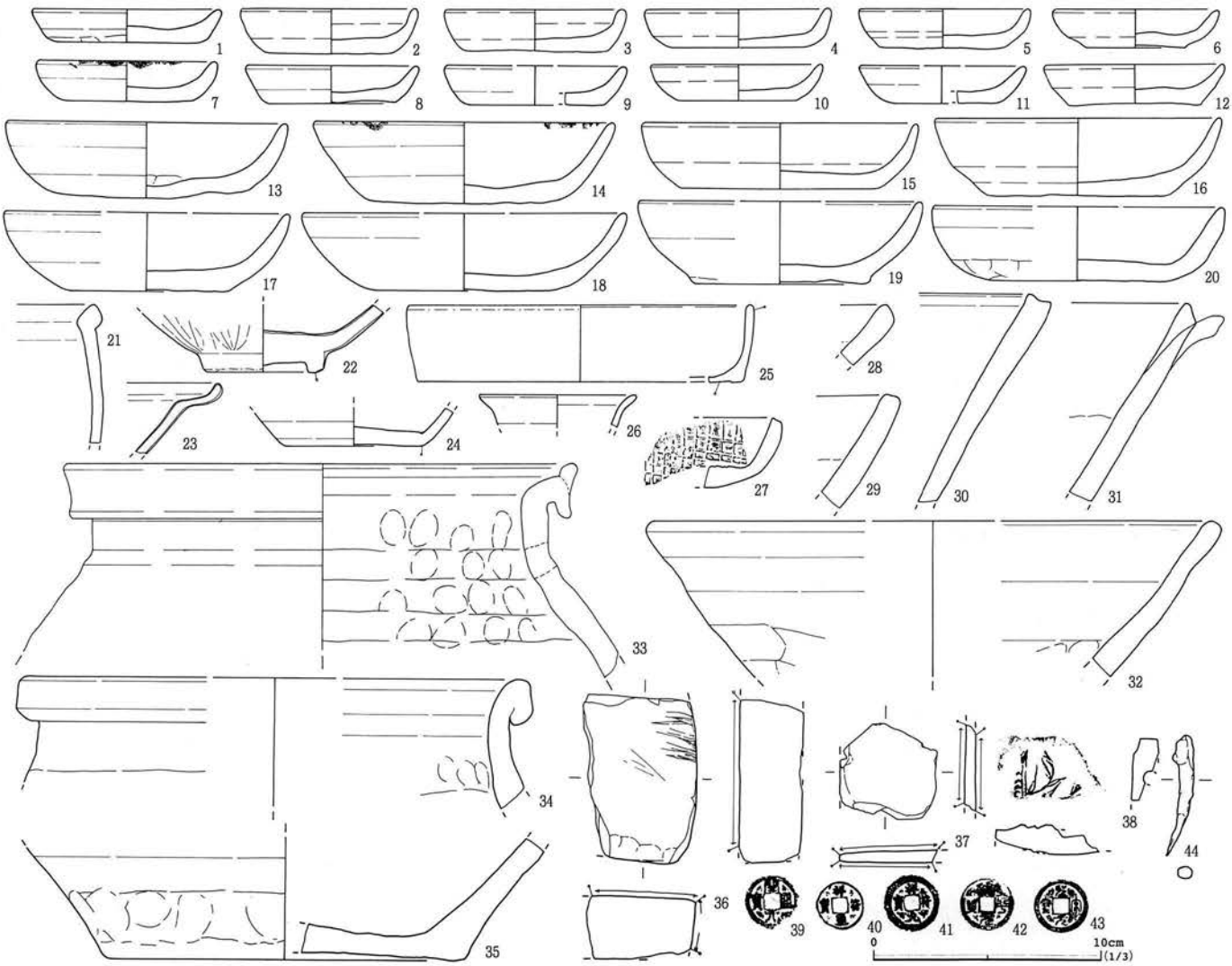


図19　Ⅲ期下層遺構内出土遺物

図19はⅢ期下層遺構内出土遺物。

1～6・13～16・21～23・33・35・38～41は方形竪穴遺構出土。1は手捏ね成形のかわらけ。2～6・13～16はロクロ成形のかわらけで、7・14の口縁部に煤が付着する。21は中国泉州窯系緑釉盤。22は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。胎土は灰白色で、釉は暗緑色を呈する。23は龍泉窯系青磁無文盤。胎土は灰白色で、釉は草緑色を呈し、貫入がある。33・35は常滑窯製品で、33は甕、35は片口鉢Ⅱ類。38は西彼杵産滑石鍋転用のスタンプで、草文を陽刻する。39～41は銅銭。39は開元通寶、40は祥符通寶、41は祥符元寶。これら銅銭は第4節図27に原寸でも示した。

30・44は柱穴列出土遺物。30はPit.293出土の常滑窯片口鉢Ⅱ類。44はPit.311出土の釘。

10・11・12・17・26・28・32・34・36・37は柱穴出土遺物。10はPit.280出土の糸切り底のかわらけ。11・32はPit.301出土で、11はロクロ成形のかわらけ、32は常滑窯片口鉢Ⅱ類。12はPit.318出土のロクロ成形のかわらけ。17・28はPit.308出土で、17はロクロ成形のかわらけ、28は常滑窯片口鉢Ⅰ類。26はPit.294出土の瀬戸窯小坏で、前Ⅰ・Ⅱ期の製品。34はPit.309出土の常滑窯甕。36はPit.314出土の伊予産中砥。右側面は生産地加工痕を遺し、表面を主使用。37はPit.288出土の鳴滝産の仕上砥。片側面に生産地加工痕を遺すが、他方は破損断面でありながら幅4.2㎝（1寸4分）を測る。石目は「カワ」といわれる鉄分の貫入があり、生産地で製品採取後の残り物「破砥」かもしれない。42・43は銅銭で、42はPit.319出土の治平元寶、43はPit.307出土の聖宋元寶。これら銅銭は第4節図27に原寸でも示した。

7～9・18～20・24・25・27・29・31・54は土壙出土遺物。7は土壙12出土のロクロ成形のかわらけ。8・19・20・24・25・27・29・31は土壙203出土。8・19・20はかわらけ。8・19はロクロ成形、20は手捏ね成形。24・25は白磁で、24は口兀皿、25は合子。25は内面無釉で胎土は黄白色、釉は黄褐色を呈する。復元口径15.2㎝と合子としては大きい。27は瀬戸窯灰釉卸皿で前Ⅲ期の製品。遺構外出土の図18の22と同一個体。29・31は常滑窯片口鉢Ⅱ類。9・18は土壙204出土のロクロ成形のかわらけ。

図20の1～61はⅢ期中層からの出土遺物である。上層・下層遺構面の間層（図4の6・7層）から出土したものをここに含めた。

1・3～22はロクロ成形のかわらけ。2は手捏ね成形のかわらけ。23は白磁口兀皿。24は褐釉陶器の壷で、胎土は茶褐色を呈する。25は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文皿。胎土は灰白色で、釉は草緑色を呈する。26は龍泉窯系青磁盤。胎土は灰白色で、釉は灰緑色を呈する。27は龍泉窯系青磁小碗。胎土は灰白色で、釉は暗緑色を呈する。28・29は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。28の胎土は白色に近く、釉は緑色を呈する。29の胎土は灰色、釉は灰緑色を呈する。30は瀬戸窯灰釉水注で、前Ⅱ期の製品。31・32は土器質火鉢Ⅰ類。33～37は常滑窯片口鉢Ⅰ類。38は東遠系の捏鉢かと考えられる。39～49は常滑窯製品で、39は鉢、40～43は片口鉢Ⅱ類。42は図18の26と同一個体。44～49は甕。

50・51は西彼杵産滑石鍋底部転用の製品。51のスタンプは、図上左右側面は鋸引き、上部側面は鑿状の工具痕。51は温石で1カ所を穿孔、周囲は平鑿状の工具痕が明瞭に遺る。52は黒色粘板岩（玄生石系）の硯。幅2寸5部、裏面は剥離しているがフチの造りや側面の調整痕から、赤間の職人の手に依るものかもしれない。53は鉄製の蓋で、摘みが付く。54～61は釘。

本層位から出土した銅銭9枚（元祐通寶2、淳化元寶・祥符元寶・天聖元寶・嘉祐元寶・元豊通寶・紹熙元寶・無文銭　各1）は、第4節図27に原寸で、押印文の遺る常滑窯甕片拓影は、第4節図30に縮尺1/2で示した。

図20の62～66はⅢ期上層土丹地業中の出土遺物である。

62・63はロクロ成形のかわらけ。64は常滑窯甕の転用品で割れ口が磨耗している。65は釘。66は天草産の中砥。両側面は生産地加工痕を遺し、小口は二次加工されているかもしれない。表裏2面を使用。

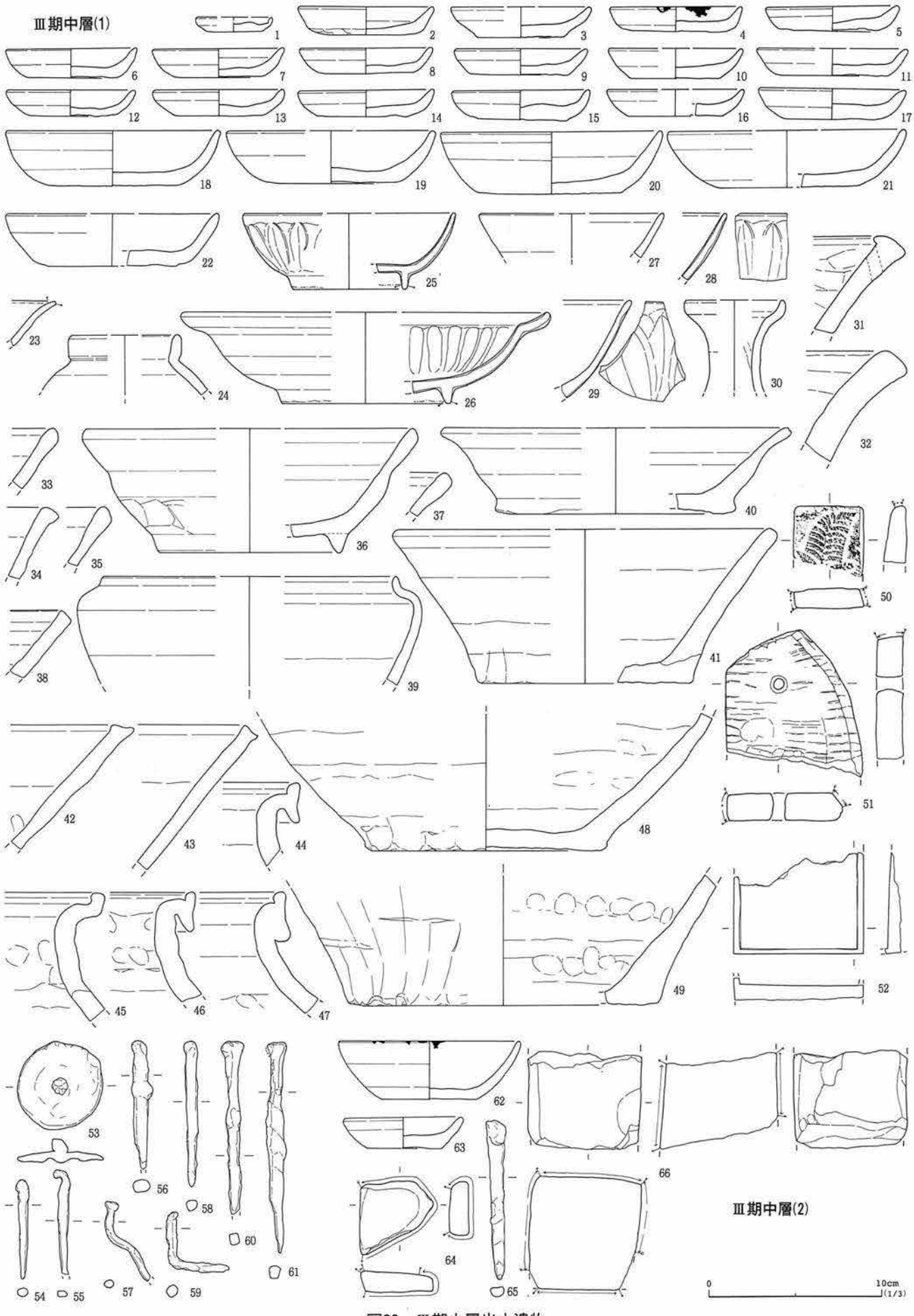


図20　Ⅲ期中層出土遺物

Ⅲ期上層の遺構（図21）

Ⅲ期上層の遺構面は現地表下約１ｍ、海抜は約9.90ｍを測る。発見した遺構は、土丹地業２カ所、土壙７基、柱穴列６列、柱穴90口である。そのほかに、Pit.226・Pit.242・Pit.202・Pit.232・Pit.245は南北１間以上×東西２間以上の建物かもしれない。芯心距離は約180㎝。遺構主軸方位はＮ－20°－Ｗ。

土丹地業

調査区西壁際と東壁際で土丹地業面を発見した。地業面は破砕した土丹を丁寧に敷き、強く突き固めている。西壁際の地業は、南半分の範囲がやや不明瞭。東壁際の地業は、１ｍ余り東に張り出しているがⅢ期下層の地業面上にほぼ重なる。両地業部間の距離は８ｍを測る。

柱穴列

柱穴列は全部で６列確認できた（図21－Ａ～Ｆ）。いずれも柱穴間は不定間隔である。遺構主軸方位は、柱穴列Ａ～ＤがＮ－95°－Ｗ前後、柱穴列ＥがＮ－4°－Ｗ、柱穴列ＦがＮ－9°－Ｗというように、ほぼ直行・平行関係にある。

以上のほかに、性格を確定できない柱穴と土壙を発見している。柱穴はその多くが建物もしくは塀に伴うものと考えられるが、全容は不明と言わざるをえない。土壙は、７基中４基が調査区中央東寄りで集中して発見された。そのうちの土壙９は、長軸133㎝、短軸88㎝、確認面からの深さ20㎝を測り、下場北東に鎌倉石が据えられていた。

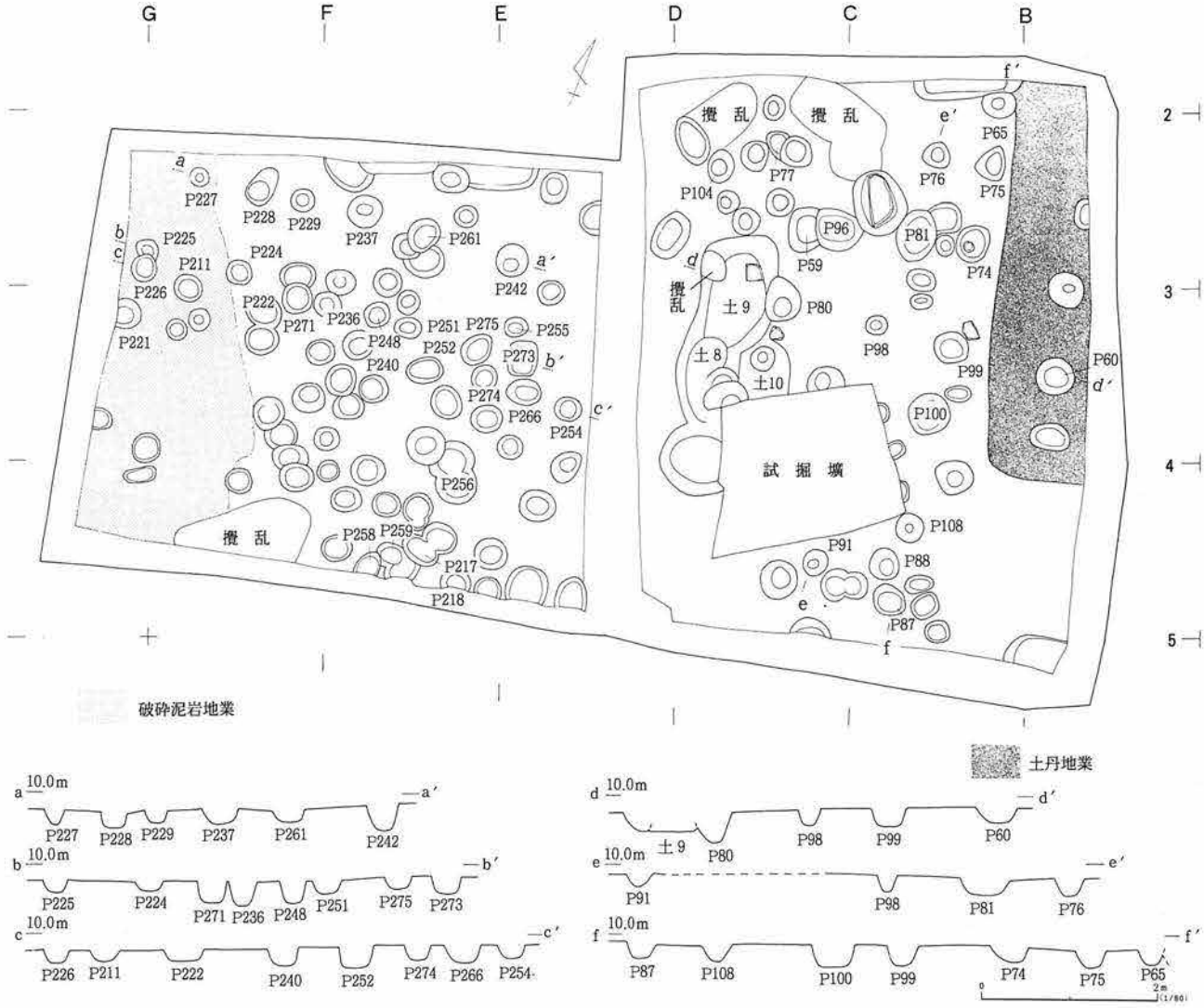


図21　Ⅲ期上層全測図

Ⅲ期上層の出土遺物（図22・23）

図22はⅢ期上層遺構内出土遺物である。

9・12・18・22・26は柱穴列出土遺物。9・18は柱穴列BのPit.275出土で、9は土製の香炉、18は釘。12はPit.81出土の丹波・鳴滝山系製硯。左手前陸部が遺存。全体外形は恐らく風字硯で、内形を四葉状に彫込む。裏面は平鑿痕を擦り消してはいるが、平滑には仕上げられていない。側面は縦方向の擦り調整痕が遺されたままで、ほぼ垂直。フチには成形時縁廻しの線刻が遺されたままで、この類の硯によく観られる装飾状の線刻はされていない。22は柱穴列BのPit.224出土の銅銭で皇宋通寶。26は柱穴列FのPit.100出土の銅銭で紹聖元寶。これら銅銭は第4節図28に原寸でも示した。

7・8・10・11・13～21・23～25は柱穴出土遺物。7・19はPit.59出土で、7は白磁印花文皿、19は釘。7の胎土は白色で、釉は水色に近い白色を呈する。

8・13・14はPit.258出土。8は瀬戸窯入子で、前Ⅲ期～中Ⅱ期の製品。13・14はPit.258出土の鳴滝産仕上砥。共に小口・両側面に生産地加工痕が遺り、幅1寸1分は鳴滝砥の生産地製品規格の範疇に入る。13は表面のみ使用、14は表裏剥離している。10はPit.217出土の常滑窯片口鉢Ⅰ類。11はPit.11出土の常滑窯盤。15・16・17・20は釘で、15はPit.218、16はPit.96、17はPit.221、20はPit.88出土。21・23～25は銅銭で、21はPit.255出土の明道元寶、23はPit.273出土の皇宋通寶、24はPit.104出土の熙寧元寶、25はPit.77出土の元豊通寶。これら銅銭は第4節図28に原寸でも示した。

1～6・27・28は土壙出土遺物。1は土壙10出土の糸切り底のかわらけ。2～4・27・28はは土壙9出土で、2～4は糸切り底のかわらけ、27は銅銭で大観通寶。銅銭は第4節図28に原寸で示した。28は用途不明銅製品で、断面八角形を呈する。5・6は土壙8出土のロクロ成形のかわらけ。　（野本賢二）

図23はⅢ期上層遺構面上の出土遺物で、概ね遺構精査の際に出土したものをここに含めた。

1～5は糸切り底のかわらけ。淡橙色乃至橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。1は灯明皿。6は龍泉窯系青磁天目茶碗。釉は不透明な暗草色、胎土は灰色堅緻である。7・8は瀬戸窯灰釉卸皿で、共に前Ⅲ期の製品。7は灰緑色の釉、胎土は灰色でしまりは良好。8の釉は剥離している。胎土は黄土色でしまりは良好。9は瀬戸窯折縁深皿で、中Ⅲ期の製品。釉は黄色味を帯びた灰緑色で漬掛け。胎土は黄土色、小礫を含む。10～14は常滑窯諸製品。10・11は甕の口縁部。共にN字状に折り返されるタイプで小ぶりな縁帯部を持つ。10は小礫を含むがしまりの良い胎土。器表は暗赤褐色。11は夾雑物の少ないしまりの良い胎土で硬質。器表は茶褐色を呈する。12～14は片口鉢Ⅱ類。12は小礫を含む粗い胎土。口唇部は外

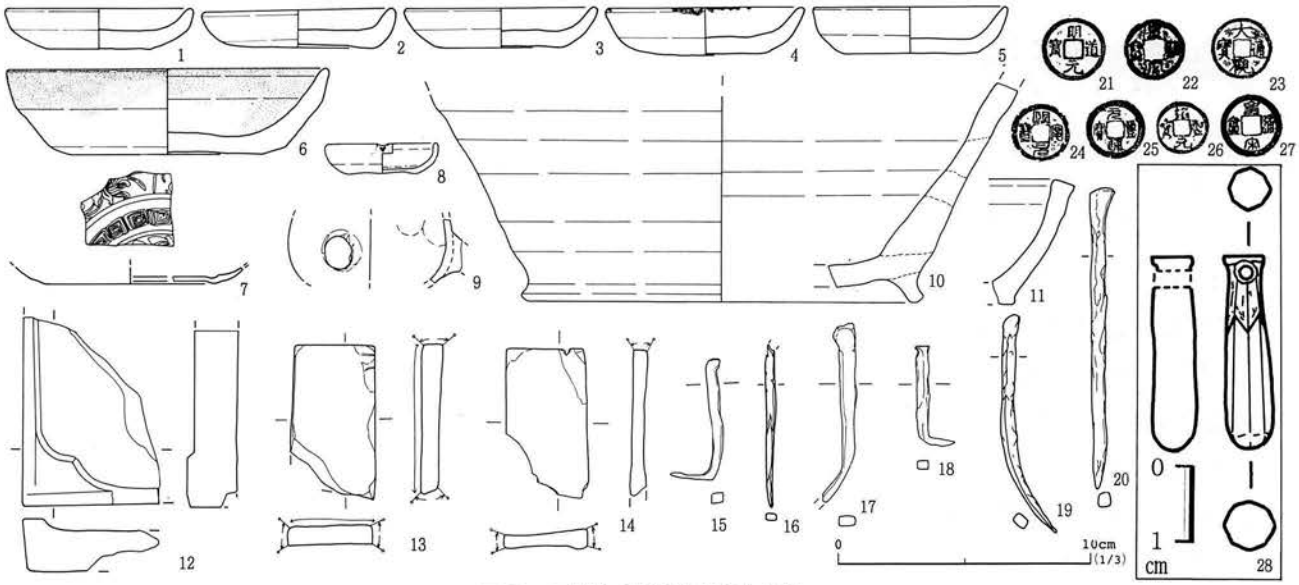


図22　Ⅲ期上層遺構内出土遺物

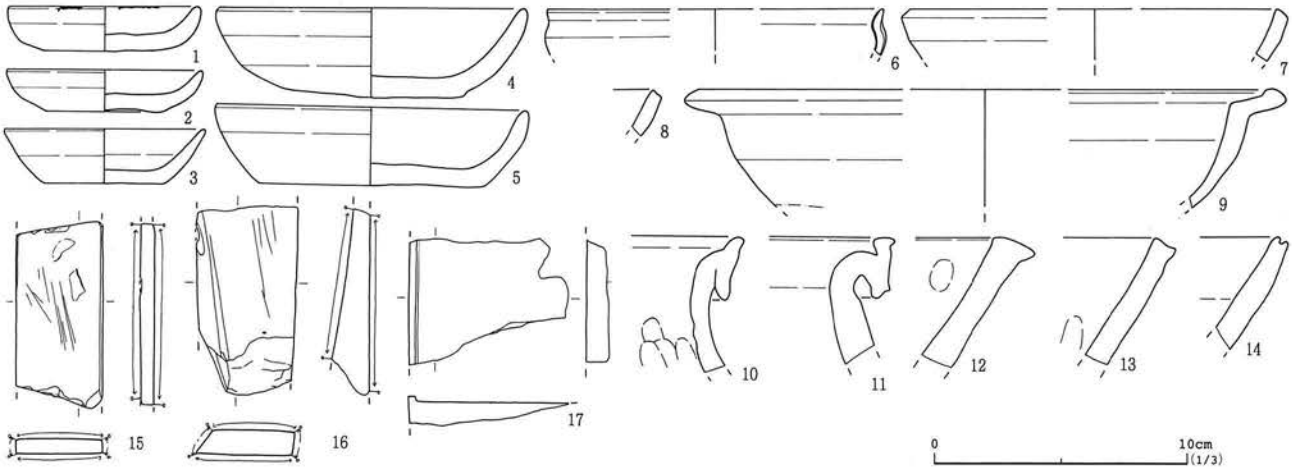


図23　Ⅲ期上層遺構外出土遺物

側にやや強く引かれる。器表は茶褐色を呈する。13は小礫を含む粗い胎土。口唇部はほんのわずか内外に引かれる。器表は灰橙色。14は小礫を含み砂っぽい胎土、口唇頂部が沈線状に窪む。器表は灰黒色を呈す。15・16は共に鳴滝産の仕上砥。15は両側面に生産地加工痕が遺り、表裏2面使用。16の右側面は生産地加工痕が遺るが、左側面は「カワ」から剥離後に面取り再成形する。表裏2面使用。17は赤間ヶ石（紫石）製の硯。左フチ陸部が遺存し、裏面は剥離。

本層位から出土した銅銭7枚（皇宋通寶3、熙寧元寶・元祐通寶・政和通寶・宣和通寶　各1）は、第4節図28に原寸で示した。　（渡邊美佐子）

Ⅲ期最上層の遺構

Ⅲ期最上層はⅠ区のみの調査とし、Ⅱ区ではこの層上面が明確ではなかったため平面的には捉えていない。遺構面は現地表から調査区南東端で約0.8m、海抜10.1mを測る。土器粒・土丹粒・炭化物粒・褐鉄等を含む暗茶褐色粘質土を構成土とし、北西に向けて緩やかに傾斜している。

図24にⅢ期最上層の全測図を提示した。発見した遺構は土壙4基、柱穴58口である。検出遺構数の割にはこの層の性格を示唆する遺構配置は認められないが、下層からの遺構の軸方向がこの層に於いても踏襲されているように思われる。

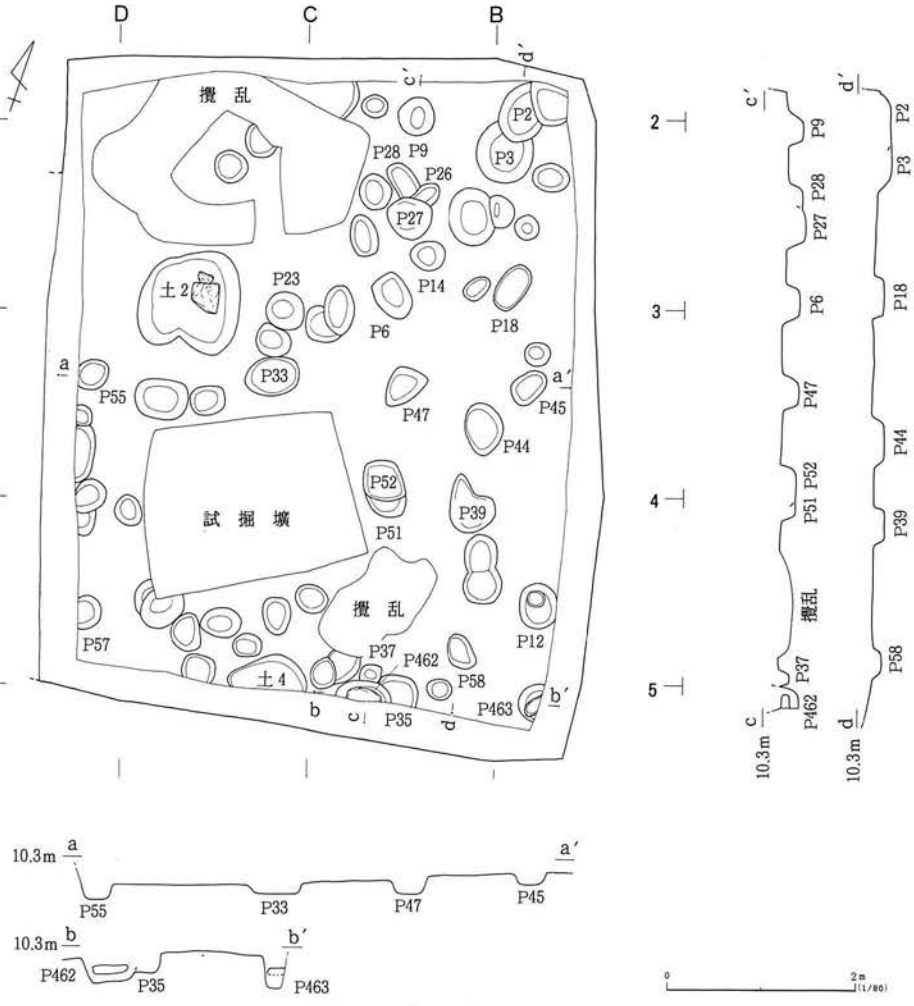


図24　Ⅲ期最上層全測図

土壙１と土壙２は重複関係にあり、土壙１の方が古い。土壙１は東西約65㎝、南北110㎝、確認面からの深さは21.5㎝を測る。底面に鎌倉石が２個据えられている。土壙２は東西約50㎝、南北90㎝、確認面より22.0㎝を測る。Pit.462とPit.463は土層断面より復元した。いずれも伊豆石の礎石を伴い礎石上面の海抜高も10.08ｍと同様である。柱間距離は2.0ｍを測るが建物としては広がらなかった。Pit.12は南北50㎝、東西40㎝、確認面からの深さは4.5㎝、上場径18㎝の柱痕がある。その他のPit.は上場径20㎝～50㎝内外、確認面からの深さ10㎝～25㎝内外を測る。覆土は暗茶褐色弱粘質土でる。　（山上玉恵）

Ⅲ期最上層の出土遺物（図25）

図25の１～10はⅢ期最上層遺構面構成土中、概ね図４の３層からの出土遺物。

１～６は糸切り底のかわらけ。５が橙色を呈する他は、概ね淡橙色を呈する。３は口唇部に煤が若干付着し、灯明皿として使用される。６の胎土は砂っぽく、器形は丸味があって、深く薄い。いずれも胎土・焼成共に良好。７は龍泉窯青磁無文盤の底部片。胎土は灰白色を呈し、釉調は透明な草緑色で高台

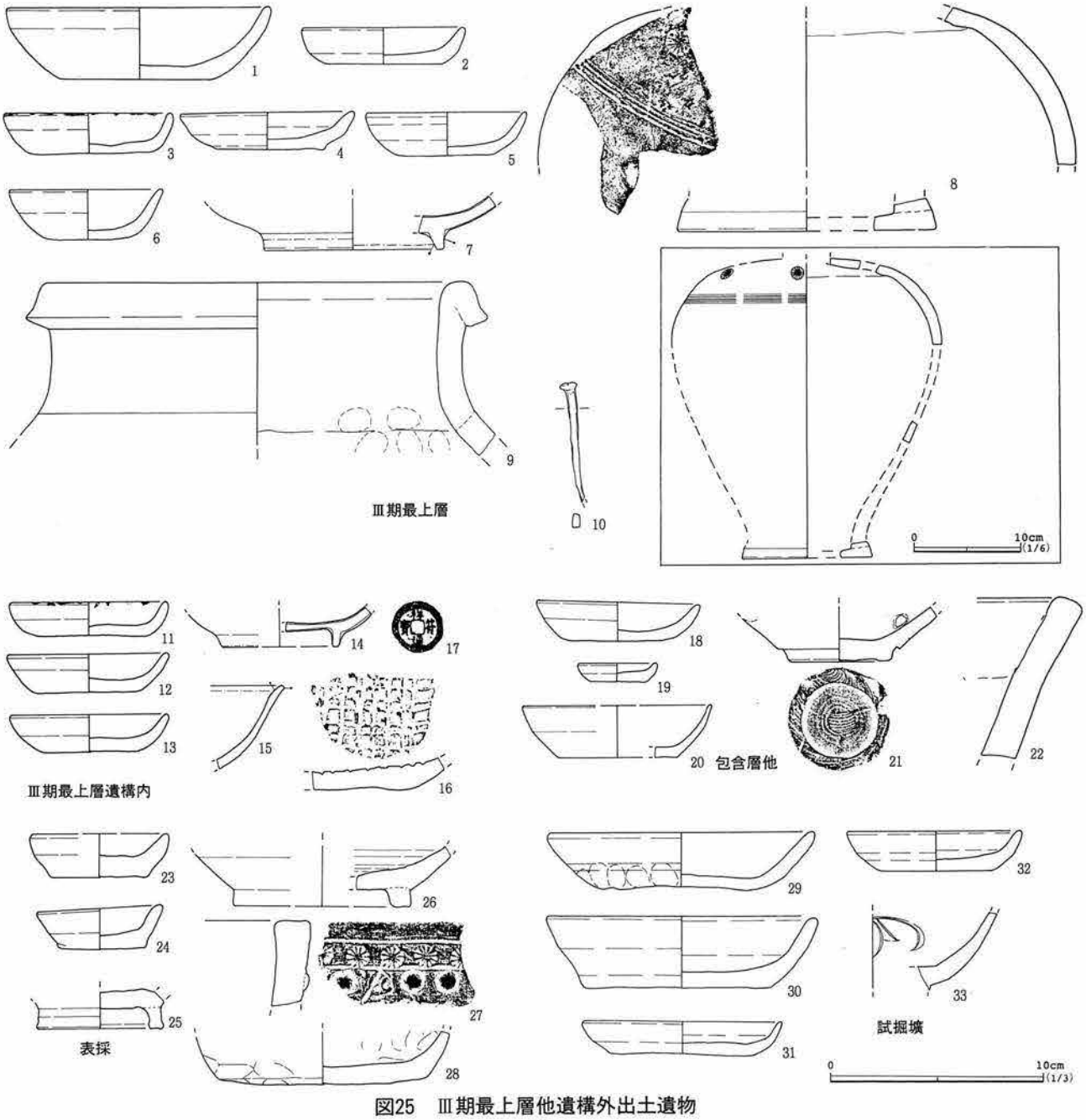


図25　Ⅲ期最上層他遺構外出土遺物

畳付を除いて外底面まで掛けられている。8は瀬戸窯灰釉締腰の瓶子。前Ⅳ期の製品。黄色味がかった灰緑色の釉は漬け掛けされ、肩部に3本の沈線と菊花文スタンプが巡る。瀬戸市埋蔵文化財センター佐野元氏の御教示により、同一個体の数個の破片から肩部・底部を復元・図化したが、この菊花文スタンプの間隔は不明である。9は常滑窯甕の口縁部片。器表は暗茶褐色、胎土は灰褐色を呈し夾雑物少なくしまりが良い。口縁は玉縁状に折り曲げている。外面に降灰がみられ、内面頸部には指頭痕が残る。10は鉄釘。（田畑衣理）

図25の11～17はⅢ期最上層遺構内からの出土遺物。遺物は殆ど全ての遺構から出土しているが、小破片が多く、図示し得た遺物は銅銭を含めて7点である。

11は土壙1出土の糸切り底のかわらけ。器表は灰橙色を呈し、灯明皿として使用される。12は土壙2出土の糸切り底のかわらけ。器表は灰橙色を呈する。13は土壙4出土の糸切り底のかわらけ。器表は橙色を呈する。いずれも胎土・焼成共に良好である。14はPit.23出土の龍泉窯青磁無文皿。体部はゆるやかに立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、釉は灰緑色半透明で高台内迄施釉されるが畳付け部分は露胎である。15はPit.14出土の白磁の碗。薄手の作りで口縁部が外反し、口縁部の釉を拭った所謂口兀の碗である。胎土は灰白色を呈し、若干の気孔を含みややきめが粗い。釉は灰白色半透明である。16はPit.57出土の瀬戸窯灰釉の卸皿。前Ⅲ～中Ⅱ期の製品。胎土は灰褐色を呈しやや軟質。釉は淡灰緑色で刷毛塗りされ、外面は殆ど剥落している。17はPit.12出土の銅銭で祥符通寶。この銅銭は第4節図28に原寸でも示した。

図25の18～22は中世遺物包含層からの出土遺物。現地表下70㎝までの近世以降の堆積土を重機に依り除去後、土丹粒・土器粒を多く含む茶褐色粘質土を検出した。調査時の堆積土上面の観察からは、遺構が発見されなかった為遺物包含層と判断し、人力にて掘下げ遺物を採集した。

18は糸切り底のかわらけ。器表は灰橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。19は極小かわらけ。ロクロ成形。器表は橙色を呈する。20は瀬戸窯の入子。前Ⅲ～中Ⅱ期の製品。器壁は薄く体部中程に稜を持ち内彎ぎみに立ち上がる。外底部はヘラ削りされている。胎土は淡灰色を呈し、内面上位に降灰がみられる。21は瀬戸窯灰釉平碗。後Ⅱ期の製品。外底部は静止糸切りの後に高台を僅かに削り出した痕がみられる。胎土は淡灰黄色を呈し、きめが粗く軟質である。釉は灰黄緑色を呈し、内面と外面下半部まで漬け掛けされている。内面には目痕が残る。22は土器質火鉢Ⅰ類。胎土は軟質で、内面は剥離している。

図25の23～28は採集遺物。調査開始時に重機により掘削した層位や試掘壙内の遺物、調査時に帰属する遺構や層位が分らなくなってしまったものをここに含めた。

22・23は糸切り底のかわらけ。いずれも小型で器表は橙色を呈し、全体的に厚手で器高も高い。25は瀬戸窯灰釉小型三耳壺の高台部分である。胎土は淡灰褐色を呈する。高台畳付と高台内は露胎であるが釉は灰緑色を呈する。内底部に灰緑色の釉がみられるのは、自然釉だろうか。26は産地不明製品。胎土は淡灰褐色を呈し、軟質である。外面体部の釉は剥落しているが刷毛塗りの痕が観られる。27は瓦質火鉢Ⅳ類。口縁下の沈線帯間に12弁小菊花が連続して陰刻され、その下位に連珠文が貼り付けられる。胎土は淡灰橙色を呈する。28は産地不明土器。手捏ね成形。かわらけより硬い胎土で灰褐色を呈する。内面体部に指頭痕が強く残る。外面はナデによる調整が施され、体部は内彎ぎみに立ち上がる。28は版組後に接合破片が見つかり、本来なら帰属はⅢ期下層遺構Pit.313となる。（山上玉恵）

図25の29～33は試掘壙内の出土遺物。

29～32はかわらけ。29は手捏ね成形で淡橙色を呈する。他は全て糸切り底で、31が淡灰褐色を呈する他は橙色を呈する。いずれも胎土・焼成共に良好。33は龍泉窯青磁劃花文碗。素地は灰色で釉調はくすんだ灰緑色を呈し、堅緻である。（田畑衣理）

第４節　出土遺物一覧

【出土銅銭について】（図26～28・表１～３）

本調査で出土した銅銭は、全層位・遺構内を併せて55枚を数える。内、３枚は破損等により遺存状態が極めて悪く、拓影・図化し得たのは52枚である。遺構内に埋置されていたり或は生活面上に撒かれた様な出土状況は確認されず、いわば覆土中に単品で無秩序に出土している。本報告に於いては、遺構外各層位から出土した銅銭については、単独で分離・抜出しても本調査の理解や解釈には影響ないと判断し、図26～28に拓影を実寸にて図示した。遺構内から出土した銅銭については、他の出土遺物と共に縮尺1/3で図示しているが、ここに再度実寸にて含めた。

〈引用・参考文献〉　永井久美男 編　『日本出土銭総覧　1996年版』　1996　兵庫県埋蔵銭調査会

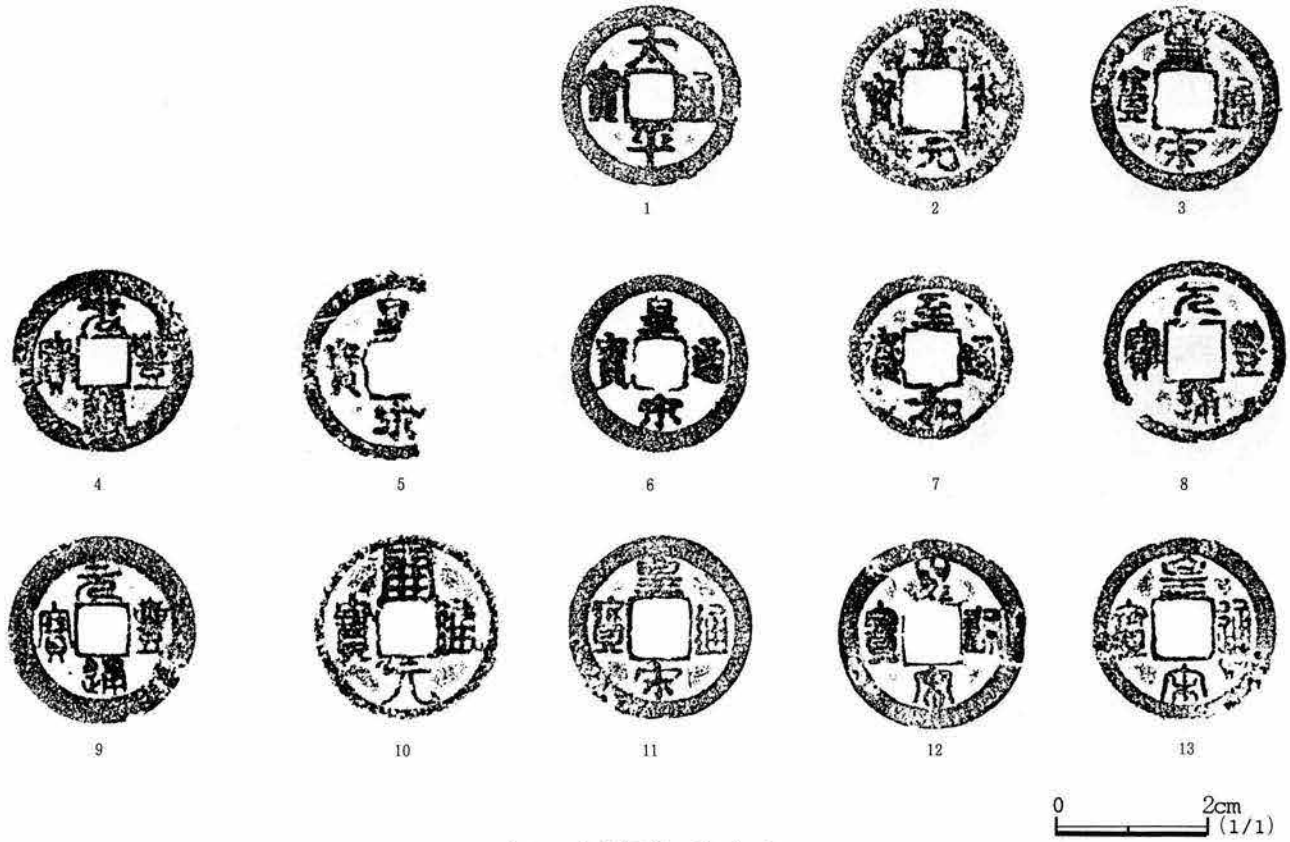


表１　出土銅銭一覧（１）

図26	遺構・層位	図No.—遺物No.	銭種	時代	初鋳年	字体	備考
1	Ⅱ期中層	—	太平通宝	北宋	976	楷書	
2	Ⅱ期中層	—	嘉祐元宝	北宋	1056	楷書	
3	Ⅱ期上層 Pit. 321	15－51	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
4	Ⅱ期上層 Pit. 331	15－52	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
5	Ⅱ期上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
6	Ⅱ期上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
7	Ⅱ期上層	—	至和通宝	北宋	1054	楷書	
8	Ⅱ期上層	—	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
9	Ⅱ期上層	—	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
10	Ⅲ期下層	—	開元通宝	唐	621	楷書	
11	Ⅲ期下層	—	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
12	Ⅲ期下層	—	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	
13	Ⅲ期下層	—	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	

註）訂正：銭種欄「宝」→「寶」。以下表３まで同。

図26　出土銅銭拓影（１）

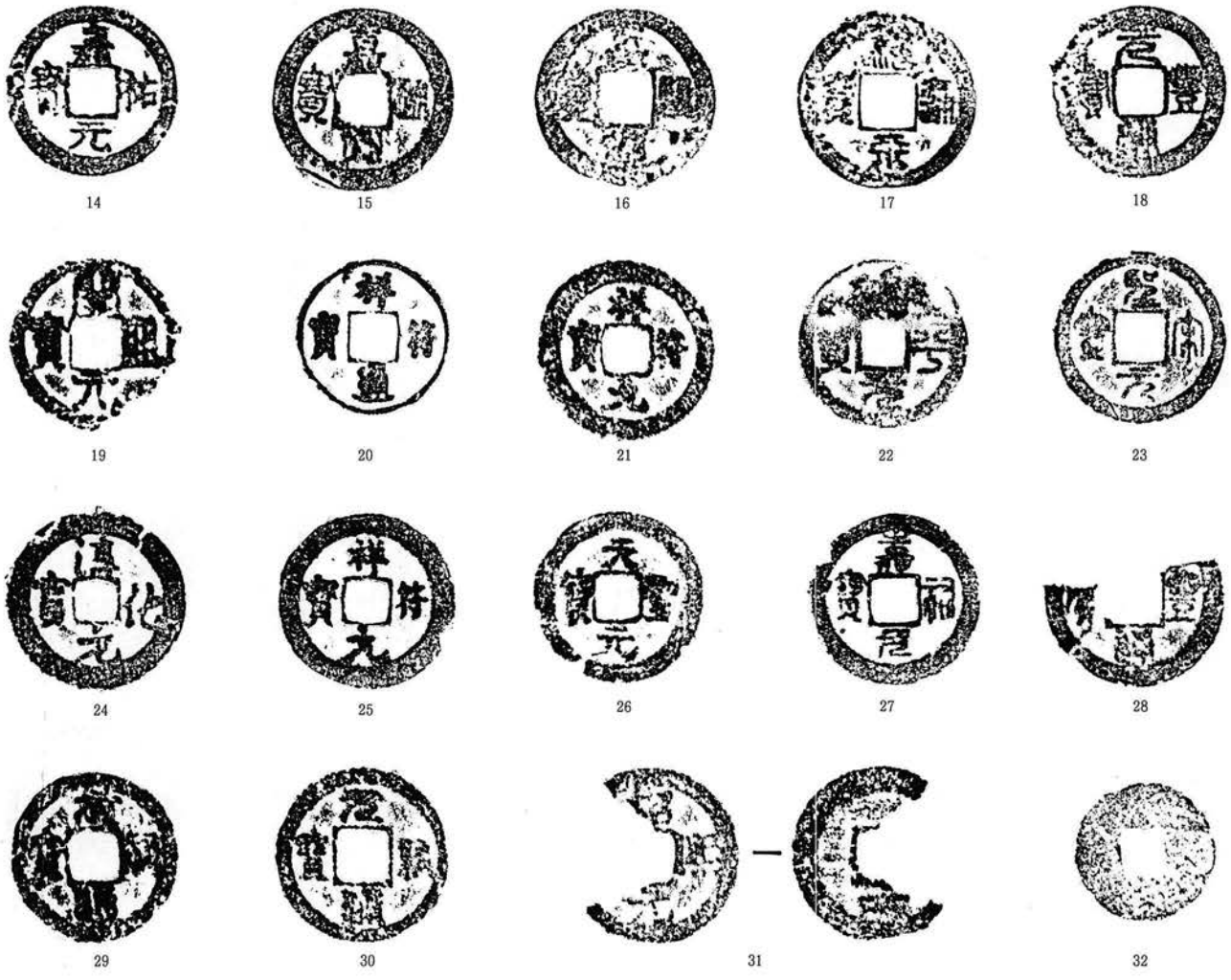


表２　出土銅銭一覧（２）

図27	遺構・層位	図No.—遺物No.	銭種	時代	初鋳年	字体	備考
14	Ⅲ期下層	—	嘉祐元宝	北宋	1056	楷書	
15	Ⅲ期下層	—	嘉祐通宝	北宋	1056	篆書	
16	Ⅲ期下層	—	嘉祐通宝	北宋	1056	篆書	
17	Ⅲ期下層	—	治平通宝	北宋	1064	篆書	
18	Ⅲ期下層	—	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
19	Ⅲ期下層方竪状遺構	19－39	開元通宝	唐	621	楷書	
20	Ⅲ期下層方竪状遺構	19－40	祥符通宝	北宋	1009	楷書	
21	Ⅲ期下層方竪状遺構	19－41	祥符元宝	北宋	1009	楷書	
22	Ⅲ期下層 Pit. 319	19－42	治平元宝	北宋	1064	篆書	
23	Ⅲ期下層 Pit. 307	19－43	聖宋元宝	北宋	1101	篆書	
24	Ⅲ期中層	—	淳化元宝	北宋	990	行書	
25	Ⅲ期中層	—	祥符元宝	北宋	1009	楷書	
26	Ⅲ期中層	—	天聖元宝	北宋	1023	楷書	
27	Ⅲ期中層	—	嘉祐元宝	北宋	1056	篆書	
28	Ⅲ期中層	—	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
29	Ⅲ期中層	—	元祐通宝	北宋	1086	篆書	
30	Ⅲ期中層	—	元祐通宝	北宋	1086	篆書	
31	Ⅲ期中層	—	紹熙元宝	南宋	1190	楷書	背文「四」
32	Ⅲ期中層	—	（無文銭）				

図27　出土銅銭拓影（２）

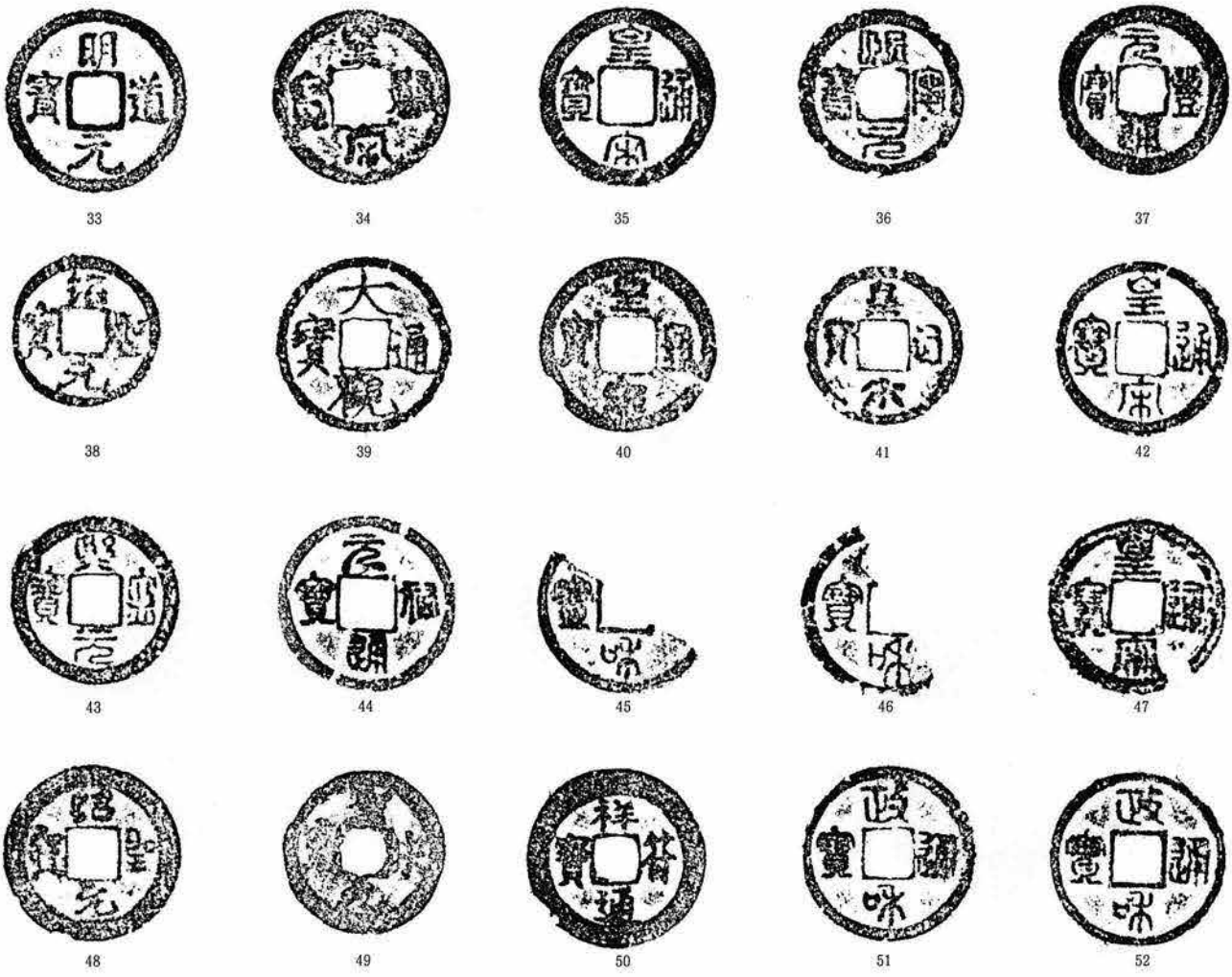


図28	遺構・層位	図No.—遺物No.	銭種	時代	初鋳年	字体	備考
33	Ⅲ期上層 Pit. 255	22—21	明道元宝	北宋	1032	楷書	
34	Ⅲ期上層 Pit. 224	22—22	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	
35	Ⅲ期上層 Pit. 273	22—23	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	
36	Ⅲ期上層 Pit. 104	22—24	熙寧元宝	北宋	1068	篆書	
37	Ⅲ期上層 Pit. 77	22—25	元豊通宝	北宋	1078	篆書	
38	Ⅲ期上層 Pit. 100	22—26	紹聖元宝	北宋	1094	行書	
39	Ⅲ期上層 土壙9	22—27	大観通宝	北宋	1107	楷書	
40	Ⅲ期上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
41	Ⅲ期上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	楷書	
42	Ⅲ期上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	
43	Ⅲ期上層	—	熙寧元宝	北宋	1068	篆書	
44	Ⅲ期上層	—	元祐通宝	北宋	1086	篆書	
45	Ⅲ期上層	—	政和通宝	北宋	1111	篆書	
46	Ⅲ期上層	—	宣和通宝	北宋	1119	篆書	
47	Ⅲ期最上層	—	皇宋通宝	北宋	1038	篆書	
48	Ⅲ期最上層	—	紹聖元宝	北宋	1094	行書	
49	Ⅲ期最上層	—	聖宋元宝	北宋	1101	行書	
50	Ⅲ期最上層 Pit. 12	25—17	祥符通宝	北宋	1009	楷書	
51	Ⅲ期最上層 包含層中	—	政和通宝	北宋	1111	篆書	
52	表採	—	政和通宝	北宋	1111	篆書	

（表3～5　作成　山上玉恵）

図28　出土銅銭拓影（3）

【常滑窯甕押印文拓影】（図29～30・表４～５）

本調査で出土した常滑窯甕片に、押印文が観察された破片は57点に上る。図29・30には、その内文様がほぼ明確に観察される破片の拓影を縮尺１/２にてまとめて図示し、生産地資料から類する押印文種を併せて図示した。尚、同一個体の可能性がある破片には、一つの遺物番号を付した。

〈引用・参考文献〉
中野晴久　「中世知多古窯址群の押印文　―ミクロ流通史のための予備的研究―」　『知多半島の歴史と現在 No.４』　1992
日本福祉大学知多半島総合研究所　校倉書房

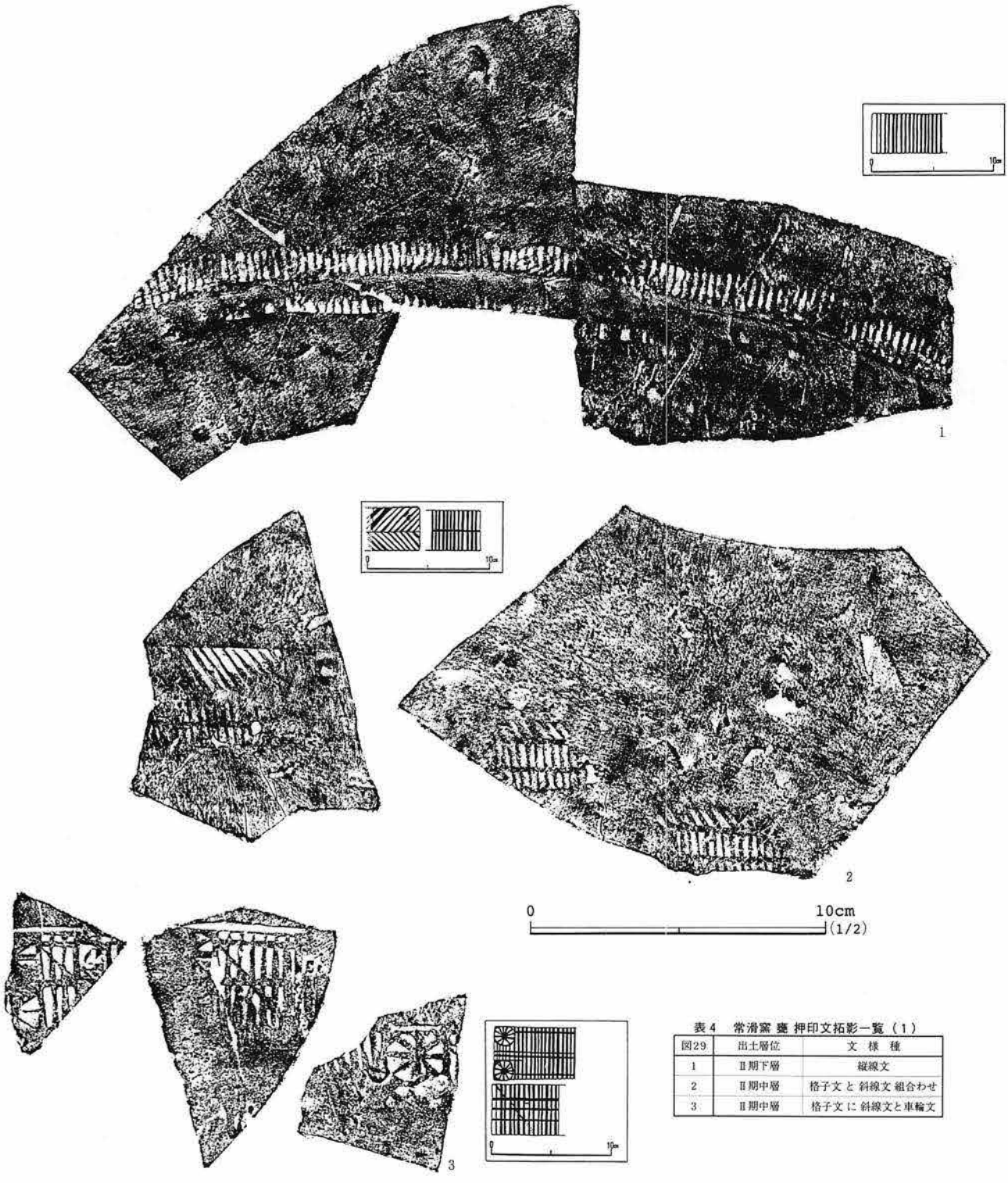


表４　常滑窯 甕 押印文拓影一覧（１）

図29	出土層位	文 様 種
1	Ⅱ期下層	縦線文
2	Ⅱ期中層	格子文と斜線文組合わせ
3	Ⅱ期中層	格子文に斜線文と車輪文

図29　出土常滑窯甕押印文拓影（１）

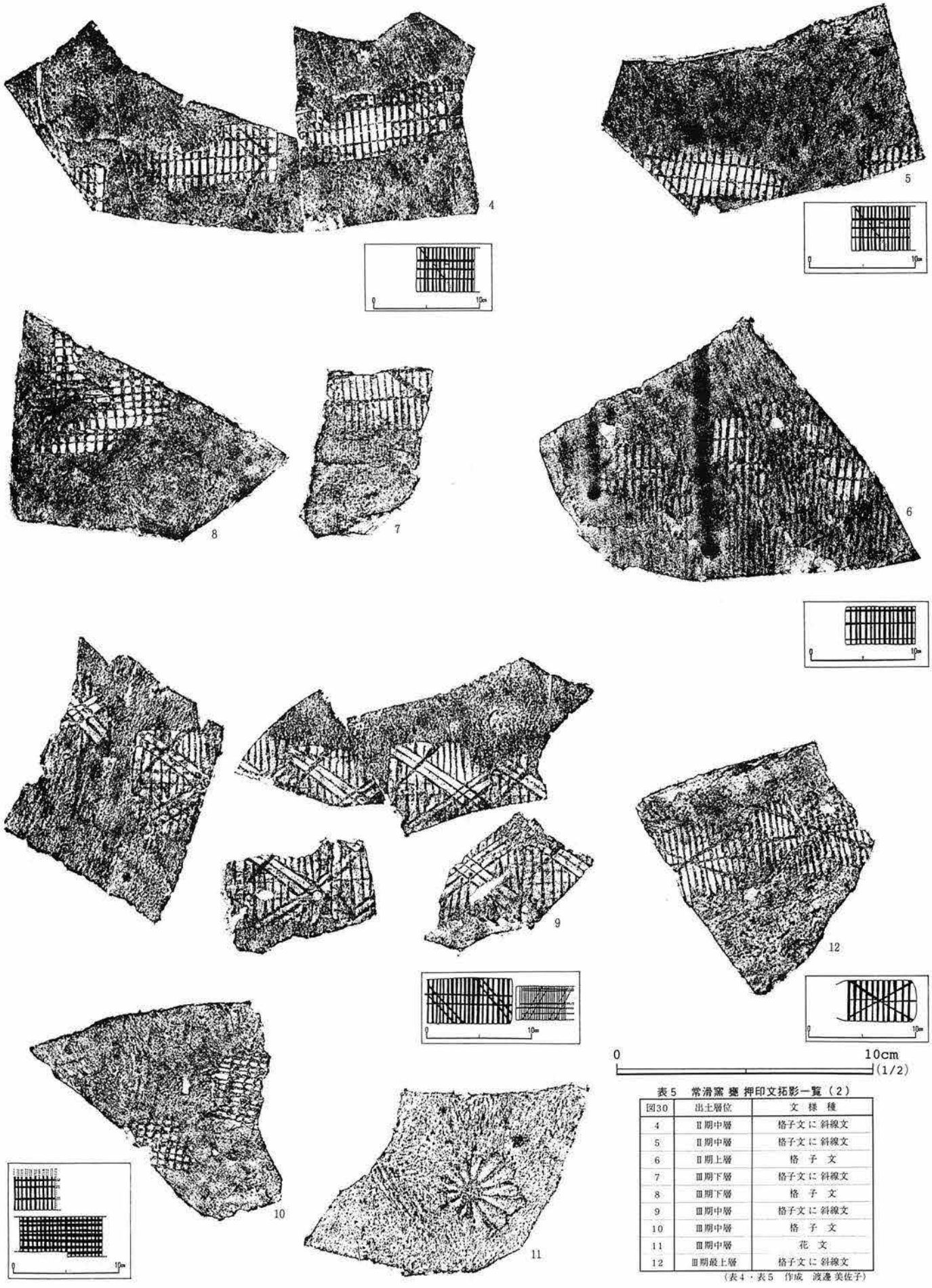


表5　常滑窯甕押印文拓影一覧（2）

図30	出土層位	文様種
4	Ⅱ期中層	格子文に斜線文
5	Ⅱ期中層	格子文に斜線文
6	Ⅱ期上層	格子文
7	Ⅲ期下層	格子文に斜線文
8	Ⅲ期下層	格子文
9	Ⅲ期中層	格子文に斜線文
10	Ⅲ期中層	格子文
11	Ⅲ期中層	花文
12	Ⅲ期最上層	格子文に斜線文

（表4・表5　作成　渡邉美佐子）

図30　出土常滑窯甕押印文拓影（2）

【出土遺物法量表】（表６～10）

・表は、報文中掲載出土遺物を各遺構・層位毎に示し、挿図順に作成した。
・図26～30に別掲した銅銭と押印文の捺された常滑窯の甕は、帰属する遺構・層位末に記載した。
・器もののの口径と底径は、基本的には正・伏位で接地面(点)を測り、器高は正位にて安定した状態での、底部接地面の垂直高を測った。また、（　）付の数値は、1/2以下の遺存から復元したものを顕す。
・他の遺物は安定した状態で置いたときの目視最大値を測った。[　]付の数値は残存値を顕す。
・土器類かわらけの「手」は手捏ね成形、「糸」は外底面糸切り成形、「白」は白かわらけを顕す。
・常滑窯片口鉢の分類は、全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集 報告１ 赤羽・中野「生産地における編年について」 中野晴久 1994 日本福祉大学知多半島総合研究所 に拠った。Ⅰ類は還元焔焼成で山茶碗窯系捏鉢と呼び慣わされてきたもの、Ⅱ類は酸化焔焼成で所謂常滑窯捏鉢である。
・火鉢の表現と分類は、河野眞知郎「中世鎌倉火鉢考 ―東国との関連において―」『考古論叢 神奈川』第２集　1993年４月　神奈川県考古学会に拠った。
・表６～表11中の銅銭名称末字「宝」は「寶」に訂正する。

【出土遺物破片数】（表11）

・表中の項目は、鎌倉市内の調査で普遍的に出土する遺物種に拠った。破片数は接合前単純破片数であり、本調査で出土していない遺物も項目を設け破片数０の時は空欄とした。
・総破片数に対する各遺物の割合を％で示し、各期毎の割合は下段に棒グラフで示した。

表６　遺物計測表（１）

時期	層位 遺構名	遺物No.	種別	計測値 単位 cm ( )=復元値 [ ]=残存値			写真図版
Ⅰ期	下層	図８－１	土器類 かわらけ・手	口径 (15.1)			6
		－２	中国 白磁 端反碗	口径 (15.6)			
	Pit.198	－３	土器類 かわらけ・手	口径 8.8		器高 2.0	6
	土壙32	－４	土器類 かわらけ・手	口径 9.1		器高 2.3	6
	Pit.189	－５	土器類 かわらけ・糸	口径 9.0	底径 6.4	器高 1.8	
	Pit.193	－６	土器類 かわらけ・手	口径 (12.8)			
	Pit.198	－７	中国 青白磁 合子 蓋	口径 (5.0)		器高 1.4	
	上層	－８	土器類 かわらけ・手	口径 13.5		器高 3.3	6
Ⅱ期	最下層	図１０－１	土器類 かわらけ・手	口径 (9.8)		器高 1.9	
		－２	土器類 かわらけ・手	口径 9.6		器高 2.1	
		－３	土器類 かわらけ・手	口径 (9.5)		器高 1.6	
		－４	土器類 かわらけ・糸	口径 (9.3)	底径 (5.9)	器高 2.1	
		－５	土器類 かわらけ・手	口径 14.4		器高 3.4	
		－６	土器類 かわらけ・手	口径 (14.6)		器高 3.4	
		－７	土器類 かわらけ・手	口径 13.6		器高 3.5	
		－８	同安窯系 青磁 櫛描文碗				
		－９	中国 青白磁 合子 蓋	口径 (4.7)			
		－10	渥美窯 片口鉢		底径 (9.4)		
	下層(1)	図１０－11	土器類 かわらけ・手	口径 (9.0)		器高 1.7	
		－12	土器類 かわらけ・手	口径 (9.2)		器高 (1.8)	
		－13	土器類 かわらけ・手	口径 8.9		器高 1.9	
		－14	土器類 かわらけ・手	口径 (8.8)		器高 1.5	
		－15	土器類 かわらけ・手	口径 8.8		器高 1.5	6
		－16	土器類 かわらけ・手	口径 9.4		器高 2.0	6
		－17	土器類 かわらけ・手	口径 (9.0)		器高 1.7	
		－18	土器類 かわらけ・手	口径 (9.3)		器高 1.6	
Ⅱ期	下層(1)	図１０－19	土器類 かわらけ・手	口径 (8.6)		器高 (2.0)	
		－20	土器類 かわらけ・手	口径 (14.1)		器高 (3.3)	
		－21	土器類 かわらけ・手	口径 13.8		器高 3.7	
		－22	土器類 かわらけ・手	口径 (12.9)		器高 3.1	
		－23	土器類 かわらけ・手	口径 (13.1)		器高 3.5	
		－24	土器類 かわらけ・糸	口径 (9.3)	底径 (7.0)	器高 1.7	
		－25	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.6)	底径 (7.6)	器高 1.8	
		－26	常滑窯 片口鉢 Ⅱ類				
		図２９－１	常滑窯 甕 押印文拓影				8
	土壙209	図１０－27	土器類 かわらけ・手	口径 (9.5)		器高 (2.2)	
	Pit.383	－28	土器類 かわらけ・手	口径 8.8		器高 1.9	
	Pit.380	－29	土器類 かわらけ・手	口径 (13.7)		器高 3.2	
	Pit.422	－30	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.6)	底径 (7.3)	器高 1.4	
	下層(2)	図１０－31	土器類 かわらけ・手	口径 (8.6)		器高 1.5	
		－32	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.7)	底径 (6.0)	器高 1.6	
		－33	土器類 かわらけ・手	口径 (12.8)			
	Pit.431	図１０－34	土器類 かわらけ・手・白	口径 (5.6)		器高 0.7	
	Pit.162	－35	土器類 かわらけ・手	口径 9.3		器高 1.8	
	Pit.167	－36	土器類 かわらけ・手	口径 8.7		器高 1.8	
	Pit.171	－37	土器類 かわらけ・手	口径 8.7		器高 1.9	
	土壙25	－38	土器類 かわらけ・手	口径 (9.9)		器高 1.5	
		－39	土器類 かわらけ・手	口径 9.3		器高 1.8	6
	土壙26	－40	土器類 かわらけ・手	口径 (10.7)		器高 (2.1)	
		－41	土器類 かわらけ・糸	口径 (9.0)	底径 (6.4)	器高 1.7	
	土壙27	－42	土器類 かわらけ・手	口径 (12.7)		器高 (3.0)	
	土壙28	－43	土器類 かわらけ・手	口径 13.3		器高 3.2	6

表7　遺物計測表（2）　単位　cm

II期	Pit.456	−44	土器類 かわらけ・手	口径 12.9　器高 3.2	
	土壙26	−45	同安窯系 青磁 櫛描文皿	底径 5.0	
	土壙28	−46	常滑窯 片口鉢 II類	口径 30.9　底径 15.0　器高 11.6	7
	Pit.154	−47	石製品 滑石製 石鍋	口径 (21.0)	
	中層(1)	図12−1	土器類 かわらけ・手	口径 (13.8)	
		−2	土器類 かわらけ・手	口径 (13.2)　器高 3.3	6
		−3	土器類 かわらけ・手	口径 (13.1)　器高 2.9	
		−4	土器類 かわらけ・手	口径 13.6　器高 3.1	6
		−5	土器類 かわらけ・手	口径 13.3　器高 3.4	
		−6	土器類 かわらけ・糸	口径 12.0　底径 7.6　器高 3.7	
		−7	土器類 かわらけ・糸	口径 13.4　底径 8.8　器高 3.1	6
		−8	土器類 かわらけ・手	口径 8.0　器高 1.7	
		−9	土器類 かわらけ・手	口径 8.5　器高 1.6	6
		−10	土器類 かわらけ・手	口径 8.8　器高 1.5	
		−11	土器類 かわらけ・手	口径 8.5　器高 1.7	
		−12	土器類 かわらけ・手	口径 8.9　器高 1.8	
		−13	土器類 かわらけ・手	口径 (8.7)　器高 2.0	
		−14	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.9)　底径 (6.4)　器高 1.7	
		−15	土器類 かわらけ・糸	口径 (9.1)　底径 (7.0)　器高 1.7	
		−16	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.8)　底径 (6.5)　器高 2.1	6
		−17	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.8)　底径 (6.0)　器高 1.7	
		−18	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.8)　底径 (7.2)　器高 2.1	
		−19	龍泉窯系 青磁 無文碗	口径 (15.0)	
		−20	龍泉窯系 青磁 盤	底径 (8.2)	
		−21	景徳鎮窯 青白磁 合子 蓋	口径 (6.4)	
		−22	土器質 火鉢 I類		
		図26−1	銅銭 北宋 太平通宝	楷書　初鋳年　976年	
		−2	銅銭 北宋 嘉祐元宝	楷書　初鋳年　1056年	
		図29−2	常滑窯 甕 押印文拓影		
		−3	常滑窯 甕 押印文拓影		8
	中層(2)	図13−1	土器類 かわらけ・手	口径 8.2　器高 1.5	
		−2	土器類 かわらけ・手	口径 9.2　器高 1.5	
		−3	土器類 かわらけ・手	口径 (8.9)　器高 1.7	
		−4	土器類 かわらけ・手	口径 (8.9)　器高 1.4	
		−5	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.9)　底径 (6.0)　器高 1.4	
		−6	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.8)　底径 (5.4)　器高 1.9	
		−7	土器類 かわらけ・手	口径 (13.8)　器高 2.8	
		−8	土器類 かわらけ・手	口径 (13.8)　器高 2.6	
		−9	土器類 かわらけ・手	口径 (13.2)　器高 3.2	
		−10	土器類 かわらけ・手	口径 12.8　器高 3.5	6
		−11	龍泉窯系 青磁 鎬蓮弁文碗	口径 15.2	
		−12	龍泉窯系 青磁 無文碗	口径 (15.9)	
		−13	常滑窯 甕		
		−14	常滑窯 片口鉢 II類		
		−15	常滑窯 片口鉢 II類		
		図30−4	常滑窯 甕 押印文拓影		
		−5	常滑窯 甕 押印文拓影		
	土壙16	図15−1	土器類 かわらけ・手	口径 8.4　器高 1.5	
	土壙18〜20	−2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5　底径 5.1　器高 1.6	
		−3	土器類 かわらけ・糸	口径 7.9　底径 5.8　器高 1.8	

II期	土壙18〜20	−4	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6　底径 5.1　器高 1.4	
		−5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8　底径 5.3　器高 1.6	
	土壙19下層	−6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.9　底径 5.2　器高 2.5	
		−7	土器類 かわらけ・糸	口径 7.9　底径 5.0　器高 1.4	6
		−8	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4　底径 4.8　器高 1.8	
		−9	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7　底径 6.0　器高 1.8	
	土壙23	−10	土器類 かわらけ・糸	口径 7.0　底径 4.7　器高 1.6	
	土壙24	−11	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7　底径 5.5　器高 1.6	
	Pit.344	−12	土器類 かわらけ・手	口径 8.8　器高 1.8	
	Pit.110	−13	土器類 かわらけ・糸	口径 8.7　底径 6.2　器高 1.9	
		−14	土器類 かわらけ・糸	口径 8.3　底径 6.4　器高 2.0	
		−15	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0　底径 6.0　器高 1.7	6
		−16	土器類 かわらけ・糸	口径 8.3　底径 6.2　器高 1.9	
	Pit.338	−17	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8　底径 5.6　器高 1.7	
	Pit.355	−18	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7　底径 4.8　器高 2.0	
	土壙13	−19	土器類 かわらけ・手	口径 (13.6)　器高 3.5	
	土壙16	−20	土器類 かわらけ・手	口径 (13.7)　器高 3.1	
	土壙19下層	−21	土器類 かわらけ・糸	口径 12.6　底径 8.2　器高 3.3	6
		−22	土器類 かわらけ・糸	口径 12.4　底径 7.5　器高 2.5	
		−23	土器類 かわらけ・糸	口径 12.6　底径 7.4　器高 3.3	
		−24	土器類 かわらけ・糸	口径 12.4　底径 7.8　器高 3.1	
		−25	土器類 かわらけ・糸	底径 6.6	6
		−26	土器類 かわらけ・糸	口径 12.4　底径 7.4　器高 3.3	6
		−27	土器類 かわらけ・糸	口径 13.1　底径 8.0　器高 3.3	
	Pit.121	−28	土器類 かわらけ・糸	口径 12.5　底径 7.7　器高 3.0	
		−29	土器類 かわらけ・手	口径 11.7　器高 3.5	
	Pit.358	−30	土器類 かわらけ・手	口径 13.6　器高 3.6	
	Pit.327	−31	土器類 かわらけ・糸	口径 13.0　底径 9.5　器高 3.2	
	土壙18〜20	−32	龍泉窯系 青磁 鎬蓮弁文碗	口径 16.0	
	Pit.338	−33	龍泉窯系 青磁 無文碗	口径 (11.8)	
	Pit.139 1-10	−34	龍泉窯系 青磁 鎬蓮弁文碗	底径 4.0	
	土壙18〜20	−35	中国 白磁 口兀皿	口径 10.9　底径 6.0　器高 3.1	7
	Pit.342	−36	中国 褐釉陶器 壺	口径 9.6	
	Pit.361	−37	常滑窯 片口鉢 I類	口径 (31.0)　底径 (12.9)　器高 14.1	
	土壙13	−38	常滑窯 片口鉢 II類		
	土壙17	−39	常滑窯 片口鉢 II類		
	土壙19下層	−40	常滑窯 片口鉢 II類		
		−41	常滑窯 片口鉢 II類		
		−42	常滑窯 片口鉢 II類		
	土壙18〜20	−43	常滑窯 片口鉢 II類		
	Pit.142	−44	常滑窯 片口鉢 II類		
	Pit.118	−45	常滑窯 甕		
	Pit.121	−46	土器類 橄榄・瓦器碗	口径 10.0　底径 5.0　器高 2.9	
	Pit.139 1-10	−47	土器類 かわらけ質・仏具	底径 3.3	
	Pit.338	−48	土器類 かわらけ質・円盤	径 2.8　厚さ 0.8	
	土壙24	−49	瓦 平瓦	長さ [16.0]　幅 [14.0]　厚さ 2.2	
	Pit.361	−50	瓦 平瓦	長さ [9.7]　幅 [18.1]　厚さ 2.4	
	Pit.321	−51	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書　初鋳年　1038年	
	Pit.331	−52	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書　初鋳年　1078年	
	土壙18〜20	−53	鉄製品 釘	長さ [9.5]　太さ [0.6]	

表8　遺物計測表（3）　単位　cm

II期	土壙18～20	－54	石製品 伊予産 中砥	長さ [6.6]	幅 5.1	厚さ [4.6]		8
	Pit.372	－55	石製品 鳴滝産 仕上砥	長さ [4.0]	幅 2.6	厚さ [1.0]		8
	Pit.361	－56	骨角製品 （用途不明）					
	上層	図16－1	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 5.1	器高 1.5		
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.2	底径 5.4	器高 1.5		
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7	底径 5.2	器高 1.4		
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.9	器高 1.4		
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 5.2	器高 1.5		
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 5.0	器高 1.5		
		－7	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.0	器高 1.8		
		－8	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.6	器高 1.8		
		－9	土器類 かわらけ・糸	口径 7.9	底径 5.6	器高 1.7		6
		－10	土器類 かわらけ・手	口径 9.0		器高 1.8		
		－11	土器類 かわらけ・手	口径 (14.0)		器高 3.5		
		－12	土器類 かわらけ・糸	口径 (13.8)	底径 (8.8)	器高 3.1		
		－13	土器類 かわらけ・糸	口径 (13.2)	底径 (8.2)	器高 3.6		
		－14	龍泉窯系 青磁 無文 盤	口径 (23.4)				
		－15	同安窯系？ 青磁 櫛描文皿	口径 9.8	底径 4.4	器高 1.9		
		－16	景徳鎮窯 青白磁 印花文皿	口径 (7.7)				
		－17	中国 褐釉陶器 壺					
		－18	中国 白磁 口兀碗	口径 (13.4)				
		－19	中国 青白磁 合子 身	口径 (6.9)	底径 (7.0)	器高 1.5		
		－20	瀬戸窯 入子	口径 (7.9)				
		－21	瀬戸窯 灰釉 洗					
		－22	亀山窯 甕	口径 (45.0)				7
		－23	常滑窯 甕					
		－24	常滑窯 片口鉢 II類					
		－25	常滑窯 片口鉢 II類					
		－26	常滑窯 片口鉢 II類					
		－27	渥美窯 捏鉢					
		－28	渥美窯 捏鉢					
		－29	石製品 滑石製 石鍋	口径 17.0				
		図26－5	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書	初鋳年 1038 年			
		－6	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書	初鋳年 1038 年			
		－7	銅銭 北宋 至和通宝	楷書	初鋳年 1054 年			
		－8	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書	初鋳年 1078 年			
		－9	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書	初鋳年 1078 年			
		図30－6	常滑窯 甕 押印文拓影					
III期	下層	図18－1	瓦質 火鉢 IV類		底径 (31.6)			8
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径 (6.7)	底径 (4.9)	器高 1.7		
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 6.9	底径 5.4	器高 1.4		
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 6.0	器高 1.6		
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.2	器高 1.5		
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4	底径 5.0	器高 1.8		
		－7	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 5.6	器高 1.5		
		－8	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 4.6	器高 1.8		
		－9	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.5)	底径 (5.0)	器高 1.6		
		－10	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 5.1	器高 1.8		
		－11	土器類 かわらけ・糸	口径 8.1	底径 5.7	器高 1.7		
		－12	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 5.2	器高 2.0		
III期	下層	図18－13	土器類 かわらけ・糸	口径 12.7	底径 7.6	器高 3.7		
		－14	土器類 かわらけ・糸	口径 11.9	底径 7.2	器高 3.4		
		－15	土器類 かわらけ・糸	口径 (12.0)	底径 (8.1)	器高 2.9		
		－16	土器類 かわらけ・糸	口径 12.4	底径 8.1	器高 3.5		
		－17	龍泉窯系 青磁 鎬蓮弁文碗					
		－18	龍泉窯系 青磁 鎬蓮弁文碗					
		－19	景徳鎮窯 青白磁 梅瓶 蓋	口径 5.6		器高 3.5		7
		－20	景徳鎮窯 青白磁 合子 身	口径 (7.8)	底径 (4.8)	器高 1.9		
		－21	中国 白磁 合子 蓋	口径 (6.4)				
		－22	瀬戸窯 灰釉 卸皿	口径 14.7				
		－23	常滑窯 甕	口径 (20.2)				
		－24	常滑窯 甕					
		－25	常滑窯 甕					
		－26	常滑窯 片口鉢 II類					
		－27	常滑窯 片口鉢 I類					
		－28	常滑窯 片口鉢 I類					
		－29	常滑窯 片口鉢 I類					
		－30	常滑窯 片口鉢 I類					
		－31	土器質 火鉢 I類					
		－32	瓦器質 火鉢 III類					8
		－33	石製品 丹波・鳴滝山系 砥	長さ 14.7	幅 12.1	厚さ 1.9		
		－34	石製品 赤間ヶ石製 砥	長さ [5.0]	幅 [2.9]	厚さ 1.8		
		－35	石製品 伊予産 中砥	長さ [4.1]	幅 2.6	厚さ [1.5]		8
		－36	石製品 伊予産 中砥	長さ [6.9]	幅 [5.3]	厚さ [4.0]		8
		－37	鉄製品 釘	長さ [7.5]		厚さ [0.7]		
		－38	鉄製品 刀子	長さ [19.7]	幅 [2.6]	厚さ [0.4]		
		図26－10	銅銭 唐 開元通宝	楷書	初鋳年 621 年			
		－11	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書	初鋳年 1038 年			
		－12	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年 1038 年			
		－13	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年 1038 年			
		図27－14	銅銭 北宋 嘉祐元宝	楷書	初鋳年 1056 年			
		－15	銅銭 北宋 嘉祐通宝	篆書	初鋳年 1056 年			
		－16	銅銭 北宋 嘉祐通宝	篆書	初鋳年 1056 年			
		－17	銅銭 北宋 治平通宝	篆書	初鋳年 1064 年			
		－18	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書	初鋳年 1078 年			
		図30－7	常滑窯 甕 押印文拓影					
		－8	常滑窯 甕 押印文拓影					
	方竪状遺構	図19－1	土器類 かわらけ・手	口径 8.2		器高 1.5		
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 5.6	器高 2.0		
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 6.2	器高 1.8		
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 6.0	器高 1.7		6
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4	底径 5.5	器高 1.7		
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.2	底径 4.4	器高 1.7		6
	土壙12	－7	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7	底径 5.8	器高 1.8		
	土壙203	－8	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.7	器高 1.7		6
	土壙204	－9	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.9)	底径 (6.2)	器高 1.7		
	Pit.280	－10	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.2	器高 1.6		
	Pit.301	－11	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.1)	底径 (4.5)	器高 1.7		
	Pit.318	－12	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.8	器高 1.8		
	方竪状遺構	－13	土器類 かわらけ・糸	口径 12.2	底径 8.8	器高 3.4		6

表9　遺物計測表（4）　単位　cm

III期	方竪状遺構	図19－14	土器類 かわらけ・糸	口径 13.1	底径 8.2	器高 3.6	6	III期	中層(1)	図20－20	土器類 かわらけ・糸	口径 12.7	底径 8.4	器高 3.7	
		－15	土器類 かわらけ・糸	口径 12.1	底径 8.8	器高 2.9				－21	土器類 かわらけ・糸	口径 (13.6)	底径 (8.2)	器高 3.3	
		－16	土器類 かわらけ・糸	口径 12.5	底径 8.0	器高 3.4	6			－22	土器類 かわらけ・糸	口径 (12.1)	底径 (7.6)	器高 3.1	
	Pit.308	－17	土器類 かわらけ・糸	口径 (12.4)	底径 (7.4)	器高 3.5				－23	中国 白磁 口兀皿				
	土壙204	－18	土器類 かわらけ・糸	口径 (14.2)	底径 (8.1)	器高 3.4				－24	中国 褐釉陶器 壺	口径 (6.0)			
	土壙203	－19	土器類 かわらけ・糸	口径 (12.4)	底径 (7.4)	器高 3.6				－25	龍泉窯系 青磁 鎬連弁文皿	口径 (12.2)	底径 (6.6)	器高 4.4	7
		－20	土器類 かわらけ・手	口径 (12.7)		器高 3.3				－26	龍泉窯系 青磁 盤	口径 (21.0)	底径 (9.8)	器高 5.4	7
	方竪状遺構	－21	泉州窯系 緑釉 盤							－27	龍泉窯系 青磁 小碗	口径 (10.5)			
		－22	龍泉窯系 青磁 鎬連弁文碗		底径 4.7					－28	龍泉窯系 青磁 鎬連弁文碗				
		－23	龍泉窯系 青磁 無文盤							－29	龍泉窯系 青磁 鎬連弁文碗				
	土壙203	－24	中国 白磁 口兀皿		底径 6.0					－30	瀬戸窯 灰釉 水注	口径 (5.6)			
		－25	中国 白磁 合子 身	口径 (15.2)	底径 14.4	器高 3.4	7			－31	土器質 火鉢 I類				
	Pit.294	－26	瀬戸窯 灰釉 小坏	口径 7.0						－32	土器質 火鉢 I類				
	土壙203	－27	瀬戸窯 灰釉 卸皿							－33	常滑窯 片口鉢 I類				
	Pit.308	－28	常滑窯 片口鉢 I類							－34	常滑窯 片口鉢 I類				
	土壙203	－29	常滑窯 片口鉢 II類							－35	常滑窯 片口鉢 I類				
	Pit.293	－30	常滑窯 片口鉢 II類							－36	常滑窯 片口鉢 I類	口径 (19.0)	底径 (10.6)	器高 7.2	
	土壙203	－31	常滑窯 片口鉢 II類							－37	常滑窯 片口鉢 I類				
	Pit.301	－32	常滑窯 片口鉢 II類	口径 (24.6)						－38	（東遠系？） 捏鉢				7
	方竪状遺構	－33	常滑窯 甕	口径 (22.3)						－39	常滑窯 鉢	口径 (17.1)			7
	Pit.309	－34	常滑窯 甕	口径 (21.3)						－40	常滑窯 片口鉢 II類	口径 (19.9)	底径 (14.0)	器高 5.0	7
	方竪状遺構	－35	常滑窯 片口鉢 II類		底径 16.0					－41	常滑窯 片口鉢 II類	口径 (21.5)	底径 (12.4)	器高 9.0	
	Pit.314	－36	石製品 伊予産 中砥	長さ [7.2]	幅 [4.8]	厚さ [2.8]	8			－42	常滑窯 片口鉢 II類				
	Pit.288	－37	石製品 鳴滝産（破砥）	長さ [3.6]	幅 [4.2]	厚さ [0.5]	8			－43	常滑窯 片口鉢 II類				
	方竪状遺構	－38	石製品 滑石製 スタンプ	長さ [4.6]	幅 [2.7]	厚さ [1.3]	8			－44	常滑窯 甕				
		－39	銅銭 唐 開元通宝	楷書	初鋳年 621 年					－45	常滑窯 甕				
		－40	銅銭 北宋 祥符通宝	楷書	初鋳年 1009 年					－46	常滑窯 甕				
		－41	銅銭 北宋 祥符元宝	楷書	初鋳年 1009 年					－47	常滑窯 甕				
	Pit.319	－42	銅銭 北宋 治平元宝	篆書	初鋳年 1064 年					－48	常滑窯 甕		底径 13.4		
	Pit.307	－43	銅銭 北宋 聖宋元宝	篆書	初鋳年 1101 年					－49	常滑窯 甕		底径 (18.0)		
	Pit.311	－44	鉄製品 釘	長さ [5.6]		太さ [0.5]				－50	石製品 滑石製 スタンプ	長さ [3.1]	幅 3.9	厚さ 1.2	8
	中層(1)	図20－1	土器類 かわらけ・糸	口径 (11.3)	底径 (3.2)	器高 1.4				－51	石製品 滑石鍋転用温石	長さ [7.2]	幅 7.2	厚さ 1.6	8
		－2	土器類 かわらけ・手	口径 7.7		器高 1.7	6			－52	石製品 （玄生石系）硯	長さ [5.8]	幅 7.6	厚さ [1.3]	
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.0)	底径 (5.0)	器高 1.8				－53	鉄製品 蓋	径 5.0		厚さ 0.4	
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 6.0	器高 1.5	6			－54	鉄製品 釘	長さ 5.8		厚さ [0.6]	
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.8	器高 1.5				－55	鉄製品 釘	長さ [6.1]		厚さ [0.3]	
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.2	器高 1.7				－56	鉄製品 釘	長さ [7.5]		厚さ [0.7]	
		－7	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4	底径 5.1	器高 1.7				－57	鉄製品 釘	長さ [5.4]		厚さ [0.5]	
		－8	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.6	器高 1.5				－58	鉄製品 釘	長さ [8.5]		厚さ [0.6]	
		－9	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.6	器高 1.6				－59	鉄製品 釘	長さ [6.3]		厚さ [0.7]	
		－10	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.7)	底径 (5.2)	器高 1.6				－60	鉄製品 釘	長さ [10.1]		厚さ [0.6]	
		－11	土器類 かわらけ・糸	口径 (8.5)	底径 (5.8)	器高 1.6				－61	鉄製品 釘	長さ [12.4]		厚さ [0.7]	
		－12	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 5.2	器高 1.6				図30－9	常滑窯 甕 押印文拓影				8
		－13	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4	底径 5.2	器高 1.6				－10	常滑窯 甕 押印文拓影				
		－14	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.3	器高 1.6				－11	常滑窯 甕 押印文拓影				
		－15	土器類 かわらけ・糸	口径 7.9	底径 5.1	器高 1.8			中層(2)	図20－62	土器類 かわらけ・糸	口径 10.4	底径 5.8	器高 3.5	6
		－16	土器類 かわらけ・糸	口径 (7.7)	底径 (5.2)	器高 1.6				－63	土器類 かわらけ・糸	口径 6.8	底径 4.3	器高 1.9	6
		－17	土器類 かわらけ・糸	口径 8.3	底径 5.9	器高 1.8				－64	常滑窯 甕 転用品	長さ [3.9]	幅 [4.2]	厚さ 1.2	
		－18	土器類 かわらけ・糸	口径 12.2	底径 7.5	器高 3.2				－65	鉄製品 釘	長さ [9.4]		厚さ [0.6]	
		－19	土器類 かわらけ・糸	口径 (11.8)	底径 (7.4)	器高 3.1				－66	石製品 天草産 中砥	長さ [5.0]	幅 5.9	厚さ [6.6]	8

表10　遺物計測表（5）　単位　cm

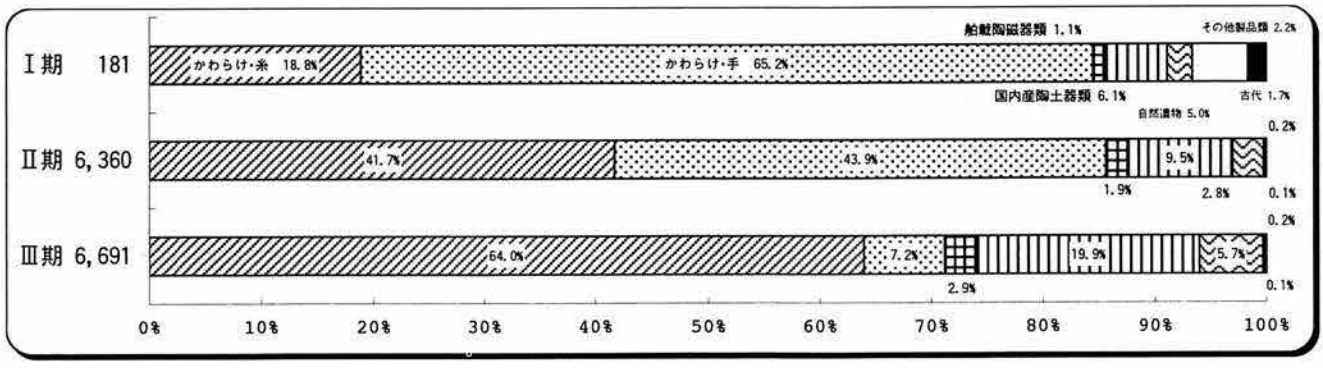
III期	中層(2)	図27－24	銅銭 北宋 淳化元宝	行書	初鋳年	990年			
		－25	銅銭 北宋 祥符元宝	楷書	初鋳年	1009年			
		－26	銅銭 北宋 天聖元宝	楷書	初鋳年	1023年			
		－27	銅銭 北宋 嘉祐元宝	篆書	初鋳年	1056年			
		－28	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書	初鋳年	1078年			
		－29	銅銭 北宋 元祐通宝	篆書	初鋳年	1086年			
		－30	銅銭 北宋 元祐通宝	篆書	初鋳年	1086年			
		－31	銅銭 南宋 紹熙元宝	楷書	初鋳年	1190年			
		－32	銅銭（無文銭）						
	土壙10	図22－1	土器類 かわらけ・糸	口径 7.2	底径 4.8	器高 1.6			
	土壙9	－2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.4	底径 5.3	器高 1.5			
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.0	器高 1.6			
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7	底径 5.0	器高 1.9			
	土壙8	－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.2	器高 1.9	6		
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 12.6	底径 7.6	器高 3.4			
	Pit. 59	－7	景徳鎮窯 白磁 印花文皿		底径 6.8				
	Pit. 258	－8	瀬戸窯 入子	口径 4.4	底径 2.7	器高 1.2	7		
	Pit. 275	－9	土器類 土製品 香炉						
	Pit. 217	－10	常滑窯 片口鉢 I類		底径 15.5				
	Pit. 11	－11	常滑窯 甕						
	Pit. 81	－12	石製品 丹波・鳴滝山系 硯	長さ [7.5]	幅 [4.4]	厚さ [2.0]	8		
	Pit. 258	－13	石製品 鳴滝産 仕上砥	長さ [6.0]	幅 3.2	厚さ [0.8]	8		
		－14	石製品 鳴滝産 仕上砥	長さ [6.0]	幅 3.3	厚さ [0.8]			
	Pit. 218	－15	鉄製品 釘	長さ [6.3]		厚さ [0.4]			
	Pit. 96	－16	鉄製品 釘	長さ [6.5]		厚さ [0.4]			
	Pit. 221	－17	鉄製品 釘	長さ [7.5]		厚さ [0.4]			
	Pit. 275	－18	鉄製品 釘	長さ [4.9]		厚さ [0.3]			
	Pit. 59	－19	鉄製品 釘	長さ [9.2]		厚さ [0.3]			
	Pit. 88	－20	鉄製品 釘	長さ [12.0]		厚さ [0.6]			
	Pit. 255	－21	銅銭 北宋 明道元宝	楷書	初鋳年	1032年			
	Pit. 224	－22	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年	1038年			
	Pit. 273	－23	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年	1038年			
	Pit. 104	－24	銅銭 北宋 熙寧元宝	篆書	初鋳年	1068年			
	Pit. 77	－25	銅銭 北宋 元豊通宝	篆書	初鋳年	1078年			
	Pit. 100	－26	銅銭 北宋 紹聖元宝	行書	初鋳年	1094年			
	上壙9	－27	銅銭 北宋 大観通宝	楷書	初鋳年	1107年			
		－28	銅製品（用途不明）	長さ 2.6		径 0.6	8		
	上層	図23－1	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.0	器高 1.8	6		
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.7	底径 4.6	器高 1.7	6		
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 4.6	器高 2.2			
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 12.2	底径 7.3	器高 3.5	6		
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 12.3	底径 9.0	器高 3.2			
		－6	龍泉窯系 青磁 天目茶碗	口径 (13.4)					
		－7	瀬戸窯 灰釉 卸皿	口径 (14.5)					
		－8	瀬戸窯 灰釉 卸皿						
		－9	瀬戸窯 灰釉 折縁深皿	口径 (22.8)					
		－10	常滑窯 甕						
		－11	常滑窯 甕						
		－12	常滑窯 片口鉢 II類						
		－13	常滑窯 片口鉢 II類						
III期	上層	図23－14	常滑窯 片口鉢 II類						
		－15	石製品 鳴滝産 仕上砥	長さ [7.4]	幅 3.4	厚さ [0.6]	8		
		－16	石製品 鳴滝産 仕上砥	長さ [7.0]	幅 3.8	厚さ [1.5]	8		
		－17	石製品 赤間ヶ石製 硯	長さ [4.7]	幅 [6.3]	厚さ [1.1]			
		図28－40	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書	初鋳年	1038年			
		－41	銅銭 北宋 皇宋通宝	楷書	初鋳年	1038年			
		－42	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年	1038年			
		－43	銅銭 北宋 熙寧元宝	篆書	初鋳年	1068年			
		－44	銅銭 北宋 元祐通宝	篆書	初鋳年	1086年			
		－45	銅銭 北宋 政和通宝	篆書	初鋳年	1111年			
		－46	銅銭 北宋 宣和通宝	篆書	初鋳年	1119年			
	最上層	図25－1	土器類 かわらけ・糸	口径 12.4	底径 7.0	器高 3.4	6		
		－2	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 5.5	器高 1.7			
		－3	土器類 かわらけ・糸	口径 8.0	底径 6.0	器高 1.9			
		－4	土器類 かわらけ・糸	口径 8.2	底径 5.2	器高 1.8			
		－5	土器類 かわらけ・糸	口径 7.6	底径 4.6	器高 2.0			
		－6	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 4.0	器高 2.3	6		
		－7	龍泉窯系 青磁 無文盤		底径 (8.5)				
		－8	瀬戸窯 灰釉 縮腰瓶子						
		－9	常滑窯 甕	口径 (20.0)					
		－10	鉄製品 釘	長さ [5.6]		太さ [0.6]			
	上壙2	図25－11	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 5.2	器高 1.6			
		－12	土器類 かわらけ・糸	口径 7.5	底径 5.0	器高 1.8			
	上壙4	－13	土器類 かわらけ・糸	口径 7.3	底径 4.5	器高 1.8			
	Pit. 23	－14	龍泉窯系 青磁 無文皿		底径 (5.6)				
	Pit. 14	－15	中国 白磁 口兀碗						
	Pit. 57	－16	瀬戸 灰釉 卸皿						
	Pit. 12	－17	銅銭 北宋 祥符通宝	楷書	初鋳年	1009年			
	包含層	図25－18	土器類 かわらけ・糸	口径 7.8	底径 5.3	器高 1.9			
		－19	土器類 かわらけ・糸	口径 3.7	底径 2.6	器高 0.9			
		－20	瀬戸窯 入子	口径 (8.9)	底径 5.6	器高 3.5			
		－21	瀬戸窯 灰釉 平碗						
		－22	土器質 火鉢 I類						
		図30－12	常滑窯 甕 押印文拓影						
採集	表採	図25－23	土器類 かわらけ・糸	口径 (6.3)	底径 (1.4)	器高 2.1	6		
		－24	土器類 かわらけ・糸	口径 5.6	底径 4.2	器高 2.0	6		
		－25	瀬戸窯 灰釉 小型三耳壺		底径 5.8				
		－26	（産地不明）（器種不明）		底径 (8.3)				
		－27	瓦質 火鉢 IV類						
		－28	（産地不明）（小壺？）		底径 (9.8)				
	試掘壙	図25－29	土器類 かわらけ・手	口径 13.0		器高 3.1			
		－30	土器類 かわらけ・糸	口径 12.7	底径 8.8	器高 3.4			
		－31	土器類 かわらけ・糸	口径 9.4	底径 6.8	器高 1.5			
		－32	土器類 かわらけ・糸	口径 8.4	底径 5.4	器高 1.9			
		－33	龍泉窯系 青磁 劃花文碗						
		図28－47	銅銭 北宋 皇宋通宝	篆書	初鋳年	1038年			
		－48	銅銭 北宋 紹聖元宝	行書	初鋳年	1094年			
		－49	銅銭 北宋 聖宋元宝	行書	初鋳年	1101年			
		－51	銅銭 北宋 政和通宝	篆書	初鋳年	1111年			
		－52	銅銭 北宋 政和通宝	篆書	初鋳年	1111年			

表11　出土遺物破片数

層位＼遺物種		かわらけ				舶載陶磁器				国内産陶器類						
		糸切り	(内白)	手捏ね	(内白)	青磁	白磁	青白磁	その他	瀬戸窯	常滑窯	渥美窯	備前窯	魚住窯	亀山窯	その他
I期	下層	10		72			1				2					
	上層	24		46				1		1	3					
II期	下層	531	(2)	1,672		15	8	3		2	54	6				
	中層	600	(10)	767		16	4	5	1		126	4			1	
	上層	1,522	(2)	352	(4)	33	14	13	7	6	306	25				3
III期	下層	1,066	(9)	136		18	11	8	3	20	261	1	1		4	2
	中層	1,007	(2)	9		49	13	6	3	23	357	3			13	2
	上層	1,114	(3)	26		14	12	6	7	18	161	2			17	2
	最上層	1,092	(4)	312		22	10	8	3	32	287	5	1	0	9	1
計		6,966	(32)	3,392	(4)	167	73	50	24	102	1,557	46	2	0	44	10
%		52.6%		25.6%		1.3%	0.6%	0.4%	0.2%	0.8%	11.8%	0.3%	0.0%	0.0%	0.3%	0.1%

層位＼遺物種		土器類					土製品			火鉢	瓦	石製品				
		瓦器	吉備系	他産地	土鍋	その他	土錘	鞴羽口	その他	(香炉)		砥石	硯	滑石製品	火打石	その他
I期	下層															
	上層									4						
II期	下層	1				1			1	15	1	2	2	9	2	1
	中層	2								1		2	1	4		1
	上層	6			16	3			2	24	3	1	5	3	7	1
III期	下層				2	1			1	36		12	7	3	5	5
	中層									22		3	6	7	2	2
	上層								2	15	2	5	3	5	5	5
	最上層								2	27	5	1	1	4	5	5
計		9	0	0	18	5	0	0	8	144	11	26	25	35	26	20
%		0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	1.1%	0.1%	0.2%	0.2%	0.3%	0.2%	0.2%

層位＼遺物種		金属製品						漆器含木製品	骨角製品	自然遺物		古代			破片数	%
		鉄釘	刀子	他鉄製品	銅銭	銅製品	その他			貝	骨	土師器	須恵器	その他	計	
I期	下層														85	0.6%
	上層	4									9		3		95	0.7%
II期	下層	45	1			1					1		2		2,376	18.0%
	中層	14		2	4										1,555	11.8%
	上層	47	2		7	7	1				10	2	1		2,429	18.4%
III期	下層	73	2	1	15								1		1,695	12.8%
	中層	34	1	1	14	1									1,578	11.9%
	上層	78	3	1	12		9		1		6	2	4		1,537	11.6%
	最上層	33	1		6		1				6	1	1		1,881	14.2%
計		328	10	5	58	9	11	0	1	0	32	5	12	0	13,231	
%		2.5%	0.1%	0.0%	0.4%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.1%	0.0%		100%



第４章　調査成果

第１節　自然科学分析

名越ヶ谷遺跡の花粉化石

鈴木　茂・藤根　久・松葉礼子（パレオ・ラボ）

名越ヶ谷遺跡は鎌倉市の東部に位置し、今回の発掘調査は東方に妙法寺の伽藍がうかがえる大町四丁目1888番地点で行われた。この調査でⅢ期（１面・14世紀後半）からⅠ期（５面・13世紀初頭）の遺構面と・期下層（５面下）の落ち込み部分が検出され、そのうちⅡ期下層（４面）までは土丹（泥岩）を主体とした地業層であり、花粉分析には適さない堆積相である。しかしながら図32の４層より下位は粘土質の堆積土が検出され、比較的良好な条件下における花粉分析が期待される。また、これまで市内各地で花粉分析を行ってきたが、米町遺跡など東部地域での分析例は少なく、こうした面からもどのような古植生が示されるか興味深い。なお、本報告第３章までの層位名称や表現と整合させる為、報文中の層位（Ⅰ期～Ⅲ期）と調査面（１面～５面）を併記した。

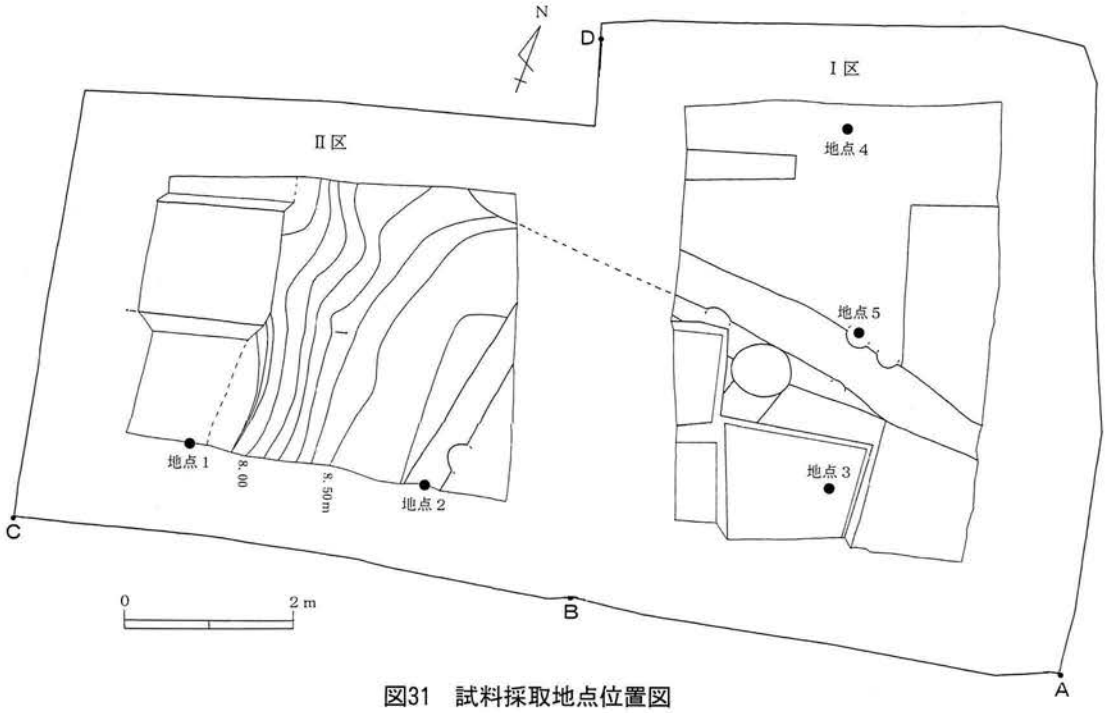


図31　試料採取地点位置図

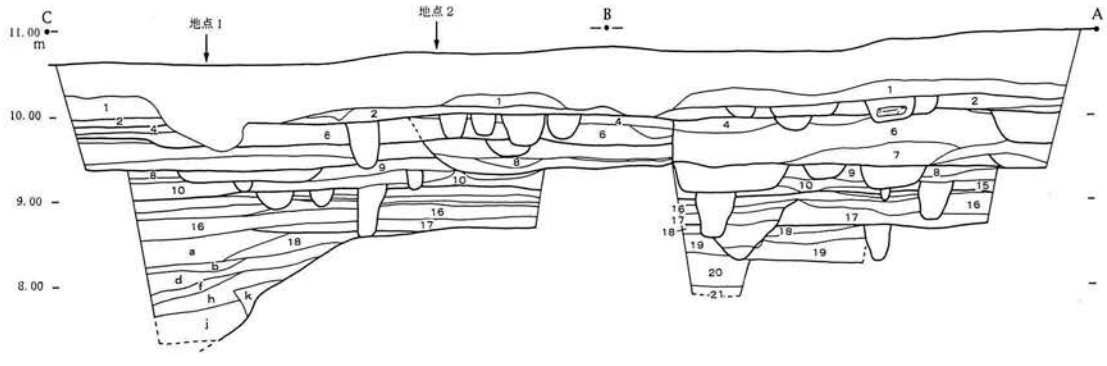


図32　調査区南壁断面図

1．試料

試料は、地点１～地点３の３地点より採取された20点である。そのうち地点１は調査Ⅱ区西側の落ち込み部分、地点２は同区Ⅰ期上層（５面）を削った溝の埋積土とその上位のⅡ期下層（４面構成土）、地点３は調査Ⅰ区深堀部分（Ⅱ期中層・３面下）である。各試料の採取地点および層準を図31・図32・図33に示した。以下に各試料について簡単に記す。

地点１：試料１は灰褐色を帯びた黒色の砂質粘土（図32の16層＝図４の11層）で、粘性が高く、赤褐色酸化鉄の薄層が上位境界部に認められる。この上位層は土丹の集積層（Ⅱ期下層・４面）で、さらに上位は灰褐色の砂質粘土となっている。試料２・３は黒色の砂質粘土で、小空隙が少し認められ、砂は塊状に混入している（図32・図４のａ層）。試料４はいくらか砂質の黒色粘土で、土丹がやや多く認められる（図32・図４のｂ層）。試料５はやや灰色の黒色砂質粘土（図32・図４のｄ層）、試料６は粘性の高い黒色砂質粘土で、植物遺体が散在している（図32・図４のｆ層）。試料７・８はオリーブ黒色の砂質粘土で、上位境界部に材片が認められる（図32・図４のｈ層）。試料９～11はやや砂質の黒～黒灰色粘土で、砂は下部で多く混入している。また、白色粒子（風化スコリア？）や材小片が散在し、細かな植物遺体が多く認められる（図32・図４のｊ層）。このｊ層の15㎝層準において材片が採取され、樹種同定および年代測定が行われた。その結果、樹種はヤナギ属、年代は1,010±80yrs BP（測定No.PLD-484）で、補正暦年代は交点年代値AD1,020年，１σ年代幅（確立68%）はAD 980 to 1,055、AD 1,085 to 1,120、AD 1,140 to 1,155である。また、最上部Ⅱ期下層（４面）は出土遺物から13世紀前半と考えられていることから、採取試料は古代から13世紀前半までの年代である。

地点２：試料12は黒褐色の砂質粘土で、炭片や焼土の小塊が散在、カワラケ片が点在しており、赤褐色酸化鉄が縦方向に集積している（図32の16層＝図４の11層）。この上位は炭片や土丹片が散在し、褐色焼土が層状に認められる黒褐色砂質粘土、さらに上位が黄褐色の土丹層（Ⅱ期下層・４面）である。試料13も黒褐色の砂質粘土で、赤褐色酸化鉄が縦方向に集積している（図32の17層＝図４の12層）。試料14はやや砂質の黒～黒灰色粘土（溝埋積土）で、さらに下位は暗褐色の細粒砂である。時代について、最上部がⅡ期下層（４面・13世紀前半）で、下部がⅠ期上層（５面・13世紀初頭）を削った溝の覆土であることから、試料12～14は13世紀の前半と考えられる。

地点３：試料15は褐灰色の砂質粘土で、炭片が点在している。この下位はより明るい褐灰色砂質粘土で、土丹片が多く、炭片が点在している。また、上位は黄褐色の土丹層（Ⅱ期上層・３面地業層）である。試料16は炭片が点在する褐色を帯びた黒灰色粘土質砂、その下位は褐灰色砂質粘土で、

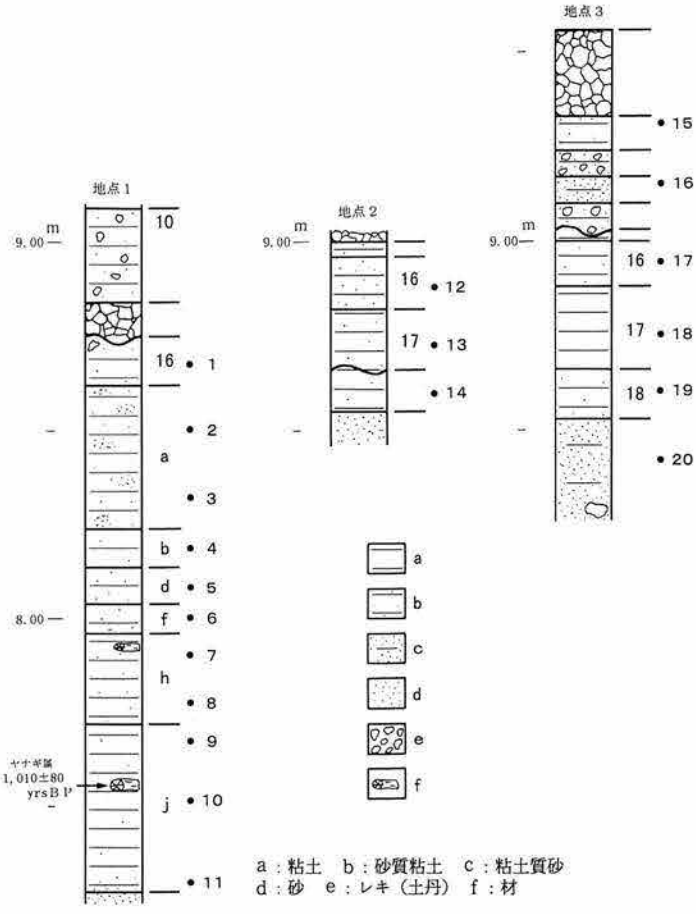


図33　試料採取地点の地質柱状図と試料採取層準

土丹片が多く、炭片が散在している（Ⅱ期下層・4面)。さらに下位は土丹起源ではないかと思われる黄灰褐色粘土の薄層である。試料17は炭片が点在する黒褐色の砂質粘土で、赤褐色酸化鉄が根状に全体に集積している（図32の16層＝図4の11層)。試料18は黒～黒褐色の粘土で、粘性が高く、全体に白色粒子（風化スコリア？）が散在している。また、赤褐色酸化鉄が根状に集積している（図32の17層＝図4の12層)。試料19は黒色の砂質粘土で、粘性が高く、赤褐色酸化鉄の集積が根状に認められる（図32の18層＝図4の13層)。試料20は黒灰色の粘土質砂で、赤褐色酸化鉄の集積が縦方向に散在しており、下部には土丹片が認められる。時代について、最上部が3面地業層（Ⅱ期中層・13世紀後半)、下部が4面（Ⅱ期下層・13世紀前半）構成土であることから、試料は13世紀の中頃から後半にかけての時代と考えられる。

2．樹種同定

方法と記載

分析対象試料は、地点5のピットより採取された杭（KAN488)、地点4のピットより採取された製品に至らない木材片（KAN489)、および地点1の年代測定用試料（KAN1001）の3点である。同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版にし、同定の証拠とする。なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号（KAN488,489,1001）を付し㈱パレオ・ラボで保管されている。

観察の結果、KAN488はサカキ、KAN489はスギ、KAN1001はヤナギ属と同定された。以下にその同定根拠について示す。

スギ　*Cryptomerica japonica* (L.fil.) D.Don　Taxodiaceae

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり2個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯～暖帯、太平洋側に多く存在している。

ヤナギ属 *Salix*　Salicaceae

やや小型で丸い管孔が、単独あるいは2～3個放射方向に複合して多数存在する散孔材。道管の直径は年輪界に向け徐々に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列の異性で、道管との壁孔は蜂の巣状を呈し密である。

以上の形質により、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定した。日本に産するヤナギ属には、34種が含まれる。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb. ; C.ochnacea DC. ; Sakakia ochnacea (DC) Nakai Theaceae

小型で多角の道管が単独もしくは複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は、横棒の多い階段状、木部柔組織は散在状。放射組織は顕著な異性で単列、もしくは一部で2列。道管と木部柔組織間の壁孔は対列状～階段状。

以上の形質によりツバキ科のサカキの材と同定した。サカキは、常緑の小高木で、本州（茨城・石川県以西）～九州に分布する。

3．花粉分析

1）方法

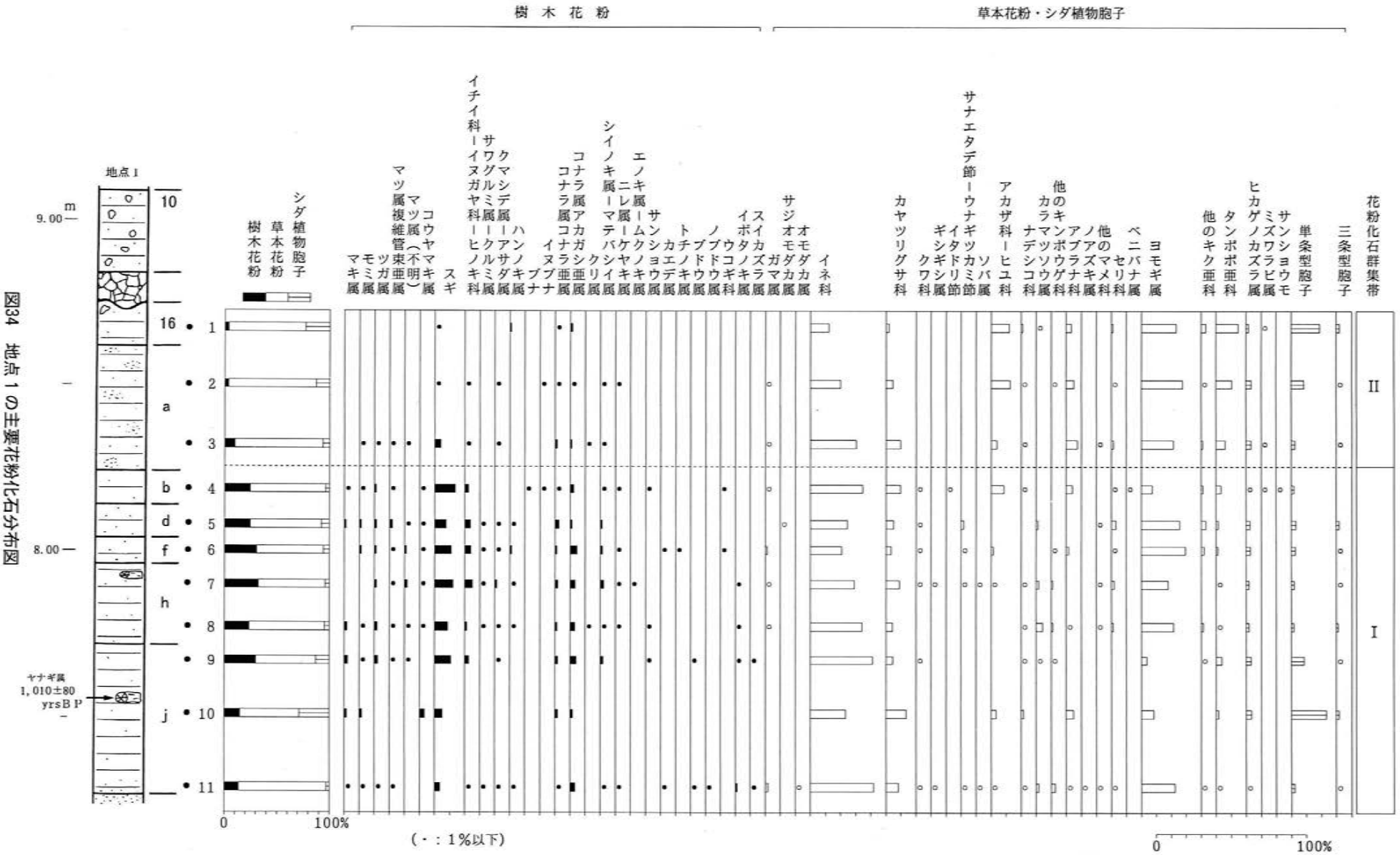
先に記した20試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

表12　産出花粉化石一覧表

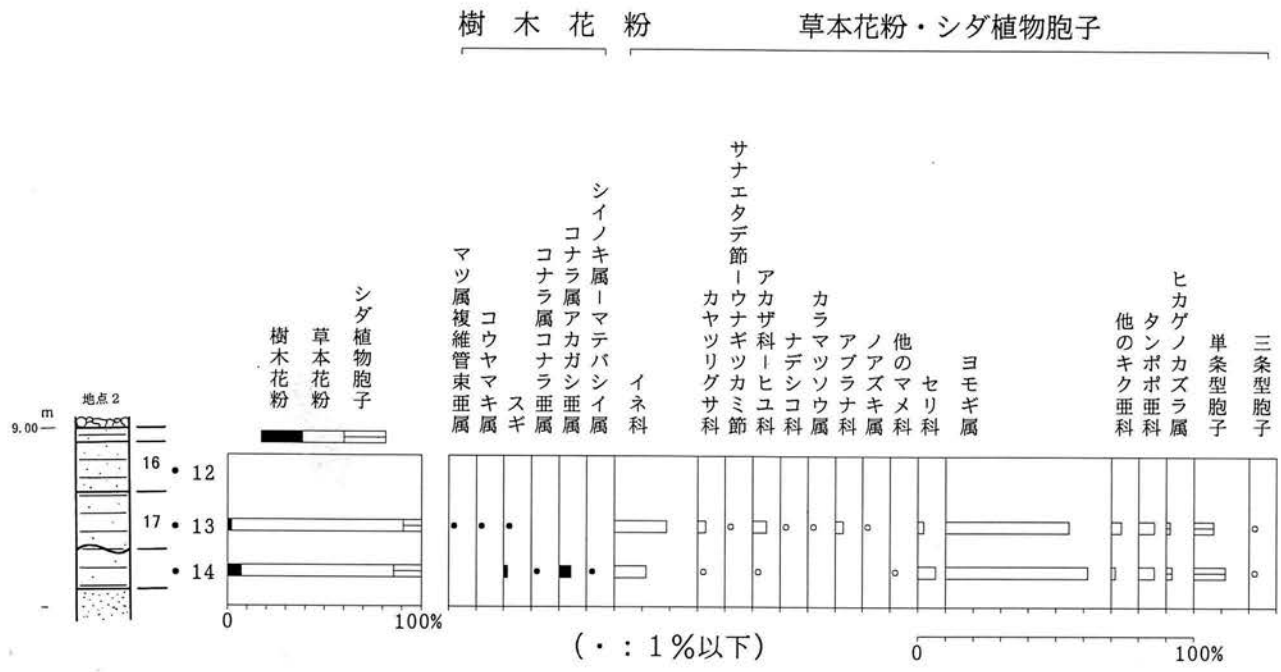
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
樹木																					
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	3	2	-	-	8	5	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	-	-	1	1	2	3	-	2	1	1	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	-	2	5	2	3	6	8	5	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	1	1	3	2	2	2	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	-	1	-	1	3	9	2	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	3	1	1	3	2	-	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	1	2	15	58	12	29	58	39	24	3	26	-	1	2	-	-	1	1	2	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	1	2	11	6	10	24	6	6	-	5	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	1	-	1	1	6	1	2	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	2	-	-	-	1	3	3	2	-	-	3	-	-	-	-	1	1	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	1	5	3	4	3	9	6	4	1	5	-	-	1	-	-	1	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	1	4	10	2	12	16	14	9	1	25	-	-	6	-	-	1	1	-	-
クリ属	*Castanea*	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	-	1	2	1	2	4	11	4	4	-	4	-	-	1	2	-	2	1	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	2	-	3	-	2	4	3	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	*Ampelopsis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	2	3	2	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																					
ガマ属	*Typha*	-	1	2	1	-	3	3	3	-	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	24	59	117	148	39	54	139	152	91	14	313	1	26	16	12	8	87	46	10	1
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4	13	37	41	8	9	43	19	10	8	62	-	4	1	-	-	11	2	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	1	1	1	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	-	3	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	24	38	15	37	-	4	1	-	-	2	2	-	7	1	2	1	19	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	2	3	2	-	-	1	1	2	1	1	-	1	-	1	-	1	-	1	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	-	-	-	2	-	8	19	1	-	12	-	1	-	-	-	-	1	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	2	-	-	-	2	5	5	1	-	20	-	-	-	-	-	-	2	-	-
アブラナ科	Cruciferae	7	15	29	18	-	4	-	2	-	3	1	-	4	-	1	-	4	-	-	-
バラ科	Rosaceae	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のマメ科	other Leguminosae	-	-	2	-	1	-	1	3	-	-	6	-	-	1	-	-	-	-	-	-
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	2	6	3	5	2	9	6	-	-	6	-	3	9	-	-	-	6	1	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベニバナ属	*Carthamus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	46	82	83	32	41	77	85	96	8	5	168	1	62	72	9	1	26	44	7	1
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	2	4	5	5	5	-	7	1	-	4	-	5	2	2	-	1	1	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	29	31	23	14	2	3	3	4	8	1	5	1	8	8	7	-	14	12	4	2
シダ植物																					
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	3	10	12	4	4	7	9	8	7	2	3	-	2	3	-	-	2	8	1	-
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	1	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	37	25	9	7	5	7	9	7	19	14	16	-	10	16	2	3	8	14	45	2
三条型胞子	Trilete spore	4	2	2	-	3	1	1	5	2	1	2	-	1	1	-	-	-	12	7	-
樹木花粉	Arboreal pollen	7	11	38	106	40	81	155	106	67	9	104	0	3	10	2	1	13	9	3	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	145	248	323	308	108	166	302	320	126	34	624	3	123	110	34	10	166	114	23	4
シダ植物胞子	Spores	45	37	24	15	12	15	19	20	28	17	21	0	13	20	2	3	10	34	53	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	197	296	385	429	160	262	476	446	221	60	749	3	139	140	38	14	189	157	79	7
不明花粉	Unknown pollen	10	25	23	22	13	47	32	23	19	5	10	0	4	5	7	3	7	11	3	2

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



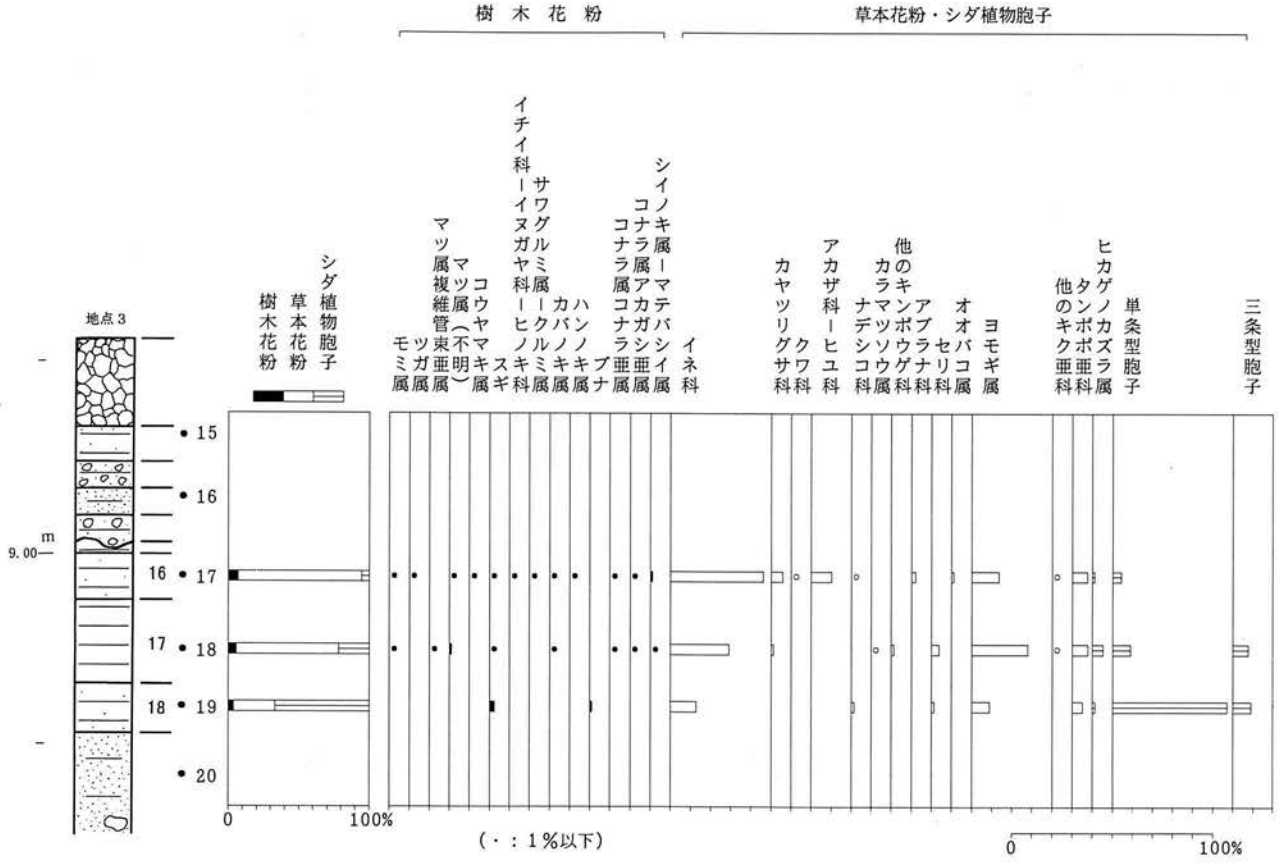
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図34　地点1の主要花粉化石分布図



(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図35　地点2の花粉化石分布図



(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

図36　地点3の花粉化石分布図

2）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉37、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物胞子５の総計73である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表12に、分布を図34（地点１）、図35（地点２）、図36（地点３）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検境の結果、樹木花粉の占める割合は全体に低く、最も多い地点１の試料でも30%弱である。以下に各地点ごとに示す。

地点１：樹木花粉の産出傾向から花粉化石群集帯Ⅰ・Ⅱを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料４～11）は樹木花粉ではスギの優占で特徴づけられる。イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す），コナラ属アカガシ亜属がスギに次いで目立って検出されており、その他、マキ属，ツガ属，コナラ属コナラ亜属，シイノキ属－マテバシイ属が多くの試料で１%を越えている。草本類ではイネ科が最も多く、20～40%の出現率を示している。次いでヨモギ属で、上部に向かい増減を繰り返している。その次はカヤツリグサ科で、出現率は10%前後を示しており、その他、ソバ属や水生植物（抽水植物）のガマ属，サジオモダカ属，オモダカ属などが若干検出されている。また、最上部試料４においてベニバナ属が検出されており、図表には示していないが同試料では寄生虫卵（鞭虫卵，回虫卵）が多く観察された。

花粉帯Ⅱ（試料１～３）はスギの減少で特徴づけられるなど、少なかった樹木類はさらに低率となっている。草本類では上部に向かいイネ科の急減が特徴的であり、カヤツリグサ科も同様の傾向を示している。最も多く検出されているのはヨモギ属で、20%強で安定しており、アカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科が上部に向かい増加しており、アブラナ科も・帯に比べ目立った産出を示している。

地点２：３試料とも検出花粉数が少なく、特に試料12は少なく分布図として示すことができなかった。少ないなか樹木類ではスギやアカガシ亜属がやや目立って得られている。草本類ではヨモギ属が50%前後の出現率を示し最も多く、次いでイネ科，タンポポ亜科となっている。その他、カヤツリグサ科，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，セリ科，ヨモギ属を除くキク亜科などが検出されている。

地点３：地点２同様、全試料とも検出花粉数は少なく、特に少ない上下３試料（15･16･20）においては分布図として示すことができなかった。

検境の結果、試料17～19において樹木花粉の占める割合は10%に至っていない。草本類ではイネ科が最も多く、上部に向かい急増している。次いでヨモギ属が10～20%、タンポポ亜科が10%弱の出現率を示し、その他、アカザ科－ヒユ科，アブラナ科などが1%を越えて得られている。

４．珪藻分析

１）試料と処理方法

試料は、地点１の下部より採取された試料９～11の３試料である（「１．試料」参照）。これら３試料について以下の方法で処理を行い、珪藻用プレパラートを作成した。

⑴試料から湿潤重量約１・程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。⑵反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返す。⑶残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成する。作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。

2）珪藻化石の特徴と堆積環境

3試料から検出された珪藻化石は、海水種～汽水種が6分類群6属5種、淡水種が52分類群18属39種3亜種、それぞれ検出された。また、これらの珪藻化石は、海水種～汽水種3指標種群（A・B・E 2）、淡水種5指標種群（K・N・O・Q・W）に分類され（小杉　1988、安藤　1990）、2珪藻分帯を設定した(図37)。

Ⅰ帯（№11）：堆積物1g中の珪藻殻数は約1.63×105個、完形殻の出現率は約11%である。検出された珪藻化石は、主に淡水種から構成され、沼沢湿地付着性指標種群(O)の*Eunotia pectinalis* var.*undulata*などや陸域指標種群(Q)の*Hantzschia amphioxys*が特徴的に出現した。なお、湖沼沼沢湿地指標種群（N）の*Melosira ambigua*や中～下流性河川指標種群（K）の*Melosira varians*などが随伴する。こうしたことから、中～下流性河川の影響を多少受ける沼沢湿地環境が推定される。

Ⅱ帯（№9・10）：堆積物1g中の珪藻殻数は約1.71×105個と約3.77×105個、完形殻の出現率は約9％と約6％である。検出された珪藻化石は、主に淡水種から構成され、沼沢湿地付着性指標種群の*Eunotia pectinalis* var.*undulata*などや陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が特徴的に出現した。なお、湖沼沼沢湿地指標種群の*Melosira ambigua*などが随伴する。こうしたことから、概ね沼沢湿地環境が推定される。

なお、いずれの試料も完形殻の出現率が非常に低く、本来の堆積環境でない可能性も考えられる。

5．遺跡周辺の古環境

1）各試料の時代について

先にも記したが地点1の下部は年代測定結果から古代の後半頃と推測される。また、同地点の上部試料は・期下層（4面・13世紀前半）の構成土、地点3の最上部試料は・期上層（3面・13世紀後半）の構成土である。こうしたことから、分析試料は古代後半（Ⅰ期）～13世紀後半（Ⅱ期）にかけての時代が考えられる。

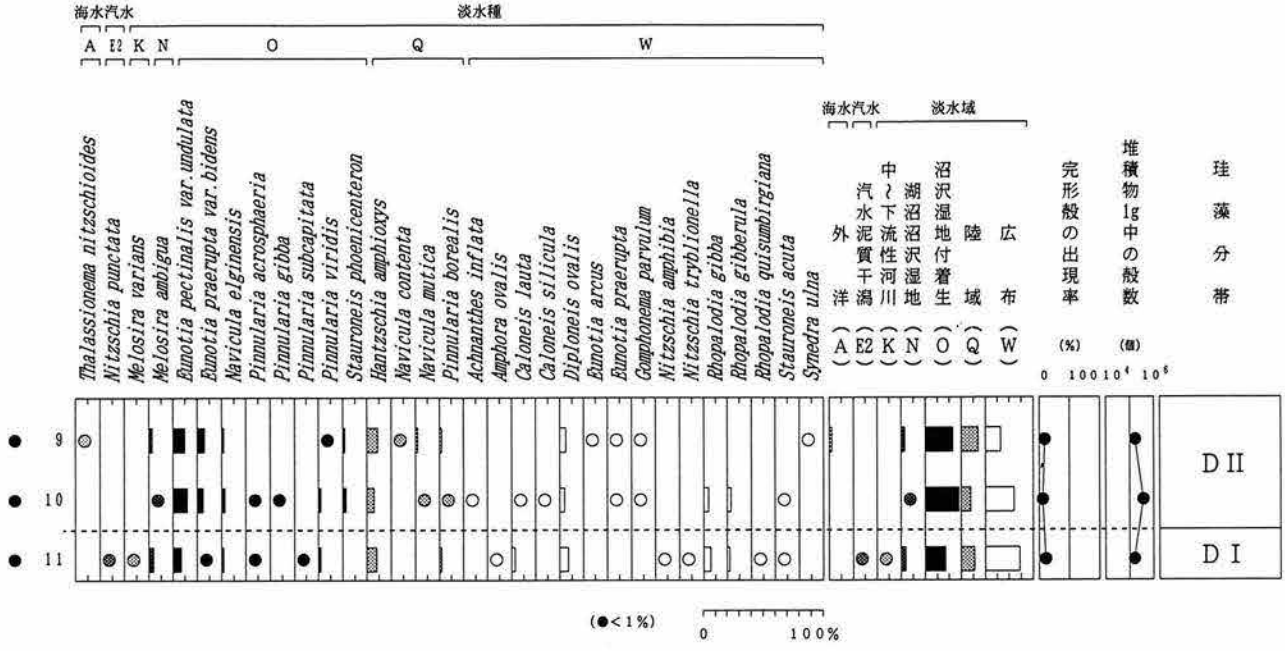


図37　堆積物中の珪藻化石分布図

2）遺跡周辺の古環境

Ⅰ期（古代後半頃）の遺跡周辺においては珪藻分析から河川の影響を多少うける沼沢湿地の存在が推測され、その後次第に河川の影響も少なくなったとみられる（落ち込み部分）。この頃の遺跡周辺においては樹木花粉の検出数が少ないことから、樹木類の少ない環境であったと推察される。地点1の最下部試料11からはソバ属が検出され、また、水田雑草を含む分類群のオモダカ属が観察されている。予察的に地点1の試料8～11についてプラント・オパール分析を試みたところ、試料11ではやや少ないものの全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。こうしたことから、遺跡周辺低地部においては水田稲作が行われていたと考えられ、水田稲作やソバの栽培などかなり切り開かれた環境ではなかったかと思われる。すなわち、スギ林やマキ属、モミ属、ツガ属などの針葉樹林や、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林，およびコナラ亜属を中心とした落葉広葉樹樹林は活発な人間活動の影響をうけ、これらの森林は丘陵部の一部に成立していたにすぎなかったと思われる。

その後、13世紀初頭にかけてスギやヒノキ類を中心とした針葉樹林が遺跡周辺丘陵部に広がるようになり、照葉樹林や落葉広葉樹林も引き続き一部に成立していた。一方、低地部では一部で稲作が行われ、また、溝周辺などにはヨモギ属，タンポポ亜科、セリ科、カラマツソウ属などの雑草類が目立つ植生が成立するようになった。

Ⅱ期（13世紀中頃～13世紀後半）の森林植生は前の時期に広くみられたスギやヒノキ類を中心とした針葉樹林は急速に減少し、照葉樹林や落葉広葉樹林も少なくなった。これは鎌倉市内の花粉分析結果で一般にみられる傾向であり、13世紀以降発展期をむかえた鎌倉では都市開発や木材利用の急激な増大によりスギ林や照葉樹林は破壊され、ニヨウマツ類（アカマツ、クロマツなど）の二次林が形成された(鈴木　1999)。本遺跡においてはニヨウマツ類の増加は認められなかったが、スギ林や照葉樹林などの森林植生は破壊されたとみられ、鎌倉の東部地域においても他地点同様の森林破壊があったことがうかがわれる。

また、この頃の遺跡およびその周辺ではヨモギ属を主体にイネ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属を除く他のキク亜科、タンポポ亜科などの雑草類が普通にみられた。

6．おわりに

地点1の試料10において花粉化石は少なく、シダ類胞子がやや多く検出されている。また、珪藻分析では完形率が非常に低いことから本来の堆積環境、すなわち沼沢湿地のような穏やかな環境ではなかった可能性も考えられている。よって、こうした堆積環境が一因として花粉化石の少ない結果が生じたことも推測される。本調査で検出された落ち込み部分はほんの一部と推測され、今後の発掘調査における落ち込み部分の調査・検討が期待される。また、それにより古代における遺跡周辺の森林植生についてはより明確にされるであろう。

引用文献
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用　東北地理 42　p.73-88.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用　第四紀研究 27　p.1-20.
鈴木　茂（1999）神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊　国立歴史民俗博物館研究報告 第81集　p.131-139.

第2節　遺構と遺物の変遷

本項では出土した遺物について図示し得なかったものを含めて総対的に触れ、遺構の変遷と併せ観ながら各期・層位の年代観について述べる。本調査では調査面積の割に多量の遺物が出土し、堆積土の性質に因り木製品類が殆ど出土しない事を除けば、鎌倉市街地域や名越ヶ谷遺跡内での出土傾向とあまり変わりはない。かわらけ溜りが発見されていないにも拘らず、かわらけが全出土量の半分強を占める。図38には各期のかわらけ・舶載陶磁器・瀬戸窯製品・常滑窯製品を抜粋し、各期の出土傾向を追った。年代は出土遺物全体から観た各遺構面・層位に充てており、個々の遺物に対する編年に類した年代観を示すものではない。

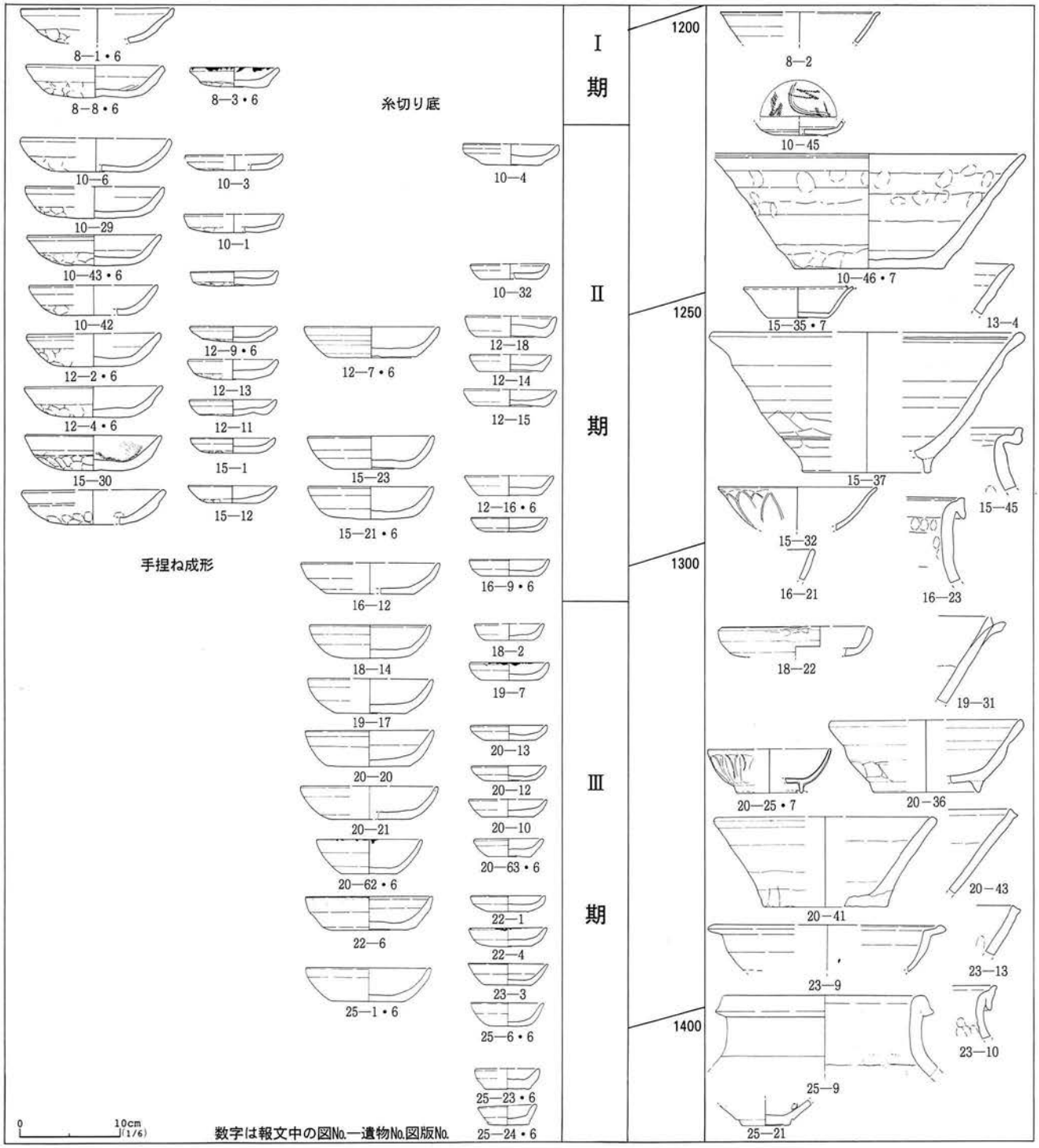


図38　出土遺物の様相

Ⅰ期に帰属する遺物は、出土点数は少ないものの８割強をかわらけが占め、糸切り底と手捏ね成形の相対比は凡そ１：3.5である。手捏ねかわらけは、胎土が砂っぽく口唇部が面取りされた様なものが目立つ。糸切り底のかわらけは小破片ばかりで様相は把み難いが、口径に比べて底径が小さく、体部の轆轤目が強く遺るタイプは含まれない。遺構は下層・上層に分けてはいるが、本文でも触れた様に同時期の遺構群の可能性もある。性格不明の落込みと方向の合う溝はその検出状況や配置から観ると、地境を示す様な溝とは性格が異なり排水域は導水的な役割とも考えられようか。自然化学分析の成果に拠れば落込み覆土の上層からは寄生虫卵が多く観察され、併せて付近で耕作が行われていたであろう事が指摘されている。Ⅰ期は、落込みの最終埋没時期を示す遺物と遺構面上出土のかわらけの年代観から13世紀初頭と考えられ、この頃付近は開発はされているものの未だ都市的な生活臭の薄い状況と思われる。

Ⅱ期下層の出土遺物は９割弱程をかわらけが占め、糸切り底と手捏ね成形の相対比は凡そ１：３である。糸切り底は数少ない中で観ると底部が厚く外面の丸みが強い小型品があり、手捏ねは胎土がやや砂っぽく、口唇部の面取りは顕著ではないものの底部は平底状。瀬戸窯を除いた国内産陶器類・火鉢・石製品類がこの時期から安定した出土量が認められる。遺構は丁寧な土丹地業が為され、建物も想定できそうだが遺構密度は低い。土丹地業は通路状の版築とも考えられるが、Ⅱ期中層以降への遺構面の踏襲を考えると生活に伴う足下の地固めと捉えられよう。Ⅱ期下層は、出土した糸切り底のかわらけに若干不安要因もあるが、安定した傾向を示す手捏ねかわらけの年代観から13世紀前半と考えられ、この頃には遺構とも符合して付近で人々が生活を営み始めたことが窺える。

Ⅱ期中層は遺構面は伴わず、又、下層・上層に比べて出土遺物点数が少なく大部分を相変わらずかわれけが占めるものの、本層位で糸切り底と手捏ねの相対比が凡そ１：１になることから層位として個別に捉えた。糸切り底は小型品に器高低く口径と底径の差が殆ど無い様な皿形のものが殆ど観られない他は、概ね手捏ねと平行した時期のものが出土している。手捏ねは口唇部がやや丸味を持ち体部が厚手になるが、底部の丸みはそれ程顕著ではない。他の遺物も下層と同様に出土し、特に常滑窯の製品が爆発的に増え、片口鉢がⅠ類からⅡ類への移行が垣間見える。舶載陶磁器では龍泉窯蓮弁文碗・白磁口兀皿等が出土し、瀬戸窯製品はこの時期まで殆ど出土しない。

Ⅱ期上層は本文でも触れた様に、かわらけの糸切り底と手捏ねの出土相対比が逆転し凡そ３：１になる。糸切り底のかわらけは全体に小型化し、口径12㎝未満の中型品が含まれないが器形から観るとⅢ期の出土傾向が本層位から窺えようか。手捏ねは破片数では多く感じられようが実際は小破片が大部分で、使われていた個体としての実数はいかばかりであろうか。遺構からはⅠ期の落込みに因る軟弱な地盤を克服しつつ、土丹地業に拠る生活範囲を拡大していったと考えられようか。調査区北側及び東側の地業の様相とPit.列の配置から、主たる遺構の配置は調査区の北西外或は東外と想定され、Ⅱ期で認められた掘立柱建物の範囲は建物或間の空閑地として利用されていたことが窺える。この土丹地業範囲から観た土地利用はこの時期から以降の生活面へと踏襲されており、かわらけの様相や搬入系の土器類が増加する事等遺物の出土傾向と併せ観ると、各期の区分はこの上層と先の中層の間にあるのかもしれない。Ⅱ期中層から上層にかけては、本文でも触れた上層のかわらけの捉え方に問題も在ろうが13世紀中頃～後半と考えられ、この頃には遺構配置と出土遺物の様相から付近の生活振りは安定且つある程度充実していたと思われる。

Ⅲ期は土丹地業面に拠り細分したが、Ⅲ期各層位間で上下層の遺物が多少混在もしていることを否めず、図化した遺物からは明確な時期差は掴み難い所ではある。出土遺物の点数は後述する若干の問題もあるが、各期・層位の中では最も多く遺物種及び各生産地に依る器種もⅡ期より増加し、鎌倉盛期の出土状況と考えられよう。かわらけの糸切り底と手捏ねの相対比は凡そ９：１になり糸切り底が圧倒する、

というより既にかわらけは手捏ねから糸切りへと移行し、糸切り底の器形・成形から観たバリエーションが豊富になる時期に中る。舶載陶磁器は生活面の更新に伴う中層から廃棄されたものが多数出土し、瀬戸窯製品はⅡ期よりも増加し安定して出土している。常滑窯の甕は口縁形態で観ると年代的にずれそうなものが観られ、片口鉢はⅠ類がまだ残るもののⅡ類が主体である。火鉢はこの時期から胎土瓦質でスタンプを配するもの(Ⅲ類)が、土器質浅鉢形(Ⅰ類)を凌いで出土する。遺構はⅡ期の土地利用を概ね踏襲している様で、建物域間の中間域と考えられよう。方形竪穴状遺構の占地と道具類・多量の銅銭の出土からは、職人が域内に取込まれていることも考えられ周辺域との活発な往来が想像される。Ⅲ期は糸切り底のかわらけの把え方にも依るが、大まかに14世紀代と考えられようか。出土全破片から私見を込めて細分すればⅢ期下層をⅡ期上層に繋がる時期を中て、中層～上層を14世紀中頃まで、最上層をそれに続く時期で15世紀には至らない時期と考えたい。

尚、表11における最上層出土の手捏ねかわらけの出土点数は殆どが指先大程の極小破片であり、常滑窯の点数も胴部片ばかりで共に個体数に勘案できる程の代物ではない。この事を差引いて考えれば、出土遺物から観た本調査地点の盛期はⅡ期上層～Ⅲ期上層遺構面構築辺りまでで、以降は最上層包含層出土遺物から15世紀代に若干の生活の痕跡を観るものの、急速に廃れていったと考えられよう。

第3節　調査地点の性格

本調査地点は第1章第2節でも触れた様に、至近距離に在る妙法寺の中世期の姿を垣間見られればと期待されたが、出土した遺物と発見した遺構からは寺域である積極的な根拠は薄いと言わざるを得ない。

遺物はその大半を占めるかわらけと、数は少ないものの国内産陶土器類の年代を追った出土傾向は、鎌倉市内他の調査地点や名越ヶ谷遺跡地内と大きく矛盾するものではなく大差はない。強いて挙げるなら嗜好品に類するものが舶載陶磁器にやや偏ることと、その中で合子が比較的多く出土している事ぐらいであろう。嗜好性の高いものが瀬戸窯製品より舶載品が多いのは、寺域故と観るより遺構の年代に因ると観た方が鎌倉市内域での出土状況と矛盾はなく、合子については地点2(図2・同文献)でも指摘されており、本地点での特徴的な事とは言えまい。Ⅲ期下層の遺構からは職人の居住も考えられるが、調査範囲内での道具類の出土状況は日常的な使用と保守程度の揃えには事足りる。硯も鎌倉市内で割と多く出土するタイプで、特に良品とは言えず頻繁に或は永く使用していたとも観られない。遺構では明確な礎石建物は無く、掘立柱建物と土壙群が主体である事と考え併せると、今回の調査範囲からでは寺域内より寧ろ屋敷地の一角と考えられようか。

今回の調査から付近の土地利用を考える上で注目されるのは、自然科学分析の成果と出土遺物の年代から鎌倉初期には埋没しているⅠ期下層の落込み遺構であろう。この遺構は東側丘陵裾、概ね図2に示した等高線に沿う様に南北に走行或は西に向って落込んでいる。付近の調査でこの様な遺構は発見されておらず、又、本調査では深度の限界とその大部分が調査範囲外に在る為全容は把み得ず、この遺構を「落込み」と表現するに留める。この落込みの範囲や性格及びそれに伴う環境は固より、この軟弱な地盤を克服して13世紀の早い時期に生活域としていることは、鎌倉期に於ける名越周辺の開発を考える上で興味深く、今後の調査に期待したい。

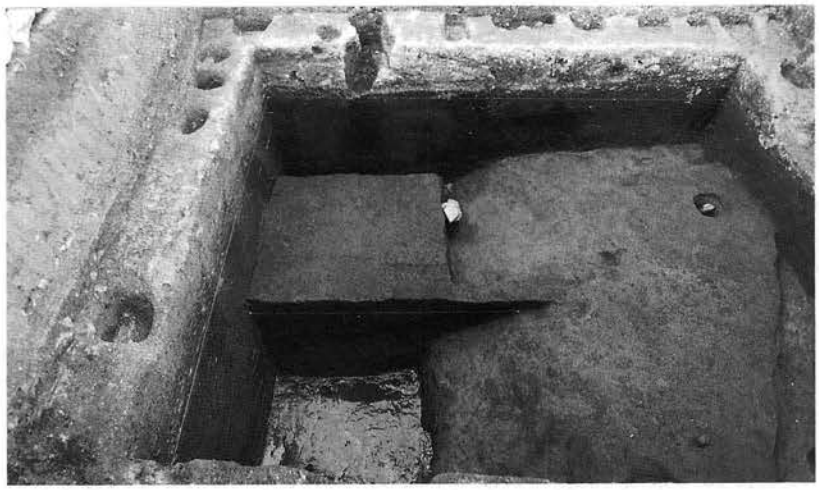
報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	汐見　一夫　野本　賢二　他
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年３月31日

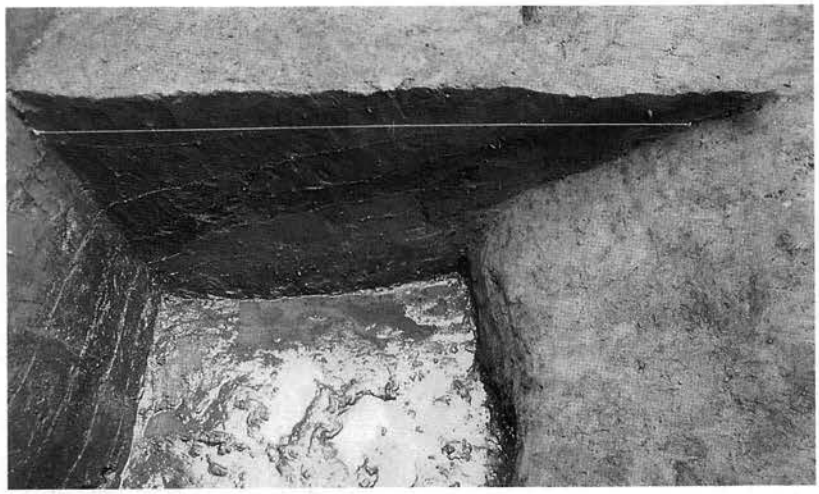
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 おおまち 大町四丁目1888番	14204	231	35° 18′ 34″	139° 33′ 40″	1998.12.20 ～ 1999. 3.10	77.01㎡	個人専用 住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名越ヶ谷 遺跡	都市	中世	掘立柱建物 土壙 溝状遺構	船載陶磁器 国内産陶器 土器類 石製品 金属製品 木製品 その他	

写　真　図　版



▲1．Ⅰ期上層及び下層落込み（Ⅱ区・南から）

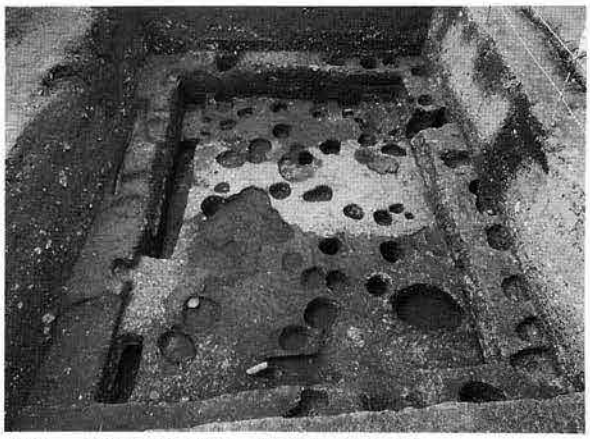


▲2．同・下層落込み土層断面（Ⅱ区・南から）

▲3．同・上層（Ⅰ区・東から）

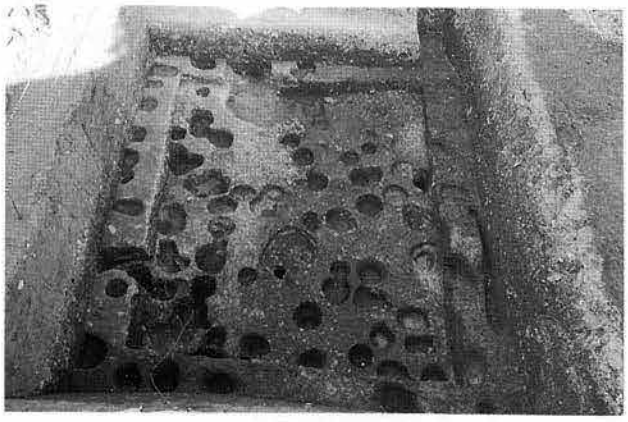
▶4．同・上層溝6・7（Ⅰ区・西から）

図版 2

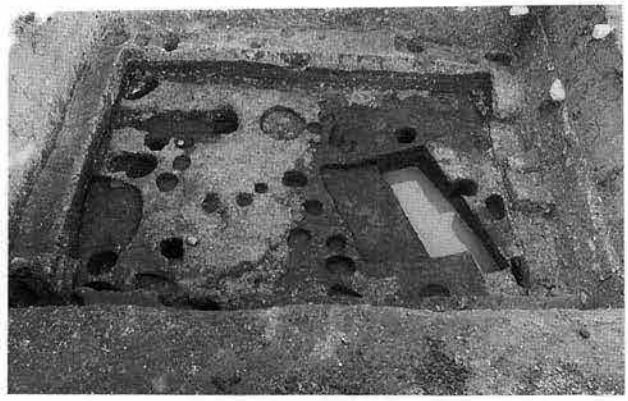


▲1．Ⅰ期下層（1）（Ⅱ区・東から）

▲2．同・下層（1）土壙31（Ⅰ区・南から）



▲3．同・下層（2）（Ⅱ区・西から）



▲4．同・下層（2）（Ⅰ区・西から）

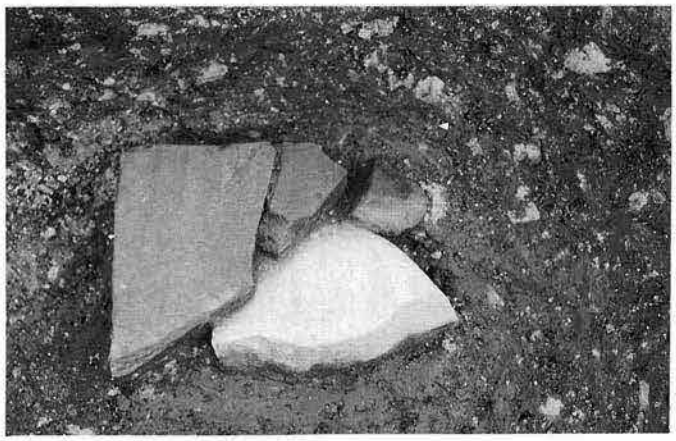
▲5．同・下層（2）土丹地業（Ⅰ区・南から）

◀6．同・下層（2）遺構（Ⅰ区・南から）

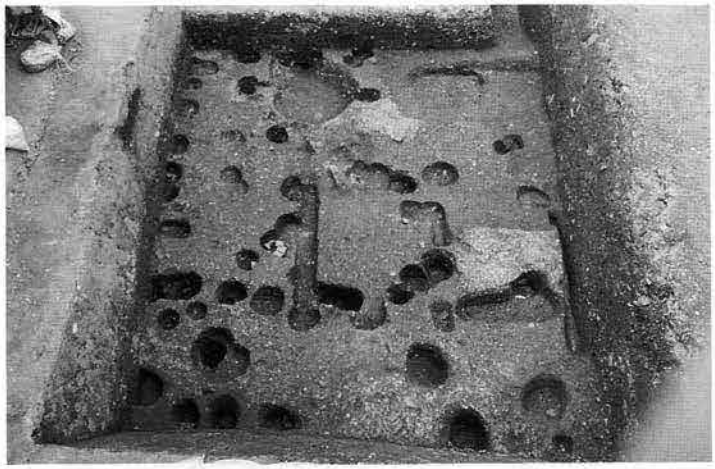
▲7．同・下層（2）土壙28（Ⅰ区・南から）

▲1．Ⅱ期上層（Ⅰ区・西から）

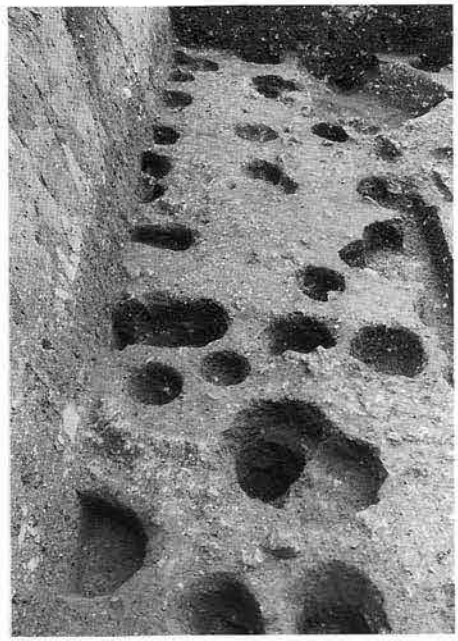
▶2．同・上層東端土丹地業（Ⅰ区・南から）



▲3．同・上層土壙24内遺物　（Ⅰ区・西から）



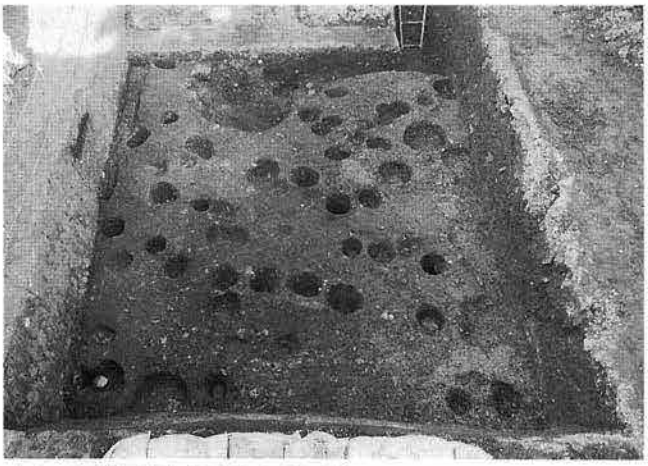
▲4．同・上層（Ⅱ区・西から）



▶6．同・上層北側土丹地業（Ⅱ区・南から）

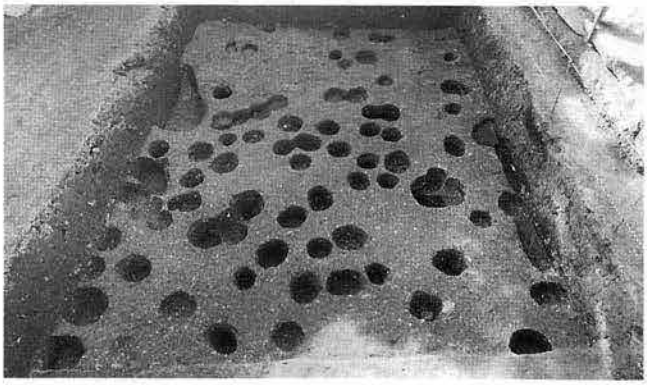
▲5．同・上層Pit.361内遺物　（Ⅱ区・北から）

図版 4

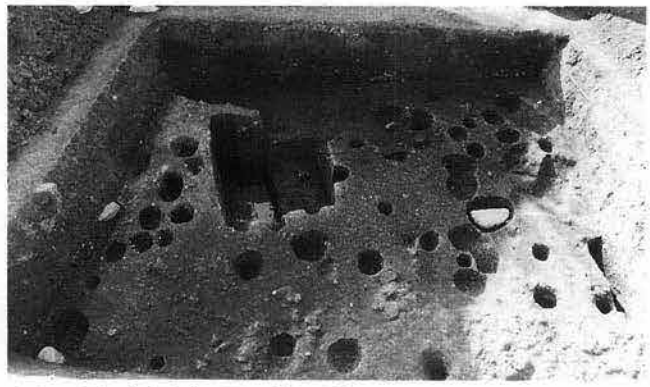


▲1．Ⅲ期下層（Ⅱ区・西から）

▲2．同・下層（Ⅰ区・西から）



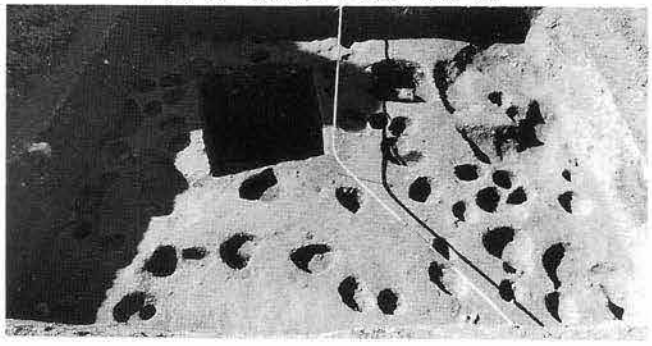
▲3．同・上層（Ⅱ区・東から）



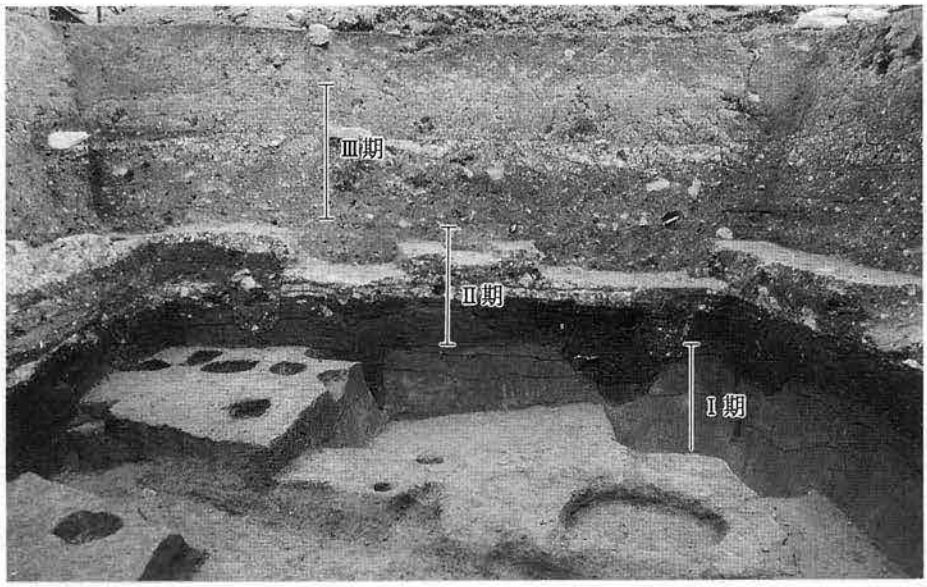
▲4．同・上層（Ⅰ区・東から）

◀5．同・上層西端土丹地業（Ⅱ区・北から）

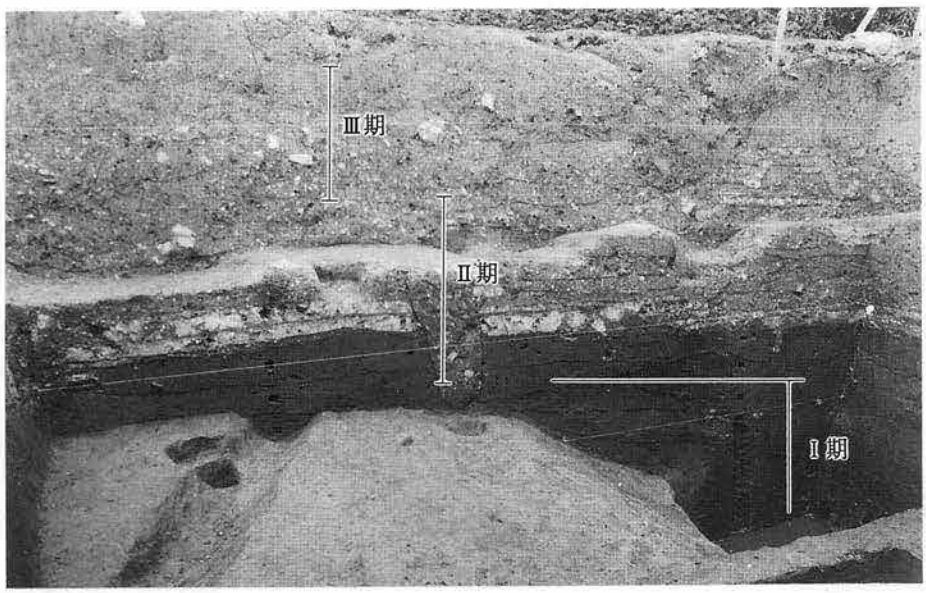
▶6．同・上層東端土丹地業（Ⅰ区・北から）



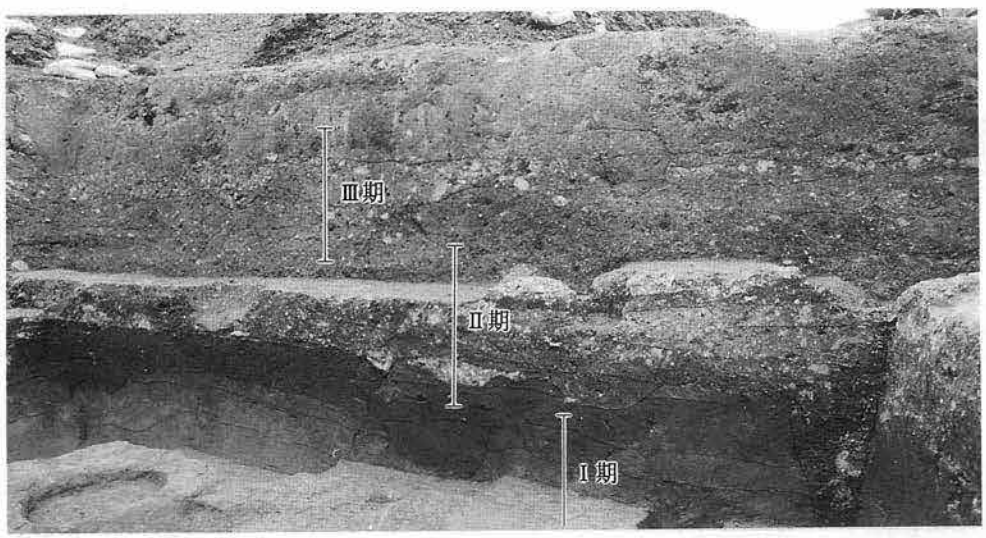
▼7．同・最上層（Ⅰ区・東から）



▲1．調査区南壁土層断面（Ⅰ区・北から）

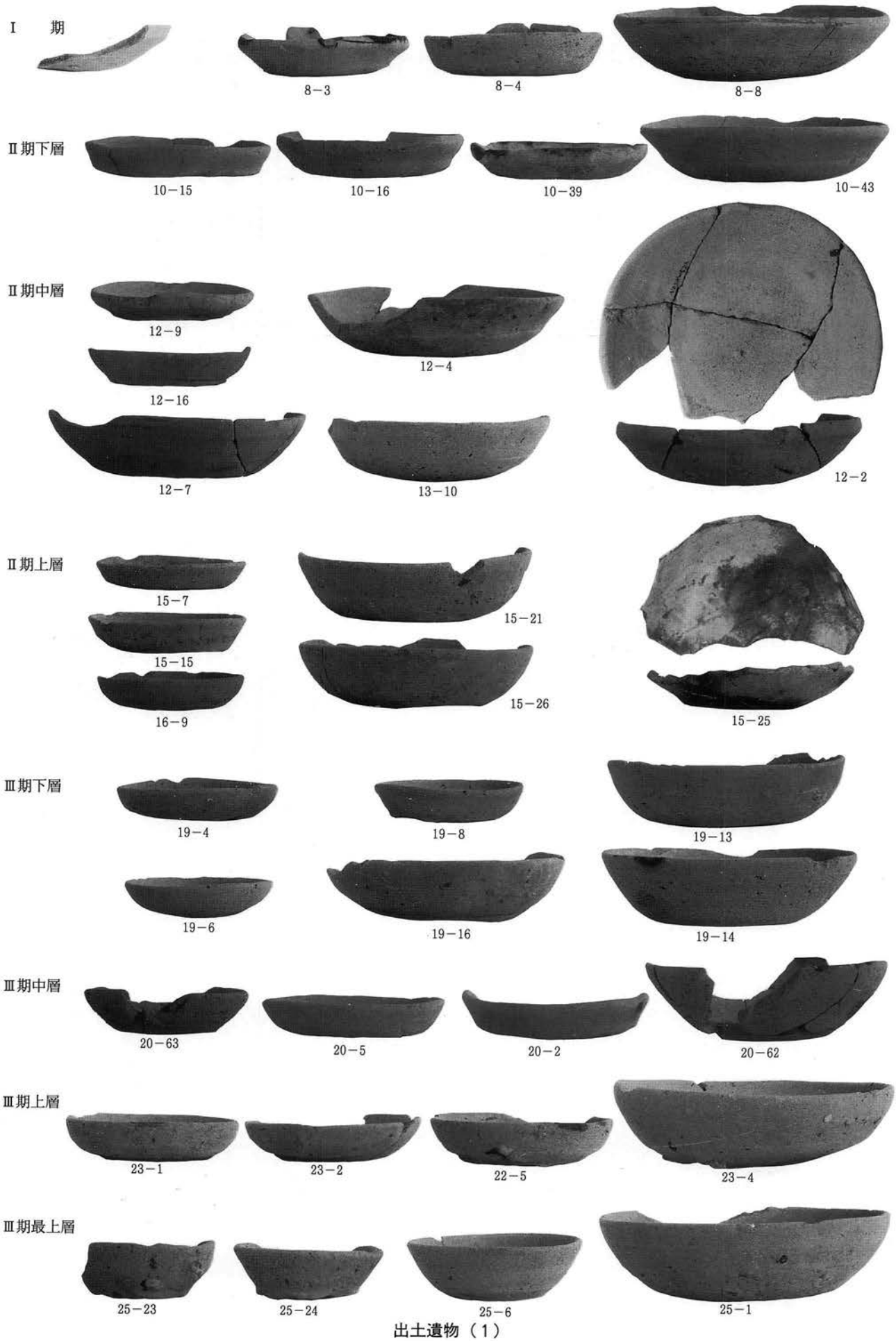


▲2．調査区南壁土層断面（Ⅱ区・北から）



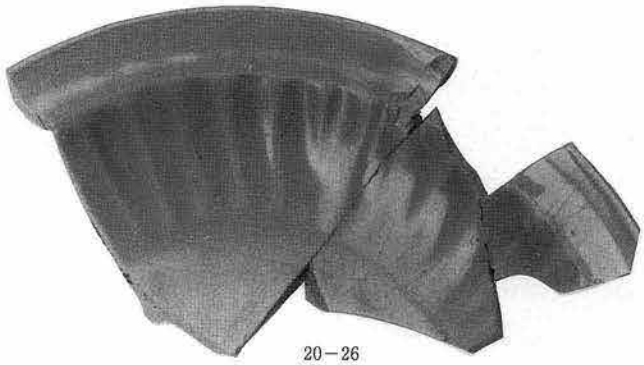
▲3．調査区中央壁土層断面（東から）

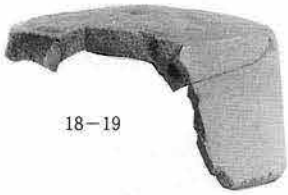
図版 6

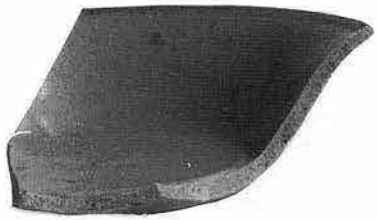

I 期
8−3
8−4
8−8
Ⅱ期下層
10−15
10−16
10−39
10−43
Ⅱ期中層
12−9
12−16
12−4
12−7
13−10
12−2
Ⅱ期上層
15−7
15−15
16−9
15−21
15−26
15−25
Ⅲ期下層
19−4
19−8
19−13
19−6
19−16
19−14
Ⅲ期中層
20−63
20−5
20−2
20−62
Ⅲ期上層
23−1
23−2
22−5
23−4
Ⅲ期最上層
25−23
25−24
25−6
25−1

出土遺物（1）

20－25

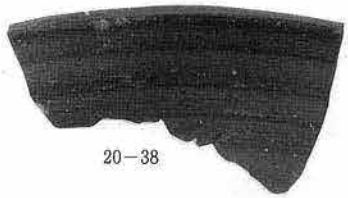

20－26


18－19


15－35

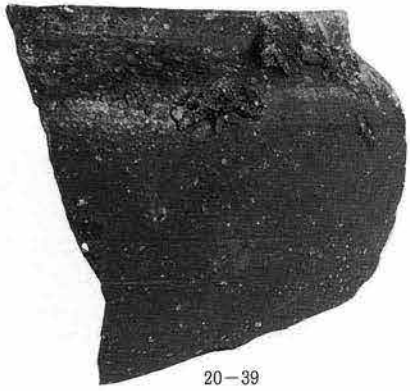
19－25

22－8


20－38

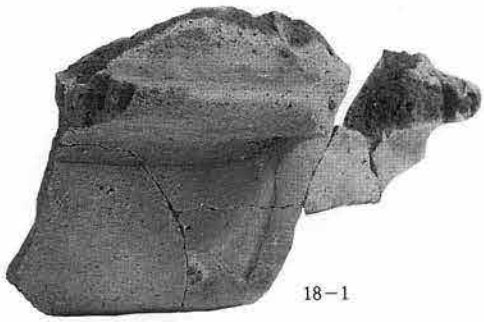
20－40

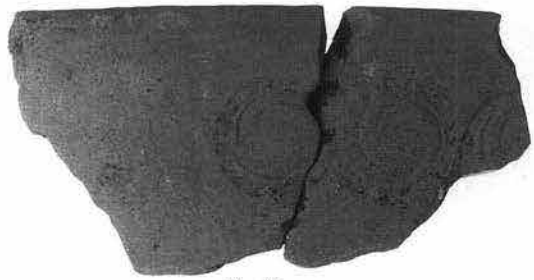
10－46


20－39

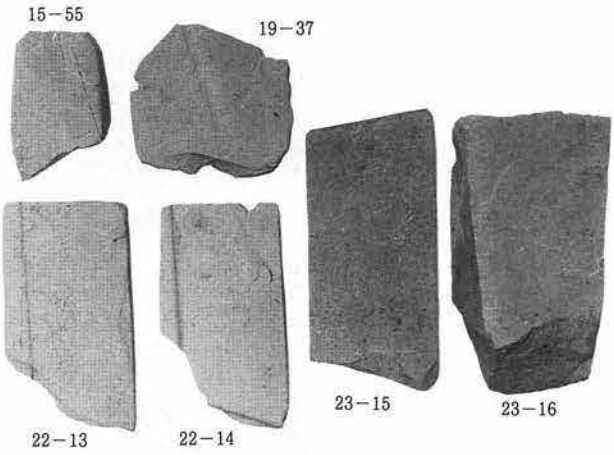
出土遺物（2）

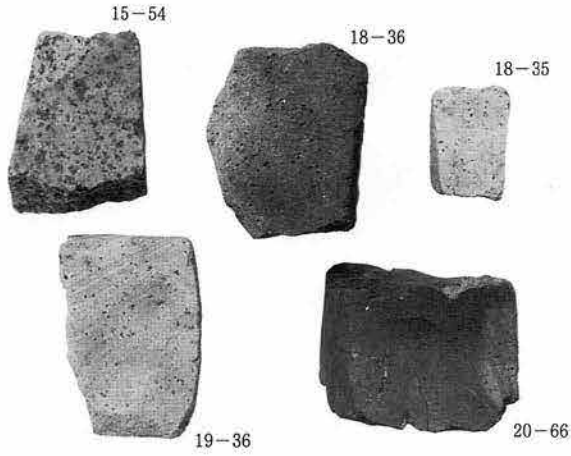
図版 8

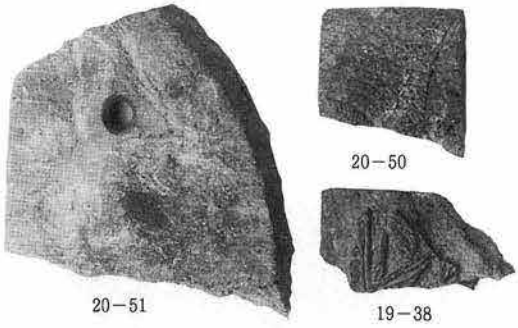

18－1

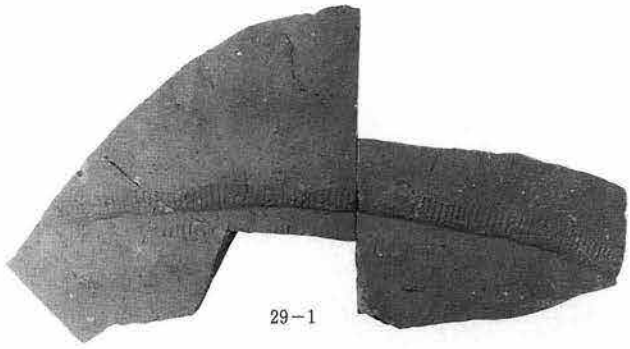

18－32

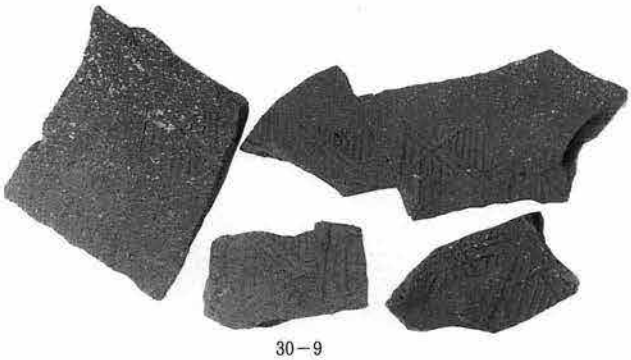
22－28

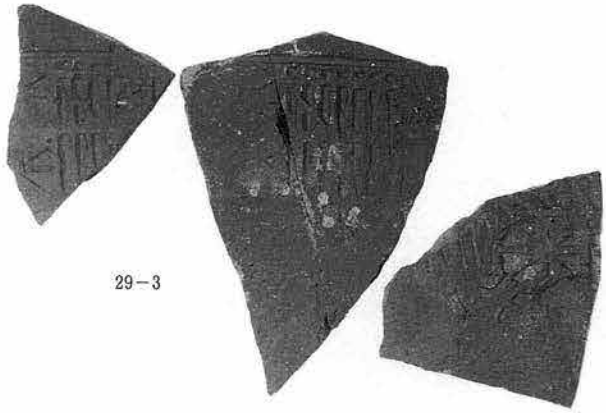

15－55
19－37
22－13
22－14
23－15
23－16


15－54
18－36
18－35
19－36
20－66

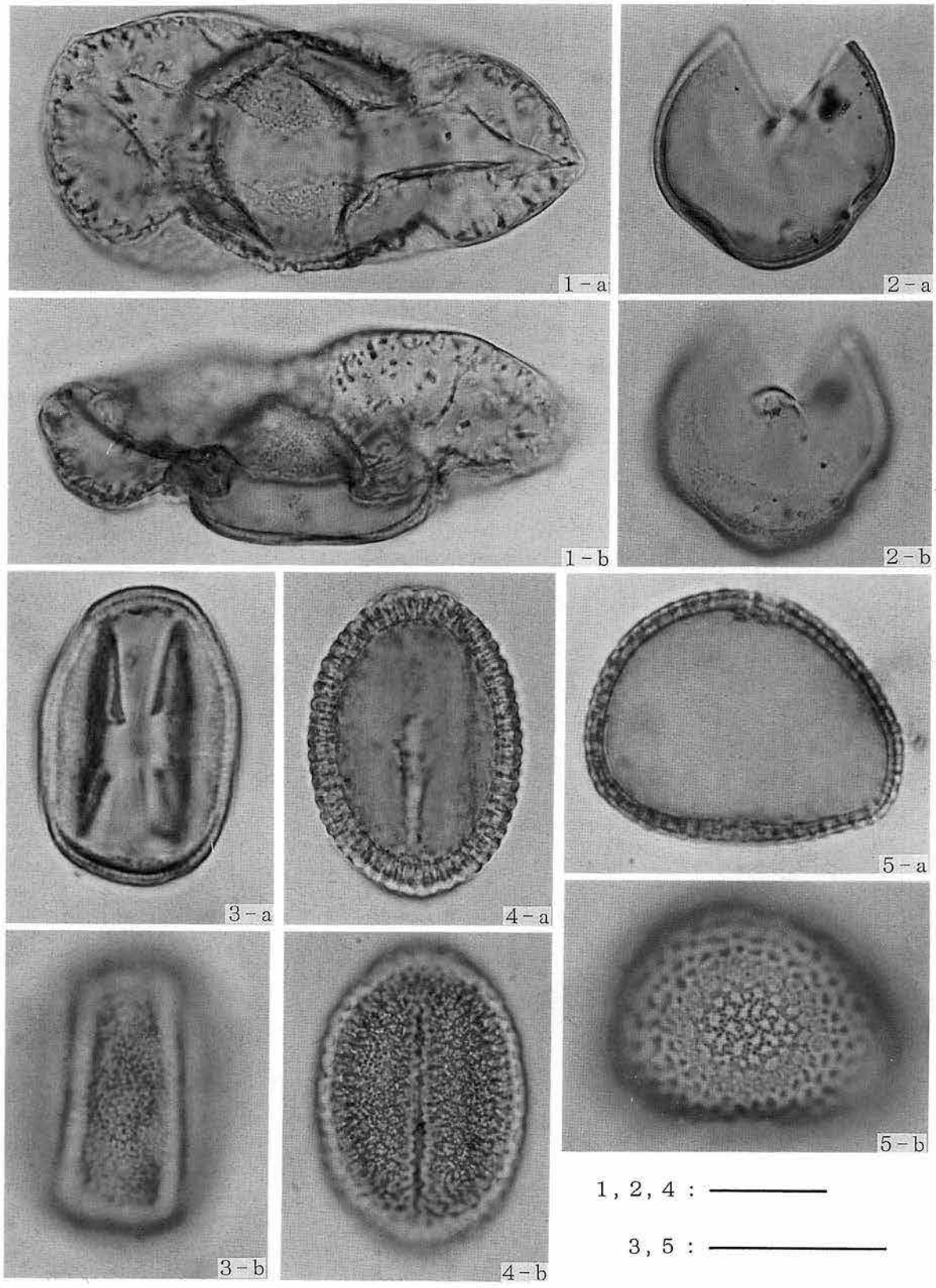

20－50
20－51
19－38


29－1


30－9


29－3

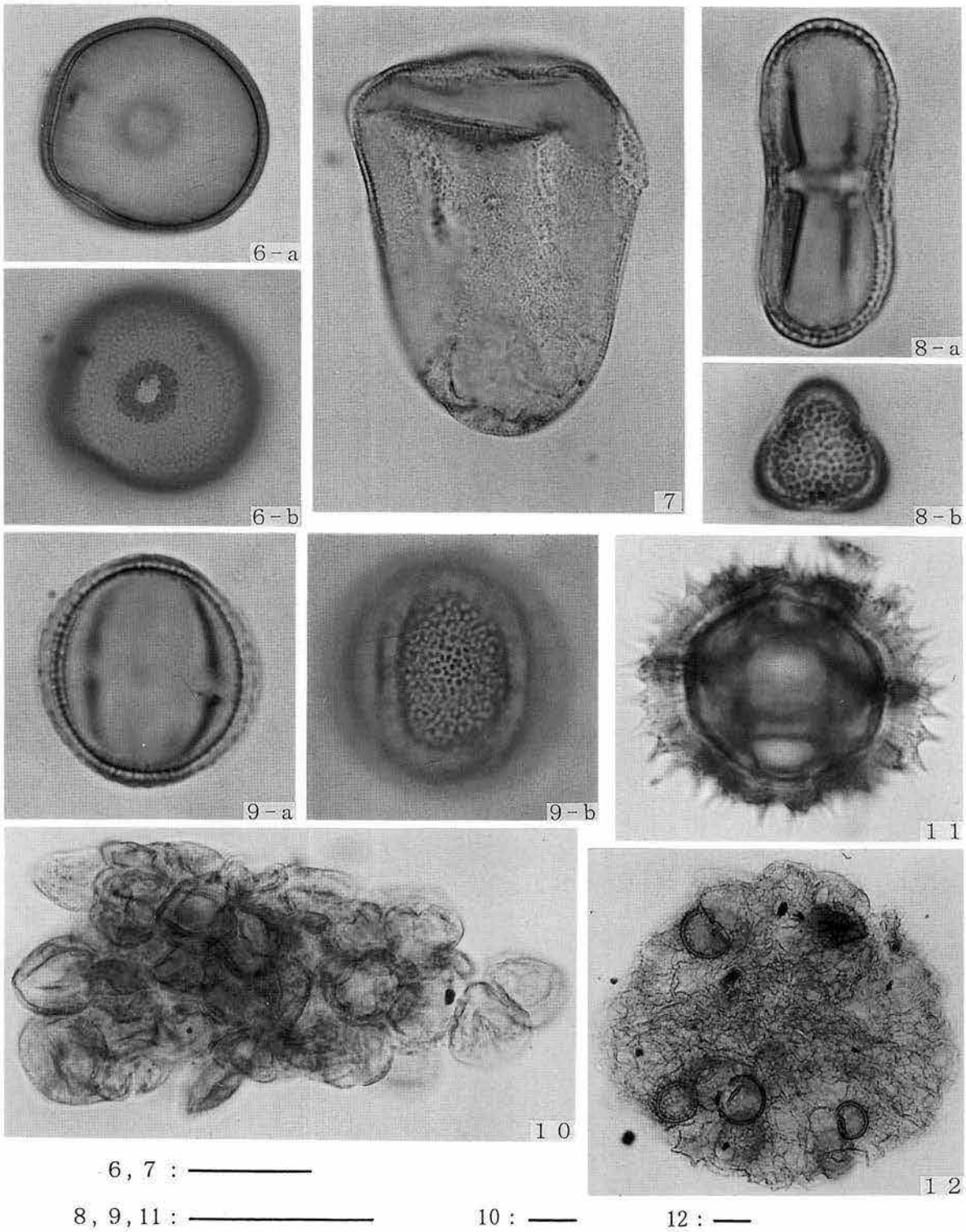
出土遺物（3）



図版9　名越ヶ谷遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

1：マキ属　PLC.SS 2617　試料11
2：スギ　PLC.SS 2621　試料11
3：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 2614　試料8
4：ソバ属　PLC.SS 2624　試料11
5：ガマ属　PLC.SS 2620　試料11

図版10



図版10　名越ヶ谷遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

6：イネ科　PLC.SS 2622　試料11
7：カヤツリグサ科　PLC.SS 2623　試料11
8：セリ科　PLC.SS 2615　試料8
9：ヨモギ属　PLC.SS 2619　試料11
10：ヨモギ属花粉塊　PLC.SS 2618　試料8
11：タンポポ亜科　PLC.SS 2613　試料4
12：サンショウモ　PLC.SS 2612　試料4

米町遺跡（No.245）

大町二丁目2404番の一部地点

例　　言

1．本書は鎌倉市大町二丁目2404番の一部地点に所在する、個人専用住宅の新築に先だち行われた、米町遺跡（県遺跡台帳№245）の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は平成11年４月17日から同年４月30日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3．本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は福田 誠が担当した。編集は福田が行った。
4．本書に使用した遺構写真・遺物写真は、原 廣志、福田、須佐仁和が撮影を行った。
5．発掘調査の体制は以下の通りである。
　主任調査員　原 廣志　福田 誠 (鎌倉市教育委員会嘱託)
　調　査　員　須佐仁和　早坂伸市
　作　業　員　(社)鎌倉市シルバー人材センター
6．発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

第１章　調査地点の位置と歴史的環境 ……302
第２章　調査の経過 ……304
第３章　検出した遺構と遺物 ……304
　第１節　層序 ……304
　第２節　遺構 ……307
　第３節　遺物 ……307
第４章　まとめ ……308

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 ……302
図２　トレンチ位置図 ……303
図３　土層図 ……305
図４　遺構全測図 ……306
図５　出土遺物 ……309

図　版　目　次

図版１　調査地点の周辺 ……313
図版２　トレンチ調査 ……314
図版３　遺物 ……315

第１章　歴史的環境と調査地点の位置

鎌倉は縄文時代前期の海進期（約5,000～6,000年前）には、海面が今より約10m近く上昇し、入り込んだ海水により鎌倉湾が形成され、現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていたと考えられる。縄文時代後期の海退期（約4,000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2,000年前）にはさらに乾燥がすすみ、海岸線付近では堆積した砂によって砂丘が形成されていった。砂丘の背後（北側）にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川をはじめ二階堂川、扇川、佐助川などが流れ込んでいた。砂丘や河川によって作られた自然堤防上に、点々と人々が居住を始めたと考えられている。

奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、政治経済の重要な位置を占めていたと考えられる。平安期には、源頼義が石清水八幡宮を勧請した元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘縄の館、亀ヶ谷の義朝の居館等の存在が知られ、源頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地であった。

調査地点は下馬交差点から名越へ抜ける途中、名越四つ角から南東方向に直線で約150m、北から南に流れる逆川が、三枚橋と中道橋の中間で西へ直角に折れる地点の東側にあたる。

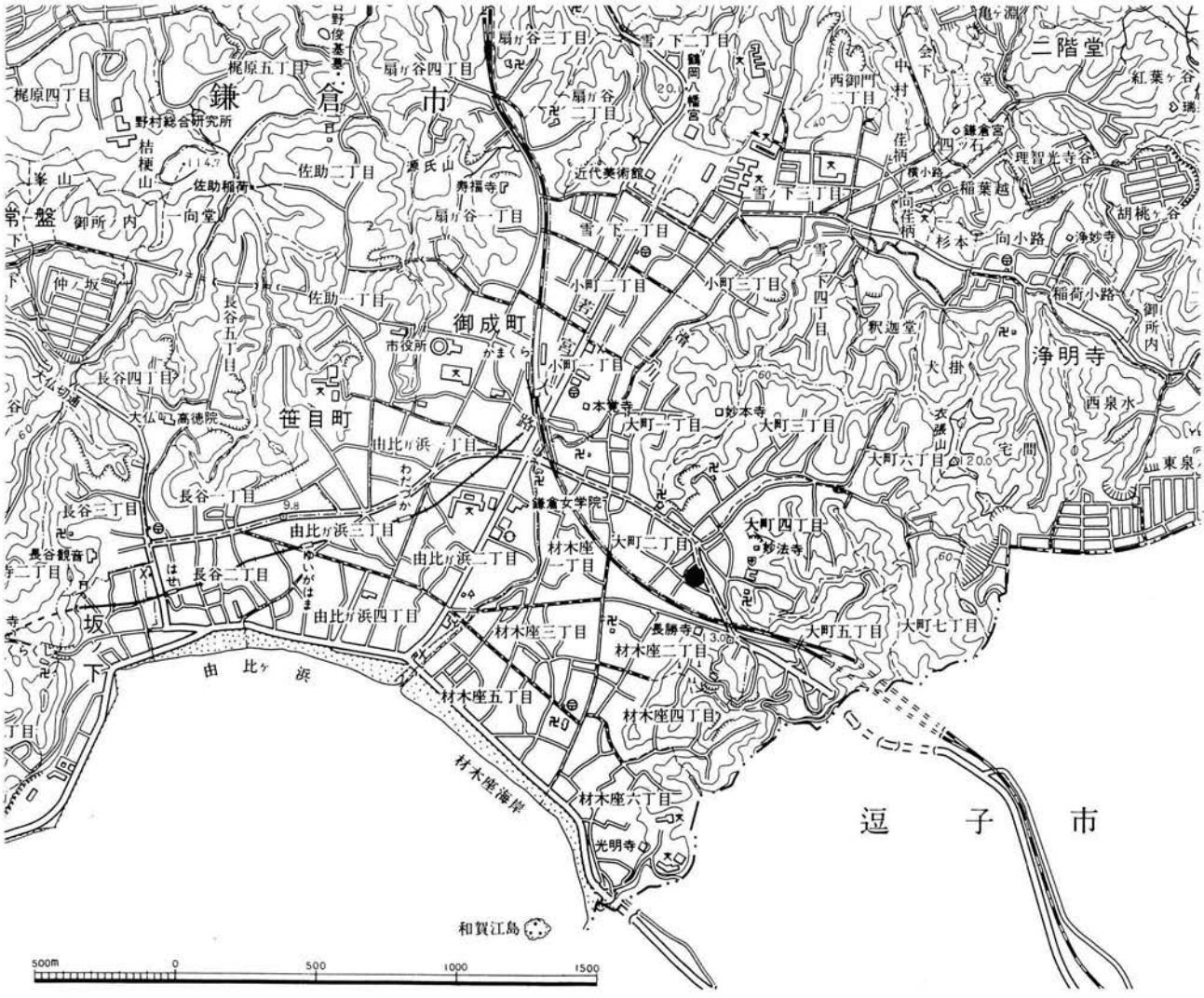


図１　調査地点位置図

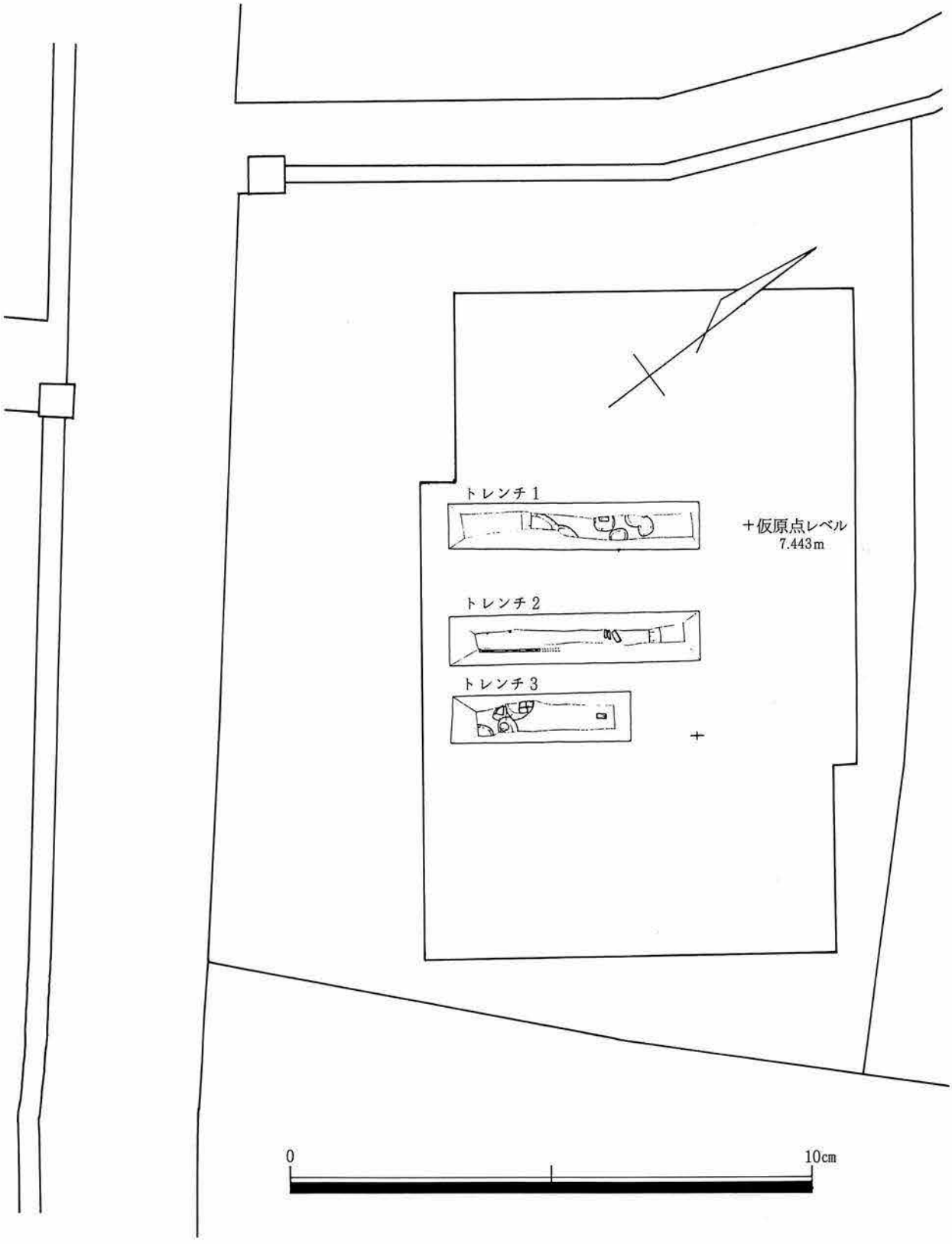


図2　トレンチ位置図

直角に折れ曲がり東から西に流れる逆川の北岸を、大町大路が名越四つ角から大町四つ角を経て下の下馬に至っている。また逆川の南岸を通る道筋は、名越坂から当遺跡の前を通り西に向かい辻ノ薬師前まで辿ることが出来る。現在JR横須賀線で分断されているが、さらに西に延ばすと元八幡宮、滑川の閻魔橋、浜の大鳥居を経て六地蔵の辺りまで抜けることが出来そうである。極楽寺坂が開通する以前、旧東海道の道筋は稲村ヶ崎を廻り海岸沿いに六地蔵へ抜け、さらに六地蔵より若宮大路を横切り閻魔橋で滑川を越え、元八幡宮、辻の薬師を経て名越へ抜けていたものと考えられる。この旧東海道の道筋が、かつての鎌倉時代、車大路になっていたかもしれない。

遺跡名の「米町」は、建長三年（1251）12月３日に出された町屋免許（大町・小町・米町・亀ヶ谷辻・和賀江・大倉辻・気和飛坂山上）と文永二年（1265）３月５日に出された町屋免許（大町・小町・魚町・穀(米)町・武蔵大路下・須地賀江橋・大倉辻）に定められた商業地域に名を連ね、大いに賑わった地域であるがその範囲は不明な点が多い。『吾妻鏡』

津久井光明寺蔵で明応頃（1492～99）の作と考えられる『善宝寺寺地図』によると、若宮大路と大町大路が交差する東北を「米町」としていることから、現在の大町四つ角周辺、大町大路沿いの家並みをさしているようである。

第２章　調査の経過

発掘調査は平成11年４月17日から、表土掘削及び機材の搬入を開始し同年４月30日まで行った。

建築確認後に基礎の設計変更が行われ、未調査のまま杭が打たれた。地下の埋蔵文化財に著しい影響が及んだことを危惧し、緊急の調査となったものである。すでに杭及び建物の基礎が完成し、建物の基礎を避けながら調査するといった悪条件下で行われたものであることを明記しておく。確認調査を行っていないため、近隣で行われた確認調査の結果を基に、基礎の内側に３本のトレンチを設定した。

１トレンチは幅90㎝、長さ4.7m。２トレンチは幅90㎝、長さ4.7m。３トレンチは幅90㎝、長さ3.4mで設定したものである。トレンチ面積の合計は11.52㎡で建築予定範囲の南北軸方向にあわせて設定したが、いずれも狭いものであり十分な調査が行われたとは言い難い。

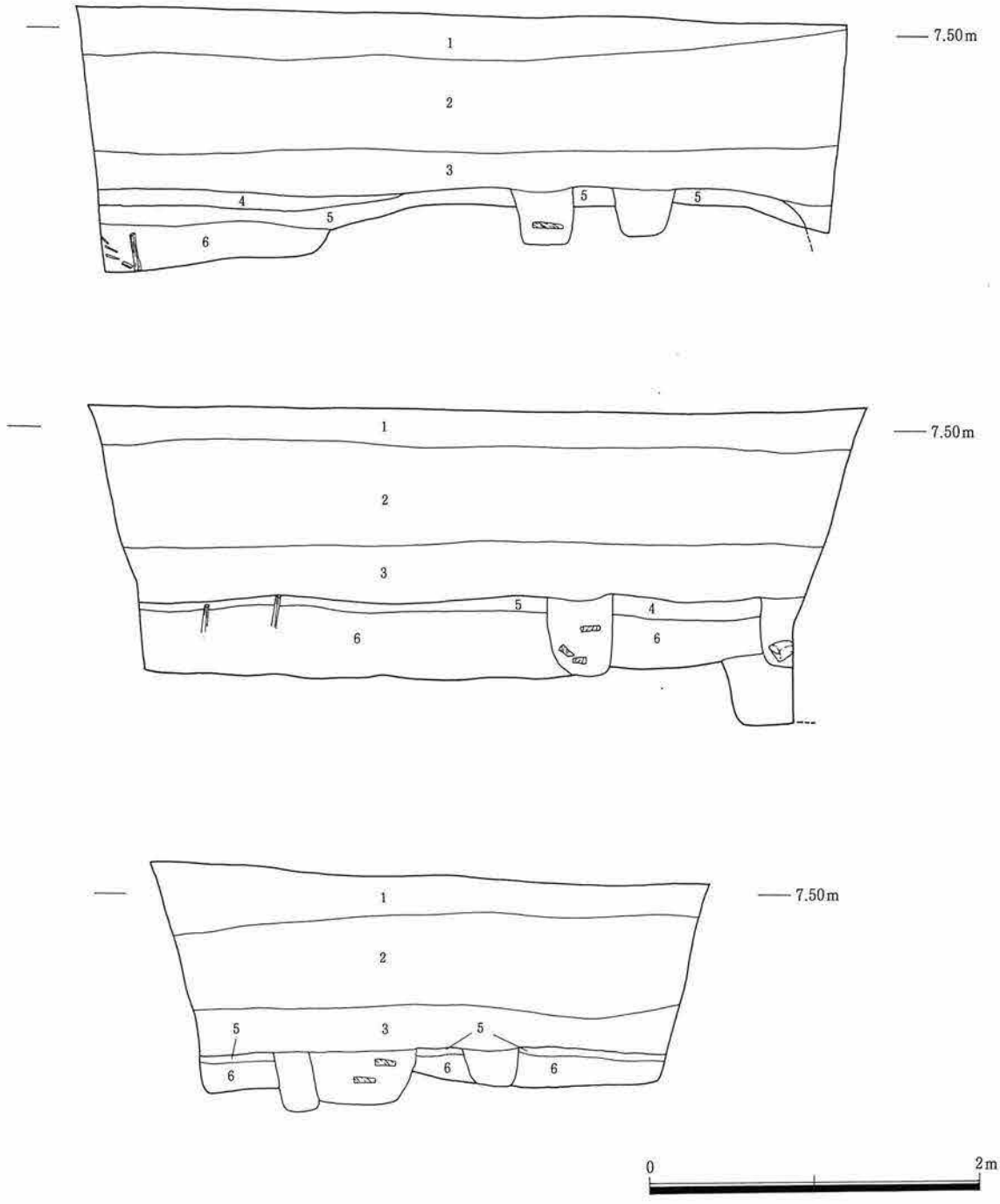
遺跡は北緯35°18′31″、東経139°33′35″に位置し、グリットの基準とした原点（X=-76,666.150 Y=-24,893.180）は、市内４級基準点のＢ222（X=-76,675.099 Y=-24,908.451）とＢ223（X=-76,690.783 Y=-24,923.060）を基に設定したものである。設定した南北グリッド方位は、N-36°17′53″-Eである。

調査中に使用したレベルは辻ノ薬師前に設置してある３級水準点（№53402）の7.557mを移動したもので、調査地の脇に移動した仮原点のレベルは、7.443mである。排土は、調査終了時に再び埋め戻すために周囲に山積みにした。４月30日までに器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　層序

人力で表土を約20～30㎝掘り下げると土丹地業面が現れ、大型の土丹で埋め込まれた層の厚さは約60㎝にも及んだ。多量の土丹を除くと暗灰褐色粘質土の水田床土を検出した。層の厚さは25～35㎝できわめて粘性が強く少量のかわらけ片が含まれていた。地表から約120㎝、海抜約6.4m地点で一部が厚さ５㎝程の土丹地業面に覆われた暗茶灰色粘質土の第１面を検出した。この第１面の約10㎝下で第２面、



1. 表土
2. 近代客土　　大小土丹塊多量
3. 暗灰褐色粘質土　水田床土　粘性強い　土丹小塊　かわらけ小片含む
4. 土丹地業層
5. 暗茶灰色粘質土　有機物腐植土　砂粒遺物を多く含む
6. 暗茶灰色粘質土　溝覆土

図3　土層図

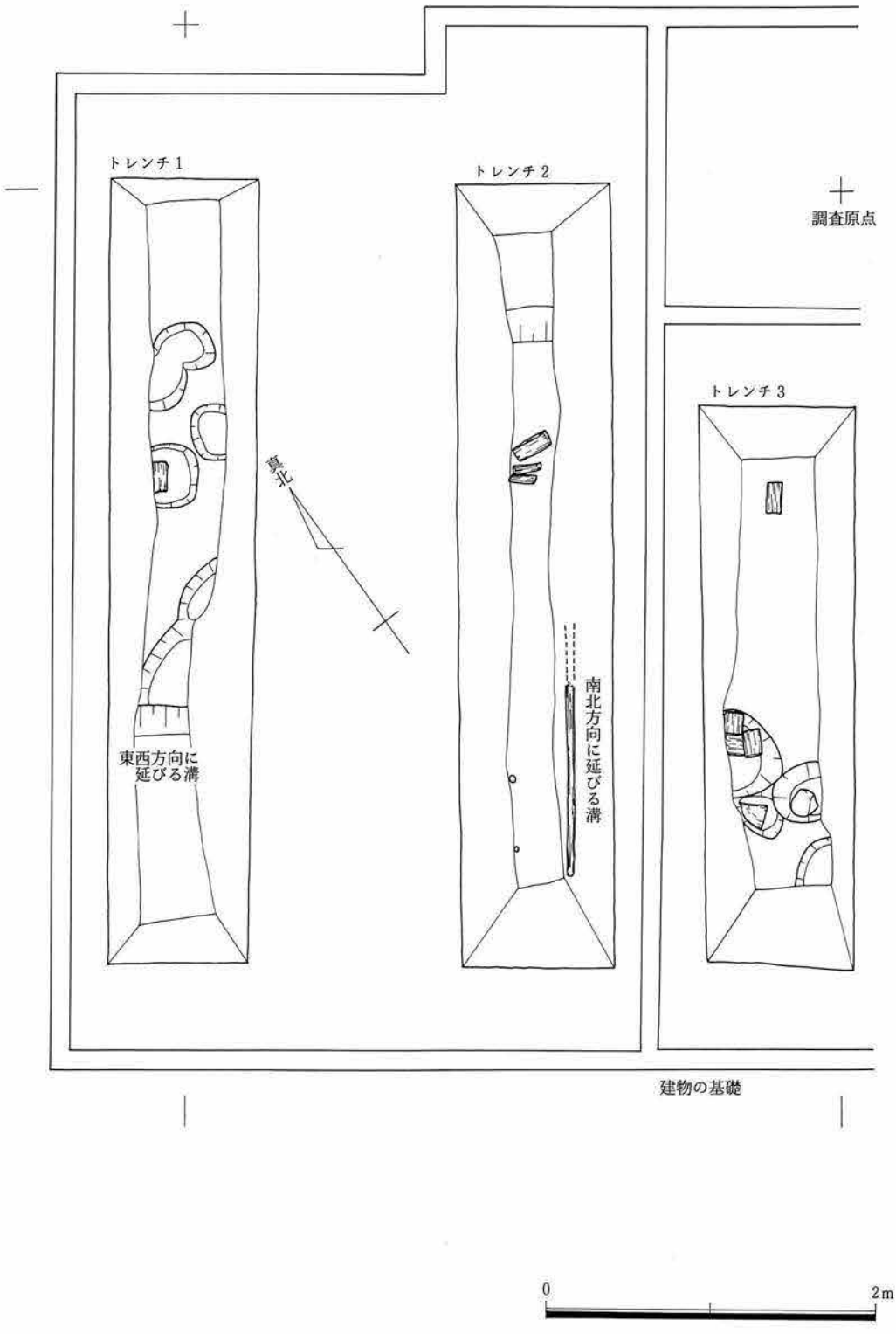


図4　遺構全測図

黄灰色砂層の中世地山を検出した。第２面の遺構検出レベルは海抜6.5ｍである。多くの遺構は第１面から掘り込まれているものであった。

第２節　遺構

ａ．１トレンチ

１面は、海抜6.32～6.42ｍで広がり、柱穴４、土壙２と北西～東南方向に延びる溝を検出。２面は、１面の約10㎝下で確認された黄灰色砂からなる中世地山である。この面から掘り込まれた遺構は確認できなかった。

ｂ．２トレンチ

１面は海抜6.40ｍ前後で広がり、柱穴２を検出する。２面は、確認できた場所はなく、地山面が１・３トレンチと比べると約40㎝低い。地山面の海抜は１トレンチの溝中のレベルとほぼ同じである。南北方向に延びる横板材と杭が確認されることから、南北方向に延びる溝の中と考えられる。

ｃ．３トレンチ

１面は、海抜6.50ｍ前後で広がるようである。柱穴４、礎板を数枚確認した。２面の中世地山面は海抜6.35ｍ前後で広がるようである。

第３節　遺物

１から５までは、第１トレンチ出土遺物である。６～36までは、第２トレンチ出土遺物である。37～44までは、第３トレンチ地山面出土の遺物である。

表１　出土遺物観察表　　単位はcm

番号	出土地点	種別・器種	口径	底径	器高	成形及び特徴
1	１トレンチ	かわらけ	－	－	－	手捏ね、口縁は丸く収められ、器壁が厚い。
2	地山面まで	かわらけ	－	－	－	糸切り、底部片、
3		かわらけ	－	－	5.3	糸切り
4		土師器高坏	－	－	－	全面丹塗り
5		常滑甕	－	－	－	体部片
6	２トレンチ	かわらけ	6.9	4.5	1.8	糸切り
7	土丹面～	かわらけ	7.5	5.2	－	糸切り
8		瀬戸入子	4.7	－	－	胎土きめ細かく焼成良好、外底面篦削り
9		瀬戸行平鍋	－	－	－	鍋取手部分、内外面透明な釉、焼成良好
10		青白磁梅瓶	－	－	－	体部片、青みがかった透明な釉、器壁は３㎜
11		青白磁梅瓶	－	－	－	体部片、やや青みがかった釉、器壁は4.5㎜
12		瀬戸入子	－	－	－	底部近く、胎土はきめ細かく灰色、焼成良好
13		瀬戸おろし皿	－	－	－	注ぎ口部分片、口端部に透明な釉、焼成良好
14	２トレンチ	かわらけ	8.4	－	1.7	手捏ね
15	地山面まで	かわらけ	－	－	－	手捏ね
16		かわらけ	12.0	－	－	手捏ね
17		かわらけ	－	－	－	手捏ね
18		瀬戸折縁鉢	－	－	－	口端部欠損、胎土は灰白色で薄く透明な釉
19		瀬戸小壷	1.6	2.2	3.8	体部上半に自然釉、６弁の花文有り

番号	出土地点	種別・器種	口径	底径	器高	成　形　及　び　特　徴
20	2トレンチ	常滑甕	−	−	−	底部片
21	地山面まで	常滑甕	−	−	−	底部片
22		青磁碗	−	−	−	灰白色のきめ細かい胎土、青緑色の釉
23		白磁口兀皿	−	7.5	−	底部小片、全面に厚く釉が施される
24		青白磁梅瓶	−	−	−	体部片、透明な青みがかった釉、器壁3㎜
25		青白磁梅瓶	−	−	−	体部片、青みがかった透明な釉、24と同じか
26		青磁蓮弁文碗	15.8	−	−	灰白色の胎土に青緑の釉が厚く施されれる
27	2トレンチ	かわらけ	7.3	5.5	1.5	糸切り、燈明皿に使用
28	地山面	かわらけ	8.0	6.3	1.7	糸切り
29		かわらけ	8.1	6.0	1.8	糸切り
30		かわらけ	14.1	−	−	手捏ね、外面の稜線が明瞭
31		かわらけ	−	−	−	手捏ね
32		かわらけ	−	−	−	体部片
33		常滑甕	−	−	−	手捏ね
34		青磁碗	−	−	−	体部小片、無文碗と思われる
35		青磁劃花文碗	−	−	−	体部片、灰色の胎土に緑がかった透明な釉
36		青白磁	−	−	−	体部小片、碗か水注
37	3トレンチ	かわらけ	7.2	5.6	−	糸切り
38	地山面	かわらけ	−	−	−	糸切り
39		瀬戸入子	−	3.9	−	灰色のきめ細かい胎土
40		かわらけ	6.7	5.2	−	糸切り
41		かわらけ	6.7	−	−	糸切り
42		かわらけ	−	6.6	−	手捏ね
43		常滑甕	−	−	−	底部片
44		常滑甕	−	−	−	底部片

第4章　まとめ

体の幅程のトレンチが3本、調査期間も短いという確認調査並みの調査であった。近世の厚い土丹地業層を掘り下げるのに手間取ってしまったが、遺構の残りは比較的良好であった。

調査地を南北に区切る溝と南側を東西に延びる道路に沿う溝が確認され柱穴も多く検出されている。また13世紀代の遺物も確認されていることから、調査地点は名越坂に抜ける大町大路、車大路に挟まれた商業地域であった「町屋」に含まれると考えられる。

参考文献　『鎌倉市史』社寺編・総説編　鎌倉市　吉川弘文館　1959年
『鎌倉事典』白井永二編　東京堂出版　1976年
『吾妻鏡』　新人物往来社

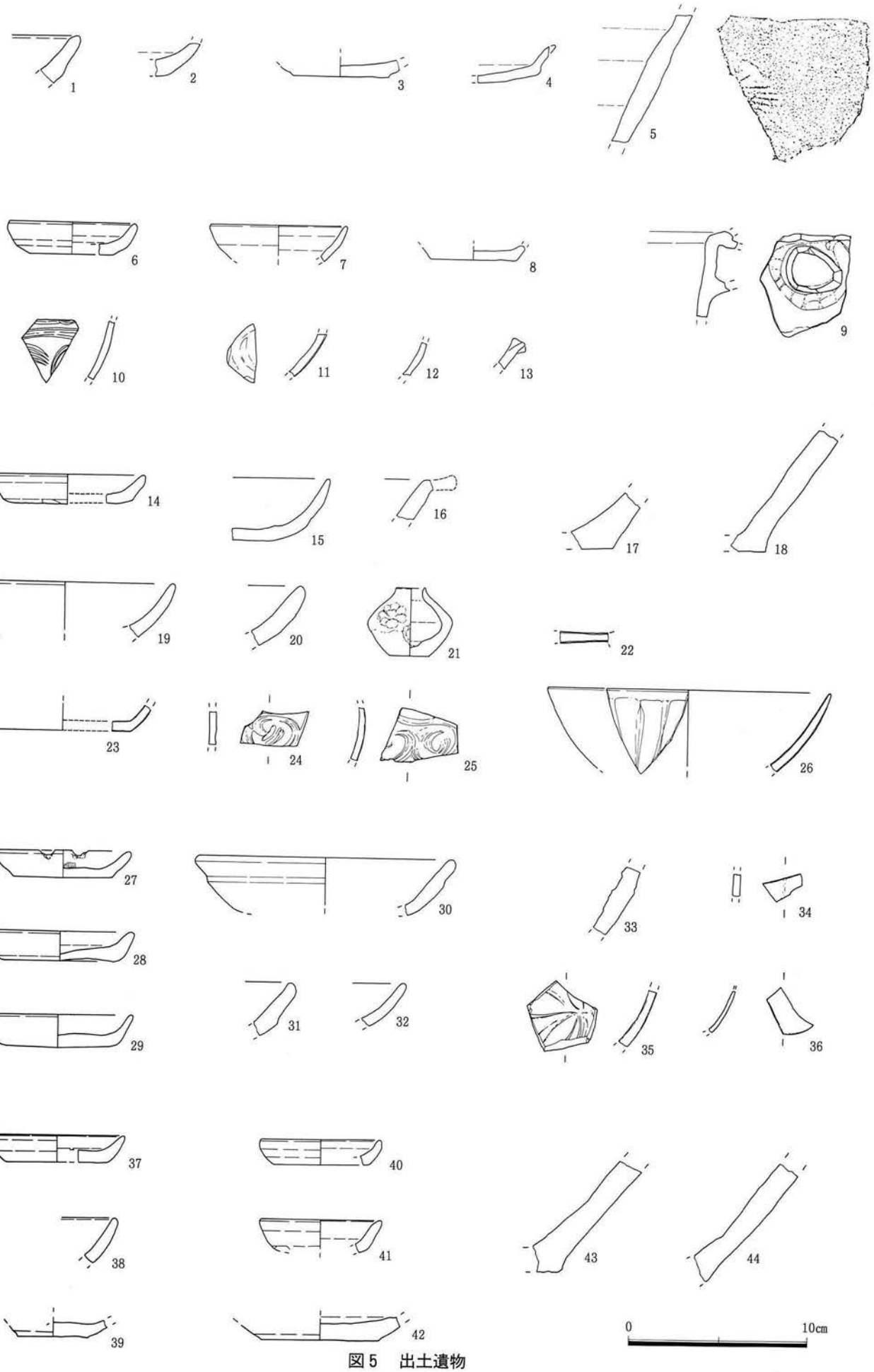
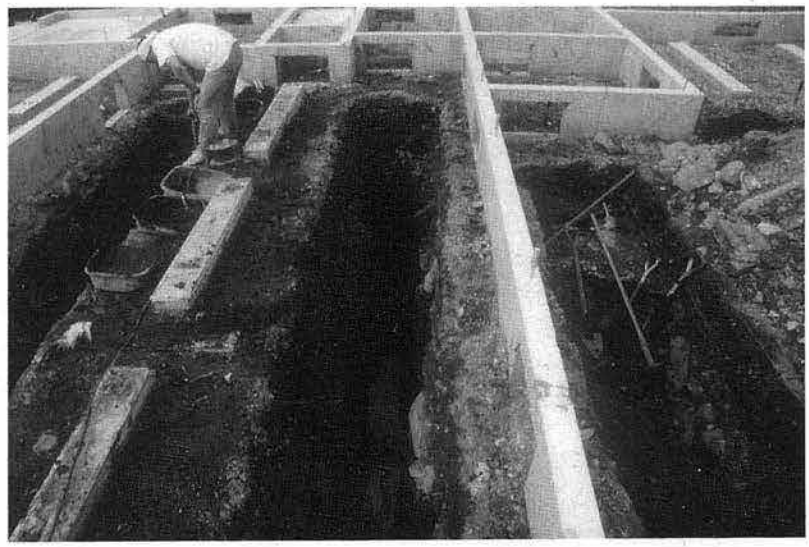

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

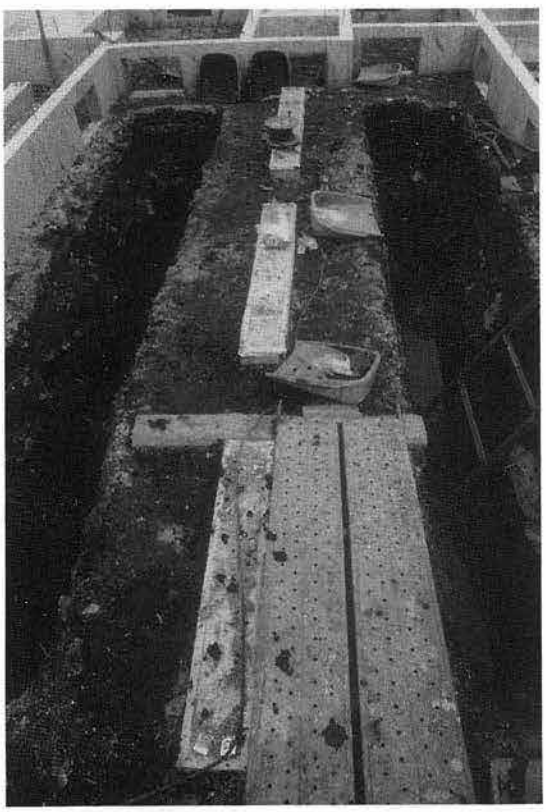
図5　出土遺物

写　真　図　版

1．調査地全景



2．左からトレンチ1・2・3

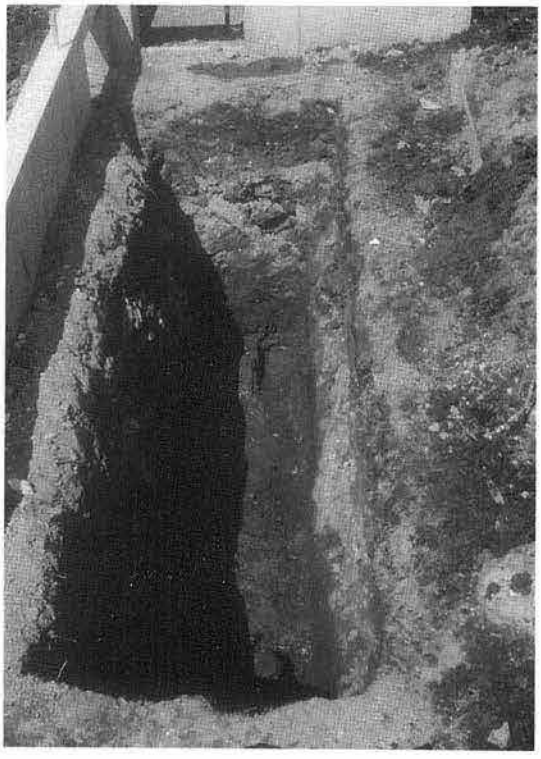


3．左からトレンチ1・2

図版 2

1．トレンチ 1

2．トレンチ 3



3．トレンチ 3

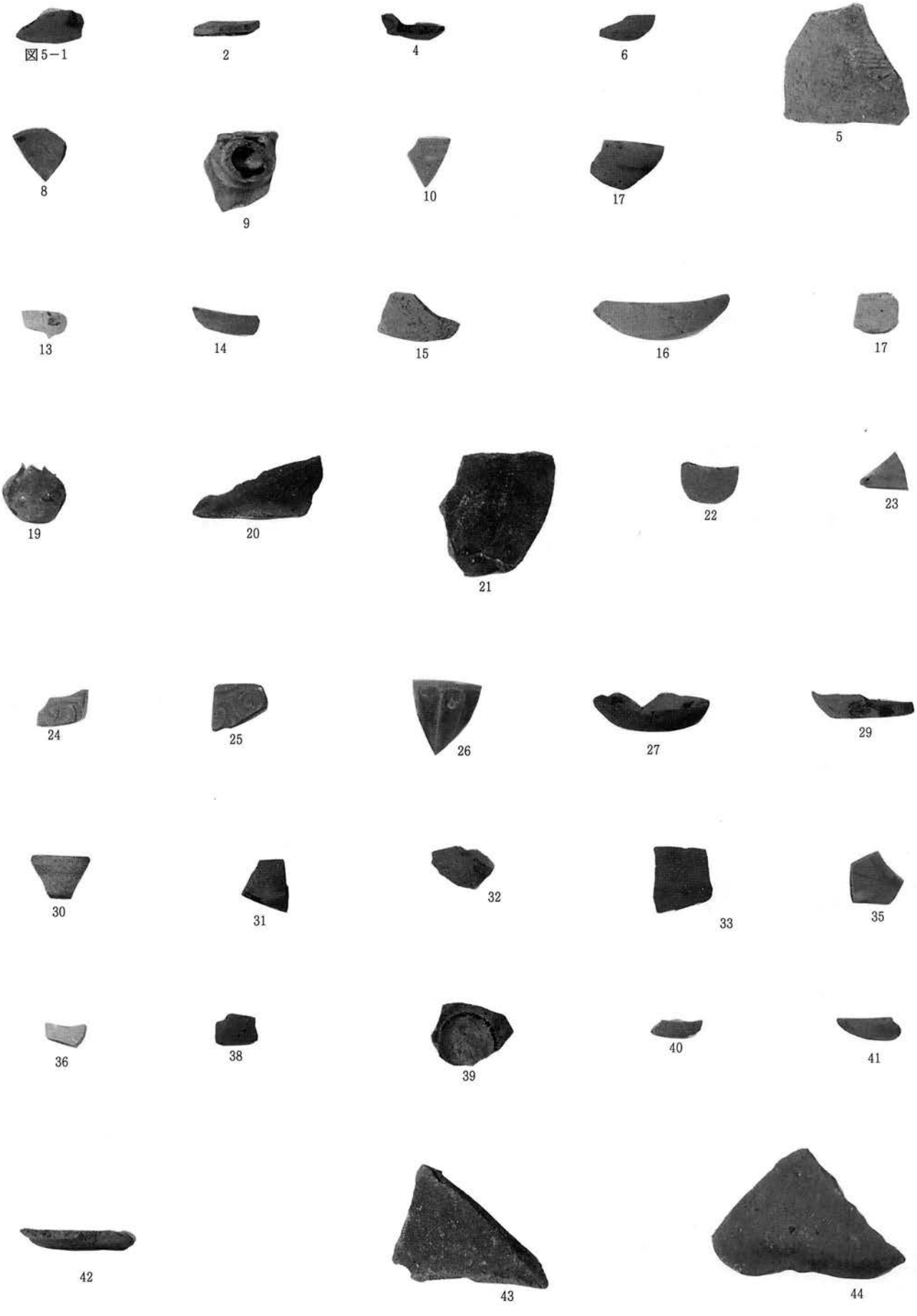


図5－1
2
4
6
5
8
9
10
17
13
14
15
16
17
19
20
21
22
23
24
25
26
27
29
30
31
32
33
35
36
38
39
40
41
42
43
44

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	福田　誠　菊川　泉　神山晶子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
こめまちいせき 米町遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 おおまち 大町二丁目2404番の一部地点	204	245	35° 18′ 31″	139° 33′ 35″	19990417 ～ 19990430	11.52㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
米町遺跡	都市遺跡	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝・掘立柱	

円覚寺門前遺跡（No.287）

鎌倉市山ノ内東瓜ヶ谷1229番１・５

例　　言

1　本報は神奈川県鎌倉市山ノ内東瓜ヶ谷1229番1･5に所在する個人専用住宅（駐車場）建設にともなう国庫補助事業発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成11年４月13日から４月20日にかけて実施した。

3　調査面積は約15㎡である。

4　調査の体制は以下のとおりである。

調査担当者	小林　康幸
主任調査員	伊丹　まどか
調査員	川又　隆央
調査作業員	河原　龍雄・大戸迫　猛・渡辺　久夫

5　本報告の作成に関わる、遺物実測・トレース・図版作成は伊丹が行なった。

6　本報告の執筆、編集は伊丹が行なった。

7　本報告に掲載した現地写真は川又が、遺物写真は粂健一が撮影した。

8　本発掘調査によって出土した遺物、および調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……321
第２章　調査の概要 ……322
第３章　発見された遺構と遺物 ……324
　第１節　堆積土層 ……324
　第２節　発見した遺構 ……324
　第３節　確認調査出土遺物 ……324
第４章　まとめ ……326

挿　図　目　次

図１．調査地点と周辺の遺跡 ……320
図２．調査区設定図およびグリッド配置図 ……322
図３．遺構全体図・調査区壁土層断面図 ……323
図４．遺構１・２平面図および出土遺物実測図 ……325

写真図版目次

図版１・出土遺物 ……329
図版２・検出遺構 ……330

図1　調査地点と周辺の遺跡

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡地は、鎌倉五山の第二位、臨済宗円覚寺派の総本山、円覚寺の南に走る鎌倉七口のひとつ、巨福呂坂から武蔵方面に向かう山ノ内道（現在の主要地方道横浜鎌倉線）から、葛原ガ岡神社の北側に位置する瓜ヶ谷の谷戸に入る道に面している。調査地の西側には山ノ内道に平行して流れる小袋谷川と合流する西瓜川が流れており、合流地点に近い小袋谷川を渡る十王橋は、現在円覚寺に移されている十王堂があったと推定されている地域である。十王橋の北東には尾根の両側を切り落とし、塁壁状を呈している個所があり、鎌倉の北の入り口を固める防塁であったと推され、この辺りが、鎌倉の北の境界であったと考えられている。瓜ヶ谷の最奥部には、地蔵やぐらと呼称される玄室に等身大の地蔵座像の彫刻が残るやぐらなどで知られる瓜ヶ谷やぐら群がある。西側丘陵上部には『台山藤源治遺跡」があり、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見され、弥生時代から平安時代にかけての台地上に集落が形成され、中世に至っての造成も確認されている。

瓜ヶ谷内での発掘調査は、円覚寺門前遺跡（鎌倉市山ノ内字藤源治951-2）で弥生時代から近世にかけての遺物の発見とともに、中世の地業、井戸が検出。西瓜ヶ谷遺跡（鎌倉市山ノ内字藤源治928-1）では14～15世紀の遺物とともに岩盤削平面、溝等が検出されている。

参考文献

『新編相模国風土記稿』（『大日本地誌大系』　1985年２月　雄山閣）

赤星直忠『鎌倉市史』考古編　1959年３月　吉川弘文館

貫達人他『鎌倉市史』社寺編　1959年10月　吉川弘文館

手塚直樹・菊川英政他『台山藤源治遺跡』　1985年３月　台山藤源治遺跡発掘調査団

大河内勉『台山藤源治遺跡』　1996年11月　台山遺跡発掘調査団

大河内勉『台山藤源治遺跡』　1993年７月　台山遺跡発掘調査団

山田健二「鎌倉市西瓜ヶ谷遺跡調査概要」　『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35　1993年３月　神奈川県教育委員会

田代郁夫・継実「円覚寺門前遺跡」　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14　1998年３月　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の概要

本調査は、個人住宅の建築申請にともない事前に実施された埋蔵文化財確認調査（図２．斜線範囲）により、現地表下60㎝で、中世に属する遺構および地業面を確認したため、建築工事に先立って、発掘調査を行なう必要があると認められた。当初、発掘調査の対象は住宅部分であったが、建築申請の変更により、駐車場部分（図２．ドット範囲）の約15㎡を対象とした調査を実施した。　調査区は道路に沿って、東西2.7m、南北5.6mを設定し、重機による表土掘削を開始した。事前の確認調査では、現地表下60㎝で遺構確認面を検出したが、調査地は近世以降に大きく削平を受けていたため、約100㎝下方迄重機を使用して掘り下げた。その後人力により掘削を行ない遺構確認をしたが、調査 地の西半分は工事掘削深度近くまで近世以降の削平を受けていた事や、調査面積の狭さから、多くの遺構を検出することができなかった。

又、調査地の位置と遺構を国土座標に基づく地図上に記録するために、調査地周辺の鎌倉市４級基準点を測量し、調査区内に基準点を設け遺構の実測などを行なったが、鎌倉市路政課の設置した「鎌倉市４級基準点」の成果簿に載っている基準点が、調査時点では道路上より消滅してしまっており、測量した４級基準点と合致しないため、本調査地の正確な位置は記録できなかった。

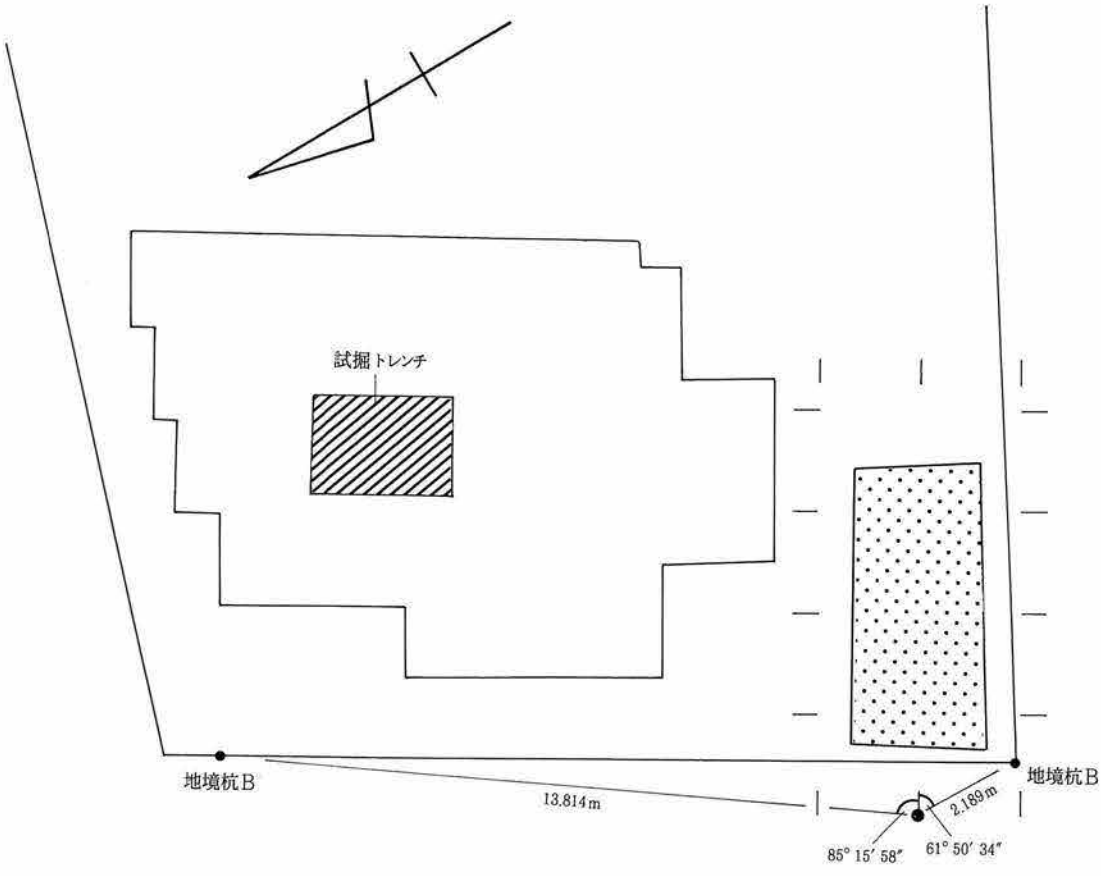
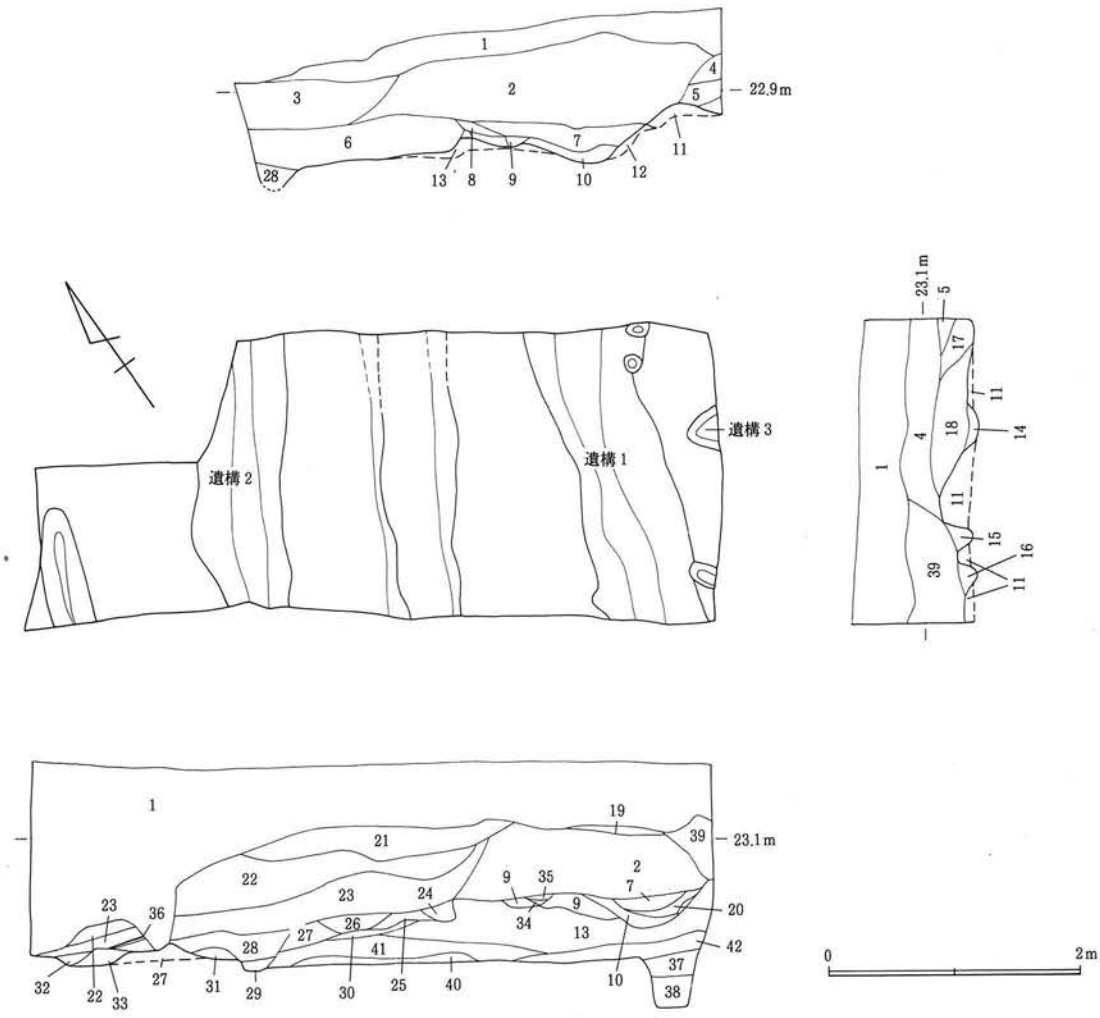


図２　調査区設定図及びグリッド配置図



1　表土
2　茶褐色　土丹粒・炭化物を多く含む　中世遺物混じる
3　灰茶褐色　土丹粒多くやや少量の炭化物　現代遺物含む
4　茶褐色土　土丹（φ1～7㎝）を含む
5　暗黄褐色土　橙色粒子を含む
6　茶褐色土　やや大きめの土丹粒　砂質土含む
7　暗茶褐色土　土丹粒　微量の炭化物　橙色粒子
8　暗褐色土
9　暗褐色土　黄灰色砂を含む
10　暗褐色弱粘質土　上層にやや粗めの黄灰色砂、褐鉄が混じる（遺構1覆土）
11　黄褐色粘質土　凝灰岩がブロック状に散見、微量の橙色粒子
12　暗褐色粘質土　橙色粒子　褐鉄
13　暗褐色紅質土　褐鉄を多く含む
14　暗茶褐色粘質土　凝灰岩粒　炭化物を含む（遺構3覆土）
15　暗褐色土　土丹粒　炭化物　橙色粒子
16　暗褐色土　土丹粒　炭化物　橙色粒子
17　暗褐色土　凝灰岩ブロック　炭化物　橙色粒子
18　暗褐色土　土丹粒多く含む　砂質土　炭化物
19　灰褐色粘質土
20　暗褐色粘質土　黄灰砂（遺構1覆土）
21　灰褐色土　しまりの弱い耕作土
22　灰褐色土　土丹粒　かわらけ小片
23　灰褐色土　土丹粒　かわらけ小片　砂質土を含む
24　茶褐色　しまりあり　土丹粒多く含む
25　暗褐色土　やや粗めの緑青砂を多く含む
26　暗褐色土　土丹粒　炭化物
27　灰褐色砂質土　しまりあり　褐鉄
28　暗褐色土　炭化物　赤色粒子　砂質土（遺構2覆土）
29　暗褐色粘質土　褐鉄（遺構2覆土）
30　灰褐色粘質土　橙色粒子微量
31　茶褐色砂質土　しまりあり　灰褐色砂　褐鉄
32　茶褐色砂質土　炭化物　かわらけ小片
33　茶褐色土　橙色粒子微量
34　暗褐色粘質土　褐鉄
35　暗褐色土　緑青色砂を含む
36　宝永火山灰堆積層
37　茶褐色粘質土　土丹粒　かわらけ小片　褐鉄
38　黒褐色粘土
39　暗褐色土　土丹粒　砂質土　かわらけ小片
40　青緑砂質土　しまりあり　褐鉄多量
41　暗褐色粘土　上層に褐鉄
42　灰褐色粘質土　土丹粒炭化物　かわらけ小片

図3　遺構全体図・土層堆積図

第３章　発見された遺構と遺物

前章で記したように狭い面積での調査であったことや、近世遺構現代にかけての削平を受けていたため、多くの遺構は検出していない。ここでは、発見した遺構、遺物について記すとともに、堆積土層について若干の説明を加えたい。

第１節　堆積土層（図３）

遺構１は13層を掘り込む形で検出した。13層上層の２層は遺物包含層であるが、平面的には調査区内の東側、一部分のみで確認し遺構の検出が出来なかったため、表土掘削の段階で除去してしまった。21～36層は中世遺物包含層を削平して、構築されており、遺構２は27層を掘り込んで検出されていることが解る。36層は、平面的にも一部分確認したが、宝永七年（1707年）の火山灰降灰層の堆積が認められた。

第２節　発見した遺構（図４）

発見した遺構は溝状遺構２条・土壙２基・ピット３穴である。

溝状遺構は２条とも調査区内を南北方向に直線的に延びている。

溝状遺構１（図４）

溝状遺構１は幅約70～93cm、深さ21cmを測る溝状の遺構である。確認した範囲が狭いため、遺構の性格、規模は不明であるが、調査区壁の土層断面から見て北から南に向かって底部の海抜レベルが下方していることが解る。

出土遺物（図４）

溝状遺構１からは、図示出来る遺物はなかったが、土師器・常滑窯製品・かわらけ・瓦が出土している。

溝状遺構２（図４）

溝状遺構２は幅約52～73cm、深さ17cmを測る溝状の遺構である。溝状遺構１と同様に、その性格、規模などは不明である。底面レベルもほぼ平坦であり、流下方向は不明である。

出土遺物（図４）

１は砥石である。最大長17.8cm、幅4.1cm、厚さ1.1cmを測る。２は釘である。最大長5.1cm、幅１cm、厚さ1.1cmを測る。図示出来なかった遺物は、土師器・瀬戸窯製品・白かわらけ・かわらけ。

その他の出土遺物（図４）

３は面上より出土した。天目茶碗の底部である。ヘラによる高台部削り出しをされている。

４は宝永七年の火山灰の堆積土層上面より出土した、染め付け椀である。18世紀後半。

第３節　確認調査出土遺物（図４・５～17）

本調査では、図示できる遺物が少なかったため、事前に実施した、確認調査で発見した遺物を資料として提示した。確認調査の範囲は図１に示した。

５～８はかわらけである。５は口径5.8cm、底径4.2cm、器高2.0cm。内底ナデあり。底部は回転糸切り、すのこ痕あり。６は口径7.6cm、底径5.0cm、器高1.7cm。内底ナデあり。底部は回転糸切り、すのこ痕あり。７は口径11.0cm、底径6.8cm、器高3.2cm。内底ナデあり。底部回転糸切り、すのこ痕あり。８は口径13.5cm、底径7.0cm、器高3.5cm。内底ナデあり。底部回転糸切り、すのこ痕あり。９～12は常滑窯甕。９は口径15.0cm、10は口径16.8cm。13は瀬戸窯壷。口径11.0cm。14は土師器甕。11は常滑窯甕、胴部拓影。15は鉄製品。遺存長7.5cm、幅0.8cm、厚さ0.9cm。16・17は瓦。16は女瓦。凹部、凸部ともにハガレ砂が残る。端縁、側縁部ヘラによるケズリ。側面は丁寧な仕上げである。端縁面に丸の押印が残る。17は男瓦。筒部凸面、縄目の叩き痕残る。凸面、ハガレ砂、荒い糸切り痕が残る。側縁部ヘラ削り。

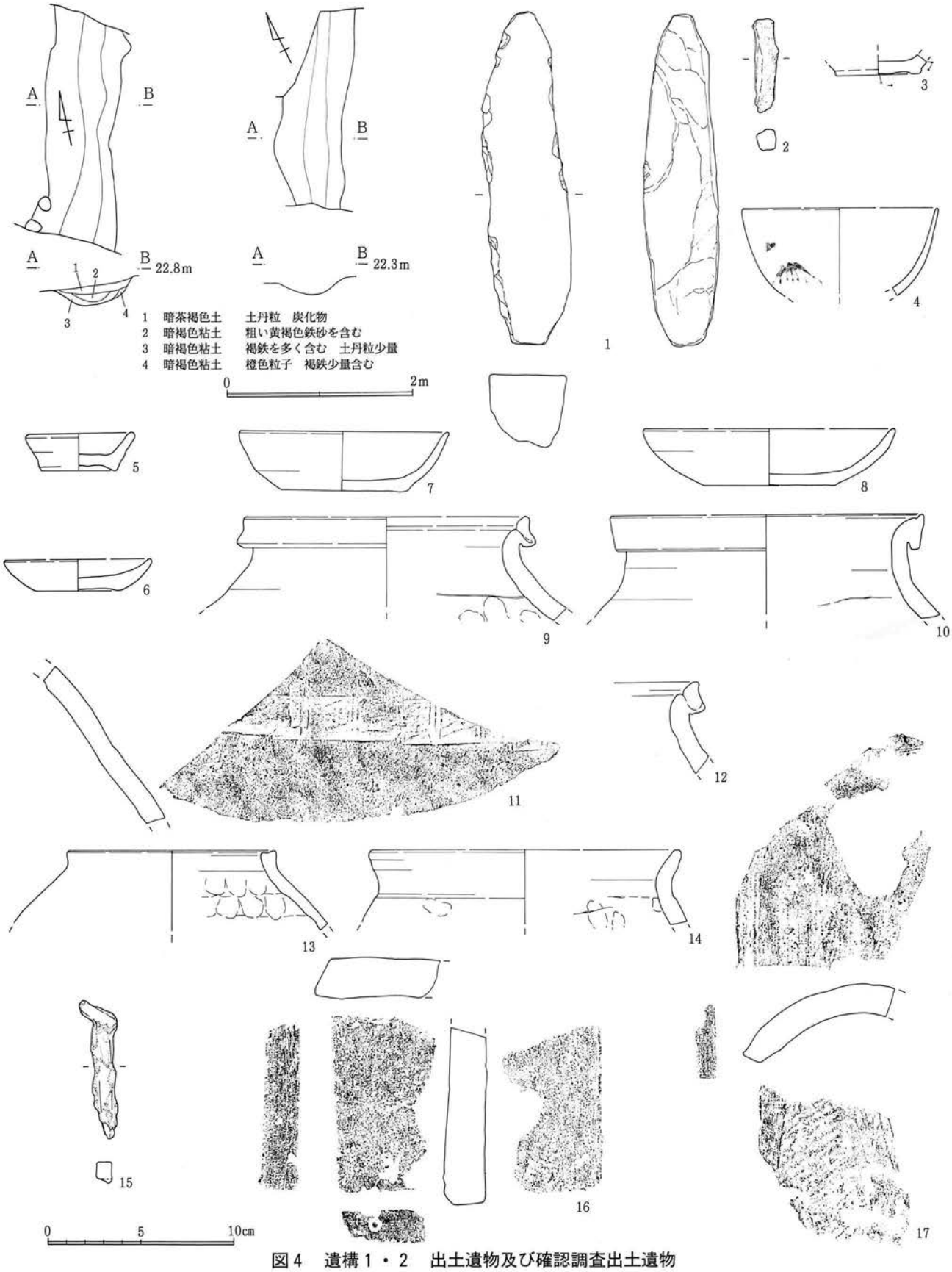


図4　遺構1・2　出土遺物及び確認調査出土遺物

第4章　まとめ

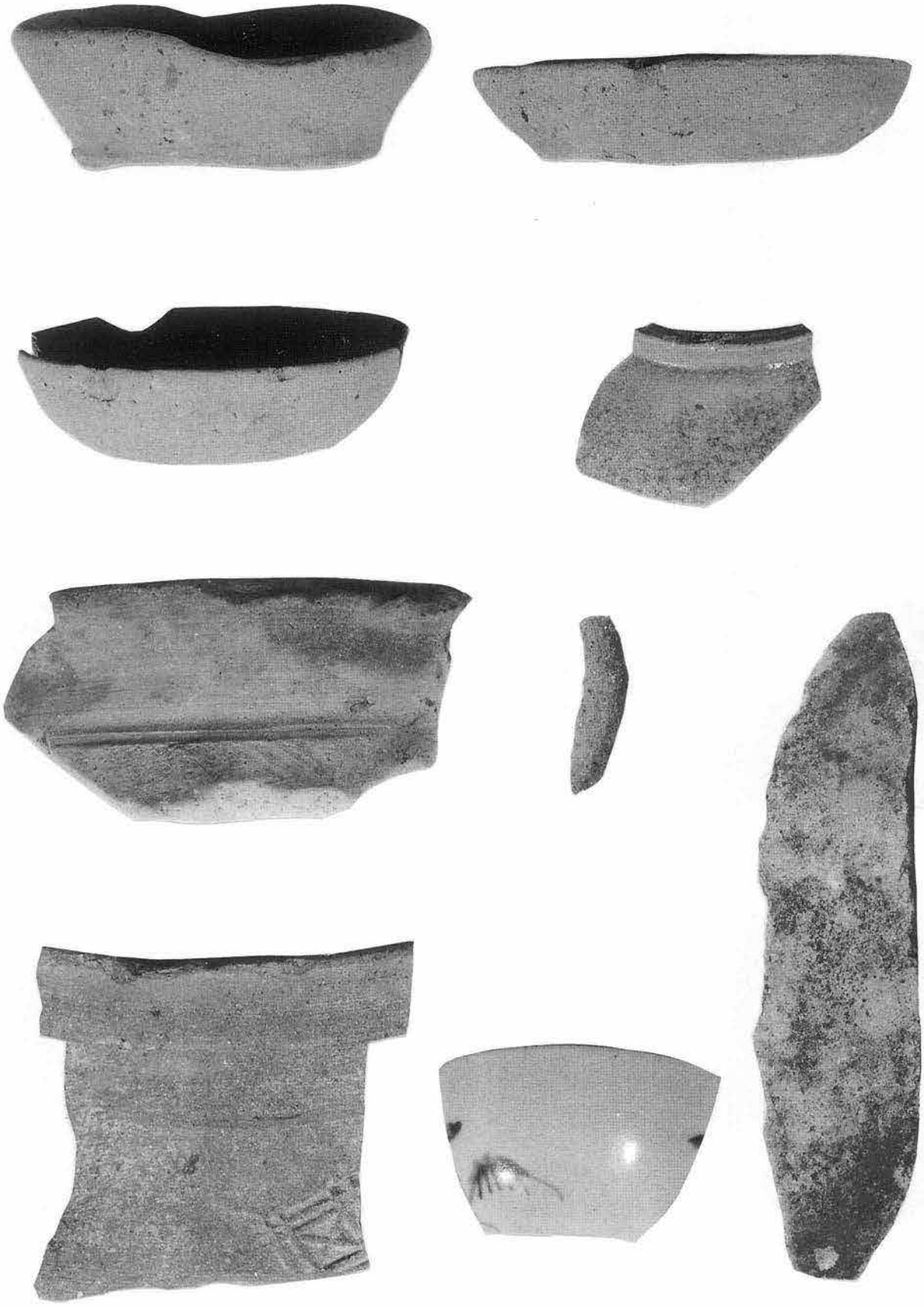
本調査で発見した遺構は、検出状況は決して良好なものではなく、確認された遺構・遺物ともに少ない。以下、本遺跡地の様相を、調査区壁の堆積状況も参考に概観していきたい。

本調査で検出した遺構は、溝状遺構・土壙・ピットである。遺構含土から出土した遺物は、国産陶器（瀬戸・常滑）、かわらけが主なものであるが、概ね14世紀代に属する。又、遺物包含層からは図示でき無かったが褐釉の壷、舶載磁器（青磁）、手焙り等があった。したがって、今回検出した遺構は14世紀の年代と思われる。これまでの瓜ヶ谷内の発掘調査では、本調査地の南西、台山藤源治遺跡の丘陵際にあたる西瓜ヶ谷遺跡（山ノ内字藤源治928-1他地点）において、14～15世紀代と思われる遺構、遺物を確認している他、谷戸の開口部近くの円覚寺門前遺跡（山ノ内字藤源治951-2）で概ね14世紀代と考えられる遺構・遺物を確認しており、14世紀代には谷戸内が屋地として利用されていたことが推察できる。

調査区壁の土層断面を観察すると、近世（宝永七年）以降なんらかの理由で、中世の堆積土が大きく削平を受けていることが窺える。堆積土中からは概ね18世紀代の染め付け製品の破片等も出土しているが、遺構の検出は出来なかった。また、堆積土の削平理由も不明であるが、近世においても谷戸内の利用があったことを表していると考えている。

写　真　図　版

図版 1

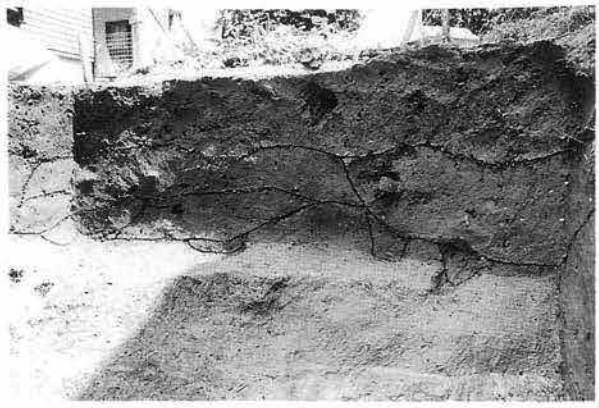


図版 2

調査区全景（西から）

調査区南壁セクション

調査区北壁セクション



調査区東壁セクション

遺構 1 セクション

遺構 3 セクション

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成11年度発掘調査報告
巻次	16
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	伊丹まどか
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
えんかくじもんぜんいせき 円覚寺門前遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちうりがや 山ノ内瓜ヶ谷 1229番1	204	287			1999年 4月13日 ～ 4月20日	15㎡	自己用住宅 駐車場用地

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
円覚寺門前遺跡	中世都市遺跡	14世紀代	溝状遺構・土壙 ピット	かわらけ・常滑 瀬戸・石製品・ 鉄製品・磁器・ 古代	

鎌倉市埋蔵文化緊急調査報告　16

平成11年度発掘調査報告（第２分冊）

発　行　日　平成12年３月

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　中川印刷株式会社